岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39

旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅰ

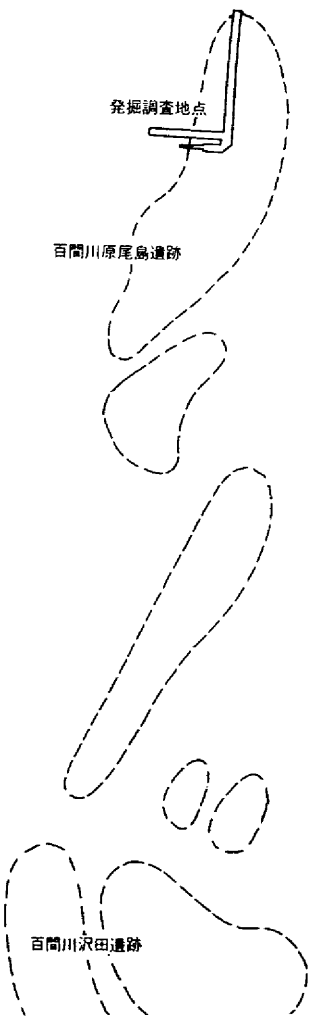
百間川原尾島遺跡1

1980・11

建設省　岡山河川工事事務所
岡山県教育委員会
文化課

百間川原尾島遺跡

百間川



序

百間川（旭川放水路）は旭川の洪水から岡山城下を守るため，江戸時代（1686年）に造られた人工河川です。

この百間川は，築造以来 300年という長い間に数多くの大洪水から岡山市街を救ってきましたが，昭和18年頃に河口部約２㎞を浚渫したが，戦争により一時中断され，昭和 38 年から 43 年にかけて河口水門の改築を行なった後，長く放置されたままでした。

このため，いまだに築造当時の原形をとどめているところもたくさんあり，昭和９年９月の室戸台風，昭和20年９月の枕崎台風による大洪水では旭川本川並びに百間川ともに各所で堤防が決壊し大きな被害が出ました。

一方，近年の都市化に伴い土地利用形態も大きく変化しており，先の室戸，枕崎台風クラスの大洪水に見舞われれば，その被害は筆舌しがたい甚大なものになると予想されます。

このため，旭川を直轄管理している建設省では，この百間川を近代的な旭川放水路としての機能を発揮させるため，昭和40年度から事業を再開し，用地買収等，地元の方々の多大なる御協力を戴き，昭和50年度から本格的改修工事に着手しているところであります。

百間川には，縄文から室町時代に至る貴重な遺跡が埋蔵されていることが知られています。建設省では，文化財保護法第57条の３により岡山県教育委員会と協議を重ね，昭和51年には遺跡埋蔵の範囲と確認のため調査を開始し，昭和52年度から同委員会に委託し，発掘調査を実施しています。

本書は，この発掘調査のうち第一次（新田サイフォン，導入水路（左岸），排水樋門調査区の弥生～古墳時代のもの）の調査結果をとりまとめたものです。本書が，百間川埋蔵文化財に対する認識と理解のため，また教育並びに学術，文化のため大いに活用されることを期待します。

最後に，発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位の御尽力に対し，深甚なる謝意を表します。

昭和55年11月

建設省岡山河川工事事務所
所長　松　浦　　哲

序

百間川（旭川放水路）は洪水時における旭川の分水路としての機能を果す一大人工河川であります。この川は岡山市竹田を分岐点とし旭東平野を貫流して児島湾にそそぐ流程13kmにおよぶものです。

1654年（承応５），備前一帯は大洪水にみまわれ，死者150数名の被害を出し，また飢饉により4000名近くの餓死者を出すに至りました。このため岡山藩は城下を洪水から守る一方，新田開発の計画を実施するために百間川築造に着手しました。完成までには1669年（寛文９）に荒手土堤を築堤して以来，1687年（貞享４）までの20数年の歳月を費やしたといわれています。

建設省は，百間川の近代的な放水路としての機能を備えるため，昭和50年から改修工事を進行させ現在に至っています。

岡山県教育委員会はこの改修計画に沿って，昭和51年度に建設省との協議により，埋蔵文化財包蔵地の範囲を確認するための調査を行いました。そして，昭和52年度からは建設計画に沿って本格調査に取り組み３カ年目を終了しています。この間，百間川内の各地点からは縄文時代から近世にかけてのおびただしい遺構，遺物が見つかっており，中でも弥生時代のガラス工房跡，水田跡などの発見は，全国的にも注目されているところです。

昭和54年度からは資料の整理作業にも着手し，昭和52年度に行った発掘調査の成果の一部を第一分冊としてここに公にし，その責を果したいと思います。

最後に，発掘調査ならびに整理報告にあたって，関係各位，特に建設省中国地方建設局，岡山河川工事事務所からは協議以来一貫して御協力頂いたことを記して感謝いたす次第です。

小報が今後の研究資料の一助となれば幸甚に存じます。

昭和 55 年 11 月

岡山県教育委員会
教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1. この報告は旭川放水路改修工事に伴い，建設省中国地方建設局の依頼を受け，岡山県教育委員会が昭和52年度に発掘調査を行った新田サイフォン導水路（以下，左岸用水と呼ぶ）部分，新田サイフォン部分，新田排水樋門（以下，新田樋門と呼ぶ）部分の発掘調査概要である。なお，上記発掘調査部分は百間川原尾島遺跡第１微高地の一部にあたる。
2. 調査期間は1977年４月４日～12月28日である。
3. この報告をまとめるにあたって，旭川放水路（百間川）埋蔵文化財保護対策委員各位，木器の樹種鑑定は岡山大学農学部畔柳鎮教授，花粉分析は岡山理科大学三好教夫教授，勾玉及び管玉の成分分析は岡山県工業技術センターに依頼し，有益な教示と助言を受けた。
4. この報告書の作成は上記の方々の助言と協力を得て，昭和54年４月以降55年３月まで文化課分室にて整理作業を実施し，光吉勝彦，葛原克人，伊藤晃，柳瀬昭彦，浅倉秀昭，江見正己，中野雅美，内藤善史の文化課職員が担当し執筆した。文責は，節及び文末に記した。
5. 遺物の整理，実測及び実測図の浄写・遺構図の浄写はおもに各担当者が行い，土器の実測に山本悦世，平井泰男，島崎東，石器の実測及び浄写に平井典子，遺物の拓影に北村智子の協力を得た。遺物の写真撮影及び編集は伊藤・浅倉が，図版作成は浅倉が行い，全体編集は江見があたった。
   また，遺物整理には近藤友子，坪井和江，森本耶須子，綱沢靖枝の協力を得た。
6. この報告書の断面図高度値は海抜高である。また方位は真北である。
7. この報告書で用いる時代区分は一般的な用い方をし，弥生時代～古墳時代の細部については別に略述する。
8. この報告書では溝→Ｄ，住居址→Ｈ，土壙→Ｐの略号を使用した。また，遺構密度の高い左岸用水調査区では，東から20ｍごとに１～７区までを設定し，住居址，土壙についてはＨ及びＰの前に区名を示した。遺物については，各調査区ごとに通し番号を付し，また，土器・石器・鉄器など，それぞれの通し番号を付した。
9. 52年度の発掘調査は，上記の原尾島遺跡第１微高地の発掘調査部分だけではなく，沢田遺跡（低水路部分―旧称第２微高地―），同遺跡（右岸用水路部分）及び，右岸用水部分の確認調査を行っているが，これらは来年度以降刊行の予定である。

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境……11
第２章　調査の契機及び経過……15
• 百間川遺跡第１次確認調査に至る経過概要……15
• １次調査の成果……17
• 調査の構成……18
• 本格調査の経過……19
• 対策委員会記録……23
• 調査及び報告書作成における問題点……24
第３章　各調査の概要……29
第１節　左岸用水調査区……29
第２節　新田サイフォン調査区……181
第３節　新田樋門調査区……247
第４章　まとめ……287
遺構
溝状遺構について……287
住居址について……289
土壙について……292
遺物……294

図　目　次

第１図　百間川位置図（1/1320000）……11
第２図　百間川周辺遺跡分布図（1/50000）……12
第３図　百間川遺跡群原尾島遺跡周辺地形図（1/5000）……19
第４図　原尾島遺跡調査区配置図（1/1500）……20
第５図　左岸用水　遺構配置図（1/200）……28
第６図　左岸用水　D－５断面図（1/30）及び出土遺物……30
第７図　左岸用水　D－２断面図（1/30）及び出土遺物……31
第８図　左岸用水　D－１断面図（1/30）及び出土遺物……31
第９図　左岸用水　D－６断面図（1/30）……31
第10図　左岸用水　D－６出土遺物……32
第11図　左岸用水　D－７断面図（1/30）……32
第12図　左岸用水　D－７出土遺物……33

第13図　左岸用水　D－9断面図（1/30）及び出土遺物……34
第14図　左岸用水　D－4遺構平・断面図（1/30）……35
第15図　左岸用水　D－4出土遺物(1)……36
第16図　左岸用水　D－4出土遺物(2)……37
第17図　左岸用水　D－4出土遺物(3)……38
第18図　左岸用水　D－4出土遺物(4)……39
第19図　左岸用水　D－4出土遺物(5)……40
第20図　左岸用水　D－4出土遺物(6)……41
第21図　左岸用水　D－4出土遺物(7)……42
第22図　左岸用水　D－4出土遺物(8)……43
第23図　左岸用水　D－10遺構平・断面図（1/30）……44
第24図　左岸用水　D－10出土遺物(1)……45
第25図　左岸用水　D－10出土遺物(2)……46
第26図　左岸用水　D－8断面図（1/30）及び出土遺物(1)……47
第27図　左岸用水　D－8出土遺物(2)……48
第28図　左岸用水　D－3遺構平・断面図（1/30）……49
第29図　左岸用水　D－3出土遺物(1)……50
第30図　左岸用水　D－3出土遺物(2)……51
第31図　左岸用水　D－3出土遺物(3)……52
第32図　左岸用水　D－3出土遺物(4)……53
第33図　左岸用水　D－3出土遺物(5)……54
第34図　左岸用水　D－3出土遺物(6)……55
第35図　左岸用水　D－11断面図（1/30）……56
第36図　左岸用水　D－12断面図（1/30）及び出土遺物……56
後37図　左岸用水　D－13出土遺物……56
第38図　左岸用水　2－H－4遺構図（1/60）及び出土遺物……69
第39図　左岸用水　3－H－4遺構図（1/60）及び出土遺物……70
第40図　左岸用水　2－H－5，2－H－2，2－H－3遺構平・断面図（1/60）……71
第41図　左岸用水　2－H－5出土遺物……71
第42図　左岸用水　5－H－1遺構図（1/60）及び出土遺物……72
等43図　左岸用水　5－H－2遺構図（1/60）及び出土遺物……73
第44図　左岸用水　5－H－3遺構図（1/60）及び出土遺物……74
第45図　左岸用水　3－H－2遺構図（1/60）及び出土遺物……76
第46図　左岸用水　3－H－2P－1出土遺物……77
第47図　左岸用水　3－H－2出土遺物(1)……78

第48図　左岸用水　3－H－2出土遺物(2)……79
第49図　左岸用水　4－H－1遺構図（1/60）及び出土遺物……80
第50図　左岸用水　3－H－7遺構平・断面図（1/60）……80
第51図　左岸用水　3－H－5遺構平・断面図（1/60）……81
第52図　左岸用水　3－H－5出土遺物……82
第53図　左岸用水　4－H－2遺構図（1/60）及び出土遺物……83
第54図　左岸用水　2－H－1遺構図（1/60，1/20）及び出土遺物……85
第55図　左岸用水　2－H－1出土遺物……86
第56図　左岸用水　1－H－5遺構図（1/60）及び出土遺物……88
第57図　左岸用水　1－H－1遺構図（1/60）及び出土遺物……89
第58図　左岸用水　1－H－1出土遺物……90
第59図　左岸用水　2－H－6遺構平・断面図（1/60）……90
第60図　左岸用水　2－H－6出土遺物……91
第61図　左岸用水　3－H－1遺構図（1/60）及び出土遺物……92
第62図　左岸用水　3－H－1出土遺物……93
第63図　左岸用水　3－H－3遺構図（1/60，1/20）及び出土遺物……94
第64図　左岸用水　竈遺構平・断面図（1/20）……95
第65図　左岸用水　1－P－A，B土壙出土遺物……111
第66図　左岸用水　5－P－1遺構平・断面図（1/20）……111
第67図　左岸用水　5－P－1出土遺物……113
第68図　左岸用水　4－P－30遺構図（1/20）及び出土遺物……114
第69図　左岸用水　4－P－30出土遺物(1)……115
第70図　左岸用水　4－P－30出土遺物(2)……116
第71図　左岸用水　5－P－2遺構平・断面図（1/20）……117
第72図　左岸用水　4－P－20遺構平・断面図（1/20）……117
第73図　左岸用水　4－P－20出土遺物……118
第74図　左岸用水　6－P－1遺構図（1/20）及び出土遺物……119
第75図　左岸用水　3－P－50遺構図（1/30）及び出土遺物……120
第76図　左岸用水　2－P－20出土遺物……121
等77図　左岸用水　3－P－20遺構図（1/20）及び出土遺物……122
第78図　左岸用水　1－P－15遺構平・断面図（1/20）……123
第79図　左岸用水　1－P－15出土遺物……124
第80図　左岸用水　壺棺Ⅰ(上)，Ⅱ(中)，Ⅲ(下)遺構平・断面図（1/20）……125
第81図　左岸用水　壺棺Ⅰ，出土遺物……126
第82図　左岸用水　壺棺Ⅱ，出土遺物……127

第83図　左岸用水　壺棺Ⅲ，出土遺物…… 128
第84図　左岸用水　6－井戸－Ⅰ遺構図（1/40）及び出土遺物(1)…… 129
第85図　左岸用水　6－井戸－Ⅰ出土遺物(2)…… 130
第86図　左岸用水　6－井戸－Ⅰ出土遺物(3)…… 131
第87図　左岸用水　6－井戸－Ⅰ出土遺物(4)…… 132
第88図　左岸用水　6－井戸－Ⅰ出土遺物(5)…… 133
第89図　左岸用水　4－P－25遺構図（1/20）及び出土遺物…… 134
第90図　左岸用水　5－P－19遺構図（1/20）及び出土遺物…… 135
第91図　左岸用水　5－P－7遺構図（1/20）及び出土遺物…… 136
第92図　左岸用水　5－P－10遺構図（1/20）及び出土遺物…… 137
第93図　左岸用水　4－P－1遺構平・断面図（1/20）…… 138
第94図　左岸用水　4－P－1出土遺物…… 138
第95図　左岸用水　2－P－13遺構平・断面図（1/20）…… 138
第96図　左岸用水　2－P－13出土遺物(1)…… 139
第97図　左岸用水　2－P－13出土遺物(2)…… 140
第98図　左岸用水　3－井戸－Ⅱ遺構平・断面図（1/40）…… 140
第99図　左岸用水　3－井戸－Ⅱ出土遺物…… 141
第100図 左岸用水　2－P－1遺構平・断面図（1/20）…… 142
第101図 左岸用水　2－井戸－Ⅲ遺構平・断面図（1/40）…… 142
第102図 左岸用水　2－P－1出土遺物…… 143
第103図 左岸用水　2－井戸－Ⅲ出土遺物…… 144
第104図 左岸用水　3－P－1遺構図（1/20）及び出土遺物…… 145
第105図 左岸用水　柱穴状土壙出土遺物…… 146
第106図 左岸用水　微高地斜面土層図（1/60）…… 147
第107図 左岸用水　包含層出土遺物(1)…… 148
第108図 左岸用水　包含層出土遺物(2)…… 149
第109図 左岸用水　包含層出土遺物(3)…… 150
第110図 左岸用水　包含層出土遺物(4)…… 151
第111図 左岸用水　包含層出土遺物(5)…… 152
第112図 左岸用水　包含層出土遺物(6)…… 153
第113図 左岸用水　包含層出土遺物(7)…… 154
第114図 左岸用水　包含層出土遺物(8)…… 155
第115図 左岸用水　包含層出土遺物(9)…… 156
第116図 左岸用水　包含層出土遺物(10)…… 157
第117図 新田サイフォン　新田樋門遺構配置図（1/200）……180・181

第118図 新田サイフォン　D－5遺構平・断面図（1/30）…… 181
第119図 新田サイフォン　D－5出土遺物…… 182
第120図 新田サイフォン　D－17・16断面図（1/30）…… 182
第121図 新田サイフォン　D－17（上）D－16（下）出土遺物…… 183
第122図 新田サイフォン　D－9，D－8，D－4（1/30）及びD－4出土遺物…… 184
第123図 新田サイフォン　溝状遺構断面図（1/30）及び出土遺物…… 186
第124図 新田サイフォン　D－2断面図（1/30）及び出土遺物…… 187
第125図 新田サイフォン　H－7遺構平・断面図（1/60）及び出土遺物…… 188
第126図 新田サイフォン　H－7出土遺物…… 189
第127図 新田サイフォン　H－8遺構平・断面図（1/60）…… 191
第128図 新田サイフォン　H－8出土遺物…… 192
第129図 新田サイフォン　H－1遺構平・断面図（1/80）…… 193
第130図 新田サイフォン　H－1出土遺物…… 194
第131図 新田サイフォン　H－3，H－2遺構平・断面図（1/60）…… 195
第132図 新田サイフォン　H－3出土遺物…… 196
第133図 新田サイフォン　H－2出土遺物…… 197
第134図 新田サイフォン　H－5（上），6（下）遺構平・断面図（1/60）…… 198
第135図 新田サイフォン　H－5出土遺物(1)…… 199
第136図 新田サイフォン　H－5出土遺物(2)…… 200
第137図 新田サイフォン　H－6出土遺物…… 200
第138図 新田サイフォン　柱列遺構平・断面図（1/60）…… 201
第139図 新田サイフォン　土壙1出土遺物(1)…… 202
第140図 新田サイフォン　土壙1遺構平・断面図（1/20）…… 202
第141図 新田サイフォン　土壙1出土遺物(2)…… 203
第142図 新田サイフォン　土壙1出土遺物(3)…… 204
第143図 新田サイフォン　土壙1出土遺物(4)…… 205
第144図 新田サイフォン　土壙1出土遺物(5)…… 206
第145図 新田サイフォン　井戸－1遺構図（1/40）及び出土遺物…… 206
第146図 新田サイフォン　井戸－2遺構平・断面図（1/40）…… 207
第147図 新田サイフォン　井戸－2出土遺物(1)…… 208
第148図 新田サイフォン　井戸－2出土遺物(2)…… 209
第149図 新田サイフォン　井戸－2出土遺物(3)…… 210
第150図 新田サイフォン　井戸－2出土遺物(4)…… 211
第151図 新田サイフォン　井戸－2出土遺物(5)…… 212
第152図 新田サイフォン　井戸－2出土遺物(6)…… 213

第153図 新田サイフォン　井戸―2出土遺物(7)…… 214
第154図 新田サイフォン　井戸―2出土遺物(8)…… 215
第155図 新田サイフォン　土壙2遺構図（1/40）及び出土遺物…… 216
第156図 新田サイフォン　土壙3出土遺物…… 216
第157図 新田サイフォン　池状遺構出土遺物…… 216
第158図 新田サイフォン　微高地西斜面堆積遺物(1)…… 217
第159図 新田サイフォン　微高地西斜面堆積遺物(2)…… 218
第160図 新田サイフォン　微高地西斜面堆積遺物(3)…… 219
第161図 新田サイフォン　包含層出土遺物(1)…… 220
第162図 新田サイフォン　包含層出土遺物(2)…… 221
第163図 新田サイフォン　包含層出土遺物(3)…… 222
第164図 新田サイフォン　包含層出土遺物(4)…… 223
第165図 新田サイフォン　包含層出土遺物(5)…… 224
第166図 新田サイフォン　包含層出土遺物(6)…… 225
第167図 新田樋門　D―5，5断面図（1/30）…… 247
第168図 新田樋門　D―14断面図（1/30）…… 247
第169図 新田樋門　D―12（右），13（左）断面図（1/30）…… 248
第170図 新田樋門　D―8断面図（1/30）及び出土遺物…… 248
第171図 新田樋門　D―6断面図（1/30）…… 249
第172図 新田樋門　D―7断面図（1/30）…… 249
第173図 新田樋門　D―10，11断面図（1/30）…… 249
第174図 新田樋門　D―9断面図（1/30）…… 250
第175図 新田樋門　D―4断面図（1/30）及び出土遺物…… 250
第176図 新田樋門　D―3断面図（1/30）…… 250
第177図 新田樋門　D―1（右），2（左）断面図（1/30）…… 250
第178図 新田樋門　D―1出土遺物…… 251
第179図 新田樋門　H―2，3遺構図（1/60）及び出土遺物…… 251
第180図 新田樋門　H―4（右），5（左）遺構平・断面図（1/60）…… 252
第181図 新田樋門　H―6遺構平・断面図（1/60）…… 253
第182図 新田樋門　H―7遺構図（1/60）及び出土遺物…… 253
第183図 新田樋門　H―1遺構平・断面図（1/60）…… 254
第184図 新田樋門　H―1出土遺物(1)…… 255
第185図 新田樋門　H―1出土遺物(2)…… 256
第186図 新田樋門　井戸―1遺構平・断面図（1/40）…… 256
第187図 新田樋門　井戸―1出土遺物…… 257

第188図 新田樋門　井戸―2遺構平・断面図（1/40）…… 257
第189図 新田樋門　井戸―2出土遺物(1)…… 258
第190図 新田樋門　井戸―2出土遺物(2)…… 259
第191図 新田樋門　井戸―3遺構平・断面図（1/40）…… 259
第192図 新田樋門　井戸―3出土遺物(1)…… 260
第193図 新田樋門　井戸―3出土遺物(2)…… 261
第194図 新田樋門　P―6，3，9出土遺物…… 262
第195図 新田樋門　土器溜り，平面図（1/30）及び出土遺物…… 263
第196図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り下層出土遺物(1)…… 264
第197図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り下層出土遺物(2)…… 265
第198図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り上層出土遺物(1)…… 266
第199図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り上層出土遺物(2)…… 267
第200図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り上層出土遺物(3)…… 268
第201図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り上層出土遺物(4)…… 269
第202図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り上層出土遺物(5)…… 270
第203図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り上層出土遺物(6)…… 271
第204図 新田樋門　微高地西斜面土器溜り上層出土遺物(7)…… 272
第205図 新田樋門　包含層出土遺物…… 273
第206図 溝状遺構時期別配置図（その1）…… 287
第207図 溝状遺構時期別配置図（その2）…… 288
第208図 百・後・Ⅰ期住居址配置図…… 289
第209図 百・後・Ⅱ期住居址配置図…… 289
第210図 百・後・Ⅲ・Ⅳ期住居址配置図 …… 290
第211図 百・古・Ⅰ・Ⅱ期住居址配置図 …… 290
第212図 5世紀末・6世紀末～7世紀初住居址配置図…… 291

表　目　次

表1　編年対比表……26
表2　左岸用水溝状遺構出土土器観察表……57
表3　左岸用水住居址出土土器観察表……96
表4　左岸用水出土土錘一覧表…… 155
表5　左岸用水出土石器一覧表…… 158
表6　左岸用水土壙出土土器観察表…… 160
表7　新田サイフォン出土土錘一覧表…… 224

表８　新田サイフォン出土石器一覧表…… 225
表９　新田サイフォン出土土器観察表…… 226
表10　新田樋門出土土器観察表…… 275
表11　土壙一覧表…… 293
表12　井戸状遺構一覧表…… 293

図　版　目　次

巻頭図版　百間川原尼島遺跡周辺航空写真
図版１　(1)左岸用水調査区全景（南東から）
(2)左岸用水調査区全景（北西から）
図版２　(1)左岸用水調査区Ｄ－７・９，２－Ｈ－６検出状況（南西から）
(2)左岸用水調査区Ｄ－４遺物出土状況及び検出状況（北東から）
図版３　(1)左岸用水調査区Ｄ－８検出状況（北東から）
(2)左岸用水調査区Ｄ－３遺物出土状況（北東から）
図版４　(1)左岸用水調査区３－Ｈ－４・５，井戸－Ⅱ検出状況（北東から）
(2)左岸用水調査区５－Ⅱ－２検出状況（北東から）
図版５　(1)左岸用水調査区３－Ｈ－２検出状況（北東から）
(2)左岸用水調査区３－Ｈ－２　Ｐ－１遺物出土状況（南から）
図版６　(1)左岸用水調査区４－Ｈ－１検出状況（北東から）
(2)左岸用水調査区２－Ｈ－１検出状況（北東から）
図版７　(1)左岸用水調査区１－Ｈ－１検出状況（北東から）
(2)左岸用水調査区３－Ｈ－１遺物出土状況（北西から）
図版８　(1)左岸用水調査区３－Ｈ－３竈検出状況（東から）
(2)左岸用水調査区竈遺構検出状況（北から）
図版９　(1)左岸用水調査区４－Ｐ－20・30検出状況（北東から）
(2)左岸用水調査区４－Ｐ－20検出状況（北東から）
(3)左岸用水調査区５－Ｐ－１検出状況（南西から）
図版10　(1)左岸用水調査区３－Ｐ－20検出状況（南西から）
(2)左岸用水調査区５－Ｐ－19検出状況（南東から）
図版11　(1)左岸用水調査区６－井戸－Ⅰ検出状況（南東から）
(2)左岸用水調査区２－井戸－Ⅲ検出状況（南西から）
図版12　(1)左岸用水調査区壺棺Ⅰ～Ⅲ検出状況（北東から）
(2)左岸用水調査区壺棺Ⅰ（右），Ⅱ（左）検出状況（北東から）
図版13　(1)左岸用水調査区壺棺Ⅰ検出状況（南から）

(2)左岸用水調査区壺棺Ⅱ検出状況（南から）
図版14　(1)左岸用水調査区４－Ｐ－１検出状況（北西から）
(2)左岸用水調査区２－Ｐ－13検出状況左（上層），右（下層）（南から）
図版15　(1)左岸用水調査区２－Ｐ－１検出状況（南西から）
(2)左岸用水調査区３－Ｐ－１検出状況（北西から）
図版16　(1)新田サイフォン調査区２・３区遺構検出状況（北東から）
(2)新田サイフォン調査区４区遺構検出状況（南東から）
図版17　新田サイフォン調査区Ｈ－７検出状況（南東から，北東から）
図版18　新田サイフォン調査区Ｈ－８検出状況（北東から，北から）
図版19　(1)新田サイフォン調査区Ｈ－１検出状況（北東から）
(2)新田サイフォン調査区Ｈ－５検出状況（東から）
図版20　(1)新田サイフォン調査区Ｈ－６検出状況（北から）
(2)新田サイフォン調査区土壙－１検出状況（北東から）
図版21　(1)新田サイフォン調査区井戸－１遺物出土状況（南から）
(2)新田サイフォン調査区井戸－１検出状況（南から）
図版22　(1)新田サイフォン調査区井戸－２検出状況（北から）
(2)新田サイフォン調査区井戸－２遺物出土状況（北から）
図版23　(1)新田樋門調査区発掘前状況（北東から）
(2)新田樋門調査区遺構検出状況（北東から）
図版24　(1)新田樋門調査区堤防下遺構検出状況（北西から）
(2)新田樋門調査区Ｄ－５・5′検出状況（南から）
図版25　(1)新田樋門調査区Ｈ－2・３遺物出土状況（西から）
(2)新田樋門調査区Ｈ－２・３検出状況（西から）
図版26　(1)新田樋門調査区Ｈ－４検出状況（東から）
(2)新田樋門調査区Ｈ－５・６検出状況（東から）
図版27　(1)新田樋門調査区Ｈ－１遺物出土状況（西から）
(2)新田樋門調査区Ｈ－１検出状況（西から）
図版28　(1)新田樋門調査区Ｈ－１大甕出土状況（東から）
(2)新田樋門調査区Ｈ－１竈検出状況（東から）
図版29　(1)新田樋門調査区井戸－２検出状況（東から）
(2)新田樋門調査区井戸－３木器出土状況（東から）
図版30　(1)新田樋門調査区微高地西斜面土器溜り遺物出土状況（南西から）
(2)新田樋門調査区微高地西斜面土器溜り遺物出土状況（北西から）
図版31　左岸用水調査区Ｄ－４出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版32　左岸用水調査区Ｄ－４出土遺物（約$\frac{1}{3}$）

図版33　左岸用水調査区D－4・D－10・D－8出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版34　左岸用水調査区D－3出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版35　左岸用水調査区D－3出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版36　左岸用水調査区D－3出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版37　左岸用水調査区住居址出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版38　左岸用水調査区住居址出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版39　左岸用水調査区住居址・井戸・土壙出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版40　左岸用水調査区土壙出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版41　左岸用水調査区6－井戸－Ⅰ出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版42　左岸用水調査区壺棺Ⅰ出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版43　左岸用水調査区壺棺Ⅱ出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版44　左岸用水調査区壺棺Ⅲ出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版45　左岸用水調査区土壙出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版46　(1)左岸用水調査区出土砥石
　　(2)左岸用水調査区出土鉄器・銀環・古銭（約$\frac{1}{2}$）及び管玉・小玉（約2倍）
図版47　左岸用水調査区出土石器（約$\frac{1}{2}$）
図版48　左岸用水調査区出土分銅形土製品（上段右）・緑釉土器（中段）・土錘（下段）（約$\frac{1}{2}$）
図版49　左岸用水調査区包含層出土縄文式土器（上段）・渡来系土器（下段）（約$\frac{1}{2}$）
図版50　新田サイフォン調査区溝・住居址出土遺物（約$\frac{1}{2}$）
図版51　新田サイフォン調査区H－5出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版52　新田サイフォン調査区土壙－1及び井戸－1出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版53　新田サイフォン調査区井戸－2出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版54　新田サイフォン調査区井戸－2出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版55　新田サイフォン調査区包含層出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版56　(1)新田サイフォン調査区包含層出土縄文式土器（約$\frac{1}{2}$）
　　(2)新田サイフォン調査区包含層出土土錘（約$\frac{1}{2}$）
図版57　(1)新田サイフォン調査区出土石器
　　(2)新田サイフォン調査区出土紡錘車及び，刀子（約$\frac{1}{2}$）
　　(3)新田サイフォン調査区出土勾玉（約2倍）
図版58　新田樋門調査区D－1・H－1出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版59　新田樋門調査区井戸－1・2及び土器溜り出土遺物（約$\frac{1}{3}$）
図版60　新田樋門調査区井戸－3出土遺物（約$\frac{1}{4}$）
図版61　新田樋門調査区微高地西斜面土器溜り出土遺物
図版62　新田樋門調査区微高地西斜面土器溜り出土遺物
図版63　新田樋門調査区微高地西斜面土器溜り出土遺物

第1章　地理的・歴史的環境

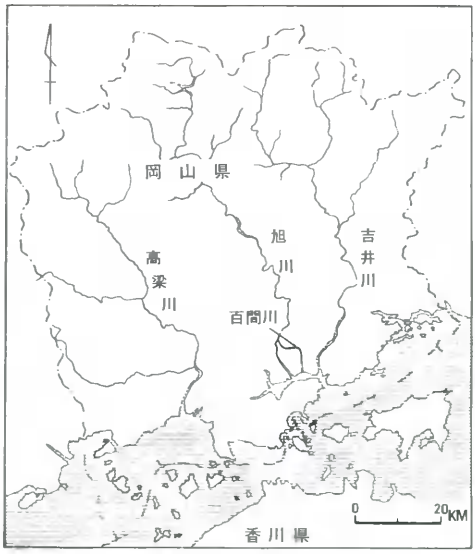
百間川は江戸時代（寛文年間）に，津田永忠によって，岡山城下を旭川の洪水から守るため築造された一大人工河川である。岡山市竹田から分かれた旭川放水路（百間川）は，旭川左岸を南東に流走して原尾島付近で東に向きを変え，操山山塊の北側を東進し，米田で再び南に流路を変え，沖元で児島湾に注ぐ。その幅200〜300m，流程約13Kmにおよぶものである。

百間川が位置する旭川の左岸平野（旭東平野）は，北に竜の口山系，東に山王山，南に操山山塊をひかえた肥沃な水田が展開する一大穀倉地であるが，近年市街化の波に押され，その景観は急激に変貌しつつある。

岡山平野は今から約7000年前，縄文時代前期の海進をピークとして，それ以降の海退及び旭川の堆積物によって形成された沖積平野である。この旭川も現在は一流路にまとめられているが，古くは数条に分かれており，また幾筋もの支流が平野一帯に流走していたらしく，それら旧河道の両岸にはいくつもの自然堤防が形成されている。

岡山平野付近で確認されている遺物のうち，最も古いものとしては，操山旗振台北部遺跡（註1）出土のナイフ型石器がある。これは後期旧石器時代のもので，現在のところこれに前後する時期のものはない。

縄文時代の遺跡は，丘陵に散布する後期の朝寝鼻貝塚（註2）と他に数カ所石器散布地が存在しているが，新たに百間川改修工事に伴い，沢田遺跡（註3）から縄文時代中期の土器片2片，及び同後期の土器片10数片を採集した。この中期の土器片は磨滅が激しく，上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性も考えられるが，後期の土器片においては残りもよく，また昭和34年の国道2号線百間川橋建設の際にも出土していることなどから，岡山平野においてはこの時期から沖積地における集落の開始が考えられる。



第1図　百間川位置図（$\frac{1}{1,320,000}$）

1．百間川原尾島遺跡　2．百間川沢田遺跡　3．百間川兼基遺跡　4．百間川当麻遺跡　5．兼基遺跡　6．雄町遺跡　7．乙多見遺跡　8．赤田遺跡　9．南方遺跡　10．一本松古墳　11．神宮寺山古墳　12．唐人塚古墳　13．備前車塚古墳　14．山王山古墳　15．沢田大塚古墳　16．金蔵山古墳　17．旗振台古墳　18．操山103号墳　19．操山106号墳　20．湊茶臼山古墳　21．網浜茶臼山古墳　22．操山109号墳　23．網浜廃寺　24．幡多廃寺　25．成光廃寺　26．賞田廃寺　27井寺廃寺

第2図　百間川周辺遺跡分布図（$\frac{1}{50,000}$）

縄文時代晩期の遺跡は，いずれも弥生時代につながる複合遺跡である。調査で明らかにされた例としては，津島遺跡（註4），百間川原尾島遺跡，同沢田遺跡，雄町遺跡（註5）などがある。百間川原尾島遺跡においては，遺構の性格を明らかに出来なかったものの縄文時代晩期の柱穴状土壙を検出している。津島遺跡は縄文時代晩期～弥生時代にかけての遺物及び弥生時代の水田溝，住居址，高床倉庫，貯蔵穴などの遺構が検出されている。雄町遺跡は縄文時代晩期～平安時代にかけての遺物及び，旧河道・溝・住居址・土壙墓などの遺構が検出されており，特に，弥生時代中期の水利施設が明らかにされるとともに居住区と墓域が明確に区別されていることが判明した。

弥生時代中期の遺跡は，前述の遺跡の他に南方遺跡（註6），赤田遺跡（註7），乙多見遺跡（註8）などがある。南方遺跡からは人骨及び土壙墓，灰穴などが検出されており，赤田遺跡からは，高杯形土器で蓋をした甕棺墓が出土している。百間川兼基遺跡は弥生時代中期を中心として，古墳時代に及ぶ複合遺跡であるが，特に弥生時代中期の土器片とともにガラス滓が多量に出土しており，また1間×2間～5間までの建物を20数棟検出している。なお当遺跡の南側に位置する操山の谷部からは3個の銅鐸が出土している（註9）。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡は，急激にその遺跡数をふやし，当平野に形成された微高地の大半は集落が営まれた可能性が強い。一方，百間川沢田遺跡では，弥生時代後期終末までに洪水によって埋没した水田が明らかになった。これによると，微高地縁辺部及び旧河道上に水田が形成されており，前者は10㎡～40㎡前後の小規模な田面積であるのに対し，後者は200㎡前後とその規模も大きい。また最近の調査では百間川原尾島遺跡から弥生時代後期前半に埋没した水田も明らかにされつつある。

古墳時代前期の遺跡は百間川原尾島遺跡，同兼基遺跡などがある。兼基遺跡からは，竪穴住居址群とともに3間×3間の倉庫群が検出されている。一方古墳についていえば，平野の北にあたる竜の口山系には13面の舶載鏡を出土した備前車塚古墳（註10）が，南にあたる操山山系には網浜茶臼山古墳，藻茶臼山古墳，金蔵山古墳（註11），東にあたる山王山には山王山古墳群がある。これらの丘陵上には，これ以降後期古墳も含め200基をはるかに越える古墳が確認されている。

古墳時代以降の調査にかかる遺跡としては賞田廃寺（註12），幡多廃寺（註13）などの寺址がある。他に百間川当麻遺跡の調査では多量の瓦器が出土するとともに，古代の倉庫群及び中世の建物群を検出している。

註

註1　鎌木義昌「第1編原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市役所，1962
註2　註1に同じ
註3　岡山県教育委員会の昭和53年度の調査において出土している。
註4　『岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会1970
註5　「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会1972
註6　『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会1971
註7　『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会1976
註8　正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴なう出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告3』1973
註9　鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』1961

註10　註１に同じ
註11　西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館1959
註12　『賀田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会1971
註13　註７に同じ

第2章　調査の契機及び経過

百間川遺跡第1次確認調査に至る経過概要

百間川改修工事計画は，昭和初年に構想が出来たといわれている。しかし，第2次大戦で計画が中断され，終戦前後の食糧難で百間川の河床を利用した田畑に変った。建設省は同43年幅180mの放水路を改修し，旭川の増水時に毎秒1,200トンを放流するという計画をたて，地元耕作者と土地買収交渉に入ったが難航が続き，最終的には49年に決着をみた。こうした経緯をへて建設省は昭和50年10月本格的工事の姿勢を示すべく，岡山市原尾島国道2号線周辺に百間川改修工事の立看板を上げるとともに河川敷に盛土にする工事用道路を施工したのである。

ところで，この百間川河床下には，「百間川遺跡」が所在することは周知され，岡山県遺跡地図には国道2号線をはさみA地点，B地点と2箇所が記載されている。当遺跡は，旭川対岸に所在する津島遺跡と常に対比され，その重要性を問われながらも，範囲，性格等不明確な点が多い。岡山県教育委員会文化課では，昭和43年百間川改修工事計画を知り，建設省岡山工事事務所に対しその説明と次の要望をしている。その内容は，改修工事計画予定地には文化財保護法に基づいて，周知されている「百間川遺跡」が所在すること。事業者である建設省は，文化財保護法に基づく措置，特に昭和32年6月11日閣議了解になった「文化財保護に関する関係官庁間の連絡強化について」の趣旨にそって，事前に文化財の保護に遺憾のないように計らうこと。以上大略二点である。これに対して建設省は，当時河川内の土地買収交渉及び工事施行の調査計画を進めている段階であるとの回答であった。

一方，岡山県教育委員会では，この時点で新幹線，中国縦貫道建設に伴う発掘調査，報告書作成の対応追われ，特に中国縦貫道の発掘調査については，8年間にわたる発掘調査と14巻の膨大な報告書作成のためピーク時には調査員18名を配置し，その作業に専念している状況にあった。

前述の昭和50年10月の百間川改修工事用道路着手時には，中国縦貫道発掘調査事業の現地調査が翌51年10月に終了する見通しにあり，百間川遺跡への対応が順次出来る体制にあった。

岡山県教育委員会は，このような百間川改修事業の状況をふまえ，直ちに協議を申し入れ，実情の聴取を行うとともに，改修事業にともなう百間川遺跡の取扱いについて，協議した結果，基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば，当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施行することに合意した。

しかしながら，今後遺跡範囲の確認・遺跡の現状保存，発掘調査計画等，種々細部にわたる協議を必要とするため，建設省に対して文化財保護法第57条の3に先だつ事前協議の文書（別添）の提出を求めた。一方岡山県教育委員会は，この協議の基礎資料となる百間川遺跡（関連遺跡を含む）の範囲確認調査計画概要を建設省に提出した。其後2～3回の協議のうえ，昭和51年9月1日付建中河計第187号をもって中国地方建設局長より，確認調査の依頼文書（別添）を受け，同年11月1日から確認

調査を実施するに至った。

（光吉）

資料1

建中岡河第329号
昭和51年4月10日

岡山県教育委員会教育長殿

建設省中国地方建設局
岡山河川工事事務所長

埋蔵文化財に関する事前協議について

文化財保護法第57条の3に先立ち，下記のとおり事前協議いたしますのでよろしくお取計らいください。

記

1. 事業計画予定地の所在地及び地番
   岡山市今在家，中島，竹田，東川原，浜，撮，原尾島，藤原，沢田，兼基，今谷，神下，米田，長利，海吉，沖元，中川町，益野町，光津，政津，升田地内
2. 事業計画予定地の面積
   300*ha*
3. 事業計画予定地の土地所有者の氏名
   建設省
4. 事業計画予定地の用地買収の状況，計画，予定等
   予定地の用地買収はほぼ完了。
5. 事業計画予定地に係わる遺跡の種類，員数及び名称並びに現状
   埋蔵文化財包蔵地として弥生時代他。
6. 事業計画の名称，目的及び内容
   イ．名称　旭川放水路（百間川）
   ロ．目的及び内容
   旭川の派川百間川を改修し，旭川放水路としての機能を確保し，洪水の疎通を図り岡山市の災害を防除する。
7. 土木工事の計画及び方法の概要
   河川のほぼ中央部に現地盤より約3*m*の掘削を行い低水路を施行する。その掘削土を利用し現堤の前復付で計画堤防を完成し，堤防の前面計画高水位まで及び低水路には護岸を施行する。

また，現在横断する県道，市道は抜粋橋とし，水路網については統廃合し，堤脚添いに水路を施行するとともに2，3のサイフォンを設け用水路を確保する。

なお，排水については，要所に樋管（門）を施行するものである。

8.　事業主体となるものの名称及び代表者の氏名所在地

岡山市鹿田町2丁目4番36号

建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所

9.　土木工事の予定期間

昭和51年4月～昭和62年3月

資料2

岡山河川工事事務所長経由
建中河計第187号
昭和51年9月1日

岡山県教育委員会
教　育　長　殿

中国地方建設局長

旭川放水路埋蔵文化財の予備調査について（依頼）

旭川放水路改修事業に係わる百間川遺跡については，文化財保護法第57条の3に基づいて協議させていただいておりますが，百間川遺跡およびその周辺地域の遺跡確認調査を貴所で昭和51年度に実施されるようお願いいたします。

なお，調査に必要な経費につきましては，当局で負担いたします。また，調査に必要な手続きについては，岡山河川工事事務所長とされるよう申し添えます。

第1次調査の成果

第1次調査（註14）は，中央低水路部分の遺跡の確認及び古地形の復原と新田サイフォン部分の一部発掘調査であった。調査期間は，昭和51年11月1日～昭和52年3月31日まで実施した。

遺跡の確認調査は2m四方のグリッドを基本とし，建設省の設定した低水路中央杭を中心に115箇所のボーリングを行った。ボーリングの範囲は旭川本流から百間川支流への分岐点である岡山市竹田から，古代の海岸線付近と推定される岡山市海吉までの約7.5kmの間である。調査の結果，岡山市原尾島（第1微高地），同沢田（第2微高地），同兼基（第3微高地）の3箇所に大規模な微高地が確認されるとともに，岡山市米田付近は古代においては海水の侵入する湾であった可能性が強いこと等が判明した。また，上記の微高地には多時期に渡る遺構，遺物等が重複して存在することが明らかになると共に，これまで周知されていた百間川遺跡A地点（註15）は第1微高地の，百間川遺跡B地点

（註16）は第2微高地の範囲に入るものと判明した。なお，第1，第2微高地間においては低湿地を呈しており，充分な土層観察が必要と考えられた。

ボーリング調査に引き続き，新田サイフォン部分（第1微高地）の発掘調査に入った。調査範囲は幅7m，長さ約200mで，調査上4区に地区割をし，南端にあたる1区のみを完掘し2，3区の上層を一部調査した。調査の結果，近世の溝と，古墳時代～中世に至る遺物が出土している。

調査の構成

発掘調査は建設省中国地方建設局と委託契約を締結した岡山県教育委員会があたり，調査にあたる専門的指導及び助言を得るため，岡山県保護調査団の推薦を受けた下記の方々に「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」（以下，対策委員会）の委員を委嘱した。

旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会（あいうえお順）

岡山大学	小野　昭
岡山理科大学	鎌木義昌
岡山市立岡輝中学校	角田　茂
岡山市教育委員会	出宮徳尚
岡山大学	春成秀爾
岡山女子高等看護学院	水内昌康

岡山県教育委員会

文化課長	飛田真澄
課長補佐	塩見　篤
文化財主幹	難波　進
主幹	小川佳彦
文化財二係長	光吉勝彦
文化財保護主査	葛原克人（調査担当）
主事	小倉　昇（庶務担当）
文化財保護主事	伊藤　晃（調査担当，12月まで），松本和男（調査担当，1月～3月まで），柳瀬昭彦（調査担当）
主事	浅倉秀昭（調査担当），藤井守雄（庶務担当），江見正己（調査担当），中野雅美（同），内藤善史（同）

現場作業員

赤木春男・秋山義男・足羽登起男・有森茂生・今井菅一・今井勉・井本利則・入江武夫・岩田実衛・江国正明・江本吉春・岡白郎・岡本正義・小川末男・荻野知史・国重正男・河野忠義・久山智・三枝健二・定中進一・佐野雅男・椙元要・妹尾亥三五・多田正・多田陽一・田山光弘・中田伸二・西尾喜市・西本真一・則包敏夫・服部忠正・平畑邦彦・古林睦永・牧本一男・松浦永次朗・松本友

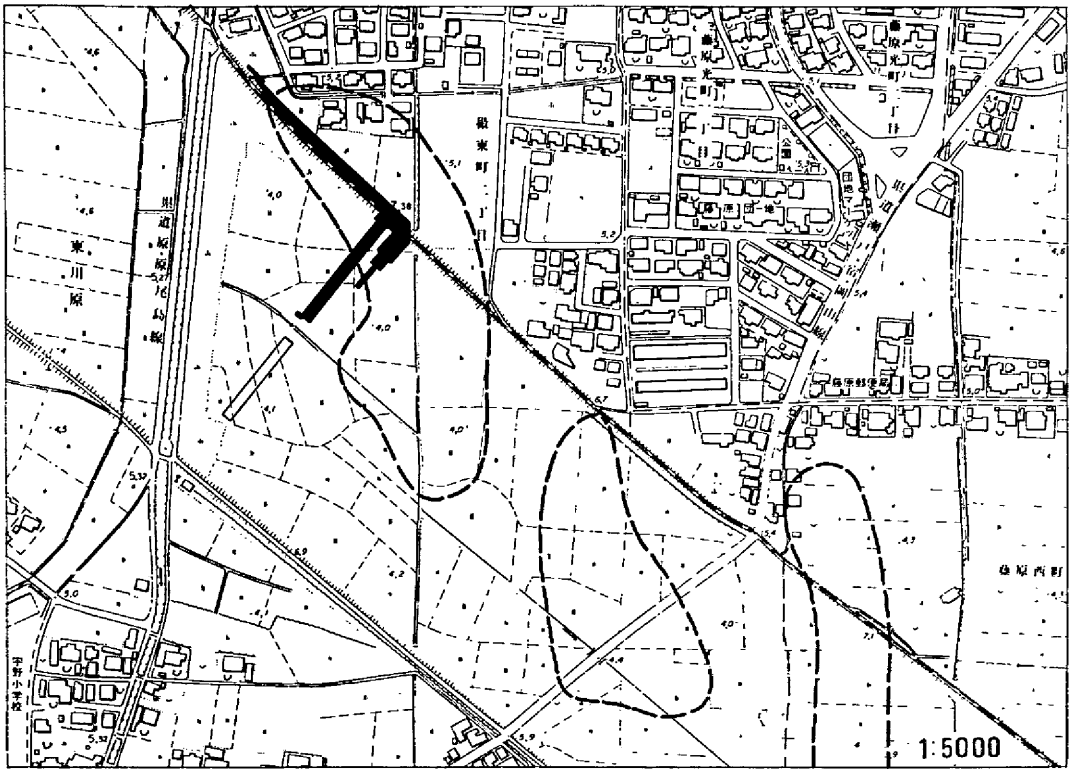
彦・真鍋九平・光石善一・目黒兼信・森安克己・森安毅・故矢部文治・渡辺勝・出原喜美子・太田照子・岡崎洋子・尾高幸子・金岡トシエ・川井静子・小西静江・新名定子・次田亨子・津島健子・中村初子・西崎貞子・西崎知子・西崎美代子・野崎千珠子・浜八重子・藤田球江・藤田光子・藤田元女・松本あい子・松本千枝子・真野春江・溝口春子・三好裕子・守安幸恵

現場事務には後谷日出子・山本悦世，調査補助に平井泰男が当った。

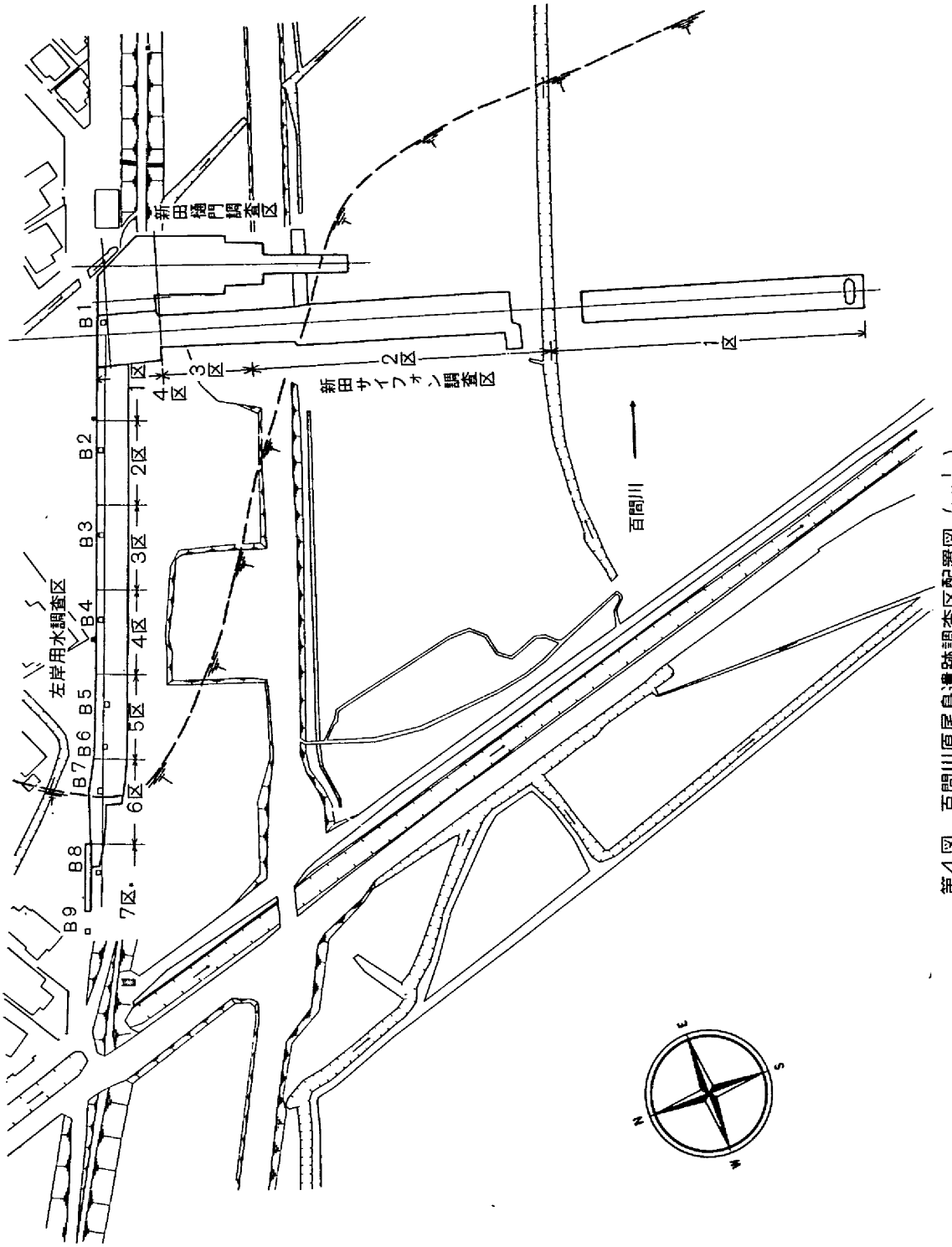
本格調査の経過

52年度の調査は前年度の第1次調査の成果を基礎に建設省の工事計画にそって実施することになった。このため調査員も4名から7名に増員され，原尾島遺跡の左岸用水路部分（1060㎡）（浅倉・江見担当），新田サイフォン部分（770㎡）（葛原・伊藤・柳瀬・中野・内藤担当），新田樋門部分（700㎡）（伊藤・中野担当），沢田遺跡の低水路部分（6150㎡）（伊藤・柳瀬・浅倉・江見・中野・内藤担当），右岸用水路部分の遺跡確認調査（浅倉・江見担当）及び発掘調査（700㎡）（松本・内藤担当）の調査を実施した。以下，調査区ごとにその経過を略記する。

左岸用水調査区　　調査は当地区の遺構の存在の有無，及び状況の確認のため，ボーリング（以下Bと呼ぶ）による方法を採った。まず調査位置の確定のため，新田サイフォンのセンター上に一辺2mのBを設定し，センターから90°振って基準線を引いた。そして20m間隔で同じ規模のBを設定し



第3図　百間川原尾島遺跡周辺地形図



第4図　百間川原尾島遺跡調査区配置図（$\frac{1}{1,500}$）

て掘り下げ，土層観察を行った。全体に共通の基本的な層序は，表土・床土・包含層（50～60㎝の茶褐色粘質土層）と続き，その下が黄褐色砂質土基盤層であった。合計９Ｂを掘り下げた結果，包含層は第７Ｂまで認められ，微高地の端部は第８Ｂの付近にあることが判明した。

以上の結果をもとに，本調査は重機を導入して表土及び盛土（合計約50㎝程あった。）を除去して実施することとなった。その後，建設省の河川幅杭を基準として20ｍ毎に区を設定し，新田サイフォン調査区側から１～７区とした。調査範囲は当初堤防下を含めていなかったため幅７ｍの左岸用水建設幅のうち3.5ｍしかなかった。予定調査区全体の長さは，Ｂの結果から150ｍを予定していたので７区に区分できたものである。以後調査終了まで区割りに変更はない。

７区はあまりにも民家に近く，振動等の影響が大きかったため，全面調査をトレンチ調査に切り換えた。また調査の時期が田植え時期と重なる部分については，隣接水田の水もれの心配から調査を１・２区から５・６区に振り換え，それが終了した時点で一時調査を中断した。

そして，１・２区については，隣接水田の水落しの時期になって調査を再開したが，その途中から堤防工事が始まって堤防下の調査も追加された。したがって，この時点で左岸用水調査区は幅3.5ｍから幅７ｍに拡張し，１区の一部を新田サイフォン調査区に吸収合併された。調査は約５カ月を費したが，このことは調査区の遺構密度が高かったことと合わせて，工事計画と調査時期とのずれ，あるいは，隣接水田との関連等による予期せぬことでの調査の延滞をまねいたものである。

新田サイフォン調査区　　新田サイフォン調査区は，百間川の左岸から右岸を横断する幅約７ｍ，全長約200ｍの調査区である。

調査区が長細い為，51年度の調査着手段階において，中央を流れる用水路と，左岸の工事用道路端を目安にして，調査区設定を行った。第１区は右岸から中央用水路まで，第２区は中央用水路から左岸工事用道路下まで，第３区は左岸工事用道路と左岸堤防の間である。

51年度は第１区と第２区の一部（中央用水路から左岸工事用道路間の上層遺構）の調査を行った。また第３区については２ｍ×10ｍの範囲を試掘し，微高地を確認した。52年度は51年度に引き続いて第２区下層の調査と第３区の全面調査にはいった。その結果，３区で確認された微高地は，第２区の工事用道路寄りのところで下がることが判明した。このため２，３区を横断する工事用道路下も調査の必要が生じ，重機による道路除去後，継続して調査を行った。

出水期の終わった11月になって，左岸用水との間の堤防が除去され，この堤防下の地区を第４区として，新田樋門の堤防下，左岸用水の調査と同時に調査を実施した。

新田樋門調査区　　新田樋門調査区は新田サイフォン調査区の南に隣接する。発掘調査部分は堤防下および河川敷に当たる。調査は堤防掘削の関係で，先に河川敷の部分から実施した。調査区の設定は，工事予定部分が変形のため基本的にはおこなわず，建設省の新田排水樋門部中央線を基軸線とした。なお堤防下については，新田サイフォン調査区の４区（堤防下）と接続するため，新田サイフォン調査区の割り付けにならった。

調査は，調査範囲内の工事用道路部分については重機の導入により，盛土及び耕土を除去したのち開始した。河川敷部分は後世の溝，池などに削平されていたため遺構の残存状態がよくなかったが，

弥生時代後期の住居址や溝を中心とした弥生時代～平安，鎌倉時代に至る遺構を検出した。堤防下は，河川敷の調査終了と相前後して，堤防の掘削がおこなわれたのち再び調査に入った。この部分は遺構の保存状態は良好で，河川内と同様の遺構を検出し，12月末日に約2ケ月間の調査を終了した。

日誌抄

昭和52年

4月5日　前年度調査したボーリング地点を危険防止上埋め戻しを開始する。

4月6日　前年度調査を行っていた新田サイフォン調査を続けて再開する。

4月19日　ボーリングの埋め戻し終了。

4月20日　左岸用水部分の遺跡確認調査を開始。

4月28日　左岸用水部分はボーリング調査の結果，工事計画の大半が微高地であることが判明した。

5月6日　右岸用水路部分の遺跡確認調査を開始。

5月9日　新田サイフォン調査区，工事用道路部分（2区）の調査開始。

5月25日　右岸用水路部分の遺跡確認調査終了。一辺1.5m四方のボーリング33箇所及び地表面観察の結果，少なくとも7箇所の遺跡を確認するとともに5箇所の丘陵部分には全て遺跡が存在するものと推定された。

6月1日　左岸用水調査区調査開始。

6月11日　新田サイフォン調査。2，3区調査終了。

6月13日　沢田遺跡低水路部分の調査開始。

6月30日　左岸用水調査区の北側にあたる地権者から，発掘調査のために水田の漏水が激しいと通報を受ける。このため4区に土のうを積み上げ，水田に接する1～4区の調査を落水期の10月初めまで中断した。

8月11日　左岸用水調査区，1～4区及び堤防下を除き調査終了。

10月1日　左岸用水調査区の調査再開。

10月6日　新田樋門調査区調査開始。

11月2日　建設省は重機によって，左岸用水予定幅まで堤防の撤去作業を開始した。それに伴い左岸用水調査区は拡幅部分の約3mを追加調査し，合わせ，新田サイフォン調査区（4区）及び，新田樋門部の堤防下の調査を開始する。

11月11日　原尾島遺跡の工事予定部分は12月末までに明け渡す予定であったが，調査が遅れていたため沢田遺跡の調査を一時中断し，調査員及び作業員の応援を受ける。

12月8日　沢田遺跡の調査を再開する。

12月28日　左岸用水路，新田サイフォン，新田樋門の3調査区の調査終了。

昭和53年

1月5日　沢田遺跡の右岸用水部分の調査を開始する。

3月31日　沢田遺跡右岸用水調査区調査終了。（沢田遺跡は，今年度調査の6150㎡を終了し，4月

以降も継続される。)

対策委員会記録

本格調査における対策委員会は第1次調査の対策委員に再度依頼をし，52年度は6回開催した。そのうち4回が今回報告にあたるものである。以下，その内容を略述する。

6月11日，第1次調査の成果に基づき，今年度発掘調査部分の検討及び新田サイフォン調査区の発掘調査状況報告を行った。この結果後日岡山県遺跡保護調査団から以下の要望書が建設省中国地方建設局及び岡山県知事宛に提出された。

昭和52年7月26日

殿

岡山県遺跡保護調査団

委員長　　水　内　昌　康

岡山県百間川改修工事に伴う遺跡問題についての要望

昭和51年以来，旭川放水路（百間川）改修工事に先立つ遺跡発掘調査が岡山県教育委員会によって行われております。私たち岡山県遺跡保護調査団は，百間川遺跡保護対策委員会からの報告に基づき，種々討議した結果，幾多の問題をかかえていると判断し，次の点を要望いたします。

1.　改修工事ならびに終了後の土地利用の全体計画を示していただきたい。

2.　工事にかかる予定の遺跡は外すよう最大限の努力を払っていただきたい。

3.　現在実施されている発掘調査は，期間，費用の点で大きな制約をうけているようであるが，十分な調査ができるよう配慮していただきたい。

4.　遺跡の所在する部分での跡地利用施設の建設にあたっては，遺跡保存を前提とした計画を立てて，前もって県民に示していただきたい。

以上の諸点について貴　　の回答を早急に下さることを要望いたします。

上記の要望に対し，昭和54年1月24日には岡山県遺跡保護調査団，岡山県教育庁文化課，建設省岡山河川工事事務所，土木部河川課の関係者が集り，「百間川改修事業並びに埋蔵文化財の打ち合せについて」の会合が開かれた。会議においては建設省による百間川改修の全体計画が説明され，それに対し，岡山県遺跡保護調査団は改修工事の必要性は認めるが，遺跡の保護にも教育委員会との協議のもとに十分留意をしていただきたい。特に調査に際しては十分調査が出来るよう配慮してほしい。また，洪水敷内に現状保存される遺跡については破壊のないよう十分な配慮をしていただきたい等の再度要望が出された。

8月6日　1．左岸用水調査区，新田サイフォン調査区，第2微高地低水路部分の発掘調査状況の報告。2．今後の調査の問題としてa．微高地端部の下りの部分の調査方法，b．機械力の許容範囲，c．左岸用水調査区の調査などの検討を行った。結果，2aに関しては調査区範囲をいっぱいに掘り下げる事は不可能である為，安全を保てるだけの十分な勾配を持って調査を進めることと，bに関し

ては遺構を破壊する可能性のない耕作土については重機による表土除去も止むを得ないだろうなどの意見が出された。cについては当調査区は水田と隣接していることから水田の湧水が激しい為，調査は一時中断するに至った事情の説明を行った。また，第2微高地調査区からは水田遺構と推定されるものが検出されており，充分に検討しながら調査を進めるよう意見が出された。

10月7日　第2微高地調査区の発掘調査状況報告及び，今後の調査計画，調査区名称などの検討を行った。現在呼称している調査区名は地図上のどの部分にあたるのか判然としない為，字名をとる方法もあるかとの意見が出されたが，この事に関しては後に詳述する。

12月8日　左岸用水調査区，新田サイフォン調査区，新田樋門調査区の発掘調査状況の報告を行い，今後の計画をしては，上記調査区を工期にあわせ12月末には終了させ，1月からは第2微高地の低水路部分及び右岸用水部分を中心に調査を進める予定であることを説明した。

2月18日　第2微高地調査区及び原尾島右岸用水調査区の発掘調査状況報告を行う。

3月29日　第2微高地調査区及び原尾島右岸用水調査区の発掘調査状況報告ののち，来年度以降の調査区においては基盤層に近い層から炭とともに縄文時代晩期の土器片が出土する箇所があり，充分に調査を行うよう意見が出された。

調査および報告書作成における問題点

百間川遺跡の本格調査は昭和52年4月に7名の調査員で開始して以来，3年の歳月が過ぎようとしており，この間に調査員も倍近い12名が連日発掘調査を行っている。ここでは昭和52年度調査および今報告に至るまでに起きた，いくつかの問題点を示しておきたい。

調査における問題点

(1)　河川改修事業は地域住民の生命・財産におよぼす影響が著しく，また流域住民の要望により実施されるものである。百間川改修事業は構想以来30年の風雪を終えて，ようやくにして着工されたもので，早期完成が待たれている。改修工事の内容は，低水路（幅80m）を掘削新設し，堤防（幅30m）を増強するといういわば，新しい河川を作るといっても過言でない大規模なものである。したがって埋蔵文化財発掘調査は対象地（工事により掘削される面積）が約80,000㎡となり発掘調査は河川改修工事の特殊性格から工事に支障をきたさない期間，約5年間で実施することになった。

問題点として，(1)は，本来盛土工事であっても恒久的施設である場合には，発掘調査の対象地となり，百間川改修工事に伴う築堤地についても対策委員会等を含めて種々検討した結果，次に掲げる事由により発掘調査対象地から除外し，現状保存することにした。

1.　築堤工事は，護岸壁工事をせず一切掘削されない自然築堤で埋蔵文化財包蔵地に影響を及ぼさない。

2.　築堤にかかわる包蔵地推定面積は約60,000㎡となり調査体制の期間が出来ない。

3.　寛文年間に当初築堤された一部の発掘調査を実施したが保存状況は非常に良好であった。

(2)は，原尾島遺跡第1微高地部分においては今改修に伴う附帯工事で左岸用水，新田サイフォン，新田樋門の3箇所が予定された。左岸用水の工事幅は7mで，そのうち3mは百間川堤防内におよ

び，新田サイフォンおよび新田樋門においては堤防を横断するため，これら工事にかかる堤防下部分は発掘調査に入る以前に除去する必要があった。しかし堤防は河川法に基き，渇水期に入る10月以降でなくては除去することができず，工事もまた渇水期でないとできないという事情から，調査は分断して行わざるを得ない状況であった。

遺跡名について

百間川遺跡はかつて小規模な発掘調査及び国道2号線工事の際に周知されたもので，それぞれ百間川A地点及び百間川B地点と呼称されてきた。しかしこれら両遺跡は第1次調査の結果，A地点は岡山市原尾島の北東端から南東に延びる第1微高地上に立地し，B地点は岡山市沢田から同原尾島にかけて広がる第2微高地に立地するであろうということが判明した。ところが，その後低水路部分及び右岸用水部分の調査が進行するにつれ，大きく第1，第2微高地と呼称していたものが，細かく分かれたり，右岸用水部分から新たな微高地が検出されたり，さらにそれら大きな微高地間には河道が走る部分と水田遺構が検出される部分があるなど，複雑に遺跡が関連しあっていることが判明してきた。

一方，対策委員会において，第1次調査に使用した第1～第3微高地という呼称は問題があり，何らかの方法，たとえば字名を利用してその所在地が明確になるような遺跡名を付ける必要があるのではないか，との意見が出された。このため調査員及び対策委員会等の検討の結果，百間川改修に伴う工事で明らかにされた遺跡については，その頭に百間川と付し，第1次調査において第1微高地と呼称していた部分は調査上，岡山市原尾島の北端から国道2号線百間川橋脚付近までを原尾島遺跡と呼び，それから東，第2微高地を中心として岡山市沢田までを沢田遺跡と呼ぶことにする。そして遺跡内の微高地群及び水田遺構等は，調査区あるいは検出の順に番号をつけていくことにした。たとえば今回報告の左岸用水，新田サイフォン，新田樋門の各部分はいずれも百間川原尾島遺跡第1微高地の一部分にあたる。また第3微高地は兼基遺跡（註17）と呼称し，この他新しく発見された遺跡においても同様の方法で遺跡名を付していきたい。

時期区分について

近年，岡山県南部においては，考古資料が急増するなかで，弥生時代～古墳時代前期にかけての編年試案（註18）がいくつか提示されており，その時期区分も年々細かくなり，かつ修正されつつある。

一方，百間川河川敷内においては縄文時代中期～近世に至る遺物が出土しており，特に弥生時代～古墳時代前期にかけての遺物は圧倒的な量にのぼる。このため当遺跡群においてもこれら各地区出土の遺物を検討した上で，時期区分し，前記したものとの比較検討する必要がある。しかしながら調査は現在も進行中であり，また遺物の微細な点においてこれまで出されている各遺跡の編年案はそれぞれ若干の相違がみられることから，現段階では弥生時代～古墳時代前期にかけては百間川遺跡群に最も近接する雄町遺跡における編年案及び，備中ではあるが上東遺跡の編年案，さらに雄町遺跡の併行関係を参考にしながら大きく区分しておいた。なお，現段階でもより細分し得る遺構遺物があり，これは文中の中では古層，新層として標記しておく。以下，表について若干の説明を加える。

弥生時代前期をⅠ～Ⅲ，同中期をⅠ～Ⅲ，同後期をⅠ～Ⅳ，古墳時代前期をⅠ～Ⅲに大別し，その頭に百間川を付した。なお文中では百間川前期Ⅰは百・前・Ⅰ，百間川古墳時代Ⅱは百・古・Ⅱのように表記する。

百・前・Ⅰは当遺跡では現在構認されていないが，無軸木葉文を，百・前・Ⅱは壺形土器における削り出し突帯および，甕形土器の篦描沈線を，百・前・Ⅲは甕形土器の篦描沈線の多条化を目安とする。百・中・Ⅰは甕形土器の櫛描沈線を，百・中・Ⅱは従来菰池式と呼ばれていたものを，百・中・Ⅲは凹線文の盛行を目安とする。百・後・Ⅰは雄町7，8類及び上東鬼川市Ⅰを，百・後・Ⅱは雄町9，10類及び上東・鬼川市Ⅱを目安とする。百・後・Ⅲは長頸壺の最終段階と考え，百・後・Ⅳは甕形土器の擬凹線の出現を目安とする。百・古・Ⅰは甕形土器の櫛描平行沈線文の出現を目安とし，百・古・Ⅱは甕形土器の櫛

表1　編　年　対　比　表

時代		遺跡	百間川	雄町	上東・川入
弥生時代	前期	津島	百間川前期Ⅰ		
		門田	百間川前期Ⅱ	雄町1	
			百間川前期Ⅲ	雄町2	
				船山2	
	中期	南方	百間川中期Ⅰ	高田	
				雄町3	
		菰池	百間川中期Ⅱ	船山5	
				菰池	
				雄町4	
		前山Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前山東	
				雄町5	
		仁伍		雄町6	上東・鬼川市 0
	後期	上東	百間川後期Ⅰ	雄町7	上東・鬼川市 Ⅰ
				雄町8	
			百間川後期Ⅱ	雄町9	上東・鬼川市 Ⅱ
				雄町10	
		グランド上層	百間川後期Ⅲ	＋	上東・鬼川市 Ⅲ
		洒津	百間川後期Ⅳ	雄町11	才の町Ⅰ
古墳時代	前期	王泊六層	百間川古墳時代Ⅰ	雄町12	才の町Ⅱ
				雄町13	下田所
			百間川古墳時代Ⅱ	雄町14	亀川上層
					＋
			百間川古墳時代Ⅲ	雄町15	川入・大溝上層

描平行沈線文の退化及び壺形・甕形土器の丸底化を目安とし，百・古・Ⅲは川入・大溝上層出土の土器を目安にし，また当地方における須恵器出現以前の時期を呼ぶ。

なお，この時期区分は当遺跡群調査終了の時点で，弥生時代以外の時代も含め，改めて組み直し，それぞれの時代区分及び細分を行なう予定である。　（江見）

註

註14　葛原克人・松本和男・内藤善史『百間川遺跡第1次調査概報』岡山県教育委員会 1976

註15　鎌木義昌「第1編原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市役所1962

註16　国道2号線の橋脚工事によって発見された。

註17　兼基遺跡は註9において報告されているから百間川を頭に付することによって区別したい。

註18・正岡睦夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会，1972

・伊藤晃・柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告・第2集」岡山県教育委員会，1974

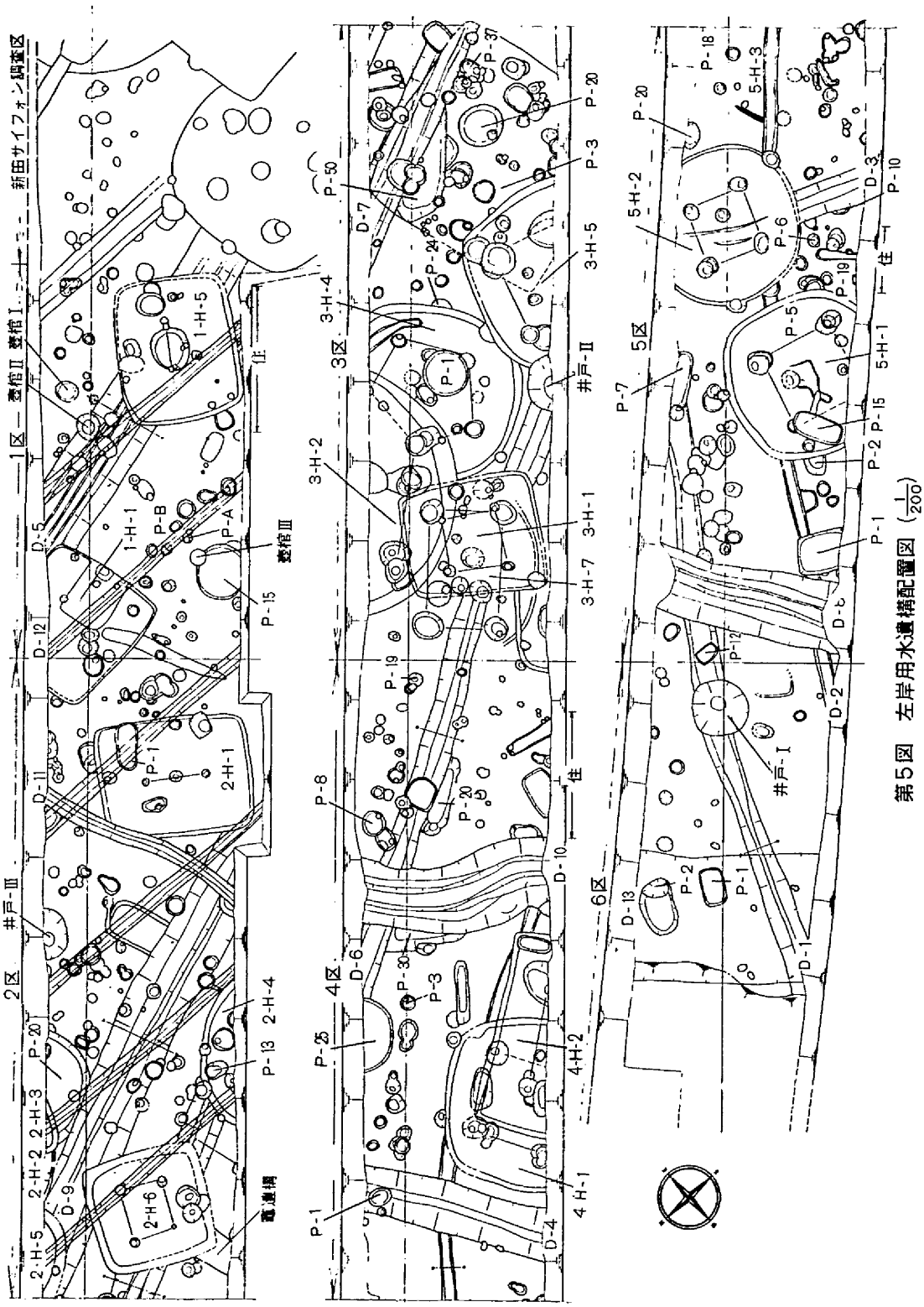
・間壁忠彦他「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報第10号』倉敷考古館1974

・出宮徳尚他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会1975

・柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会1977

・藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌第64巻第4号』1979

・高橋護「弥生土器」『月刊考古学ジャーナル3』1980



第5図　左岸用水遺構配置図（$\frac{1}{200}$）

第3章　各調査区の概要

第1節　左岸用水調査区

当調査区は百間川の左岸堤防にそった部分である。原尾島遺跡第1微高地の北西部にあたり，1～6区にかけて微高地が検出され，6区中央付近において，微高地の北斜面を確認した。

遺構は，1区から6区まで切られることなく重なり合って検出された。この調査区では，遺構検出の過程で平面及び断面の土層観察により，当初包含層と考えていたもののほとんどが何らかの遺構であるということが判明した。調査区の両壁の土層断面には，住居址あるいは，土壙など床土下から切り込まれて観察されるものもあったが，それらの平面での検出はなかなか困難であり，最終的には黄褐色砂質土基盤層あるいは基盤層近くで検出可能なものがほとんどであった。

検出できた遺構は，溝状遺構が20本余・住居址22軒・井戸状遺構3個，土壙（柱穴以外のもの）16個，柱穴状土壙多数である。溝状遺構は，弥生時代前期と判定できるもの2本，弥生時代中期と推定できるもの4本（うち2本は同じ溝と考えられる），弥生時代後期と断定できるもの3本，古墳時代初頭に比定できるもの1本，古墳時代後半以降のもの1本，中世と考えられるもの多数であった。住居址は，円形，隅丸方形，方形，長方形と種々様々の平面形態があり，柱穴を伴わないものも数軒確認されている。弥生時代後期に入るもの11軒，古墳時代前期に入るもの5軒，古墳時代後期に入るもの2軒，時期不明のもの4軒である。井戸状遺構は，弥生時代後期が1個，古墳時代前期のものが2個である。土壙16個の内訳は，弥生時代前期7個，弥生時代後期7個，古墳時代前期1個，古墳時代後期1個である。このうち弥生時代後期の壺棺を伴う土壙が3個ある。

遺物は，土器が縄文時代晩期～近世に至るものが出土している。中でも比較的多いのが弥生時代前期，同後期，古墳時代前期の土器である。その他，緑釉陶器，直弧文の付いた土器，土錘，石器，鉄器，分銅形土製品，銀環，ガラス製品等が出土している。（浅倉）

溝　状　遺　構

1）D－5

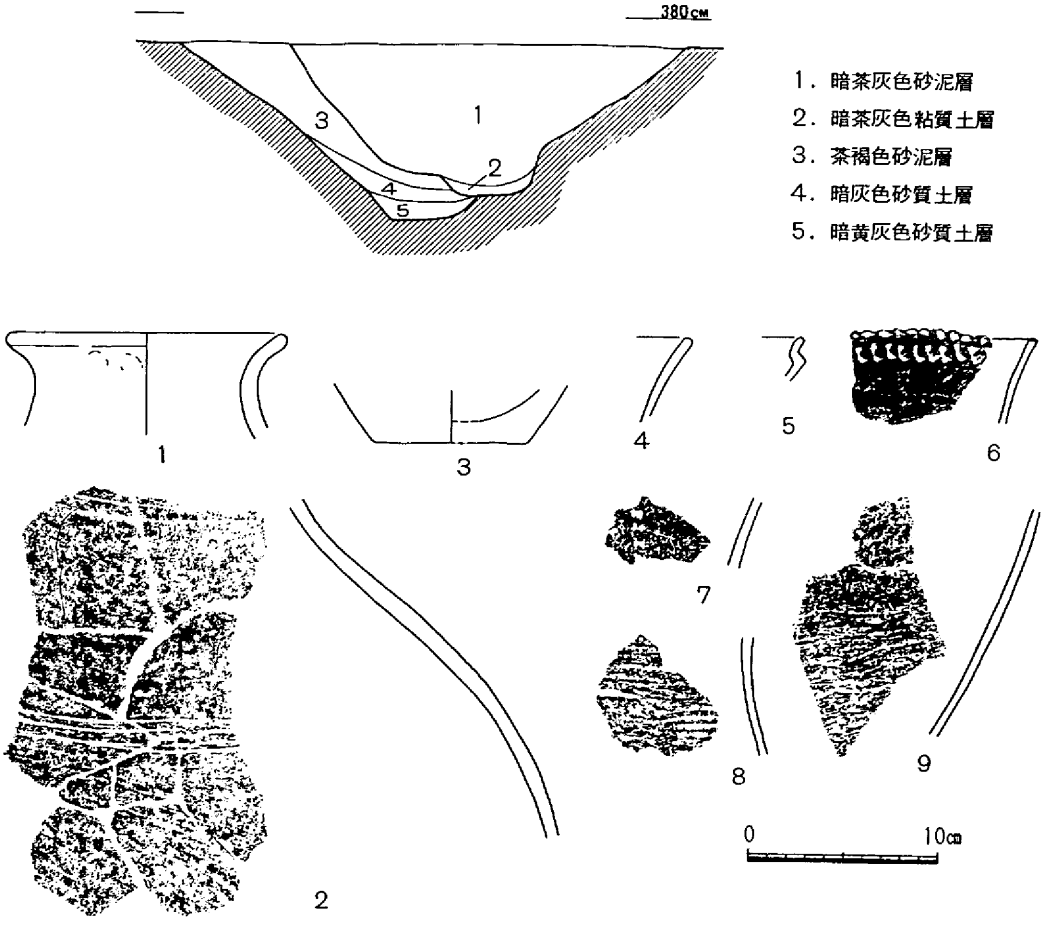
この溝は1－H－1，1－H－5の下に南北方向に検出された。断面図に示されるように，1区においては2本の溝が切り合い関係にある。上位溝は幅約155㎝，深さ約60㎝を測る。溝内の堆積土はほぼ単一土層を示し，わずかに底から5㎝くらい上までは粘質土の堆積が見られるのみである。底の幅約40㎝，深さ約20㎝にわたる凹みの部分は，土層の堆積状態からすれば当初の溝が埋まってしまわないうちに底ざらえが行われた時の痕跡とも考えられる。下位溝は，図のように3層に大別できる

が，溝の機能が停止したのちあるいは自然流水による土層堆積の過程で廃棄され，完全に埋ってから上位の溝が新たに掘削された状況を示している。両溝の底部はそれぞれ海抜約3.1m，同約2.9mを示し，新田サイフォン，新田樋門両調査区に検出した溝底の高さから南流するものと考えられる。

遺物はおもに溝肩口あるいは壁に接して，縄文時代晩期土器片及び弥生時代前期土器片が少量出土している。他の時期の遺物は皆無であることから，溝の存続時期は弥生時代前期の中で考えて良いであろう。（柳瀬）

2） D－2

6区の南東隅から始まり，5区の中央部を北西から南東に直線で貫き，5区と4区の境で緩やかに湾曲し，4区を北から南へ下り，D－5の所で調査区外に出てしまう。長さ33.5m・幅40cm・深さ10cm，溝底は海抜3.6mを測る。黒色の粘質土で埋っている。遺物は，弥生時代前期の甕口縁部片と縄文晩期の鉢体部・底部片が出土している。そして切り合い関係は，弥生前期の5－P－1に切られ，同

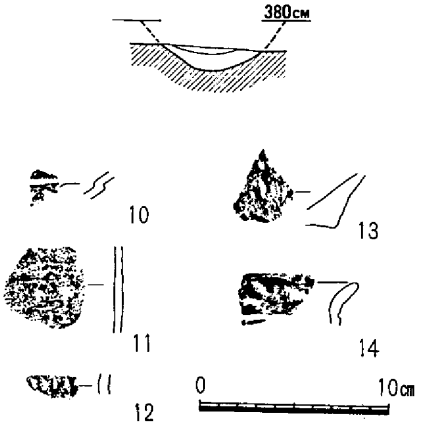


第6図　左岸用水D－5遺構断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

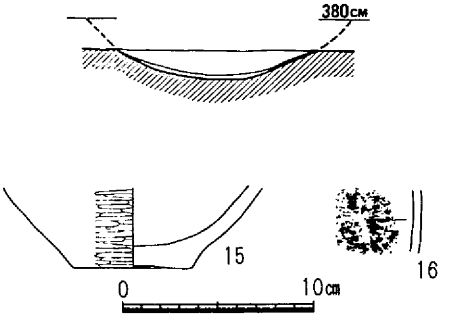
時期の5－P－3を切っていることから弥生前期の中に入るものと考えられる。新田サイフォン・新田樋門両調査区のどの溝と同じものか図上では判断し難い。

3）D－1

6区から5区にほぼ東西方向に伸びる。流れの方向は，西から東へと考えられる。現存の長さ22m・現存の幅80cm・深さ12cmを測る。溝底のレベルは海抜3.55mである。厚さ2cm程灰色粘土が底に堆積している。水が淀んでいたのであろう。遺物は，実測のできるものは弥生時代前期の壺底部と，縄文晩期の鉢体部があるだけで，時期を決めるほどのものは出土していない。D－6と同じ溝になる可能性が強い。　（浅倉）



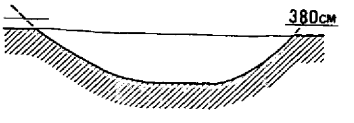
第7図　左岸用水D－2断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物



第8図　左岸用水D－1断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

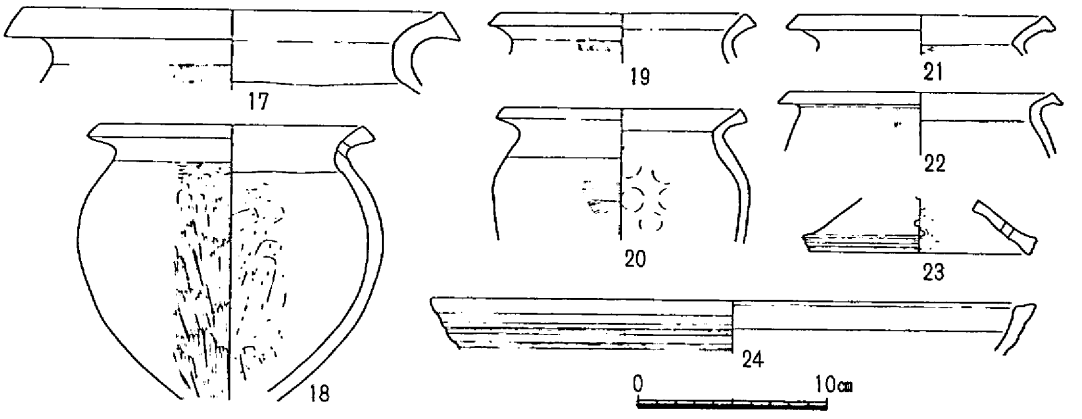
4）D－6

3区から4区にかけて検出されたもので，4－P－20及び30を切り，D－10及び3－H－1等に切られている。溝はほぼ南北方向に延びており，前述のD－2と平行している。流れの方向は微高地のあり方から南へ向かうものと思われる。断面はゆるく広がる「U」字状を呈し残存幅100cm，深さ20cm，溝の底部に海抜3.55mを測る。溝内には暗灰褐色粘質土が堆積していた。なお伴出遺物はいずれも破片で百・後・Ⅰのものが大半を占める。



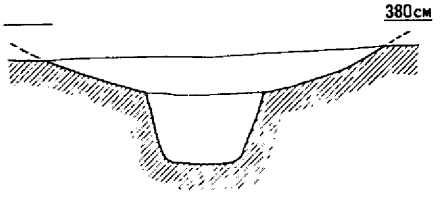
第9図　左岸用水D－6断面図（$\frac{1}{30}$）

当溝は伴出遺物が少なく，遺構の重複が激しい為時期を決定することは難しいが，遺溝の切り合い関係からD－10（百・後・Ⅳ）よりは古く，さらに3－H－4（百・後・Ⅰ）とは近位置にある関係から



第10図　左岸用水D－6出土遺物

当溝と併存する可能性は薄い。一方，溝は4－P－20及び30（百・前・Ⅱ）を切っている。これらのことから当溝は弥生時代中期に掘られ，百・後・Ⅰには埋没したものと推定される。なお，前述のD－1と堆積土及び溝底レベルがほぼ同一のことから，両者は同一溝と思われ，さらにこの湾曲した溝のあり方は，当微高地西側端部の形状を表わしているものと考えられる。



第11図　左岸用水D－7断面図（$\frac{1}{30}$）

5）D－7

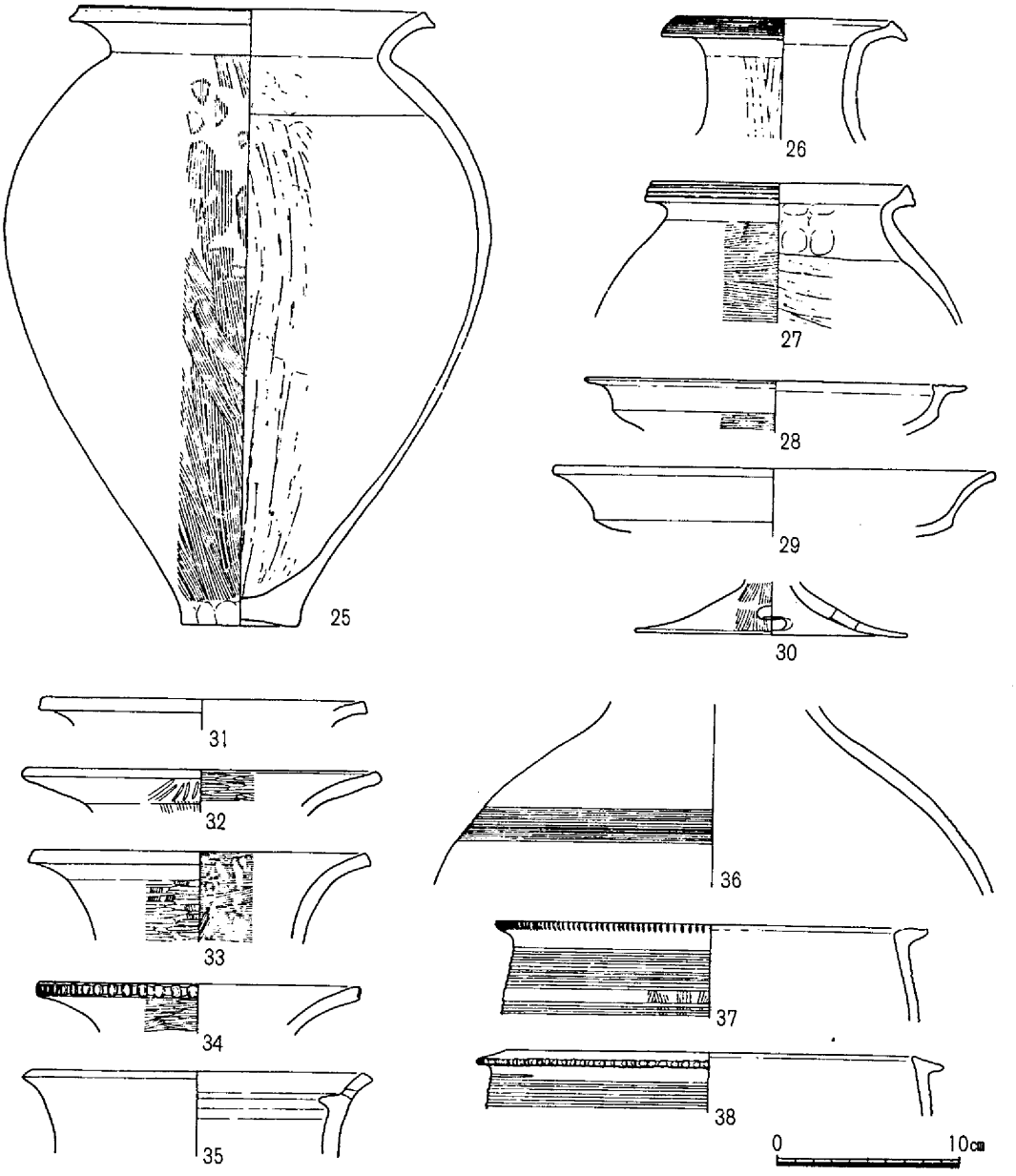
2区から3区にかけて検出されたもので，D－6と同様ほぼ南北方向に走向し，南へ流れるものと思われる。溝は中央部が一段低く掘り下げられており，最大現存幅130cm，深さ42cm，溝底は海抜3.25mを測る。溝内は上下2層に分かれ，上層は暗褐色粘質土が，下層は黒褐色粘質土が堆積しており，さらに下層上面にはマンガン粒の沈着が認められた。

遺物は上層肩部から百・後・Ⅰ～Ⅱ（**25～30**）が，下層から百・前・Ⅲ（**31～35**）が出土している。また，当溝においても他の遺構との重複が激しく，3－P－50（百・前・Ⅱ）を切り，2－H－4（百・後・Ⅰ）に切られている。

以上，遺構・遺物のあり方から，当溝は弥生時代前期以降に掘られ，百・後・Ⅰには埋没したと推定される。なお当溝は新田サイフォン調査区D－9及び新田樋門調査区D－7に続くものと思われる。

6）D－9

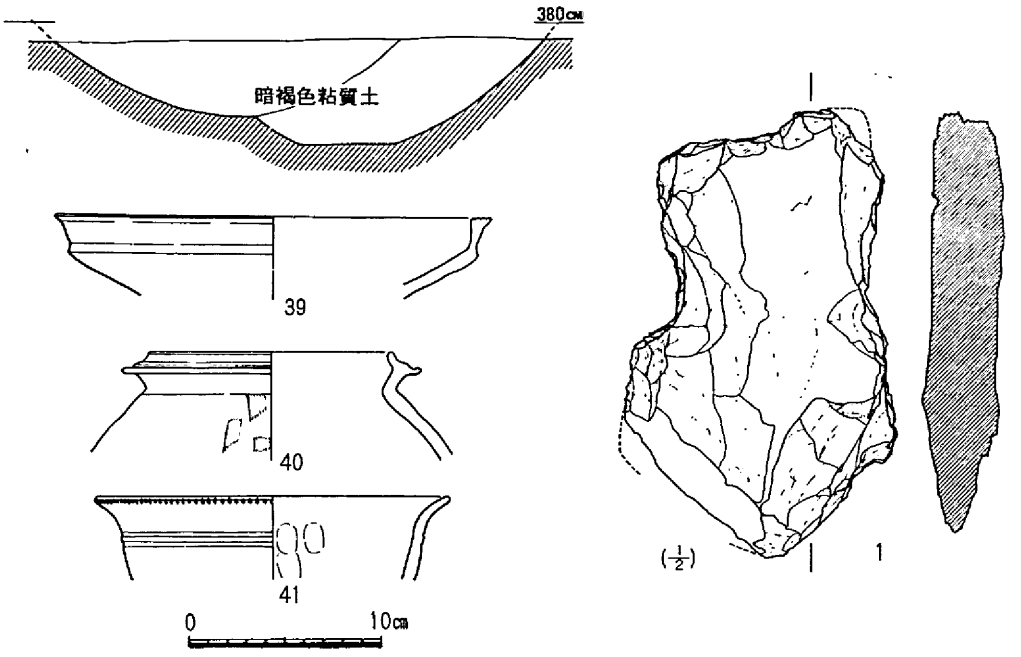
D－7の東に平行して走行するもので，前述の溝と同様，南流するものと思われる。2－P－20（百・前・Ⅲ）を切り，2－H－5（百・後・Ⅰ）に切られている。当溝は断面観察の結果2本の溝が重複していることが判明したもので，平面プランからは明らかに出来なかった。上位溝の推定幅135cm，



第12図　左岸用水D－7出土遺物

深さ30cm，溝底は海抜3.4m，下位溝の推定幅150cm，深さ40cm，溝底は海抜3.3mを測る。溝内には，上部溝に暗褐色粘質土が，下部溝に上部溝よりやや黒っぽい粘質土が堆積していた。

伴出遺物はいずれも破片で量も少なく，僅かに図示した4点が実測可能であった。弥生時代前期～同後期のものまで含んでおり石斧の欠損品も出土している。石斧1は粘板岩製で，刃部は半分欠損している。整形の為の加工は粗雑であるが，縁辺部及び刃部の調整は比較的丁寧である。両側のくびれ



第13図　左岸用水D－9断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

部は敲打によるつぶしを施している。

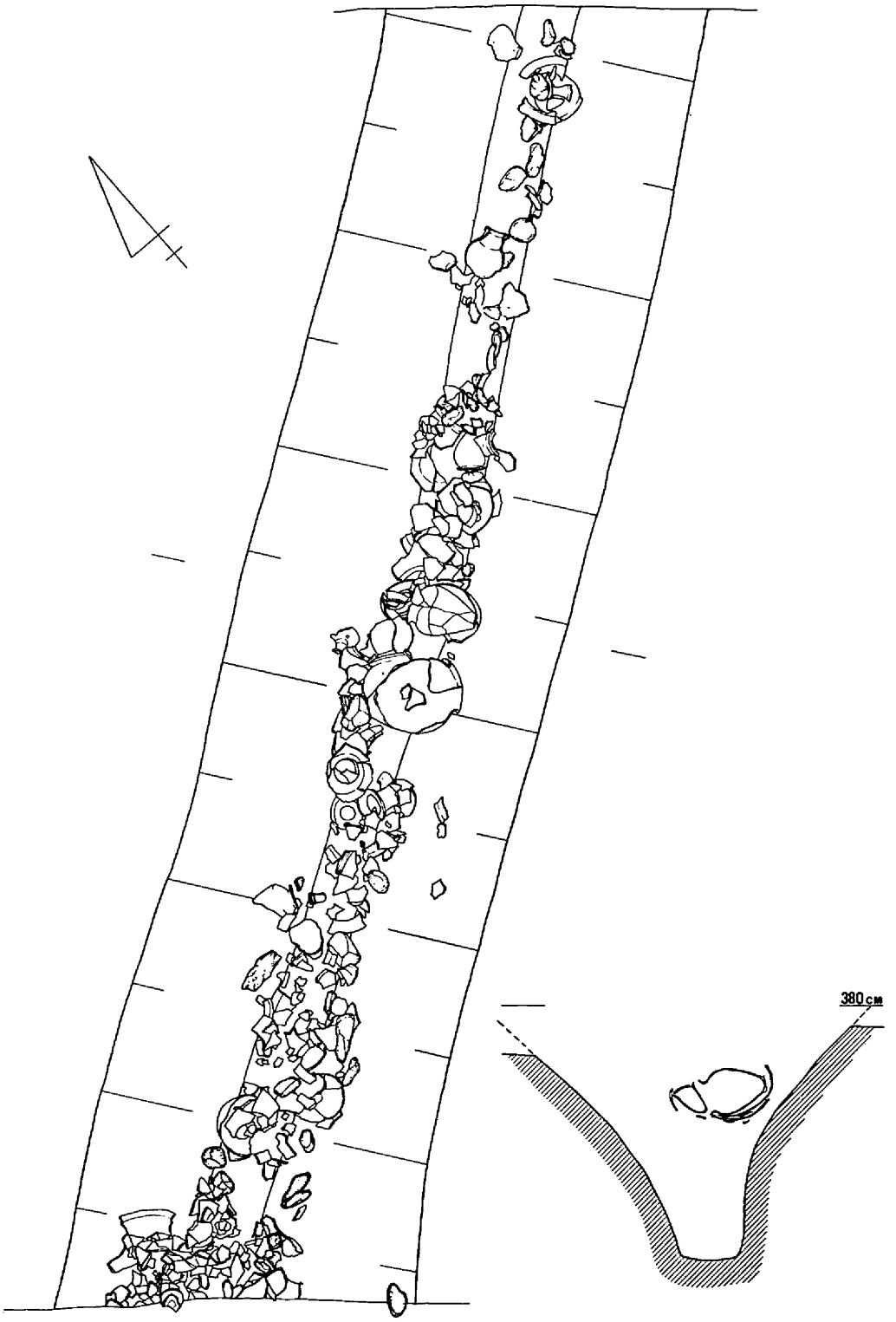
以上，遺構・遺物のあり方から当溝は前溝と同様弥生時代前期以降に掘られ，百・後・Ⅰには埋没したものと推定される。なお当溝は新田サイフォン調査区D－8，新田樋門調査区D－6に続くものと思われる。

7）D－4

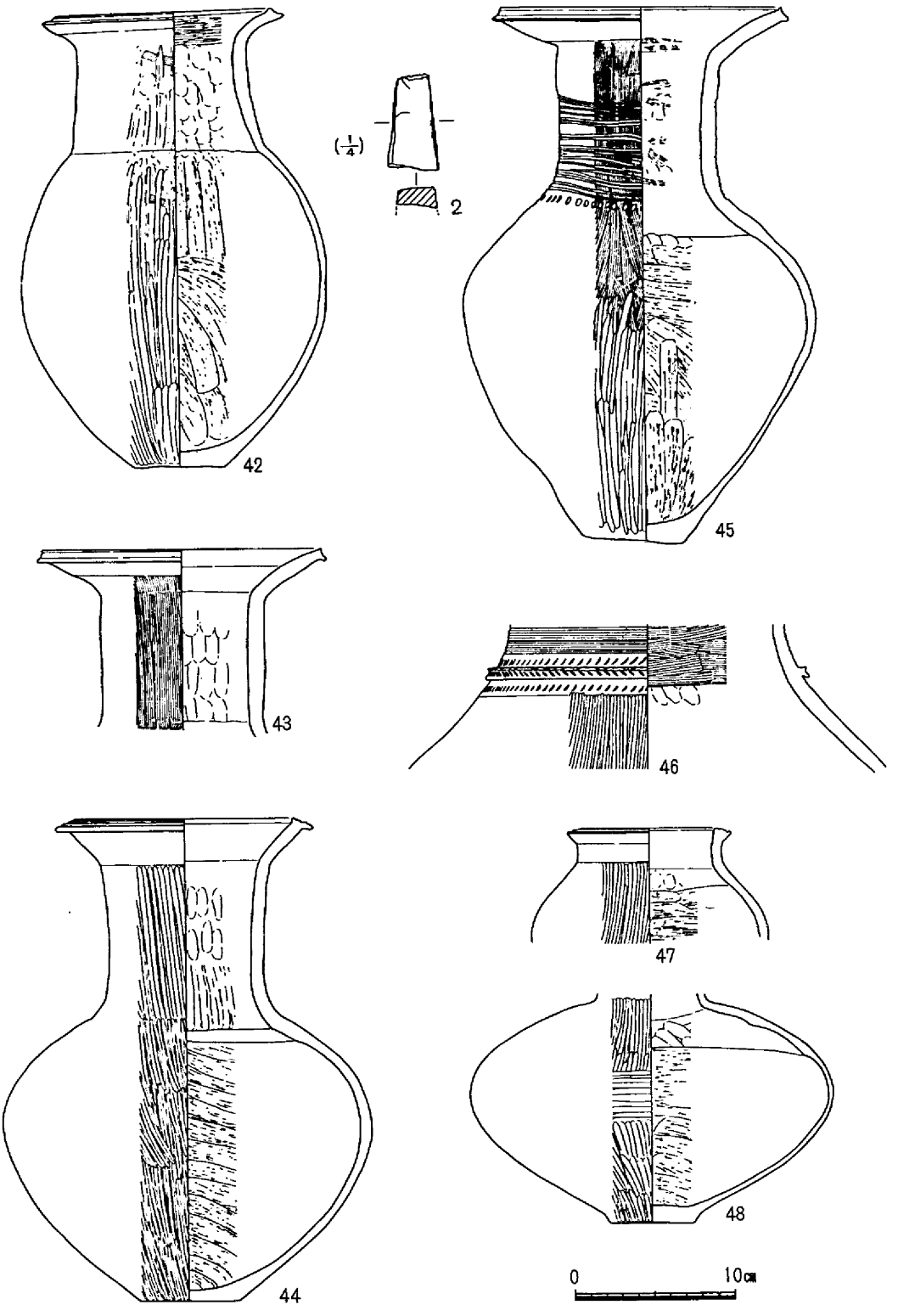
4区西端から検出されたもので，D－2（弥生時代前期）を切り，4－P－1（百・後・Ⅳ）に一部切られている。北東から南西に向かって流走していたものと思われ，前述してきた溝とは全く方向を異にする。断面は「V」字状に近い形態を呈し，現存幅140cm，深さ100cm，海抜2.6cmを測る。溝内は暗茶灰褐色砂泥が堆積しており，下部に向かうに従い粘質を増す。また，遺物堆積層の下部には最大幅10cmの炭層が堆積する部分も認められた。

遺物は溝の底部から上方約60cmの所から帯状に検出され，その大半が完形あるいは復原完形が可能なものであった。さらに器種毎に同様の特徴を持つもの（**42～109**）が多く，溝の埋没途中に一括放棄されたものと考えられる。なお，**110～116**はいずれも破片で流れ込みと思われ，**117～122**は4－P－1あるいは検出不可能であった後出土壙の遺物の可能性が強い。他に砥石**2**が出土している。下方及び裏面は欠損しており，上方も僅かに欠く。右側面は摂理面を利用し，他の2面に比べ磨耗度は小さい。

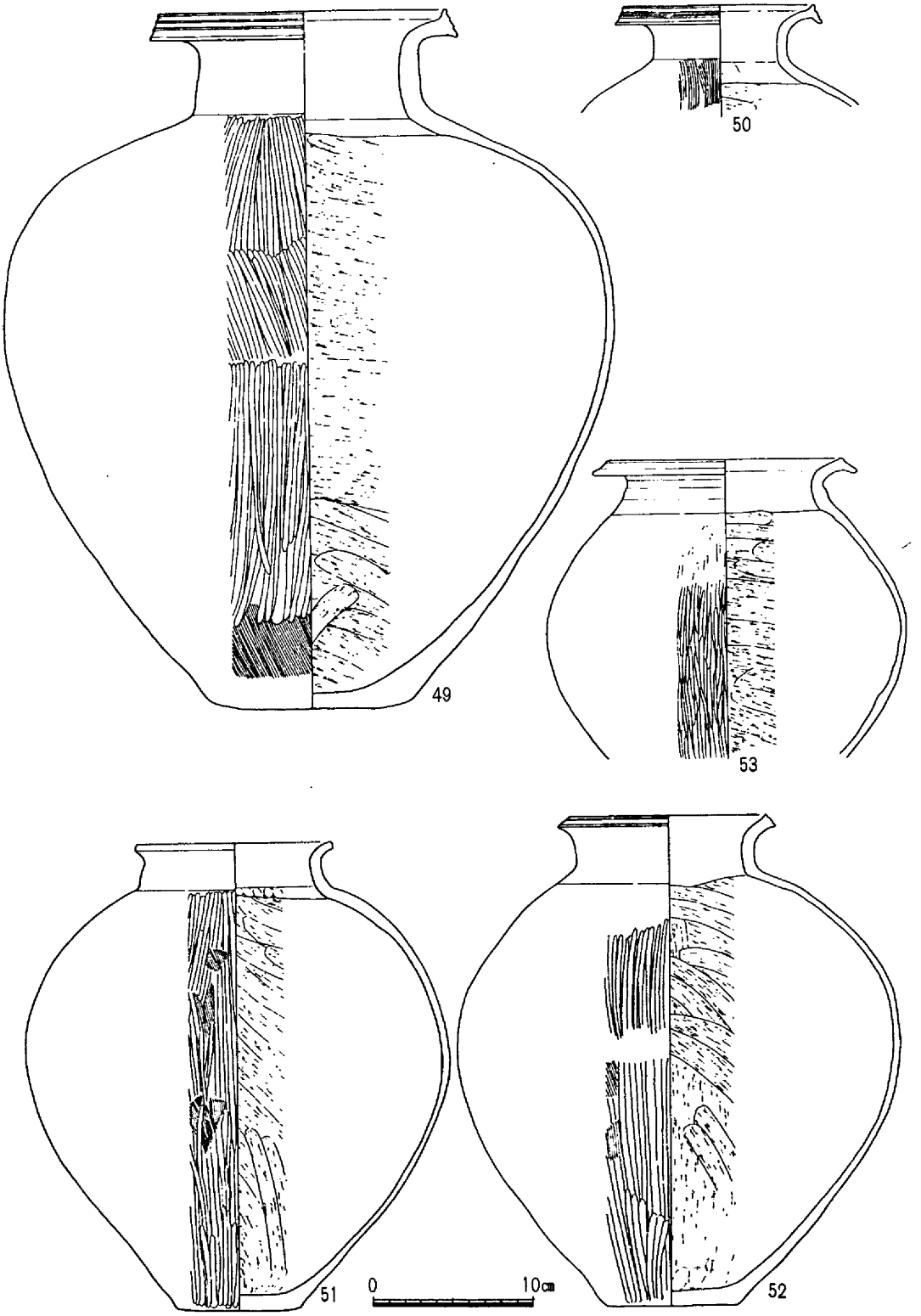
以上，遺構・遺物のあり方から開溝の時期は明らかでないが，百・後・Ⅱに埋没したものである。



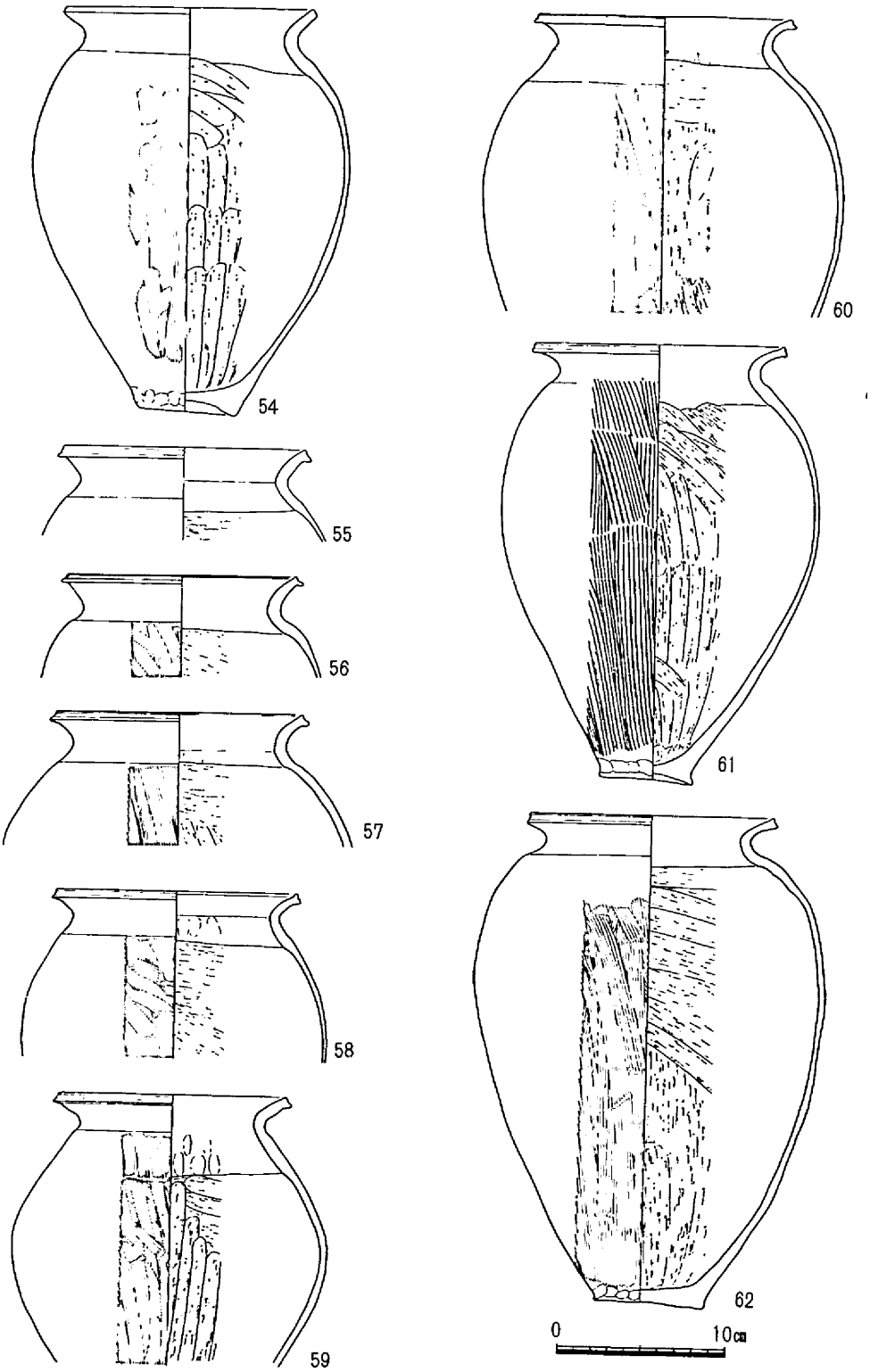
第14図　左岸用水D－4遺構平・断面図（$\frac{1}{30}$）



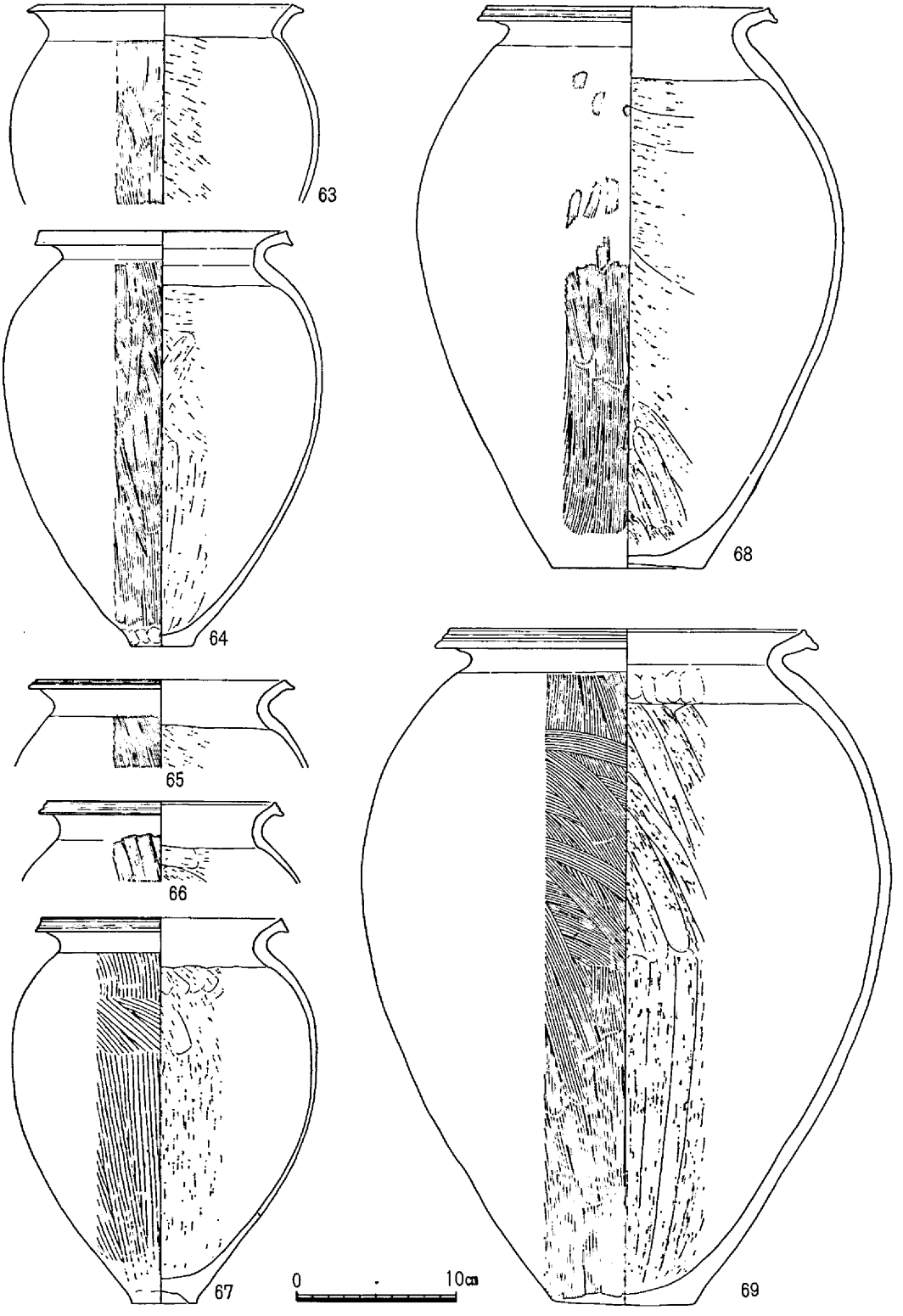
第15図　左岸用水D－4出土遺物（1）



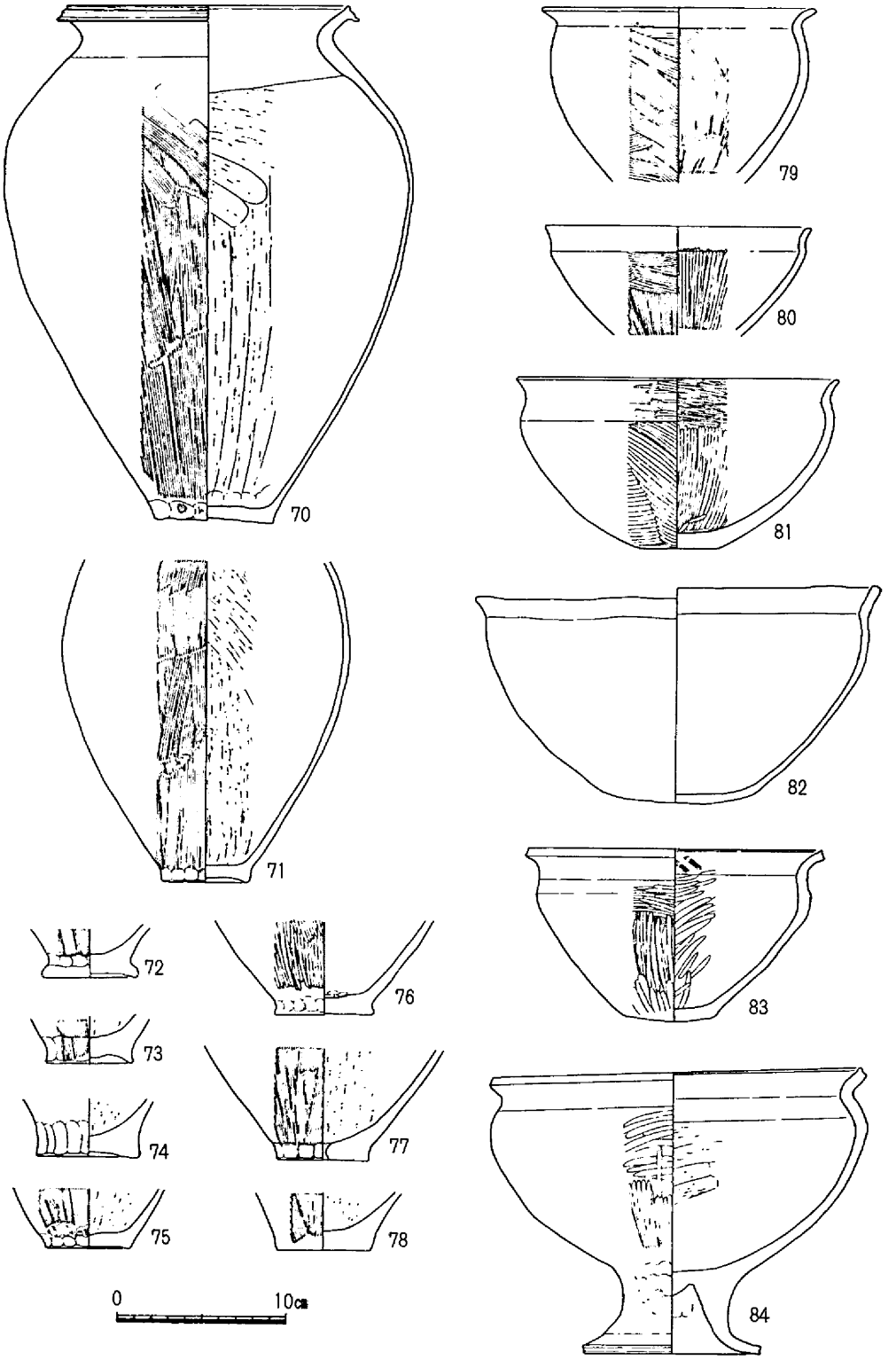
第16図　左岸用水D－4出土遺物（2）



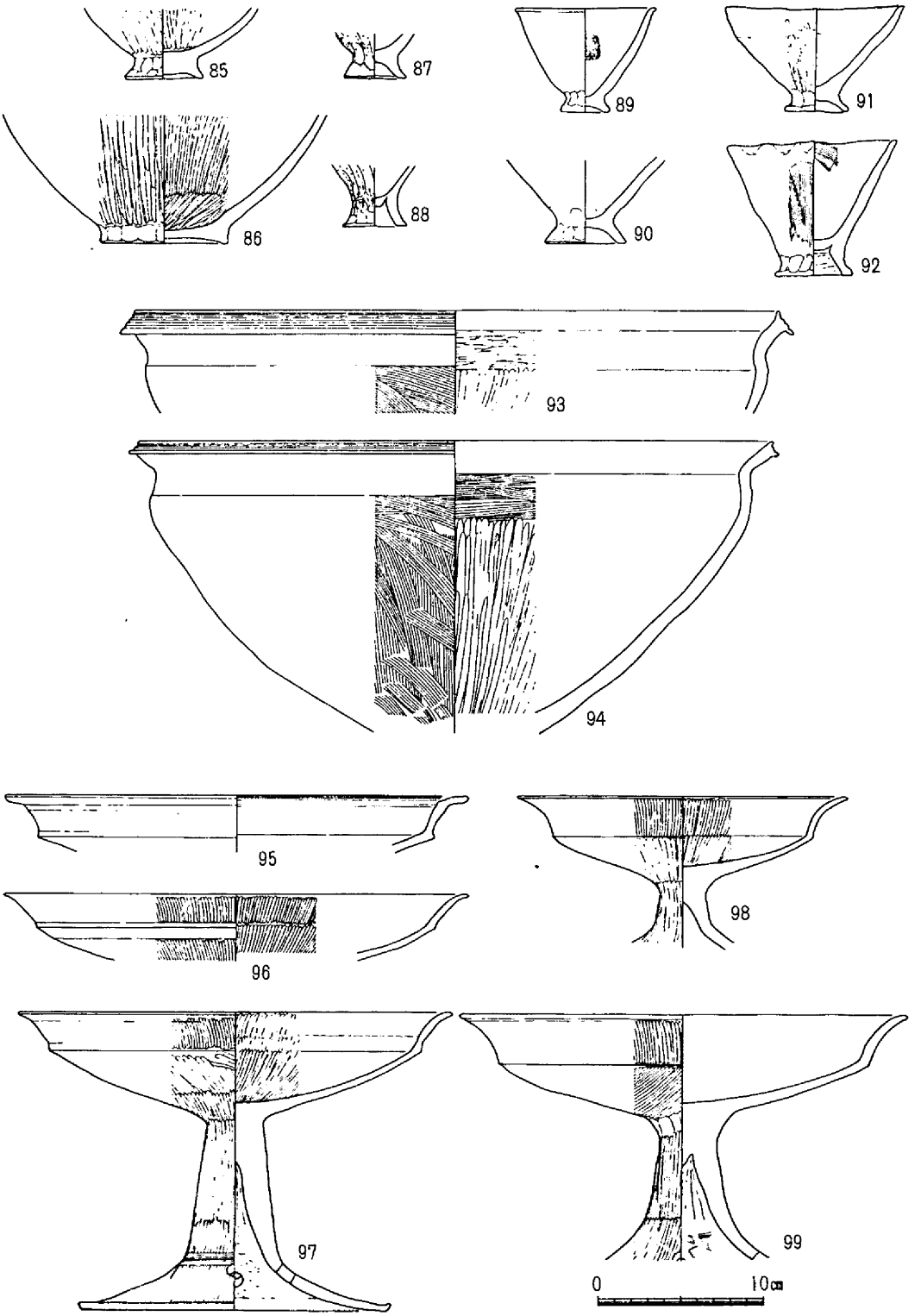
第17図　左岸用水D－4出土遺物（3）



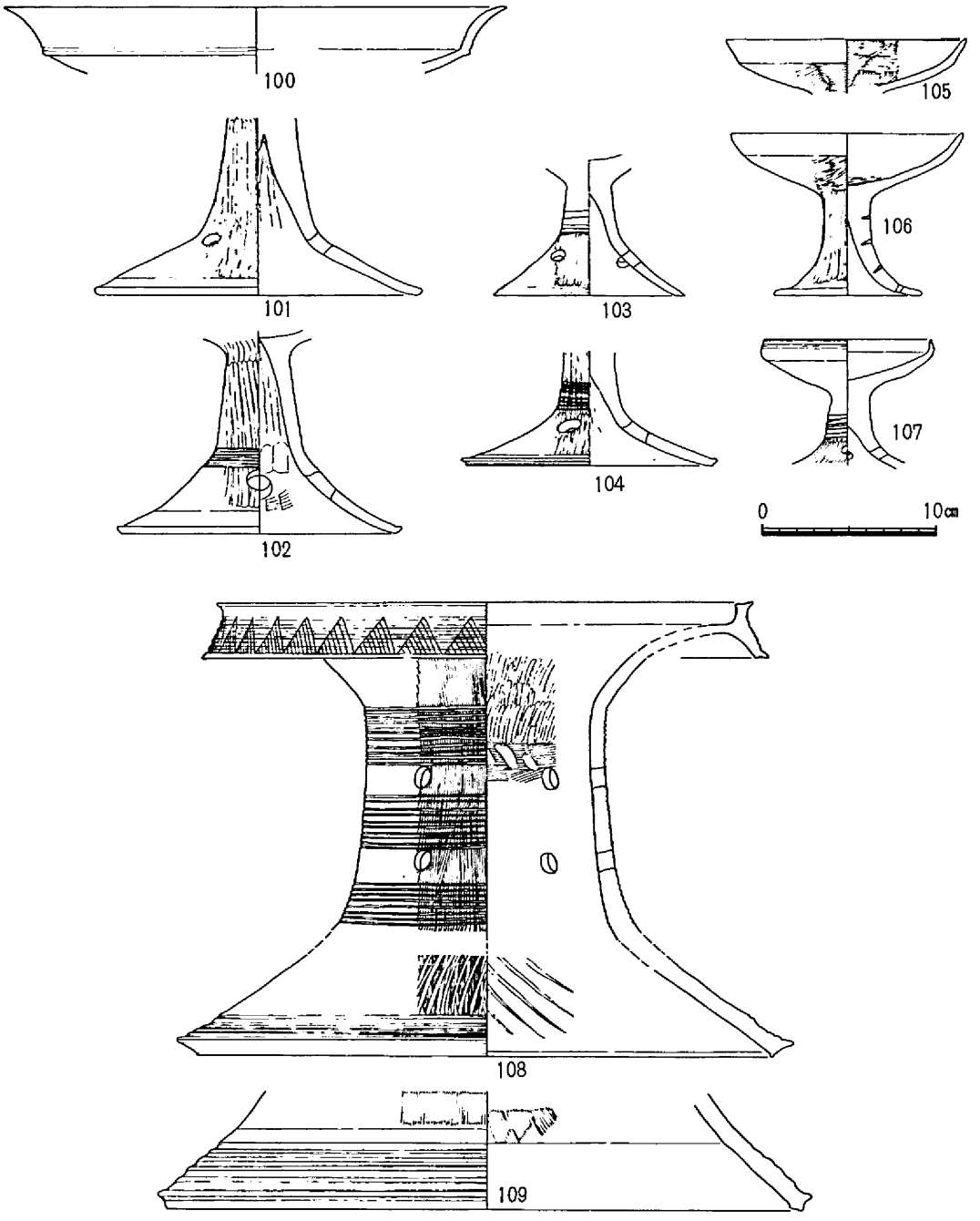
第18図　左岸用水D－4出土遺物（4）



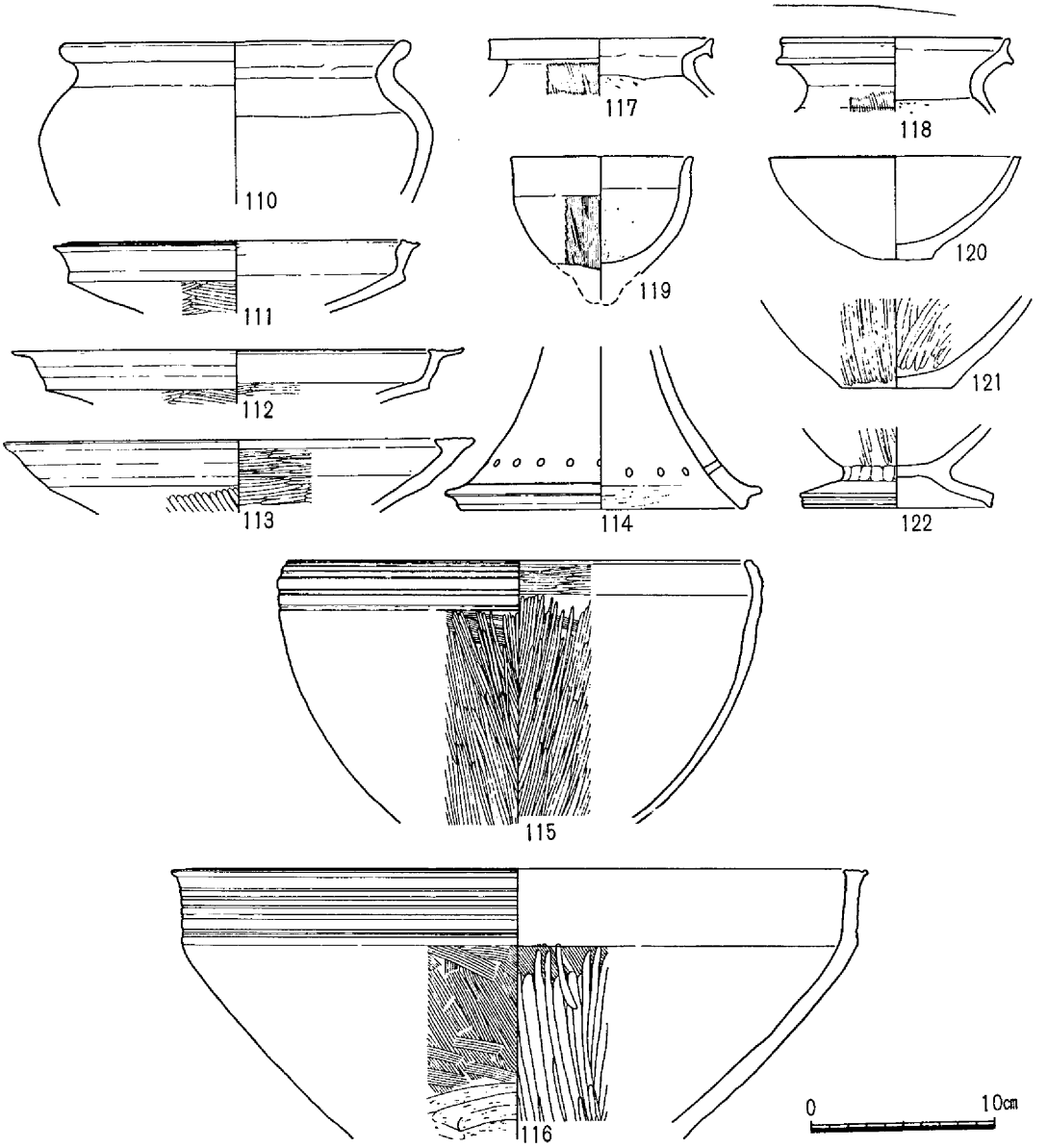
第19図　左岸用水D－4出土遺物（5）



第20図　左岸用水D－4出土遺物（6）



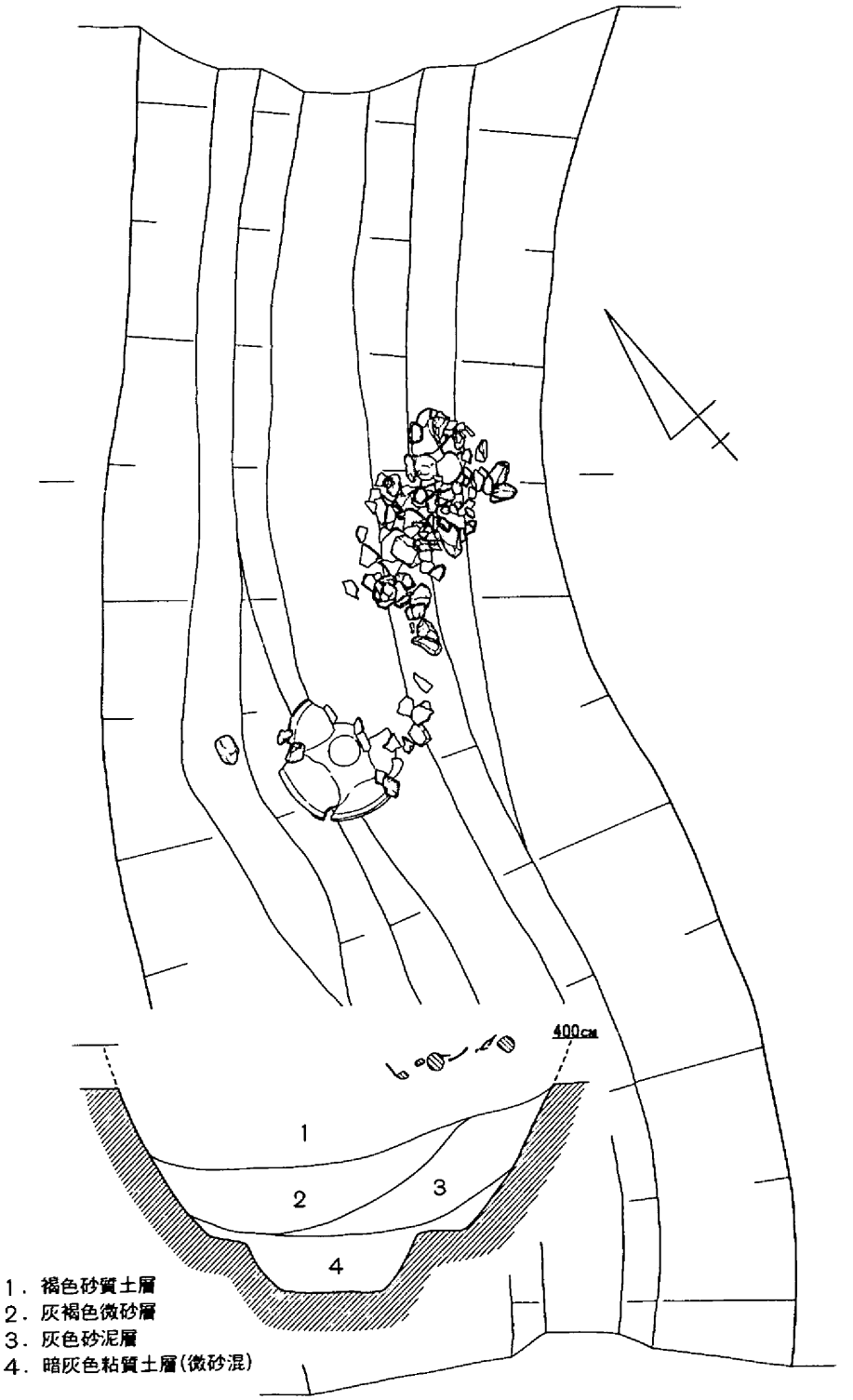
第21図　左岸用水D－4出土遺物（7）



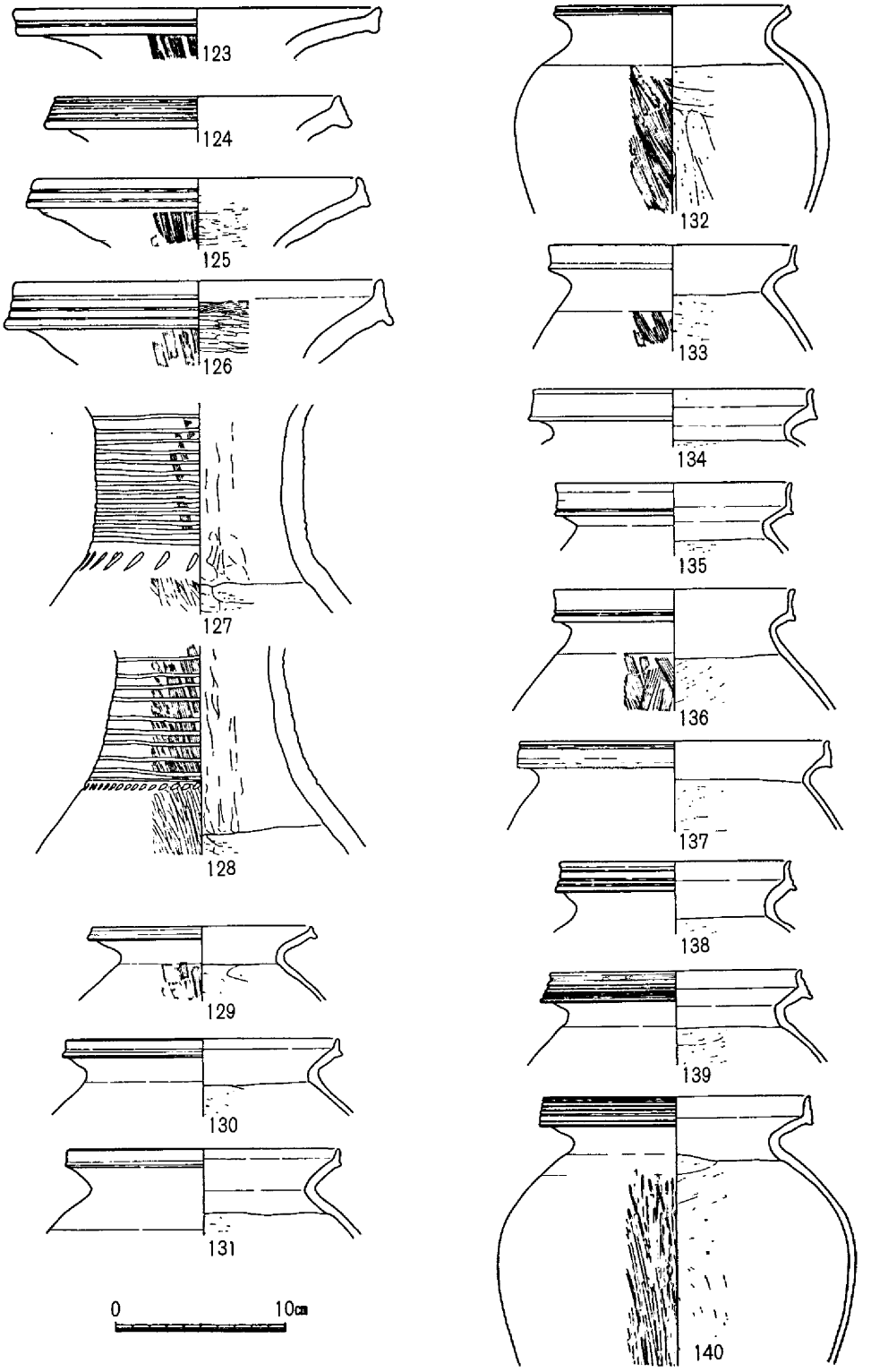
第22図　左岸用水D－4出土遺物（8）

8）　D—10

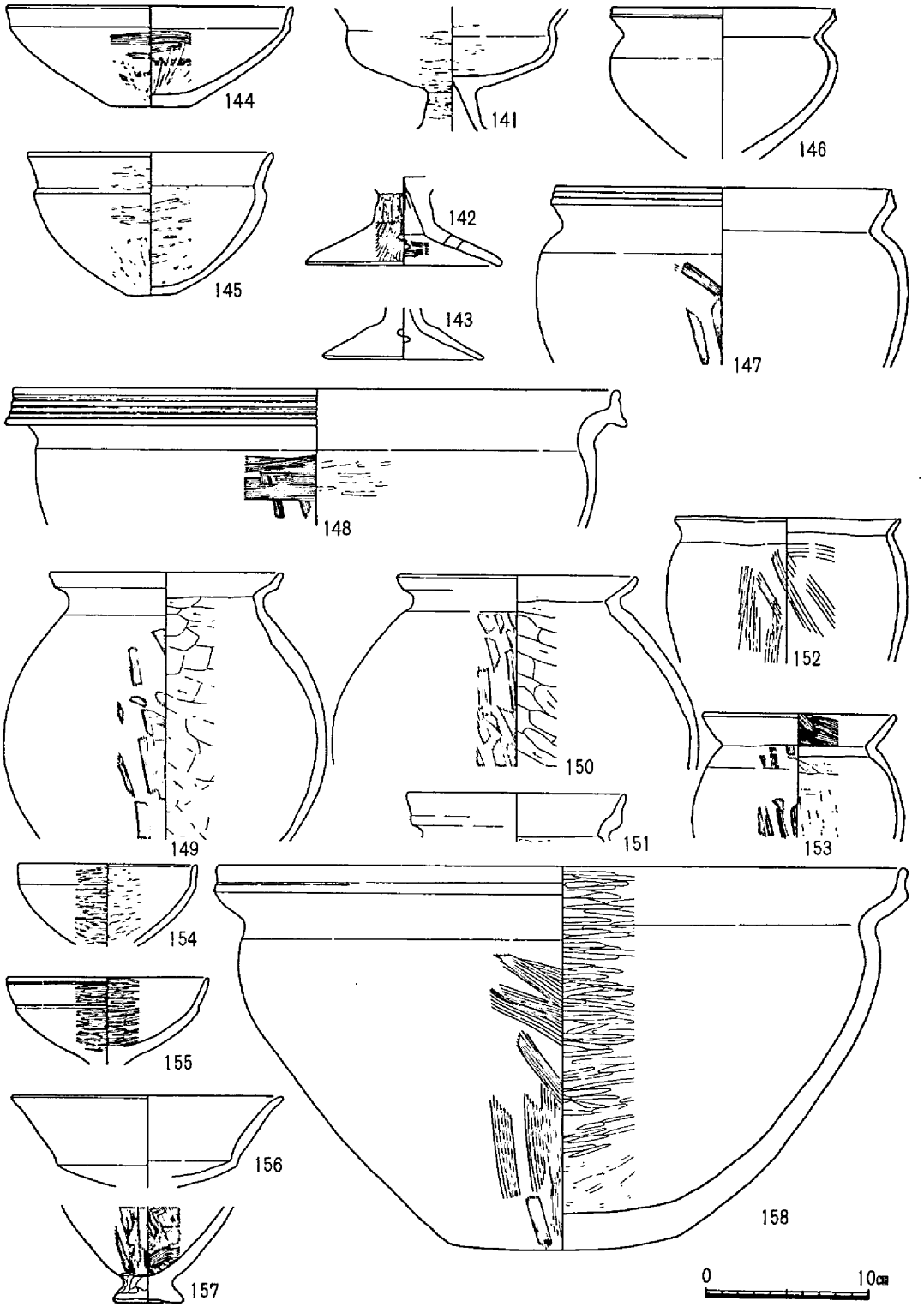
4区中央付近から検出されたもので，前述のD—4から東へ約9 mの所に位置する。北東から南西に向って流走すると思われるが，調査区中央でやや東へ蛇行する。断面は逆台形状を呈し，中央部はさらに一段深く掘り下げている。現存幅180cm，深さ90cm，底部は海抜2.95mを測る。溝内堆積は2層が砂層で，3，4層はやや粘質をおびていた。遺物は**123～148**が主に3，4層から出土したもので，いずれも破片である。**149～158**は1層上面から出土したもので，**158**のように完形になるものも



第23図　左岸用水D－10遺構平・断面図（$\frac{1}{30}$）



第24図　左岸用水D－10出土遺物（1）



第25図　左岸用水D－10出土遺物（2）

あり，これら上層の遺物は洪水によって流れ込んだ可能性が強い，

以上，遺構・遺物のあり方から当溝は百・後・Ⅱ以後開溝され，同Ⅳには洪水によって埋没したものと考えられる。

9）D－8

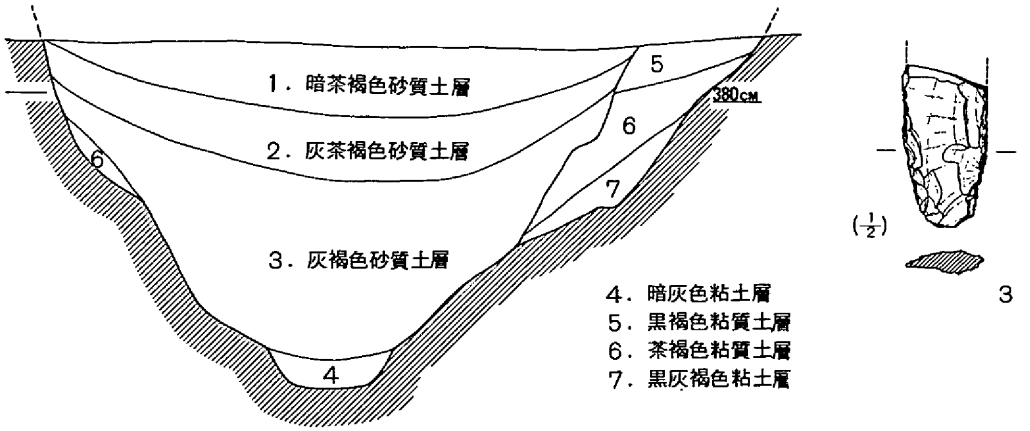
5区西端から検出されたもので，D－1（百・後・Ⅰ）及びD－2（百・前・Ⅱ）を切っている。北東から南西に流走するものと思われる。断面「U」字状を呈し，中央部はさらに1段低く掘り下げている。現存幅235cm，深さ135cm，底部は海抜2.65mを測る。溝内埋積は1～3が砂層，4～10が粘質土で，前者は洪水による堆積と考えられる。また，当溝は，断面図から明らかなように掘り直しがされている。遺物は**182～184**が1層上部から，**159～177**が3層以下から，石槍片が4層から出土している。石槍**3**はサヌカイト製で，石庖丁の転用品と思われるが，裏面は折断面を打面とし何度も細く敲打している。また，旧剝離面をほとんど残さず，雑な整形加工を施している。新しい側縁の調整は表裏とも細かい。遺構・遺物のあり方から当溝は百・後・Ⅲ以後開溝され，百・古・Ⅰには埋没したものと考えられる。

10）D－3

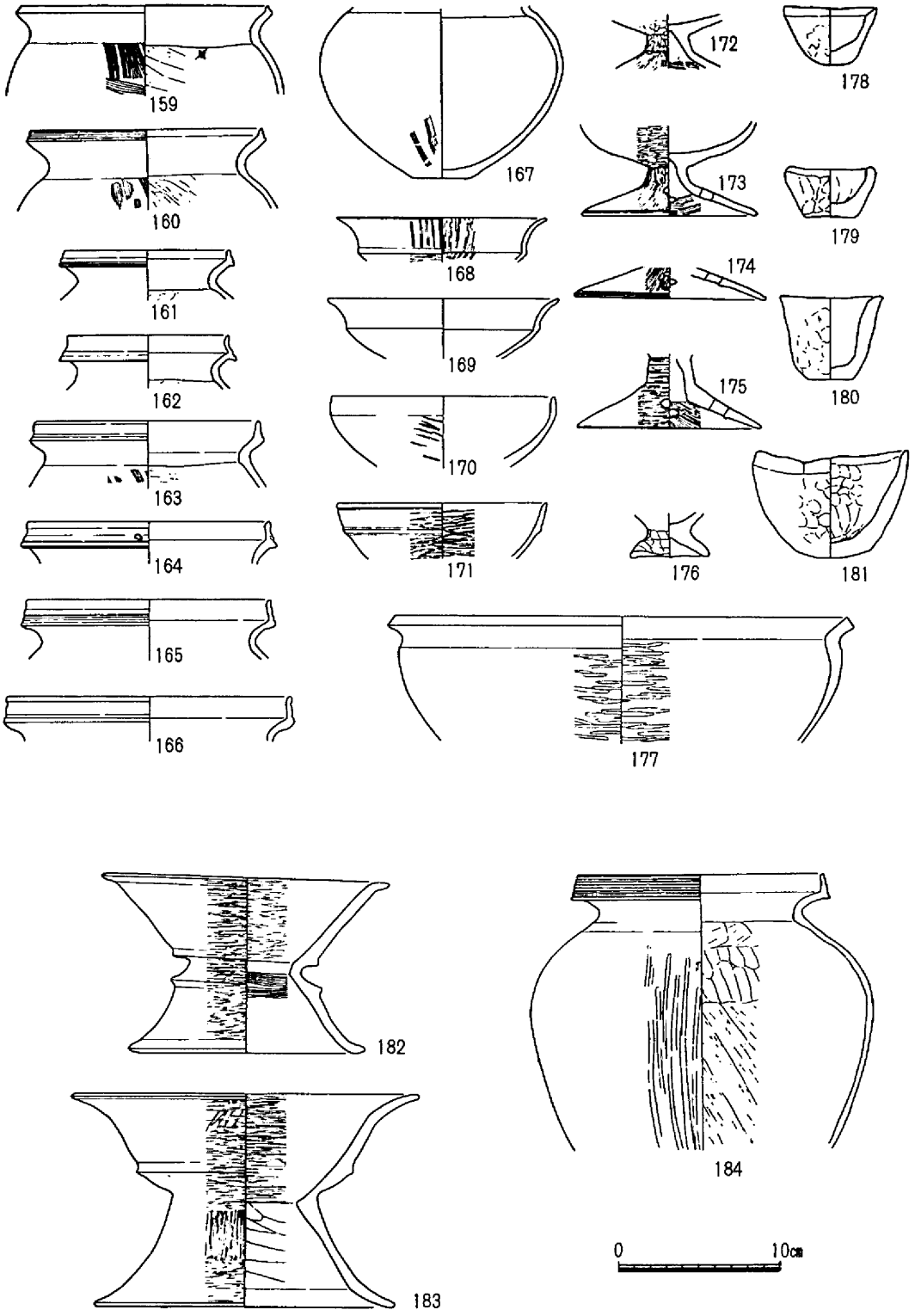
5区から検出されたもので5－H－2（百・後・Ⅱ）を切っていたため，溝の北半分は平面プランを充分に検出することが出来なかった。断面は「U」字状を呈し，現存幅95cm，深さ40cm，底部は海抜3.4mを測る。溝内は暗褐色粘質土が堆積していた。遺物は底部から2～30cm程浮いた状態で，溝の中央部を中心に帯状に検出されており，完形品が多数を占める。僅かに時期差の認められるものも存在するが，溝の埋没途中に一括投棄されたものと考えられる。

以上，当溝は遺物の特徴から百・古・Ⅰに埋没したものと考えられる。

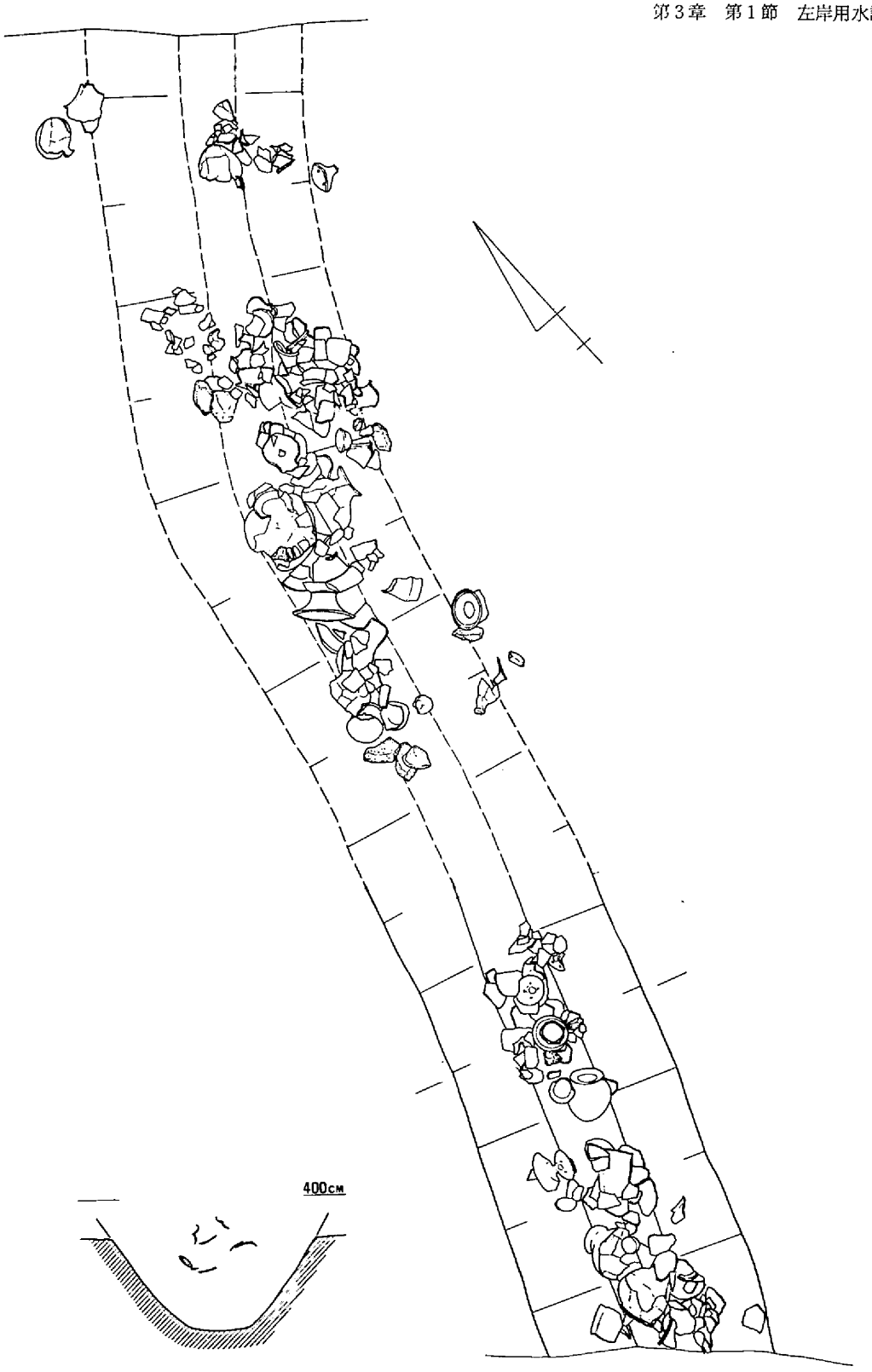
（江見）



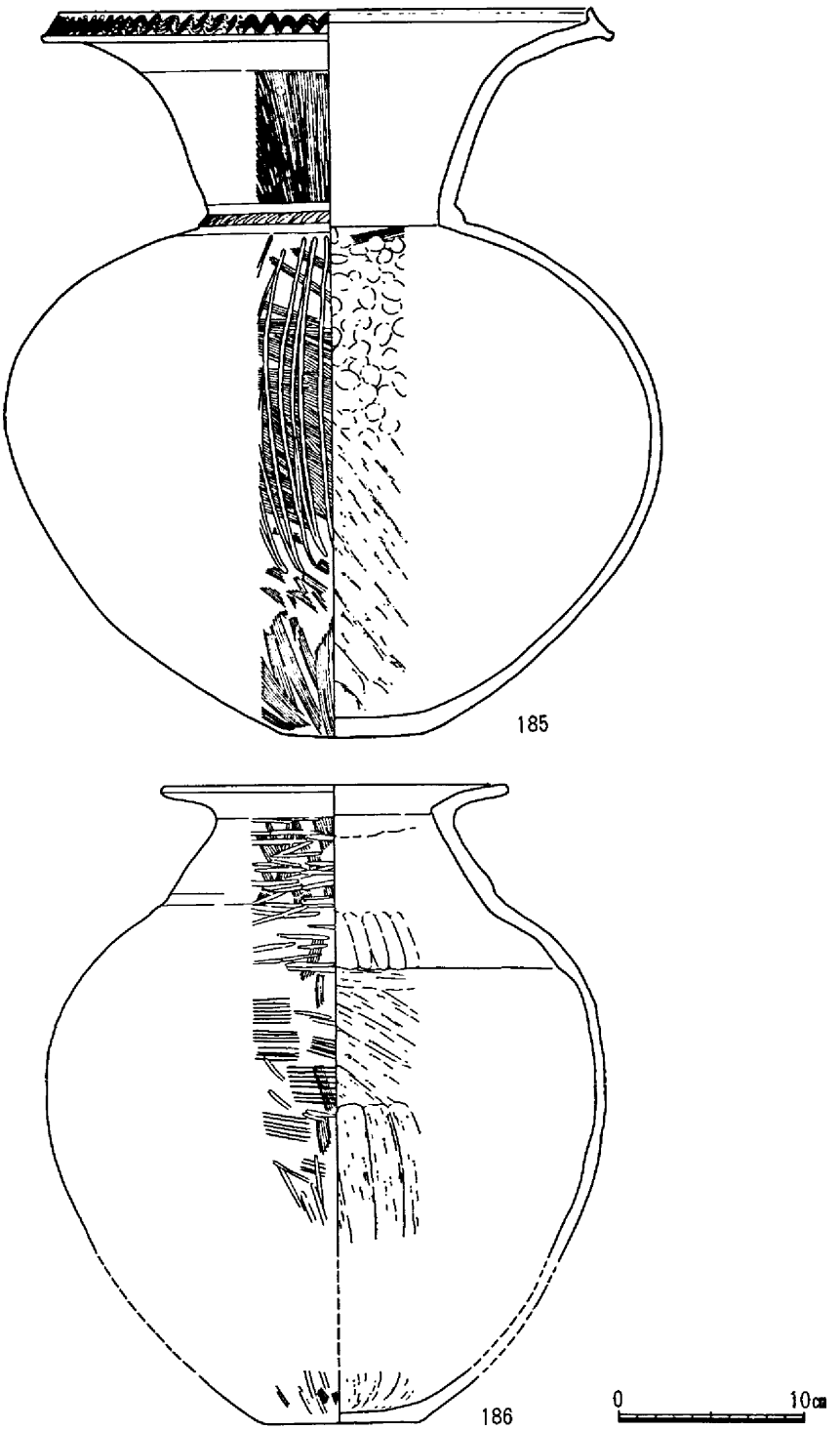
第26図　左岸用水D－8断面図（1/30）及び出土遺物（1）



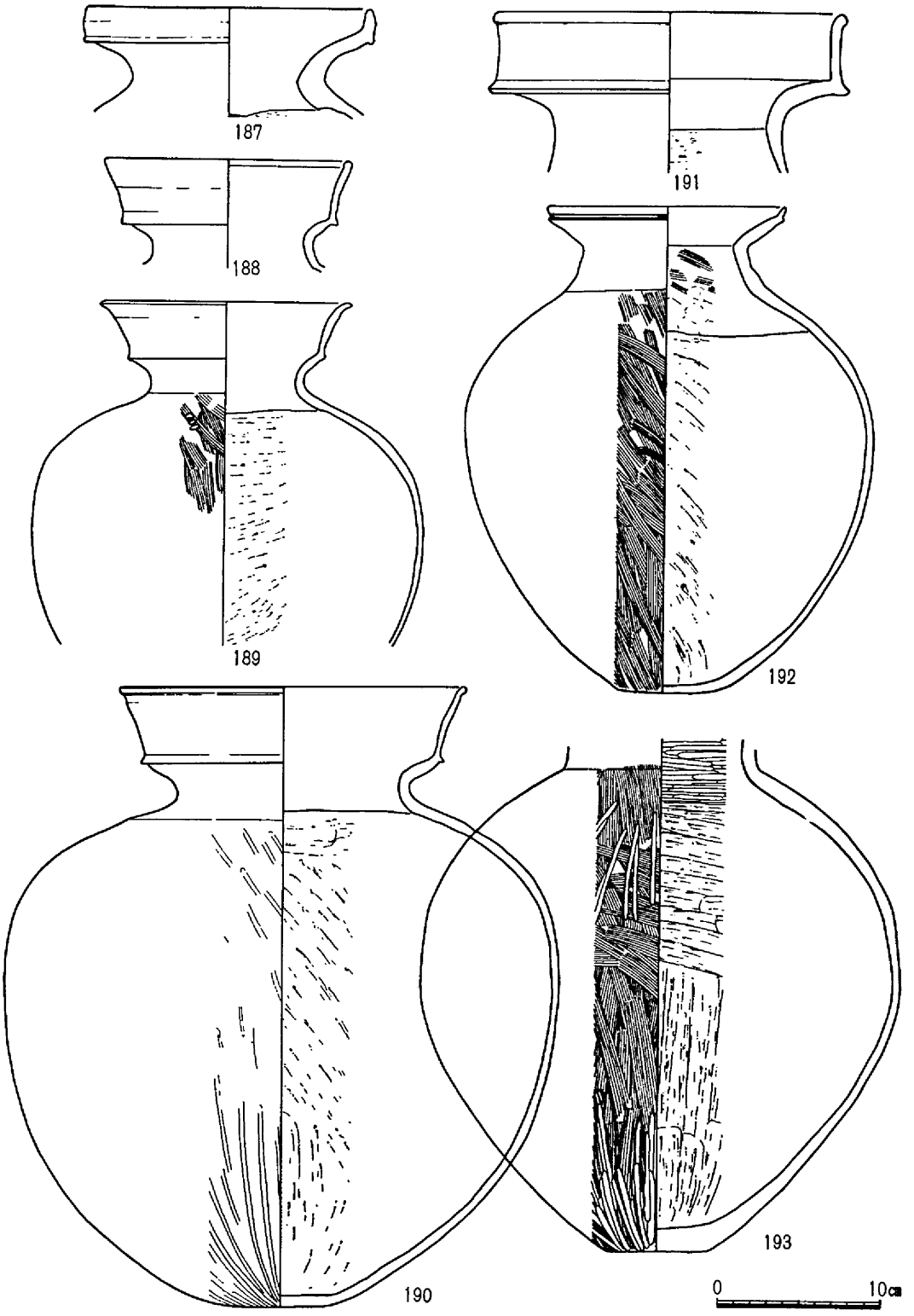
第27図　左岸用水D－8出土遺物（2）



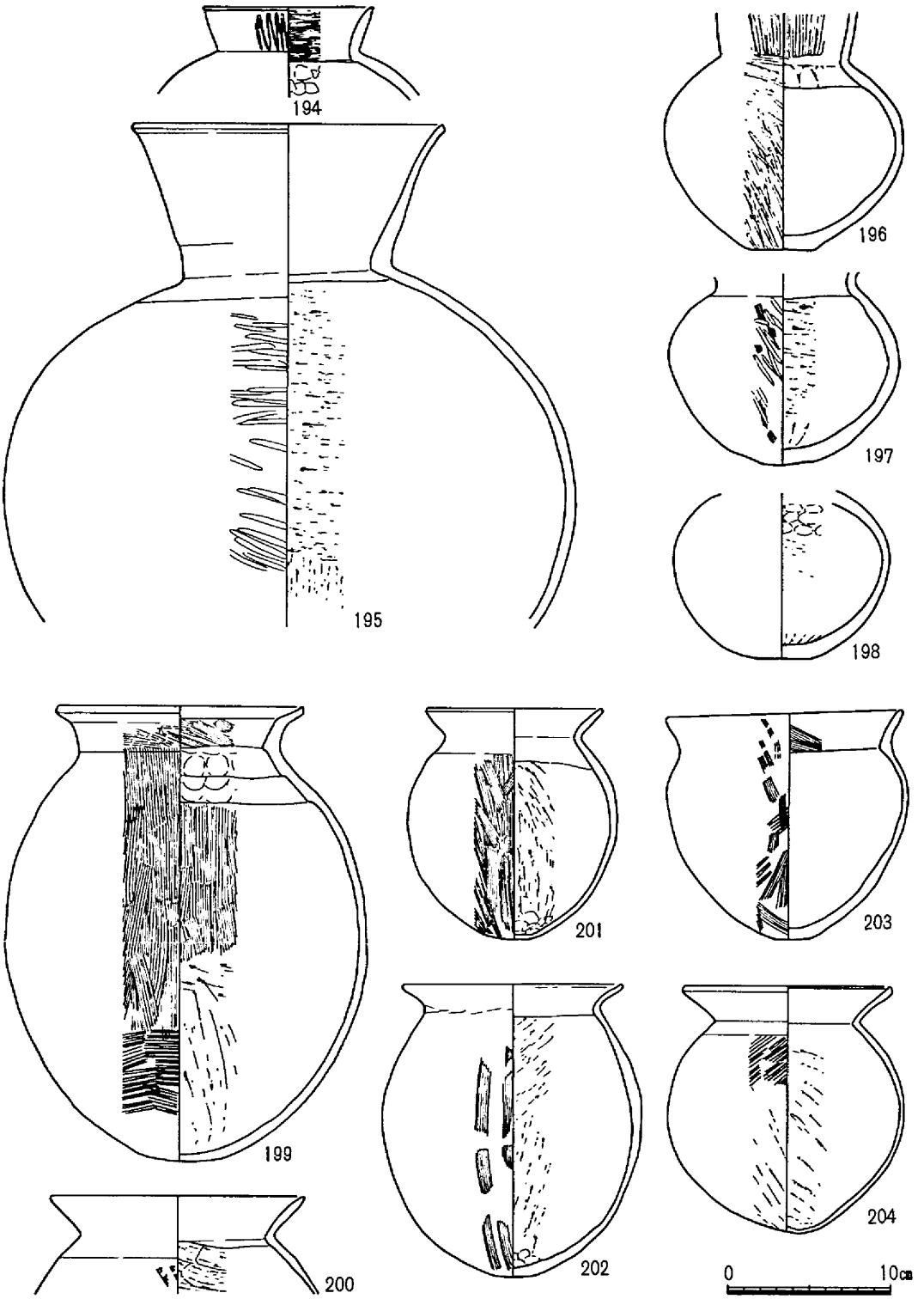
第28図　左岸用水D－３遺構平・断面図（$\frac{1}{30}$）



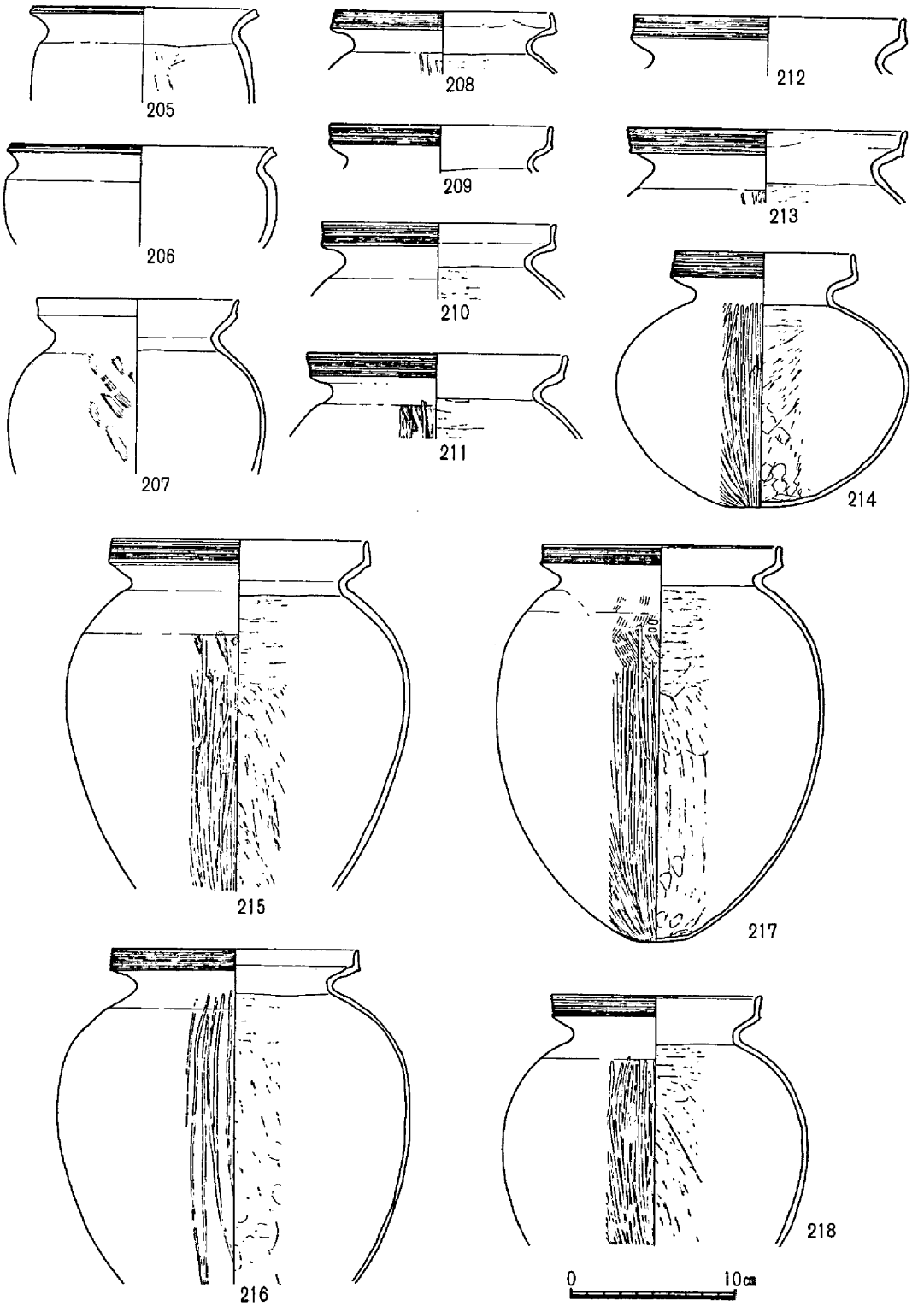
第29図　左岸用水D－3出土遺物（1）



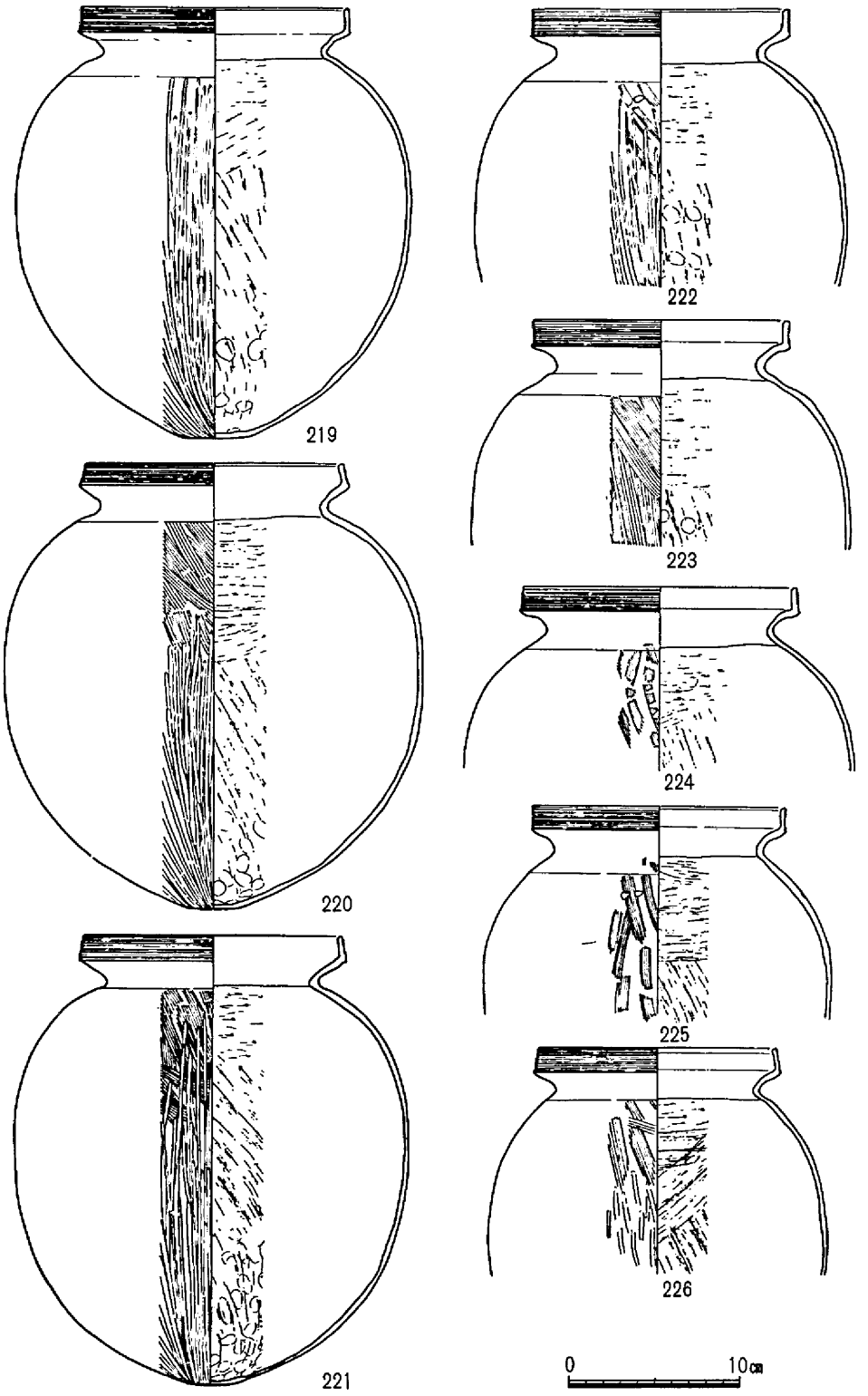
第30図　左岸用水D－3出土遺物（2）



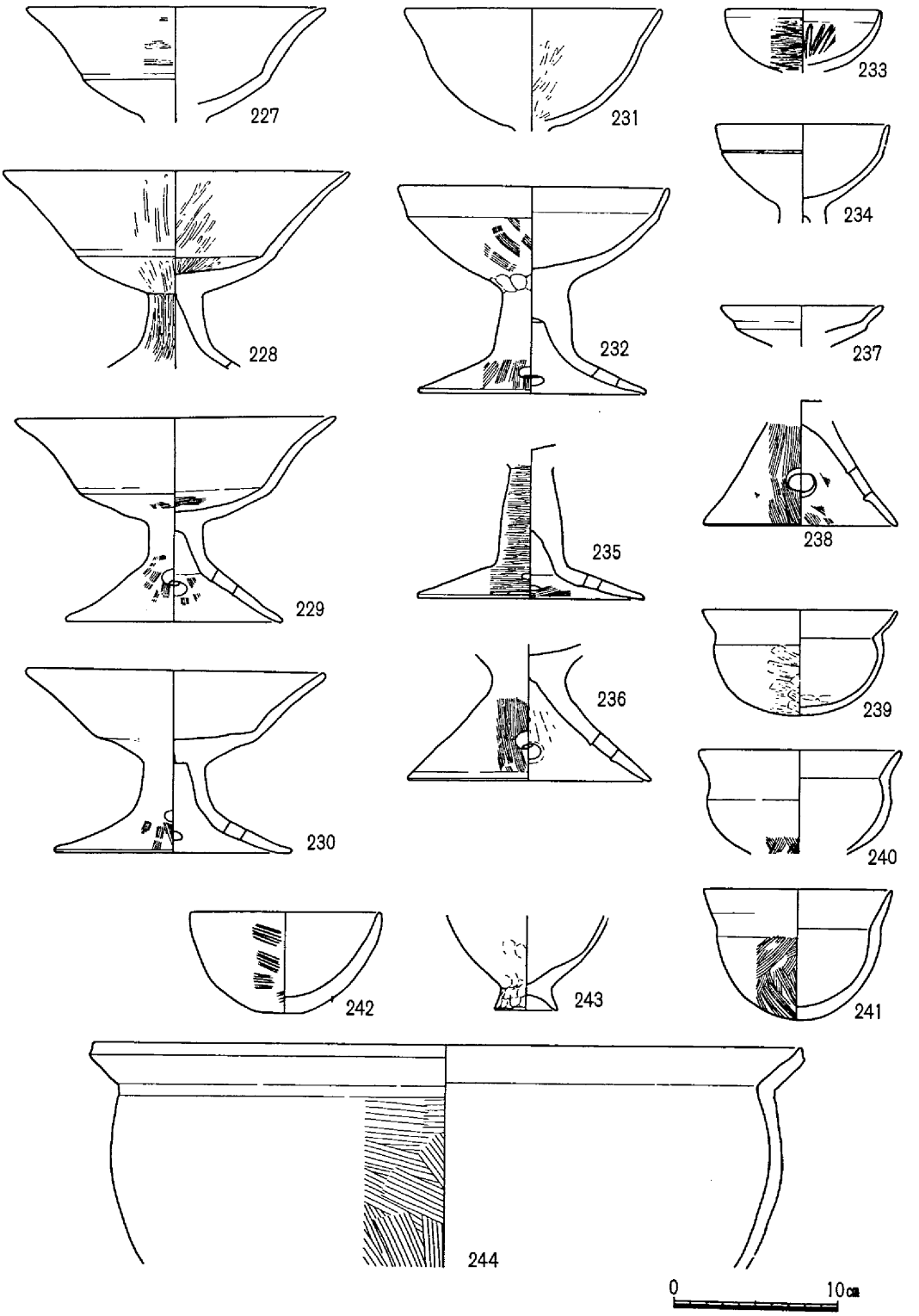
第31図　左岸用水D－3出土遺物（3）



第32図　左岸用水D－3出土遺物（4）

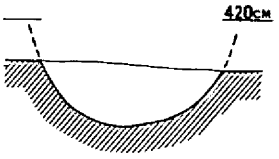


第33図　左岸用水D−3出土遺物（5）



第34図　左岸用水D－３出土遺物（６）

11) D—11

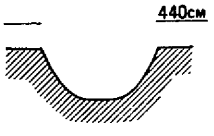


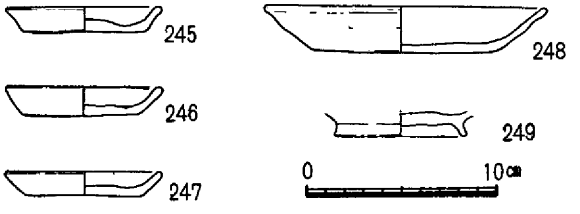
第35図
左岸用水D－11断面図（$\frac{1}{30}$）

2区の南方にあり，D－9を直交して切り，2－H－1の北隅を切って東西方向にややS字状に蛇行して伸びる溝である。現存で長さ7m，幅70cm，深さ25cm溝底は海抜380cmを測る。断面はU字形を呈す。灰茶褐色粘質土が堆積しており，須恵器の極細片を包含していた。切り合い関係と，須恵器が出土したことからこの溝の掘られた時期は古墳時代後半以降で平安時代以前と考えられる。

12) D—12

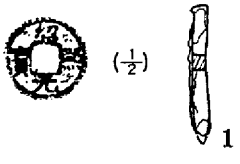
1区にほぼ北から南の方向に数本の浅い溝が平行して走っている。その最も西寄りの溝である。長さ9m・幅43cm・深さ20cm溝底海抜410cmを測り，条里の方向と似ている。おそらく畑の畝溝ではなかろうか。時期は，出土遺物および土層観察から鎌倉時代に入るものと考えられる。このような溝は，全区に亘って検出できるものである。





第36図　左岸用水D－12断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

13) D—13



第37図　左岸用水
D－13出土遺物

6区にあって北東から南西に伸びる，ほぼ調査区と直交する溝である。現存で長さ6m，幅4m，深さ20cmを測る。溝底のレベルは海抜400cmである。極く浅く，幅が広く，そのことによって単なる凹地とも考えられる。粗い砂礫によって一気に埋っている。北の傾斜面から「紹熙元宝」（北宋・西暦1190年初鋳）が出土し，底部から鉄釘が出土した。古銭は明瞭に漢字が読める。鉄釘は断面四角形で頭部を鉤形に潰している。先端が少し欠ける。現存長3.4cm，断面の一辺0.4cmを測る。この溝の掘られた時期は，土層観察から中世以降，江戸時代まで下る可能性がある。

（浅倉）

表2　左岸用水　溝状遺構出土土器観察表

1)　D — 5

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺形土器	○「ハ」の字状の頸部から，緩やかに外反して開く口縁部をもつ。端部は丸くおさめている。	○全体に表面が磨滅のため調整の詳細は不明。おそらく指頭による押圧成形の後横ナデ調整か。	○淡赤褐色 ○1～2㎜の砂粒を含む。 ○百・前・Ⅱ
2	壺形土器	○かなり大型の壺形土器である。	○内外ともに篦磨きが施され，外面の肩部に三条，頸部下に二条の沈線が巡る。	○明茶褐色 ○1～3㎜の石英長石粒が目立つ ○百・前・Ⅱ
3	壺形土器	○底部のみでよくわからないが器壁厚から壺形土器と思われる。	○内外面ともにナデ。	○淡灰褐色 ○1～2㎜の砂粒を含む。
4・6～9	鉢形土器	○いずれも粗製の鉢形土器の破片である。4・6は口縁部，7は口縁部近く，8は胴上部，9は胴下部である。	○4は口縁部に刻み目，6は刻み目とその下位に勾玉状の刺突文が巡る。7は楕円形で2つ一組の単位で縦方向に列点文が施されている。4・6・7の内外面ともにナデ調整，8は擦痕，9は上半がナデ，下半は擦痕が観察される。	○いずれも淡茶褐色 ○1㎜前後の砂粒を多く含む。
5	皿形土器	○「く」の字状に短く外傾して開く口縁部。	○内外面ともにナデ及び篦磨きされた精製の土器である。	○淡灰白色 ○雲母が目立つ。

2)　D — 2

10	浅鉢形土器	○精製土器である。	○内外とも丁寧な磨きを行う。	○黒色
11	深鉢形土器	○粗製土器である。	○内面ナデ，外面に条痕がある。	○黒褐色
12	深鉢形土器	○体部片である。	○横方向に爪形文を施している。	○黒灰色
13	鉢形土器	○やや上げ底である。	○内面ナデ，外面に条痕がある。	○黒色
14	甕形土器	○やや外反する口縁部片である。	○篦描きの沈線を2本以上施している。	○1.5㎜以下の砂含む。褐色。

3)　D — 1

15	壺形土器	○壺の底部と思われる。	○外面横方向の篦磨きしている。	○3㎜大の礫含む。
16	鉢形土器	○体部細片である。	○外面条痕，内面ナデ。	○黒褐色

4)　D — 6

17	壺形土器	○口縁部は鋭く外反し，端部は上下に拡張する。	○口縁部は横ナデ，胴部外面は刷毛調整，内面は篦削りしている。	○淡黄白色 ○1.5㎜前後の砂粒を多く含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
18	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は僅かに肥厚する。 ○体部は器壁が厚く，倒卵形を呈す。	○口縁部は横ナデ。 ○体部外面は篦磨き，内面は篦削りしている。 ○口縁部には1箇所。上下方向に円孔を穿つ部分が確認された。	○2は暗灰白色。 ○2㎜前後の砂粒を含む。
19～22	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は肥厚する。	○全体に磨滅している。 口縁部は横ナデ，体部外面は刷毛目が残り，内面は篦削り。	○19,20は淡赤褐色。21,22は淡黄褐色。 ○2㎜前後の砂粒を含む。
23	高杯形土器	○「ハ」の字状に広がる脚裾部で，端部は僅かに肥厚している。 ○2段に円孔が巡らす。	○裾部外面は磨滅のため不明であるが，内面は篦削りしている。 ○裾部端面は2条の退化凹線を巡らす。	○赤褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
24	鉢形土器	○口縁部はゆるく外方に立ち上がり，端部は僅かに外方に肥厚する。	○口縁端面は浅い凹部をもつ。 ○外面は3条の凹線を確認。 ○内面は僅かに刷毛目が残る。	○淡黄白色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。 ○高杯の可能性有。

5) D — 7

25	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は僅かに拡張している。 ○体部上半に最大径をもちゆるやかなカーブを描き底部に向う。 ○底部は逆反りをする。	○口縁内外面は横ナデを施し，端面は凹みを呈す。 ○体部外面は刷毛調整。 ○体部内面は底部から上方向に篦削りしているが，肩部下半までで終っている。 ○肩部内面は押圧及びナデ。	○黄褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。 ○溝上層肩部出土
26	壺形土器	○ほぼ直立する長頸の壺で，口縁部はするどく外反する。端部は上下にやや拡張する。	○口縁端部は4条の退化凹線を巡らし，口縁部内外面は横ナデ。 ○頸部外面は荒い刷毛目が残り，内面はナデている。	○赤褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。 ○溝上層肩部出土
27	甕形土器	○25と同様肩部に張りのない器形だが，口縁部は短かく，端部は上下に僅かに拡張している。	○口縁端面には2条の退化凹線を巡しており，口縁内外面は横ナデしている。 ○体部外面は横方向に目の荒い刷毛調整。内面は1と同様。	○暗赤褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。 ○溝上層肩部出土
28	高杯形土器	○口縁部はほぼ直立し，端部は外方に大きく拡張する。	○口縁端面には4条の退化凹線を巡し，口縁外面は横ナデ。 ○杯部外面は篦磨きしている。	○黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。 ○溝肩部上層出土
29	高杯形土器	○ゆるく外反する口縁部に，浅い杯部をもつものである。	○器表面磨滅が激しく，手法不明	○淡黄褐色を呈す。 ○以下同上。
30	高杯形土器	○ゆるやかに広がる脚裾部で，裾端部は丸くおさめ	○外面は目の荒い刷毛調整。内面はナデ。	○淡黄褐色を呈す。 ○精製粘土。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		ている。		○溝肩部上層出土。
31～34	壺形土器	○口縁部はゆるく外反し，端部に面をもつ。 ○34は口縁端面に指頭による押圧痕が巡る。	○口縁部は横ナデ。頸部以下は刷毛調整ののち，篦磨きしている。 ○口縁部内面，32は篦磨き。33は刷毛調整。	○黄褐色～赤褐色 ○2，3㎜の砂粒を含む。 ○溝底部出土。
35	壺形土器	○口縁部はゆるく外方に立ち上がり，端部に面をもつ。 ○口縁内側に断面三角形の凸帯が巡る。	○口縁部は横ナデ ○以下不明	○赤褐色を呈す。 ○2～4㎜の砂粒を多く含む。 ○溝底部出土
36	壺形土器	○撫で肩の体部破片である。	○体部上半に篦描沈線を8本巡らす。	○同上
37～38	甕形土器	○やや内傾して立ち上がる体部に，口縁部は逆「L字」状を呈す。	○口縁部は，断面三角形の粘土紐を貼り付けて作っている。 ○口縁端部は刻み目が巡る。 ○体部外面は刷毛及びナデ調整ののち，篦描沈線を巡す。 ○37の内面は繊維質のもので丁寧に磨かれ，38はナデている。	○淡灰黄色を呈す2㎜前後の砂粒を含む。

6)　D－9

39	高杯形土器	○口縁部はほぼ直立し，口縁端面は水平面をもち，外方にやや拡張している。	○口縁拡張面には3条の退化凹線を巡らす。 ○口縁内外面は横ナデ。杯部外面は横方向の篦磨きを施している。内面は磨滅のため不明。	○赤褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を多分に含む。
40	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上下に拡張している。	○口縁部内外面は横ナデ。口縁拡張面は2条の凹線を巡らす。 ○体部外面は刷毛調整。内面は磨滅のため不明。	○外面は黄褐色。内面は灰茶褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
41	甕形土器	○口縁部はゆるく外反し，端部は面をもつ。	○口縁端部は篦状工具による刻み目を巡し，体部上半に2条の篦描沈線を施す。	○淡茶褐色を呈し，2㎜前後の砂粒を多く含む。

7)　D－4

42	壺形土器	○やや内傾する長頸をもつので，口縁部はゆるく外反する。端部は僅かに肥厚し，端面は凹みを呈す。 ○体部は肩の張りがない。卵形を呈す。	○口縁部外面は横ナデ。内面は細かな篦磨きをしている。 ○頸部以下外面は刷毛調整後，篦磨きしている。頸部内面は押圧及びナデを，体部内面は篦削りしている。	○淡褐色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒を含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
43～44	壺形土器	○ほぼ直立する長頸をもつもので，口縁部は朝顔状に外反する。 ○口縁端部は43が凹みを呈すのに対して，44は上下に拡張している。 ○体部上半に最大径をもち，底部は広く安定した平底である。	○口縁部は横ナデをしており，44は口縁端面に3条の退化凹線が巡る。 ○頸部は刷毛調整を施し，44はその後篦磨きを施している。 ○44の体部は篦磨きしている。 ○頸部内面は押圧及びナデ，体部は篦削りしている。	○43は暗褐色，44は灰黄色を呈す。 ○いずれも1㎜前後の砂粒を含む。
45	壺形土器	○ほぼ直立する長頸をもつもので，口縁部は朝顔状に外反する。 ○口縁端面は凹みを呈す。 ○体部は上半に最大径をもつものの，全体にいびつな感じである。	○口縁部は横ナデ。 ○頸部及び体部は刷毛調整を施し，体部下半はその後，篦磨き。 ○頸部には16条のやや乱れた波線を巡らせ，その下部には篦状工具による刺突を巡らしている。 ○頸部内面は刷毛成形後，押圧及びナデ，体部内面は篦削り。	○灰黄色を呈し，1.5㎜前後の砂粒を含む。
46	壺形土器	○頸部と体部の境に凸帯を巡らせたもので，長頸壺の一部と思われる。	○頸部は篦描沈線7本を確認。 ○凸帯の上面及びその上下に篦状工具による刺突を4箇所巡らす。 ○体部外面は丁寧な篦磨き，内面は頸部を刷毛調整している。	○淡黄褐色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒を含む。
47	壺形土器	○直立する短い頸部をもつもので，口縁端部は肥厚する。体部は肩の張りがない。	○口縁端面は2条の退化凹線を巡らす。 ○口縁部及び頸部内外面は横ナデ。 ○体部外面は篦磨き。内面は篦削りしている。	○外面は灰白色。内面は灰黄色。 ○1㎜前後の砂粒を含む。
48	壺形土器	○玉ねぎ形の体部をもつもので，体部中央に最大径をもつ。底部は平底で突出する。	○外面は篦磨き。内面は体部上半を押圧及びナデ。下半を篦削りしている。 ○淡灰色を呈す。	○1㎜前後の砂粒を含む。
49～50	壺形土器	○口縁部は鋭く外反し，口縁端部は上下につまみ出している。 ○頸部はほぼ直立し，やや肩の張る体部に続く。 ○底部は安定した平底。	○口縁部及び頸部は横ナデ。口縁端面は3条の退化凹線が巡る。 ○体部外面は刷毛調整の後，篦磨き。50は，内面は篦削りしている。	○49は灰褐色。50は黄褐色を呈す。1㎜前後の砂粒を含む。
51～52	壺形土器	○ゆるく外反する短い口縁部をもつもので，51の端部は面をもち，52の端部は肥厚している。 ○頸部は短く，体部は中央に最大径を測り，胴張りを呈すものの底部は安定した平底。	○口縁部及び頸部内外面は横ナデ。52は口縁端面に2条の退化凹線が巡る。 ○体部外面は刷毛調整の後，篦磨き。内面は篦削りしている。	○いずれも黄灰色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
53	壺形土器	○口縁部は鋭く外反し，端部は斜め下方に引き延している。	○口縁部及び頸部内外面は横ナデ。 ○体部外面は篦磨き。内面は篦削りしている。	○赤褐色を呈す。 ○3㎜前後の砂粒を含む。
54	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は面をもつ。 ○体部は倒卵形を呈し，底部は逆反りし，上げ底を呈す。	○口縁部及び頸部内外面は横ナデ。 ○体部外面は刷毛調整。内面は篦削りしている。 ○底部外面は押圧及びナデ。	○黄灰色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒を含む。
55～64	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は肥厚する。口縁端面は凹みを呈す。 ○体部は54と同様であるが，底部は上げ底と平底がある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は刷毛調整。内面は篦削り。61は目の荒い刷毛調整。 ○55は器面磨滅のため不明。	○灰黄色～黄灰色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。 ○底部～肩部付近まで煤が付着。
65～78	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は上下に僅かに拡張。 ○底部は上げ底と平底がある。 ○68，69は他に比べ大型で底部も広い。	○口縁端面は2条の退化凹線が巡る。 ○胴部内外面は上記同様に刷毛調整と篦削りをしている。	○色調及び胎土は同上。 ○外面に煤付着。 ○69は，なお煤の付着がなく壺の可能性も有る。
79～83	鉢形土器	○口縁部はゆるく外反し，端部は丸くおさめるものと，凹部をもつものがある。 ○体部は深く，底部は平底である。	○口縁部内外面は横ナデ。81はその後外面を篦磨き。 ○体部外面は刷毛調整及びその後篦磨きをしているものもある。 ○体部内面は79を除き篦磨き。 ○82は磨滅のため調整不明。	○黄灰色を呈す。1㎜前後の砂粒を含む。
84	鉢形土器	○台付のもので，口縁部はゆるく外反し，端部は凹部をもつ。 ○体部は深く，幅の広い脚部をもつ。脚端部は凹部をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は篦磨き。内面は僅かに篦削り痕が認められた。 ○脚部内外面は押圧及びナデ痕が残り，端部外面は横ナデ。	○同上。
85～86	鉢形土器	○底部破片で，いずれも突出しており，僅かに上げ底を呈す。	○底部外面を押圧により突出させており，85は台状を呈している。 ○体部内外面は篦磨き。	○同上。
87～88	鉢形土器	○製塩土器の脚部片である。	○脚端部外面は押圧及びナデ。 ○体部外面は篦削り。内面はナデ。	○淡灰色で，3㎜前後の砂粒を多分に含む。
89～92	鉢形土器	○体部がラッパ状に広がる台付の小型のもの。 ○形態は製塩土器に類似するが，手法及び胎土は全く異る。	○体部外面91は細かな篦削り。92は刷毛調整しており，内面は刷毛調整の後ナデている。 ○92の口縁端部はつまんでいる。	○黄灰色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
93～94	鉢形土器	○口縁部は外反し，端部は上下に拡張をもつ大型のものである。	○93の口縁端面は3条の退化凹線を巡らしており，94は口縁部上下端をつまみ出している。 ○口縁部内外面は横ナデしている。 ○体部外面は刷毛調整。内面は刷毛調整の後，篦磨きしている。	○黄灰色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒を含む。
95	高杯形土器	○口縁部は斜め外方に立ち上がり，屈折してさらに外方に拡張する。端部は丸くおさめる。	○口縁部拡張部上面には5条の退化凹線を巡らす。 ○口縁部内外面は横ナデ。杯部内外面は篦磨きをしている。	○淡黄灰色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒。 ○内外面に煤付着。
96～104	高杯形土器	○口縁部は外反し，杯部はゆるくカーブし浅い。脚部は長い脚部から「ハ」字状に低く広がる脚裾部へ続く。 ○97，102 の裾端部は上方に引きのばしており，104は凹みを呈す。 ○脚裾部に円孔を4あるいは3つ穿っている。	○杯部内外面及び脚部外面は篦磨きしている。 ○脚柱部内面は紋り目が確認でき裾部内面は刷毛調整あるいは篦削りをしている。 ○脚柱部外面下半に数本の沈線を施したもの97，102～104がある。	○灰黄色～赤褐色を呈す。 ○砂粒は混じるが精製された胎土。 ○98は他に比べ小型で脚柱部も短い。
105～106	高杯形土器	○杯部は浅く椀状を呈す小型のものである。 ○脚柱部はやや短く，脚裾部は「ハ」の字状にゆるく広がる端部は丸くおさめている。	○口縁外面は横ナデしており，杯部内外面は篦磨きしている。 ○脚部外面は篦磨きしている。 ○脚部には4カ所に4段にわたって円孔が穿たわているが貫通しているのは下段のみである。	○茶灰褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。
107	高杯形土器	○口縁部はやや内傾して立ち上がる小型のもの。 ○4箇所に円孔を穿つ。	○磨滅のため，詳細は不明であるが，脚部に篦描沈線を巡らし，その下段には刺突を巡らす。	○灰黄色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。
108～109	器台形土器	○ほぼ直立する筒部に朝顔状に外反する口縁部をもち，端部は上下に著しく拡張する。 ○胴部には6個の円孔が2段に穿たれている。 ○脚部は「ハ」の字状に広がり，端部は肥厚し凹みを呈す。	○口縁拡張面は，6条の退化凹線を巡らした後，鋸歯文を巡らす。 ○口縁及び筒部は刷毛調整をしており，筒部は上から11，10，8本の沈線を巡らしている。 ○裾部は刷毛調整後，部分的に篦磨きしており，裾部下半は数条の凹線を施している。 ○口縁部内面は篦磨きを施しており筒部は刷毛調整及びナデ。 ○裾部に篦状工具痕が認められた。	○108は茶灰褐色。109は黄灰色。 ○1㎜前後の砂粒を含む。 ○108の筒部と裾部は同一器種として扱ったが，外面調整の相違から別個体かもしれない。
110	甕形土器	○口縁部は斜め外方に延び端部は肥厚し，丸くおさめている。	○口縁部は横ナデ。胴部外面は僅かに篦磨き痕が認められる。 ○内面は不明。	○淡灰黄色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
111～112	高杯形土器	○口縁部はほぼ直立し，112	○口縁部は横ナデ。端部上面には数	○黄灰色で1㎜前後

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		は外方の拡張が著しい。	条の退化凹線が巡る。 ○杯部内外面共に篦磨きしている。	の砂粒を含む。
113	高杯形土器	○杯部から口縁部にかけてやや方向を変えるものの斜め方向に大きく開くものである。 ○口縁端部は左右に拡張する。	○口縁部外面は横ナデ。口縁端面には4条の退化凹線が巡る。 ○内面及び杯部外面は篦磨き。	○淡赤褐色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。
114	高杯形土器	○「ハ」の字状に広がる高杯の脚部と思われる。 ○裾端部は外方に拡張し，端面は凹みを呈す。	○外面は磨滅のため不明。 ○裾部内面は篦削りしている。 ○裾部には円孔を巡らしている。	○淡赤褐色で2㎜前後の砂粒を含む。 ○外面に煤付着。
116	鉢形土器	○口縁部は直立し，端部は僅かに左右に拡張する。	○口縁及び口縁拡張面には数条の退化凹線が巡る。 ○鉢部は刷毛調整の後，外面下半を篦削り，内面を篦磨きする。	○灰黄色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
117～118	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は上下に僅かに拡張し，端面は凹みを呈す。	○口縁内外面は横ナデ。 ○胴部外面は刷毛調整。内面は篦磨きしている。	○赤黄灰色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。
119	高杯形土器	○椀状を呈すもので，下部に脚が付くものと思われる。	○口縁部は横ナデ。 ○杯部外面は刷毛調整。内面は篦削りの後ナデ。	○淡黄灰色で2㎜前後の砂粒を含む。
120	鉢形土器	○椀状を呈すもので，口縁端面は僅かに凹む。	○磨滅のため不明。	○同上
121～122	鉢形土器	○122 は台が付くもので，脚端部は肥厚する。	○121 は内外面ともに篦磨き。 ○122 の脚部端面は3条の退化凹線を巡らす。	○同上

8)　**D — 10**

123～128	壺形土器	○いずれも長頸壺の破片と思われるもので，口縁部は外反し，端部は上下に拡張する。 ○頸部はほぼ直立し，肩の張りのない体部へ続く。	○口縁拡張面は数条の退化凹線を頸部は10数条の雑な沈線が巡る。 ○頸部下端には篦状工具による刺突が施されている。 ○口縁部は横ナデ。以下外面は刷毛調整を施し，体部はさらに篦磨きをしている。内面は口縁部を篦磨き，頸部を押圧及びナデ。体部以下を篦削りしている。	○黄褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を多分に含む。 ○123は，全体にやや古い様相を呈す。
129～132	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方あるいは上下に僅かに拡張する。拡張面は凹みを呈す。	○口縁内外面は横ナデ。 ○体部外面は刷毛調整。内面は篦削りしている。	○淡黄褐色～暗黄褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
133～140	甕形土器	○口縁端部は上方に著しく拡張するものである。 ○体部は肩にやや張りがある。	○口縁拡張面は横ナデのもの133，134，1，2条の退化凹線をもつ135～137，数条の退化凹線をもつ138～140の3様がある。 ○体部外面は刷毛調整後，篦削り。	○同上
141～143	高杯形土器	○杯部は丸く椀状を呈し，口縁部は外反する。 ○脚柱部は短く，急に広がる脚裾部に続く。 ○脚端部は丸くおさめる。	○外面及び，杯部内面は篦磨き。 ○脚部内面は裾部に刷毛調整痕が認められる。	○茶褐色。黄褐色で，水漉し粘土。 ○141杯部内外面に煤付着。
144～145	鉢形土器	○椀状を呈す小型のものである。	○口縁部は横ナデ。体部内外面は，刷毛調整後，篦磨き。	○淡茶褐色で，1㎜前後の砂粒含。
146～147	鉢形土器	○甕形土器の形態に類似し，口縁端部は上方に拡張する。	○磨滅のため調整不明であるが，147の体部外面は刷毛目が残る。	○淡茶褐色。非常に精製された粘土。
148	鉢形土器	○口縁端部が上下に拡張する大型の器形。	○口縁部は横ナデ。拡張面は3条の退化凹線が巡る。 ○体部外面は刷毛調整。内面は篦磨きしている。	○淡黄褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。
149～150	甕形土器	○体部が球形を呈すもので，口縁部は外反し，端部は丸くおさめる。	○口縁内外面は横ナデ。体部外面は刷毛調整。内面は篦削りしている。	○黄褐色を呈す。 ○砂粒はほとんど含まない。
151	甕形土器	○口縁端部が拡張する。	○口縁部は横ナデ。	○1㎜前後の砂粒。
152	甕形土器	○全体に雑な作りのものである。	○口縁部は横ナデ。体部内外面は刷毛調整。	○淡茶灰色を呈し，砂粒はほとんど含まない。
153	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は面をもつ。	○口縁部外面は横ナデ。口縁部内面及び体部外面は刷毛調整。 ○体部内面は篦削りしている。	○淡茶灰色を呈し，1.5㎜前後の砂粒を含む。
154～156	高杯形土器	○椀状を呈すものと，口縁部が斜め外方に著しく延びるものがある。	○内外面は全て細かな篦磨き。 ○155は口縁部が2箇所凹みをもつ。 ○156は磨滅のため調整不明。	○黄褐色を呈し，いずれも水漉し粘土である。
157	鉢形土器	○製塩土器に類似する脚部である。	○体部内外面は刷毛調整。脚部は押圧及びナデ。	○淡黄褐色で，水漉し粘土である。
158	鉢形土器	○口縁部はゆるく外反し，端部は上方に拡張する。 ○体部はゆるやかにカーブを描きながら，丸味をもった底部に至る。	○口縁部外面は横ナデ。体部外面は刷毛調整。 ○内面は全面を篦磨きしている。 ○底部は異常に厚い。	○淡黄褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。

9）D－8

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
159～166	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，口縁端部は上部につまみ出している159，160と，上方あるいは上下に拡張する161～166がある。	○いずれも口縁部は横ナデ。体部外面は刷毛調整。内面は篦削り。 ○164の口縁拡張面には米粒大の押圧痕が認められた。	○黄褐色で1㎜前後の砂粒を含む。 ○159は砂粒をほとんど含まない。
167	壺形土器	○口縁部は欠損しているが，直口壺と思われる。 ○底部は平底を呈す。	○磨滅が激しく調整不明であるが，体部下半に僅かに刷毛目が残る。	○赤褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
168～175	高杯形土器	○外反する短い口縁部をもったものと，椀状を呈すものがある。 ○脚柱部はいずれも短く裾部は「ハ」の字状に開く。端部は丸い。	○杯部内外面及び脚部外面は，いずれも細かい篦磨き。 ○脚裾部内面は，ナデあるいは刷毛調整。 ○173，174の脚端部は沈線が巡る。	○黄褐色を呈す。 ○水漉し粘土。
176	鉢形土器	○製塩土器の脚部。	○脚部外面は押圧及びナデ。	○2㎜前後の砂粒。
177	鉢形土器	○口縁部は短く，端部に面をもつ。	○口縁部は横ナデ，体部内外面は篦磨きしている。	○淡黄褐色で，2㎜前後の砂粒含。
178～181	手捏土器	○作りが雑で稚拙な感じ。	○いずれも押圧及びナデ。	○精製粘土。
182	器台形土器	○いわゆる鼓形を呈すもので，口縁部径は底部径及び器高を凌ぎ，受部高は器台部高を凌ぐ。 ○器受部は斜め外方に直線的に延びており，端部は外方にやや屈折して拡張する。 ○筒部は短く。器台部は「ハ」字状にやや反りをもって広がり，端部は外方へやや拡張する。	○外面及び器受部内面は横方向の細かな篦磨き。 ○器台部内面は上半を刷毛調整。下半をナデ及び横ナデしている。	○淡茶褐色を呈す。地に丹塗りを施している。 ○1.5㎜前後の砂粒を含む。
183	器台形土器	○口縁部径は底部径及び器高を凌ぐ。 ○器受部はやや内湾気味に外方に延び，途中から逆反りして大きく開く。 ○器台部は「ハ」の字状にゆるやかに広がる。	○外面及び器受部は上記同様，細かな篦磨きを施しているが，その方向はやや雑で，器台部上半は縦方向に施している。 ○器台部内面は篦削りの後，刷毛状工具及びナデによる調整が施されており，端部は横ナデしている。	○色調，胎土は上記182と全く同一である。
184	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや内傾して立ち上がる拡張部をもつ。 ○体部はやや肩が張る倒卵形を呈す。	○口縁拡張面は9条の櫛描平行沈線文を施す。 ○口縁部内外面は横ナデ，体部外面は篦磨き，内面は押圧成形の後，篦削りしている。	○淡茶色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。 ○器表面は煤付着。

10) D — 3

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
185	壺形土器	○朝顔状にゆるく外反する口。頸部をもち，口縁端部は内傾し，上下に拡張する。 ○頸部と体部の境には凸帯を貼り付けている。 ○体部上方に最大径をもち，底部は平底である。	○口縁部は横ナデ。口縁端面は櫛状工具(6本)による波状文。 ○頸部は丁寧な縦方向の刷毛調整 ○凸帯には篦状工具による刻み目 ○体部は刷毛調整後篦磨き。 ○口，頸部内面は刷毛調整ののち横ナデ及びナデを施し，さらに部分的に篦磨きしている。 ○体部は押圧～刷毛ののち篦削り。	○暗茶褐色を呈す。 ○0.5㎜前後の金雲母が目立つ。 ○2㎜前後の砂粒を含む。 ○焼きしまっている。
186	壺形土器	○口縁部は「く」の字状に鋭く外反し，内傾する短い頸部をもつ。体部上半に最大径をもち，底部は平底である。	○口縁部内外面は横ナデ。頸部以下は叩き成形ののち刷毛調整しており，さらに部分的に篦磨き。 ○頸部内面は押圧及びナデ。 ○体部は肩部以下を篦削り。	○黄褐色を呈す。 ○1.5㎜前後の砂粒を含む。 ○焼きしまっている。
187	壺形土器	○口縁部はゆるく外反し，端部は拡張する。 ○全体には厚みがある。	○口縁部は横ナデ。 ○体部内面は篦磨き。 ○全体に磨滅が著しい。	○黄褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を多分に含む。
188～190	壺形土器	○いわゆる二重口縁を呈すもので，口縁部の作りは非常にシャープ。 ○体部は球形を呈すが，広い底部が確認される。	○口縁部は横ナデ。胴部外面は刷毛調整あるいは篦磨き。内面は篦削りしている。 ○189の肩部には押圧痕を3つ確認。	○黄褐色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。 ○189の胴部は二次焼成の痕有り。
191	壺形土器	○するどく外反する口縁部に端部は上方に著しく拡張する。	○器表面は磨滅しているが，口縁部内外面は横ナデ，内面は頸部中央まで篦削りが及んでいる。	○淡茶褐色を呈し，3㎜前後の砂粒を含む。
192	壺形土器	○口縁部は「く」の字状に屈曲して広がり，端部は上方に僅かに拡張。 ○頸部は短かく，「ハ」の字状に内傾する。 ○体部は倒卵形を呈し，底部は丸みをもつ平底。	○口縁部内外面及び頸部外面は横ナデ，体部は刷毛調整。 ○内面は頸部及び体部上半を刷毛調整後，押圧及びナデ，以下体部を篦削りしている。	○黄褐を呈すが体部内面は灰黒色を呈す。 ○4㎜前後の砂粒を含む。
193	壺形土器	○口縁部欠損。直立する短かい頸部をもつと思われる。体部は倒卵形を呈し，平底。	○体部外面は刷毛調整後，肩部と底部に部分的に篦磨き。 ○頸部内面は篦磨き，体部内面は篦削り。	○外面は黄褐色，内面は黒褐色。 ○2㎜前後の砂粒を多く含む。
194	壺形土器	○斜め外方に延びる短い口縁部で，端部外面は僅かに凹みを呈す。	○口縁部外面は暗文風の篦磨き，内面は横方向の細かな篦磨き。 ○体部内面は押圧及びナデ。	○黄褐色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒を含む。
195	壺形土器	○口縁部は斜め外方に著しく延び，端部は面をもつ。 ○体部はほぼ球形を呈す。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は篦磨き，内面は篦削りしている。	○黄褐色を呈す。 ○1.5㎜前後の砂粒を含む。 ○表面剝離激しい。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
196～198	壺形土器	○194，195と同様の直口壺と思われる。 ○底部は平底と丸底の2様有る。	○196の口縁部内外面は篦磨き。 ○体部外面は刷毛調整後，篦磨き， ○内面は篦削りしている。	○196，198は淡茶褐色，197は黄褐色を呈す。 ○197は3㎜，他は1㎜前後の砂粒を含む。
199	甕形土器	○口縁内面が屈曲して外反するもので，端部は面をもつ。 ○丸底を呈す。 ○器壁は厚い。	○口縁上部は横ナデ，下部は刷毛調整痕が残る。 ○体部外面は叩き成形の後，上部のみ刷毛調整。底部はナデ。 ○体部内面は，上半を押圧ナデ及び刷毛調整。下半を篦削り。	○灰褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を多分に含む。 ○体部外面に煤付着。
200～202	甕形土器	○口線部は「く」の字状に外反し，体部は楕円で，底部はほぼ丸底。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は雑な刷毛調整，内面は篦削りで，底部に押圧痕有り。	○淡茶褐色で2㎜前後の砂粒含む。 ○体部外面煤付着。
203	甕形土器	○口縁部は斜め外方に延び，体部はやや肩が張る。底部は僅かに平底。	○口縁部は刷毛目が残る。 ○体部外面は叩き成形の後，雑な刷毛調整，内面は篦削り後ナデ。	○黄褐色で1.5㎜前後の砂粒を含。 ○粗雑な作り。
204	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は僅かに上方につまみ上げる。 ○体部はほぼ球形を呈す。 ○僅かに平底をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部肩付近に細かな叩き目が残り，以下細かな刷毛状工具による調整。 ○体部内面は篦削り。	○暗茶褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。 ○河内系の土器。
205～206	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は僅かに肥厚する。端面は凹みを呈する。	○口縁部内外面は横ナデ，体部は磨滅が激しいが，内面は篦削りと思われる。	○淡茶褐色で1㎜前後の砂粒含。 ○205外面煤付着。
207	甕形土器	○口縁端部が斜め上方に拡張するもので体部はやや肩が張る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部は磨滅が激しいが，外面刷毛調整，内面篦削りと思われる。	○黄褐色を呈す。 ○1.5㎜前後の砂粒を含む。
208～226	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方に拡張する。拡張部は直立あるいはやや内傾するものが多いもののやや外傾すものもある。 ○体部はやや肩が張る倒卵の形ものと，ほぼ球形を呈すものとがある。 ○底部は丸底に近いものと僅かに平底を呈すものがある。 ○219～221のような大型なものと，214，218のような小型なものがある。	○口縁部内外面は横ナデしており，口縁拡張面は，9条の櫛描平行沈線文を施すものが多いが，7～11条のものもある。 ○体部外面は刷毛調整の後，底部から体部上半にかけて篦磨きしており，部分的に肩部にまで及ぶものがある。 ○体部内面は底部に指頭圧痕を顕著に残すが，その範囲は胴部中央付近にまで及ぶ。押圧成形後篦削りを施し，器壁を非常に薄くしている。	○淡茶褐色～暗茶褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を多分に含む。 ○ほとんどのものが肩部付近まで煤付着。 ○217，222，225の肩部に押圧痕が認められたが，これはほとんどのものに付くと思われる。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
227～230	高杯形土器	○口縁部は斜め外方に著しく延び，杯部は非常に浅い。特に230はほぼ水平を呈す。 ○脚柱は短かいが，「ハ」の字状に広がる脚裾部の器高はやや高い。	○いずれも残りは良くないが，刷毛調整の後，外面及び杯部内面は篦磨きしたものと思われる。 ○脚部に4孔を穿つ。	○淡黄褐色～黄褐色を呈し，0.5㎜以下の砂粒を僅かに含む。
231～234	高杯形土器	○杯部が椀状を呈すもので，232の脚柱部は太く，低く広がる裾部をもつ。	○器表面の残りが悪いが231，233の内外面は篦磨きしており，232の杯部及び脚裾部外面には刷毛調整痕が残る。 ○裾部に4孔を穿つ。	○茶褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。234は水漉し粘土。
235	高杯形土器	○長い脚柱部に低く広がる裾部をもつ。	○外面は横方向の細かな篦磨き。 ○裾部内面は刷毛調整。 ○裾部に4孔を穿つ。	○赤褐色を呈す。 ○水漉し粘土。
236	高杯形土器	○杯部から急に「ハ」の字状に広がる脚部。	○外面は刷毛調整。 ○内面はナデ。	○淡茶褐色を呈す。 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。
237	高杯形土器 (器台形土器)	○口縁部か斜め外方に延びる。脚部欠損。	○器面磨滅のため不明。	○黄褐色を呈す。 ○水漉し粘土。
238	高杯形土器 (器台形土器)	○上記器形の脚部と思われる。	○外面は刷毛調整，内面は刷毛調整ののちナデ。裾部に4孔穿つ。	○淡赤褐色で，1㎜前後の砂粒含。
239～241	坩形土器	○口縁部が斜め外方に延びる小型の丸底壺。 ○体部は口径に対して高さが低いものと，ほぼ同様のものがある。	○239体部外面は篦削り，240の底部付近及び，241の体部は刷毛調整。 ○内面はナデか？	○赤褐色及び黄褐色を呈し，0.5㎜前後の砂粒含。
242	鉢形土器	○ボウル状を呈すもので底部は丸い。	○外面に叩き目痕が残る。内面はナデている。	○黄褐色で2㎜前後の砂粒含。
243	鉢形土器	○底部に台が付くもの。	○現存する箇所は全て押圧及びナデで仕上げている。	○黄褐色で0.5㎜以下の砂粒含。
244	鉢形土器	○口縁部は斜め外方に延び，端部は凹みを呈す大型の鉢。	○口縁部内外面は横ナデ，体部外面は荒い刷毛調整，内面は磨滅しているが篦削り痕が見られる。	○乳白色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。

12) D — 12

245～247	皿形土器	○245・246が完形，247は破片である。 ○口縁部は外上方に広がり，端部は丸く収める。 ○底部は平底である。	○口縁部は横ナデしている。 ○底部内面はナデ。外面は糸切り後，篦おこしするものと篦おこしだけするものがある。	○245は茶褐色，246は黄白色，247は黄褐色を呈す。微砂粒を多分に含む。
248	皿形土器	○小皿と同じ形態であるが，器壁が薄い。	○底部は，篦おこししている。	○黄褐色で，1㎜大の砂粒含む。
249	椀形土器	○高いしっかりした高台の破片である。	○横ナデしている。	○淡黄白色を呈し，微砂含む。

住　居　址

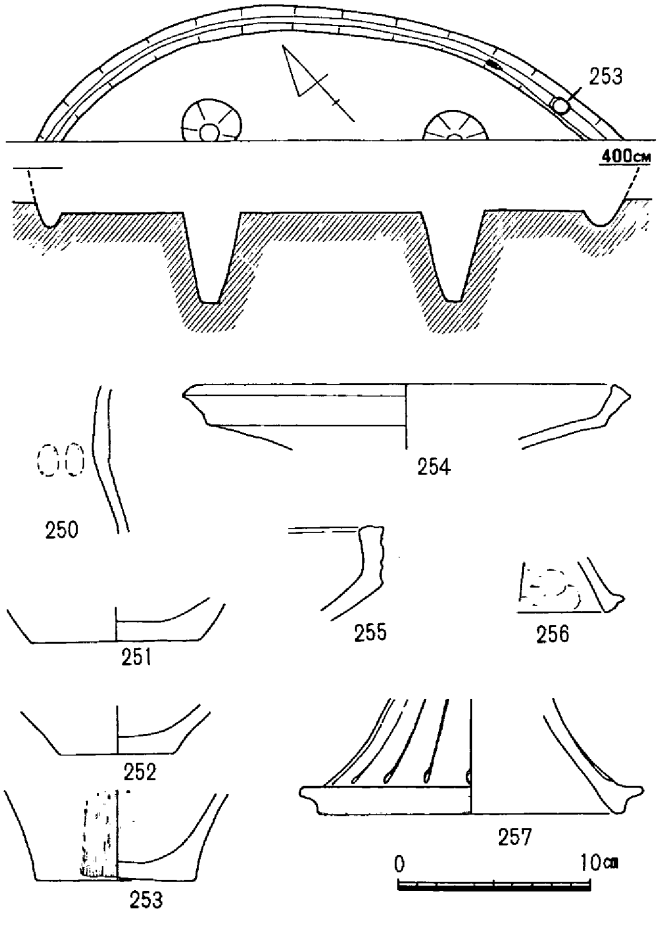
1)　2—H—4

2区の中央部南端に位置する。遺構の北方の一部分しか検出していないが，形態は円形の近い隅丸方形と思われる。壁体溝と柱穴を伴う。壁体溝は幅20cm，深さ10cmを測り，「U」字形の断面を呈す。溝内からは甕形土器253が出土している。柱穴は2本検出でき，床面からの深さは70cm，直径はいずれも40cmを測る。他の住居址から推定すれば，柱は4本伴うと思われる。出土した土器から考えて百・後・Ⅰのものであろう。　（浅倉）

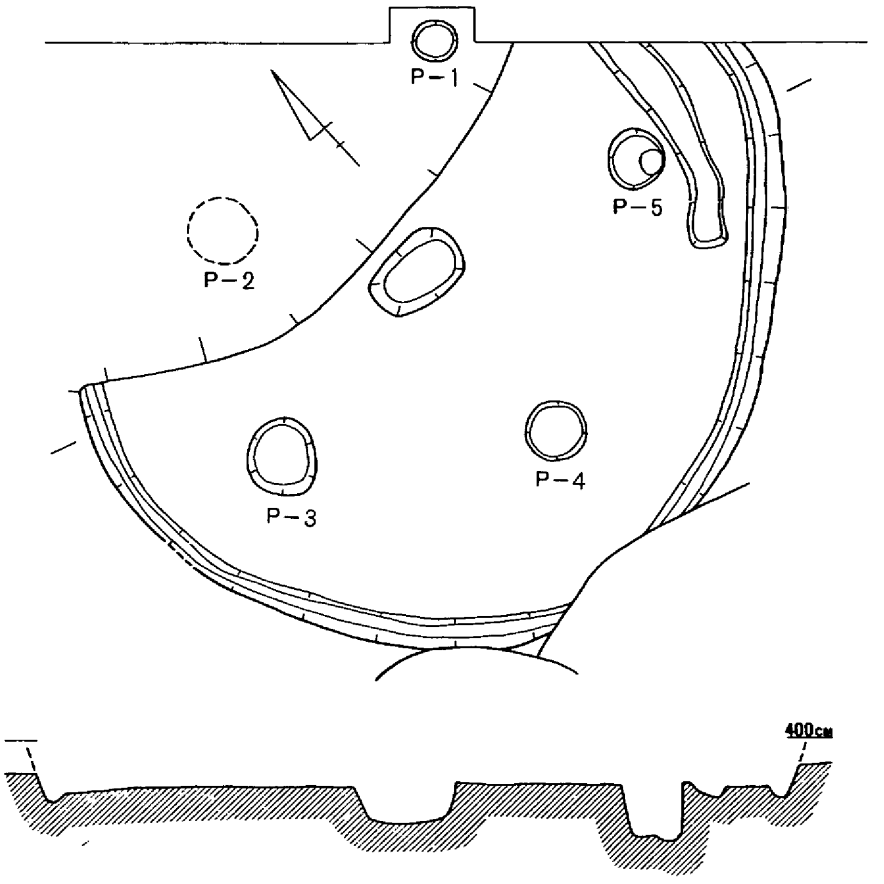
2)　3—H—4

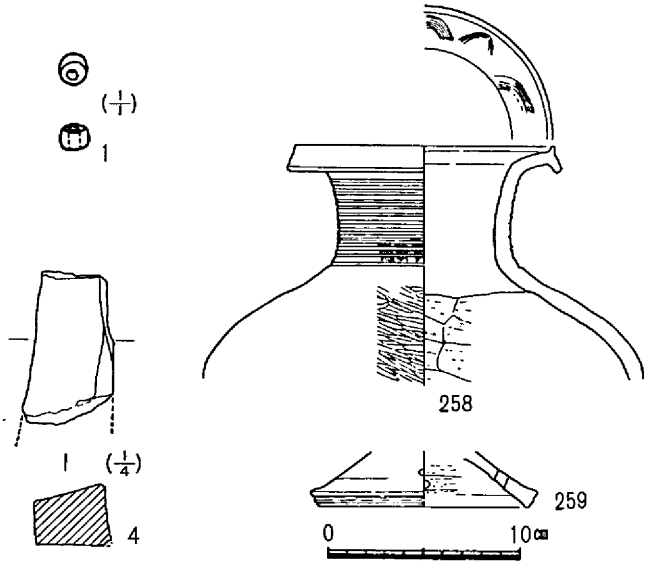
3区中央付近から検出されたもので，3—H—2及び3—H—5によって一部切られている。平面プランは推定550cm×600cmの楕円形を呈し，現存壁高は15cmを測る。柱穴は5個と推定している。そのうち2個は3—H—2の床面下から検出され，P—2は3—H—2のP—1に完全に破壊されていた。柱穴間の距離はP—1～P—5間及びP—2～P—3間が200cm前後，他は230cm前後を測る。柱穴の深さは各々40cm前後を測る。住居址中央からは暗褐色粘質土が堆積する長さ80cm×50cm，深さ30cmの長方形の土壙を検出した。また，住居址東隅からは壁体溝の内側約30cmの所に，幅30cm前後，深さ8cm程の浅い溝状を呈す部分を検出した。なお床面には薄い炭化物が付着する箇所が認められ，火災を受けたものと考えられる。

一方，住居址内には全面にわたって焼土が堆積していた。当初と



第38図　左岸用水2－H－4遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物





第39図　左岸用水３－Ｈ－４遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物

れらの焼土は火災のために堆積したものと考えていたが，断面観察の結果，褐色～白色に至る様々な焼土がブロック状に堆積していたことや，その量の膨大なことから，当住居址の火災放棄後，付近の焼土を集め投げ込んだものと考えている。

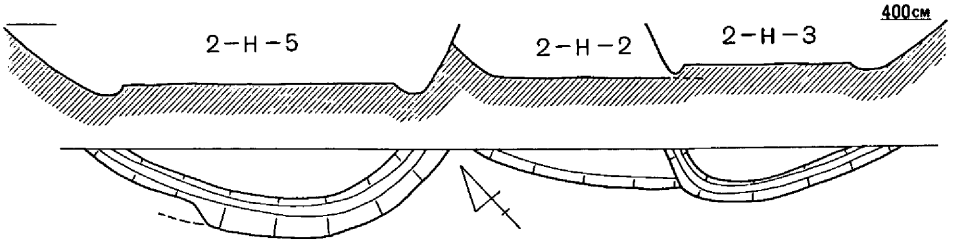
遺物は，覆土及び床面から出土しているがいずれも破片で，数は少ない。**258**，**259**は床面出土の破片である。ガラス小玉**1**は，床面から検出したもので，径約0.4cm，孔の径0.12cm，長さ約0.3cmを測り，

青色を呈す。砥石4は，P－1から出土したもので，上下ともに欠損しているが4面ともよく使用している。擦痕は顕著ではないが，裏面中央部に縦方向，縁辺部の一部に斜め方向に走っている。

以上，遺構のあり方及び，出土遺物から百・後・Ⅰの時期と考えられる。　（江見）

3）2—H—5

2区の北西隅に位置する。遺構の南端が少し検出できただけであるが，隅丸方形を呈するものと考えられる。壁体溝だけを伴う。壁体溝は幅約25cmで，床面からの深さは約5cmを測る。検出時の壁の高さは最も残存の良い所で床面から約25cmを測る。甕形土器**260**は東の端の床面に土圧でつぶれた状



第40図　左岸用水2－H－5・2－H－2・2－H－3遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）

態で出土した。この住居址の時期は出土した土器と遺構の形態から百・後・Ⅰに比定できる。

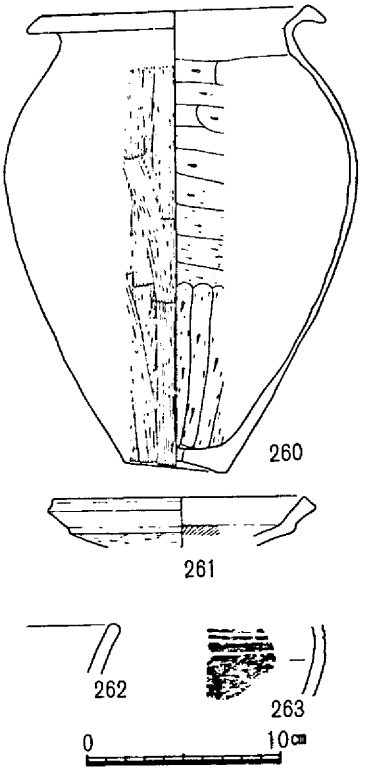
4）2—H—2

2－H－5と2－H－3の間に位置する。一部分検出できた。形態は円形かあるいは隅丸方形か判断しがたい。断面観察によると2－H－5と2－H－3のいずれにも切られていることから，両者より古いことが分る。遺物は時期の判別の出来るものが出土していない。

5）2—H—3

2－H－2と2－P－20の間に位置する。形態は方形に近い隅丸方形であろう。壁体溝の隅丸部分だけが検出できている。断面U字形の壁体溝は，幅10cm，深さ10cmを測る。検出時の壁の高さは床面から約15cmである。遺物は時期を決定するほどのものが出土していない。しかし形態から見て古墳時代初頭に入るのではなかろうか。2－H－6・2－H－1に近い時期と考えている。すなわち百・古・Ⅰである。

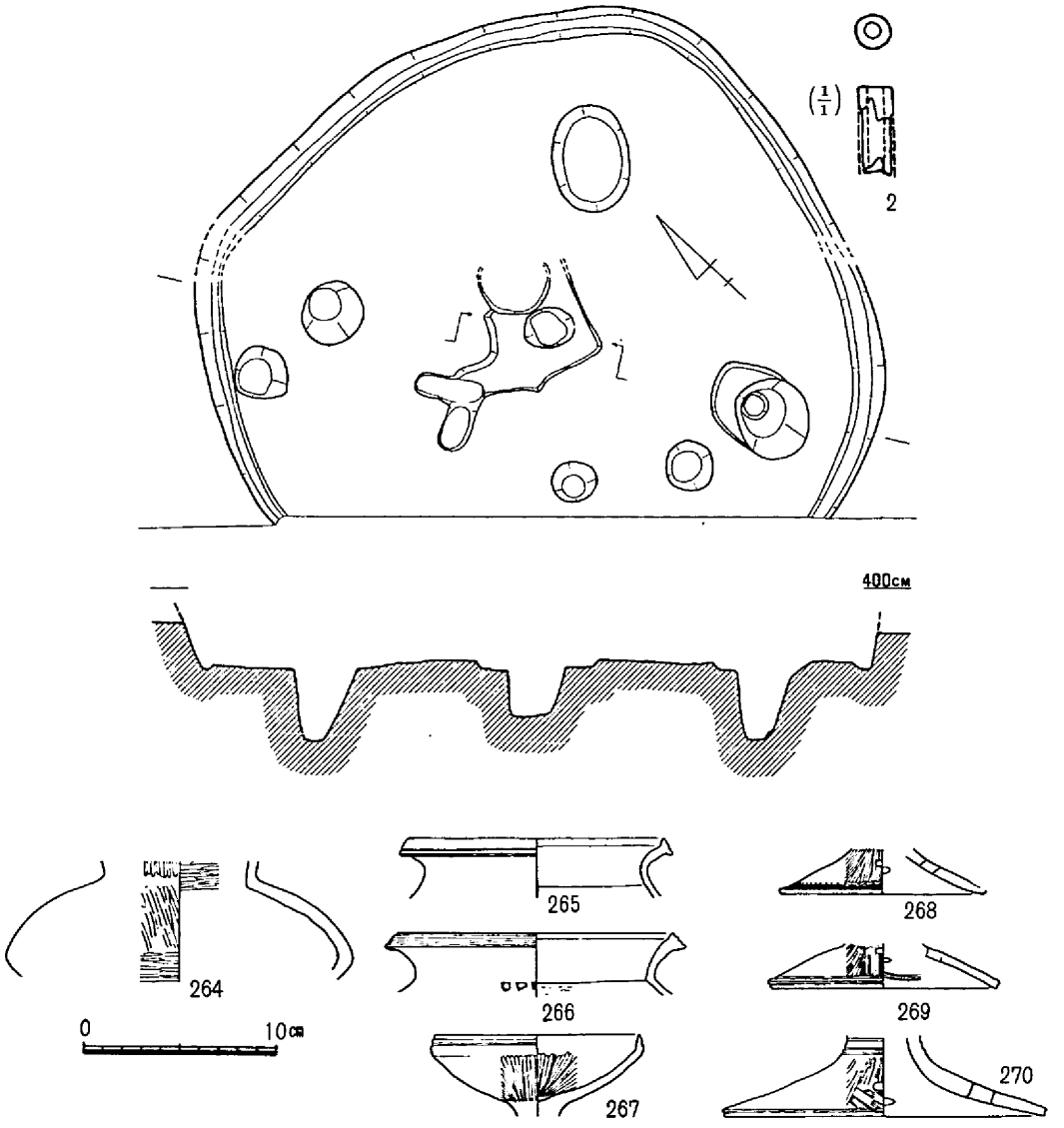
（浅倉）



第41図　左岸用水
2－H－5出土遺物

6） 5—H—1

5区中央付近から検出されたもので，D－2を切り，5－P－10によって切られている。住居址は約¾を検出しており，残りは調査区外に延びる。平面プランは一辺500cm前後のやや胴張りの隅丸方形を呈し，現存壁高は20cmを測る。柱穴は4本柱と推定され，そのうち3個検出している。柱穴間の距離は250cm前後，深さはいずれも55cmを測る。また柱居址中央には約5cm程の一段下がる不整形の浅い凹みを呈す部分があり，さらに長さ40cm×30cm，深さ35cmの中央ピットが検出された。ピット内は暗茶褐色粘質土が堆積していた。



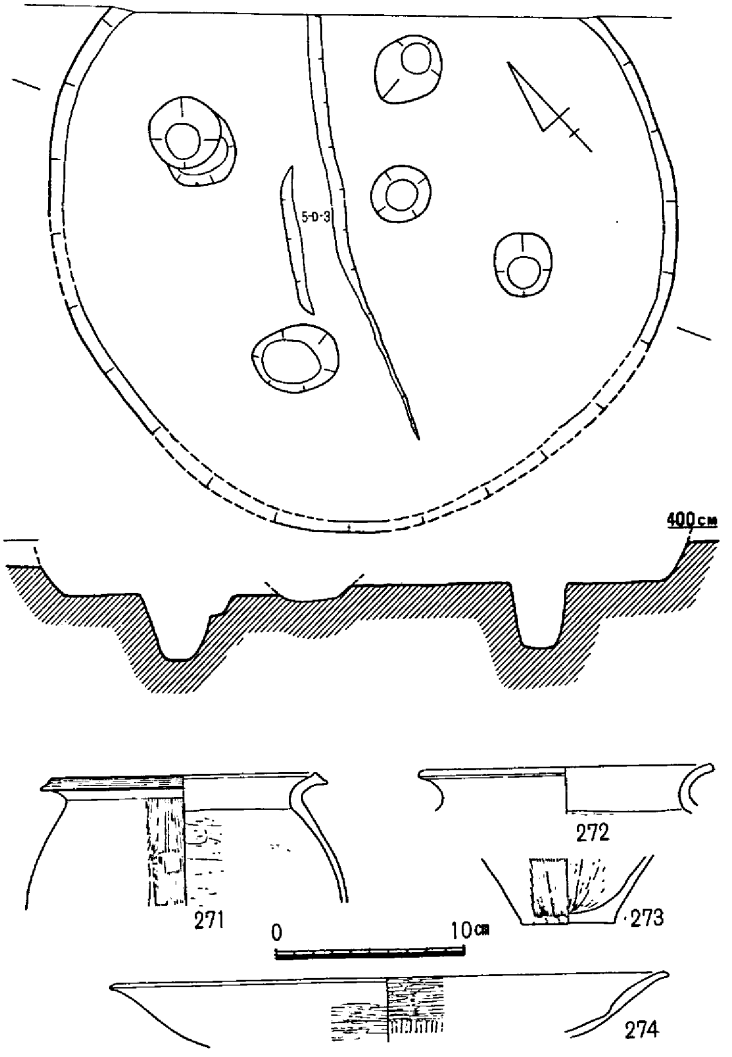
第42図　左岸用水5－H－1遺構図（1/60）及び出土遺物

264～270はいずれも覆土中から出土したもので，破片である。管玉**2**は床面から出土したもので残りは非常に悪い。現存径0.48㎝，長さ1.2㎝，孔の径0.2㎝を測る。色調は濁った水色を呈す。鑑定の結果，鉛ガラスの可能性が強い。(註19)

以上，土器の形態及び後述する5－P－15との切り合い関係から，百・後・Ⅱの時期と考えられる。

7)　5—H—2

5－H－1の東側から検出されたもので，D－2（弥生時代前期）を切っており，5－D－3（百・古・Ⅰ）に切られている。平面プランは推定径500㎝前後の円形を呈し，現存壁高は15㎝を残す。なお壁体溝は確認出来なかった。柱穴は4本柱で，柱穴間の距離は200㎝前後，深さはいずれも50㎝前後



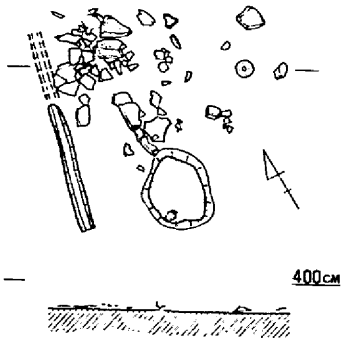
第43図　左岸用水5－H－2遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物

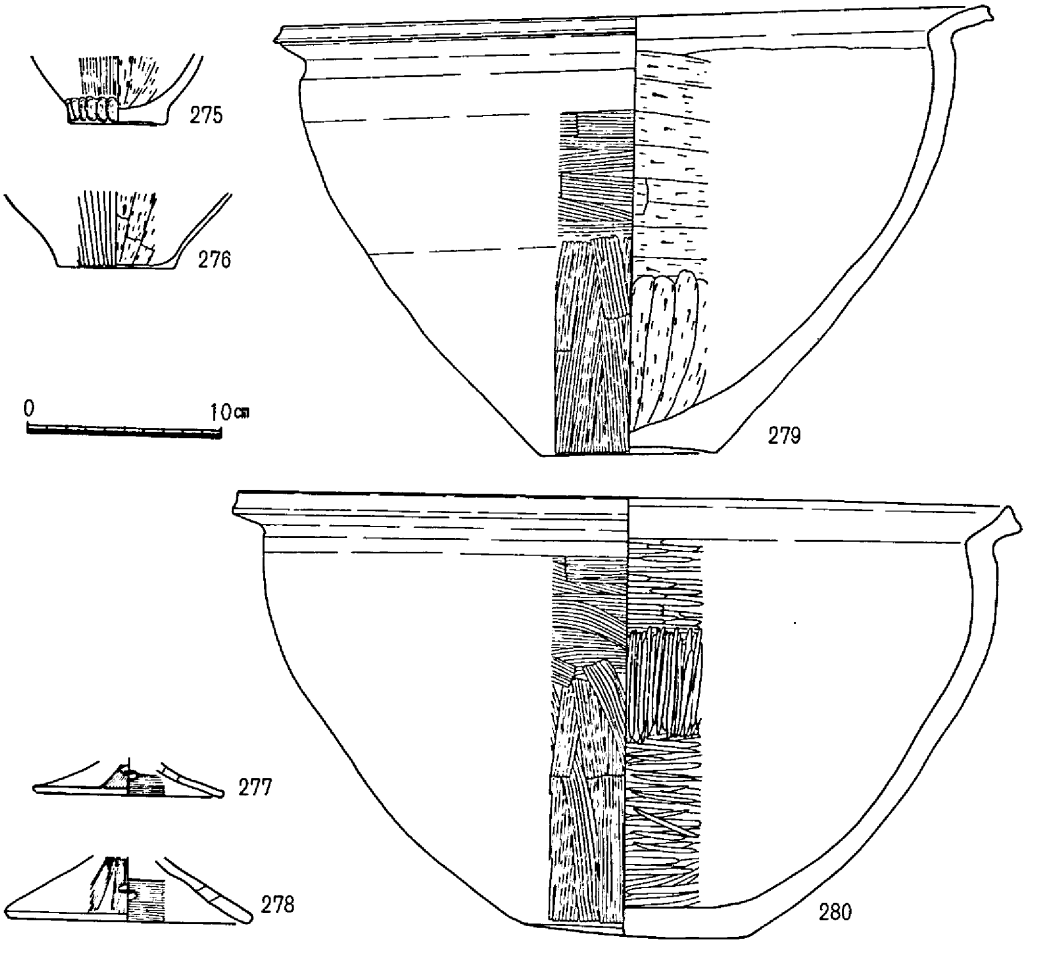
を測る。なお柱穴の位置関係は正四角形を呈さず，やや菱形を呈している。また住居址中央よりやや東寄りの所から直径約50㎝，深さ30㎝の中央ピットを検出している。

遺物はいずれも覆土中から出土した破片で，5－H－1と同様百・後・Ⅱのものと考えられる。(江見)

8) 5—H—3

5－H－2の南東に位置する。壁体溝と炉を伴うが形態は判断できない。壁体溝の残存状態は極めて悪く，長さ約100㎝程しか残っていない。幅約10㎝，深さ約5㎝を測る。炉は長径70㎝，短径55㎝を測る不整楕円形で赤褐色によく焼き固っている。土器は床面に貼り付いた状態で出土している。時期はこれらの土器から百・後・Ⅱに比定したい。





第44図　左岸用水5－H－3遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物

9）3—H—2

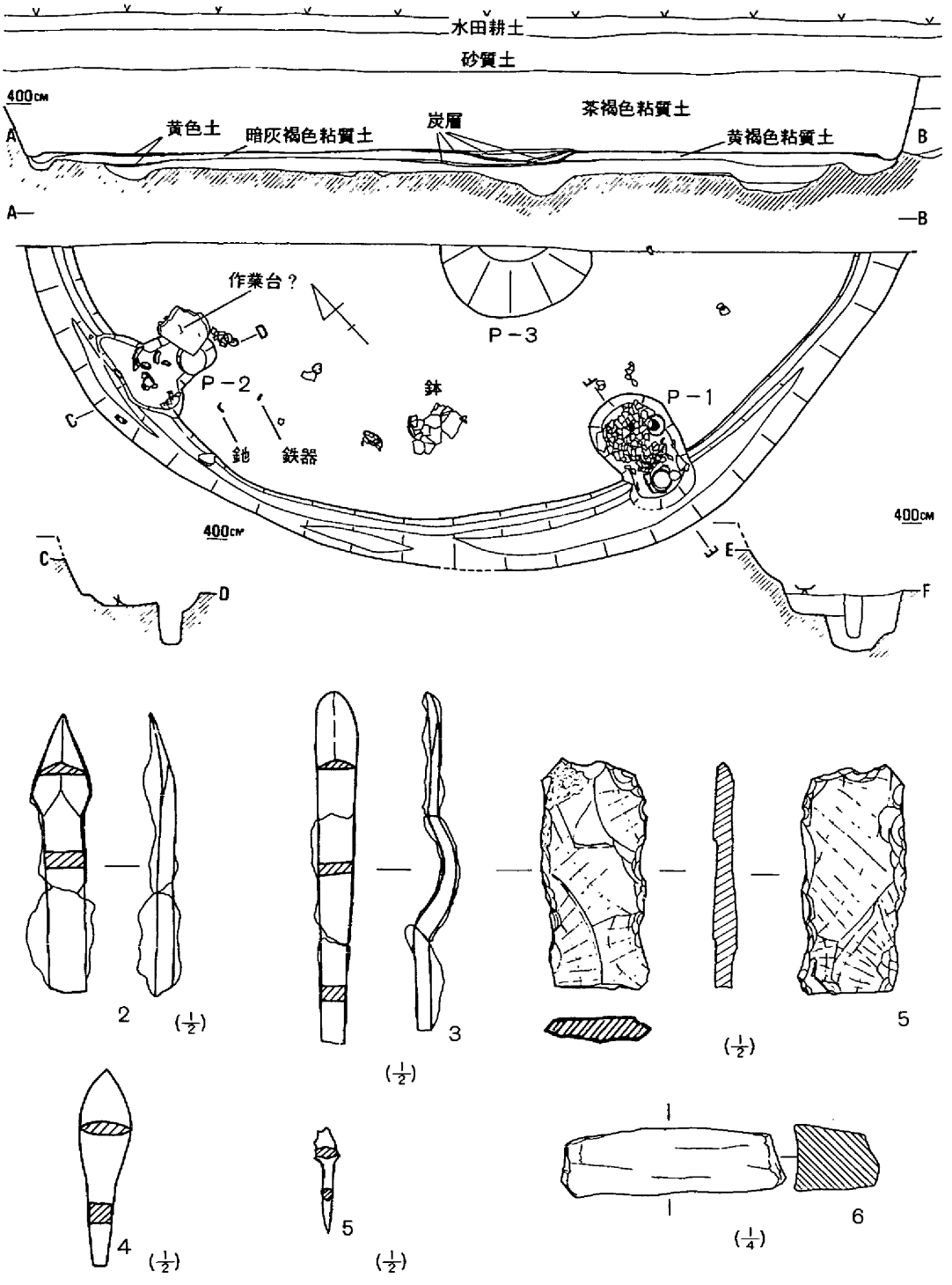
3—H—1と3—H—4の間に位置する。3—H—1に切られ，3—H—4を切っている。形態は円形を呈すると考えられる。約半分を検出している。壁体溝と柱穴2本と中央ピットを伴う。断面観察によれば少なくとも4回建て換えが認められる。ここで説明をするのは最後の住居址である。検出時の壁の高さは床面から約30cmある。断面U字形の壁体溝の幅は約15cm深さは約5cmを測る。柱穴は2本検出できているが，4本と考えられる。P—1は長径110cm，短径60cmの不整楕円形で床面からの深さ55cmを測る。これは掘り方で，柱痕跡は直径12cmで長さ37cmを測る。図のようにP—1は大量の遺物が投げ込まれた状態である。この住居址放棄の際，何らかの祭りをしたものであろうか。P—2は長径90cm，短径50cm不整楕円形に長径95cm，短径40cmの不整楕円形がプラスした形で床面からの深さ45cmを測る。少量の遺物と河砂利が混入していた。このP—2のすぐ北には一辺約40cm，厚さ約10cmの偏平な形をした花崗岩が残存していた。これは調理台かあるいは作業台であろう。P—1とP—2の柱間は400cmを測る。P—3は中央ピットと考えられる。半分しか検出できていないが，長径約130cmの楕円形を呈すると思われる。

この住居址ではP—1・P—2出土の遺物の他に床面に密着した遺物がかなり多い。鉄器は鉋2点と鉄鏃1点，銅鏃1点，石器は砥石1点，石槍？1点が出土している。鉋**2**は現存長8.35cm，刃部最大幅1.7cm，刃部最大厚0.3cm，刃部長3.0cm，茎部長5.35cm，茎部幅1.2cm，茎部厚0.4cm，重量20gを測る。蛇頭形の刃部に偏平な茎部が付いたものである。鉋**3**は篦形の刃部に偏平な茎部（途中が折れ曲っている）が付いたもので，現存長10.7cm・刃部長約3.0cm・刃部最大幅1.3cm・刃部最大厚0.25cm・茎部長7.7cm・茎部最大幅1.1cm・茎部最大厚0.4cm・重量12.4gを測る。鉄鏃**4**は尖根式で現存長5.9cm・刃部長3.2cm・刃部最大幅1.5cm・刃部最大厚0.4cm・茎部長2.7cm・茎部一辺0.6cm・重量7.3gを測る。銅鏃**5**は茎部と刃部の下端が残存している。現存長3.2cm・茎部長2.0cm・茎部直径0.5cm・重量1.0gを測る。砥石**6**は黄白色の砂岩製で二面に使用痕が認められる。現存長13cm・幅4.0cm・厚さ5.0cm・重量415gを測る。石槍**5**はサヌカイト製で石庖丁とも考えられる。この住居址に伴うかどうか疑わしい。現存長6.8cm・最大幅3.1cm・最大厚0.7cm・重量20.1gを測る。この住居址の時期は出土した遺物から見て百・後・Ⅲと考えられる。

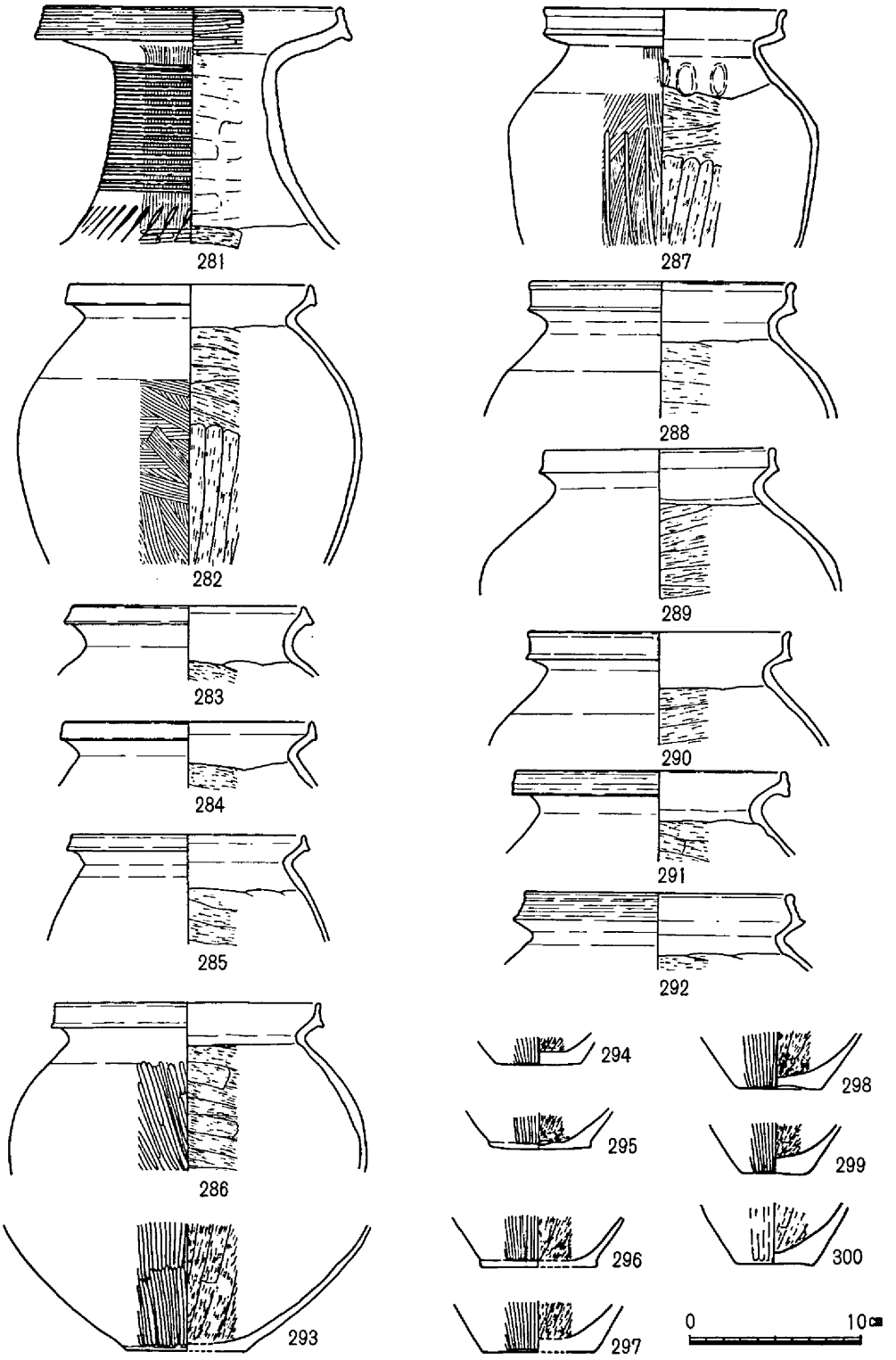
10）4—H—1

D—4とD—5の間に位置し，4—H—2に切られている。壁体溝と柱穴3本および中央ピットを伴う胴張りの隅丸方形プランを呈す。ほぼ全体の⅔を検出している。一辺4.5mを測り，検出面から床面までの深さは約12cmである。埋積土はD—8・D—5等を埋めている粗い砂である。壁体溝は断面U字形を呈し，幅13cm・深さ5cmを測る。柱穴は3本を検出しているが，明らかに4本あるものと考えられる。床面からの深さ約80cm・直径約70cmを測り，柱間は250cmと210cmである。4本を結ぶと長方形に成ると思われる。中央ピットは，長径110cm・短径約70cmの楕円形で深さ約50cmを測る。

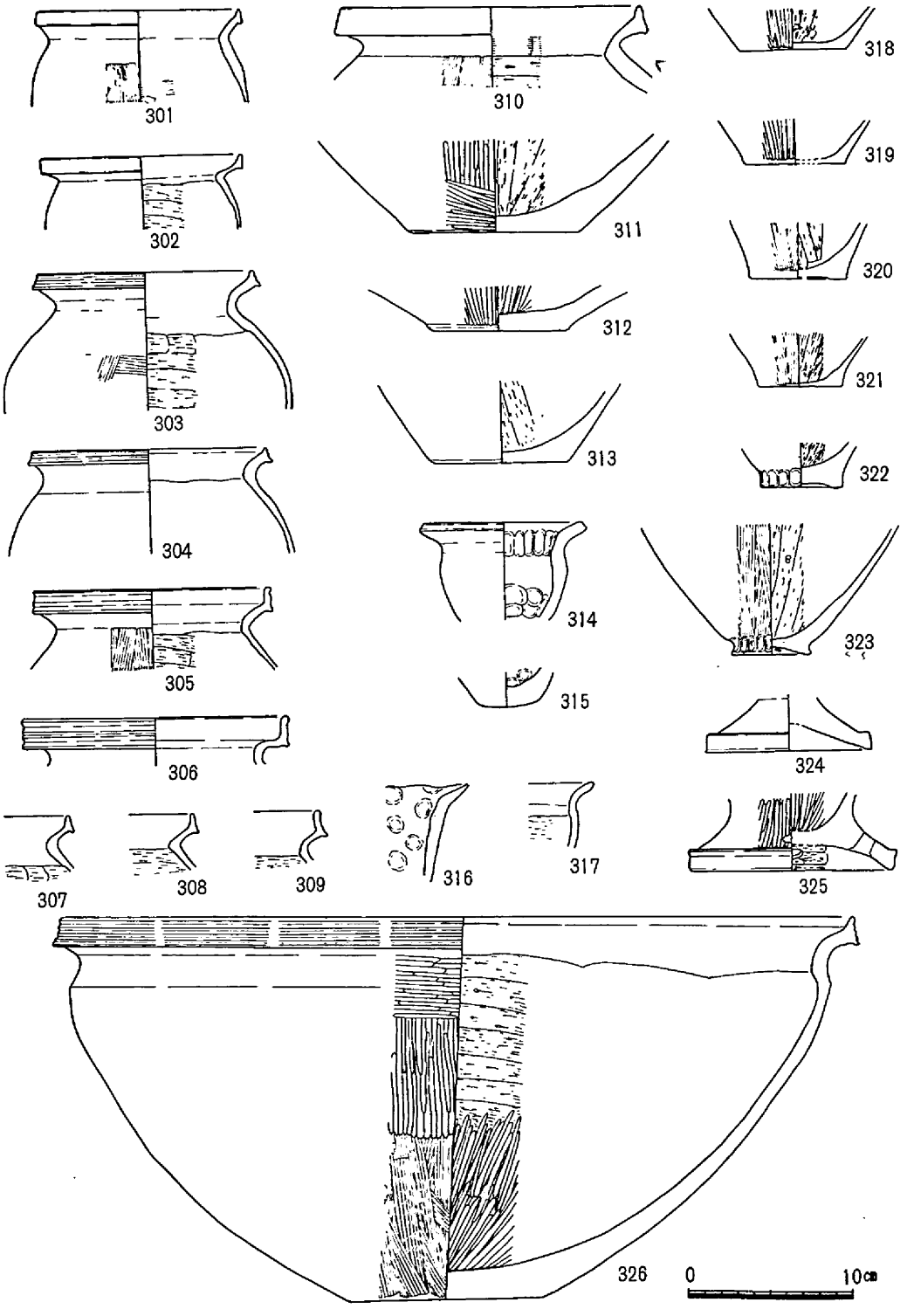
遺物は土器細片が少量と砥石1個および鉄鏃と考えられる鉄片1点が出土している。砥石**7**は黄褐



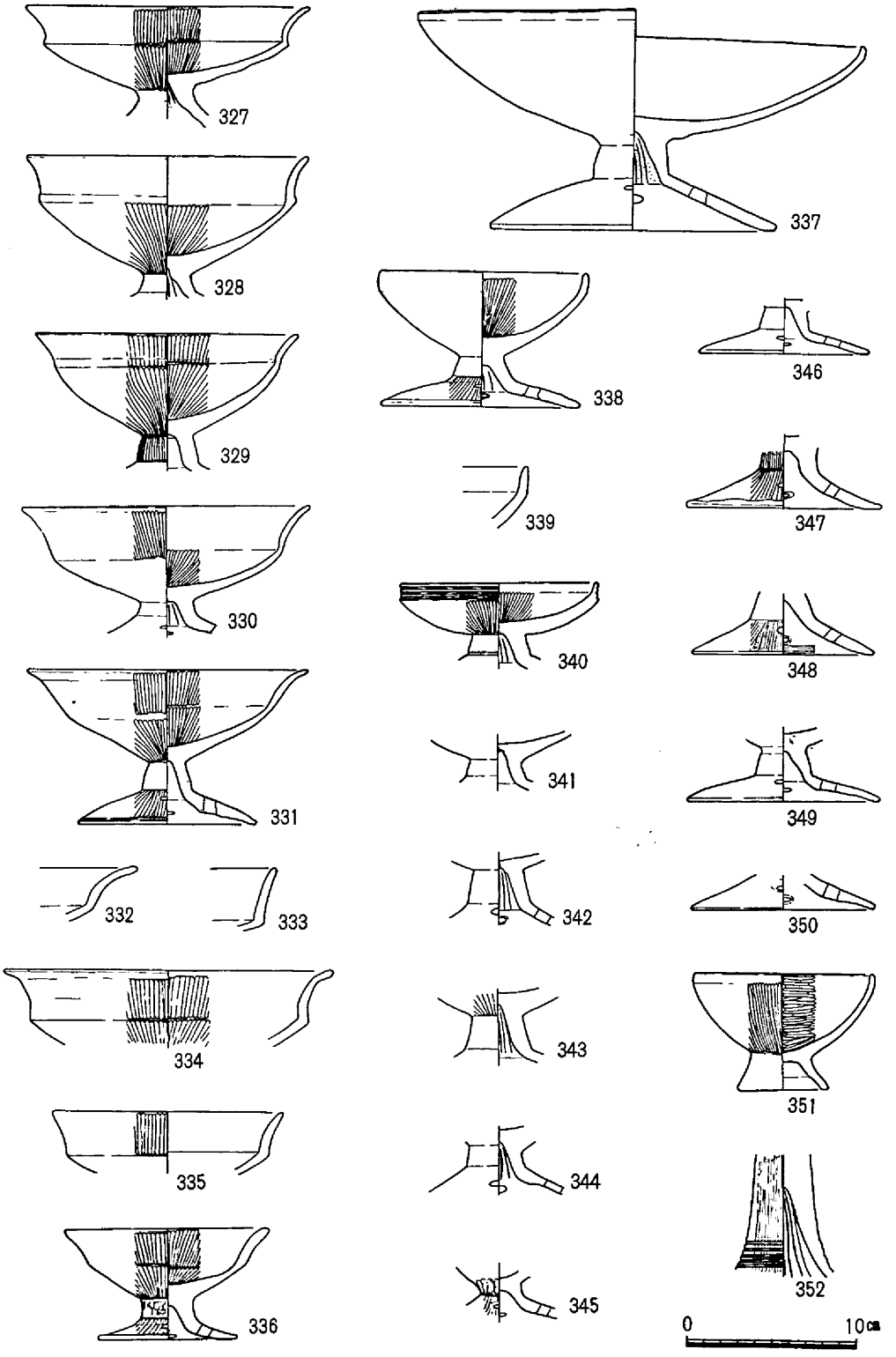
第45図　左岸用水3－H－2遺構図（1/60）及び出土遺物



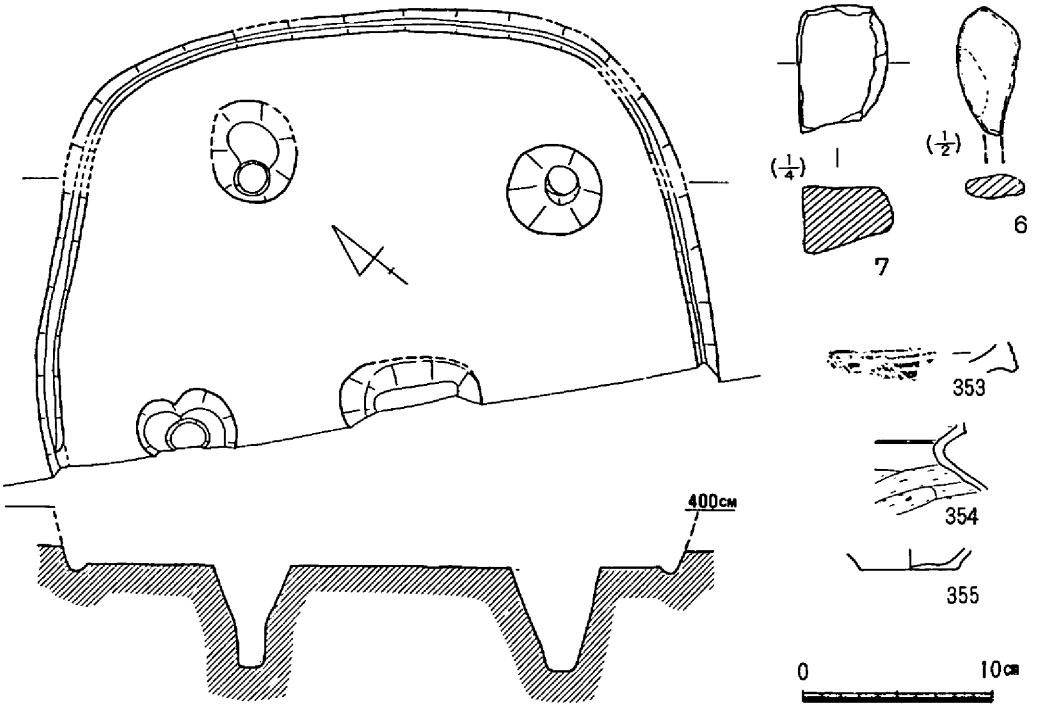
第46図　左岸用水3－H－2・P－1出土遺物



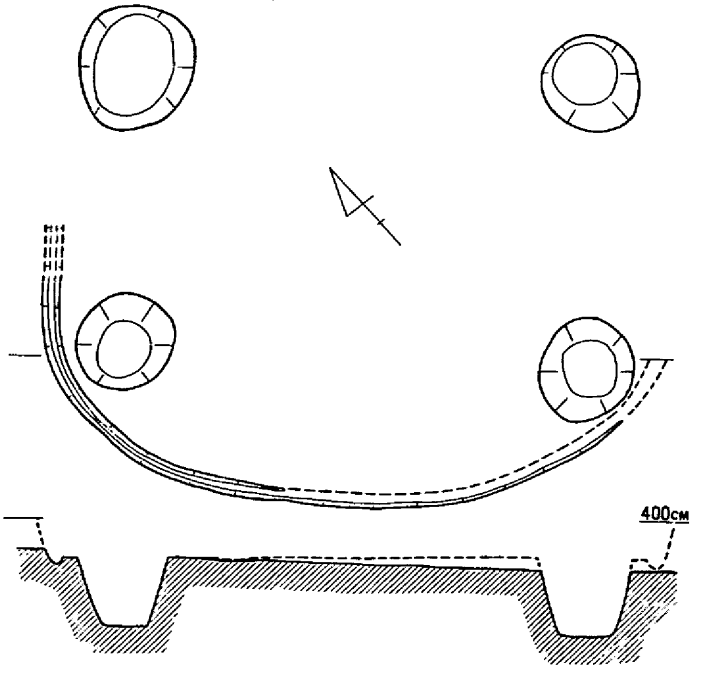
第47図　左岸用水３－Ｈ－２出土遺物（1）



第48図　左岸用水３－Ｈ－２出土遺物（2）



第49図　左岸用水4－H－1遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物



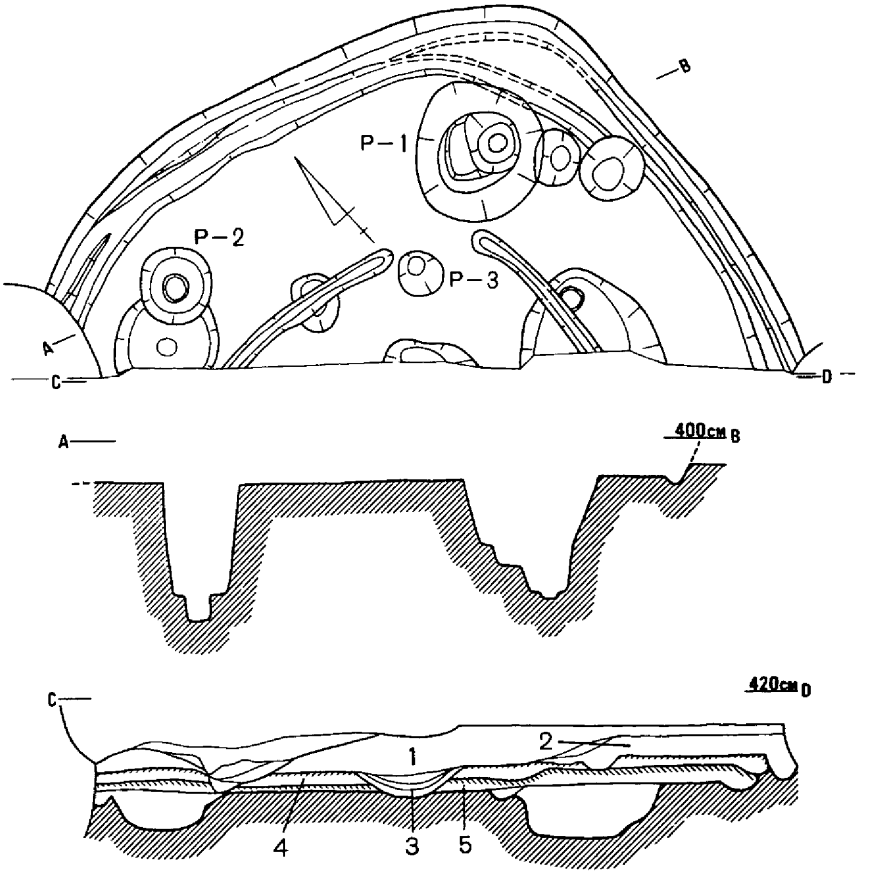
第50図　左岸用水3－H－7遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）

色の砂岩製で一面だけを使用している。幅5㎝・長さ6.5㎝・厚さ3.5㎝・重量155ｇを測る。鉄片6は，長さ3.4㎝・最大幅1.6㎝・厚さ0.6㎝・重量4.4ｇを測る。この住居址の時期は，出土遺物と砂の堆積から考えて百・後・Ⅲと考えたい。なお，この砂の堆積は百間川遺跡内で普遍的に見られる水田址が埋まった時期と一致する。酒津式に併行する。

11）3—H—7

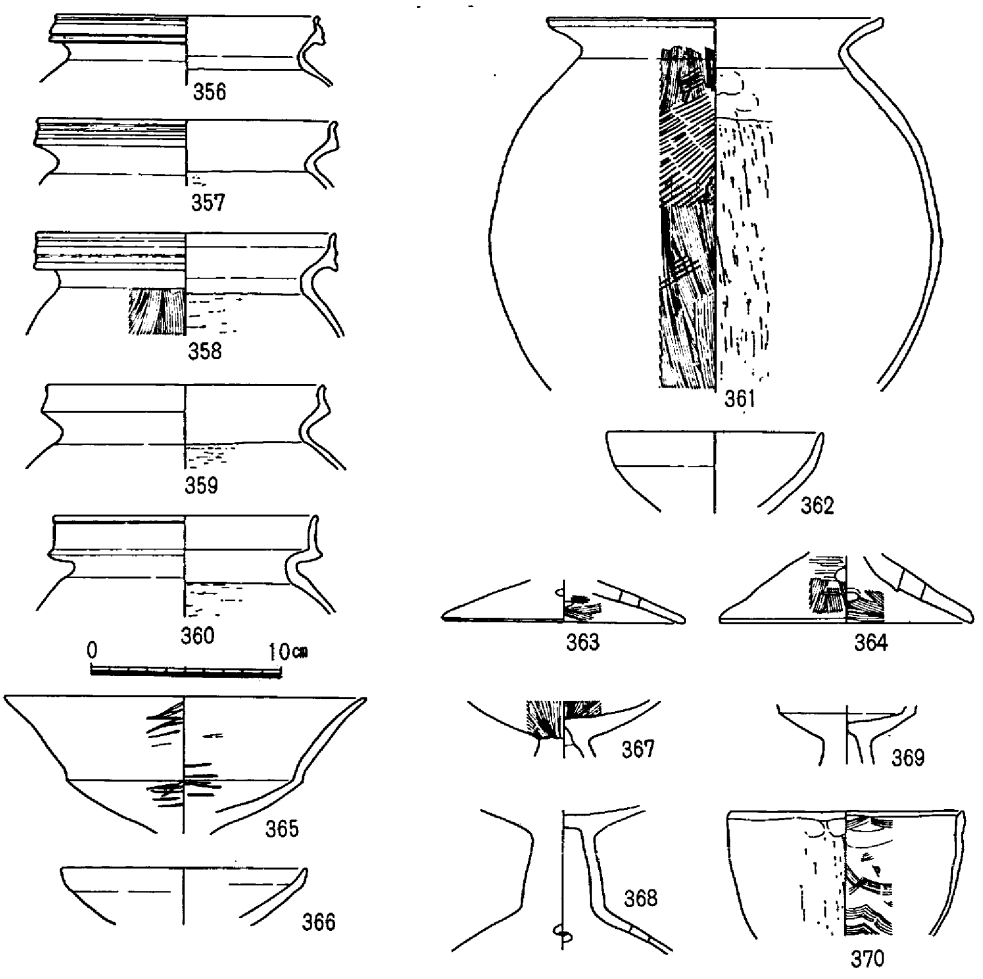
3—H—1・3—H—2と重複している。4本の柱穴と壁体溝が残る。柱穴は，いずれもほぼ円形で，直径70～100㎝・深さ60～80㎝を測る。断面形がU字形を呈する壁体溝は，幅10㎝・深さ0～5㎝を測り，南東辺にだけ残存している。柱間は，長辺3.5ｍ・短辺2.4ｍを測る。

遺物は，弥生前期と縄文晩期の土器細片が出土しているだけで，混入と考えられる。柱穴と壁体溝の位置が接近しすぎているので併存する可能性は少ない。竪穴住居址と掘立柱建物の重複とも考えられる。したがって時期は，明確にできないが，切り合いから3—H—1・3—H—6よりは古いとい



1．黒灰色泥砂層　2．暗灰色泥砂層(床面)　3．褐色砂泥層(炭層との互層)
4．黄褐色泥砂層(床面)　5．暗灰色泥砂層(床面)

第51図　左岸用水3－H－5遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）



第52図　左岸用水3－H－5出土遺物

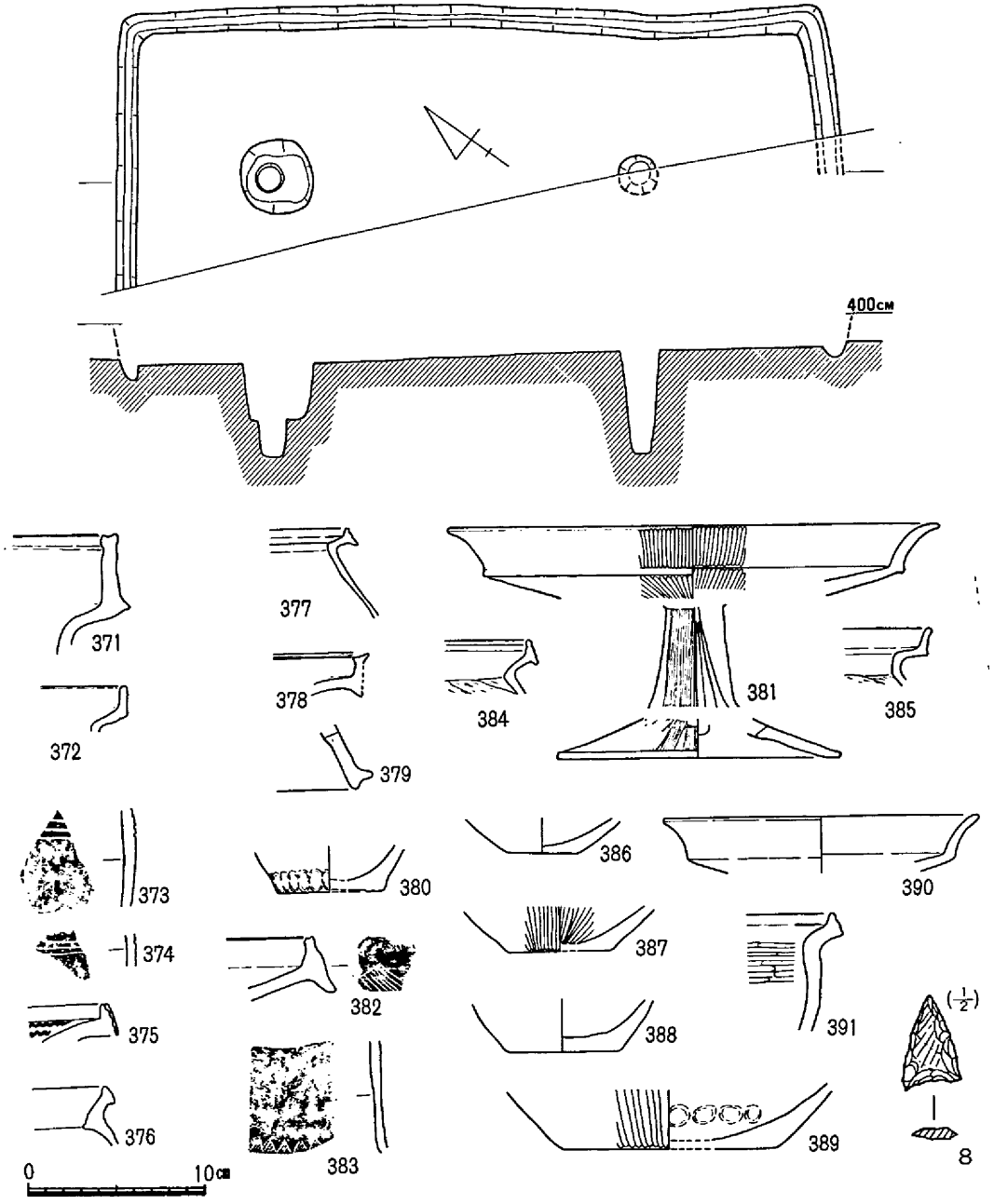
えるけれど，3—H—2との関係は，精査したにもかかわらず判明しなかった。　（浅倉）

12）3—H—5

3—H—4の南から検出されたもので，3—H—3及び3—井戸—Ⅱによって一部切られている。また，遺構は北半分を検出しており，南半分は調査区外に延びている。平面プランは一辺500cm前後の胴張りの隅丸方形を呈すと推定される。住居址はC—D断面図から明らかなように3度の建て直しが確認され，その度に床面は少しずつ高くなり，遺構も拡幅している。柱穴は4本柱と推定されるが，明らかに当住居址に伴うと考えられるものは，最終面に残されたP—1・2のみであった。柱穴間の距離は280cmを測り，深さはいずれも90cmを測る。住居址中央からは長さ80cm前後，深さ25cmの土壙を検出しており，土壙内には黄褐色砂混と炭の互層がみられた。また土壙のまわりには，住居址と平行して幅15cm前後，深さ8cm前後の浅い溝が，一部途切れた状況で検出された。住居址最終面以

前の形態は断面図からその存在が確認されたものの，平面プランにおいては明らかに出来なかった。

356～360はＰ－１，**361**はＰ－３，**362～364** は最終の壁体溝，**365～370** は覆土中から出土したものである。いずれも破片のため時期決定し難いが，３－井戸－Ⅱとの切り合い関係から，百・古・Ⅱより古く，百・後・Ⅳを遡らない時期と考えられる。　（江見）



第53図　左岸用水４－Ｈ－２遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物

13)　4—H—2

4—H—1の上部に在って，方形あるいは長方形の平面形を呈する住居址である。一部分しか検出できていないが，北東の一辺が約600cmを測る。壁体溝と柱穴を伴う。壁体溝は，断面U字形で，幅15cm・深さ10cmを測る。柱穴は2本検出したが，4本柱と考えられる。法量は，柱穴直径60cm・床面からの深さ80cmである。柱間は3.2mある。

出土遺物は，弥生前期から古墳初期までの土器細片少量と石鏃1点である。石鏃8はサヌカイトの打製で，二等辺三角形を呈し，凹基式である。長さ2.5cm・最大幅1.6cm・厚さ0.3cm・重量1.2gを測る。

この住居址の時期は，出土した土器中最も新しい百・古・Ⅰと考えたい。方形プランを呈することからも古墳時代に入っていることが分かる。なお石鏃は混入したものと思われる。　（浅倉）

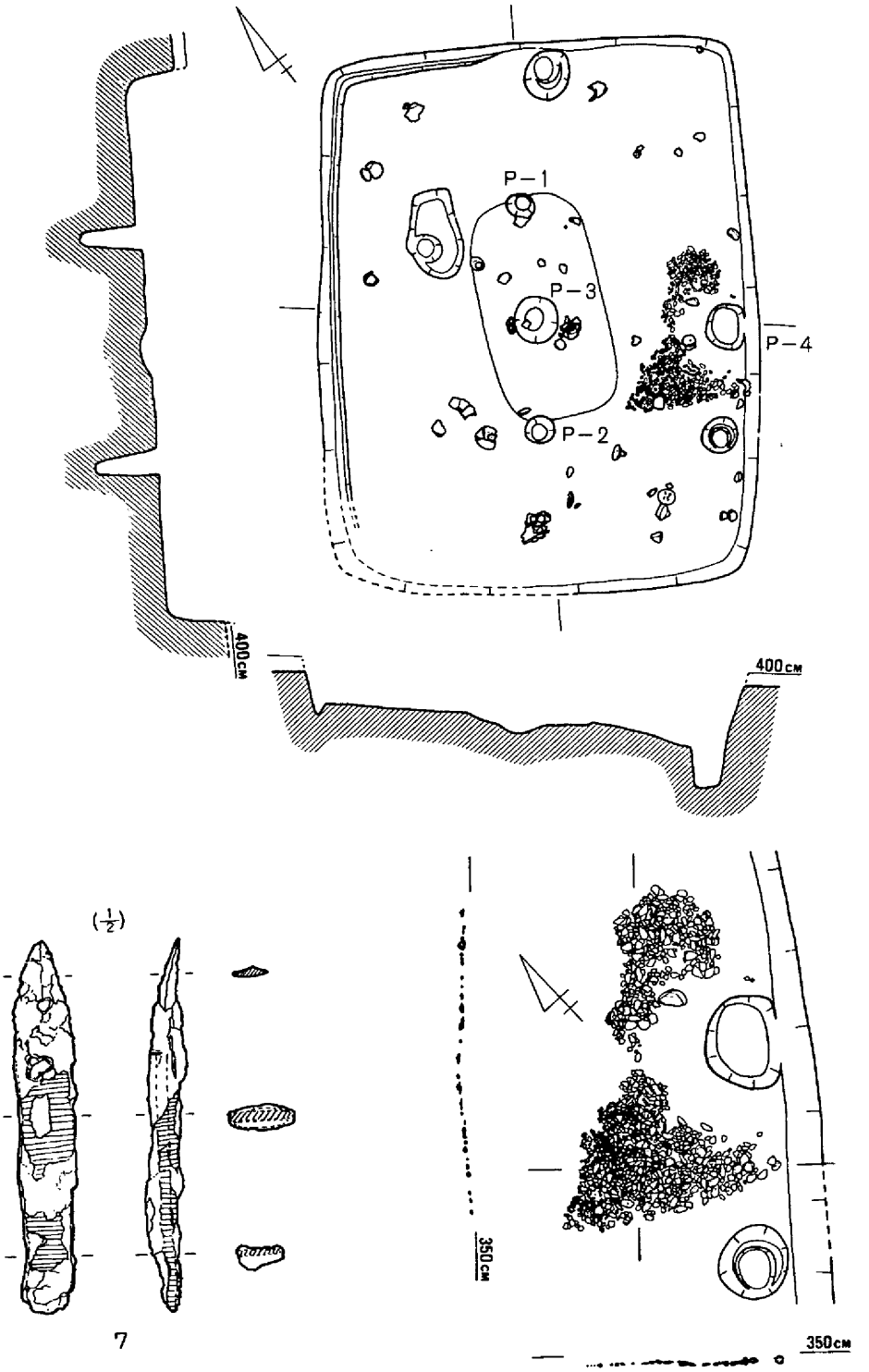
14)　2—H—1

2区の南寄り，1区との境に近いところに位置し，東側に2—井戸—Ⅲがある。住居址の長辺は北東から南西に向い，480cmを測る。短辺は370cmを測り，平面プランは長方形を呈している。現存壁高は50cmを測り，北東から北西の壁に沿って，幅15cm・深さ10cm程の壁体溝が認められたが，この溝は東側では不鮮明になり西側はD—9の影響で検出することができなかった。柱穴は短辺の中心線上に2個（P—1，P—2）が検出された。P—1は径30cm・深さ50cm・P—2は径25cm深さ55cmを測り，柱間は200cmである。また住居址の短辺の壁から柱穴までの距離は140cm，長辺の壁からは180cmである。住居址中央には，径40cm・深さ10cm程の土壙（P—3）が検出されている。住居址中央の床面（100cm×190cm）は踏み締められた様に堅い。ここには焼土はみられず，10cm程の角礫数個が散在している。東西辺の壁際中央の床面には，北東—南西150cm・北西—南東100cm程の範囲に，1～5cm程のジャリ石が敷きつめられている。ジャリ石は概ね1層で，ジャリ石に囲まれた壁際に，40×30cmの長方形に近いプランで，深さ約45cmの柱穴状ピット（P—4）が認められた。これは雄町遺跡第3調査区1号住居址（註20）において入口に推定されているものと同様のものであると考えられ，P—4はハシゴを入れた穴と推定することもできるであろう。

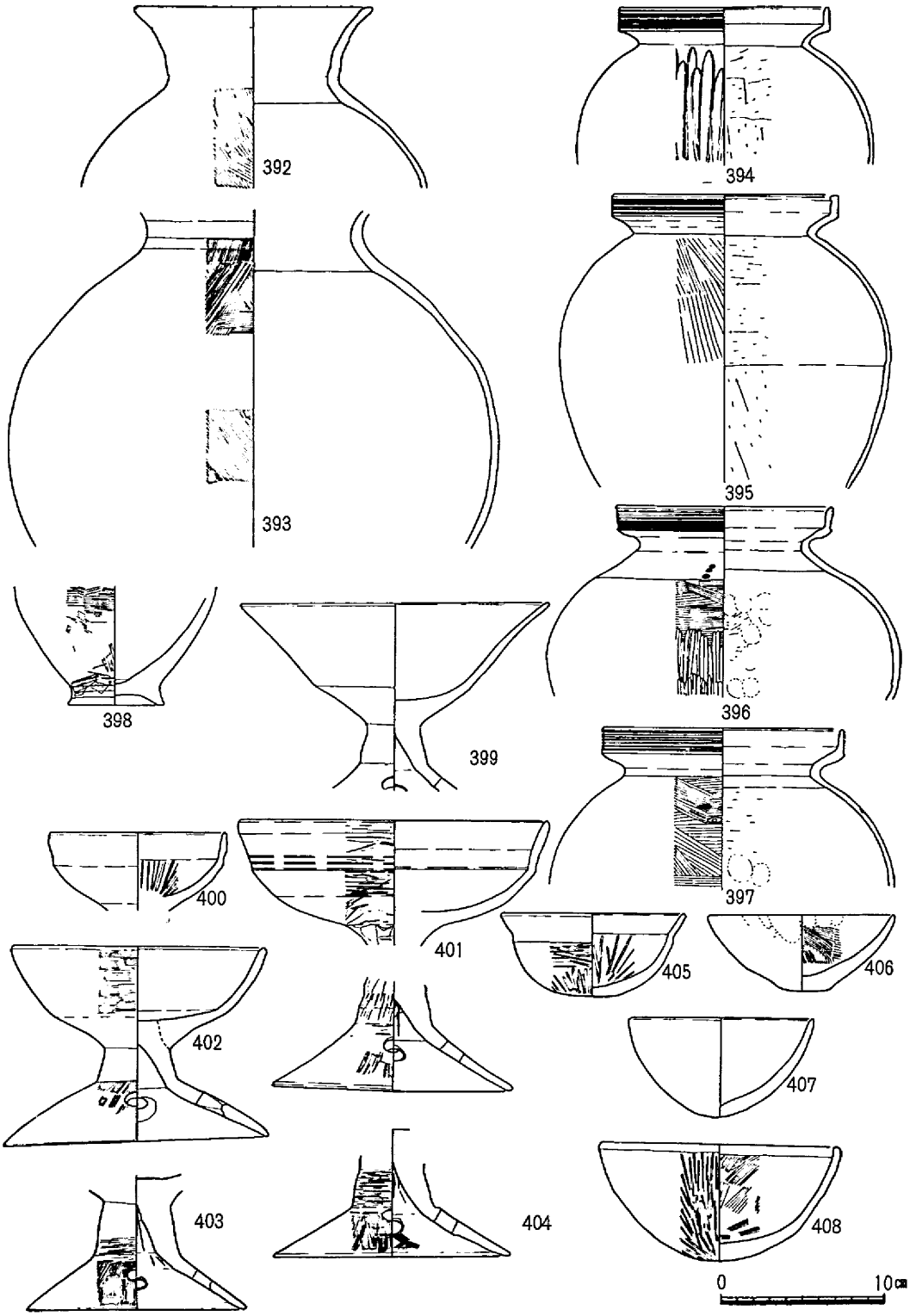
遺物は，ほとんど床面および覆土から出土している。床面から出土したものには，ほとんど完形のもの（**401・402・405～408**）がみられる。また**400**はP—4から出土したものである。北東の壁体溝中からは，ヤリガンナが出土している。このヤリガンナは，先端が両方向から研ぎ込まれ，刃部は反り返っている。刃部の先端より3.5cmのところから部分的に，木質の付着がみられる。全長は10.7cmを測り，中央部で幅1.5cm厚さ0.5cmと最大を測る。

当住居址は，上面を2—P—1（百・古・Ⅱ）に切られており，また西隅を横切るD—9を切っている。

以上，この住居址は百・古・Ⅰの時期と考えられ，東隣に検出された2—井戸—Ⅲと共存していたものと思われる。　（内藤）



第54図　左岸用水2－H－1遺構図（$\frac{1}{60}$・$\frac{1}{20}$）及び出土遺物



第55図　左岸用水２－Ｈ－１出土遺物

15) 1—H—5

平面形態は隅丸長方形を呈す。380×460cmを測る。この住居址の周辺は基盤層からの酸化が進行しつつある場所であると同時に，各遺構の肩が包含層中から切り込まれていることもあり，かなり掘り下げてからようやく検出が可能であった。住居址の外枠を破線で示しているのは，溝などに影響されて確実には検出できなかったところである。この住居址は床面中央に楕円形の浅い土壙（P—3）と方形に近い土壙（P—1），それに円形に近い土壙（P—3）をもつ。

P—1は2—H—1や1—H—1に見られる土壙と住居址の中にしめる位置，規模，形態などが類似しており，この遺構が，これらの時期の住居址に不変的に伴う可能性もある。しかし，その機能については遺構の検出状況からは判断が下せない。しかし，2—H—1に見られるこの種の土壙の周辺の石敷遺構は，出入口の場所を示すものと思われ，とすれば，機能は不明としてもこの種の土壙の存在する場所がすなわち出入口と見ることはできよう。

P—2には底に接して厚さ約5cmの炭混り層，その上に焼土塊がみられるが，床面は焼けていない。P—2の長軸両側には，この住居址に伴うと思われる径約20cm，深さ40cm前後の2本の柱穴がある。

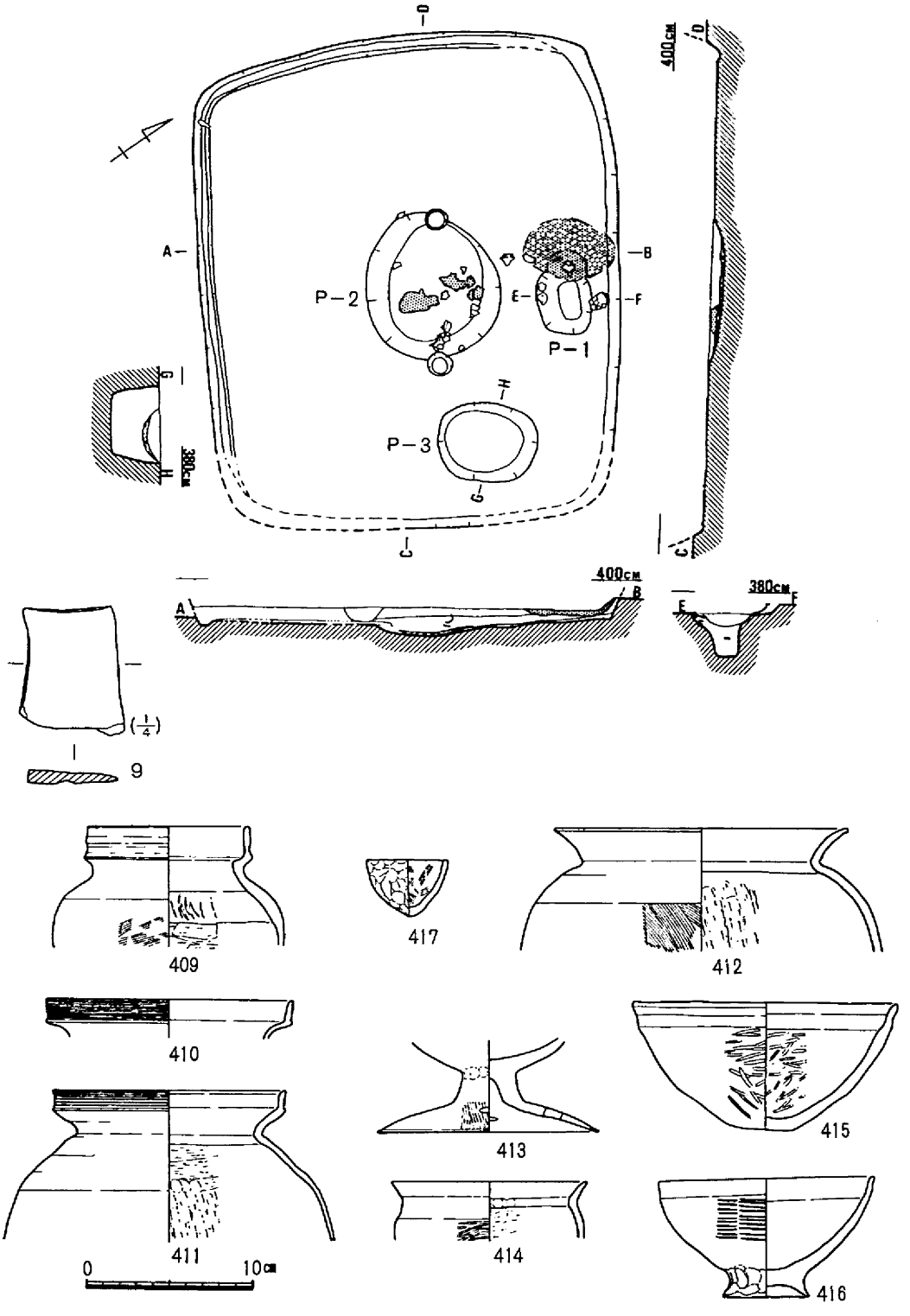
P—1及びP—2付近の床面に近い土器を図に示したが，それらの形態，特徴から百・後・Iの時期を与え得る。なお，床面から砥石が出土している。

砥石**9**は上・下，及び裏面のいずれも欠損している。上・下両面は部分的に，また裏面はほぼ全面にわたって再使用している。表面の擦痕はあまり顕著ではないが，裏面では比較的多い。材質は不明。

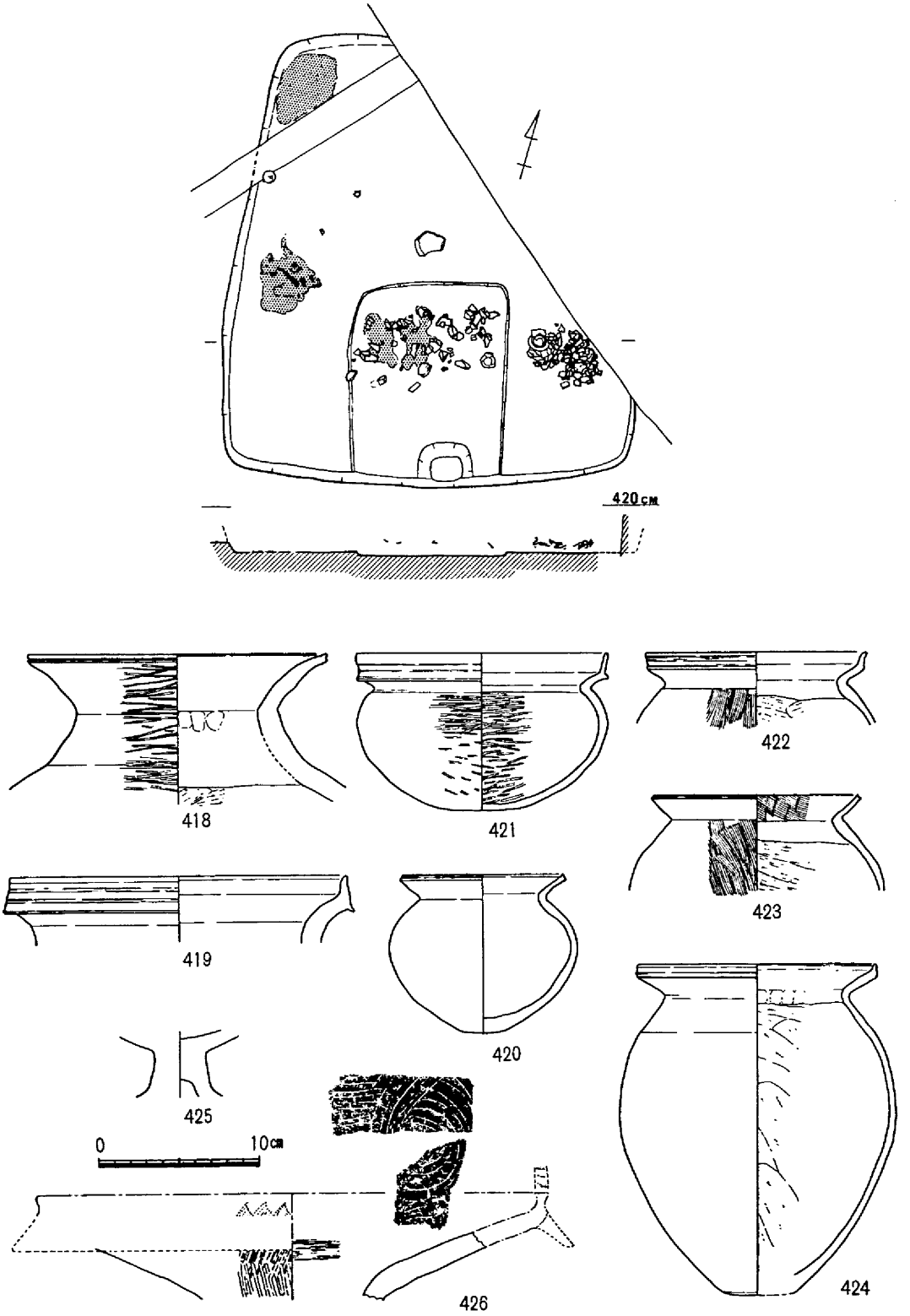
16) 1—H—1

この住居は約⅓ほど用地外にのびるが，1—H—5と同様隅丸方形の平面形態を有す。380×420cmを測る。床面から約5cm浮いた位置の覆土中に大きく2カ所の土器溜りが存在した。また，これも床面からは少し浮いた状態で3カ所に焼土小塊の集積を認め，そのうちの1カ所に炭化材が存在することから，火災に会ったことも考えられる。住居址南側に接して，床面が145×185cmにわたり約3cmほど落ち込んでおり，ほぼ中央南壁に接して1—H—5及び2—H—1にみられると同様の方形土壙が存在する。また床面には数個の柱穴状の土壙が検出されたが，その位置，規模（大きさ，深さ，平面形）などからこの住居址に伴うものでないと判断した。

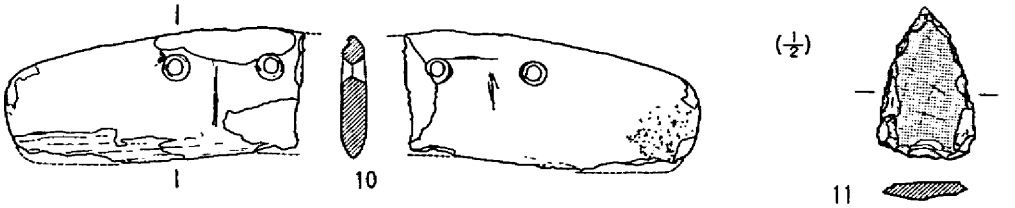
土器溜りの中には磨製石庖丁（**10**），石鏃（**11**）なども含まれ，土器についても出土の割合は少ないが弥生後期のものも含まれる。土器はほとんどが小破片で，百・古・Iの時期の点数が多く，その中でも図示できるものは数点のみであった。図のうち完形の壺形土器（**420**）のみが，土器溜り以外の床面近くで出土したものである。また，土器溜り中に渦巻文様の箆描き線刻の施された器台形土器と思われる破片（**426**）が出土している。2つの破片のうち少片の方は2区の包含層中出土であるが，両片が接着し同一個体のものと判明したので，ここで取り扱った。なお，これらの土器片は新田サイフォン調査区H—**1**覆土中出土の直弧文線刻の器台片（**99**）との接着は不可能であったが，遺物整理の過程で胎土焼成，調整技法，製作手法，施文形態及び工具などの特徴から同一個体と断定している。



第56図　左岸用水1－H－5遺構図（1/60）及び出土遺物



第57図　左岸用水1－H－1遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物

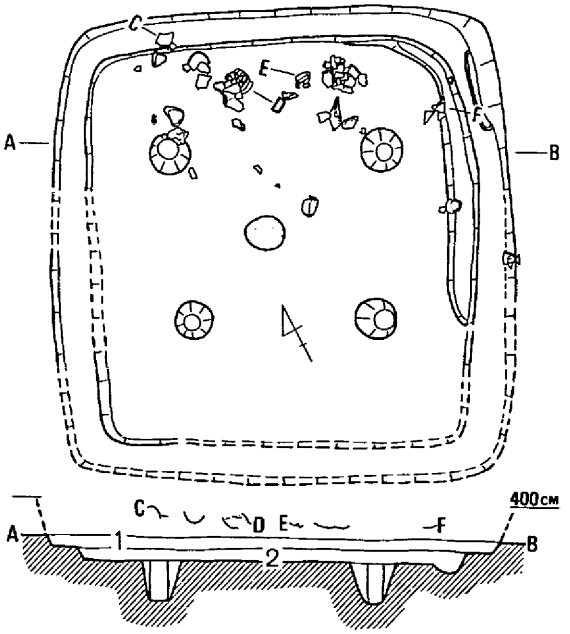


第58図　左岸用水1－H－1出土遺物

磨製石庖丁**10**は粘板岩と思われる石材が用いられ，⅓ほど欠損している。表面は部分的に剝落が見られ，裏面の右端には敲打痕が観察される。表裏ともに両孔の間には縦方向の細い擦痕が存在し，また裏面両孔の内側縁部にはひもずれ痕も確認される。石鏃**11**はサヌカイト製の平基式のものである。ドットで表現した部分はプラントオパールの付着，及び磨耗がみられるところから，石庖丁からの転用と考えられる。刃部の調整は表裏ともに縁辺部をめぐっている。全体に整形は雑である。

（柳瀬）

17）2—H—6

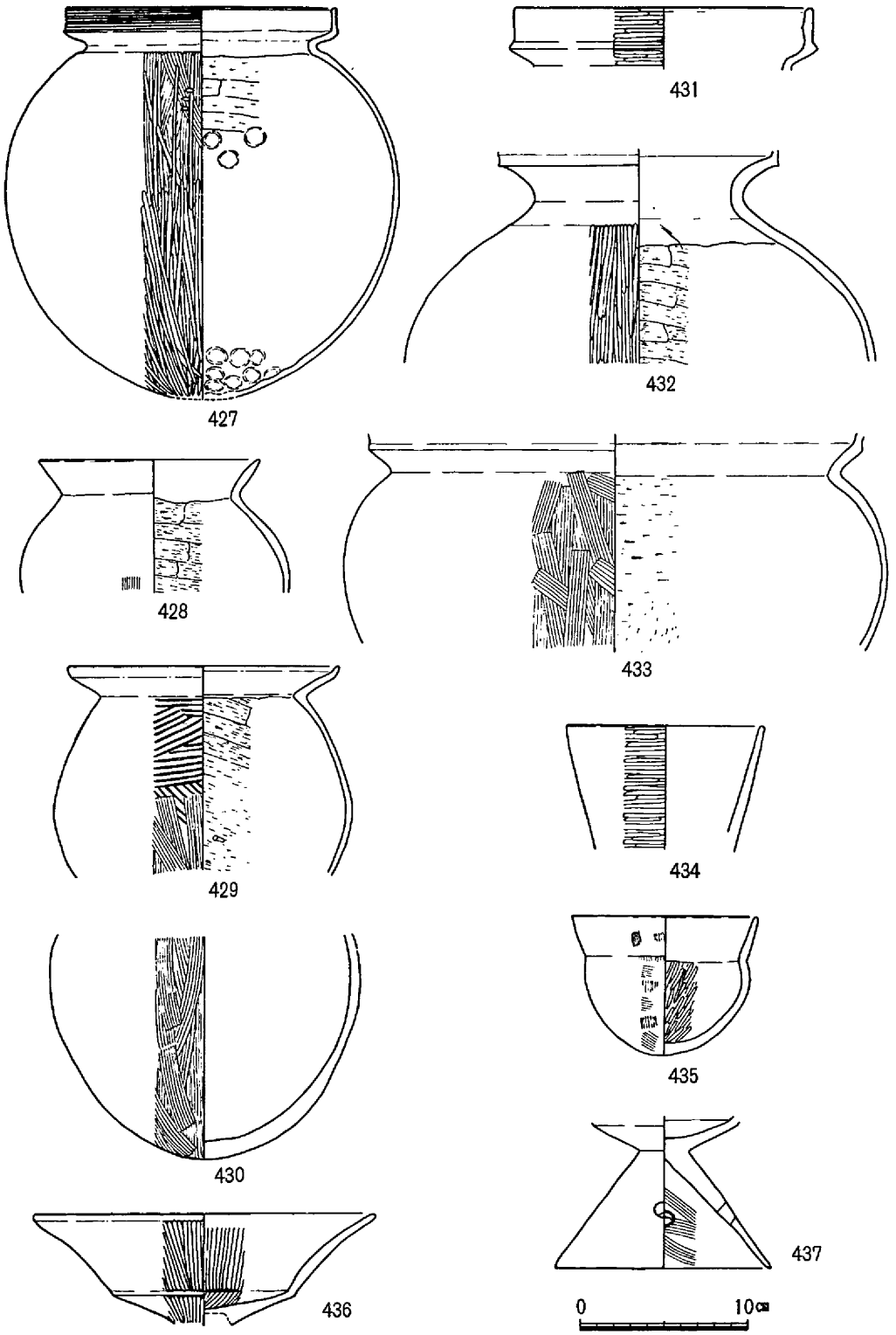


1．暗茶褐色粘質土層　　2．黄色土混り暗茶褐色粘質

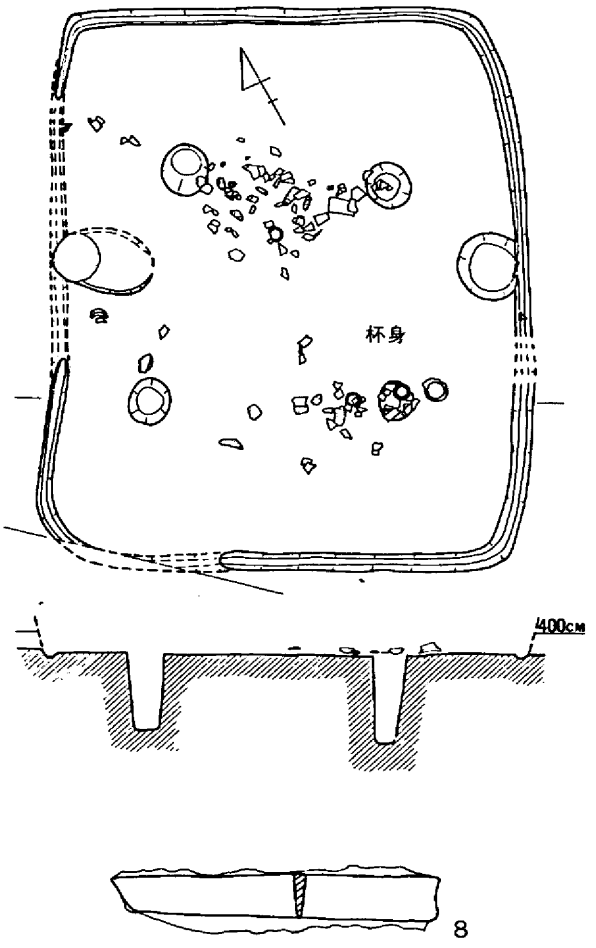
第59図　左岸用水2－H－6遺構平・断面図（1/60）

2—H—4と2—H—5の間に位置する。一辺3.7mの方形プランを呈する住居址である。土層断面を観察すると，上層は暗茶褐色粘質土，下層は黄色土混りの暗茶褐色粘質土で，下層は上層によって水平に切られていることから拡張であることが判る。上下いずれの住居址も壁体溝と柱穴と炉を伴う。両方ともの壁体溝は，4本しか検出できなかった。同じ柱穴を上位住居址も使用したのであろうか。柱穴の直径は30cmの円形で，深さ30cmを測る。柱間は北から時計回りに，1.7m・1.35m・1.5m・1.4mであり，4本を結ぶと台形を呈する。下位住居址の炉は住居址のほぼ中央に位置し，長径30cm・短径25cmの楕円形プランを呈し，赤褐色によく焼き締る。上位の炉は断面では確認したがプランは判らなかった。

遺物はこの住居址を確認する前に土器溜りとして多量に出土していた。壺・甕・高



第60図　左岸用水2－H－6出土遺物



第61図　左岸用水3－H－1遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物

杯・鉢・器台等の器種が見られ，銅鏃の細片も採集できた。これらの土器からこの住居址の時期は，百・古・Ⅱに比定できる。

18）3—H—1

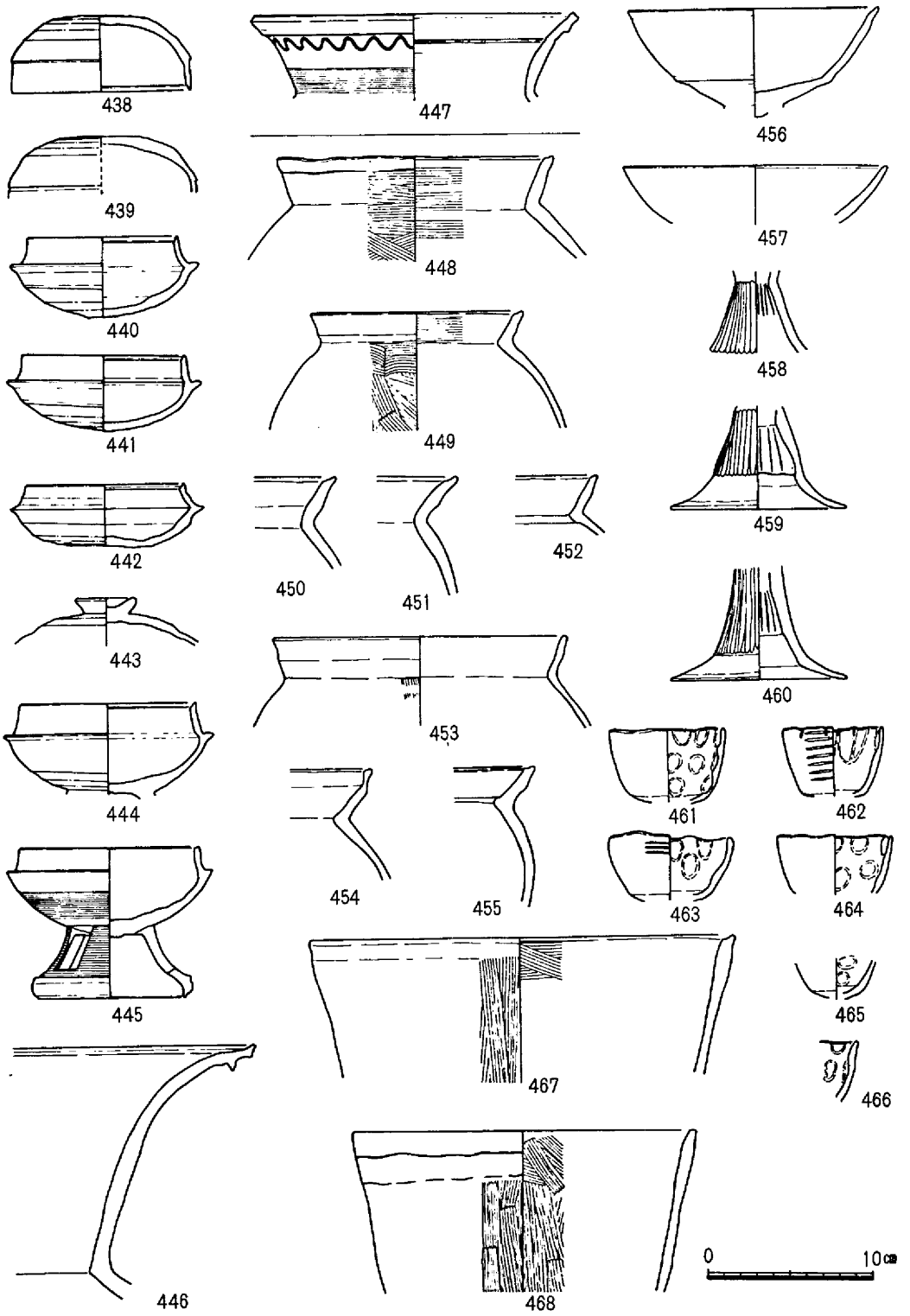
3－H－2・3－H－6・3－H－7をすべて切っている。長辺4.5m・短辺3.7mの長方形プランを示す。隅は少し丸くなっている。壁体溝・柱穴・炉・その他のピットを伴う。壁体溝は断面U字形で，幅15cm・深さ5cmを測る。柱穴は4本検出している。寸法は，直径25～35cm・床面からの深さ60～70cmを測る。柱間は，北西隅から時計回りに1.6m・1.6m・2.0m・1.9mを測る。炉は，長辺になる西壁の中央部分に位置する。赤褐色によく焼き締っている部分は，直径35cmの円形を呈す。その東側は少し凹んでいる。この凹みは，赤褐色に焼き締った部分も含めて，長径75cm・短径50cmの楕円形を呈している。恐らく，これは炉というよりも竈と考えた方が良いだろう。この竈と真反対の住居址東壁中央部に壁に接して直径50cm・深さ10cmの浅いピットが残存している。これは，この住居址の出入口に付属するピットと考えられる。

遺物は，須恵器・土師器・刀子が床面に付着あるいはピットや壁体溝の中から出土している。須恵器は，杯蓋・杯身・高杯・甕等。土師器は，甕・高杯・製塩土器・甑等である。刀子は，1本出土し，現存長8.5cm・最大幅1.2cm・最大厚0.3cm・重量22.2gを計る。

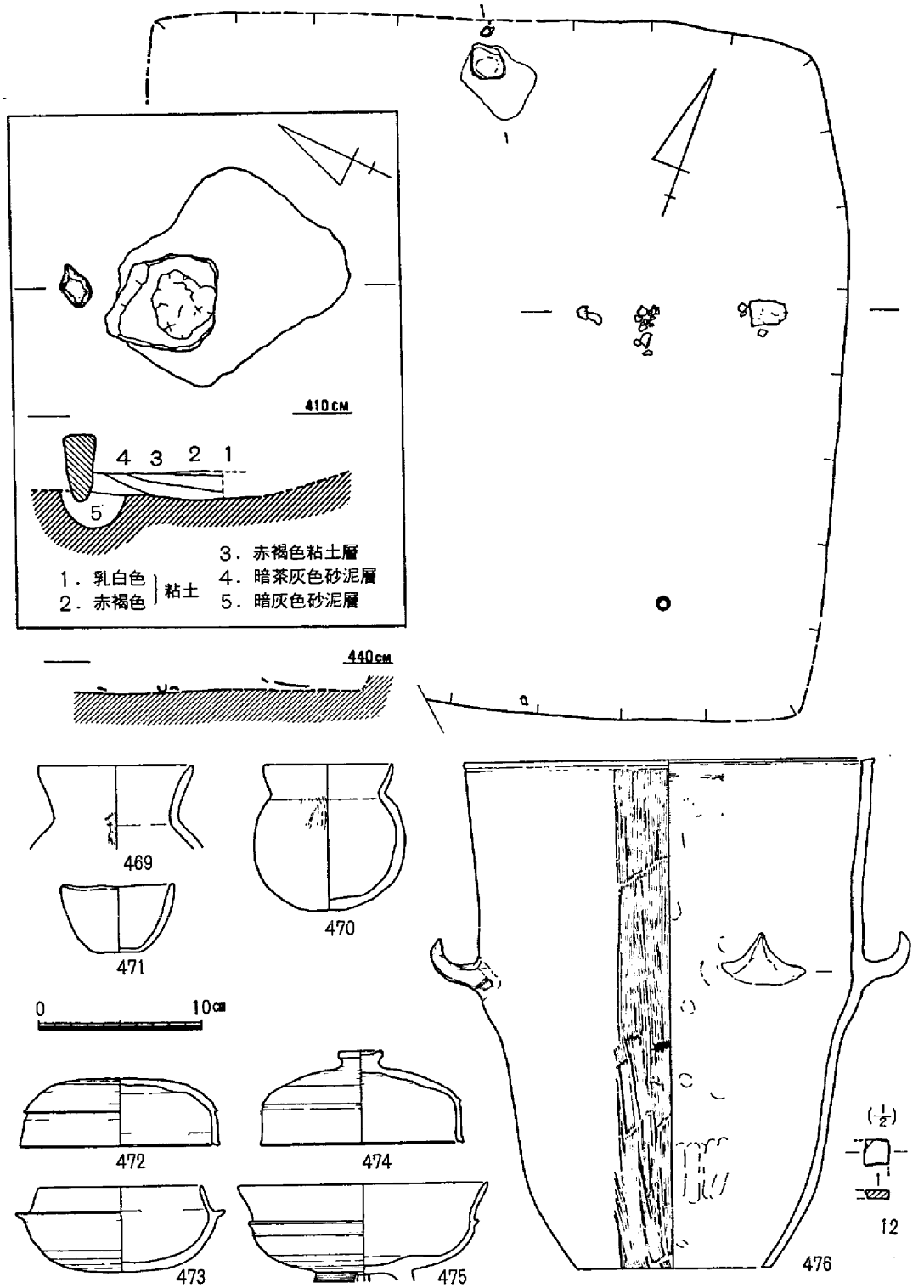
時期は，出土した土器の特徴から考えて，古墳時代後期の5世紀末～6世紀初頭に比定することが出来る。（浅倉）

19）3—H—3

3区東端から検出されたもので，僅かに平面プランと竈を検出するにとどまった。平面プランは一辺650cm前後の方形を呈すものと推定される。住居址北辺中央には竈が設置されているが，上部は削平を受け底部のみを検出している。残存部分は支柱に使用されたと考えられる焼けた礫と，その南側



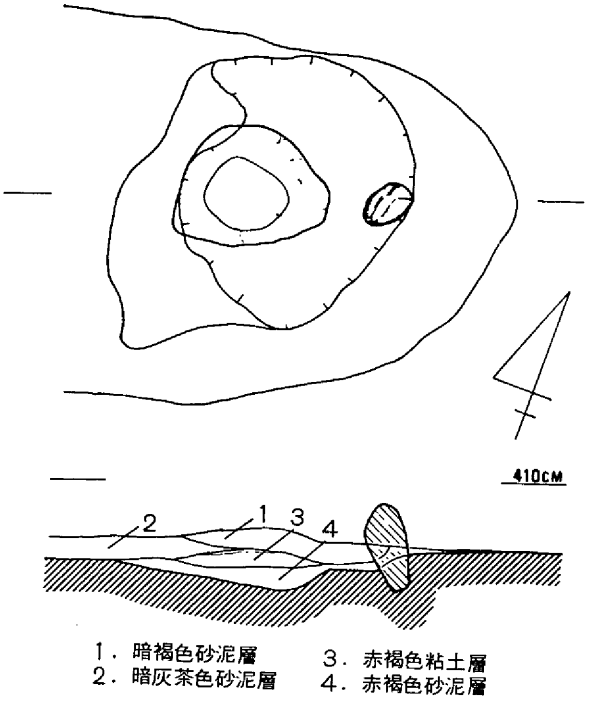
第62図　左岸用水３－Ｈ－１出土遺物



第63図　左岸用水3－H－3遺構図（$\frac{1}{60}$・$\frac{1}{20}$）及び出土遺物

に高熱を受けた平坦面を持つものであるが，断面図から明らかなように，最も熱を受けた部分は支柱から約30cm程離れている。後述する新田樋門H－1と同様の構造を呈していたものと考えられる。

遺物はいずれも床面と推定される所から出土している。砥石12は破片である。非常によく使っているが擦痕は顕著ではない。土器の形態から当住居址は5世期末～6世期初頭にかけてのものと考えられる。



第64図　左岸用水竈遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）

20）竈遺構

2－H－6の南から検出されたもので，3－H－3の竈と同様上部が削平されている。1層は焼土を多分に含む暗褐色砂泥で，天井部が崩落したものと考えられる。2層は焼土及び灰が混じる暗灰茶色砂泥，3層は褐色を呈す焼土で，上面は乳白色を呈し，最も熱を受けた部分と思われる。4層は火の影響を受けた部分である。支柱にあたる礫も熱を受けており，支柱と焼土面との関係は前述の3－H－3と同様である。なお遺物は皆無であった。

以上，竈はその形態から前記3－H－3と同様の時期の可能性が考えられると共に，確認は出来なかったものの，住居址に作り付けられたものではなかったかと考える。（江見）

註

註19　分析方法は螢光X線投射を行った。この結果，鉛の反応が大きかったものの，遺物の非破壊分析のため断定はなされなかった。

註20　「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会1972

表3　左岸用水　住居址出土土器観察表

1)　2—H—4

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
250	壺形土器	○長頸壺と考えられる。	○頸部内面は横方向の刷毛目，外面は横ナデ調整している。 ○体部内面に指頭圧痕とナデが見える。外面は縦方向の刷毛目が見られる。	○口縁部は茶褐色，体部は暗褐色。1㎜以下の砂粒を多分に含む。
251～252	壺形土器	○平底を呈する底部破片である。	○内外面とも磨滅して調整不明。	○茶褐色。253は5㎜以下，254は3㎜以下の砂礫を含む。
253	甕形土器	○やや上げ底を呈する底部破片である。	○内外面とも粗い刷毛調整する。	○ススが付着。5㎜以下の砂礫を含む。
254	高杯形土器	○口縁部は外傾して立ち上り，端部が肥厚し外傾する面を作る。 ○杯部はわずかに内側にそっている。	○口縁部は横ナデ，杯部は表面剝離のため調整不明。	○茶褐色。1～2㎜大の砂礫を含む。
255	高杯形土器	○垂直に立ち上がる口縁部の破片である。	○口縁部外面には凹線文を施す。 ○調整は不明。	○茶褐色。1～2㎜大の砂を含む。
256～257	高杯形土器	○「八」の字状に広がる脚破片である。脚端部は外につまみ出す。	○脚外面に縦方向の箆描き沈線文を施している。 ○脚内面は箆削り，外面は調整不明。	○淡茶褐色。256は1㎜以下，257は5㎜大の砂を含む。

2)　3—H—4

258	壺形土器	○やや外傾して立ち上がる頸部をもつ長頸壺である。口縁部はするどく外反し，端部は上下に拡張する。 ○体部は肩がやや張る。	○口縁内外面は横ナデ，口縁部上面は，櫛状工具による浅い施文を施す。頸部外面は刷毛調整後13本の沈線を巡す。体部外面は箆磨きしている。 ○頸部内面はナデ，体部は箆削り。	○黄褐色を呈す。 ○3㎜前後の砂粒を含む。
259	高杯形土器	○「八」の字状に広がる脚裾部で，端部はやや肥厚する。	○外面はナデ及び横ナデ，裾部端面は2条の退化凹線を施す。 ○内面は下端を横ナデ，上部を箆削りしている。	○淡茶褐色呈す。2㎜前後の砂粒を含む。

3)　2—H—5

260	甕形土器	○口縁端部は肥厚して下方に垂れ下る。 ○短かい頸部が見られる ○体部は最大径が上方⅓位の所にある。 ○底部はやや上げ底で，半月形の穴をもつ。	○口縁部から頸部は横ナデ調整。 ○体部外面は縦方向の粗い刷毛調整内面は下半が縦方向，上半が横方向の箆削り調整を施している。	○黒色を呈し，肩部は赤褐色。1～2㎜大の砂粒を含む。甑に使用したものであろう。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
261	高杯形土器	○外傾して立ち上る口縁端部はやや肥厚する。端面は凹みをもつ	○口縁部は内外とも横ナデ。 ○杯部内面は縦方向の篦磨き，外面は横方向の篦削り調整する。	○黄褐色。1㎜以下の砂を含む。
262	壺形土器	○口縁部の細片である。	○内外とも横ナデ調整している。	○黄褐色。2㎜大の砂含む。
263	甕形土器	○体部の細片である。	○体部外面に3本の篦描き平行沈線文を施している。	○暗褐色。2㎜大の砂含む。

6）5—H—1

264	壺形土器	○直立する口縁部をもつもので，体部は隅丸菱形を呈す。 ○台付の可能性有り。	○口縁部内外面及び，体部外面は篦磨き，体部内面はナデ。	○茶褐色を呈す。 ○1.5㎜ 前後の砂粒を含む。
265～266	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ，266の口縁端面は3条の退化凹線が巡る。	○暗茶褐色で，2㎜前後の砂粒含。 ○外面煤付着。
267	高杯形土器	○深い杯部に，直立する短かい口縁部をもつ。	○口縁部外面は2条の沈線を施した後横ナデ。 ○杯部内外面は篦磨き。	○黄褐色を呈す。 ○0.5㎜ 以下の砂粒を含む精製粘土。
268～270	高杯形土器	○低く広がる脚裾部で，269，270の裾端面は僅かに凹みを呈す。	○外面は刷毛調整後篦磨き，内面は刷毛調整後ナデ。 ○268 は浅い波状文及びその上下に刺突を巡す。 ○270の脚柱部は沈線をもつ。	○268 は暗茶褐色，269，270は黄褐色。270は264の脚部の可能性有り。

7）5—H—2

271	甕形土器	○口縁端部は僅かに肥厚する。体部は肩に張りがない。	○口縁部内外面は横ナデ，口縁端面は3条の退化凹線が巡る。 ○体部外面刷毛調整，内面篦削り。	○暗褐色で，0.5㎜前後の砂粒を含。 ○外面に煤付着。
272	甕形土器	○口縁部はゆるく外反し端部に面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。	○淡茶褐色で，1㎜以下の砂粒を含む。
273	甕形土器	○僅かに逆反りする底部。	○底部下端は押圧及びナデ，上部は刷毛調整，内面は篦削り。	○同上
274	高杯形土器	○外面はなだらかな広がりを呈すが，内面は口縁部と杯部を区別する段がつく。	○外面は剝離が激しいが，内外面共に篦磨きしている。	○淡黄褐色を呈す ○0.5 ㎜以下の砂粒を含む。

8）5—H—3

295	甕形土器	○わずかに上げ底を呈す底部破片である。	○体部内面は縦方向の篦削り，体部外面は縦方向の刷毛調整。	○茶褐色。2～3㎜大の砂礫含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
276	甕形土器	○器壁が極く薄い平底の底部破片である。	○体部内面は縦方向の篦削り，体部外面は縦方向の篦磨き。	○茶褐色。1㎜大の砂含む。
277～278	高杯形土器	○「八」の字状に広がる脚裾部の破片である。端部に面をもつ。円孔は4個穿っている。	○内外面とも刷毛調整を行っている。	○277は赤褐色で砂含まない。278は茶褐色で1㎜大の砂含む。
279	鉢形土器	○大型品で口径は39㎝程ある。 ○口縁部は「く」の字状に外反し，端部に凹みが見える。 ○体部は緩く湾曲する。 ○底部はやや上げ底。	○口縁部内外面と体部外面の上端部まで横ナデ調整を行う。体部内面は下半分が縦方向，上半分が横方向の篦削り調整を行う。体部外面は下半分が縦方向，上半分が横方向の刷毛調整を行っている。	○茶褐色。 ○1㎜大の砂粒を含む。
280	鉢形土器	○大型品で口径は41㎝。 ○口縁部は281と同じだがやや短い。 ○体部は281より器壁が厚く，丸みをもつ。 ○底部は不安定な平底。	○口縁部内外面及び体部外面上端部まで横ナデ調整。 ○体部内面は篦磨き，体部外面は刷毛調整を行っている。	○茶褐色。 ○1～3㎜大の砂礫を少し含む。

9) 3—H—2

281	壺形土器	○長頸壺である。 ○口縁部は大きく外反し，口縁端部は上下に拡張し，外傾する端面を作る。 ○頸部は「八」の字状に下方に広がる。	○口縁端面に退化凹線文を施す。口縁部内面は横方向の篦磨き。 ○頸部外面は縦方向の刷毛調整の後篦状工具による12条の凹線文。内面は篦削り後粗いナデ。 ○肩部外面は篦磨き後刺突文。内面は篦削り。	○明茶褐色 ○2～3㎜大の砂粒を含む。 ○P-1より出土。
282	甕形土器	○「く」の字状に外反する口縁端部は上下に拡張し，端面をもつ。 ○体部の最大径はほぼ中央にある。	○口縁部は内外とも横ナデ。 ○体部外面は刷毛目，内面は篦削り。	○内面灰褐色。外面黄褐色。 ○2㎜以下の砂粒含む。 ○P-1より出土。
283～285	甕形土器	○口縁端部は上下に拡張する。284・285は上方の拡張が著しい。	○体部外面は表面剝離して調整不明。内面は篦削り。	○黄褐色で，1㎜以下の砂粒含む。 ○P-1より出土。
286	甕形土器	○口縁端部は上方に拡張する。 ○胴部最大径まで残る。	○体部外面は篦磨き，内面は篦削り調整を行っている。	○黄褐色で，1～2㎜大の砂粒多い。 ○P-1より出土。
287	甕形土器	○口縁端部は上方に長く立ち上る。 ○体部は肩が張る。	○口縁部は横ナデ。 ○体部外面は刷毛調整の後篦磨き。	○茶褐色で，1～2㎜大の砂粒含む。 ○P-1より出土。
288～290	甕形土器	○口縁端部は上方に長く立	○口縁部は横ナデ。	○黄褐色で，2㎜以

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		ち上る。 ○体部最大径まで残る。	○体部外面は調整不明。内面は篦削り。	下の砂粒含む。 ○P-1より出土
291～392	甕形土器	○口縁部は外反して，口縁端部を上下に拡張するものと上方に拡張するもの。	○口縁端面に退化凹線文を施している。 ○体部内面は篦削り。	○黄褐色 ○2㎜以下の砂粒含む。 ○P-1より出土。
293～300	甕形土器	○底部は平底である。やや上げ底になるものもある。	○外面は篦磨き，内面は篦削り調整する。 ○内面指頭圧痕の残るものがある	○茶褐色で，2㎜以下の砂粒含む。 ○P-1より出土
301～302 307～308	甕形土器	○口縁端部を上下につまみ出す。	○体部内面は篦削りと刷毛目の違いがあるが，外面は同じ刷毛調整。	○308は茶褐色，他は黄白色で，1㎜以下の砂粒含む。
303～304	甕形土器	○口縁端部は上下に肥厚し，やや内傾する。	○口縁端面に退化凹線を施す。 ○体部内面は篦削り，外面は刷毛調整する。	○黄褐色 ○1㎜以下の砂粒含む。
305～306 309	甕形土器	○口縁端部は上方に長く立ち上る。	○口縁端面に退化凹線を施す。 ○体部内面は篦削り，外面は刷毛調整する。	○黄褐色 ○1㎜以下の砂粒含む。
310	甕形土器	○口縁端部は上下に肥厚する。 ○口縁内面に刷毛目。	○体部内面は篦削り，外面は刷毛調整する。	○黄褐色 ○2㎜以下の砂粒含む。
311	壺形土器	○平底の底部片である。	○体部内は篦削り，外面は篦磨き調整する。	○淡茶褐色で，2㎜以下の砂粒含む。
312	鉢形土器	○底部片である。 ○つぶれが見える。	○体部内外面とも丁寧な篦磨き調整する。	○淡茶褐色で，2㎜以下の砂粒含む。
313	甕形土器	○底部片である。	○体部内面は篦削り。 ○底部外面は刷毛調整。	○赤褐色で，5㎜大の砂粒含む。
314～315	鉢形土器	○手捏ねの小型品である。 ○口縁部は外反し，端面に凹みが認められる。	○外面はナデ仕上げ。内面には指頭圧痕多い。	○淡黄褐色。 ○3㎜大の砂粒を含む。
316	鉢形土器	○手捏ねの小型品である。 ○口縁部は鋭い。	○内外面とも指頭圧痕が残る。	○淡黄褐色で，1㎜以下の砂粒含む。
317	壺形土器	○小型品である。 ○口縁部は外反し，端部を丸くおさめる。	○口縁内外面は横ナデ。 ○体部内面は篦削り。外面は不明。	○茶褐色で，1㎜以下の砂粒含む。 ○P-1から出土。
318～321	甕形土器	○底部破片である。 ○平底と上げ底のものがある。	○内面は篦削り。外面は篦磨きのものと刷毛調整のものがある。	○茶褐色～黄褐色。 ○1㎜以下の砂粒含
322～323	甕形土器	○底部破片である。 ○上げ底を呈す。	○内面篦削り，外面刷毛調整。 ○外面に指頭圧痕残る。	○323は刻圧痕が残る。 ○黄褐色・暗褐色 ○2㎜以下の砂粒含

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
324～325	鉢形土器	○台部破片である。 ○端部はやや肥厚する。 ○325は円孔4個をもつ。	○体部内外面は篦磨き。 ○台部内面は篦削り。	○淡黄褐色で，細砂を多量に含む。 ○325はP-1出土
326	鉢形土器	○口径48cmもある。 ○口縁端部はやや内傾して，上下に肥厚する。 ○体部はやや湾曲する。 ○底部は平底である。	○口縁端面に退化凹線を施している。 ○体部内面は篦削りの後，下半分を篦磨きする。外面は刷毛調整の後上半分を篦磨きしている。	○底面に付着していた。 ○淡茶褐色～暗茶褐色で，2mm以下の砂粒含む。
327～336	高杯形土器	○口縁部は外反する。 ○杯部はやや湾曲し浅い。 ○口縁部と杯部との境に稜をもつものともたないものがある。 ○短い脚部はやや湾曲し，「く」の字に折れ曲って裾部に続く。 ○裾部はやや湾曲し，4個の円孔をもつ。 ○口径は16cmが普通で，20cm，12cmのものも見られる。	○外面はすべて縦方向の篦磨き調整である。 ○口縁部・杯部の内面は縦方向の篦磨き調整である。 ○脚部内面にはしぼり目が認められる。 ○裾部内面は，調整がよく分からない。	○1mm以下の砂を含むものと，精製した粘土のものとがある。 ○329・332・333はP-1出土 ○330・331・335・337・338はP-2出土。
337～350	高杯形土器	○口縁部は，上方に少しつまみ上げている。 ○脚は短く，湾曲する。 ○裾部は脚から「く」の字状に折れ曲って，やや湾曲する。4つの円孔をもつ。 ○大型と小型がある。	○口縁端外面に沈線を施したものがある。 ○脚の屈曲部分に沈線を有するものがある。 ○杯部内外面は縦方向の篦磨き調整をする。 ○脚内面にはしぼり目が見える。	○赤褐を呈色する。 ○1mm以下の砂粒を含むものと，良質粘土だけのものがある。 ○P-1出土は337・340。P-2出土は339。
341～350	高杯形土器	○脚部の破片である。 ○脚柱は短く，やや胴張りする。鋭く折れ曲って裾部に続く。 ○裾部は直線的に広がるものと，やや湾曲するものがある。端部は丸いものと面をもつものがある。 ○円孔は裾部に4個穿っている。	○外面は縦方向の篦磨き，内面はしぼり目と横方向の刷毛目が見える。	○明茶褐色から赤褐色を呈す。 ○1mm以下の砂粒を含むものと，全く含まないものがある。
351	椀形土器	○口縁部はちょっと上方につまみ上げて，端部を丸くおさめる。 ○体部は湾曲している。 ○台部は「八」の字状にふんばっている。端部は面をなし接地している。	○口縁部は横ナデ。 ○体部内外面は縦方向の篦磨き調整している。 ○台部内外は横ナデ。	○P-1から出土。 ○淡茶褐色 ○1mm以下の砂粒含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
352	高杯形土器	○脚部だけの破片である。 ○脚柱はかなり長い。	○内面はしぼり目が見える。 ○外面は縦方向の刷毛調整の後，5本の篦描き平行沈線が施されている。	○床面付着だが混入であろう。 ○赤褐色で，2㎜以下の砂粒を含。

10）4—H—1

353	壺形土器	○口縁部の極細片である。上下に端部を肥厚し，端面を作る。	○口縁端額に退化凹線文を施した後，篦で鋸歯文を描いている。	○淡茶褐色 ○2㎜大の砂粒を含む。
354	甕形土器	○口縁の1部と体部の1部の細かい破片である。口縁端部は，上方に拡張し，端面を作る。	○口縁端面に篦描き平行沈線を施す。 ○体部内面は篦削り，外面は不明。	○淡茶褐色。 ○1㎜以下の砂粒を含む。
355	甕形土器	○平底の底部破片。 ○器壁が薄い。	○指頭圧痕が内外に残る。	○P-2出土。淡茶褐色で，砂粒含む。

12）3—H—5

356～360	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上部あるいは上下に拡張。	○356～358は退化凹線が巡る。 ○口縁部内外面は横ナデ，体部外面は刷毛調整，内面篦削り。	○器表面磨滅。 ○褐色を呈し，1㎜以下の砂粒含。 ○P-2出土。
361	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し端面は僅かに凹部をもつ。 ○体部は中央に最大径をもち丸みを呈す。	○口縁部内外面は横ナデ，体部外面は叩き成形後，口縁部下半及び体部下半を刷毛調整。 ○体部内面は肩部を押圧及びナデそれ以下を上方向の篦削り。	○黄褐色を呈す。 ○1.5㎜前後の砂粒を含む。 ○外面煤付着。 ○胎土は在地のものと思われる。 ○P-1出土。
362	高杯形土器	○椀状を呈す杯部。	○器表面磨滅のため不明。	○黄褐色を呈す。 ○精製粘土。 ○壁体溝出土。
363～364	高杯形土器	○「八」の字状に広がる脚裾部で，363は比較的シャープな感じだが，364は器壁が厚く，どっしりしている。	○363外面は篦磨きか？ ○364外面は刷毛調整後，篦磨き。 ○いずれも内面は刷毛調整。	○黄褐色を呈す。 ○363は精製粘土。 ○364は砂粒を含む。 ○壁体溝出土。
365	高杯形土器	○斜め外方に延びる口縁部をもち，端部は丸くおさめる。	○器面磨滅が激しいが，僅かに篦磨きがみられる。	○茶褐色を呈す。 ○水漉し粘土。 ○覆土出土。
366	高杯形土器	○逆「八」の字状に広がる杯部。	○器面磨滅のため不明。	○褐色で精製粘土。 ○覆土出土。
367	高杯形土器	○短脚をもつものと思われる。	○杯部外面は細かな篦磨き，内面は刷毛調整後，篦磨き。	○黄褐色を呈す。 ○水漉し粘土。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
				○覆土出土。
368	高杯形土器	○脚柱部がやや長く，中膨みする。	○磨滅のため不明。	○同上
369	高杯形土器	○小型のものである。	○同上	○同上
370	鉢形土器	○製塩土器の上半部で，作りは雑。	○口縁部は横ナデ及び押圧，体部外面は箆削り，内面は刷毛調整及びナデ。	○淡茶褐色で，1㎜前後の砂粒含。 ○覆土出土。

13） 4—H—2

371	壺形土器	○口縁端部には垂直立ち上がる二重口縁を呈す。上端部に強いナデによる凹みができ，内側に少しふくらむ。	○二重口縁の内外面とも横ナデ調整を行う。	○黄褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。 ○百・古・Ⅰ
372	甕形土器	○口縁端部は垂直に長く立ち上がり，上端は丸い。	○口縁端外面は，7～8条の櫛描き平行沈線文を施している。	○内面暗褐色・外面淡褐色で，1㎜以下の砂粒を含。 ○百・古・Ⅰ
373～374	甕形土器	○体部の破片である。	○3本の篦描き平行沈線文を巡らす。	○373は黄褐色・374は茶褐色で，3㎜大の砂粒を含む。 ○百・前・Ⅱ
375	壺形土器	○口縁部の破片である。 ○漏斗状に開く口縁の端部は上下に肥厚して内傾する面を作る。	○口縁端面は，凹線文を施した後，棒状浮文を貼り付けている。 ○口縁内面は，櫛描き波状文を2条巡らしている。	○褐色 ○1㎜大の砂粒を含む。 ○百・中・Ⅲ
376	甕形土器	○口縁端部はやや肥厚。 ○口縁と体部の境目が明瞭である。	○口縁部内外面とも横ナデ調整している。	○赤褐色で，1㎜大の砂粒を含む。 ○百・中・Ⅲ
377	甕形土器	○「く」の字状に外反する口縁の端部は，上下に肥厚して，やや内傾する面を作る。	○口縁端外面には3本の凹線文を施している。 ○体部内面は横ナデ，外面は縦料向の刷毛調整である。	○黄褐色。 ○1㎜以下の砂粒含む。 ○百・中・Ⅲ
378	高杯形土器	○垂直に立ち上がる口縁の端部は，左右に肥厚し，やや内傾する面を作る。	○口縁端面には4本の凹線文を施している。 ○杯内外面の調整は不明である。	○黄褐色。 ○1㎜以下の砂粒含む。 ○百・中・Ⅲ
379	高杯形土器	○「八」の字状に広がる脚の端部を外側に水平に摘み出す。 ○円孔を穿つ。	○調整不明	○茶褐色。 ○2㎜大の砂粒含む。 ○百・後・Ⅰ
380	甕形土器	○やや上げ底を呈す底部破	○外面に指頭圧痕が明瞭に残る。	○黒色～褐色。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		片である。		○1㎜以下の砂粒含 ○百・後・Ⅱ
381	高杯形土器	○口径28㎝もある。 ○口縁部は外反し，端部は丸くおさめる。 ○脚柱部は長い。「く」の字状に屈曲し，裾端部に面をもつ。 ○円孔は4箇穿つ。	○口縁部と杯部の内外面は縦方向の篦磨き。 ○脚部外面は縦方向の刷毛調整。内面にはしぼり目が見える。	○黄褐色～茶篦色。 ○1㎜以下の砂粒含む。 ○百・後・Ⅱ ○口縁部・脚部・裾部が直接には接合しない。
382	壺形土器	○漏斗状に開く口縁の端部は，上下に拡張してやや内傾する面を作る。上端は凹み，下端は丸くおさめている。	○口縁端外面は上方に篦描きの鋸歯文を施す。内面は横ナデ調整している。	○黄褐色で，1㎜以下の砂粒含む。 ○器台の可能性もある。 ○百・後・Ⅲ
383	壺形土器	○直口壺の口縁部片であろう。	○下端に極細の篦描き鋸歯文が施されている。 ○外面は縦方向の篦磨きで，内面は不明。	○内面黒色・外面淡褐色で，砂粒を僅かに含む。 ○百・後・Ⅲ
384～385	甕形土器	○口縁端部は上方に長く拡張する。	○口縁部は横ナデ。 ○体部内面は篦削り。	○白色で，1㎜以下の砂粒含む。 ○百・後・Ⅲ
386～389	壺形土器	○平底を呈する底部の破片である。	○387は内外面とも篦磨き。 ○386・388は調整不明。 ○389の内面には指頭圧痕が残る。	○黄褐色～茶褐色。 ○砂粒を含むものと含まないものがある。 ○百・後・Ⅲ
390	高杯形土器	○口縁部は外反し，端部を丸く収めている。	○調整は不明。	○黄褐色～淡褐色。 ○2㎜大の砂粒含む ○百・後・ⅡかⅢ
391	鉢形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部を上下に肥厚している。	○口縁部は横ナデ。 ○体部内面は横方向の篦磨き，外面は横方向の刷毛調整。	○黄白色で僅かに砂粒を含む。 ○百・後・Ⅲ

14）2—H—1

392	壺形土器	○斜め外側に立ち上がる口縁をもち，端部を少し外側につまみ出している。肩部から胴部にかけて，ゆるく広がる。	○口縁部はナデ調整され，肩部から胴部にかけて外面は斜め方向に刷毛調整されている。	○胎土にはやや荒い砂粒を含んでおり，全体に淡黄褐色。
393	壺形土器	○口縁端部がないが，口縁部から胴部にかけゆっくりとした広がりをもち，胴中央部で最大径を測る。	○口縁部はナデ調整，外面体部には，横および斜め方向に刷毛調整されている。内面は篦削りと思われる。	○胎土に細かい砂粒を含み，内面は灰黄色。 内面口縁部から外面は丹塗りで赤褐

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
				色。
394～397	甕形土器	○口縁部が肩部から「く」の字状に折れ，端部が上方に長く立ちあがっている。396はやや外傾して立ちあがり肩部が少し張っている。395は長めの体部をもつ。	○立ち上がった口縁の外側に7～9条の櫛描平行沈線が施されている。 394の胴部には暗文状に篦磨きが施され，395・397の肩部から胴部にかけては刷毛調整，396の胴部から下は篦磨きされている。内面は篦削り。	○胎土には細かい砂粒を含んでおり，全体に淡黄灰色を呈す。 395・396の胴部外面には煤の付着がみられる。
398	甕形土器	○台状の底部に取り付いた胴部が，斜め外上方に立ち上がっている。	○胴部外面に刷毛による調整が見られる。	○胎土に細砂を含み淡赤褐色。
399	高杯形土器	○口縁部が斜め外方へ直線的に延びる大きな杯部に，裾部に4つの円孔を穿った短かい脚柱部。	○表面が剝離しているが，篦磨きが行われていると思われる。	○精製された水簸し粘土でつくられ淡褐色を呈する。
400～402	高杯形土器	○椀形の杯部に比較的短かい開き気味の脚柱部がつくもので，401・402の裾部には4つの円孔が穿かれている。	○400の杯部はナデ調整，内面には暗文状の篦磨きがみられる。401の外面は細かい篦磨きが施され，402の外面はナデ調整後刷毛調整。	○400・401は細かい砂粒を含む精製粘土で赤褐色。402はやや荒い砂を含み淡黄白色。
403～404	高杯形土器	○比較的短かい脚柱部から裾部は4つの円孔を穿ちなめらかに「八」の字に広がる。	○脚柱部は篦磨きされ，403の裾部は細かい刷毛調整。404の裾部は篦磨き。	○精製された粘土で，403は淡黄褐色，404は赤褐色。
405	鉢形土器	○口縁端部が少し外方に折れ曲って延びる丸底の土器。	○口縁端部はナデ調整。体部は篦磨きにより調整がなされている。	○精製粘土で黄褐色。外面の一部に煤付着。
406～407	鉢形土器	○口縁部が外方へ真直ぐ延びるもので，406には平底の底部がみられる。	○406の口縁部は内外面とも押圧による調整で，体部内面は刷毛調整されている。407口縁部はナデ調整。	○精製粘土で406は内面暗灰色外面黄灰色。407は赤褐色。
408	鉢形土器	○口縁端部はほとんど上方に向く程の外方に広がる丸底の椀状の土器。	○内面の口縁部にはナデ調整。体部は細かい刷毛調整が，外面は口縁端部は横，体部は縦および斜めに篦磨きされる。	○少しざらざらした粘土で外面赤褐色内面灰茶色。

15）1—H—5

409	壺形土器	○なで肩部から短い頸部をもちながら「く」の字状に開いた口縁部から，やや内傾して真上に大きく立ち上がり拡張する口縁部をもつ。器壁は厚い。	○外面は肩部から上は丁寧な横ナデ調整後，横方向の細かな篦磨き。胴部は刷毛調整後細かな篦磨き。 ○内面は頸部から上は横ナデ，胴部最大幅より少し上から横方向に篦削り。	○胎土に1㎜以下の砂粉を含む。 ○内面の頸部から外面全体にかけて丹が塗られ，赤褐色を呈す。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
410～411	甕形土器	○「く」の字状に開く口縁端部は上方に立ち上がり，拡張部外面に7条の櫛描平行沈線文を施す。 ○411は口唇部内部にわずかな凹部をもつ。	○肩部から上は内外面ともに横ナデ。411の胴部は内面箆削りにより器壁は薄い。外面は箆磨きか。	○淡黄褐色を呈し胎土に1㎜以下の砂粒が目的つ。 ○肩部に煤付着。
412	甕形土器	○球形の胴部から「く」の字状に外反して開く口縁部をもつ。端部はつまみ上げて丸くおさめている。	○外面は肩部から口縁部まで横ナデ，胴部は斜め方向の刷毛調整。内面は口縁部は横ナデ，胴部は箆削り，屈曲部下は，一部箆削りの後指による横ナデ。	○黄灰色を呈す。 ○胎土に1～2㎜の砂粒を含む。 ○外面に煤付着。
413	高杯形土器	○台形の短い脚柱部から「八」の字状に鋭く広がる脚裾ををもつ。	○杯部と脚部は別作りで，その接合はソケット状につく。裾部外面は刷毛調整。	○赤褐色を呈す。 ○精製粘土。 ○四孔の円形透し。
414～415	鉢形土器	○414は球形を残す体部の端部を外方につまみ上げ，口縁部を作っている。415は小さな底部をもって，多少内湾して立ち上がる体部の端面を丸くおさめている。	○414は口縁部近くは横ナデ，体部は箆磨き。体部内面に箆削りがみられるところから，手法的には甕形土器として取り扱う方が良いかもしれない。415は口縁部近くが横ナデのほか，内外面ともに箆削り後箆磨きが施されている。	○414は淡黄灰褐色。415は赤褐色を呈す。 ○胎土はどちらも精製粘土 ○415はほぼ完形
416	台付鉢形土器	○端部をつまみ上げた台部から，内湾しながら斜め上方に立ち上がる体部をもち，端面を丸くおさめて口縁部としている。	○口縁部近くのみ横ナデ調整。体部は一部に叩き目が残る。底近くは指ナデ。台部には装着の際の指頭圧痕が顕著に残る。台部の内側は指で押えた後，ナデで調整。	○黄灰白色 ○1㎜前後の砂粒を多く含む。 ○ほぼ完形
417	手捏土器	○小ぶりで，尖底である。口縁部は多少のデコボコをもつ。	○全体は指でつまみ上げられ，外面は不定方向の削りの後，指頭押圧で成形。内面は刷毛調整。	○暗褐色 ○1㎜前後の砂粒を含む。完形。

16）1—H—1

418	壺形土器	○球形の胴部から「八」の字状に立ち上がる頸部をもち，そこから「く」の字状に外反する口縁部をもつ。口唇部を多少つまみ上げることにより，端面をつくっている。	○口縁部端面には一条の沈線が施され，外面は横ナデ後細かな箆描きで仕上げている。内面は口縁部は横方向の刷毛の後横ナデ，頸部は指頭押圧，胴部は箆削りにより，調整あるいは成形がなされている。頸部内面は一部剝離。	○灰黄色 ○1㎜以下の砂粒を含む ○百・後・Ⅳの時期
419	壺形土器	○短めの頸部から緩やかに外反する口縁部は，端部をおもに上方に拡張させている。	○口縁部の外側端面には，二条の凹部がみられる。内外面ともに横ナデ調整。	○乳白色 ○百・後・Ⅲの時期
		○わずかに平底を残しほぼ球形の胴部から「く」の	○全体に磨滅しており，細かな調整は不明。	○赤褐色 ○胎土に水漉し粘土

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
420	小型壺形土器	字状に外反して立ち上がる口縁部をもつ。 ○口縁端部は斜め上方にわずかに肥厚させ，端面をつくっている。		が使われている。 ○百・後・Ⅳの時期
421	鉢形土器	○丸底を呈す浅めの球形胴部から「く」の字状に外反して斜め上方に立ち上がり，端部を真上に長く拡張させた口縁部をもつ。 ○口径と胴部の最大幅はほぼ同じ。	○口縁部内外面ともに横ナデにより仕上げられているが，口縁拡張部外面には2～3条の凹部が認められる。胴部は内外面ともに丁寧な篦磨きにより調整されている。上半は横方向の，下半は斜め方向の篦磨きが観察される。	○赤味がかった黄褐色を呈す。 ○外面は煤付着 ○甕形土器と呼んだ方が良いかもしれない。 ○百・古・Ⅰ
422～424	甕形土器	○ナデ肩で多少長めの胴部をもち（424），「く」の字状に斜め外方に立ち上がる口縁部の端部を上方に拡張させている。424はわずかに平底を残している。	○いずれも口縁拡張部外面には横ナデによるわずかな凹部が数条みられる。422の胴部外面は刷毛調整。 ○424は押圧痕と擦痕がみられるのみ。内面はどちらも篦削りで成形。	○淡灰褐色 ○どちらも比較的細かな砂粒を含み，密度は高い。 ○百・後・Ⅳ？
423	甕形土器	○ナデ肩の胴部から「く」の字状に斜め上方にやや内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部はわずかに面をもち，部分的に一条の細い凹線が残る。	○胴部外面は荒い刷毛調整，口縁部内面も同じ工具による刷毛調整がみられる。篦削りは内面の屈曲部からやや下方まで。口縁部との間は指頭押圧あるいはナデにより調整。	○黄橙色 ○口縁部まで煤付着 ○焼成はあまり良くない。 ○百・古・Ⅰ
425	高杯形土器	○台形の短めの脚柱部を有す。	○磨滅のため調整は不詳	○赤褐色 ○水漉し粘土 ○百・後・Ⅳ
426	器台形土器	○新田サイフォンH－1出土の土器とで図のように器形を復元した。破片は朝顔状に開く上台部にあたる。	○外面には斜め方向に刷毛調整され，その後篦磨き。内面は細かい横方向の篦磨きで調整した上に，篦描きによる直孤文が施文されている。	○黄灰褐色（多少白っぽい） ○粘土紐の目で割れている。 ○百・後・Ⅲ～Ⅳ

17） 2—H—6

427	甕形土器	○口縁端部は上方に長くほぼ垂直に立ち上がる ○体部は球形である。 ○底部は欠損しているが，丸底になると思う。	○口縁端外面には8条の櫛描き平行沈線文が施されている。 ○体部外面は縦方向の刷毛調整の後下半の全部と上半の1部に，篦磨き調整。体部内面は篦削り。指頭圧痕が残る。 ○肩部に米粒大の3個の刺突文を施す。	○褐色。 ○1㎜以下の砂粒含む。 ○口縁部と体部は直接接合できないが，図上で復元した。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
428	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は鋭く収める。 ○体部はやや肩が張る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面は篦削り。体部外面は刷毛調整。	○淡赤褐色。 ○3㎜大の砂礫を含む。
429	甕形土器	○口縁部は，「く」の字状に外反し，端部を少し上方に摘み出している。 ○体部は最大径が中央部分にある。	○口縁部は横ナデ。 ○体部内面は篦削り。体部外面は板状工具による叩き目の後，下半部を縦方向の刷毛調整している。	○内面褐色・外面黒色。 ○3㎜大の砂礫を含む。
430	壺形土器	○体部片である。 ○底部はやや尖り気味の丸底である。	○内面はナデ調整し，外面は縦方向の刷毛調整。	○黄褐色で，丹塗り。3㎜大の砂礫を含む。
431	壺形土器	○口縁端部は上方に長く立ち上がる。内面に段をもつ。	○口縁部内面は横ナデ，外面は横方向の篦磨き調整している。	○黄褐色。丹塗り。 ○1㎜以下の砂粒含む。
432	壺形土器	○二重口縁を呈するものと思われる。 ○体部はかなり肩が張っている。	○口縁部と頸部は，横ナデ仕上げしている。 ○体部内面は篦削り。体部外面は篦磨き。	○茶褐色。 ○3㎜以下の砂礫を含む。
433	鉢形土器	○二重口縁を呈すと考えられる。 ○体部は上下に扁平な球形を呈す。	○口縁部は内外とも，横ナデ仕上げしている。 ○体部の内面は篦削り後ナデ調整し，外面刷毛調整している。	○内面暗茶褐色，外面暗黄褐色を呈し，2㎜以下の砂粒含む。
434	壺形土器	○直口壺の口縁部であり，口縁部はやや上方が広がり，直線的に立ち上がる。端部を丸く収める。	○口縁部は外面を横方向の篦磨き調整している。内面は調整不明である。	○赤褐色で丹塗り。 ○精製粘土を使用。
435	壺形土器	○小型品である。 ○口縁部は少し外反し，やや湾曲している。端部は丸く収めている。 ○体部は最大径が上方にあり，口径より小さい ○底部は丸底である。	○口縁部内面は横ナデ，外面が縦方向の刷毛の後横ナデ。 ○体部内面は篦磨き。外面は刷毛調整。 ○底部外面まで刷毛調整している。	○黄褐色～茶褐色 ○1㎜以下の砂粒少量含む。
436	高杯形土器	○口縁部は大きく外反し，端部を丸く収める。 ○杯部は小さい。	○口縁部と杯部の内外面とも，縦方向の篦磨き調整している。	○茶褐色。 ○0.5㎜以下の砂少量含む。
437	器台形土器	○小型品である。 ○杯部はやや湾曲する。 ○脚部は「八」の字状を呈し，直線的である。円孔を4箇穿つ。端部は丸く収める。	○口縁部・杯部とも調整不明。 ○脚部内面は刷毛調整。外面は不明。	○淡黄褐色。 ○精製粘土を使う。

18) 3—H—1

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
438～439	杯蓋	○天井部の3/4を篦削りしいる。 ○天井部と口縁部の境は突出して鋭い稜をなす。 ○口縁部の高さは2.0cmで，端部は内傾する。	○篦削りの方向は，逆時計回りである。 ○篦削り部分以外は横ナデ仕上げであるが，439の天井部内面にはカキ目が残る。	○灰褐色を呈す。 ○2mm大の砂を含む。 ○陶邑編年のⅠ期終末に比定できる。
440～442	杯身	○立ち上がりは大きく内傾するものと，ほとんど垂直になるものとがある。端部は内傾す。 ○受部は水平で，先端は尖っている。 ○体・底部は丸く作るものと，平のものがある。篦削りは体・底部の2/3以上行っている。	○篦削りの方向は，時計回りのものと，逆時計回りの両方が見られる。 ○横ナデが仕上げの中心になっているが，440の底部内面にはカキ目が残る。	○灰色～淡灰色。 ○3mm大の砂礫を含む。 ○陶邑Ⅰ期。
443	高杯蓋	○天井部に中凹みのつまみをもつ。 ○天井部の1/2以上を篦削りしている。	○篦削りの方向は時計回りである。 ○仕上げは横ナデしている。	○黒色自然釉有り。 ○灰白色を呈す。 ○3mm大の礫も含むが少量である。
444～445	有蓋高杯	○杯身に脚を付けたもので，杯部の形態は440と同じ。 ○脚部は短く，長方形の透しが三箇所ある。 ○脚端部を上下に突出させている。	○445は，杯底部外面と脚部外面を，カキ目調整している。444の杯底部は篦削りで，方向は時計回りである。 ○仕上げは横ナデである。	○444は暗灰色，445は灰色。 ○1mm大の砂含む。 ○445は焼成不良。
446	大型甕	○口縁部端部は上下に僅かに伸びる。端部に近く先の鋭い三角凸帯を巡らす。	○口縁部内外面は横ナデ仕上げ。 ○櫛描き波状文を口縁部に巡らす。	○黒褐色～暗灰褐色で，自然釉がかかる。 ○2mm大の砂含む。
447	甕	○口縁部は朝顔形に外反し，端部はやや肥厚する。端部に近く三角凸帯を巡らす。	○凸帯の下方に篦描きの波状文1本を施す。その下方にはカキ目調整を行っている。	○淡灰色。 ○2mm大の砂含む。 ○灰緑色の自然釉が付着している。
448～455	甕形土器	○口縁部は漏斗状に外反するが，二重口縁の影響が僅かに残り，段を持つ。端面は内側に傾斜している。 ○453は端部が丸い。	○口縁部の内外面は横方向の刷毛目。 ○体部外面は刷毛目。内面は篦削りの後，刷毛調整あるいはナデ仕上げしている。	○赤褐色。 ○1mm以下の砂を含む。
456	高杯形土器	○口縁部は漏斗状に広がり，やや湾曲する。端部	○内外面とも横ナデ仕上げしている。	○内面は淡黄褐色。 ○1mm以下の砂を含

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		を外上方に少し撮み出している。 ○杯部は直線的である。		む。
457	高杯形土器	○口縁部は外湾して広がる。端部を丸く収める。	○内外面とも横ナデ。	○内外面とも丹塗り。地色は黄褐色で，細砂粒を多分に含む。 ○焼成は普通。
458～460	高杯形土器	○脚部は長く，ラッパ形を呈す。「く」の字に折れ曲る。	○外面は縦方の篦磨き。屈曲部から下は横ナデ。内面に絞り目が残る。	○明茶褐色を呈す。 ○微砂粒を含む。 ○焼成は普通。
461～466	椀形土器	○製塩土器と考えられる。 ○口径7～8㎝程度。 ○口縁部はやや湾曲し，端部は丸く収める。 ○底部は平たく作る。	○内面には指頭圧痕が無数に残る。外面には叩き目の痕跡が残るものと，残らないものがある。 ○461は口縁部に皺が寄っている。	○桃色を帯びた黄褐色。二次的焼成を受けたもの。 ○3㎜以下の砂礫を含む。
467～468	甑形土器	○上部の方がやや広い円筒形を呈す。 ○口縁端部が内側に傾斜するものと，水平面を作るものがある。	○内外面とも，粗い刷毛調整している。	○明茶褐色を呈す。 ○1㎜以下の砂を含む。

19)　3—H—3

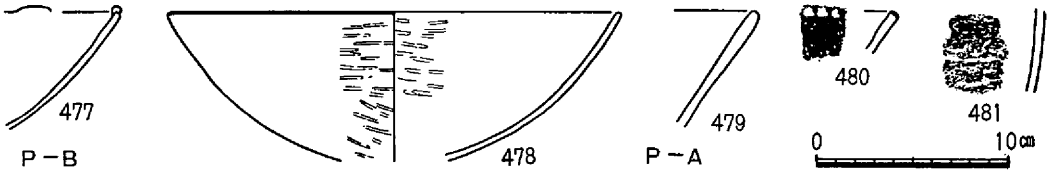
469～470	壺形土器	○小型の丸底を呈すもので，口縁部は斜め外方にゆるく外反する。 ○体部は球形を呈す。	○全体に磨滅しているが，体部外面に僅かに荒い刷毛目が認められた。	○淡黄褐色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒を含む。
471	鉢形土器	○小型の手づくねの土器である。	○器表面磨滅のため調整不明。	○黄褐色で，5㎜前後の砂粒を含。
472	杯蓋	○体部は僅かに外開き。 ○口縁端部は僅かに外方につまみ出している。 ○天井部はやや平ら。	○天井部外面はその2/3を篦削りしており，方向は時計の逆回り。 ○他は横ナデ。	○灰色を呈す。 2.5㎜前後の砂粒を含む。
473	杯身	○立ち上りは内傾し，端部は丸くおさめる。 ○受部は短く，先端は丸くおさめる。	○底部外面は2/3を篦削りしており，その方向は時計の逆回り。 ○他は横ナデ。	○外面淡茶灰色。内面灰色で，2㎜前後の砂粒含。 ○外面に煤付着。
474	高杯蓋	○内凹みのつまみがつくもので，体部は僅かに外開きで，口縁端部も僅かに外方へつまみ出している。 ○天井部はやや丸みをもつ。	○天井部は2/3篦削りしており，その方向は時計の逆回り。 ○他は横ナデ。	○器表面は淡灰色で，断面は赤茶色を呈す。 ○1㎜以下の炭状のものが混入。0.5㎜以下の砂粒を僅かに含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
475	無蓋高杯	○口縁部は外方に開き，端部は丸くおさめる。 ○体部はやや深く，口縁部と底部を分ける稜線が認められる。 ○脚部は長方形の4方透しである。	○底部から約1/3を篦削りしており，その方向は時計の逆回り。 ○体部上半は横ナデ。 ○脚部外面はカキ目調整している。	○淡青灰色を呈す1.5㎜前後の砂粒を僅かに含む。
476	甑形土器	○底部のややすぼまった円筒状を呈すもので，平面二等辺三角形状の薄い把手がつく。	○口縁端部は横ナデ。 ○体部外面は刷毛調整，内面は押圧及びナデ。把手は篦成形ののち，ナデ調整。	○外面黄褐色，内面淡黄褐色。 ○3㎜前後の砂粒を含む。

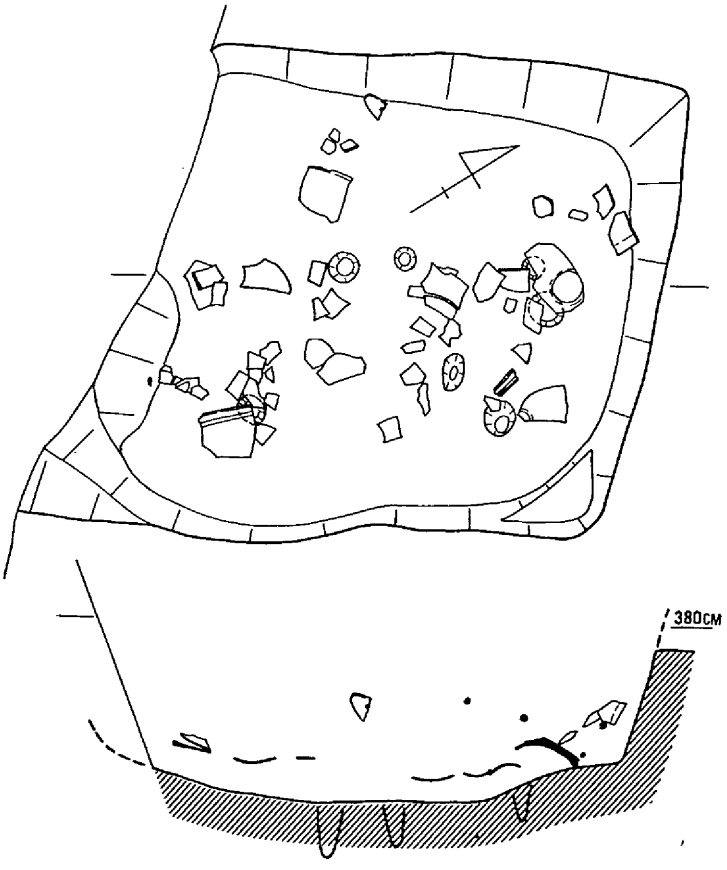
土　　壙

1)　1区縄文時代晩期の遺構

晩期の包含層が当調査区ほぼ全域にわたり基盤層上面に約10cmの厚さで確認されている。1区では1－H－1と1－H－5の間の部分に晩期土器片の分布が集中して検出されている。それらは細片であり，基盤層にめり込む形で約30カ所に，いずれも標高372cmのレベルに認められたものである。



第65図　左岸用水1－P－A・B 土壙出土遺物



第66図　左岸用水5－P－1遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）

基盤層上面を精査したところ，平面形態がはっきりしない土壙を数カ所に検出した。その中で1－P－A及びBについては，径約30～40cm，深さ52～40cmを測り，内部から土器片が出土している。

以上のように，晩期包含層と土壙が確認されたことにより，住居址などの遺構が存在した可能性が強くなった。（柳瀬）

2） 5－P－1

D－8と5－H－1の間に位置する長方形プランを呈する土壙である。一部調査範囲以外のため検出できていない。大きさは，長辺推定170cm・短辺125cm・現存の深さ40cmを測る。断面形は，逆台形を呈す。土壙底部には7本の杭痕跡が残っている。規則性は認められない。

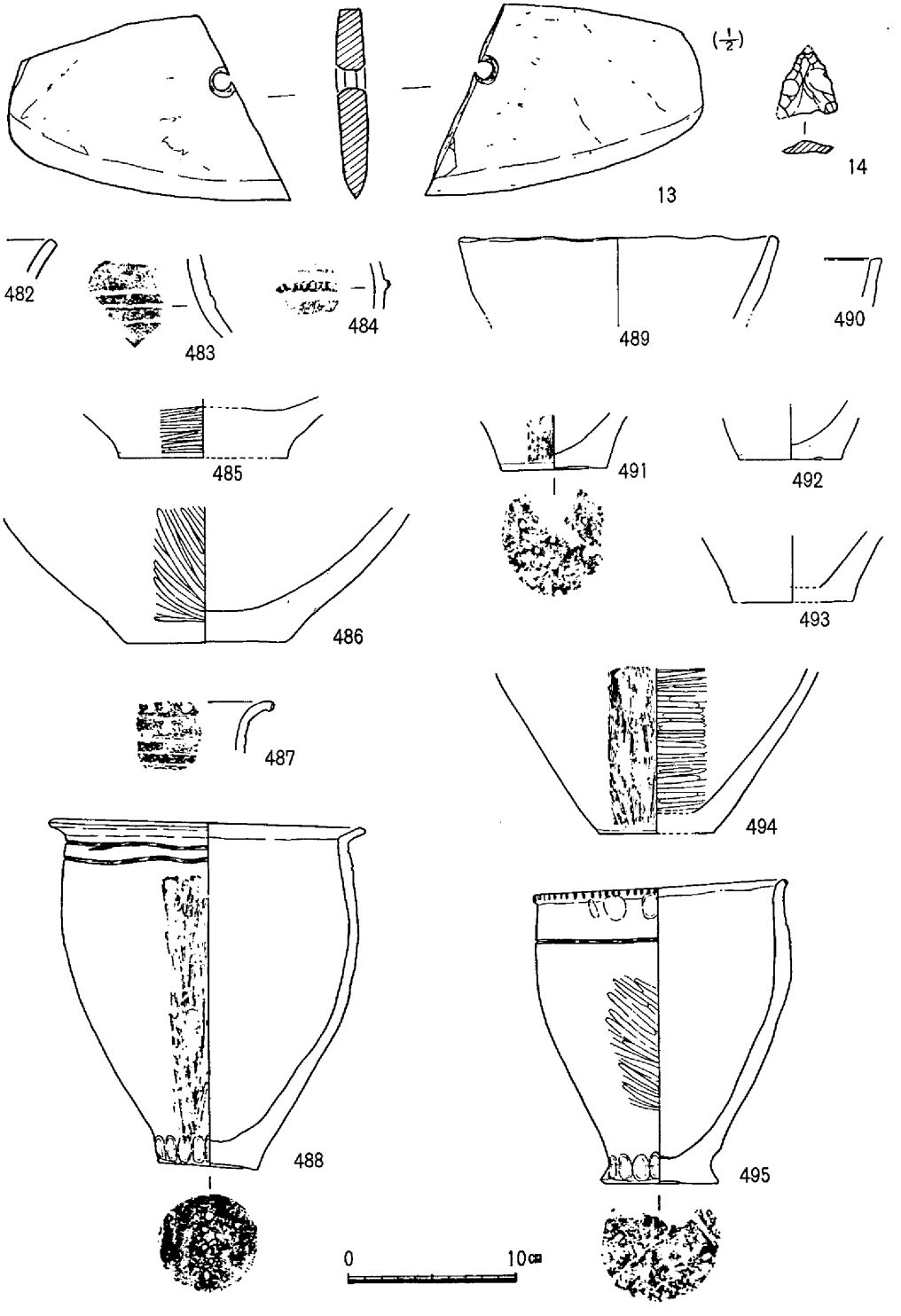
遺物は，壺・甕・鉢・石庖丁・石鏃が北側からずり落ちた状態で出土していた。土器の底部には明瞭な籾とその他の種子の圧痕が付いているものが3例も見つかった。石庖丁**13**は，楕円形を呈する磨製のもので，約半分残存している。小口部を除いて良く研磨している。刃部は両面から同じ様に砥ぎ出しているので断面は左右対称である。円孔も両側から穿っている。石材は，粘板岩と思われ，黒色で光沢をもっている。現存長8.5cm・現存最大幅5.7cm・最大厚0.9cm・重量49.3gを計る。石鏃**14**は，二等辺三角形に整形された弱凹基式石鏃で，サヌカイトの打製である。先端と基部が1部欠けている。推定長2.0cm・推定最大幅1.8cm・最大厚0.35cm・重量1.5gを計る。

この土壙の時期は，伴出遺物から考えて，百・前・Ⅱに比定できる。用途・性格は分らない。この付近に同時期の土壙が他に2つある。5－P－2・5－P－3であるが，いずれも舟形をした土壙の底部と考えられる。この2つの土壙では実測可能な土器片はない。

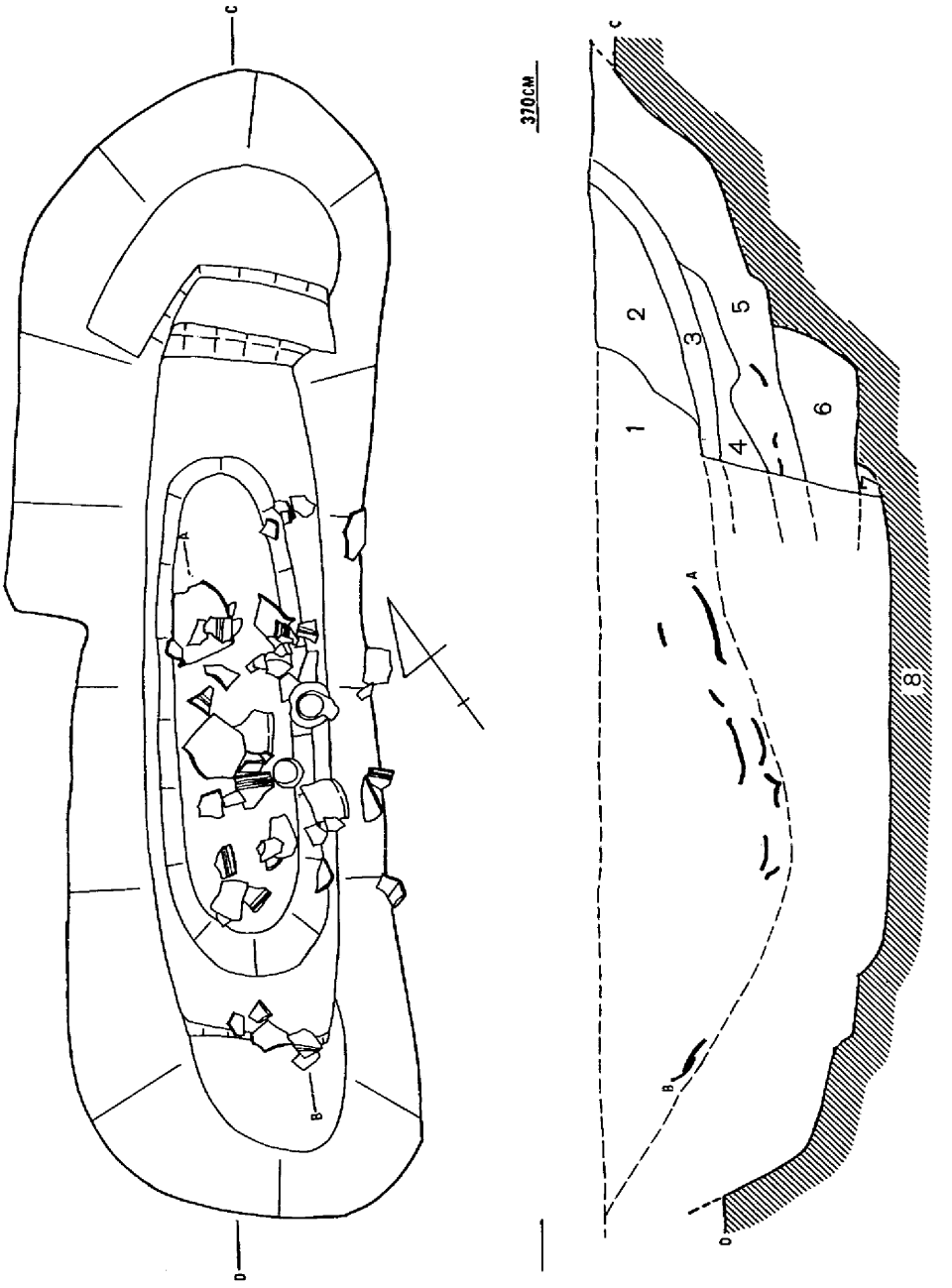
3） 4－P－30

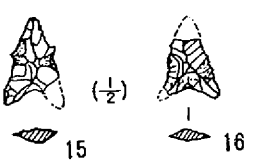
4区中央部に位置する。D－5に東側を切り取られた舟形のプランを呈する土壙である。現存長300cm・現存最大幅95cm・深さ78cmを測る。長軸の断面は階段状を呈している。最下段のプランは長さ138cm・最大幅40cmの長楕円形を示し，底部は舟底を思わせる。下から一段目は長さ180cm・最大幅50cmの胴張りの長方形を呈する。この段に木棺を置いていたのではないかと考えている。二段目までの高さは20cm・三段目までの高さが30cmを測る。高さ・長さ・幅を考慮しても木棺の大きさと同じではないかと思われる。また遺物の出土状態を見ると，最上層に大半の遺物が包含されている。中空の状態で上部に供献されていたものが落下したと考えられる。すなわち，この舟形土壙は，木棺を埋葬した土壙墓と考えたい。

遺物は，壺・甕等の土器片多数と石鏃が2点出土している。これらの遺物からこの土壙の時期は，百・前・Ⅱに比定できる。石鏃は，サヌカイト製の打製石鏃で，凹基式のものである。いずれも抉りをもち，**15**は斜辺に左右1対の角状突起を持つ。**15**は長さ2.5cm・推定最大幅1.6cm・最大厚0.3cm・重量0.7g，**16**は推定長2.3cm・推定最大幅1.6cm・最大厚0.3cm・重量0.5gを計る。この土壙と同時期の土壙は，南東へ約2.5m離れて4－P－20がある。この土壙と4－P－20との長軸方向はほぼ90°異っている。



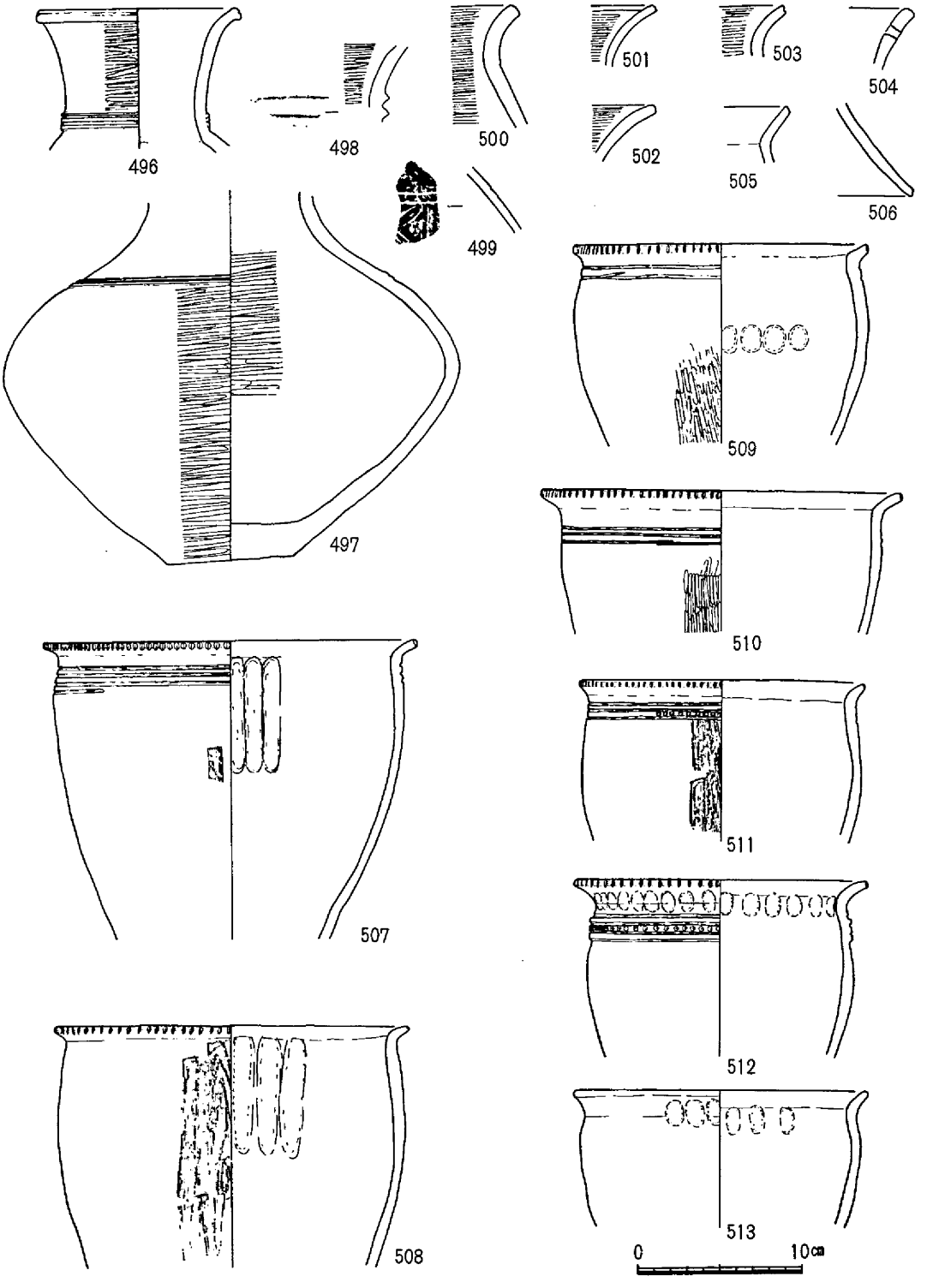
第67図　左岸用水5－P－1出土遺物



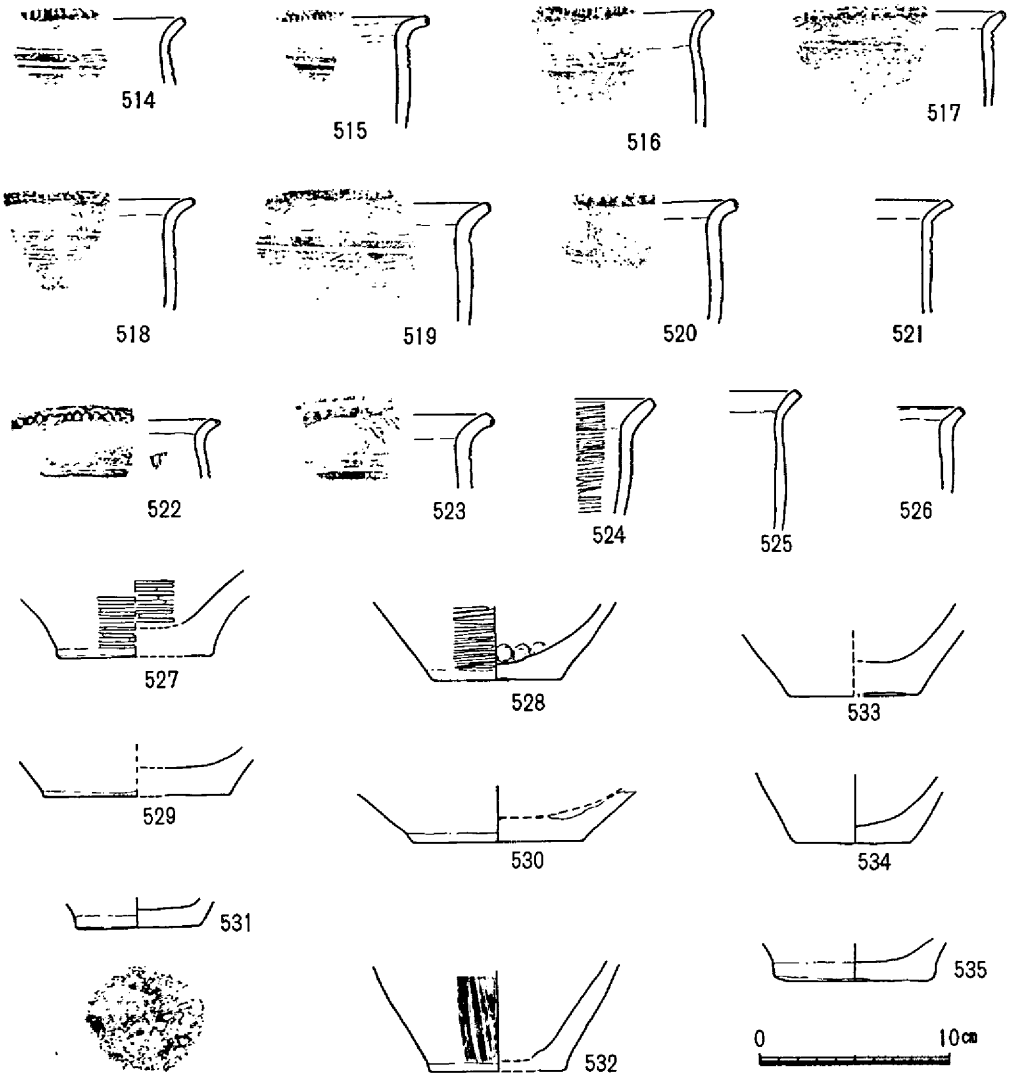


1．黒色土層
2．暗黄褐色砂層
3．黄褐色砂層（鉄分が多い）
4．黄褐色砂層（非常に硬い）
5．黒色粘質土層
6．黄灰褐色砂質土層
7．黄灰褐色粘質土層
8．黄褐色砂質土層

第68図　左岸用水4－P－30遺構図（1/20）及び出土遺物



第69図　左岸用水4－P－30出土遺物（1）

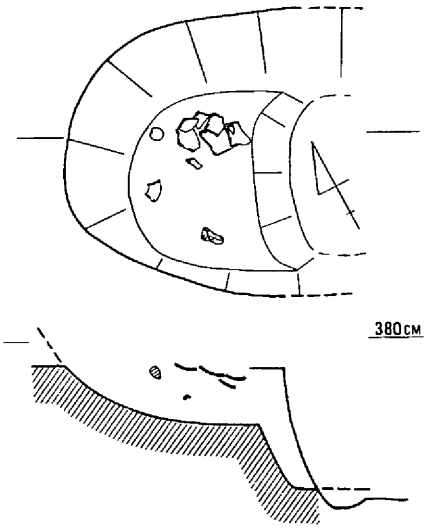


第70図　左岸用水4－P－30出土遺物（2）

4）　5－P－2

5－P－1の東約1.7m離れ，5－H－1によって切られた土壙である。現存長70cm，幅75cm，深さ32cmを測る。東西に長軸を持ち，長楕円形を呈すると考えられる。4－P－30のような舟形の土壙とも考えられる。断面を見ると段状を呈している。遺物は上段及び下段からも出土している。甕形土器であるが，体部破片のため実測していない。2～3mm大の粗砂粒・礫を含む茶褐色を呈する土器で，百・前・Ⅱと考えられる。したがってこの土壙の掘られた時期も同じと考えたい。

（浅倉）

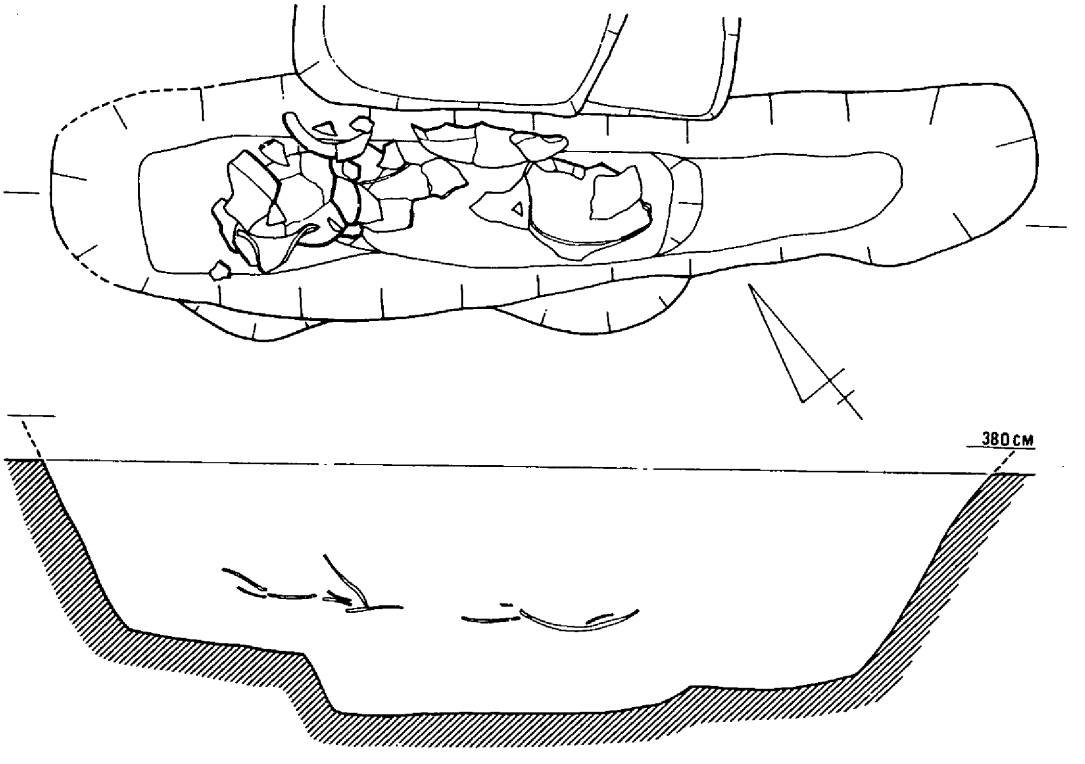


第71図
左岸用水5－P－2遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）

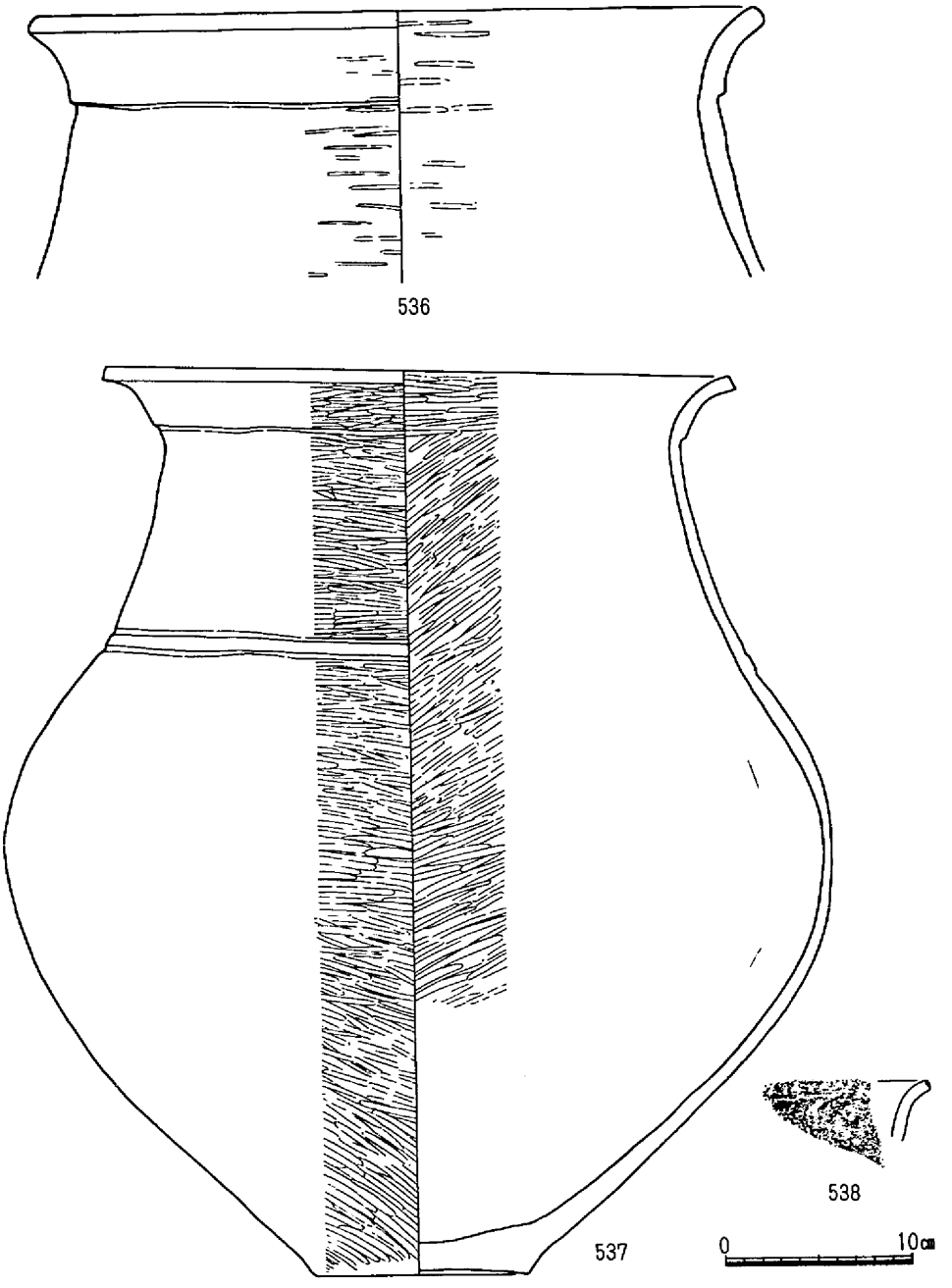
5）　4－P－20

4区D－8の東，D－6の南肩部から検出されたもので，4－P－30の南東3 mに位置する。平面プランは現存幅約60cm，長さ250cmの楕円形を呈す。深さは北西隅で45cm，北東隅で55cmを測り，やや北東へ傾斜している。さらに，底部中央には一段掘り下げた部分が検出された。掘り方は長軸断面ではゆるやかな傾斜を持つのに対し，短軸断面ではやや急である。土壙内には暗褐色粘質土が堆積していたが分層することは困難であった。

遺物は壺形土器及び甕形土器が出土している。537は完形に復原出来たもので，底部は土壙中央からやや斜めに傾いて出土しており，胴部及び口縁部はその西側から，折り重なって出土している。いずれも土壙底部から浮いた状態で出土している。このことから，当壺形土器は土



第72図　左岸用水4－P－20遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）



第73図　左岸用水4－P－20出土遺物

壙に埋められたものではなく，土壙掘削後，転落したものと思われる。536は土壙上部から出土したもので，他に同一個体の胴部と思われるものも数片出土している。538は537と同一レベルから出土しているが，他に同一個体と思われる破片はない。これら536，538はいずれも器表面が磨滅しており，そ

の量も僅少なことから当遺構とは関連しないものと理解している。

以上，当遺構は遺物の特徴から百・前・Ⅱのものと考えられ，またそのあり方から土壙墓の可能性を考えているが，壺形土器**537**そのものは棺として使用されたとは速断し難い。　（江見）

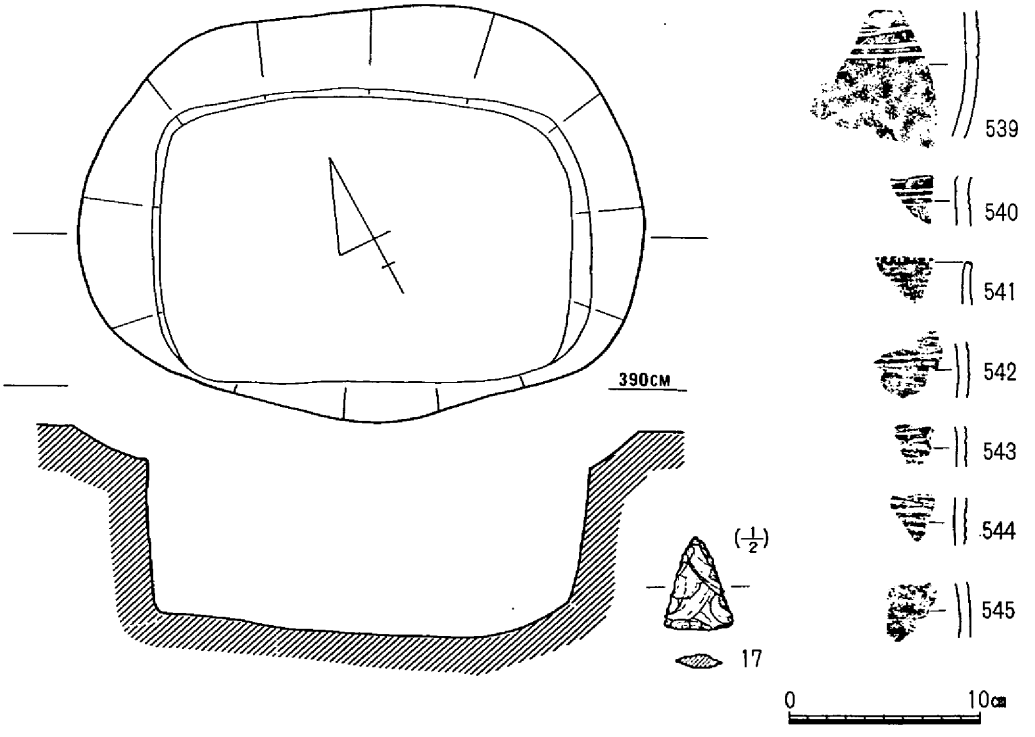
6）　6—P—1

D—1の北側で微高地斜面から2ｍ東側に位置する。長軸をほぼ東西にする楕円形プランの土壙で，下端は長方形プランを呈する。現在長径150cm・現存短径110cm・現存深50cm・下端長辺110cm・下端短辺75cmを測る。

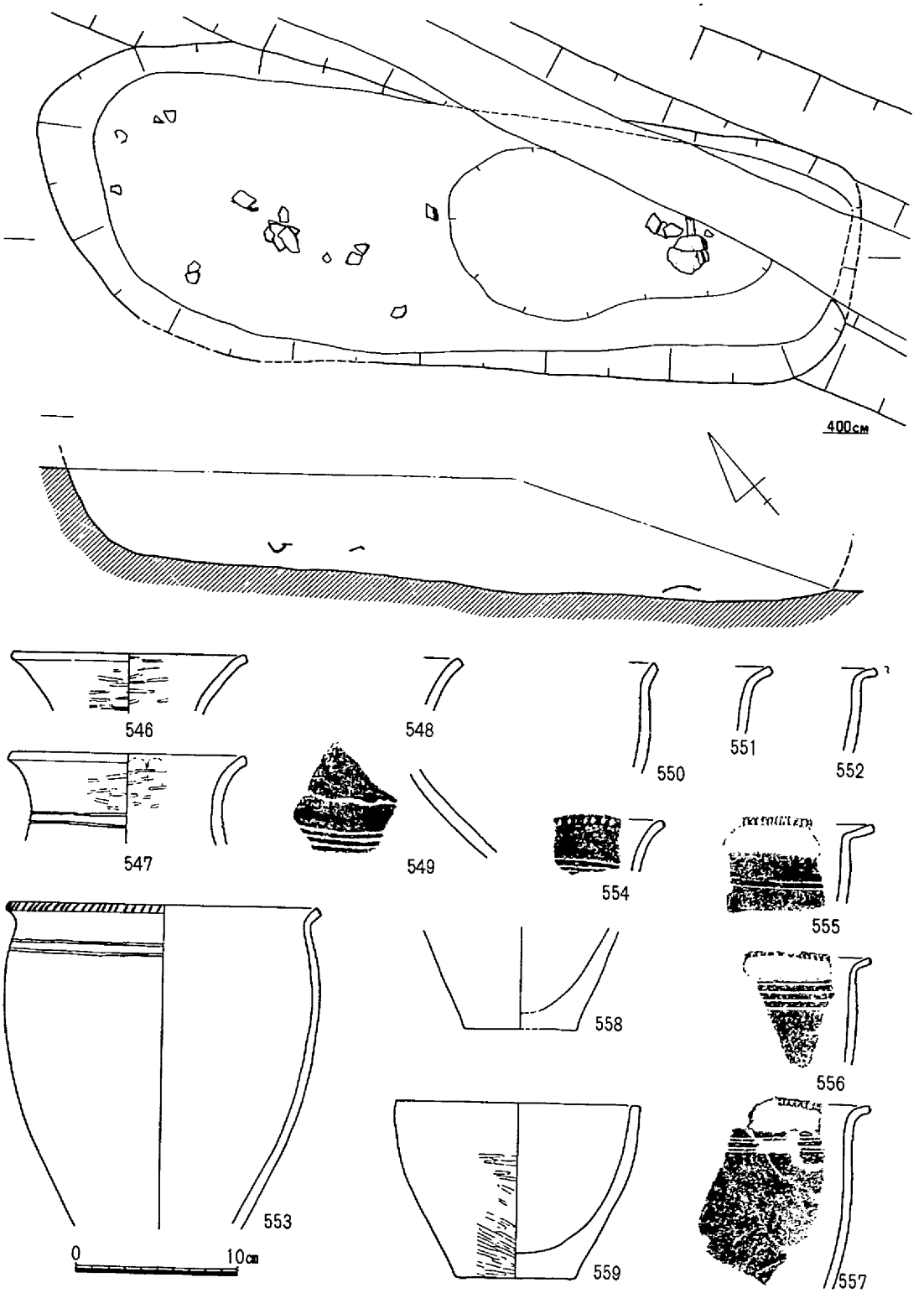
伴出遺物は，弥生式土器片・縄文式土器片，石鏃である。この土壙の用途・性格は不明である。時期は，出土遺物から考えて，百・前・Ⅱに比定できるのではないだろうか。石鏃**17**は，サヌカイトを使った打製石鏃で，平基式に属している。先端部を僅かに欠く。全体に雑な加工を施している。側縁には，小さな調整剥離が部分的に入る。推定長2.5cm・最大幅1.8cm・重量1.2gを計る。　（浅倉）

7）　3—P—50

3区東寄りから検出されたもので，D—7や，後出土壙等に相当切られており，約$\frac{1}{3}$を残す。平面プランは現存幅150cm，長さ390cmの不整形な大型の土壙である。深さは北東隅で50cmを残すが，前述の4—P—20同様に土壙底部は東方へやや傾斜している。また土壙東寄りの所は僅に凹みを呈す部分



第74図　左岸用水6—P—1（$\frac{1}{20}$）及び出土遺物



第75図　左岸用水3－P－50遺構図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

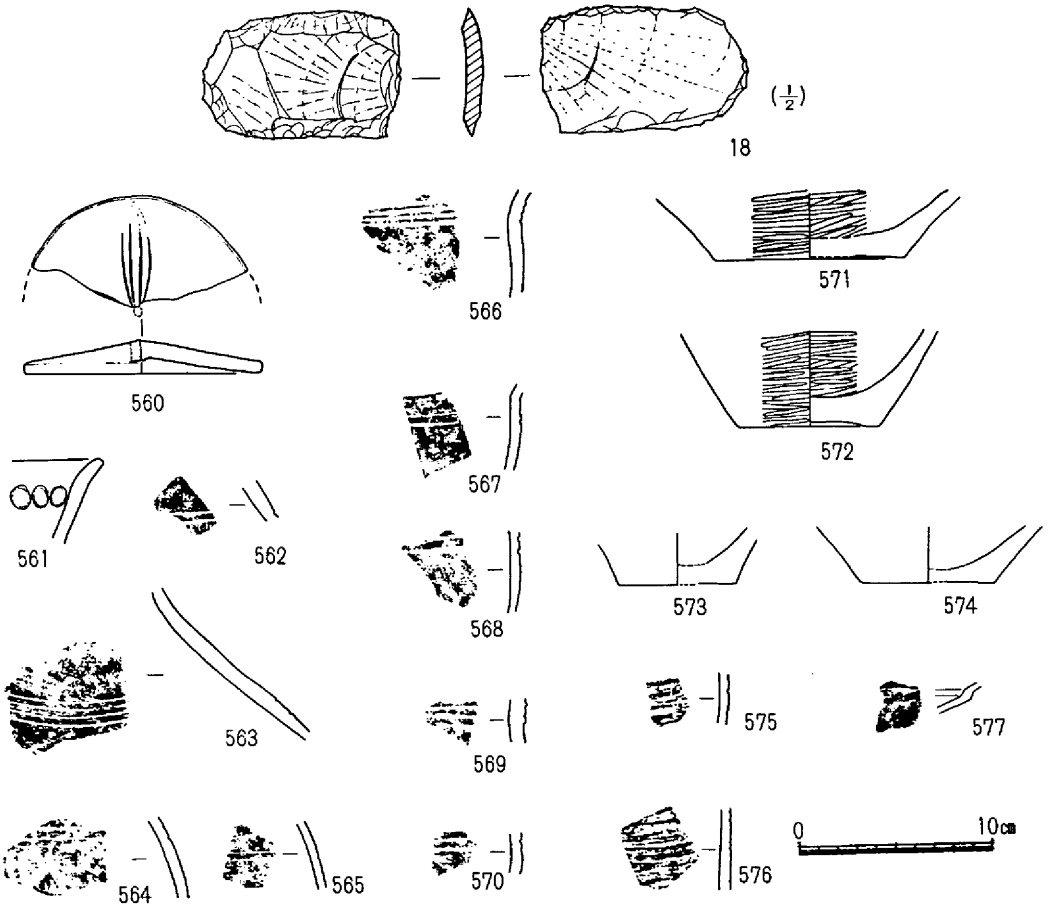
が認められた。

遺物は土壙底部から若干浮いた状態でまばらに散在していた。また，遺物は破片が多く，僅かに**553**及び**559**を復原完形出来る程度であった。

以上，当遺構は遺物の特徴から百・前・Ⅱと考えられるが，その性格は不明である。　　（江見）

8）　2—P—20

2—H—3の東隣りに在って，それに切られている円形あるいは楕円形の土壙である。一部分検出している。大半は調査範囲外である。深さ20*m*で底部は平坦である。伴出遺物は，縄文式土器・弥生式土器の細片と，石器がある。よく似た土壙が北西に約6*m*離れて存在する。3—P—50と称している。百・前・Ⅱに比定する大型の楕円形土壙である。石器**18**は，サヌカイト製であり，扁平な舌状の刃器である。二つの刃部は両側からよく調整剥離を行っている。皮剥ぎ用に使用したものであろう。現存長5.2*cm*・最大幅3.4*cm*・最大厚0.4*cm*・重量11.4*g*を計る。縄文晩期に出土する不定形刃器と呼ばれるものであろうか。　　（浅倉）



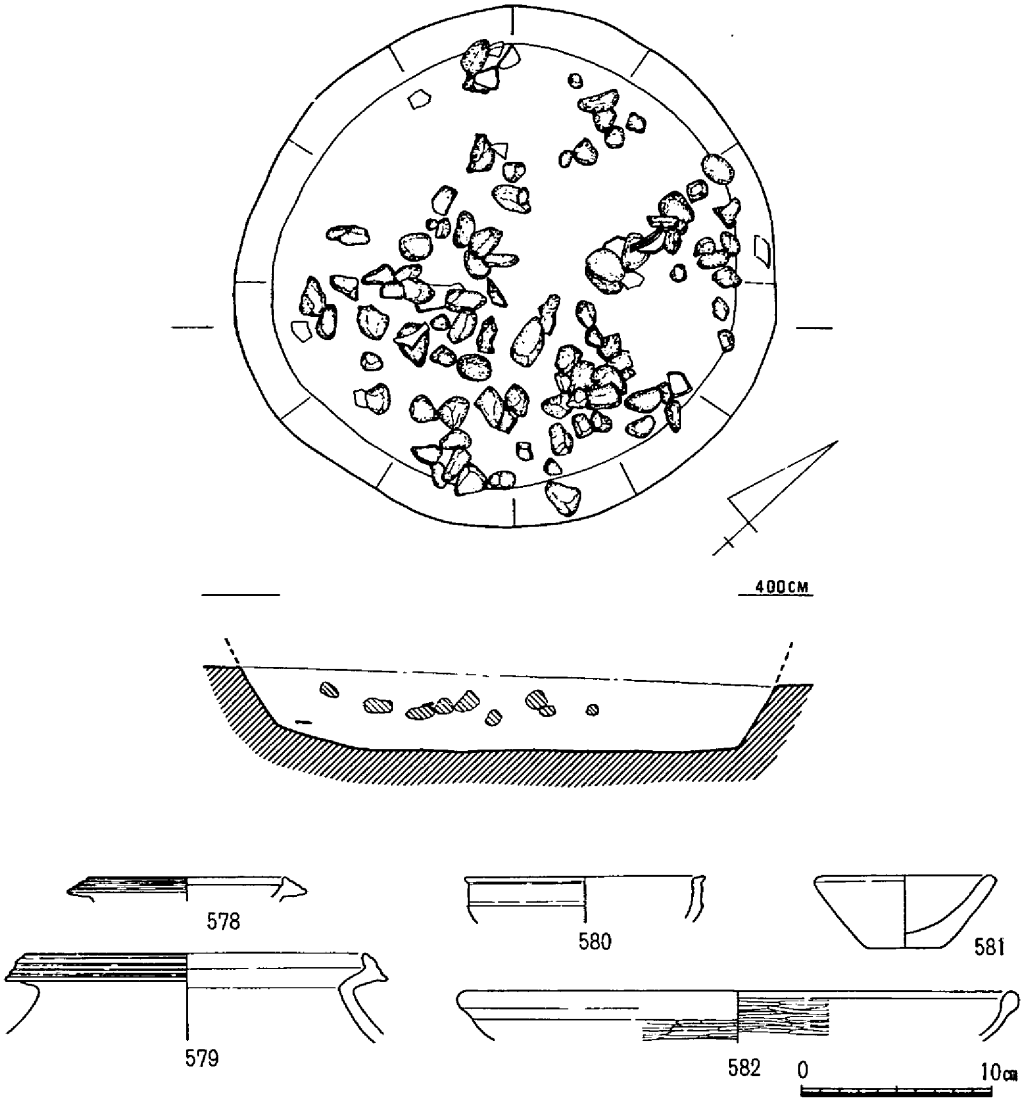
第76図　左岸用水2—P—20出土遺物

9） 3—P—20

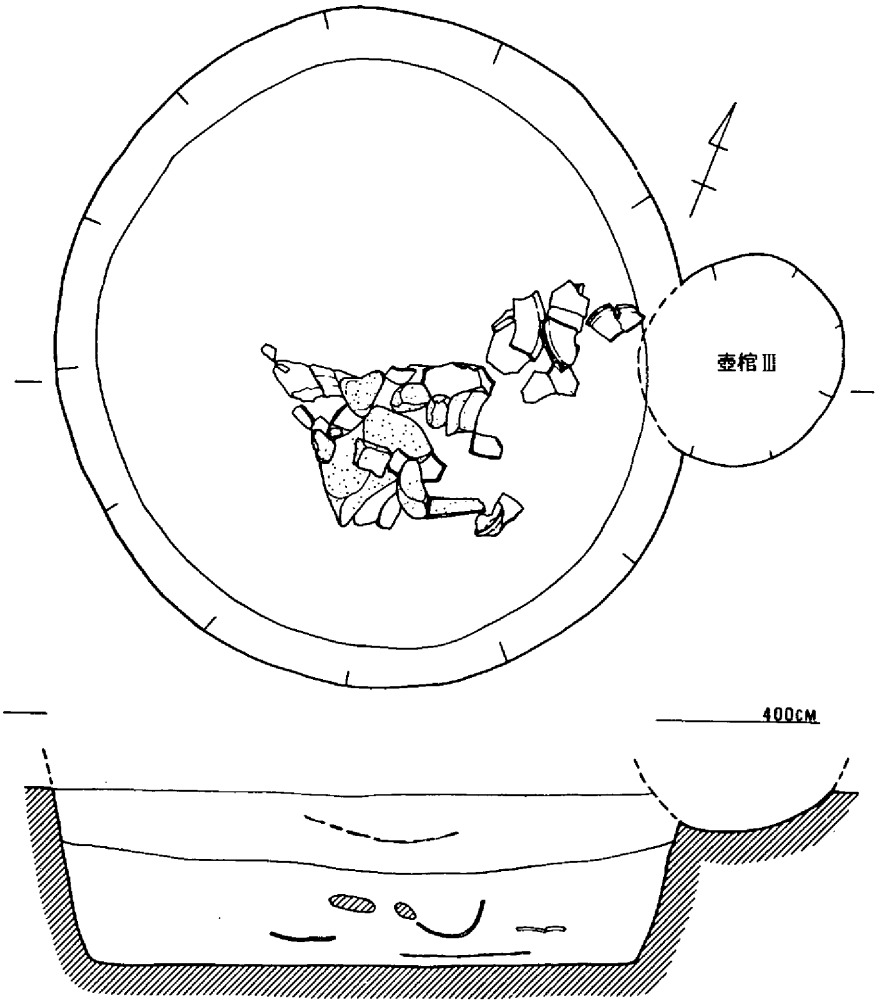
5—P—30の南に位置し，3—H—3に上部を削られている。残存径140cm前後の円形を呈し，深さ20cmを測る。土壙内は5～10cm前後の円礫を多く含み，その中に土器片が散在していた。また，遺物は土壙底部に密着したものはなく，いずれも浮いた状態で出土している。これら遺物の特徴から，古い様相を残すものの百・後・Ⅰに推定出来る。（江見）

10） 1—P—15

径170～180cmのほぼ正円を呈し，底面の平な比較的作りの丁寧な土壙である。埋土は二層に大別で



第77図 左岸用水3—P—20遺構図（$\frac{1}{20}$）及び出土遺物



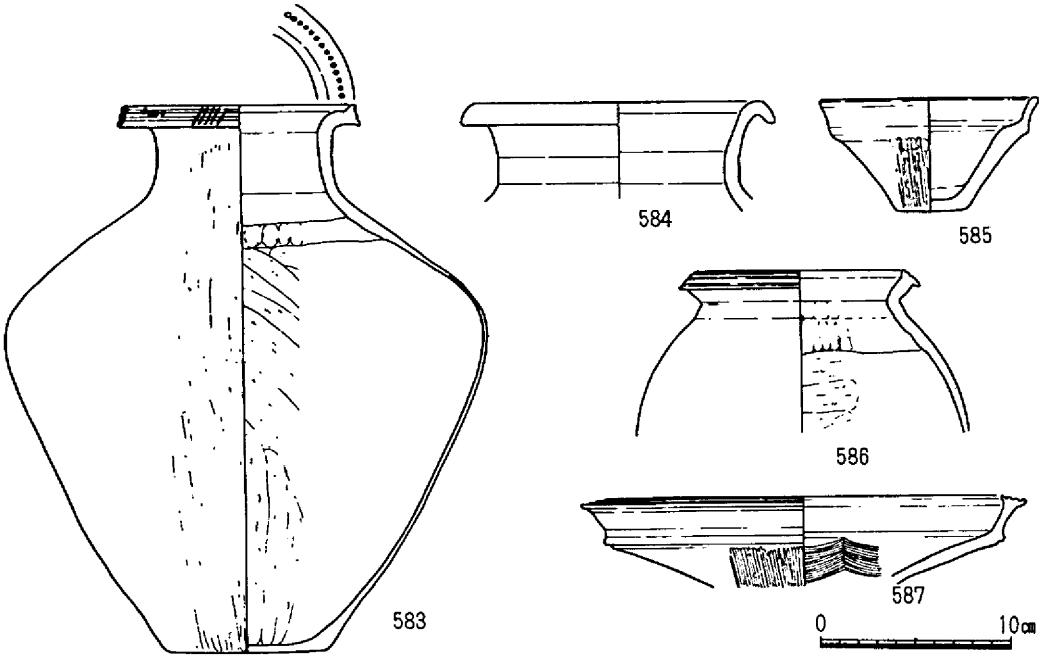
第78図　左岸用水1－P－15遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）

き，上層の茶灰褐色砂質土には約1㎝程の炭層が部分的に入る。下層の黄灰褐色粘質土中には拳大から人頭大の石数個とともに土器片が混在する。また底から約3㎝浮いたところに約1㎝の炭層が確認できた。この土壙出土の遺物のほとんどは，下層からのものであった。

平面形態，あるいは底の平坦さ，作りの丁寧さなどから，単なるゴミすて穴の性格をもつものとは思われない。当時の生活面が，この土壙などの検出面から30～50以上あったとすれば，貯蔵庫的な性格の遺構との考え方もできる。また，当土壙の肩の一部を切って，壺棺Ⅲが存在する。出土遺物は，百・後・Ⅰを示している。

11）壺棺Ⅰ

長軸約90㎝，短軸約75㎝の楕円形の平面形で，深さ約60㎝（推定）の擂鉢状を呈す掘り方をもつ。



第79図　左岸用水1－P－15出土遺物

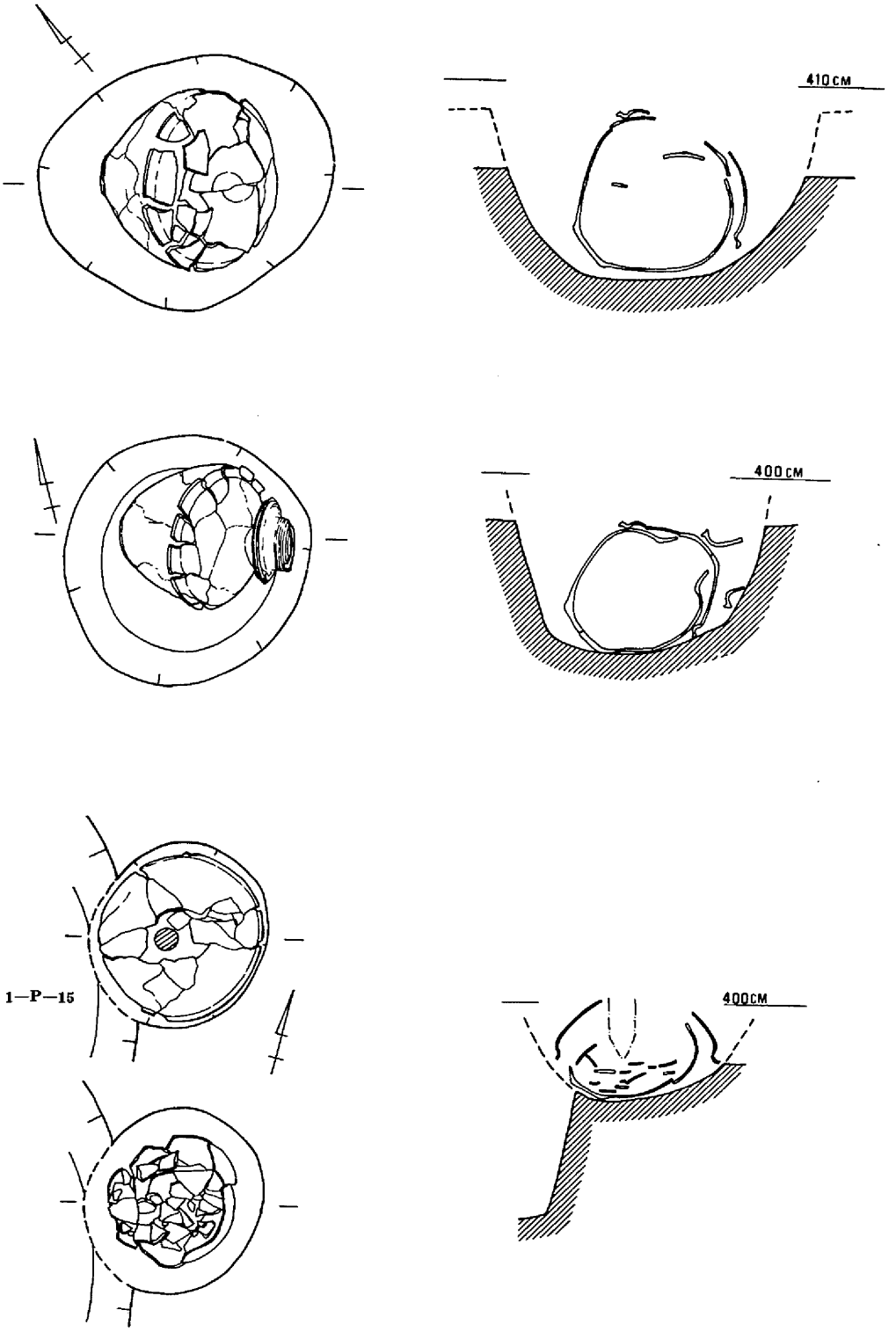
棺は，その中に口部を斜め上方に向けて据え置かれた壺形土器（身）と，口縁部を下にして壺形土器の上部にかぶせた鉢形土器（蓋）とからなる。壺形土器は頸部から上（一部肩部を含む）を打ち欠いて使用していた。鉢形土器は土圧などで一部破損し，その部分から壺形土器の内部に暗灰色粘土が入り込んでいた。内部の土をたんねんに調べたが，骨や副葬品らしき遺物は発見されなかった。

12）壺棺Ⅱ

径約75cmの円形掘り方を有す。棺の形態は，頸部から上を打ち欠いた壺形土器（長頸）を身とし，完形の鉢形土器をふせて蓋とするものである。しかし，この棺の場合は身である壺形土器から打ち欠かれて切り離された部分（頸部から口縁部）が鉢蓋の上に乗せられていた。棺の設置状況においては壺棺Ⅰと大差はないが，掘り方の一方の側面に寄せて置かれていることなどに相違が認められる。掘り方内の埋土は全体的に茶灰色を呈す砂質土であったが，上部では部分的に基盤層の黄色土が混っていた。壺形土器の内部は，中程までヘドロ状の灰色粘土が入り込んでいたが，上半部は空洞となっていた。灰色粘土内からの遺物は見つかっていない。

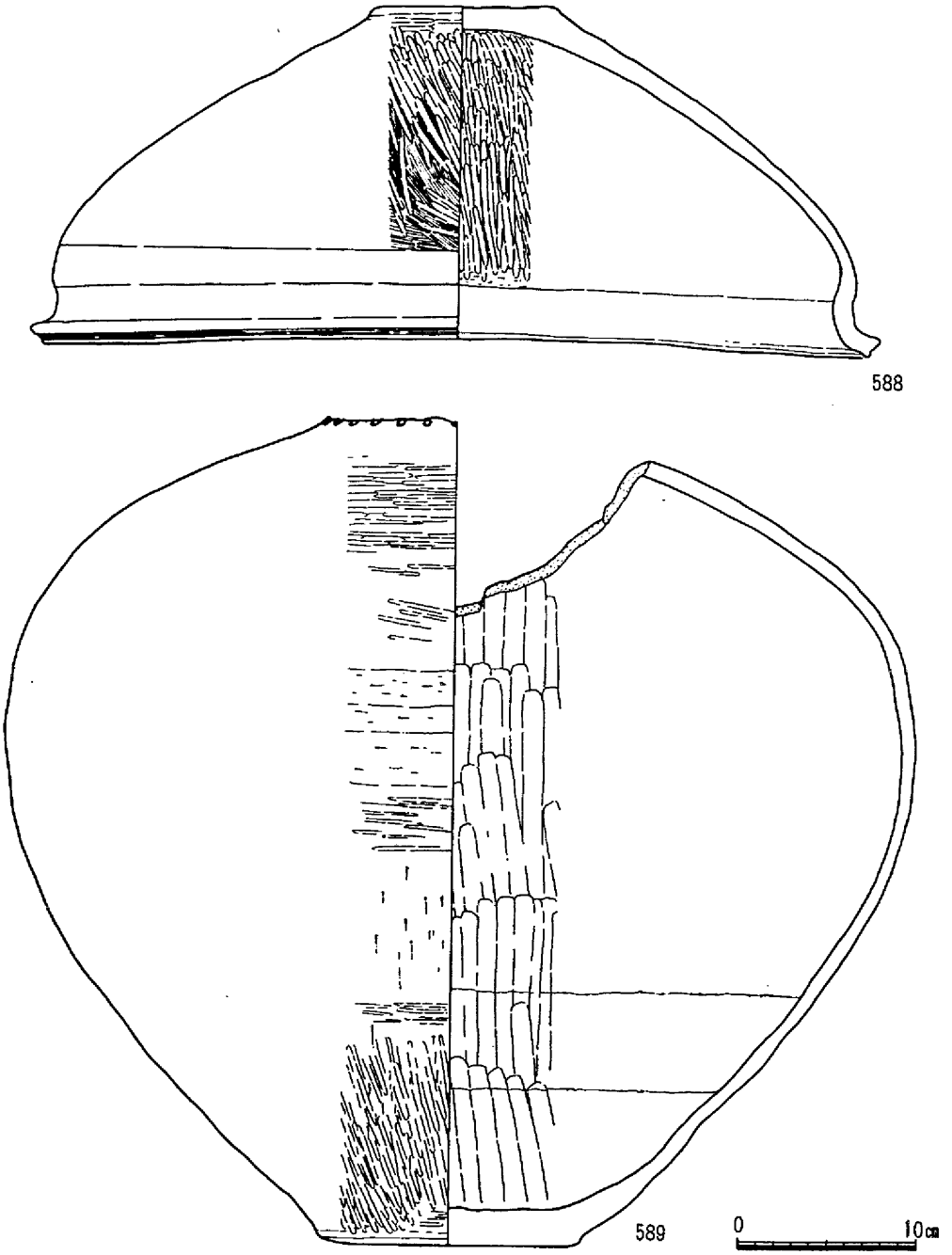
13）壺棺Ⅲ

土の色などの判別が難しく，掘り方の肩部の検出はかなり下位でしかできなかった。推定径約70cmの円形掘り方を有すものと思われる。棺は壺棺Ⅰ・Ⅱと同様のセット関係をもつ。この棺はほぼ中央部に後世の百間川堤工事時に打ち込まれたと思われる杭痕跡があり，そのため鉢形土器の底部付近

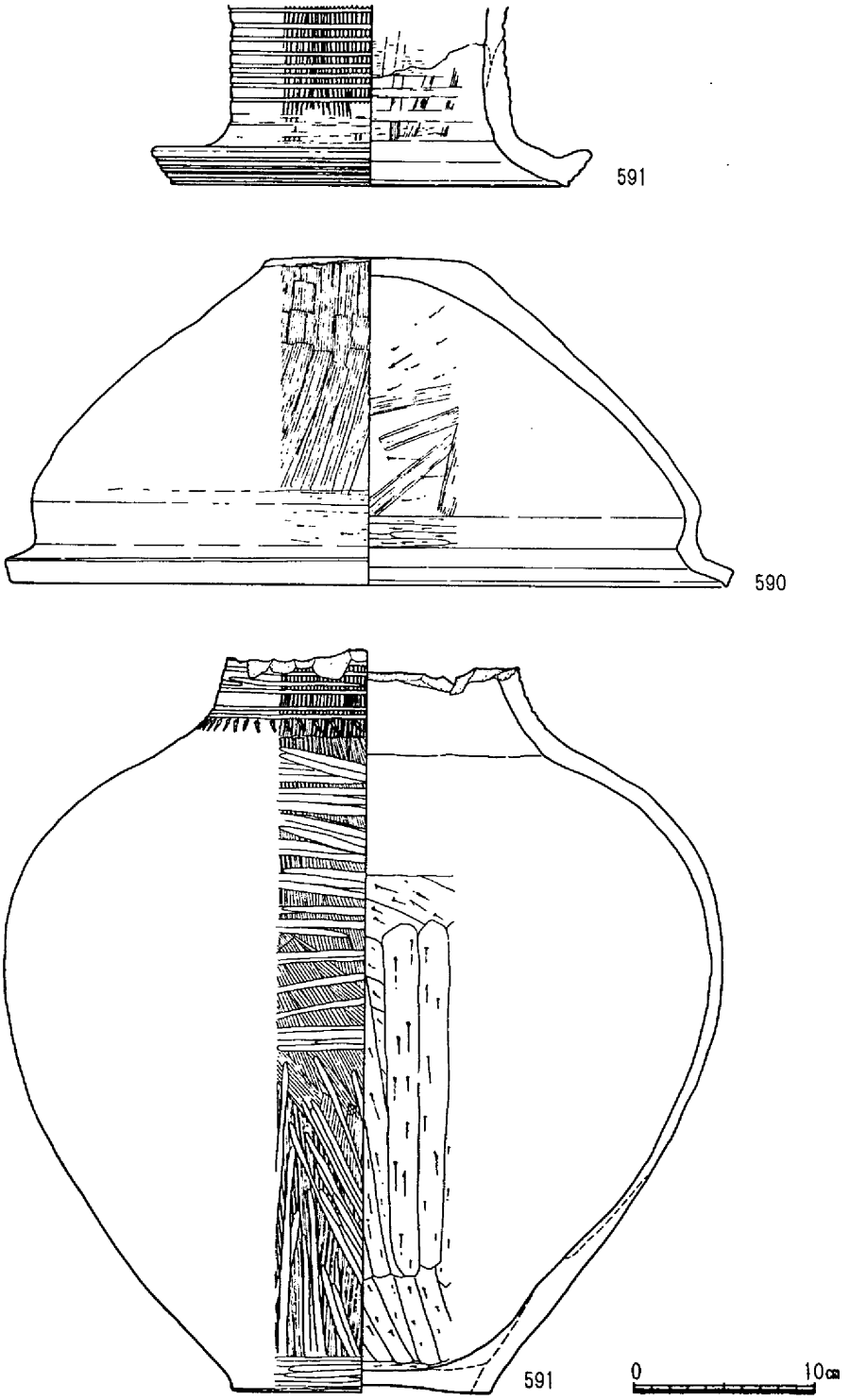


第80図　左岸用水壺棺Ⅰ(上)，Ⅱ(中)，Ⅲ(下) 遺構平・断面図 ($\frac{1}{20}$)

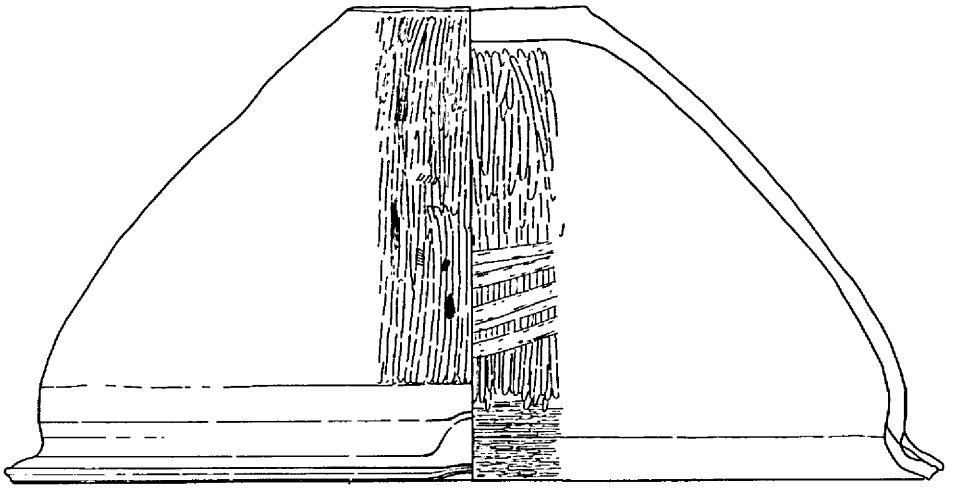
の破片が壺形土器の中に折り重なった状態で出土している。壺形土器の底部の状況からすれば，壺棺Ⅰ・Ⅱと同様に，少し斜めに傾けて据え置かれたものと思われる。壺棺内部からの骨の出土はない(註21)。（柳瀬）

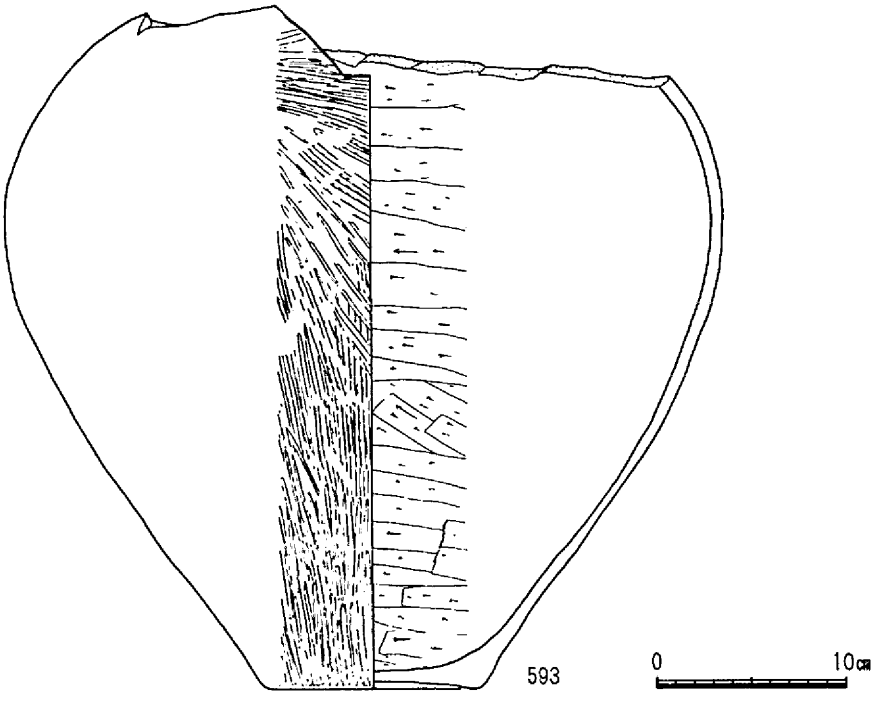


第81図　左岸用水壺棺Ⅰ出土遺物



第82図　左岸用水壺棺Ⅱ出土遺物





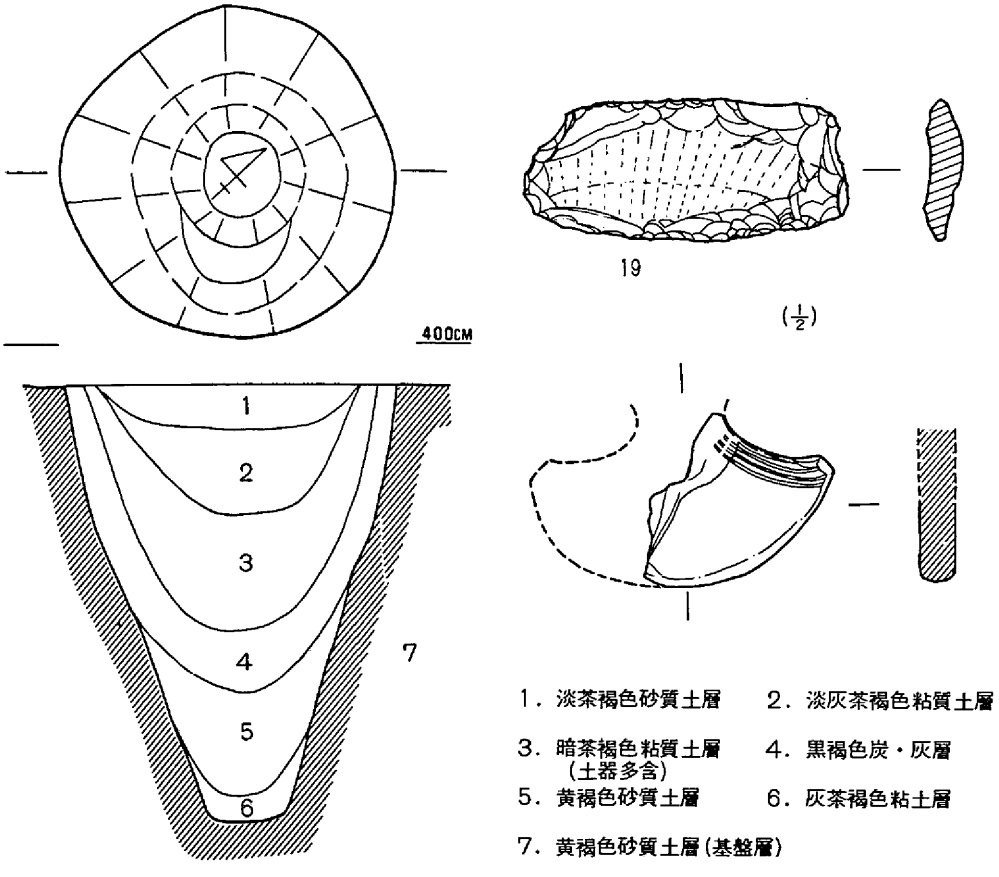
第83図　左岸用水壺棺Ⅲ出土遺物

14）6－井戸－Ⅰ

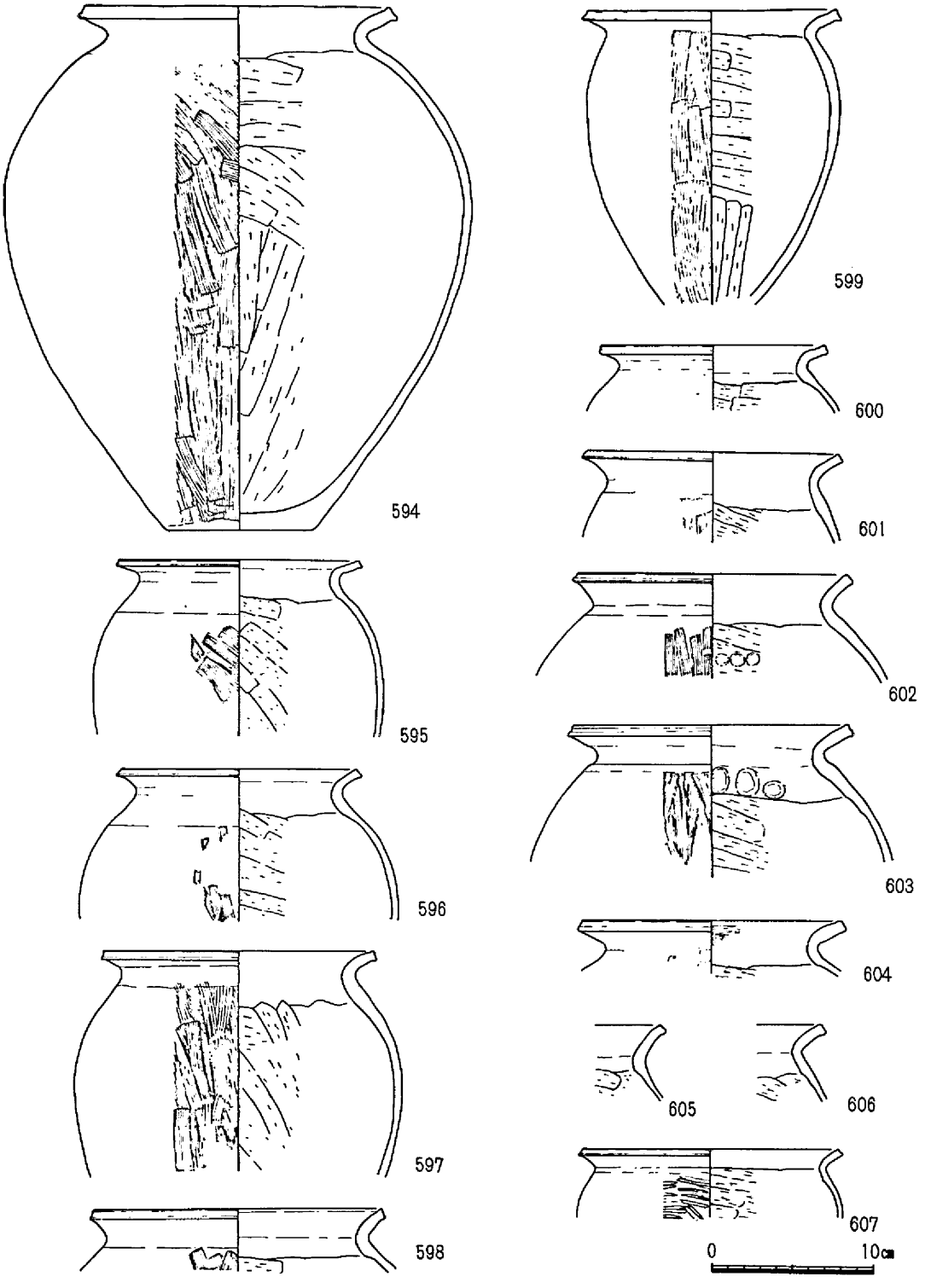
6区の南東に位置し，D－1を切っている直径約175cmの円形プランを呈する井戸状遺構である。現存の深さは230cmを測る。全体形は逆円錐台形を呈する。検出時には，第四層の炭層がちょうどドーナッツ状に輪を描いていた。土層は，第一層が淡茶褐色砂質土。第二層が淡灰茶褐色粘質土。第三層が炭・灰・焼土を極めて大量に含み，土器の大部分を包含している暗茶褐色粘質土。第四層が先述

した炭・灰ばかりの黒褐色砂質土で土器片を少し包含する。第五層は，黄褐色砂質土で土器片を若干量含む。第六層は，井戸の最下層に当るが，灰褐色粘土である。井戸の底部と，底から約50cmまでの壁面は，微高地の基盤層である黄褐色粘質土が黒褐色に変色している。水の溜っていた証拠であろう。しかし掘り上げ後にもあまり水が湧き出てこないことから，良好な井戸ではなかったのではないかと思われる。第五層は，壁面の基盤層の崩落によって一気に埋積したものと考えられ，その後井戸としての機能は失われたものと思う。そして炭・灰などのゴミ捨て場に転化したのであろう。

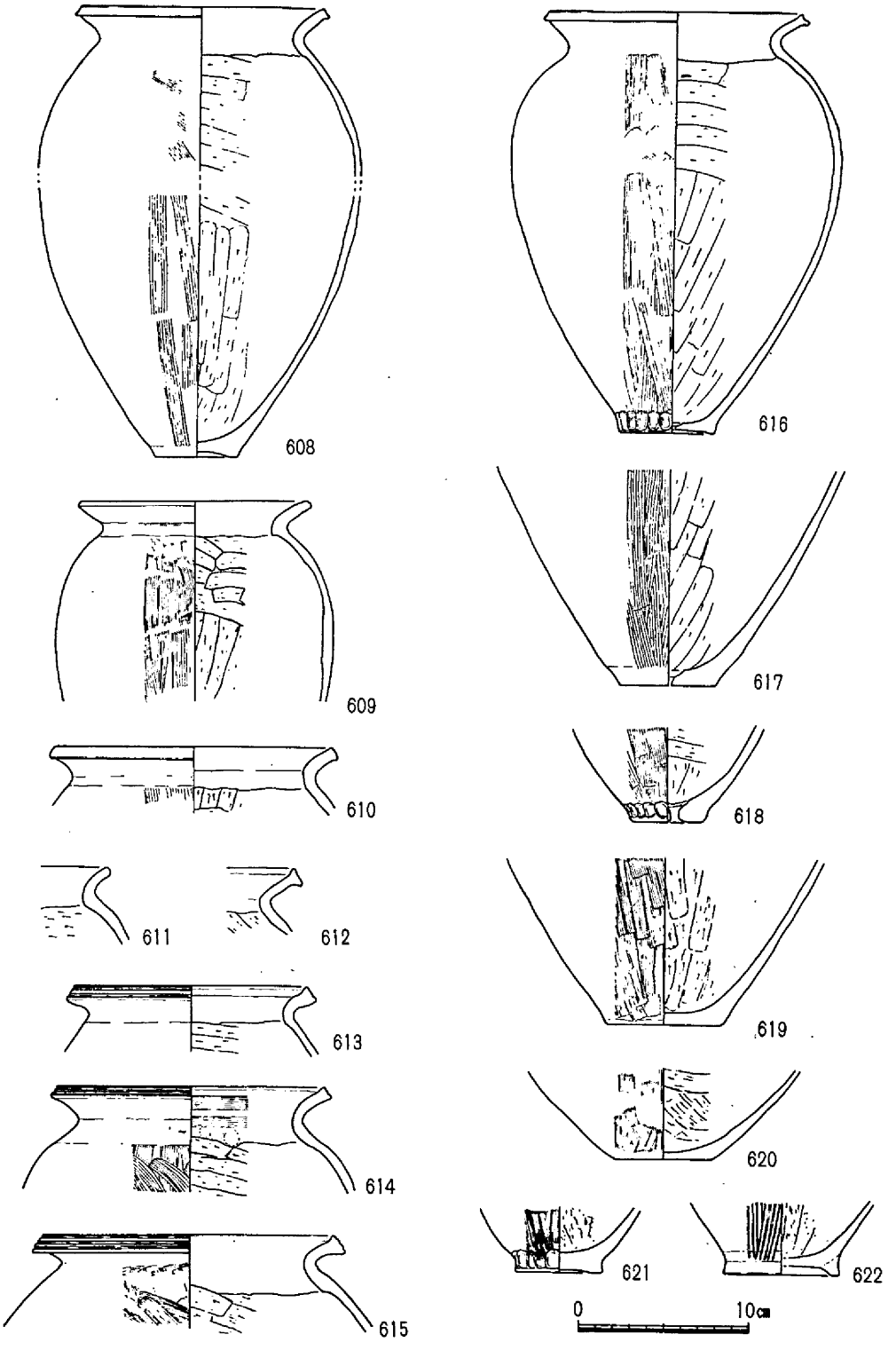
出土遺物は，弥生式土器多数と製塩土器多数と分銅形土製品1個と石庖丁1点がある。弥生式土器は，百・後・Ⅱに比定できるので，この井戸の機能していた時期は，その時期以前と考えることができる。分銅形土製品は，全体の$\frac{1}{4}$の下部破片であろう。茶褐色を呈し，2mm以下の砂粒を多分に含み，焼成は良好である。断面下端部は隅丸方形に作る。くりこみ部にそって櫛描きの平行沈線文が3条施されている。現存長5cm・現存幅2.5cm・最大厚1.0cmを測る。石庖丁**19**は，サヌカイト製の打製のもので，扁平な隅丸長方形を呈する。両平部に大剝離面を残し，縁辺部は調整剝離を行っている。背部はすりつぶしが施され，刃部はやや外湾する。両小口部に浅い抉りを持つ。ほぼ完形であり，長さ7.5cm・最大幅3.3cm・最大厚0.9cm・重量44.5gを計る。（浅倉）



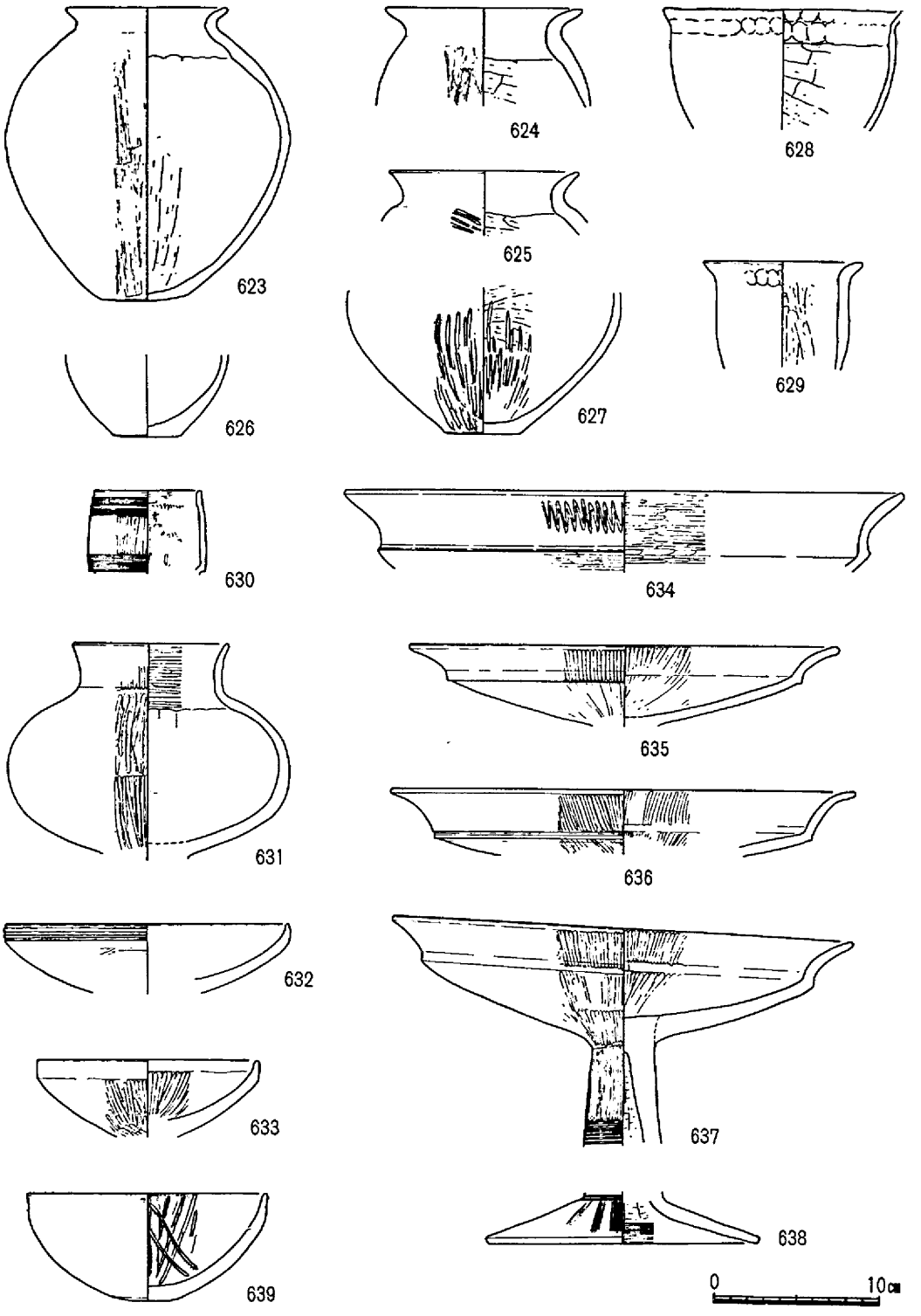
第84図　左岸用水6－井戸－Ⅰ遺構図（$\frac{1}{40}$）及び出土遺物（1）



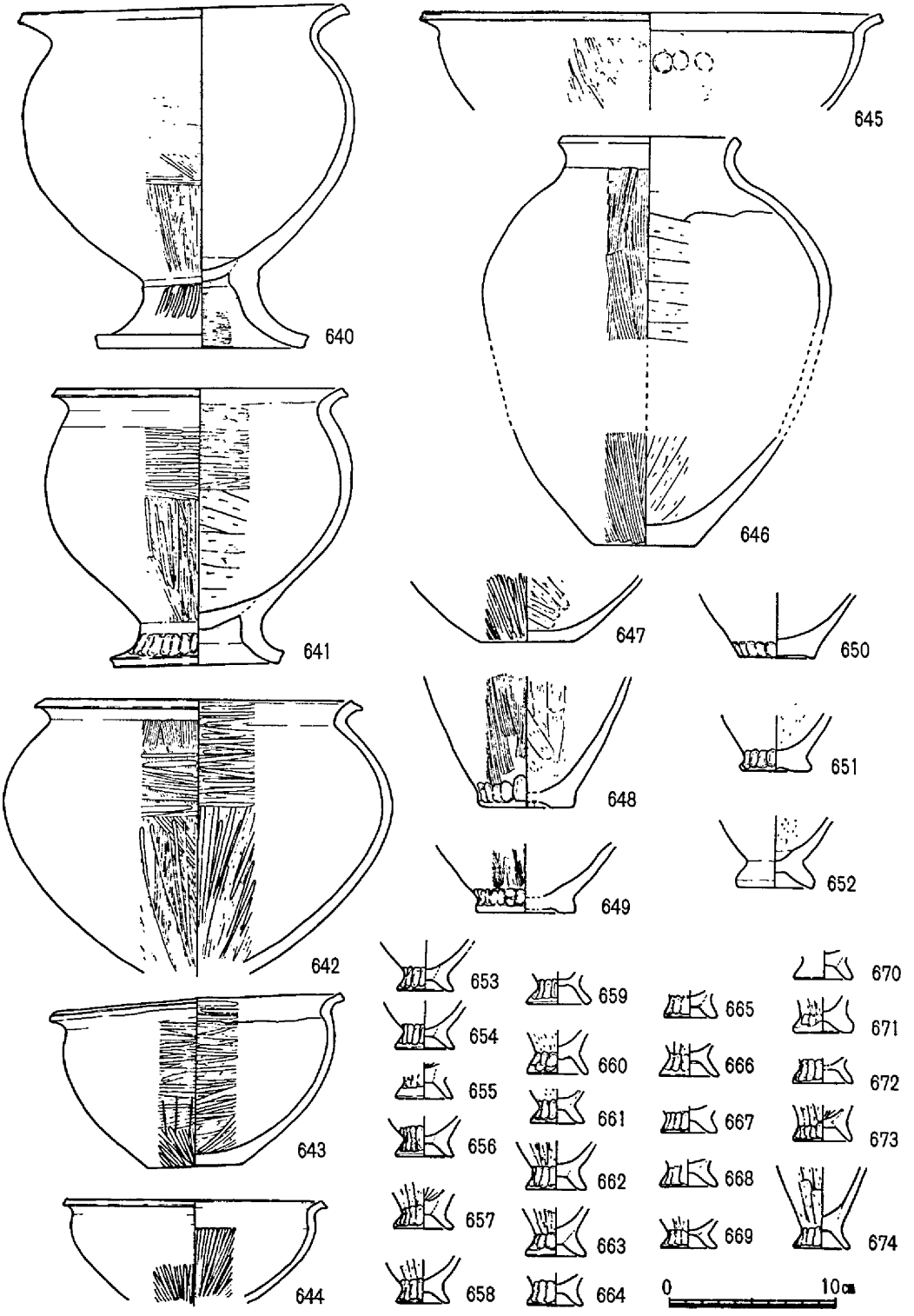
第85図　左岸用水6－井戸－Ⅰ出土遺物（2）



第86図　左岸用水6－井戸－Ⅰ出土遺物（3）

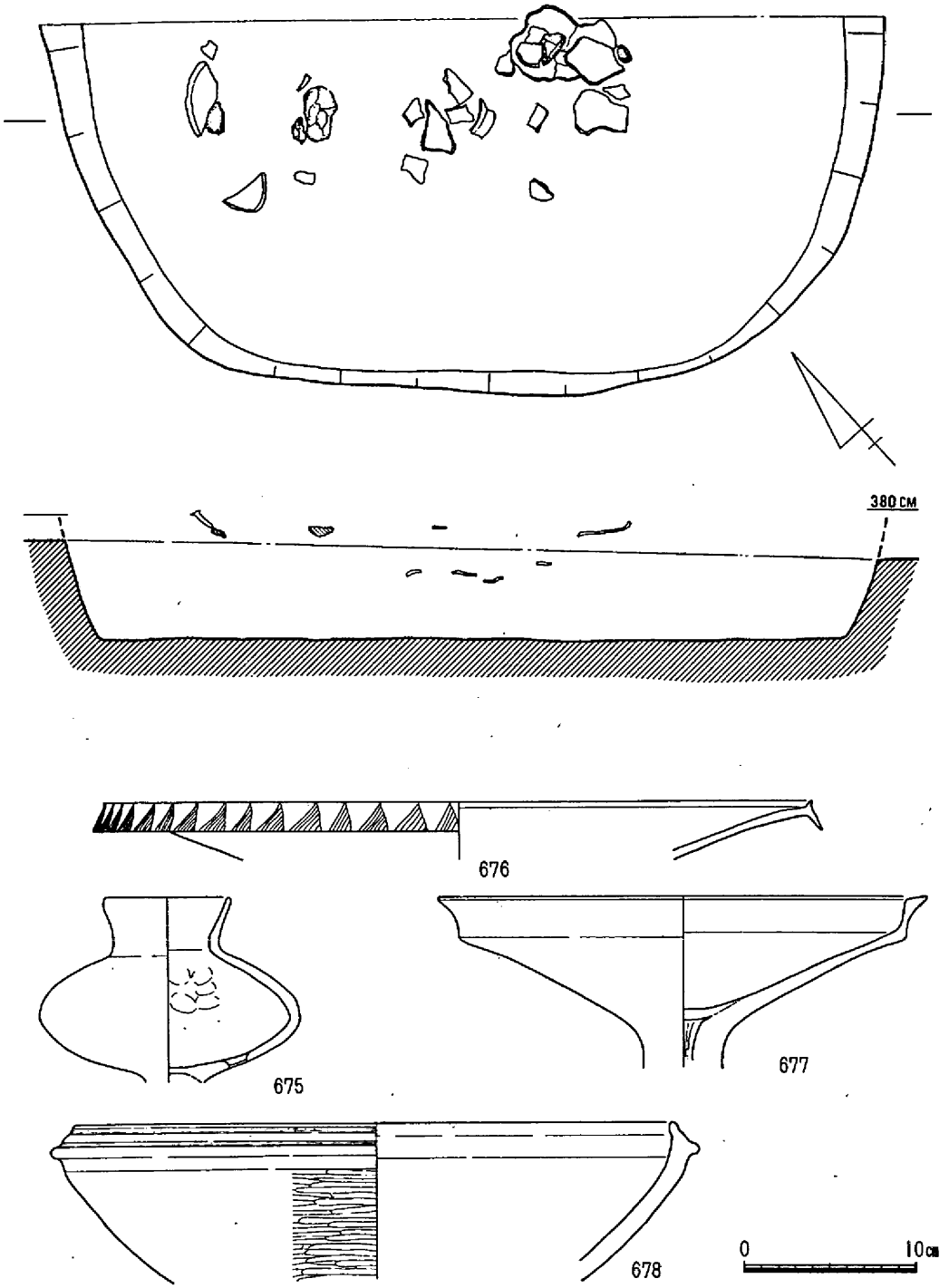


第87図　左岸用水6－井戸－Ⅰ出土遺物（4）



第88図　左岸用水6－井戸－Ⅰ出土遺物（5）

15）4—P—25



第89図　左岸用水4－P－25遺構図（$\frac{1}{20}$）及び出土遺物

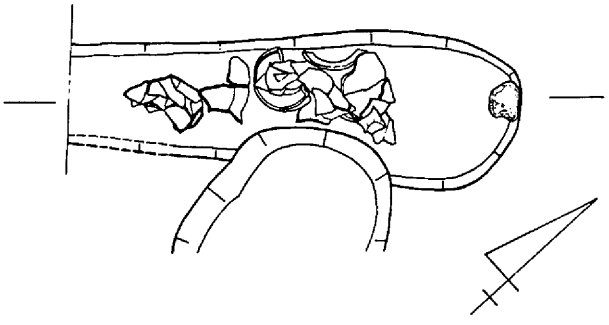
4区中央北隅から検出されたもので，D－6を切っている。平面プランは推定径240cmの円形を呈すと思われるが，約半分は調査区外に延びる。深さは40cmを残す。土壙の掘り方は比較的シャープで，底部は水平を呈す。このため，当土壙は住居址に似類するものと思われ調査を進めたが，柱穴等は全く確認出来なかった。前述した1－P－15とその性格を同じくするものかもしれない。

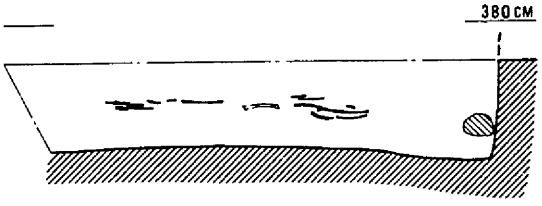
遺物は非常に高い位置から出土している。完形になるものはなく，いずれも磨滅が激しいもので，百・後・Ⅰ～Ⅱの特徴をもつものである。

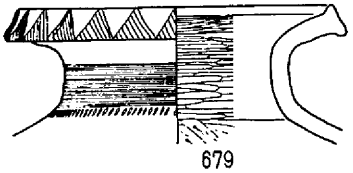
16）5－P－19

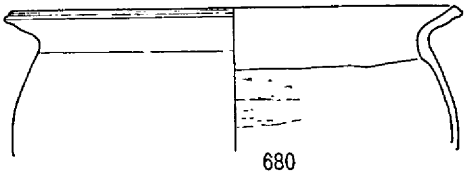
5－H－2の南から検出されたもので，一部調査区外に延びている。平面プランは長楕円形を呈すものと思われる。現存幅40cm，長さ120cm以上，深さ25cmを残す。土壙はほぼ垂直に掘り下げており，底部は中央部がやや高い。土壙内は茶褐色砂泥が堆積しており，分層は不可能であった。

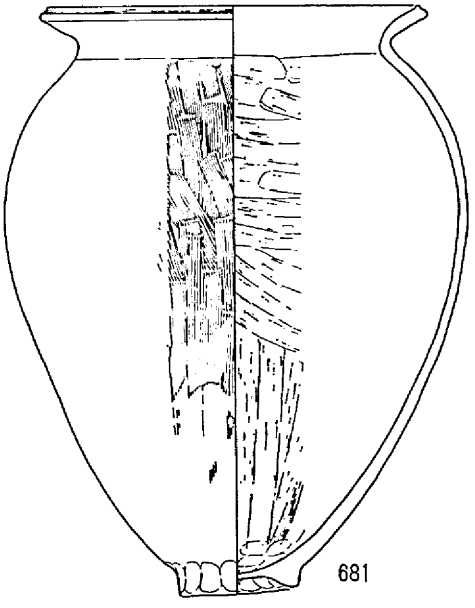
遺物は土壙底部に密着するものはなく，いずれも浮いた状態で，ほぼ同一レベルから出土している。また完形復原出来たものもある（**681**）が，これら遺物は転落し，押し潰された状況で出土している。土壙北隅からは壁に接する状態で円











0　10cm

第90図　左岸用水5－P－19遺構図（$\frac{1}{20}$）及び出土遺物

礫が出土している。

以上，遺物の特徴から百・後・Ⅱのものと考えられる。

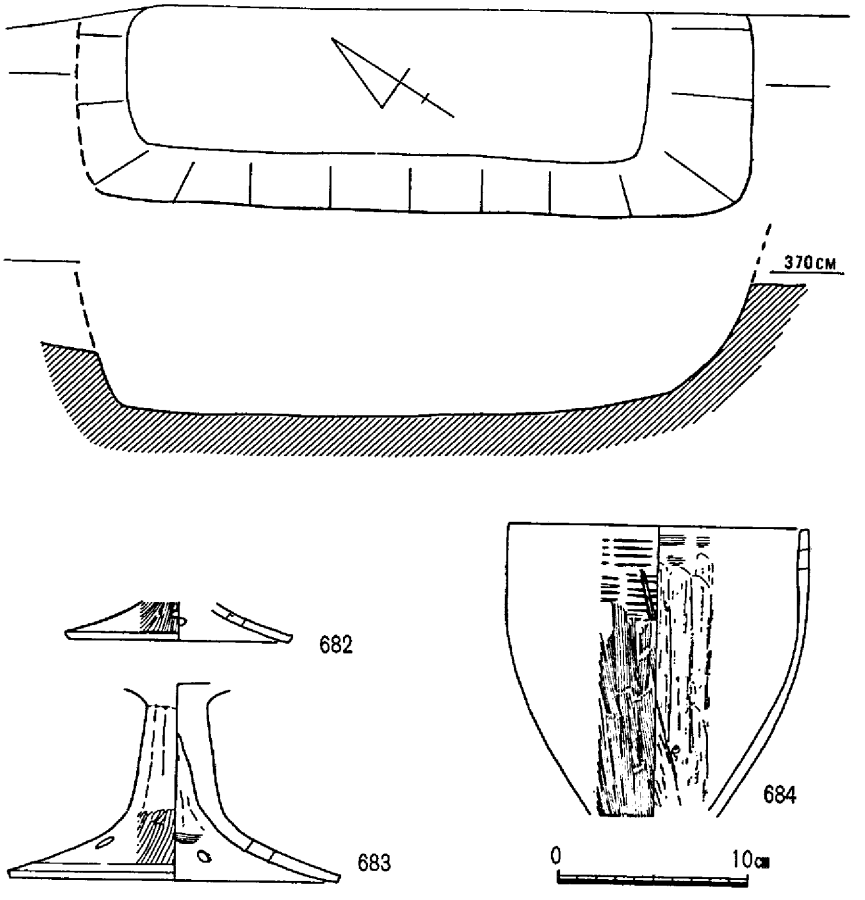
17）5－P－7

5－H－1の北から検出されたもので，D－1を切っている。平面プランは長方形を呈すと思われ，推定幅70cm，長さ155cm，深さ30cmを残す。土壙内は茶褐色粘質土が堆積していた。

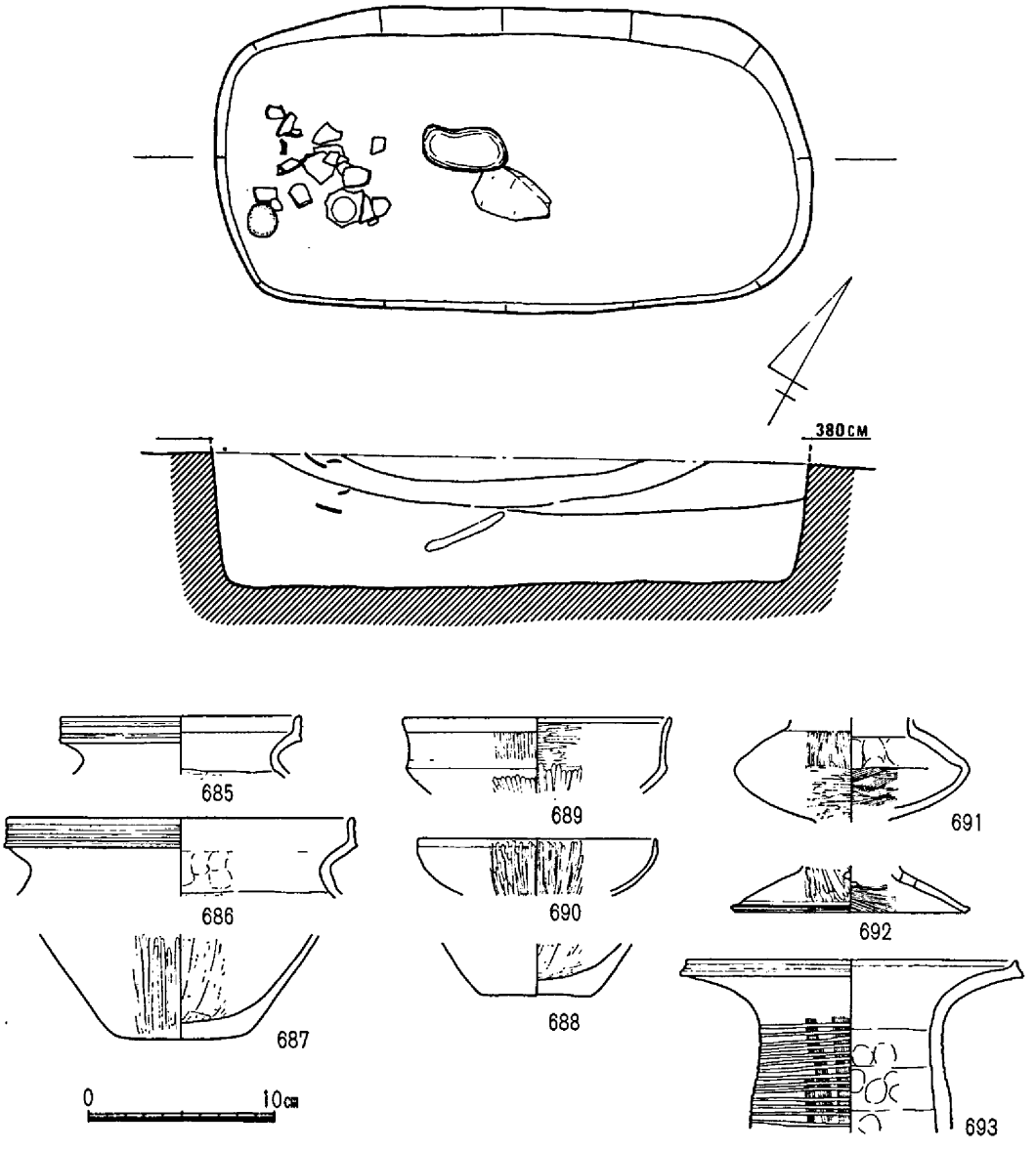
遺物はいずれも破片で，高杯形土器の脚部及び在地ではあまり目にすることのない鉢形土器684が出土している。百・後・Ⅱのものと思われる。

18）5－P－15

5－H－1上層から検出されたもので，平面プランは隅丸長方形を呈す。現存幅70cm，長さ160cm，深さ35cmを残す。土壙はほぼ垂直に掘られ，底部は水平を呈す。上層は焼土及び炭が多分に含まれていた。遺物は土壙の西側に集中しているが，その位置は高く，2層及び4層上部から出土している。



第91図　左岸用水5－P－7遺構図（$\frac{1}{20}$）及び出土遺物

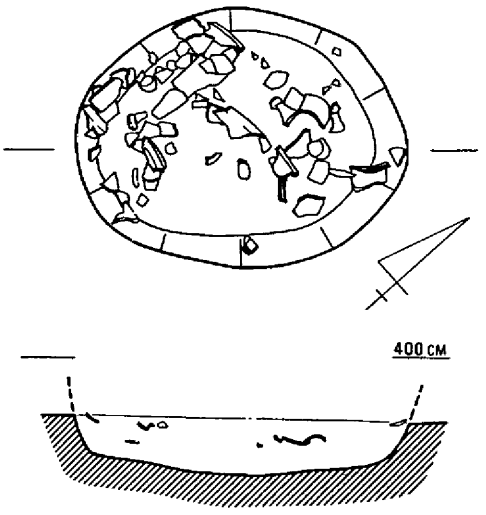


第92図　左岸用水5－P－15遺構図（$\frac{1}{20}$）及び出土遺物

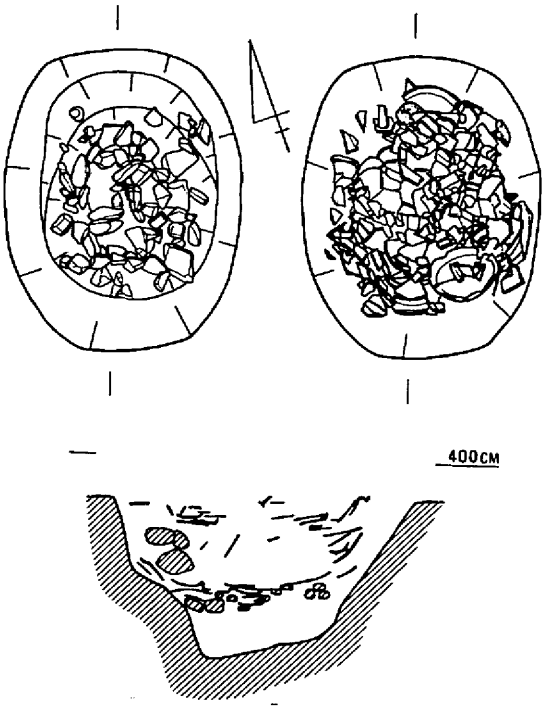
いずれも破片である。やや古い様相を呈するもの（**693**）も含むが全体的には百・後・Ⅳの範中に入るものと考えられる。

19）4－P－1

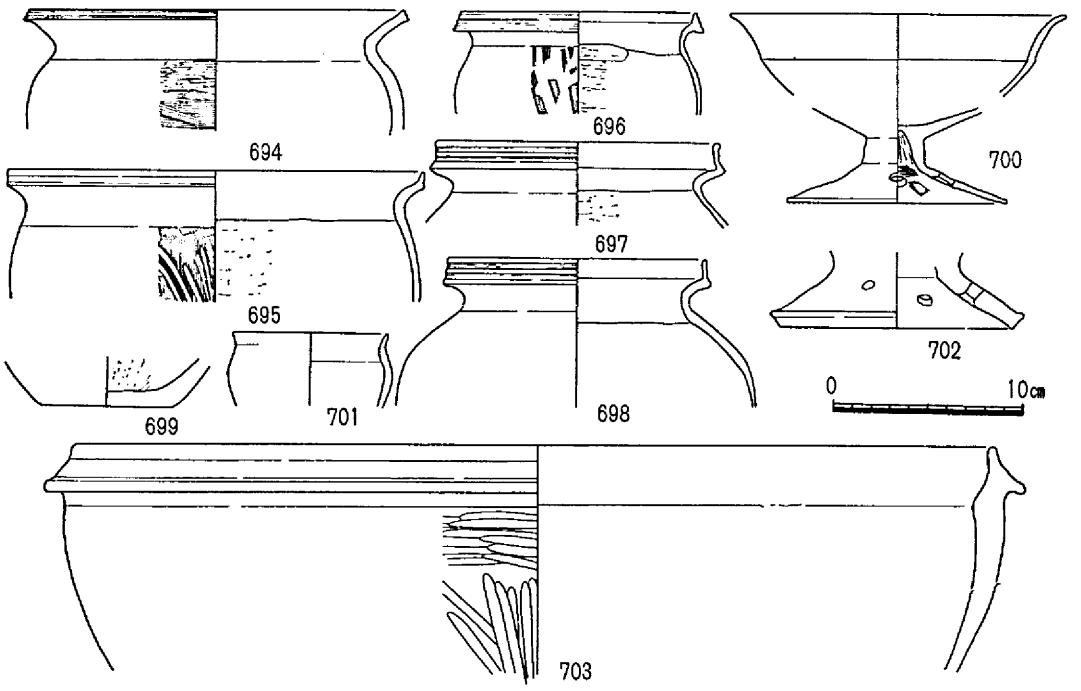
D－4の上層から検出されたもので，平面プランは85×75cmの楕円形を呈し，深さ15cmを残す。土壙中は茶褐色砂泥が堆積していた。遺物は土壙全体に散在していた。甕形土器が多く，壺形土器はみられなかった。遺物の特徴から百・後・Ⅲ～Ⅳにかけてのものであろう。　（江見）



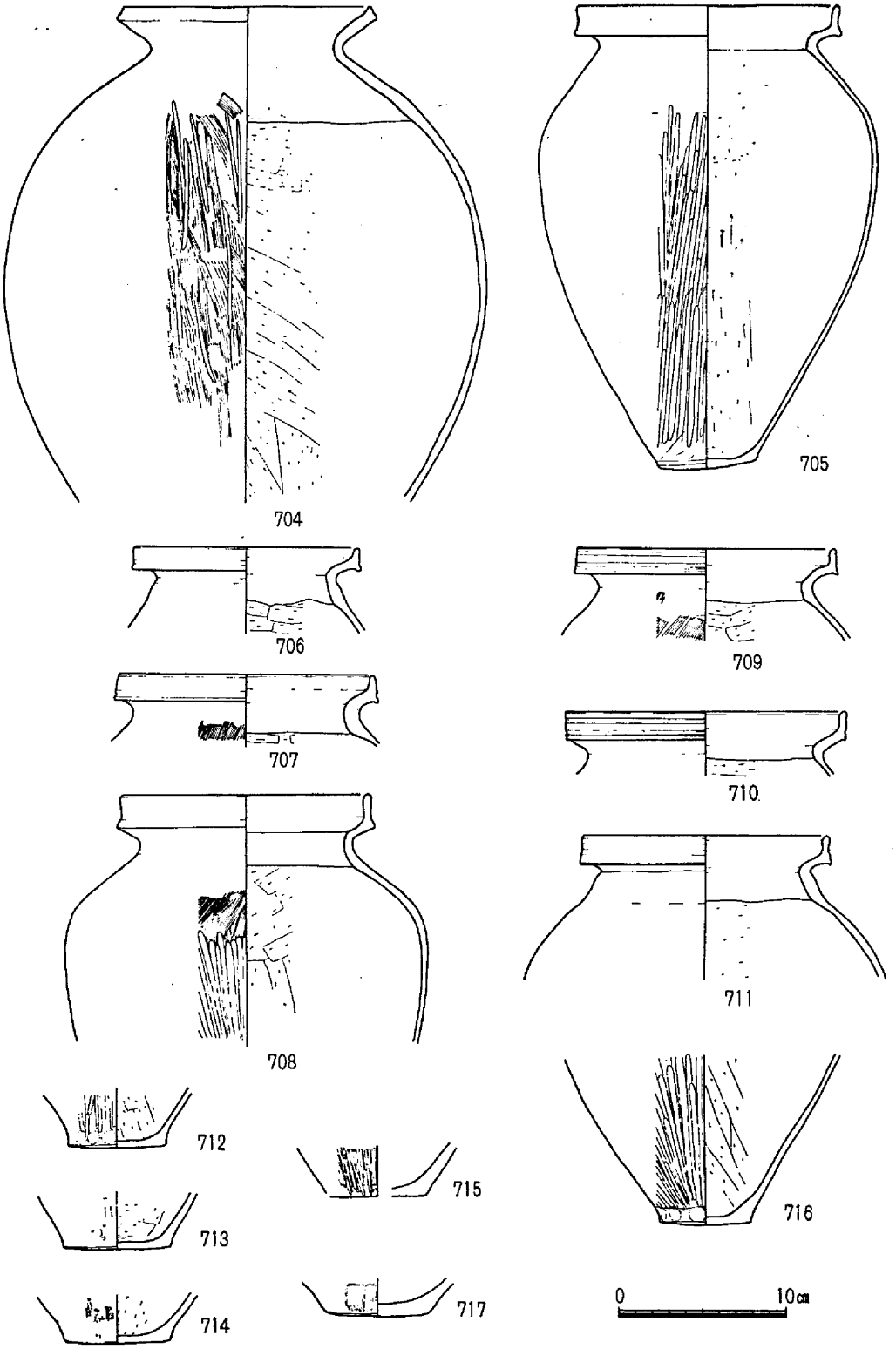
第93図　左岸用水4－P－1遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）



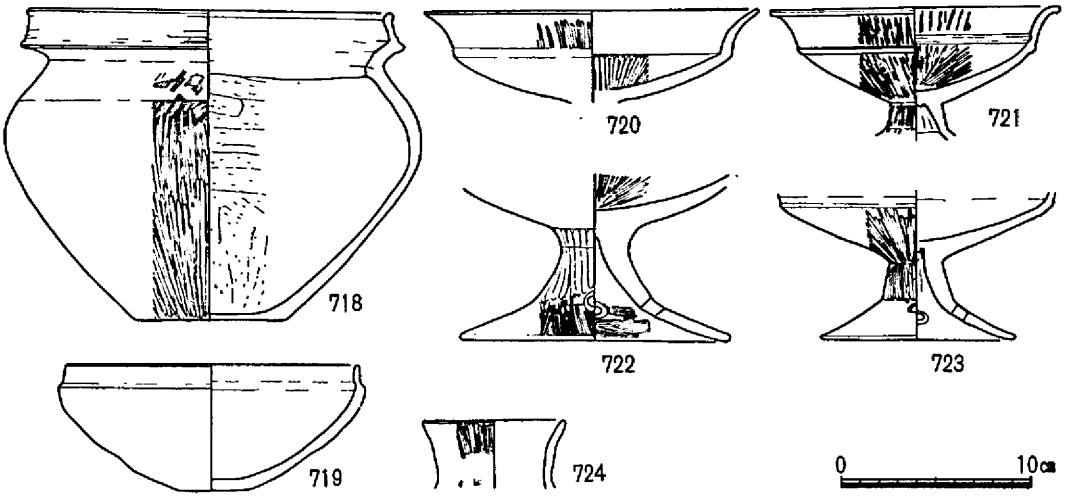
第95図　左岸用水2－P－13遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）



第94図　左岸用水4－P－1出土遺物



第96図　左岸用水2－P－13出土遺物（1）



第97図　左岸用水２－Ｐ－13出土遺物（２）

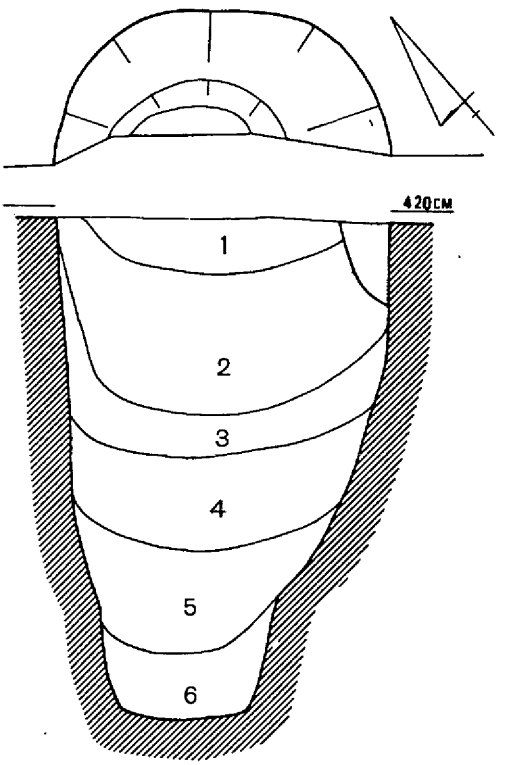
20）２－P－13

２区の中央西壁部に位置する。検出のプランは南北80cm・東西65cmの楕円形を呈し，底部では南北30cm・東西20cmを測る。深さは約50cmである。この土壙の下層部は３～10cm程の角礫が被い，その上に完形になる土器数点を含み土器片がぎっしり埋没していた。

この土壙は，２－H－４（百・後・Ⅰ）を切っており，また埋没している土器の特徴から百・後・Ⅲの時期と考えられる。　（内藤）

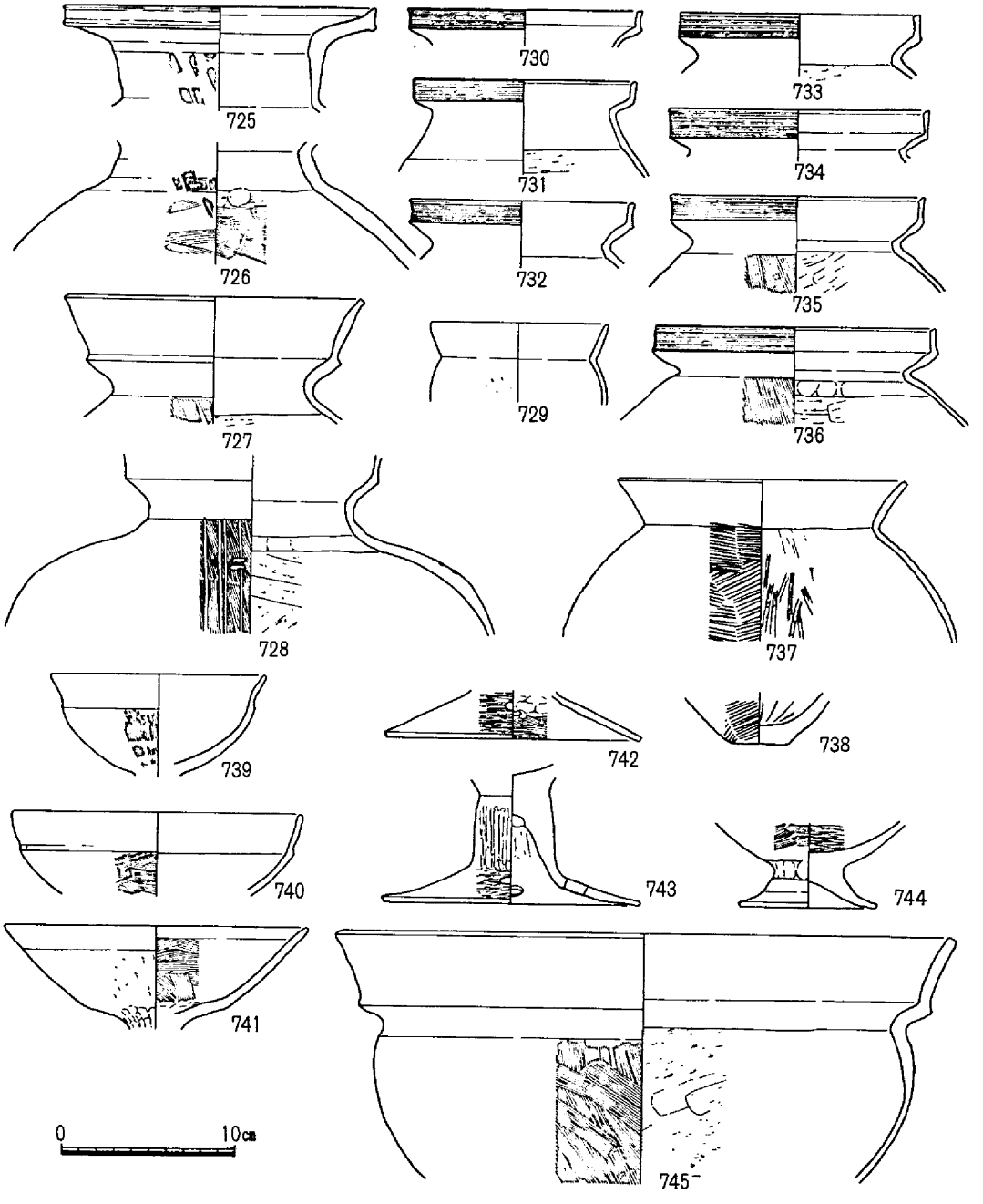
21）３－井戸－Ⅱ

３区中央から検出されたもので，D－６及び３－H－５を切っており，また遺構の南半分は調査区外に延びている。平面プランは推定径180cmを測り，円形を呈すと思われる。深さは260cmを残す。遺構上部は緩やかなカーブを持って落ち込み，検出面から200cmのところでやや角度を変えてさらに落ち込む。１層は暗褐色砂泥で遺物は少ない。２層は黒灰色砂泥で炭



第98図　左岸用水３－井戸－Ⅱ－遺構平・断面図

(1/40)



第99図　左岸用水3－井戸－Ⅱ出土遺物

を多量に含む。3層は暗灰色泥砂，4層は暗灰色の灰混り砂質土で，遺物の大半はこれら3，4層から出土した。5層は灰色粘質土で遺物は少ない。なお，井戸下部の基盤層は粘土層で調査時点では水は僅かに泌み出る程度で，湧水層までは達していなかった。

遺物はいずれも破片であったが，このことは調査を半掘しか出来なかった為で，本来出土している

土器はその大半が完形に復原出来るものと思われる。遺物の特徴から百・古・Ⅰのものと思われる。

（江見）

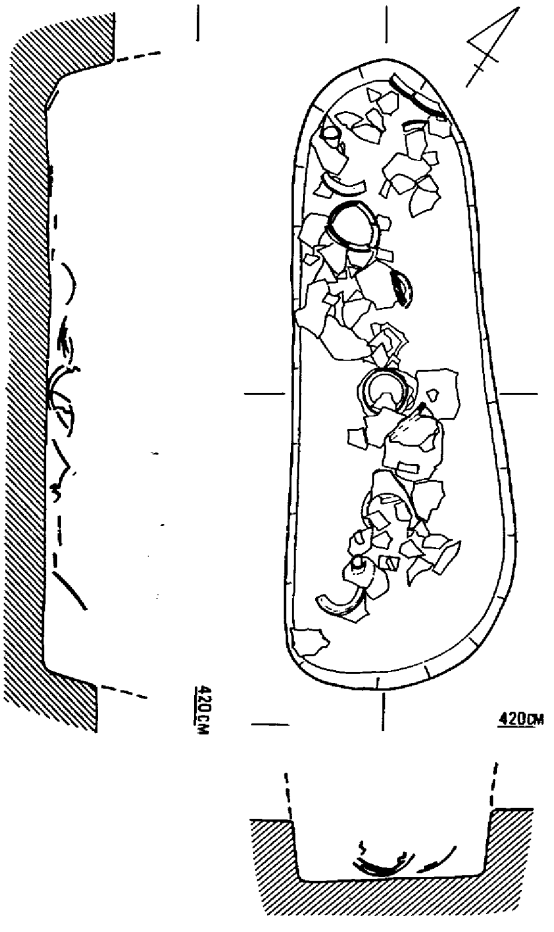
22）2－P－1

2－H－1の上面にある長さ168cm・最大幅60cm・深さ18cmを測る不整な長楕円形プランを呈する土壙である。遺物は，甕が10個体，高杯が3個体，坩が2個体等が土圧で潰れた状態で出土している。しかし土器を復元してみると，完形に近くなるものは少ない。この土壙の大きさと形から墓壙と考えたいが，単なる廃棄物を捨てたゴミ穴とも思える。時期は，これら遺物から，百・古・Ⅱに比定できる。

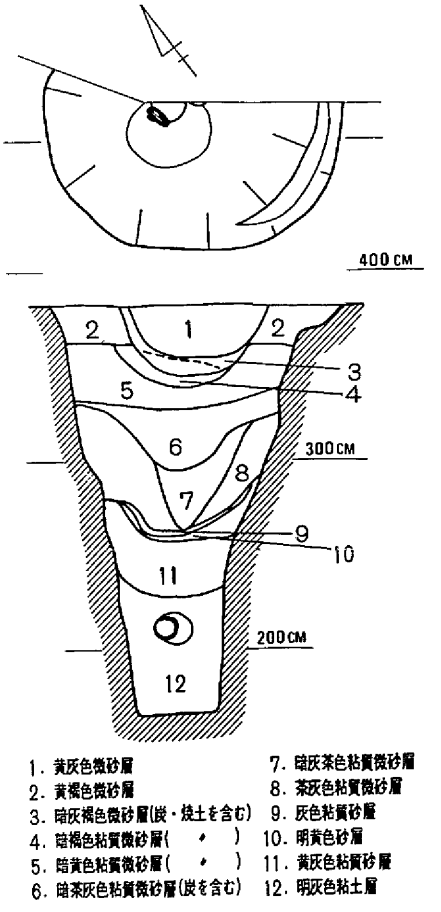
（浅倉）

23）2－井戸－Ⅲ

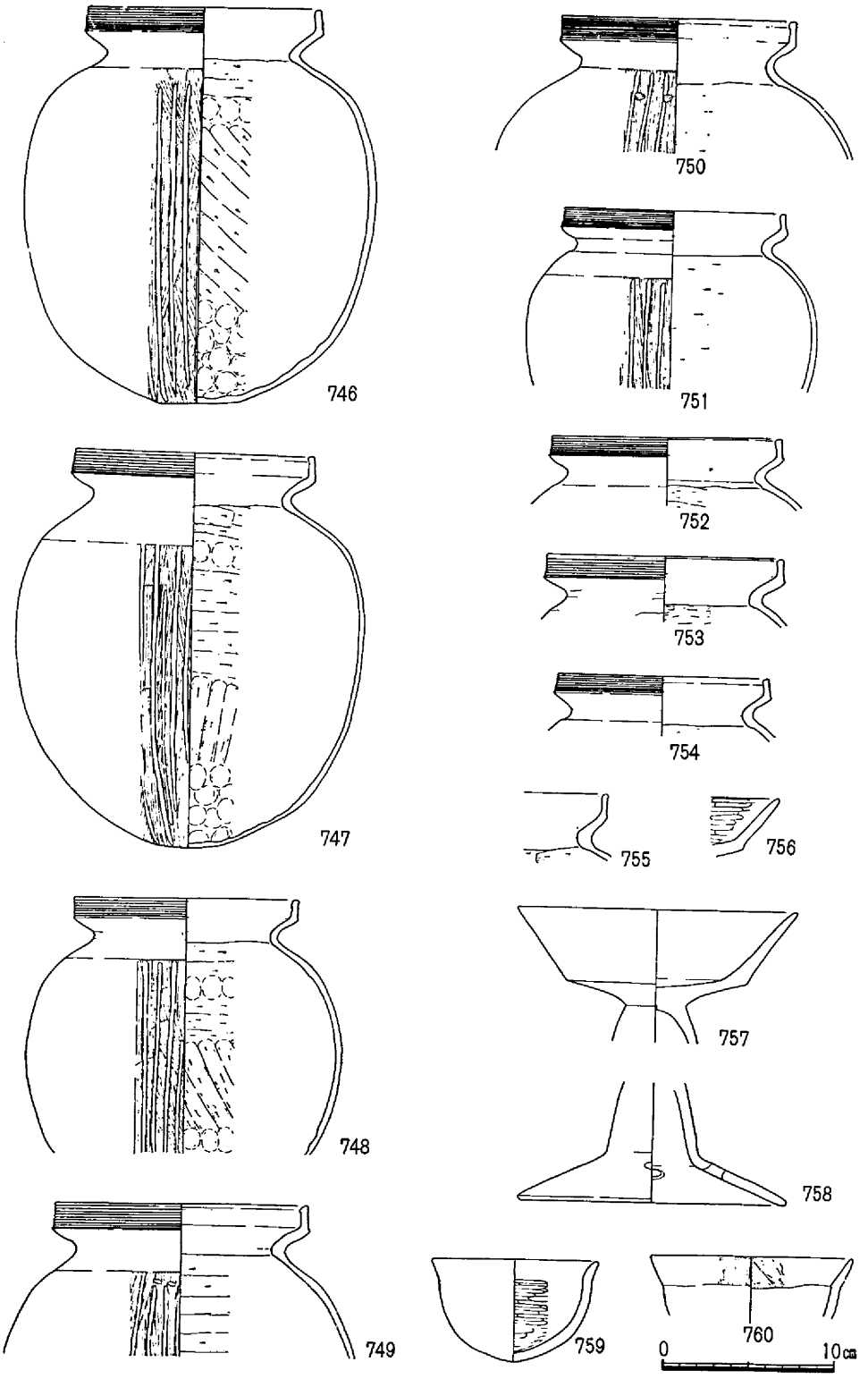
2区南寄りの北東壁際に位置し，東半が用地外に及んでいる。すぐ西側には2－H－1が，南側に



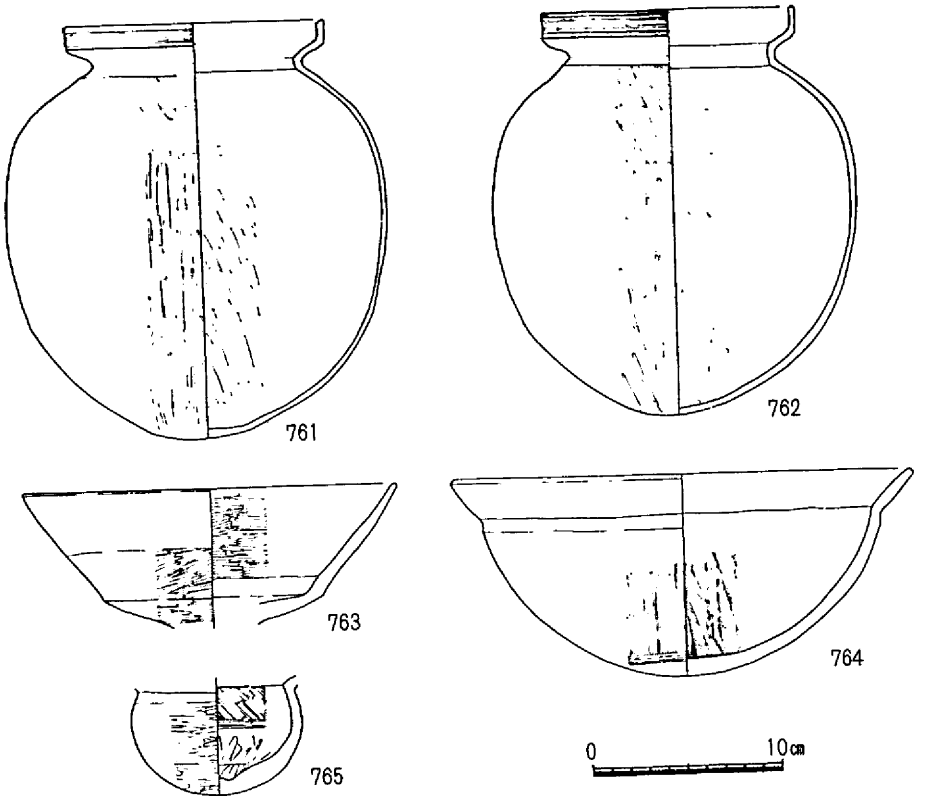
第100図　左岸用水2－P－1遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）



第101図　左岸用水2－井戸－Ⅲ遺構平・断面図（$\frac{1}{40}$）



第102図　左岸用水2－P－1出土遺物



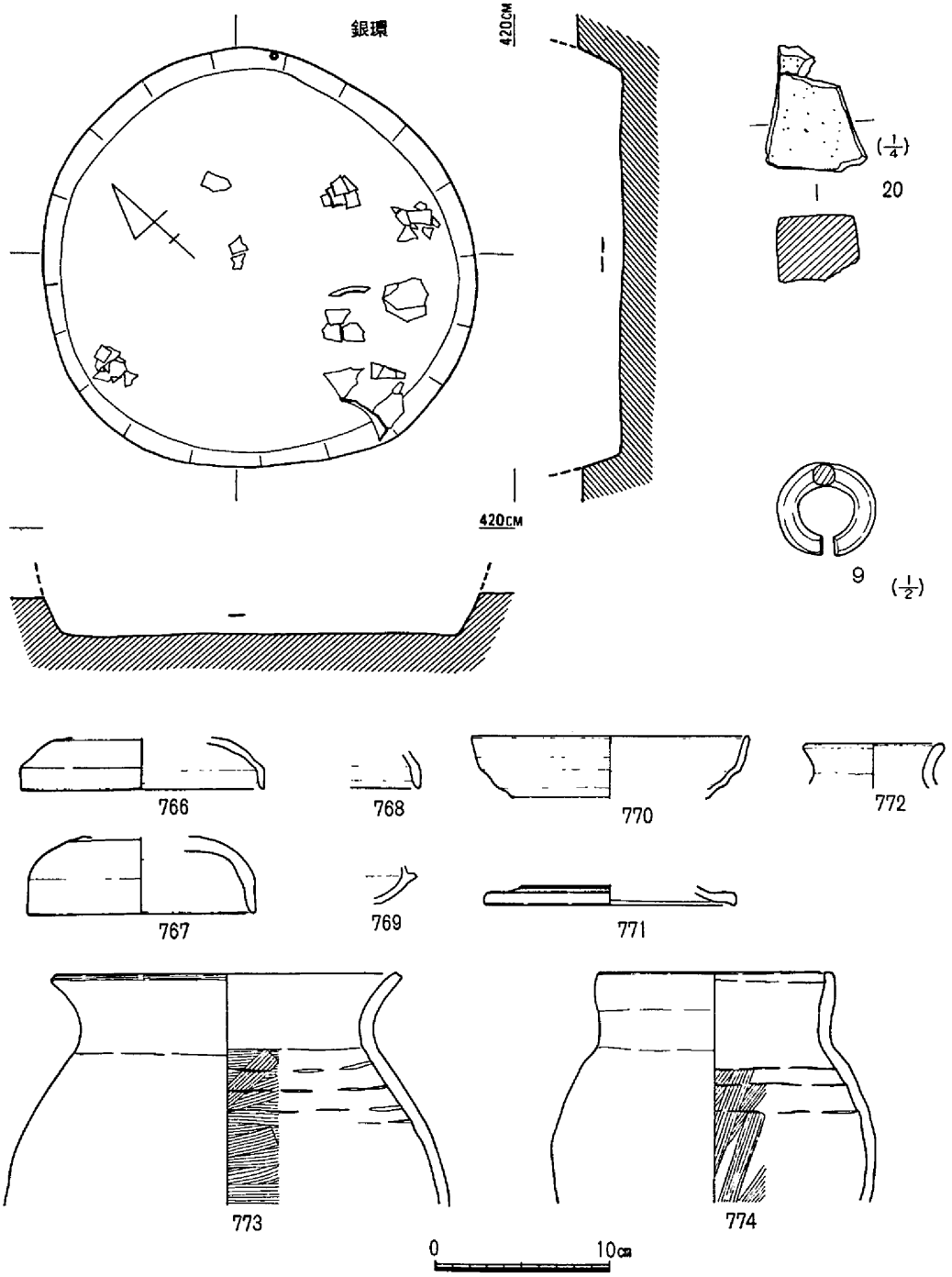
第103図　左岸用水2－井戸－Ⅲ出土遺物

は1－H－1が位置している。遺構は，径約150cmの半円形のプランを検出したが，ほぼ円形が想定される。深さは215cmを測り，底の海抜高は165cmである。下端の径は40cmである。

上層は明茶色微砂で炭・焼土を含んでいる。中層はやや灰色がかった粘質土で，これら上層，中層から出土した土器（**763～765**）等は，壊れていたものを投棄したものである。下層の明灰色粘土層中から出土した2個の完形甕形土器（**761・762**）は，この井戸を埋没させる時に意図的に埋めたものであろう。これらの出土遺物から，この井戸が埋められたのは，百・古・Ⅰの時期と考えられ，隣接している2－H－1，1－H－1の住居址と共存していたと考えられる。（内藤）

24）3－P－1

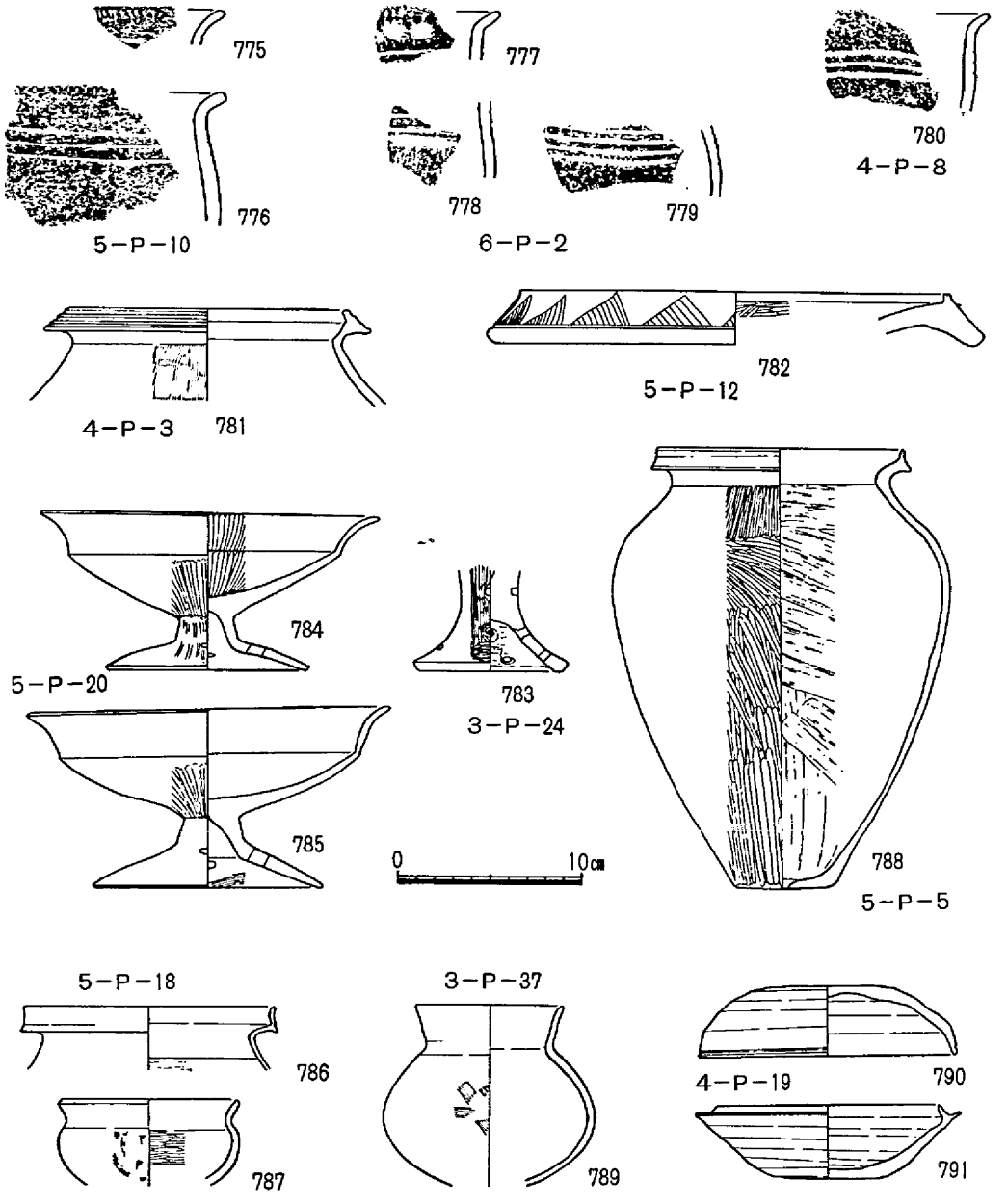
3－H－4の上面にあり直径120cmの円形の土壙で，深さ13cmを測る。遺物は，須恵器・土師器・銀環・砥石が出土している。遺物は床面から少し離れている。用途・性格は判らない。時期は，伴出遺物から6世紀後半に比定できよう。銀環**9**は，銅の地金に銀箔を貼ったもので，一部分銀箔が剝落しているだけで残りはよい。環の直径2.8cm・断面は円形で，直径0.7cm，重量12.3gを計る。横穴式石室内で出土するものは多いが，このような土壙で見つかることは珍しい。砥石**20**は淡黄褐色を呈する砂岩製で，四面を使用している。現存長7.4cm・現存最大幅5.6cm・厚さ3.8cm・重量150gを計る。(浅倉)



第104図　左岸用水３－Ｐ－１遺構図（1/20）及び出土遺物

25）柱穴状土壙

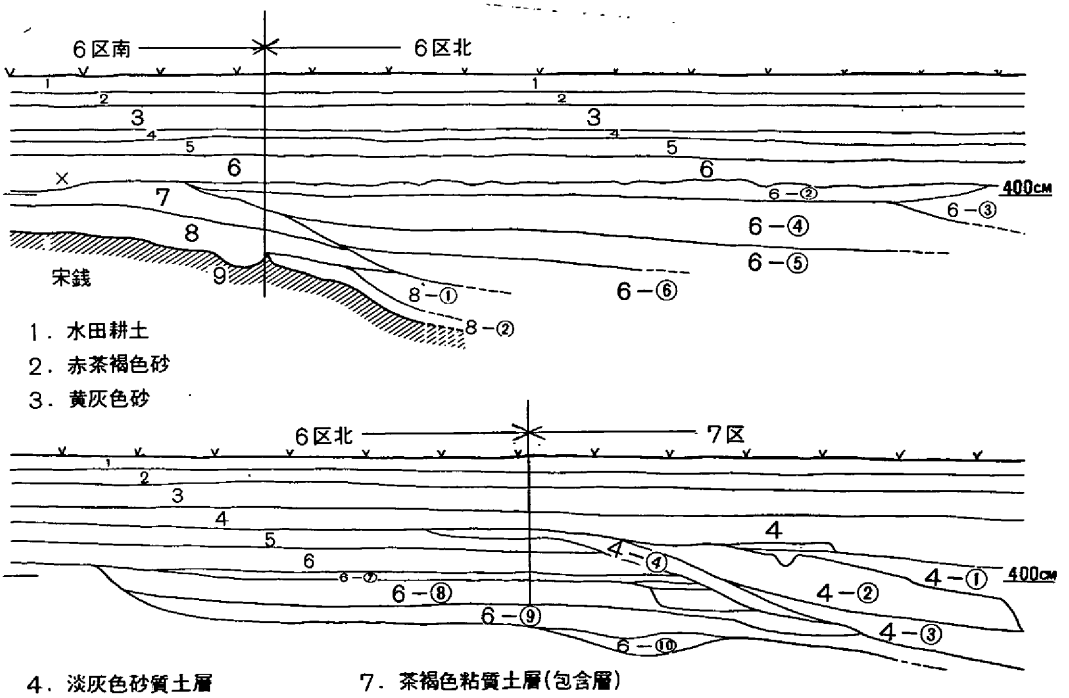
当調査区からは無数の柱穴状土壙が検出されたが，そのまとまりを把握出来たものは僅かに１例（３－Ｈ－７）のみである。ここでは弥生時代前期と考えられる土壙出土遺物及び実測可能な遺物を選んで図示しておきたい。なお，５－Ｐ－５出土の**788**は柱穴の柱痕跡の部分に押し潰された状態で出土しており，５－Ｐ－20の**784**，**785**，４－Ｐ－19の**790**，**791**はいずれも完形である。　（江見）



第105図　左岸用水柱穴状土壙出土遺物

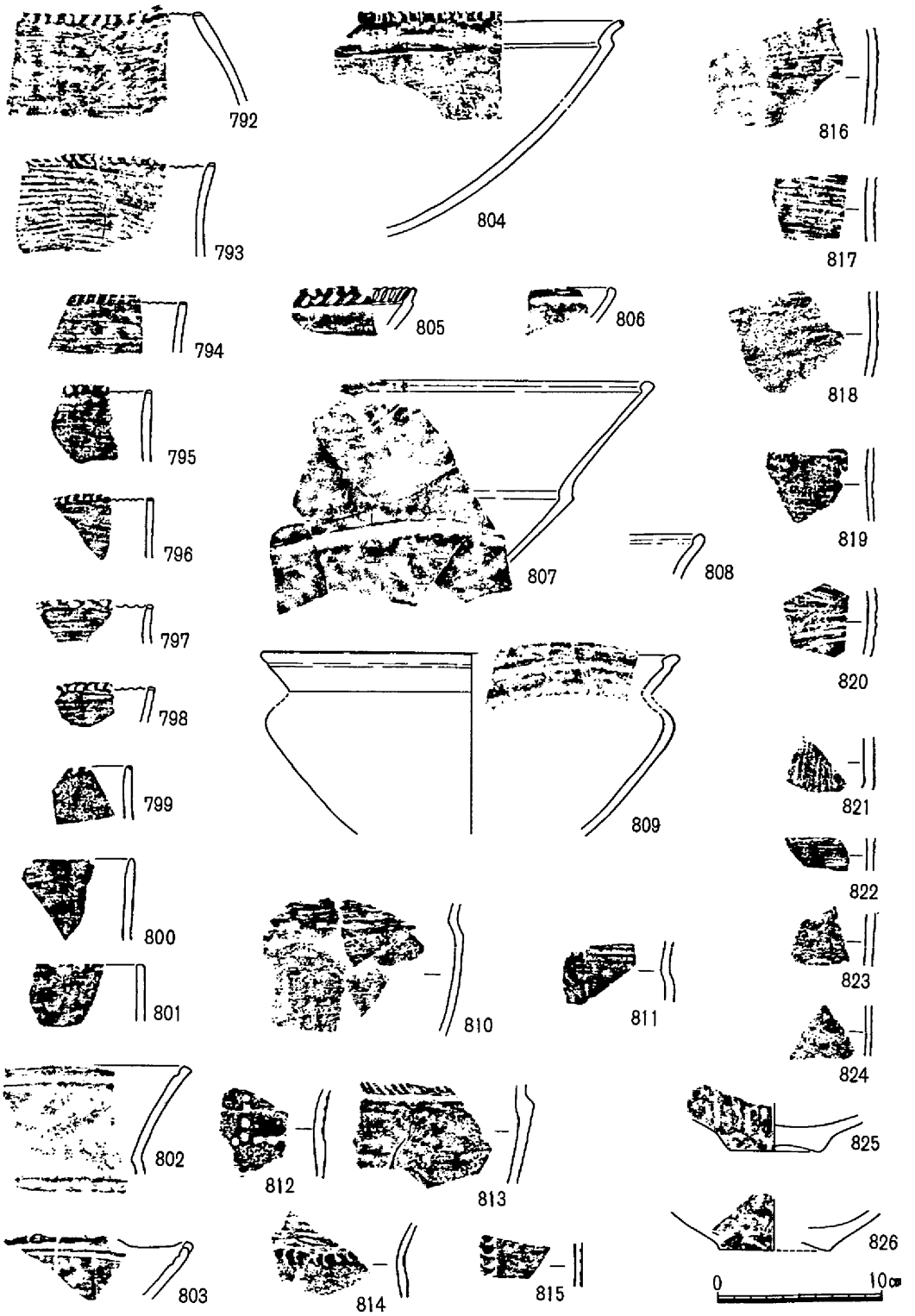
包　含　層

左岸用水調査区の北東端の6区と7区には微高地の北斜面が確認できた。そこでこの調査区の基本的な土層を最も良く示している6区から7区に亘る土層断面図を掲げて説明を加えよう。まず第一層は，現在の水田耕作土である。第二層は，床土と考えられる鉄分の多い赤茶褐色砂である。第三層は，黄灰色砂で，おそらく近代の洪水による堆積層であろう。第四層は，淡灰色砂質土で，近世頃の水田耕作土と考えられる。第五層は，黄褐色砂質土で，これも水田耕作土と考えられる。この層は，7区で切断される。第六層は，下の層のブロックを含む砂である。第六層と第七層は完全に不整合の状態を示している。洪水によって堆積する層と，削平される層があるが，第七層は削平を受け，第六層は堆積したものであろう。第六層は，中世の遺物を少し含む。「紹熙元宝」もこの層の溝状遺構から出土した。緑釉陶器は，第四層から出土しているので遊離した遺物と言える。第七層は，茶褐色粘質土で，百間川後期Ⅰから古墳時代後半までの遺物を包含している。第八層は，暗茶褐色粘質土で，縄文時代晩期の遺物を包含している。第九層は，黄褐色砂質土で，第一微高地の基盤層になっている。なお第七層～第九層は，6区の中央部分で切断され，それより北東ではこの調査区内に限れば，もう現われない。

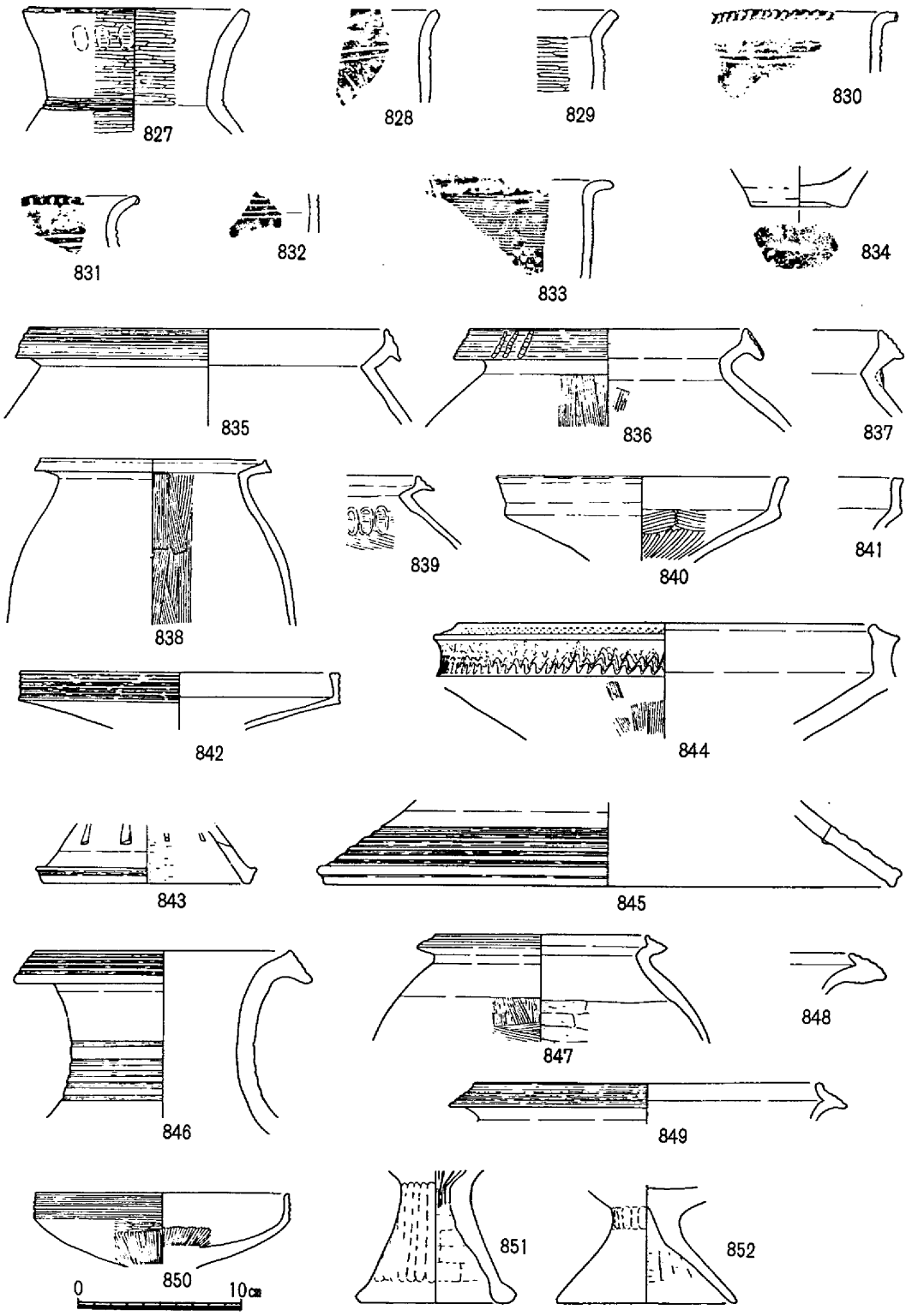


1．水田耕土
2．赤茶褐色砂
3．黄灰色砂
4．淡灰色砂質土層
5．黄褐色砂質土層
6．包含層ブロックを含む砂
7．茶褐色粘質土層(包含層)
8．暗茶褐色粘質土層(包含層)
9．黄褐色砂質土層(基盤層)

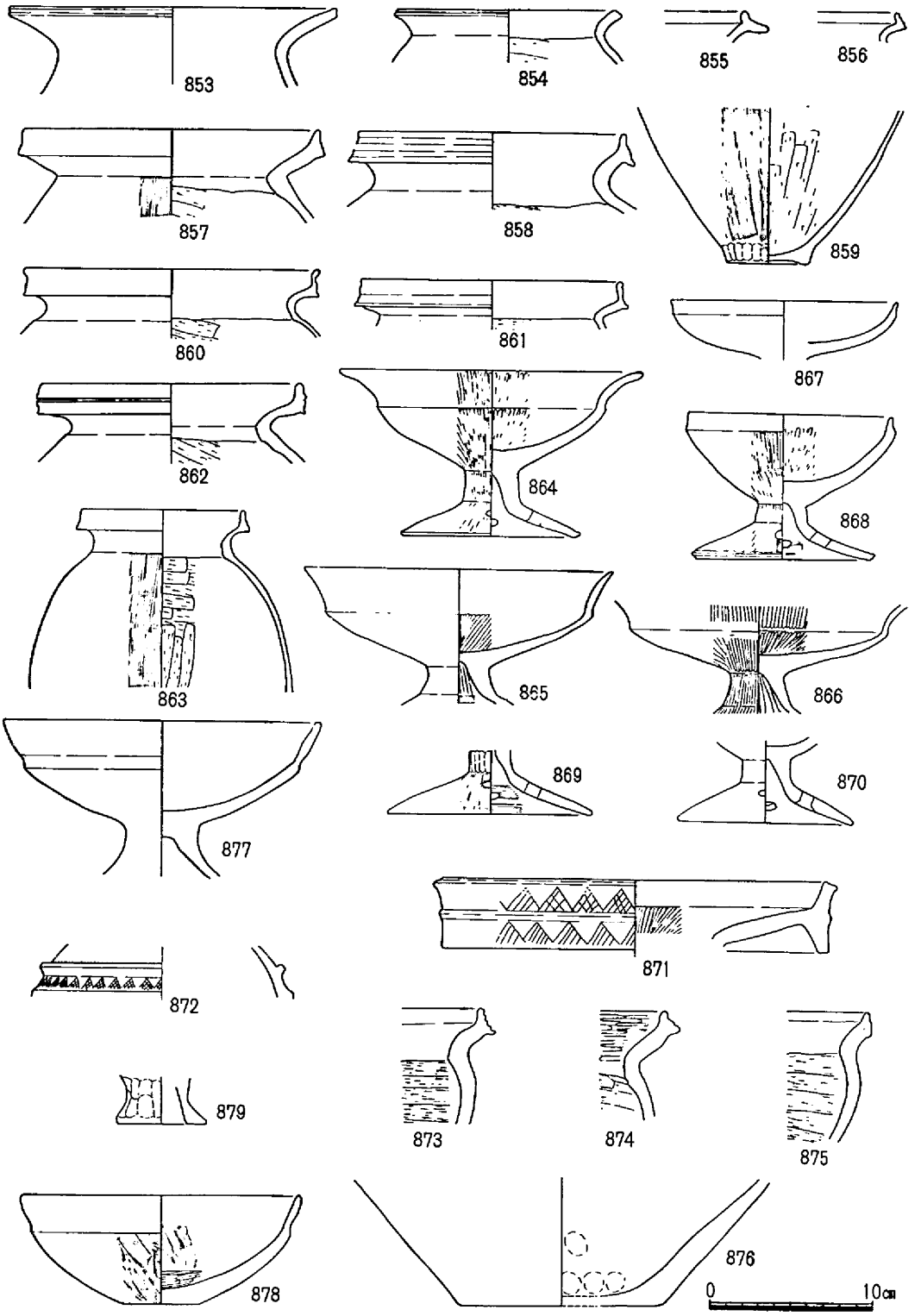
第106図　左岸用水微高地斜面土層図（$\frac{1}{60}$）



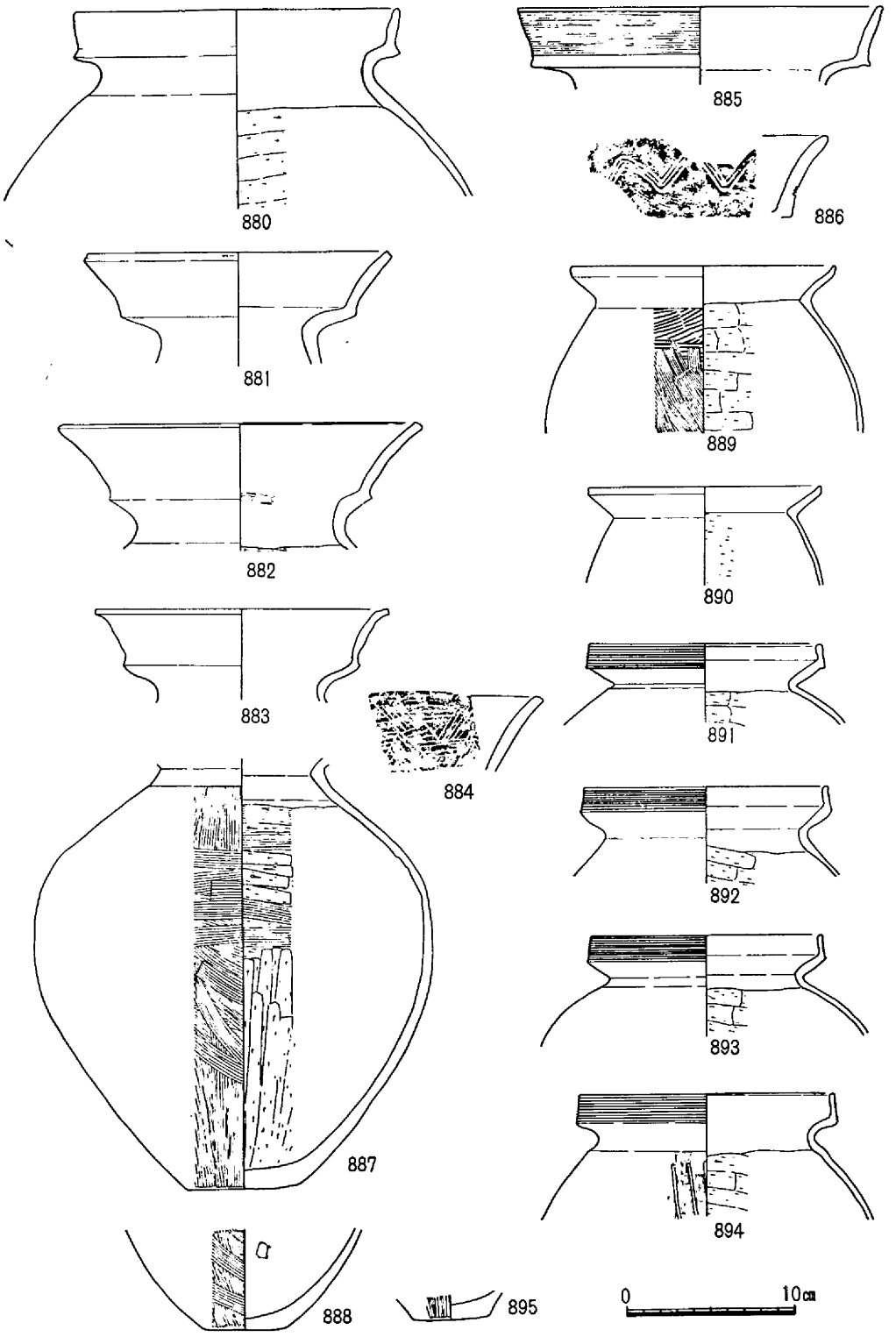
第107図　左岸用水包含層出土遺物（1）



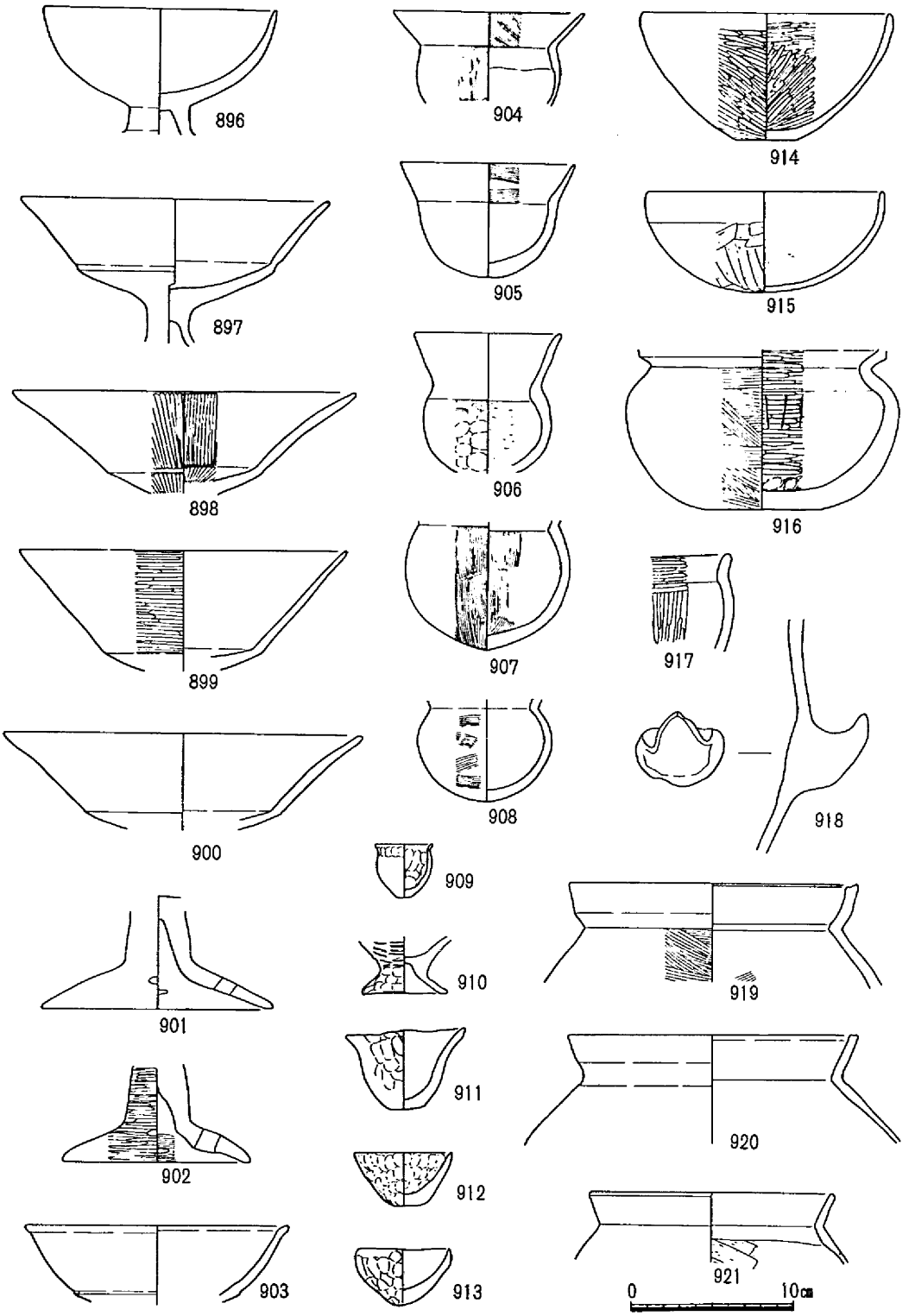
第108図　左岸用水包含層出土遺物（2）



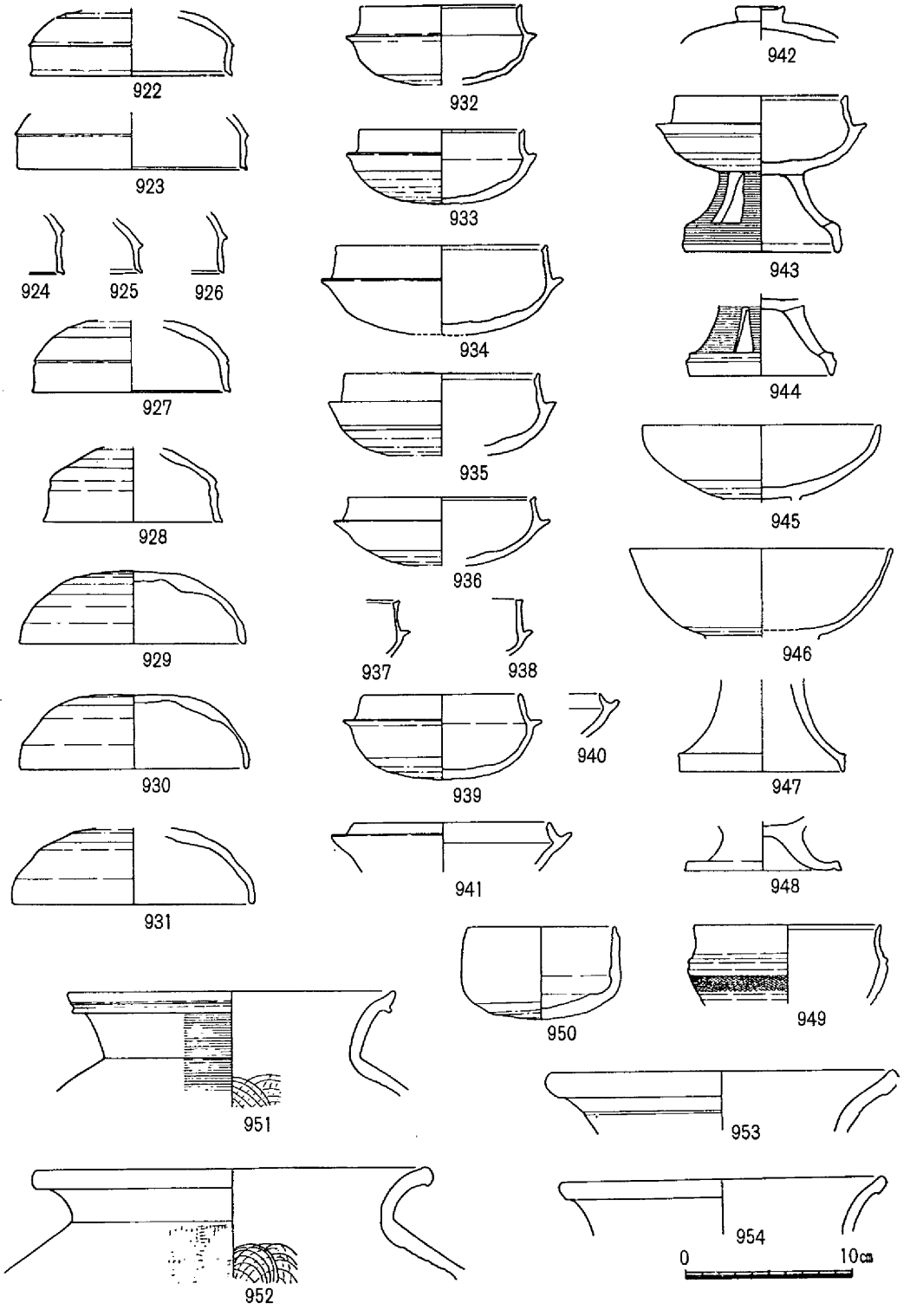
第109図　左岸用水包含層出土遺物（3）



第110図　左岸用水包含層出土遺物（4）



第111図　左岸用水包含層出土遺物（5）

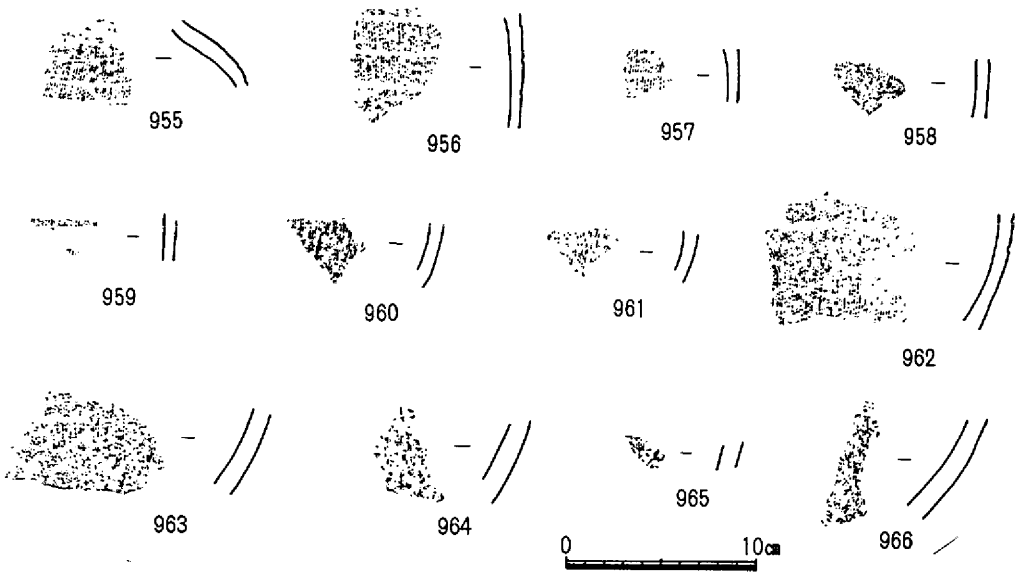


第112図　左岸用水包含層出土遺物（6）

包含層出土遺物とは，遺構であると確認できなかった土器溜りの遺物とか，遺構の埋積土中に包含されていて，その遺構には時期的に伴うとは全く考えられないものを含めている。この包含層出土遺物の80%以上が第七層の茶褐色粘質土から，約10%がその上層の（6・7区の断面にはないが，1～5区までの断面に存在する）灰褐色砂質土から出土している。遺物整理箱の数にして約50箱にもなるが，実測可能なものは極めて少ない。実測した土器は，縄文時代晩期が深鉢・浅鉢等35点・百間川前期が壺・甕等8点，同中期が甕・高杯・器台等11点，同後期が壺・甕・高杯・鉢等31点，同古墳期は土師器が甕・高杯・鉢・甑の6点と須恵器の杯・蓋・高杯・甕等33点になり，時期不明の手捏ね土器が5点，緑釉陶器は3点ある。また土錘14点，石器22点も実測できた。（浅倉）

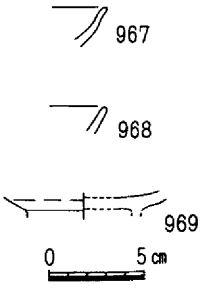
外来系土器

図示した土器は，当調査区（3～5区）の包含層から出土したものである。**955～966**は，分散して出土したが，胎土，焼成，施文法等からみて全て同一個体と考えられる。これらの土器は，肩部から底部にかけての破片であった。土器の外面は，肩部から底部にかけて細かい縄席文を縦方向に施している。さらに，肩部から体部下半には，ほぼ等間隔に箆描きの沈線が巡る。内面は，全てナデ調整を施す。色調は，外面が淡茶褐色，内面が淡灰色を呈す。胎土は，2㎜前後の砂粒を含み，焼成は良好で須恵質の軟質土器である。上記の様な特徴から察する**955～966**は，いわゆる漢式系の土器であると考えられる。これらの外来系の土器は，北九州，畿内で弥生時代にも若干知られているが，畿内では，5世紀代に集中的にみられる。**955～966**の出土した包含層は，弥生時代～5世紀後半の土器が包含されており，今回出土した外来系土器は，5世紀代の可能性が考えられる。（中野）



第113図　左岸用水包含層出土遺物（7）

緑釉陶器



第114図　左岸用水
包含層出土遺物（8）

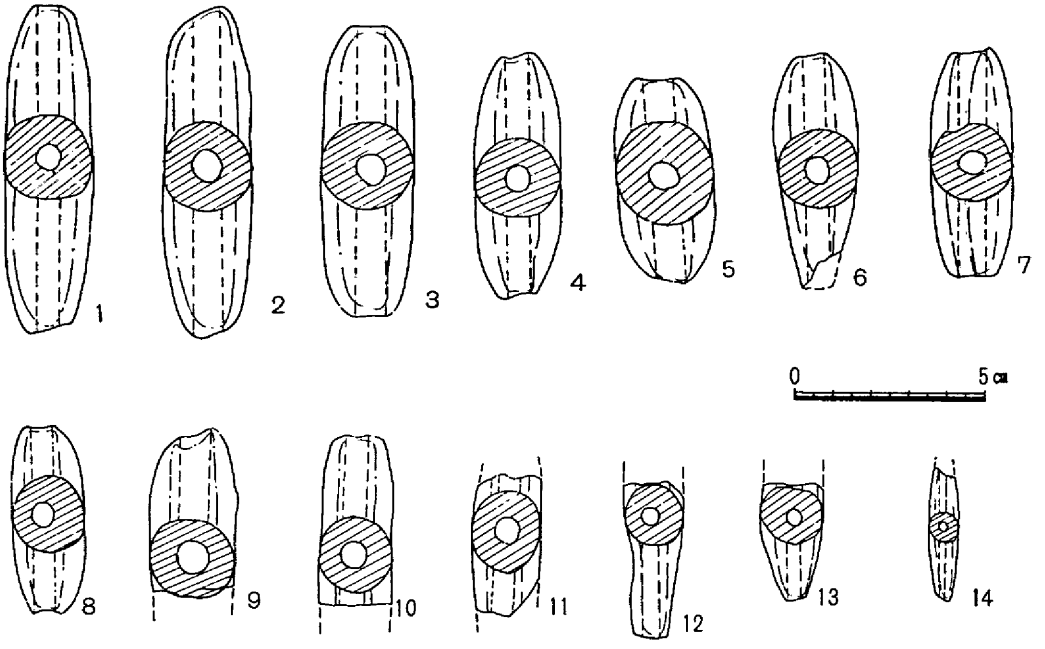
緑釉陶器は3点出土した。**967**は椀の口縁部片である。素地は須恵質で灰白色を呈し微砂粒を含んでいる。釉薬の色調は黄色味を帯びた淡い緑色を呈している。**968**は皿か椀と考えられる。素地は須恵質で灰褐色を呈し微砂粒を含んでいる。釉薬の色調は濃い緑色を呈している。**969**は椀か皿の高台の部分である。3点中最も大きな破片である。素地は土師質で黄白色を呈し精製粘土を使用している。釉薬の色調は淡い灰緑色を呈している。3点とも表裏両面に釉薬を塗っている。出土地点は**967**が微高地斜面第1トレンチ第2層，**968**が第5ボーリング第5層，**969**が微高地斜面となっている。いずれも5区及び6区の包含層上層から出土したものである。

土錘

総数は14点ある。ほとんど2・3区から出土しており，6区から1点だけ出ている。形は2つに分けることができる。流線形と紡錘形である。いずれも管状を呈しているが，流線形は長くてスマートなもの，紡錘形は短くて太いものという意味である。この形状の違いは時期の差を示すものかどうか分らない。胎土を見ると砂粒を含むものと全く含まず水漉し粘土を使うものが分類できる。そしてそれは更に大きさ・色調とも相関している。つまり**1～13**と**14**が分類できる。出土した層位から見ても**14**は中世，**1～13**は少なくとも古墳時代以前と考えられる。

表4　左岸用水出土土錘一覧表

番号	出土地区	形　状	色　調	胎土	現存(%)	長径(cm)	短径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備　考
1	2区	流線形	淡黄褐色	微砂	100	8.7	2.4	0.7	43.6	古　墳
2	2区	〃	〃	粗砂	100	8.8	2.3	0.8	52.2	〃
3	2区	〃	黒褐色	粗砂	100	7.8	2.4	0.8	46.2	〃
4	3区	紡錘形	淡茶褐色	細砂	100	6.6	2.3	0.6	34.2	〃
5	3区	〃	〃	微砂	100	5.5	2.5	0.7	40.9	〃
6	2区	〃	〃	微砂	90	6.2	2.1	0.6	23.1	〃
7	3区	〃	茶褐色	細砂	100	6.1	2.2	0.7	29.4	〃
8	3区	〃	淡黄褐色	微砂	100	5.1	1.8	0.5	17.8	〃
9	2区	流線形	〃	細砂	50	4.5	2.3	0.8	22.6	〃
10	2区	〃	淡茶褐色	細砂	50	4.5	2.0	0.7	21.9	〃
11	2区	〃	褐　色	細砂	30	3.8	2.0	0.6	13.0	〃
12	2	〃	黄褐色	粗砂	40	4.2	1.5	0.4	9.7	〃
13	2区	〃	黒褐色	細砂	30	3.2	1.7	0.4	8.1	〃
14	6区	〃	赤褐色	水漉	90	3.6	0.8	0.2	2.3	中　世



第115図　左岸用水包含層出土遺物（9）

石器

遺構に伴わない石器，遺構の埋積土中から出土したがその遺構の年代とずれる可能性の高い石器の総数が23点ある。石鏃13点，石錐２点，磨製石庖丁２点，打製石庖丁１点，不定形刃器１点，石槍１点，削器１点，石匙１点，砥石１点である。

石鏃はすべてサヌカイト製で，基部の形から凹基式，平基式，凸基式，凸基有茎式の五種類に分けることができる。**30**は両側に角状突起が出ている。**24**と**26**は未成品であろう。

石錐はどちらもサヌカイト製で先端が少し欠けている。

磨製石庖丁はどちらも半分以上欠けている。**36**は裏側も剝離している。円孔は両方から穴をあけている。**36**は灰褐色，**37**は黒色で，いずれも粘板岩製と思われる。

打製石庖丁はサヌカイト製で，長方形を呈す。１部欠けているが，くりこみが１方だけ残っている。

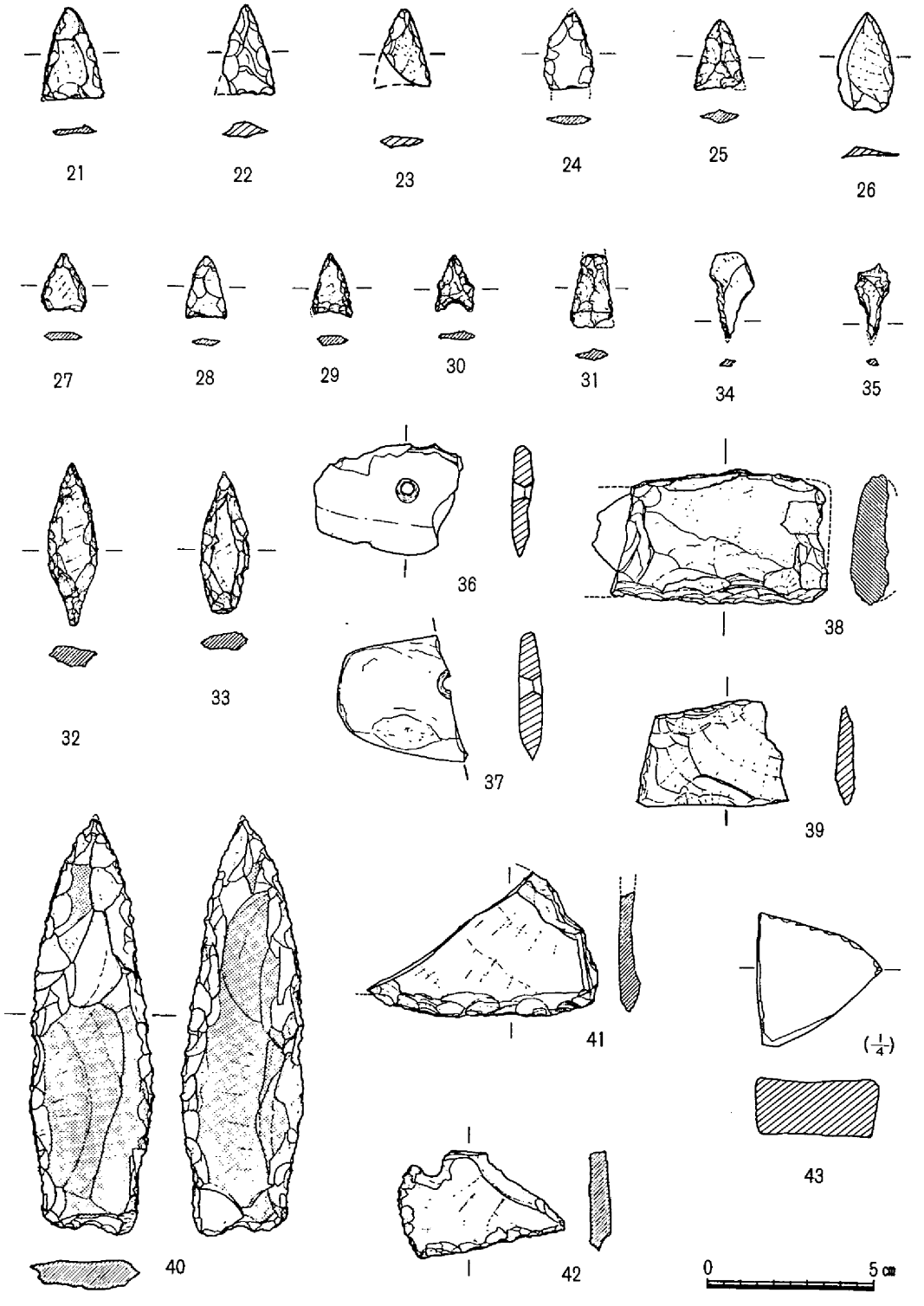
39は縄文晩期に出土する不定形な刃器と考えている。サヌカイト製で３方に刃が作られている。

40の石槍は，長方形の両側にくりこみのある打製石庖丁を再度加工して石槍に作り変えたと言われる。サヌカイト製である。

41は削器と考えられるサヌカイト製の石器片である。

42は形態的には石匙であるが，石庖丁として使用したのではないかと思われる。サヌカイト製である。

43は砂岩製の砥石である。一面しか使用痕がない。中央部が凹んでいる。　（浅倉）



第116図　左岸用水包含層出土遺物（10）

表5 左岸用水出土石器一覧表

番号	名称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	出土地点	備考
21	石鏃	2.9	1.9	0.3		サヌカイト	2区	
22	〃	2.8	1.5	0.5	1.6	〃	6区	
23	〃	2.5	1.5	0.4	1.0	〃	2区	
24	〃	2.4	1.4	0.3		〃	1区	未成品
25	〃	2.1	1.5	0.4		〃	3-H-5	
26	〃	3.1	1.7	0.3	1.7	〃	2区	未成品
27	〃	1.9	1.4	0.3		〃	4区	
28	〃	1.9	1.3	0.2		〃	3区	
29	〃	2.0	1.2	0.3		〃	4区	
30	〃	1.9	1.2	0.3		〃	3区	
31	〃	2.2	1.3	0.3		〃	2-H-6	
32	〃	5.0	1.5	0.6	4.1	〃	4区	
33	〃	4.3	1.4	0.6		〃	4区	
34	石錐	2.6	1.3	0.3		〃	4区	
35	〃	2.3	1.0	0.3		〃	4区	
36	磨製石庖丁	4.7	3.4	0.6	10.5	粘板岩	6区	
37	〃	4.0	3.8	0.7	14.1	〃	6区	
38	打製石庖丁	7.1	4.1	1.2		サヌカイト	5区	
39	不定形刃器	4.7	3.2	0.6	10.5	〃	6区	縄文晩期か石庖丁の転用
40	石槍	12.7	3.8	0.9		〃	2区	
41	削器	7.0	4.4	0.6		〃	4-P-1	
42	石匙	5.1	3.1	0.6		〃	1区	石庖丁に使用
43	砥石	8.3	7.6	3.5	268.0	砂岩	6区	一面使用

註

註21 壺棺（土器棺）の冲積地遺跡における弥生時代後期の出土例としては，倉敷市上東遺跡で二例（近藤義郎1951，間壁葭子1958）が知られる。丘陵遺跡における土器棺の出土は，近年の面的開発によりその例もふえている。数基の土器棺がある程度まとまって出土している遺跡としては，赤磐郡山陽町山陽団地の一連の遺跡（神原英朗1973），同瀬戸町陣場山遺跡，津山市下道山遺跡（栗野克己1977）などがあげられる。山陽団地関係の遺跡では土器棺30数例のうち，特に愛宕山土壙墓群の約30例に高杯蓋・甕身のセット関係を示し，壺身の1例のみは鉢蓋であるという（神原英朗氏教示，愛宕山土壙墓群は未報告）。また，陣場山遺跡では土器棺20例のうち，高杯蓋・甕身と鉢蓋・甕身のセット関係を示すものが約半数の割合いであることが確認されている（福田正継氏教示，未報告）。時期的には弥生時代中期末～後期前半の中で，大勢としては山陽団地愛宕山土壙墓群土器棺→陣場山遺跡土器棺→本報告土器棺の新旧関係がつかめる。そして，後期前葉を境いに土器棺のセット関係が高杯蓋・甕身から鉢蓋・壺身へと徐々に変わりつつあることをうかがわせる。しかしこの傾向は，蓋については例えば弥生時代中期～後期の高杯形土器が器形的に口径の縮小化とともに深さをます傾向にあることからすれば，蓋としての機能を持たなくなることが考えられ，葬制そのものの変化というより器形に規制された変化としてとらえた方が良いかもしれない。ただ，下道山遺跡では検出された土器棺の6基のうち，1基は土器片の蓋で他は発見されていない。これは，遺構上部の削平度合にもよるが，木の蓋を考えてもよかろう。

つぎに，身である壺（甕）についていえば，本遺跡出土土器棺はいずれも土器の口縁部の一部あるいは肩部から上を欠いている。その中で，壺棺Ⅱは長壺頸の頸部をわずかに残すところから上を切り離し，その切り離された口頸部分を蓋である鉢形土器の上に重ねて置くという特異な有り方を示している。これは，その配置は別にしても，本来完形であった器を，棺にする目的で人為的に打ち欠いて分離させたことを意味している。壺棺ⅠやⅢが，本来完形であったのか否かは出土の有り方だけでは不明であり，土器から棺への変貌が完形の土器を打ち欠く行為そのものにあった（特に壺棺Ⅱの場合）のか，あるいは打ち欠いた行為が中に入れるもの（遺体）の大きさに規制されたことの所産であるのかは断定できない。しかしながら，前出の遺跡において弥生中期末の甕身に完形が多く，後期前半の壺身に打ち欠き行為が多いという傾向にあることからすれば，弥生中期末～後期の甕と壺に表われる形式変化に対応した棺としての器の大きさが選ばれた結果，遺体の大きさに規制された可能性が強い。

近藤義郎「備中都窪郡庄村上東出土の弥生式壺棺」『古代学研究・第1巻第2号』1951
間壁葭子「岡山県都窪郡庄村上東遺跡出土の壺棺」『瀬戸内考古学・第2号』1958
神原英朗「四辻土壙墓遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(3)』山陽町教育委員会1973 など
栗野克己「下道山遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(17)』1977

表6　左岸用水　土壙出土土器観察表

1)　1—P—A, B

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
477	浅鉢	○口縁部の破片のみでわからないが，器壁の角度から浅鉢が考えられる。口縁部には一部に凸起がみられる。	○内外面ともに丁寧な篦磨き。	○暗茶褐色～黒色を呈する。 ○胎土に1㎜以下の砂と微細な雲母を多く含む。
478～481	皿～鉢	○478は内湾しながら浅く立ち上がる体部をもつ。口縁部は丸くおさめている。 ○480は口縁端部に幅約4㎜刻目をもつ。 ○481は鉢の胴部か。	○478の内面は横方向の篦磨き。外面は横方向の篦削りの後，その上から篦磨きされている。 ○479は内外面ともに篦磨き。 ○480は内外面ともにナデ。 ○481は内面ナデ，外面は横方向の篦削り。	○いずれも暗茶褐色 ○479は0.5㎜以下の砂を含み，微細な雲母を多く含む。479～481は1㎜前後の砂粒を含む。

2)　5—P—1

482～484	壺形土器	○482は壺の口縁部と考えられる。 ○483は「八」の字状の頸部である。 ○484は湾曲する体部片である。	○482の内外面は横ナデ調整。 ○483は3本の篦描き沈線文を巡らしている ○484は刻み目凸帯文を巡らしている。	○482は黒色。483は褐色。484は茶褐色。いずれも砂礫を含む。
485～486	壺形土器	○平底の底部破片である。	○外面は篦磨き調整している。内面は丁寧にナデ仕上げしている。	○485は茶褐色。486は黄褐色。砂礫を多量に含む。
487	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は少し肥厚する。	○口縁端部に刻み目を施し，体部には篦描き平行沈線文を3本施している。内外面とも横ナデ。	○暗茶褐色。 ○3㎜以下の砂礫を含む。
488	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部を丸く収めている。 ○体部最大径と口径は同じ大きさである。 ○底部はやや上げ底を呈する。	○体部上端に篦描き平行沈線文を2本施し，外面は縦方向の刷毛調整で，内面は横ナデ仕上げしている。	○底部には，籾と種子の圧痕が明瞭に付いている。 ○3㎜以下の砂粒含む。 ○煤が付着
489～490	鉢形土器	○口縁部，体部の区別ができない。朝顔形に広がり，端部は面を作る。	○表面が剝離しているが，ナデ仕上げしていると考えられる。	○489は茶褐色。490は内面黒色，外面淡赤褐色。 ○3㎜以下の砂粒含。
491～494	甕形土器	○甕の底部を考えられる。 ○上げ底を呈する。 ○体部下半はやや外反している。	○体部内面は篦磨き調整し，外面は縦方向の刷毛調整している。	○籾圧痕の残るものがある。 ○赤褐色。3㎜大の礫含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
495	甕形土器	○鉢形土器とも言える。 ○口縁部は僅かに外上方に摘み出し，端部を丸く収める。 ○体部最大径は上方にある。 ○底部はやや上げ底で，きわめて安定している。	○口縁端部に刻み目，体部上方に1本の篦描き沈線を施す。 ○体部外面の上端と下端には指頭圧痕が残っている。調整は外面が斜め方向の篦磨きで，内面がナデである。	○籾圧痕が残っている。煤が付着している。黒褐色を呈し，3㎜以下の砂礫を多分に含む。

3)　4—P—30

496	壺形土器	○口縁部は外反し，端部を上下に肥厚する。 ○頸部は長く，やや湾曲して下方へ縮む。 ○体部は欠けている。	○口縁端部には1本の浅い篦描き沈線を施し，頸部の下端には貼り付け凸帯を巡らし，凸帯上に2本の沈線を施している。 ○外面は横方向の篦磨きし，内面は丁寧な横ナデ仕上げする。	○赤褐色を呈し，8㎜大の礫も含む。
497	壺形土器	○頸部は長い。 ○体部はほとんど中央部に最大径があり，角の丸い算盤形を呈している。 ○底部は平底である。	○肩上方には僅かに削り出した凸帯を巡らし，その凸帯には1本の篦描き沈線を施している。 ○外面は横方向の篦磨きで，内面は上半部が横方向の篦磨きで下半部は調整不明。	○内面は黒褐色，外面は淡茶褐色を呈し，3㎜大の砂礫を含む。
498	壺形土器	○頸部の破片で，やや外反している。	○下端に削り出した断面三角形の凸帯が巡る。 ○内外面ともに横方向の篦磨き調整を行っている。	○茶褐色を呈し，3㎜大の砂礫を多分に含む。
499	壺形土器	○壺の肩部と思われる。	○篦描き沈線による有軸の木葉文が施されている。	○丹塗り。2㎜大の砂粒含む。
500～505	壺形土器	○壺の口縁部と思われ，「く」の字状に外反する。端部に外傾する面をもつ。 ○円孔を穿つものがある。	○口縁端面に一本の沈線を施しているものが見える。 ○内外面ともに横方向の篦磨き調整をしている。	○褐色～茶褐色を呈し，2～3㎜大の砂礫を多分に含む。
506	蓋形土器	○甕形土器の蓋と考えられる。「ハ」の字状に裾が広がり，端部は面をなす。	○端面に一本の沈線を施す。 ○内外面ともに横方向の篦磨き。	○内面暗褐色，外面淡茶褐色で，2㎜大の砂粒を含んでいる。
507～513	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反する。内面に稜をもつものともたないものがある。 ○体部最大径が口径より大きくなるものはない。	○口縁端部に刻み目をもつ。513だけもたない。体部上端に篦描き沈線をもつものとないのものがあり，沈線の数も2～4本と種々である。512は削り出し凸帯にして沈線と竹管文を施している。 ○外面の調整は，縦方向の篦磨きの	○暗褐色が褐色を呈し，下方は二次焼成を受け黒褐色が赤褐色を呈するものがある。1～5㎜大の砂礫を多量に含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
			ものと縦方向の刷毛調整のものがある。	
514～526	甕形土器	○口縁部の細片を集めたものである。「く」の字状に外反し，内面に稜をもつものとそうでないものがある。	○口縁端部に刻み目を，体部に篦描き平行沈線を巡らすものが多い。加飾の少ないものもある。 ○表面は刷毛調整が中心で，ナデ，篦磨きも見られる。	○同上。
527～535	底部	○壺，甕の底部破片である。すべて平底で，上げ底を呈するものが少しある。	○横方向の篦磨きしている。527，528は壺と思われ，体部の広がりが大きい529，530も壺と考えられる。その他は甕か。	○531は籾圧痕が付いている。色調，胎土，焼成は同上。

5) 4—P—20

536～537	壺形土器	○口縁部はゆるく外反し，口縁下端に段をもつ。 ○頸部はやや内傾し，胴部はよく張っている。	○内外面，全て，篦磨きを施す。 ○頸部と体部の境には削り出し突帯1条が巡る。	○536は灰黄褐色537は淡茶褐色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。
538	甕形土器	○口縁部はゆるく斜め外方に延び，端部は面をもつ。	○全体に磨滅が激しい。 ○口縁端面は刻み目を巡らす。	○淡茶褐色。1.5㎜前後の砂粒含。

6) 6—P—1

539～540	甕形土器	○体部破片である。	○体部上方に篦描きの平行沈線を3本施す。体部内面はナデ仕上げ，外面は細かい縦方向の刷毛調整している。	○茶褐色で，2.5㎜大の砂礫を多分に含む。
541～545	鉢形土器	○541は僅かに外反する口縁部の細片である。 ○542～545は体部細片である。	○541は口縁端面に刻みを施し，541～544は外面に貝殻条痕を付ける。いずれも内面は丁寧なナデ仕上げしている。	○545は茶褐色で，他は褐色。 ○545は3㎜大，他は1㎜以下の砂含。

7) 3—P—50

546～549	壺形土器	○口縁部は斜めに外反し端部は面をもつ。	○内外面共に篦磨きしている。 ○547の頸部，549の体部上端には数条の篦描沈線が巡る。	○黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
550～558	甕形土器	○口縁部がゆるく外反するものからするどく外反するものまであり，また体部上半に沈線が巡るものとそうでないものとがある。	○553～557は，いずれも口縁端部に刻み目を施し，体部上半に2～4条の篦描沈線を巡す。 ○いずれも内外ともにナデている。	○淡茶褐色で1㎜前後の砂粒を含。 ○553と558は同一個体の可能性有り。 ○553～555外面に煤付着。
559	鉢形土器	○口縁部は上端に水平面をもち，底部は厚い平底を呈す。	○外面は篦磨きを施しているが，内面はナデているようである。	○淡黄褐色を呈し，1.5㎜前後の砂粒を含む。

8)　2—P—20

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
560	蓋形土器	○壺形土器の蓋である。扁平な山形を呈し，端部は面ををつ。頂部に小さな円孔を1つ穿っている。	○外面に円孔を中心とした「十」の字状に無軸の木葉文を篦描きしている。調整は内面ナデ，外面篦磨きである。	○淡茶褐色を呈し，1.5㎜大の砂粒を沢山含む。
561	壺形土器	○壺の縁部であろう。朝顔形に広がる口縁部は外に傾斜する端面をもつ。	○内面はナデ。指頭圧痕も残っている。外面は調整不明。	○淡黄褐色を呈し，2㎜大の砂粒を含む。
562	壺形土器	○壺の肩部であろう。	○篦描きの文様が僅かに認められる。恐らく木葉文であろう。	○茶褐色で，2㎜大の砂礫を含む。
563～565	壺形土器	○壺体部の破片である。	○篦描き平行沈線文を巡らしている。2～4と種々ある。 ○内面はナデ，外面は篦磨き。	○茶褐色で，2～3大の砂礫を含む。
566～570	甕形土器	○甕体部の破片である。	○篦描き沈線文が2～4本巡らされている。 ○内面はナデ，外面は調整不明。	○茶褐色で，2㎜大の砂粒を含む。
571～574	底部	○571，572は壺，573，574は甕と考えられる。	○壺は内外面とも篦磨き調整している。甕は調整不明。	○茶褐色で，2～3㎜大の砂礫を含む。
575～577	鉢形土器	575，576は粗製深鉢である。 ○577は精製の浅鉢である。	○575，576の外面には貝殻条痕が仕き，内面は丁寧なナデ仕上げ。577は内外とも丁寧なナデ仕上げの土器である。	○縄文晩期の土器片である。 ○577は黒色，他は茶褐色。

9)　3—P—20

578	壺形土器	○口縁端部は肥厚し，口縁端面は内傾する。	○口縁端面は3条の退化凹線が巡る。	○淡黄褐色で，1㎜前後の砂粒含。
579	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上下に拡張する。	○口縁部拡張面は3条の退化凹線が巡り，口縁部内外面は横ナデ。	○暗褐色で，2㎜前後の砂粒を含む。
580	高杯形土器	○口径が13㎝の小型のもので，口縁端部は僅かに外方に拡張し，拡張面は僅かに凹みを呈す。	○外面は横ナデ，内面は篦磨きのようである。	○灰白色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
581	鉢形土器	○体部が斜め外方に広がりをもつ小型の鉢。	○器表面剝離のため不明。	○淡黄褐色で，2㎜前後の砂粒含。
582	鉢形土器	○口縁端部が玉縁を呈すもので，脚が付くものと思われる。	○口縁部外面及び端部は横ナデ。以下，内外面は篦磨き。	○暗黄褐色で，2㎜前後の砂粒を含む。

10) 1—P—15

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
583	壺形土器	○胴部は最大幅をやや上部にもち，かなり屈曲しながら頸部に至る。頸部はほぼ垂直に短く立ち上がり，ほぼ直角方向に外反しながら口縁部をつくる。口縁端部はおもに上部に肥厚させている。 ○胴部の器壁は非常に薄い。	○口縁端部外面には二条の凹線を巡らせ，5本の棒状浮文と4個の竹管文でそれぞれ一単位を示す文様が，交互に施されている。また，口縁部内側にも竹管文が列状に巡る。 ○頸部から底部にかけての外面は縦方向の篦磨きがみられ，それは底部外面にも行われている。内面では胴部は篦削り，頸部はおもに押圧調整をしている。	○暗灰茶褐色 ○胎土に1～5㎜の砂粒と，雲母が目立つ。 ○焼成は良好。
584	壺形土器	○多少外傾して，わずかに外反しながら立ち上がる短頸部をもち，端部を外側斜め下方に折り曲げて口縁部をつくっている。	○頸部から口縁部にかけては内外面ともに横ナデで仕上げている。	○黄灰白色 ○1㎜以下の砂粒がやや多い。
585	甕形土器	○ナデ肩の胴部から「く」の字状に斜め上方に立ち上がる口縁部をもち，端部を斜め上下方向にわずかに肥厚させている。	○端面には3条の凹線が巡り，口縁部は横ナデ。胴部内側の篦削りは口縁部までは至らない。口縁部までの間は，指頭押圧後指によるナデが観察される。 ○胴部外面は磨滅。	○暗黄灰色 ○1～2㎜の砂粒を多く含む。
586	高杯形土器	○少し浅めで，わずかに外反して立ち上がる杯部から，外傾して短く立ち上がる口縁部をもつ。口縁部は内外にわずかに肥厚する。	○口縁端面には3条の細い凹線を巡らせている。口縁部は内外ともに横ナデ。杯部は外面が縦方向の，内面が横方向の弧状にそれぞれ篦磨きが顕著である。	○赤灰褐色 ○1㎜以下の細かな砂粒を含む。
587	小型鉢形土器	○平底をもち，器壁の厚い体部はわずかに外反しながら斜め上方に立ち上がる。端部を薄くつまみ上げ外反させて口縁部をつくっている。	○口縁部は内外面ともに横ナデ。体部は内外面とも剥離のため詳しくは不明であるが，外面は口縁屈曲部下に指頭圧痕がわずかに残り，体部は縦方向の篦磨きか。	○黄灰色 ○1㎜前後の砂粒を主に含む。

11～13) 壺棺 Ⅰ～Ⅲ

588	鉢形土器	○壺棺の蓋として使用されていた。少し小ぶりな平底の底部から，開きぎみに斜め上方に内湾しながら浅く立ち上がり，体部最大幅の部分から反転して口縁部をつくる。口縁部は器壁が厚く，端部は	○口縁端面には2条の退化した凹線が施され，口縁部は内外面ともに横ナデにより仕上げられている。体部外面は約1㎜幅の板状工具による刷毛調整の後，5㎝前後幅の斜方向の篦磨きがみられる。内面は篦削りの後，縦方向の篦磨きで仕上げられている。	○暗褐色 ○胎土に2～3㎜の石英が目立つ。赤色・黒色粒及び金雲母も含む。 ○内面には煤付着 ○百・後・Ⅱ

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		わずかに肥厚させている。		
589	壺形土器	○頸部あるいは胴部の一部から上を人為的に打ち欠いた土器棺である。打ち欠いた部分の穴は約30×20cmの楕円形を呈す。本来の器形は短頸壺と思われる。胴部の最大幅がわずかに上部にあり，球形を呈す。 ○胴部に穿孔はない。	○頸部下には円形の竹管による刺突文が廻る。 ○胴部下半は縦方向の篦削り，上半は横方向の篦削りの後，底部中央及び肩部は横方向の篦磨きで仕上げられている。内面は約1.5cm幅の篦削り。粘土紐（約7cm幅）の接合痕跡が部分的に明瞭である。	○淡黄褐色 ○胎土に0.5～2mmの長石，1～4mmの石英粒を多く含む。微細な金雲母を少し含む。 ○百・後・Ⅱ
590	鉢形土器	○体部は588の鉢よりも多少急傾斜で立ち上がる。口縁部は外傾してわずかに内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は上部にわずかな肥厚をもつ。	○口縁部は内外面ともに横ナデによる調整であるが，外面の口縁部下には一部に篦削りが残る。また，体部内面は丁寧な篦削りの後約1cm幅の刷毛調整，ナデなどにより下面の調整が消されている。底面は指頭圧痕，体部外面は刷毛調整。粘土帯の接合痕は少なくとも6ケ所に確認される。	○淡赤褐色 ○2～3cmの石英長石粒が多い。 ○百・後・Ⅱ
591	壺形土器	○長頸壺形土器の頸部途中から折り取られている棺のの身部と口縁部とにわかれ，2つでほぼ完形となる。ほぼ球形を呈し，底部に向って少しすぼまる胴部をもち，肩部からほぼ垂直に立ち上がり長頸部をつくり，鋭く斜め外方へ開く口縁部をもつ。口縁端部はおもに斜め下方に拡張をもつ。 ○底部はわずかに上げ底を呈す。 ○胴部に穿孔はみられない。	○底部の接合痕跡から断面破線の製作手法がわかる。 ○口縁端面には4条の凹線文が施され，内外面ともに横ナデ調整。外面の頸部から底部までは，全体に縦及び斜め方向の刷毛調整（幅約1.7cm，7本単位）。頸部はその後13～14本の沈線を巡らす。頸部下には板状工具の先の刺突による列点文が施されている。胴部は中程まで横方向の，篦磨きを施し，下半は縦及び斜め方向の，底部は横方向の篦磨きで部分的に調整している。頸部内面は，部分的な刷毛調整の後ナデか。胴部では頸部から少し下がったところまで篦削り。	○褐色 ○胎土に1～3mm前後の石英・長石がかなり多い。 ○底部外面は砂粒の移動痕が多くみられるところから篦削りか。
592	鉢形土器	○器壁の厚い底部からかなり急な角度でわずかに内湾して立ち上がる体部から，急激に外反して開く口縁部をもつ。口径の割には深い鉢である。口縁部の一カ所に幅約4cmの片口をもつ。	○口縁端部はわずかに肥厚させ，端面はナデによる凹部をもつ。体部最大幅部分から口縁にかけての外面は横ナデ。体部外面は刷毛調整の後篦磨き。内面の口縁部は横方向の細かな篦磨き，体部は篦削りの後部分的に刷毛調整，その後縦方向の篦磨きにより仕上げられて	○淡赤褐色 ○胎土に3～4mmの石英・長石粒を多く含む。 ○百・後・Ⅱ

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		○口縁部のうち約半分は欠損しており，人為的に打ち欠いたものかもしれない。	いる。また部分的にはその上に刷毛もみられる。 ○底面はナデ。	
593	壺形土器	○肩部から上を人為的に打ち欠かれている。比較的小ぶりな底部に，胴部の最大幅を比較的上位にもつ。	○外面は約1㎝幅の荒い工具による刷毛調整の後，篦磨きがまばらに施されている。底部近くは篦磨きのみが観察される。内面篦削りは全体に横方向。	○淡黄褐色 ○1～2㎜の砂粒及び細かい金雲母を多く含む。 ○百・後・Ⅱ

14) 6—井戸—Ⅰ

594～611	甕形土器	○594は完形，599は底部のみ欠損し，608は上下が接合しない。その他は口縁部あるいは体部の½以上が欠けている。 ○口縁部は朝顔形に外反し，端部は肥厚して面を作り，端面には凹みをもつ。 ○体部は最大径が上方にあるが，肩はあまり張らず撫で肩である。 ○底部は明瞭な平底。	○口縁部と体部上端は横ナデ調整を行う。 ○体部内面は指頭圧痕の残るものもあるが，上半分は横，斜方向の篦削り，下半分は縦方向の篦削り調整を行っている。体部外面は刷毛調整しているが，607はその後横方向の篦磨きも行っている。 ○篦削りの方向は下から上へ，右から左が一般的である。	○茶褐色か赤褐色を呈し，1㎜大の砂粒を多量に含み，焼成は良好である。594と608は媒が付着している。その他は底部がないので不明。
612～615	甕形土器	○口縁端部が先述の甕より肥厚している。端部は外に傾斜する面をもつ。	○口縁端部に3本の退化凹線文を施している。614の内面には横方向の刷毛目が認められる。 ○体部の調整は上と同じ。	○色調・胎土・焼成は上に同じ。
616～618	甑形土器	○底部に円孔が穿たれている以外には，甕と形態は同一である。	○手法も甕とほとんど変らない。	○同上。
619～622 647～651	甕形土器	○底部破片である。 ○平底，上げ底，高台を思わせるものもある。	○内面は篦削り，外面は刷毛調整を行っている。	○同上。
623～627	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し短い。端部を尖らす。 ○体部最大径は半分より少し上方にあり，口径よりかなり大きい。 ○底部には不安定な平底である。	○口縁部は横ナデ仕上げ，体部内面は篦削り。外面は刷毛調整で，後に篦磨きしているものがある。	○625と627は同一個体と考えられる。 ○淡茶褐色で，1㎜大の砂粒を含む。
628～629	鉢形土器	○口縁部は少し外反して端部を尖らす。手捏ねの土器である。	○体部内面を篦削りする以外は，指頭による調整を行っている。	○628は淡茶褐色，629は淡黄白色。微砂粒を含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
630	鉢形土器	○口縁部は直立し，端部を丸く収める。	○内外面とも丁寧な篦磨き調整し，櫛描きの平行沈線文を上方に二段，下方に一段巡らしている。	○淡茶褐色～淡黄灰色を呈し，金雲母を若干含む。
631	壺形土器	○直口壺である。 ○口縁部はほぼ直立する。 ○体部は扁平な球形を呈する。 ○脚は欠けている。	○内面は口縁部が横方向の篦磨きで，体部が指頭ナデする。外面は体部に縦方向の刷毛目の後，口縁部および体部が縦方向の篦磨き調整している。	○明茶褐色を呈し，砂粒はほとんど含まない。
632～633	高杯形土器	○口縁部は上方に撮み上げる。 ○杯部はやや湾曲する。	○口縁外面に沈線をもつものと，横ナデするものがある。 ○杯部内面は縦方向の篦磨き。外面は632が横，633が縦方向の篦磨き調整である。	○淡赤褐色を呈し，1㎜以下の砂粒をかなり含む。
634～638	高杯形土器	○口縁部は大きく外反し端部を丸く収める。 ○口径は25㎝以上ある。 ○杯部は浅く，やや湾曲する。 ○口縁部と杯部の境は鋭い稜をもつものが多い。 ○脚部は長く，「く」の字状に折れ曲って，細部に面をもつ。	○口縁部内外面は篦磨きで，ほとんど縦方向であるが，634は波状に行っている。 ○脚部内面は篦削り，外面は縦方向の篦磨き調整し，篦磨きの沈線を施している。 ○裾部内面は横方向の，外面は縦方向の刷毛調整を行っている。	○赤褐色か茶褐色を呈し，2㎜大の砂礫を少々と1㎜以下の微砂粒を多量に含む。
639	椀形土器	○口縁部は上方に撮み上げている。 体部はやや湾曲し，深い。	○口縁部の端部と外面は横ナデ仕上げし，体部内面は縦方向と斜方向の篦磨きを行い，外面は調整不明である。	○赤褐色から黄褐色を呈し，1㎜以下の粗砂を含む。
640～642	鉢形土器	○口縁部は大きく外反し，端部は外に傾斜する面をもつ。端面に凹みをもつ。体部は最大径が口径を越え体部の上方にある。 ○台部は「八」の字状を呈し，端面をもつ。端面に凹みをもつ。	○口縁部と体部上端外面を横ナデ仕上げする。 ○体部内面は640は不明だが，641は下半分が篦削り，上半分が横方向の篦磨きしている。体部外面は640が縦方向の刷毛調整で，641・642が刷毛調整の後篦磨きしている。台部は640が内面に横方向の刷毛調整，外面が縦方向の篦磨きで，461が外面に指頭圧痕が残っている。	○明茶褐色を呈し，1～3㎜大の砂礫を若干含む。
643～645	鉢形土器	○645の口径は疑わしい。口縁部は外反し，端面をもつ。 ○体部最大径は口径を越えない。 ○底部は平底である。	○口縁部は横ナデ仕上げ。 ○体部内面は篦削りの後，篦磨き。外面は篦磨き調整している。645には内面に指頭圧痕が残っている。	○淡黄褐色を呈し，砂粗を少々含む。5㎜大の礫も含んでいる。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
646	壺形土器	○口縁部はほぼ直立し，端面に凹みをもつ。 ○体部はかなり肩が張る。 ○底部は平底である。	○口縁部内外面とも横ナデ仕上げしている。 ○体部内面は下半分が縦方向，上半分が横方向の篦削りである。外面は縦方向の刷毛調整である。	○茶褐色を呈し，微砂粗を多量に含む。 ○底部は接合できないが同一個体と考えられる。
652	鉢形土器	○台部の破片である。 ○台は低い。	○体部内面は縦方向の篦削りで，外面はナデと押圧で調整している。	○淡茶色を呈し，1㎜前後の砂粒を多含む。
653～674	鉢形土器	○製塩土器である。 ○台付鉢というべきか。 ○体部は外上方に直線的に延びる。 ○台はラッパ状を呈し，端部を丸く収めるものと角に収めるものが有。	○体部内面はナデ仕上げ。体部外面は縦方向の粗い篦削り調整している。 ○台部内外面は指ナデ調整である。	○すべて二次的焼成を受けていて，桃色を呈す。1～2㎜大の砂粒を多量に含む。 ○復元を試みたが不可能だった。

15) 4—P—25

675	壺形土器	○台付の直口壺である。斜め外方に立ちあがる口縁部に，隅丸菱形の体部をもつ。	○器面剝離が激しく，僅かに口縁外面の横ナデ及び体部内面の押圧痕が認められた。	○赤褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
676	高杯形土器	○器壁が薄く，口径が大きいことから，大型高杯の1部と考えられる。	○器面剝離が激しく不明。 ○口縁拡張面は篦状工具による鋸歯文を巡らす。	○暗茶色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
677	高杯形土器	○口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，端部は外方にやや拡張する。 ○杯底部は円板充填。	○器面剝離のため不明。	○淡赤褐色を呈し2㎜前後の砂粒を含む。
678	鉢形土器	○ボウル状の体部に，口縁部は端部が上下に拡張する。	○口縁部は横ナデ，口縁拡張面は2条の退化凹線が巡る。 ○体部外面は篦磨き，内面は不明。	○暗褐色を呈し，2㎜前後の粒砂を含む。

16) 5—P—19

679	壺形土器	○直立する短い頸部に，口縁部は外反し，端部は上下に拡張する。	○口縁端面は篦状工具による鋸歯文，頸部は，幅1㎜程度の細かな沈線を19条巡らす。またその直下には浅い刺突を巡らす。 ○内面は口縁部から頸部を篦磨き，体部を篦削りしている。	○淡黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粗を含む。
680～681	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は僅かに肥厚し，端面は凹みを呈す。	○口縁内外面は横ナデ。 681の体部外面は刷毛調整，底部は押圧及びナデ。 ○体部内面は篦削りしており，底部	○黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。 ○681の外面は煤が

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		○体部は倒卵形で底部は突出し，上底を呈す。	内面に押圧痕が認められる。	付着している。

17)　5—P—7

682～683	高杯形土器	○長い脚柱部をもち，脚裾部は「ハ」の字状にゆるく広がり，端部は面をもち，上端部は僅かにつまみ出している。	○脚柱部はナデ，裾端部は横ナデ。 ○内面は脚柱部に絞り目が残り，裾部は，刷毛調整が認められる。 ○683は5箇所に円孔を穿つ。	○淡黄褐色で，1㎜前後の砂粒を含む。
684	鉢形土器	○カップ状を呈するもので，口縁部は面をもつ。口縁直下には径1㎝の円孔が穿たれている（1カ所確認）	○体部上半は叩き成形後ナデ，下半は刷毛調整，内面は，上半を刷毛調整及びナデ，下半を篦削りしている。	○黄褐色を呈し，3㎜前後の砂粒を含む。

18)　5—P—15

685～686	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は上方に拡張する。	○口縁外面は横ナデ，口縁拡張面は2･3条の退化凹線が巡る。	○赤褐色で1㎜前後の砂粒を含む。
687～688	甕形土器	○やや丸味をもつ底部で器壁はやや厚い。 ○壺形土器の可能性も有。	○外面は篦磨き，内面篦削り。	○黄白色で1㎜前後の砂粒を含む。
689	高杯形土器	○ほぼ直立する口縁部をもつもの。	○内外面とも篦磨きの後，部分的に横ナデしている。 ○口縁端的の内面は横ナデにより凹みを呈す。	○赤褐色を呈す。 ○精製粘土。
690	高杯形土器	○椀状を呈すもので，口縁端部は丸くおさめる。	○口縁端部は横ナデ，以下篦磨きしている。	○赤褐色を呈す。 ○精製粘土。
691	壺形土器	○台付直口壺と考えられるもので，体部は隅丸菱形を呈す。	○外面は刷毛調整後，横ナデ。 ○内面は体部上半に押圧痕が残り，下半に刷毛調整痕が残る。	○精製粘土。
692	高杯形土器	○脚裾部で，端部はやや肥厚する。 ○691の脚部の可能性有り。	○端部は横ナデ，端面は1条の凹線，それ以上は篦磨きが巡る。 ○内面は刷毛調整。	○赤褐色を呈す。 ○精製粘土。
693	壺形土器	○長頸を呈するもので，口縁部はするどく外反し端部は肥厚し，端面は凹みを呈す。	○口縁内外面は横ナデ，頸部外面は刷毛調整後，浅い沈線14条を確認している。 ○頸部内面は押圧及びナデ。	○乳白色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒を含む。

19)　4—P—1

694	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は僅かに肥厚する。	○口縁端面に2条の退化凹線を巡らす。体部外面は篦磨き及び，刷毛調整，内面は不明。	○淡赤褐色で0.4㎜前後の微砂を含む精製粘土。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
695	甕形土器	○口縁端部は上方にやや拡張し，拡張面は凹部をもつ。	○口縁内外面は横ナデ。体部外面は刷毛調整の後，部分的に篦磨き，内面は篦削り。	○淡黄白色を呈す ○1㎜前後の砂粒を含む。
696	甕形土器	○口縁部はゆるく外反し，端部は上下に拡張する。	○口縁内外面は横ナデ，口縁拡張面は5条の浅い退化凹線が巡る。 ○体部外面は刷毛調整，内面は篦削り。	○淡赤褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。
697～698	甕形土器	○やや内傾して立ち上がる口縁拡張部をもつ。 ○体部は肩がやや張る。	○口縁拡張面は2条の退化凹線が巡る。体部外面は不明。内面は篦削り。	○乳白色及び赤褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含。
699	甕形土器	○やや丸味をもつ底部で器壁はやや厚い。	○外面不明，内面篦削り。	○暗褐色で2㎜前後の砂粒を含む。
700	高杯形土器	○やや深めの杯部に，口縁部は短くゆるく外反する。 ○脚柱部は短く，脚裾部は低く急に広がる。	○器表面磨滅が激しく，僅かに脚柱部内面の絞り目痕と，裾部内面の刷毛調整痕を確認している。	○赤褐色を呈す。 ○精製粘土。
701	壺形土器	○小型のもので，口縁部は短く，僅かに斜め外方に延びる。	○器表面磨滅のため不明。	○赤褐色を呈す。 ○精製粘土。
702	鉢形土器	○台付鉢形土器の脚部と思われる。 ○脚端部は僅かに肥厚し凹みを呈す。	○内外面とも横ナデを施しており脚部中央付近に，6箇所円孔を穿つ。	○赤褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。
703	鉢形土器	○口縁部は斜め外方へ短く立ち上がり，端部は上下に拡張する。	○口縁内外面は横ナデ，体部外面は篦磨き，内面は，剝離のため明確でないが篦磨きか？	○黒褐色を呈す。 ○1㎜前後の砂粒を含む。

20) 2—P—13

704	壺形土器	○「く」の字状に外反した口縁が幾分肥厚して斜め外方に延び少し上方に拡張している。肩部から胴部にかけて丸くふくらみ，胴部中央で最大径を測る。	○口縁部から肩部にかけてナデ調整され口縁を幾分上方につまみあげている。胴部外面は刷毛による調整のあと部分的に篦磨きされ，内面は篦削りされている。	○細かい砂粒を含み黄白色。
705～717	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁端部が上方に立ちあがっている。705・708は肩部がやや張り最大径を測る。胴部から底部にかけしだいにすぼまり底部は平底をなす。707・709	○立ちあがった口縁端部外面には数条の擬凹線が巡る。肩部は刷毛調整，口縁部から外面肩部にかけてナデ調整，外面肩部から底部は篦磨きされている。内面肩部は横方向の胴部から底部にかけては上方に向って縦あるいは斜めに篦削り	○胎土に砂粒および小石粒を含み茶褐色から赤褐色を呈している。707は乳白色を，710は乳褐色を，712・713は黒っぽい褐

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		は口縁端部の立ちあがりが内傾気味で，707の端部は少しうすくなっている。	されている。705の内面底部に指頭圧痕がみられる。底部の立ちあがり部分の外面に押圧痕が712・716にみられる。717は底部まで刷毛調整。705・712・715・716の底部外面は篦磨きされ，713・714はナデ調整されている。	色を呈している。
718	鉢形土器	○「く」の字状に外反した口縁端部が内傾して長く立ちあがる。肩から胴部にかけて少し張り，底部に向い急にすぼまる。	○口縁部はナデ調整，肩部外面は刷毛調整され，胴部から下は縦方向に篦磨きされている。内面は肩部から篦削り後ナデ調整されている。	○細かい砂粒を含み茶褐色を呈している。外面の下部に煤の付着が見られる。
719	鉢形土器	○平底の底部から斜め外方にゆっくり内湾して広がり，口縁端部がほぼ真直ぐ上方に長く延びている。	○内外面とも指ナデによると思われる調整がされているが剝離の為不鮮明である。	○非常に細かい精製粘土でつくられ赤褐色を呈している。
720～723	高杯形土器	○口縁部が斜め上方に外反して立ちあがる杯部をもち，722・723は脚柱から裾部にかけてゆるやかな広がりをみせる。裾部には4つの円孔が穿たれている。721は短かい脚柱部から折れ曲って裾部が広がっている。	○口縁部はナデ調整され，その上から外面は縦方向の篦磨きが脚部にかけてなされている。杯部内面も暗文風な篦磨きがなされている。722の裾部は内外面刷毛による調整がされている。	○非常に細かい砂粒を含む精製粘土でつくられ，赤褐色を呈している。
724	壺形土器	○少し外反気味に上方に立ちあがる口縁部。	○内面は丁寧なナデが，外面は細かい篦磨きがなされている。	○細かい砂粒を含み淡茶褐色。

21)　3—井戸—Ⅱ

725	壺形土器	○口縁部はするどく外反し，端部は肥厚し，端面は凹みを呈す。 ○頸部はほぼ直立する。	○口縁外面は横ナデ，頸部外面は刷毛調整後，内面は篦削り後横ナデしている。	○淡赤褐色で2㎜前後の砂粒と共に雲母が目立つ。
726	壺形土器	○内傾する短い頸部をもち，体部は撫で肩である。	○頸部内外面は横ナデ，体部内外面は刷毛調整しており，内面は一部押圧痕が認められた。	○赤黄褐色で2㎜前後の砂粒を含む。
727～728	壺形土器	○口縁拡張部が斜め外方に立ち上がる二重口縁を呈すもので，727の端部は面をもつ。	○口縁内外面は横ナデ，体部外面は刷毛調整。728はさらに篦磨きを加える。内面は篦削り。 ○728は刷毛状工具による刺突が2個認められた。	○727は暗褐色，728は淡黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
729	坩形土器	○小型丸底壺の一部と思われる。	○内外面とも横ナデ及びナデで，体部外面には僅かに篦削り痕が認め	○赤褐色を呈す。 ○精製粘土。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
			られた。	
730～736	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方に拡張部をもつ。	○口縁部は横ナデ，口縁拡張面は7～12本の櫛状工具による沈線を施す。胴部外面は刷毛調整，内面は篦削り。	○黄褐色～暗褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
737～738	甕形土器	○口縁部が「く」の字状に外反するもので，胴部は球形を呈すものと思われる。	○口縁部内外面は横ナデ，胴部外面は荒い叩き目が残り，内面は細い刷毛状工具痕が認められた。底部内面は篦状工具痕を確認。	○暗茶褐色を呈し2㎜前後の砂粒を含む。
739～740	高杯形土器	○いずれも椀状を呈すもので口縁部が僅かに開く。	○口縁部内外面は横ナデ，杯部外面は刷毛調整，内面はナデ	○淡赤褐色を呈す。 ○精製粘土。
741	高杯形土器	○浅い杯部に口縁部は斜め外方に直線的に延びる。	○口縁端部は横ナデ，以下外面は篦削り後ナデ，内面は刷毛調整及び押圧，ナデ。	○暗茶褐色で0.5㎜前後の砂粒を含む。
742～743	高杯形土器	○脚裾部は低く広がり，脚柱部はやや太く長い。	○脚部外面は篦磨き，内面742は押圧及び刷毛調整，743はナデ。	○赤褐色を呈す。 ○743は水漉し粘土。
744	鉢形土器	○台付鉢の脚部と思われる。	○体部外面は刷毛調整，脚部は押圧及び横ナデ，内面は体部が篦磨き，脚部は横ナデ。	○赤褐色を呈す。 ○精製粘土。
745	鉢形土器	○口縁部は2重口縁を呈すもので，端部は面をもつ。 ○体部は丸く，底部は丸底と思われる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は刷毛調整，内面は篦削り。	○淡黄灰色で1㎜前後の砂粒を含む。 ○内面に煤付着。

22) 2—P—1

746～755	甕形土器	○口縁部は上方に長く立ち上がり，端部を少し押さえて内側が膨らんでいる。 ○体部はやや肩が張った球形を呈す。 ○底部はほとんど丸底である。	○口縁端外面には櫛描きで6～11条の平行沈線文が施されている。 ○口縁部は横ナデ仕上げ。体部内面は下半が下から上に，上半が左から右に篦削りし，外面は縦方向の刷毛調整の後，暗文風に篦磨きしている。なお底部内面には指頭圧痕が沢山残っている。 ○体部上方に2～3個の米粒大の刺突を施している。	○淡黄褐色から暗褐色まで様々である。 ○体部中央部は赤褐色を呈する。二次焼成を受けている。 ○1㎜以下の微砂粒を多量に含む。
756～758	高杯形土器	○口縁部は直線的に外上方に延びる。端部は丸く収める。 ○杯部は短く直線的。 ○脚部は柱が長く胴張り	○口縁内面は横方向の篦磨き調整が認められる。その他の調整不明である。	○淡赤褐色から赤褐色を呈する。 ○精製粘土を使用する。756は微砂粒

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		し，「く」の字に折れ曲って直線的に外開きする裾部に至る。裾端部も丸く収める。 ○裾部には円孔を4個穿っている。		を含む。
759～760	鉢形土器	○口縁部は759が少し外反し短く，760はやや内湾して外反する。内面に759は稜がなく，760は稜をもつ。 ○体部最大径は口径より小さい。 ○底部は759がやや尖っている。760は不明。	○14は体部内面が横方向の篦磨きしている以外は調整不明である。 ○760は口縁部内外面とも縦ないし斜めの刷毛調整。その他の部分は調整不明。	○759は黄褐色で，760は赤褐色を呈す。いずれも微砂粒を多量に含む。

23)　2—井戸—Ⅲ

761～762	甕形土器	○まっすぐ上方に長く延びる口縁端部をもち，頸部が「く」の字状に折れまがりやや肩を張り，胴部は卵型でまっすぐにおりる。底部はほとんど平底の形跡をみない。	○上方に延びた口縁端部の外面に8～10条の櫛描平行沈線を施し，肩部は刷毛。これより底部にかけては篦磨きされ，内面は肩部が横，胴部から下は上および斜め上方に向って篦削りされている。	○胎土に幾分の小石粒を含む粘土で，淡黄白色を呈し，外面の肩部より下方には煤の付着がみられる。
763	高杯形土器	○口縁部がほとんどまっすぐ斜め外方に延びる。	○口縁部から外面にかけては，ナデおよび刷毛による調整の上から篦磨きされている。	○水漉し粘土で赤褐色。
764	鉢形土器	○口縁端部が少し外側に折れまがって斜め外方に延びる。肩部・胴部は全く張らず丸底の底部にいたる。	○胴部は内外面とも刷毛による調整がなされているが剝離により不鮮明である。	○胎土には少し砂粒を含み赤褐色。
765	壺形土器	○口縁端部は失われているが，口縁部から「く」の字状に折れまがった胴部はそれ程張りをみせず底部にいたる。	○外面は篦磨き，内面は細い刷毛調整ののち篦磨きされている。	○水漉し粘土で赤褐色。

24)　3—P—1

766～768	杯　蓋	○天井部は平らに作る。篦削りは天井部の½以下である。 ○口縁部は垂直に下がる。端面は内傾する。	○篦削りは時計回りである。 ○その他の部分は横ナデ仕上げしている。	○灰色ないし灰白色を呈す。 ○1㎜以下の微砂粒を多量に含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
769	杯身	○極小破片である。		○淡灰色を呈す。
770～771	高杯	○770は杯部破片で，押圧によって器面が波打っている。 ○771は脚端部破片で，端部を下方に少し拡み出している。	○横ナデ仕上げしている。 ○771は外面に沈線をもつ。	○淡灰色を呈す。 ○770は暗灰色，771は灰褐色を呈し，いずれも1㎜以下の微砂粒を多量に含む。
772	壺	○口縁部の破片である。 ○僅かに外反し，端部は少し膨らむ。	○内外面とも横ナデ仕上げしている。	○内面は暗灰色，外面は灰色を呈し，微砂粒を多量に含む。
773～774	甕形土器	○773は外反する口縁部，774はほぼ直立する口縁部をもつ。いずれも端面に凹みをもつ。	○口縁部は横ナデ仕上げ。 ○体部内面は刷毛調整している。外面は表面が磨滅していて，調整は不明。	○明茶褐色を呈し，1～3㎜大の砂礫を多量に含む。

25) 柱穴状土壙

775～780	甕形土器	○口縁部はゆるく外反し，端部は面をもつ。 ○体部がやや張りぎみの776，779と張りをもたない778，780などがある。	○内外面ナデののち，775～779は口縁端部に刻み目を巡す。 ○体部の上半には篦描きによる数条の沈線を施す。	○黄褐色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。 ○百・前・Ⅱ
781	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上下に拡張する。	○口縁部内外面は横ナデ。口縁部拡張面は3条の凹線を施す。 ○体部外面は刷毛調整。内面は磨滅のため不明。	○赤褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を多分に含む。 ○百・中・Ⅲ
782	壺形土器	○口縁部は鋭く外反し，端部は下方に著しく拡張する。	○口縁拡張面は横ナデの後，篦状工具による鋸歯文を巡す。口縁上端面は4条の沈線を施す。 ○内面は篦磨きしている。	○淡黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を多分に含む。 ○百・後・Ⅱ
783	高杯形土器	○ゆるく「ハ」の字状に開く脚部片で，端部は面をもつ。	○上，中段4個，下段7個の円孔を穿いたのち，外面は篦磨きしている。内面は円孔を穿つ前に篦削りしている。	○淡黄褐色を呈す。1㎜前後の砂粒を含む。 ○百・後・Ⅰ？
784～785	高杯形土器	○比較的深い杯部に，ゆるく外反する口縁部をもつ，脚柱部は短く， ○裾部は低く「ハ」の字状に広がり，4か所に円孔を穿つ。	○杯部内外面及び，脚部外面は，篦磨き。脚裾部内面は刷毛調整痕が認められる。 ○785の脚端部は丸くおさめているが，784は僅かにつまみ出している。	○褐色を呈す。 ○胎土は砂粒をほとんど含まない。 ○百・後・Ⅲ
786	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に鋭く外反し，端部は，上方に拡張する。	○口縁部内外面は横ナデ。体部内面は篦削りしている。	○淡赤褐色で1㎜前後の砂粒多含。 ○百・後・Ⅲ

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
787	壺形土器	○小型のもので，口縁部はゆるく外反し，体部はまるい。	○口縁部内外面を横ナデ。 ○口縁端部は1条の沈線を施す。 ○体部外面は僅かに篦削り痕が認められ，内面は細かな篦磨きをしている。	○黄褐色で，砂粒をほとんど含まない精製粘土。 ○百・後・Ⅲ
788	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上下に拡張し，凹みを呈す。 ○体部は肩がやや張る倒卵形を呈し，底部は，平底である。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は篦磨き，内面は篦削りしている。 ○底部中央に径8㎜程の穿孔がなされている。	○暗褐色を呈す。 ○2㎜前後の砂粒を含む。 ○外面煤付着。 ○百・後・Ⅲ
789	壺形土器	○小型の直口壺で，体部中央に最大径をもち，丸底を呈すと思われる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は刷毛調整痕が認められた。他は不明。	○赤褐色を呈し，0.5㎜前後の砂粒を多含む。 ○百・古・Ⅱ
790	杯蓋	○器高は低く，天井部と口縁部の境は，不明瞭。端部外面は凹みを呈す。	○天井部は⅓を篦削りしており，その方向は，時計回り。他は横ナデ。	○明灰色で1.5㎜前後の砂粒を含。
791	杯身	○広い底部に杯部は斜め外方に直線的に延びる。 ○受け部は低く内傾する。	○底部は⅓を篦削りしており，その方向は時計回り。他は横ナデ。	○明灰色で，1㎜前後の砂粒及び炭化物を含む。

包含層

792～801	深鉢形土器	○粗製土器の口縁部破片である。 ○792は内湾する。その他は外湾するものと直立するものがある。 ○口縁端部は水平面をもつ。	○口縁端面に刻み目を施すものと施さないものがある。 ○刻み目をもつものは，外面に条痕をもつ。他は削痕である。内面はいずれも磨かれている。	○内面は黒褐色か黒色のものが多く，外面は茶褐色のものが多い。799～801は礫も含む。
802～803	鉢形土器	○精製土器の口縁部破片である。 ○802は外反する口縁をもち，端部に外傾する面を有す。 ○803は外反するがやや内湾する口縁であり，2つの突起をもつ。	○内外面とも丁寧に磨いている。 ○口縁内面に802は1本の沈線が施されている。	○802は淡灰褐色を呈し，803は黒褐色を呈す。 ○微砂粒を多含する。
804～805	浅鉢形土器	○粗製で外反する口縁部の端部に面をもつ。 ○体部最大径は上端にあって鋭い稜を作る。	○口縁端面には刻み目を施し，805の口縁内面には刺突文を施す。 ○内面は丁寧な磨き，外面は削痕が見える。	○黒褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。
		○精製土器の破片で口縁端部を僅かに内側に肥厚さ	○内外面ともよく研磨されている。	○黒褐色から暗褐色を呈し，微砂粒を

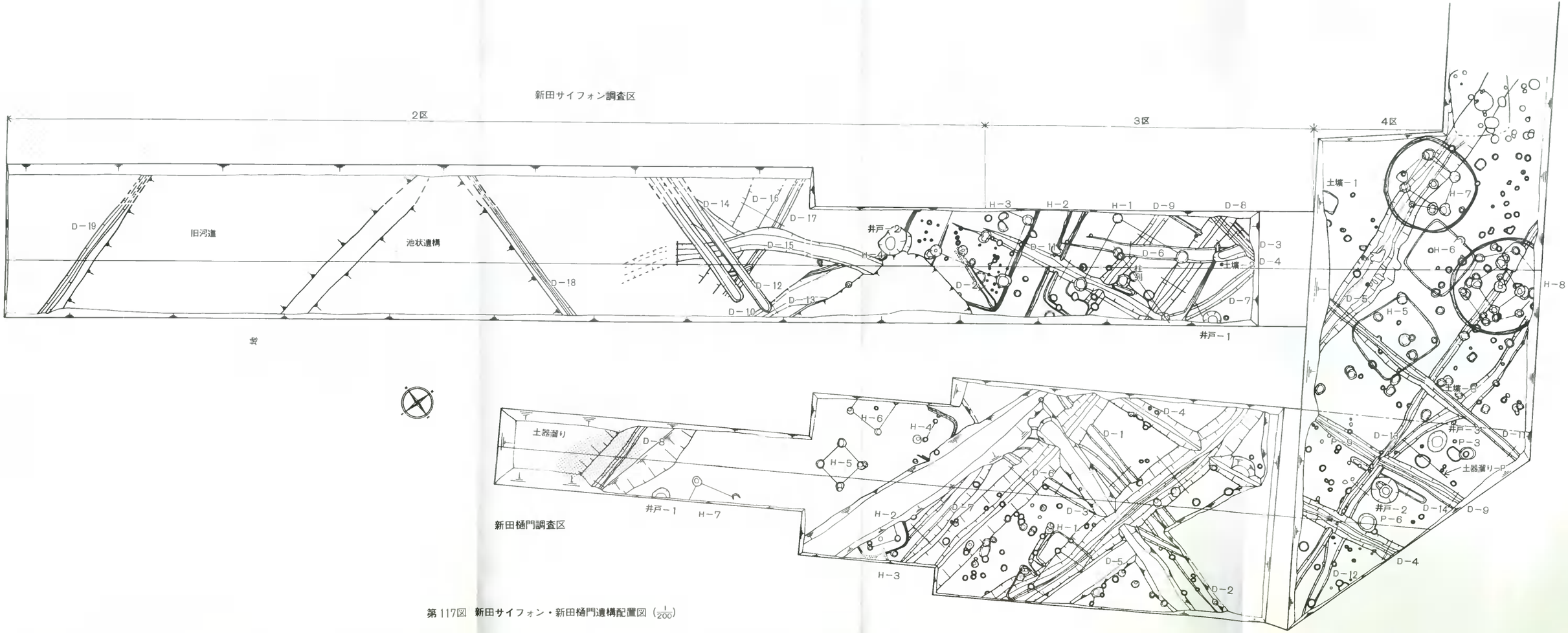
番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
806～809	浅鉢形土器	せるものと，明瞭な玉縁を作るものとがある。 ○体部最大径は上端にあって，稜を作るものと丸く作るものがある。		含む。
810～815	深鉢形土器	○体部の曲折部分の破片である。 ○815は精製土器，その他は粗製土器である。	○曲折部の上方は条痕，下方は削痕を施す。この部分に縦方向と横方向の刺突文あるいは爪形文が施文されているものもある。	○黒色，褐色，暗褐色を呈す。3㎜以下の砂礫を含む。
816～824	鉢形土器	○体部細片である。	○内面は磨き，外面は条痕のものと削痕のものがある。	○同上
825～826	鉢形土器	○底部破片である。かなり上げ底を呈する。	○825は内面が磨き，外面が条痕。 ○826は内外面とも条痕である	○825は褐色，826は黄褐色を呈し，いずれも3㎜大の礫含む。
827	壺形土器	○口縁部はやや外反して立ち上がる，端面は強い凹みをもつ。 ○頸部は下端が少しすぼむ。	○口縁部内外面と体部外面は横方向の箆磨きで，体部内面はナデ仕上げしている。 ○頸部と体部の境に3本の箆描き沈線文を施している。	○茶褐色を呈し，1～2㎜大の砂粒を多量に含む。 ○百・前・Ⅱ。
828～833	甕形土器	○口縁部は「く」の字状，逆「L」字状，やや外反するもの等がある。	○口縁端部に刻み目の有るものと無いものがある。 ○体部にいずれも2～4本の箆描き平行沈線が施されている。	○黄褐色か茶褐色を呈し，4㎜大の礫を多含す。 ○百・前・Ⅱ。
843	甕形土器	○逆「L」字状の口縁部である。	○体部に櫛描きの20条余りの平行沈線文を施し，その下に刺突文を施している。	○茶褐色を呈し，2㎜以下の砂を多含す。 ○百・中・Ⅰ。
834	甕形土器	○上げ底の底部片。	○調整は不明。	○籾圧痕が付く。
835～839	甕形土器	○「く」の字状に外反する口縁部を持ち，端部を上下に拡張する。	○口縁端面に凹線文を施し，棒状浮文を貼り付けるものがある。 ○頸部に刻み目凸帯を巡らすものもある。 ○体部内外面に刷毛調整する。	○淡赤褐色が淡黄褐色を呈し，1㎜前後の砂を多含す。 ○百・中・Ⅱ。
840～843	高杯形土器	○口縁部は直立し，端部は水平な面をもつ ○杯部は浅くて，直線的である。 ○脚部は長脚で「ハ」の字状に広がり，端部を外上方に引き出す。長方形の透し孔を推定10個穿っている。	○842は口縁外面に凹線文を施している。 ○口縁内外面は横ナデ仕上げ。 ○840の杯部内面は箆磨き調整。 ○脚部内面は箆削りしている。	○褐色か黄褐色を呈し，1㎜前後の砂を多量に含む。 ○百・中・Ⅲ。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
844	高杯形土器	○口縁部は直立し，端部を内外に肥厚して，外傾する面を作る。 ○杯部はやや深い。	○口縁端面に櫛状工具による連続刺突文，口縁外面に同じ工具による波状文を二重に施している。 ○杯部外面は縦方向の刷毛調整。	○内外とも乳白色を呈し，外面に丹が残存する。1㎜前後の砂粒を含する。 ○百・中か百・後。
845	器台形土器	○脚部は大きく広がり，端部に面をもつ。円形の透し孔を数個穿っている。	○外面には凹線文を施している。 ○内外面とも横ナデ仕上げし，接地する部分のみ篦削りが残っている。	○淡黄褐色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。 ○百・中・Ⅲ。
846	壺形土器	○口縁部は大きく外反し，端部は肥厚し少し垂れ下る。 ○頸部は長く，中央がすぼむ。	○口縁端外面と頸部外面は凹線文を施している。 ○内外面とも横ナデ仕上げしている。	○淡茶褐色を呈し，2.5㎜大の砂粒を多く含む。 ○百・後・Ⅰ。
847～849	甕形土器	○壺とも考えられる。 ○口縁部は外反し，端部が上方に拡張して外に傾斜する面をもつ。	○口縁端外面には凹線を施す。 ○体部内面は篦削りであるが，頸部のかなり下の方で止まっている。外面は縦方向の刷毛調整。	○黄褐色か淡赤褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。 ○百・後・Ⅰ。
850～852	高杯形土器	○口縁部は直立し，端部を丸く収める。 ○851は脚端部を肥厚し，852は「八」の字状の脚である。	○口縁端外面に4本の沈線を施し，杯内外面を篦磨きする。 ○脚内面は篦削り，外面は押圧調整している。	○黄褐色か茶褐色を呈し，850は水漉し粘土，他は砂礫を含む。 ○時期不明。
853～863	甕形土器	○口縁部は外反し，端部は面をもつもの，上下に拡張するもの，上方に拡張するものがある。	○口縁部内外面は横ナデ，体部内面は頸部まで篦削り，外面は縦方向の刷毛調整している。	○黄褐色が淡茶褐色を呈し，丹塗りもある。1㎜以下の砂粒含む。 ○百・後・Ⅱ～Ⅲ。
864～866	高杯形土器	○口縁部は外反し，杯部は内湾する。 ○脚部は短くして，「く」の字に折れ曲る。	○口縁部，杯部，脚部外面は縦方向の篦磨き調整を行い，脚内面にしぼり目と横方向の刷毛目が見える。	○864は黄褐色，865は赤褐色866は茶褐色を呈し，微砂粒を含む。
867～869	高杯形土器	○口縁部は上方に少し引き出していて，杯部は内湾する。脚部は864～866と同じ。	○口縁部は横ナデ。その他は864～866と同じ。	○867は赤褐色，868は黄褐色を呈し，水漉し粘土を使用する。
869～870	高杯形土器	○短脚で「く」の字状に折れ曲って，端部は丸く収める。円孔は4箇所穿っている。	○869は内外面に刷毛調整を行っている。870は調整不明。	○869は茶褐色，870は赤褐色を呈し，精製粘土を使う。
871	壺形土器	○器台とも考えられる。 ○上下に拡張した口縁端部の上下端は面をもつ。	○口縁端外面には二段の鋸歯文を施している。 ○内面は縦方向の篦磨き調整を行っ	○茶褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を多く含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
			ている。	○百・後・Ⅲ。
872	壺形土器	○体部片である。 ○871と共に特殊壺と呼ばれるものと類似する。	○凸帯を2本巡らしその間に鋸歯文を施している。	○褐色を呈し，水漉し粘土を使用。 ○百・後・Ⅲ。
873～875	鉢形土器	○いずれも細片である。 ○口縁端部を肥厚する。	○口縁端面に凹線文を施す。 ○口縁部は内面篦磨き，体部内面は篦削り，外面磨きしている	○茶褐色を呈し，3㎜大の礫も含む。
876	壺形土器	○平底の底部破片。	○内面に指頭圧痕が残る。	○淡灰褐色。
877	高杯形土器	○口縁部は中太りで外傾し，端部を水平に収め内湾する杯部に短脚が付く。	○調整は不明。	○黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。 ○百・古・I。
878	鉢形土器	○口縁端部が丸く，脚が付かないこと以外は877と同じ形態をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ，体部内面は刷毛調整の後篦磨き，外面は刷毛調整である。	○淡黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
879	鉢形土器	○製塩土器の台か。接地部は水平の面をもつ。	○押圧による整形痕が残る。	○赤褐色で，礫も含む。
880～886	壺形土器	○口縁部は外反し，二重口縁を呈する。口縁端部は短く垂直に立ち上るものと，長く外反するものがある。端部は丸いものと面をもつものが見られる。	○884は篦描き鋸歯文を主体とする幾何学文様を外面に施す。 ○885は櫛描平行沈線文を施す。 ○886は篦描きの波状文を施す。 ○その他は無文である。	○880は褐色，881は赤褐色，882，884は淡茶褐色，883は淡黄褐色，885は茶褐色，886は茶褐色。
887～888 895	壺形土器	○やや肩が張った体部をもち，平底を呈す。 ○895は体部下端が外反している。	○内面は篦削りの後，刷毛調整を行っている。外面は縦方向を主体とする刷毛調整を行っている。895は外面が篦磨きである。	○887は黄褐色，888は褐色，895は淡茶褐色を呈す。
889～890	甕形土器	○「く」の字状に外反する口縁の端部は少し上方に引き出している。	○口縁部内外面は横ナデし，体部内面は篦削り，外面は叩き成形の後刷毛調整を行っている。	○889は黄褐色，890は暗茶褐色を呈す。
891～894	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反して，上方に長く立ち上る。	○立ち上り外面には6～9条の櫛描き平行沈線を施している。 ○体部内面は篦削り，外面は刷毛調整の後暗文風の篦磨きする。	○淡茶褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を多く含む。
896	高杯形土器	○椀形を呈する杯部をもち，脚は短い。	○内外面ともナデか。	○茶褐色で，3㎜大の礫含む。
897～900	高杯形土器	○大きく外反する長い口縁部をもつ。直線的に伸びるものと，やや外湾するものがある。	○外面の篦磨きは横方向と縦方向とがある。	○黄褐色を呈し，精製粘土を使用している。
		○脚柱は中太りし，裾はや	○902の内面には刷毛目，外面には	○赤褐色を呈し，1

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
901～902	高杯形土器	や内湾する。 ○円孔は裾部に4箇穿っている。	篦磨き調整が行われているが，901は調整不明である。	mm以下の砂を多分に含む。
903	高杯形土器	○椀形を呈する杯部をもち，端部は少し外に引き出す。口縁部と杯部の境に稜をもっている。	○器面は磨滅して調整不明。	○暗茶褐色を呈し0.5mm前後の砂粒を含む。
904～908	壺形土器	○坩形土器である。 ○「く」の字状に外反する口縁をもつ。 ○体部は扁平なものと球形のものがある。	○口縁部内面は刷毛調整，外面は不明。体部内面は篦削り後ナデているものと刷毛調整のものがある。外面は刷毛調整である。	○茶褐色が淡黄褐色を呈し，砂礫を多く含む。
909～913	鉢形土器	○手捏ねの小型土器である。台付のもの910は製塩土器か。	○910は外面に叩き目が残っている。その他は指圧痕が器面全体に残っている。	○茶褐色か黒色を呈し，1mm前後の砂粒を含む。
914～915	椀形土器	○体部は内湾する。底部は914が平底，915が丸底を呈す。	○914は内外面とも篦磨き，915は内面刷毛調整，外面は篦削りしている。	○黄褐色を呈し，0.5mm前後の砂粒含む。
916	鉢形土器	○口縁部は二重口縁を呈するか。 ○重量感のある体部をもち，平底を呈する。	○体部内面は横方向の篦磨きで，底部に指頭圧痕が残る。外面は横，斜め方向の刷毛調整である。	○茶褐色を呈し，砂粒を含む。
917	鉢形土器	○やや外傾する口縁部をもつ。	○内外面とも篦磨きしている。	○黄褐色を呈し，砂粒を含む。
918	甑形土器	○舌状の把手を1対もっている。	○内外面表面磨滅して調整不明。	○淡茶褐色を呈し，砂礫を含む。
919～921	甕形土器	○口縁端面は水平のもの，内傾するもの外傾するものとがある。	○口縁部は横ナデ，体部は刷毛調整をしている。	○淡黄色を呈し，0.5mm前後の砂粒を含む。
922～928	杯　蓋	○天井部は扁平である。 ○篦削りは天井部の½以下である。 ○口縁部と天井部の境は鋭い稜を作る。 ○口縁部は直立し，端面は内傾する。	○篦削りは時計回りのものと逆時計回りのものがある。 ○篦削り以外の所はすべて横ナデを行っている。	○灰白色か灰色を呈し，928は黒色の自然釉がかかっている。砂礫を含む。
929～931	杯　蓋	○天井部は扁平で，篦削りは½以下である。 ○口縁部との境は凹線になっている。 ○口縁端部は丸い。	○篦削りの方向は時計回りと逆時計回りがある。 ○篦削り以外の所はナデである。	○灰白色か灰色と呈し，1mm前後の砂粒を多く含み，3mm大の礫も少し含む。
		○立ち上りは1.5～2.0cm	○篦削りの方向は時計回りのもの	○青灰色か灰色を呈

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
932～938	杯身	あり，やや内傾するものと折れ曲ったものがあり，端面は内傾あるいは水平である。 ○受部は水平か，やや上方に延びる。 ○篦削りは底部の大半を占めるものと，½以下のものがある。	と，逆時計回りのものがある。	し1㎜前後の砂粒を多量に含み，3～5㎜大の礫も少し含む。緑色の自然釉がかかったものもある。
939	杯身	○立ち上りはやや内傾し，端部は丸く収める。	○篦削りは逆時計回りである。	○灰色で5㎜大の礫も含む。
940～941	杯身	○立ち上りは短くて内傾し，受部は上方に伸び，立ち上りの方が少し長いだけになっている。	○内外面とも横ナデを行う。	○灰色で，砂粒を少し含む。
942	高杯蓋	○天井部に中央が凹むつまみがついている。	○ナデ仕上げ。	○緑色自然釉がかかっている。
943～944	有蓋高杯	○杯部は932～938と同じ。 ○脚は短く，端部は稜をもつものともたないものがあり，透しは長方形で3方にあける。	○脚外面にはカキ目調整を施している。 ○杯部は932～938と同じ。	○943は3H5上層，944は2区から出土。灰色を呈し，砂粒を少し含む。
945～946	高杯	○杯部は椀形を呈す。	○篦削りを横ナデ調整している。	○945は焼成不良。
947～948	高杯	○脚端部を摘み出す。	○横ナデ調整している。	○灰色と青灰色。
949	無蓋高杯	○口縁は外反し端面は内傾する。 ○体部に凹線で区画した文様帯がある。	○文様帯内側に櫛描き波状文を巡らしている。	○灰色を呈し，1㎜前後の砂粒を多量に含む。
950	杯か蓋	○底部は丸く，口縁部は直立し，端部を少し摘んでいる。	○底部は時計回りの篦削りで，その他は横ナデしている。	○灰色を呈し，4～5㎜大の礫も含む。
951～953	中型甕	○口頸部は外反し，端部はやや肥厚する，951は稜を作るが，他はすべて丸く作っている。	○951は口頸部と体部上端までカキ目調整を施し，952～953横ナデしている。体部内面は青海波，外面は格子目の叩きが残る。	○灰色か明灰色を呈し，砂粒を多量に含む。



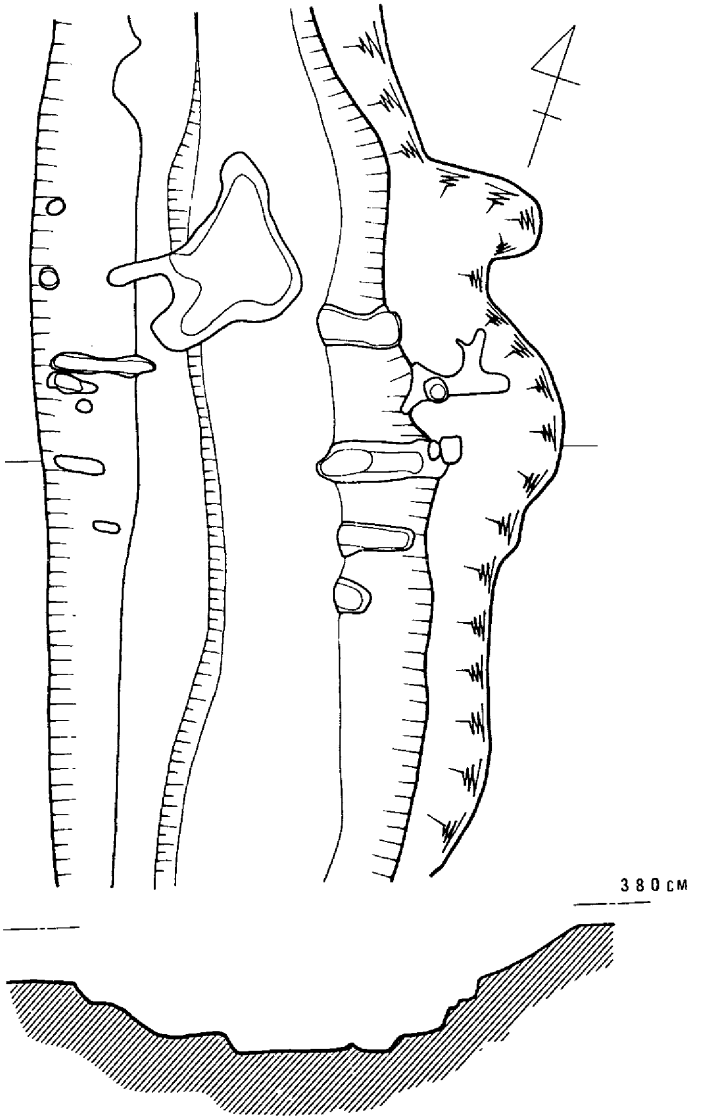
第117図　新田サイフォン・新田樋門遺構配置図（$\frac{1}{200}$）

第2節　新田サイフォン調査区

本調査区は，微高地のほぼ中心から西の縁辺部を横断するもので，2区の左岸側4分の1と，3・4区が微高地上にあたる。遺構は弥生時代の住居址2軒・溝状遺構6本・井戸状遺構1個・土壙1個，古墳時代の住居址6軒(うち1軒は壁体溝の一部のみを確認した。)・溝状遺構1本・井戸状遺構1個・土壙2個，古墳時代から中世にかけての溝状遺構7本，近世〜近代の溝状遺構8本・旧河道1本・池状遺構1個などを検出した。

遺物は縄文時代晩期〜中世に至るものが出土しているが，特に，弥生時代後期〜古墳時代前半のものが大半を占めている。なお，大部分の遺物は後世の削平により細片であるが，微高地下がりからは比較的残りの良いものが出土している。この他に古墳時代の須恵器・平安時代末〜鎌倉時代初頭にかけての高台付の土師質土器・瓦器の小片などが出土している。その他の出土遺物としては石器・鉄器・土錘・紡錘車などがある。

(内藤)

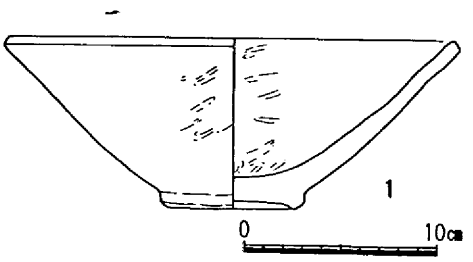


第118図　新田サイフォンD－5遺構平・断面図 (1/30)

溝状遺構

1)　D—5の水制施設

この溝の流走する方向は，北西から南東を指し，竪穴住居址や各種の土壙などおびただしい遺構を今にとどめ，往時にもっとも安定した生活区であった第1微高地の，南縁に沿って流路をとるという立地上の特徴がある。自然地形の中にできあがった低位の沼沢地を流れるのではなく，形成された微高地の，景観上からすれば一段高い部位にのせられている点，人



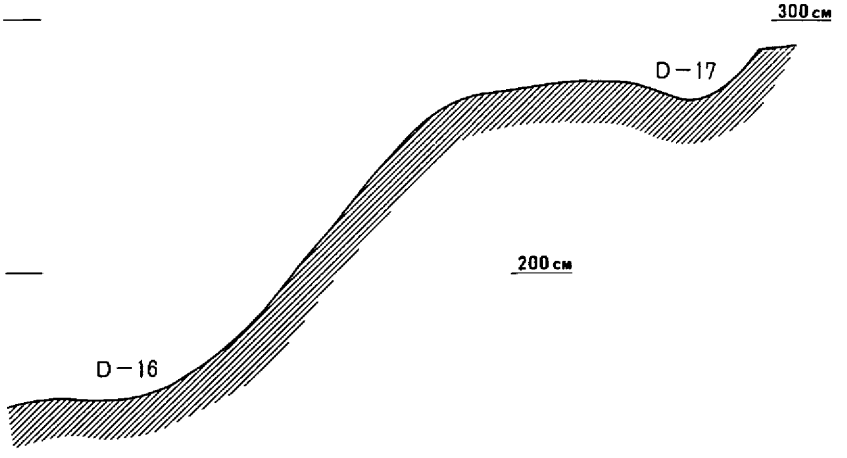
第119図　新田サイフォンD－5出土遺物

為的に掘削された河道とみなすほかはない。微高地縁辺を流走する同様の溝は，雄町遺跡第4調査区（註22）でもかつて検出され，水田址への導水路を予測させたが，本例の溝もそうした役割を荷っていたものであろう。この溝は，実は2ないし3回も改修のおこなわれたことが約9m上流の横断面で確認されているので，かなり幅広い使用年代を考慮する必要があるにせよ，弥生前期の土器片を共伴する最古の溝の下底部に，何らかの構造物のあった痕跡をとどめている。それは，明らかに杭の跡を思わせる小孔と細長い略長方形の穴とからなるが，いずれにも木質部の残存はみられない。杭穴の径は10cm末満の普遍的な太さで，打たれた位置は溝の両肩部にあたる。略長方形の穴は，22×64cmを最大とし，最小のものは5×15cmを測り，これらの穴は水の流下する方向と直交する方位の河床両側に，対応する位置関係を示して残されている。したがって長軸にそって板材を落し込めば，流量を調整できる水制施設としての機能を果したものと思われる。水制施設を予測させる構造物の上流河床部には，不整形の浅い窪池がある。これは，この部位で流水を遮蔽したために，水勢によってできた河床洗掘の跡ではあるまいか。この部位を境として，上流と下流では河道の方向が多少ゆがみをもつことも，人工的な構造物と無関係ではなさそうである。

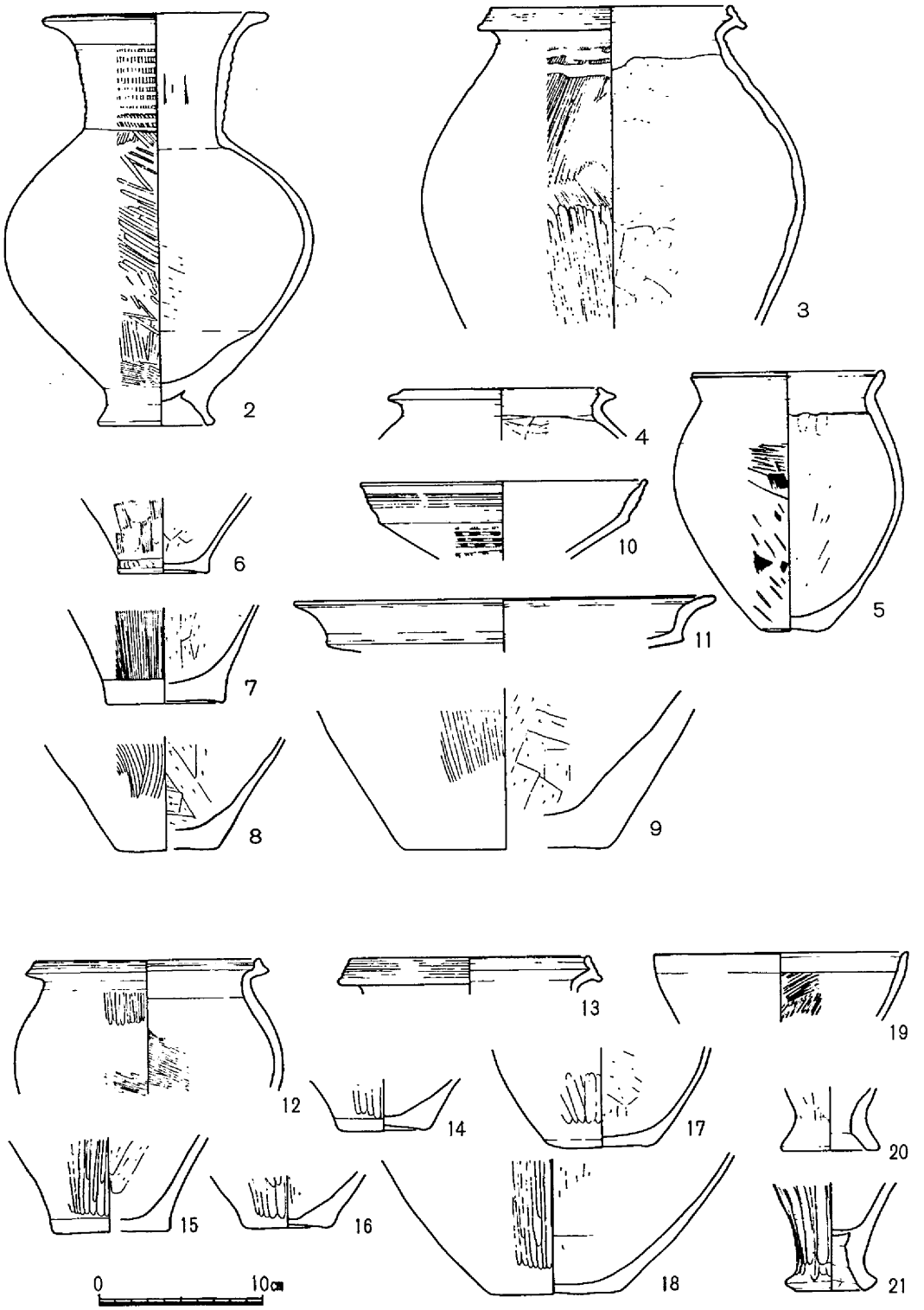
（葛原）

2）D—17

2区の微高地の下がりに沿って南北に走る溝で，幅60cm・深さ35～40cmを測り，暗褐色粘質微砂が堆積している。溝の底のレベルは海抜約2.7mで断面はゆるい「U」字型を呈している。なおこの溝は，新田樋門調査区のD－8に続いていると考えられる。遺物は，肩口などから完形の壺や甕などの土器（**2～11**）が出土している。これらの遺物から，百・後・Ⅱの時期と考えられる。



第120図　新田サイフォンD－17・D－16断面図（$\frac{1}{30}$）



第121図　新田サイフォンD－17(上)・D－16(下)出土遺物

3) D—16

2区の微高地の下がりに検出されたもので，南北に走っている。幅50cm・深さ10cm程で茶灰色粘質微砂が堆積している。断面は鈍く弧状を呈し，溝の底のレベルは海抜1.5mを測る。

遺物はいずれも口縁部や底部の破片（12～21）であるが，百・後・Ⅱの時期と考えられる。なお新田樋門調査区では，この続きの遺構は認められず，これらの土器は微高地斜面の土器の可能性もある。

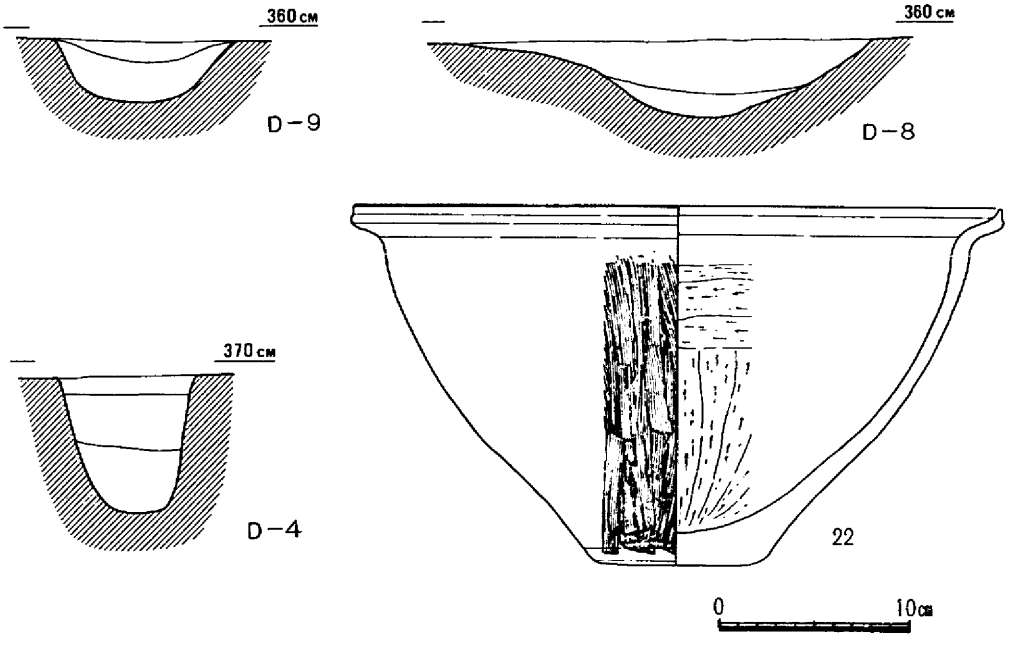
4) D—9

3区のほぼ中央を南北に走る溝で，幅70cm・深さ25cmを測り，上層には灰褐色泥砂が，下層には暗灰褐色泥砂が堆積している。溝の底のレベルは海抜3.3mを測り，断面は横広の「U」字型を呈す。

遺物はほとんど認められず，その時期は決定しがたいが，H—1（百・古・Ⅰ）・D—11に切られている。なおこの溝は左岸用水調査区・新田樋門調査区で検出されたD—7に続くと考えられる。

5) D—8

3区の東寄りをD—9にほぼ平行して南北に走る溝で，幅160cm・深さ30cmを測り，上層に茶灰色泥砂・下層に灰褐色砂泥が堆積している。溝の底のレベルは海抜3.2mを測り，断面はゆるく湾曲している。遺物がなく時期決定しがたいが，H—1（百・古・Ⅰ）に切られている。なおこの溝は左岸用水調査区のD—9・新田樋門調査区のD—6に続くと考えられる。



第122図 新田サイフォンD−9・D−8・D−4断面図（$\frac{1}{30}$）及びD−4出土遺物

6）D—4

3区の北隅を東西に走り，4区の南部を斜めに横切る溝で，幅54cm・深さ54cmを測り，断面は「U」字型を呈している。埋土には，下層に暗灰褐色粘質土・中層に茶灰色泥砂・上層に褐色泥砂が堆積している。溝の底のレベルは海抜3.1mを測る。

出土遺物として，大型の鉢形土器**22**がみられる。またこの溝はD—8・D—6・D—5を切っており，新田樋門調査区のD—11に続くと推定されることから，百・後・Ⅳの時期と考えられる。

7）D—3

3区の北隅，D—4の北側を走り，4区でD—4の上層を切って，D—4の上を東西に走る溝で，幅30cm・深さ6cmを測る。断面は幅広い「U」字型を呈し，溝の底のレベルは海抜3.6mを測る。

調査区内で遺物の出土がないが，D—4を切り，H—5が溝埋没後に建てられていることから，百・後・Ⅳから百・古・Ⅲの間の時期と考えられる。

8）D—7

3区の東隅を南北に走る溝で，幅60cm・深さ15cmを測り，断面は幅広い「U」字型を呈する。上層には灰褐色泥砂が，下層には黄灰褐色泥砂が堆積している。溝の底のレベルは海抜3.5mを測る。出土遺物がなく，時期は不明である。

9）D—6

3区の北西寄りを東西に走る溝で，幅約100cm・深さ15cmを測り，断面は幅広の「U」字型を呈する。溝の底のレベルは海抜3.55mを測る。遺物はいずれも細片で図示できなかったが，須恵器等が出土している。この溝はH—1（百・古・Ⅰ）・D—4（百・後・Ⅳ）を切っている。

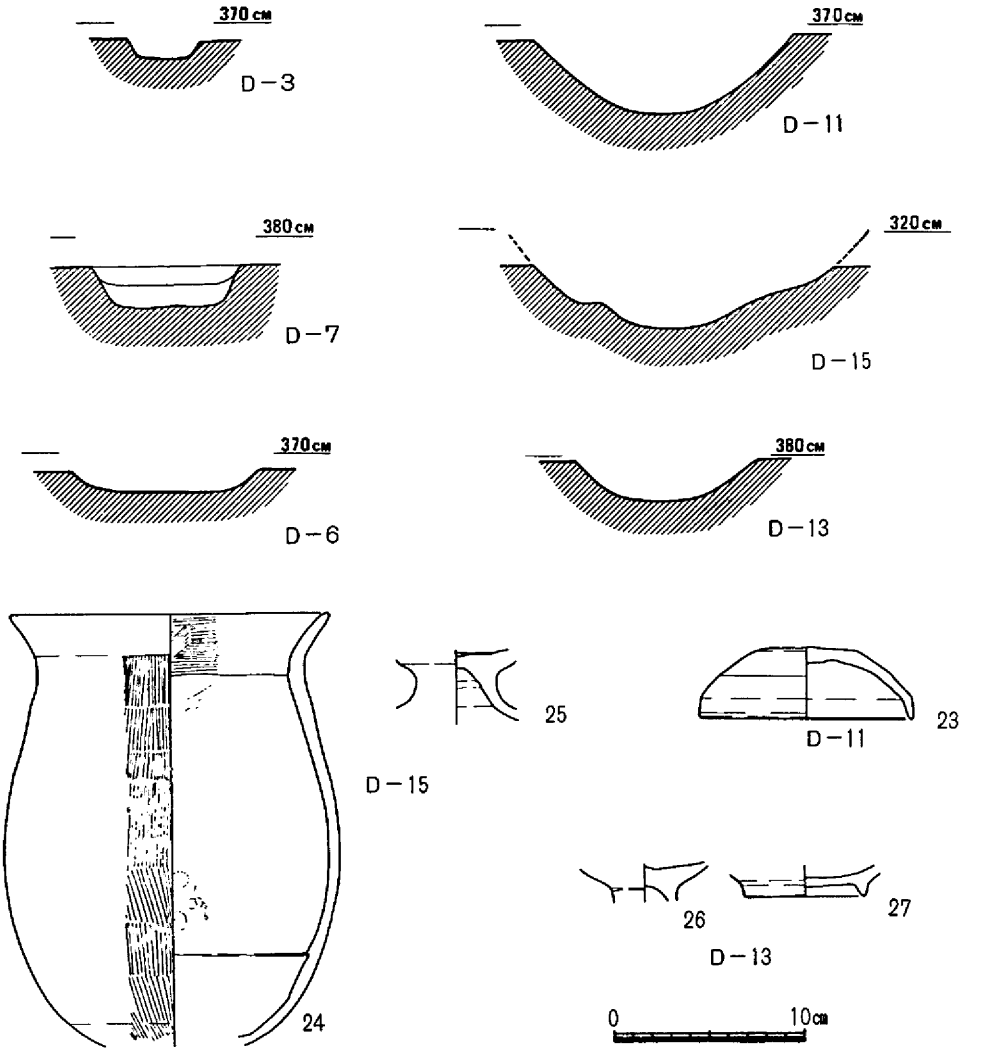
10）D—11

3区を斜めに横切って東西に走る溝で，幅約120cm・深さ30～35cmを測る。溝の底のレベルは海抜3.45mで，幅広の「U」字型を呈している。

遺物は須恵器**23**・土師器等数点が出土している。この溝はH—3（百・古・Ⅱ）を切っており，新田樋門調査区のD—9に続くと考えられる。

11）D—15

2区中央部を東西方向に走り，東端を池状遺構に切られている。幅100～150cm・深さ60cmを測り，暗灰茶色粘質微砂で埋っている。断面はゆるやかな「U」字型を呈し，溝の底のレベルは海抜2.8mを測る。遺物としては肩口や底等から甕**24**・高杯**25**などが出土している。なおこの溝は新田樋門調査区のD—4に続くと推定され，古墳時代後期以降の時期と考えられる。



第123図　新田サイフォン溝状遺構断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

12）D—13

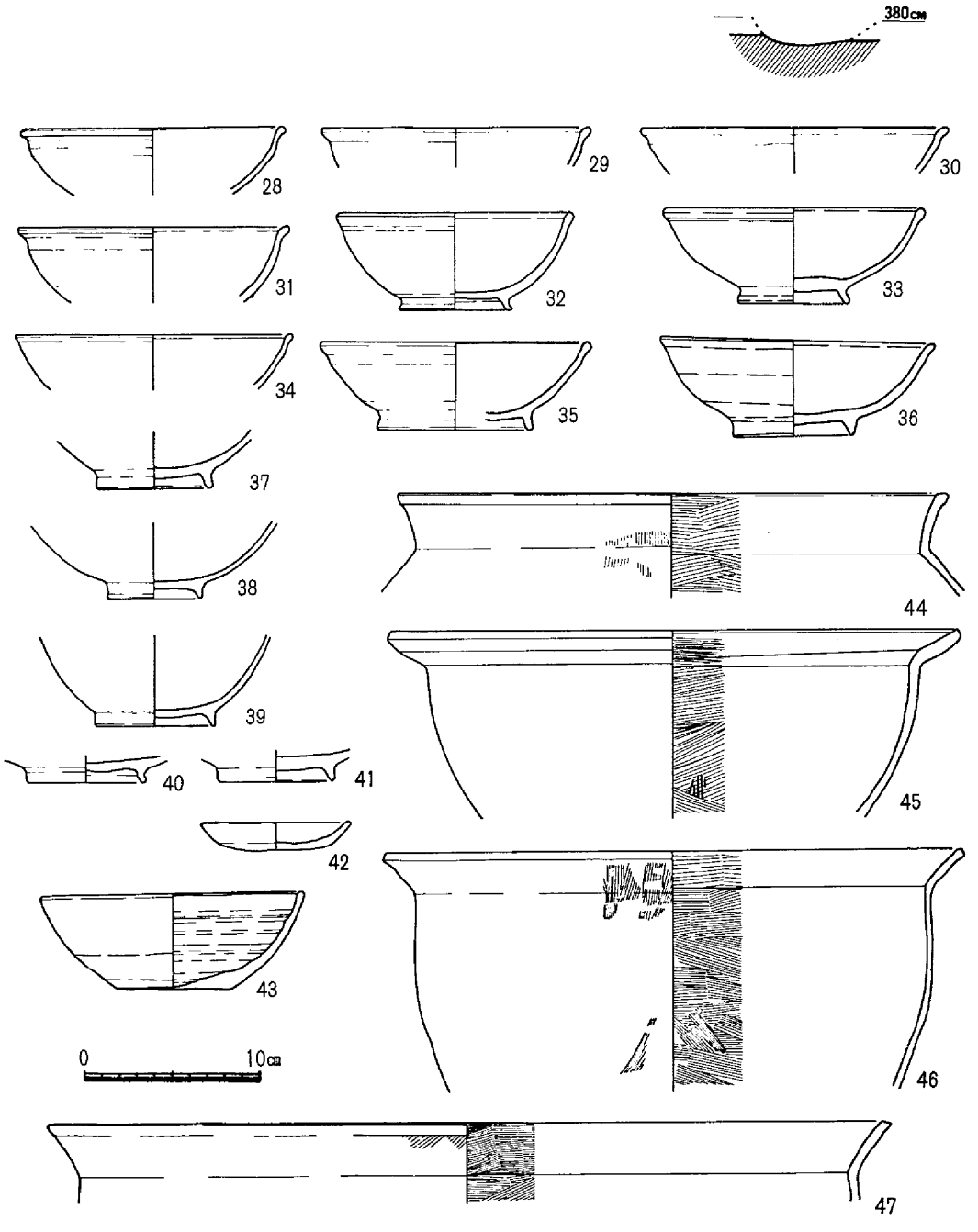
2区南東部を南東から北西に走る溝で，東側は池状遺構に切られている。溝は，幅75cm・深さ10cm程で溝の底のレベルは海抜3.6mを測る。断面はゆるい「U」字型を呈している。遺物はいずれも細片であるが，平安時代末から鎌倉時代初頭頃の高台付の土師質の土器27が含まれている。

13）D—2

2区と3区の東側の境からH—3の東隅の方向に東西に走る溝で，検出面ではわずかに溝の底部を残しているのみである。断面はわずかに弧状を呈し，検出面で幅30cm・深さ5cmを測る。溝の底のレ

ベルは海抜3.7mである。

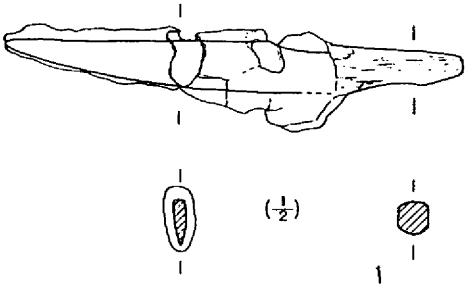
遺物は，検出肩部より高いところを中心にほぼ完形のものを含んで，高台付の椀(**28～41**)・土鍋(**44～47**)などが出土しており，平安時代末から鎌倉時代初頭の頃の時期と考えられる。なおこの溝は新田樋門調査区のD－1に続くと考えられる。（内藤）



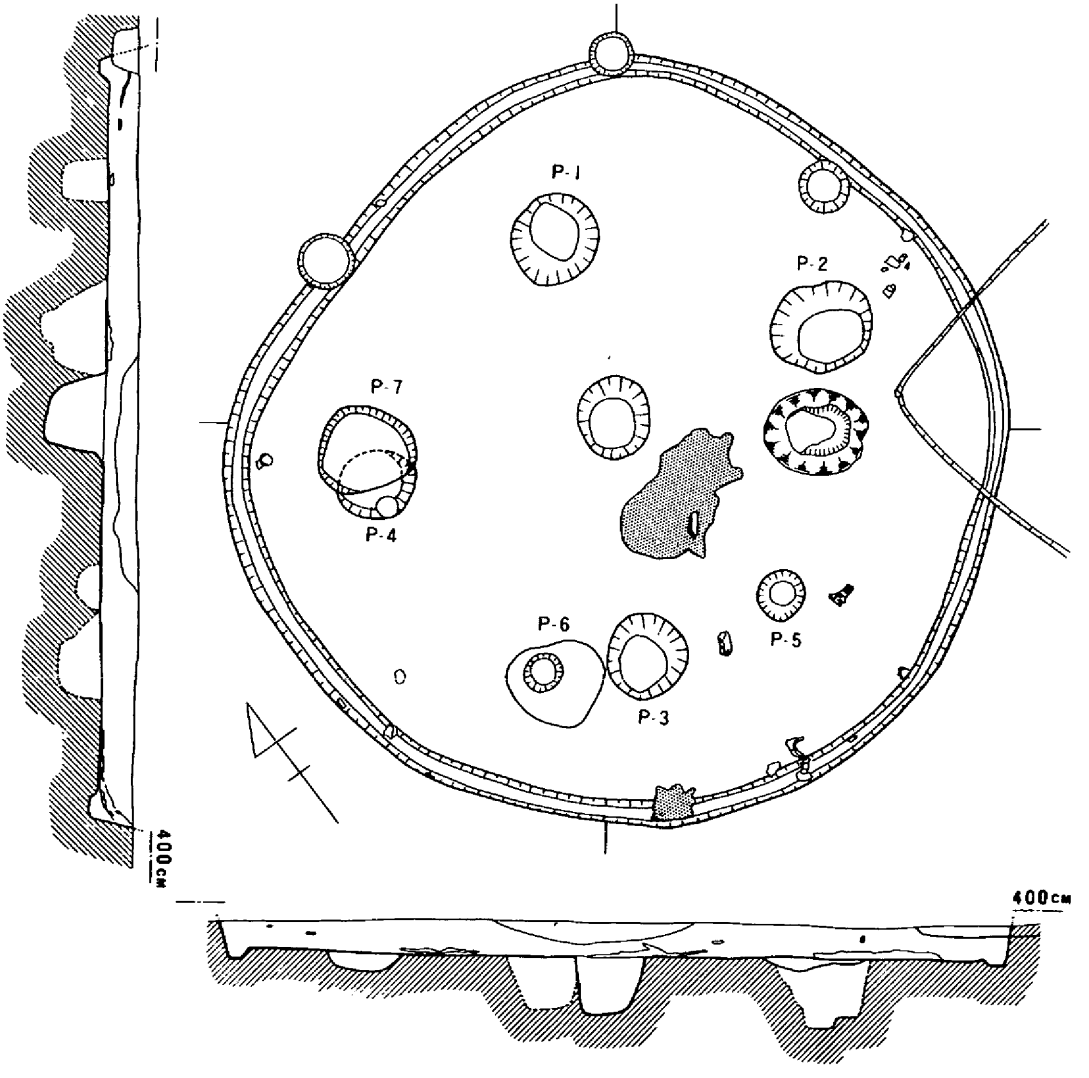
第124図　新田サイフォンD－2断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

住　居　址

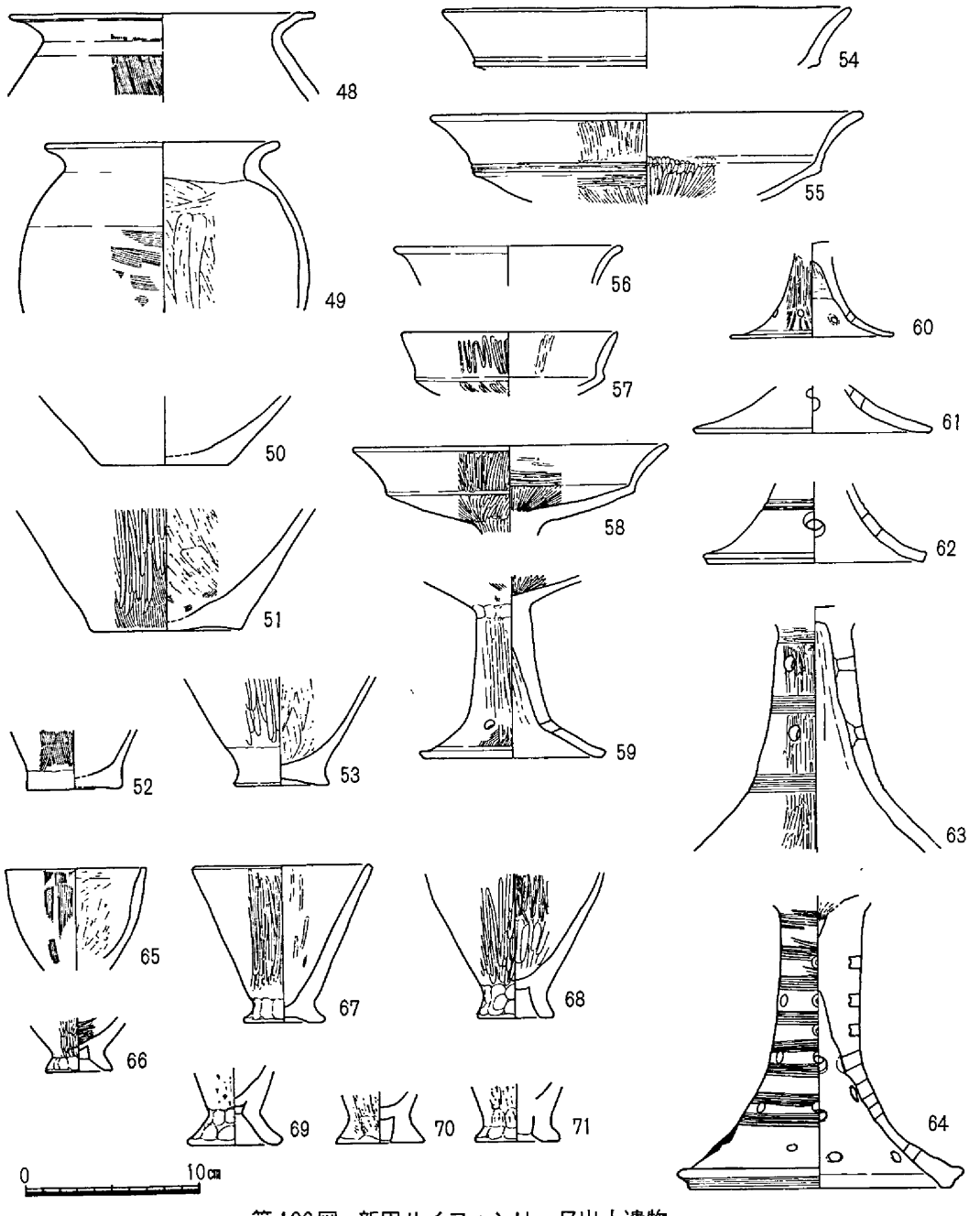
1) H—7



不整円形の竪穴住居址で，直径約 6 m を測り，幅 20cm弱の壁体溝がめぐる。中央には，灰茶褐色粘質土で埋積された 65×58cm，深さ 45cm のピットがあり，その南には 50×110cm の範囲に焼土塊や灰を含む灰黒色土がひろがる。床面から検出できた柱穴と



第125図　新田サイフォンH－7遺構図（1/60）及び出土遺物



第126図　新田サイフォンH－7出土遺物

掘り方は合計7を数えるが，頭初P－1，P－2，P－3，P－4の4本柱であったと考えられる。これらの掘り方内の埋め土は，暗灰茶褐色土で帯黄色土塊を含包し，その中に柱抜き取り孔と思われる径20cm規模の灰茶褐色粘質土を看取できる，などの共通点がみられる。柱間の心々距離は，P－1を起点として時計回りに表すと，240cm，290cm，240cm，260cmである。

その後，P－4の腐朽，損傷あるいは他の理由によって，P－7に取り変えられたことが切り合い関係からわかり，おそらくその時点でP－5，P－6が新たに補強されたのではないかと思われる。したがって第2次の柱はP－1，P－2，P－5，P－6，P－7の5本柱で構成され，上屋構造を支えていたものと思われ，P－1を起点に順回りに柱間を計測すると，240cm，210cm，200cm，230cm，230cmの数値を得ることができる。補強のためにうがたれたP－5，P－6の穴は径が小さく，ともに暗灰色粘質土が充塡され，第1次の掘り方内にみられた黄斑の土塊を含まない。このように建て替えがなされた事実を暗示するかのように，床面の直上には部分的に黄色混入土が薄い層として認められ，2次的に貼り床として整備された可能性を示している。

床面上に接しあるいは床面上25cmの範囲の覆土中から検出された弥生式土器片は第126図に示すとおり，すべて後期前半に含まれ，そのうち高杯**63**，**64**などわずかに古相をとどめるものを除き，百・後・Ⅰ（古相）と百・後・Ⅱ（古相）とに二大別される。

鉄製刀子**1**は住居址南西部の覆土中から検出されたものである。長さ12cmで柄部から先端へむけて4.9cmまで木質が残存している。柄部の断面は不整方形で，刃部は両方から研ぎ出されて鋭い。

2）H－8

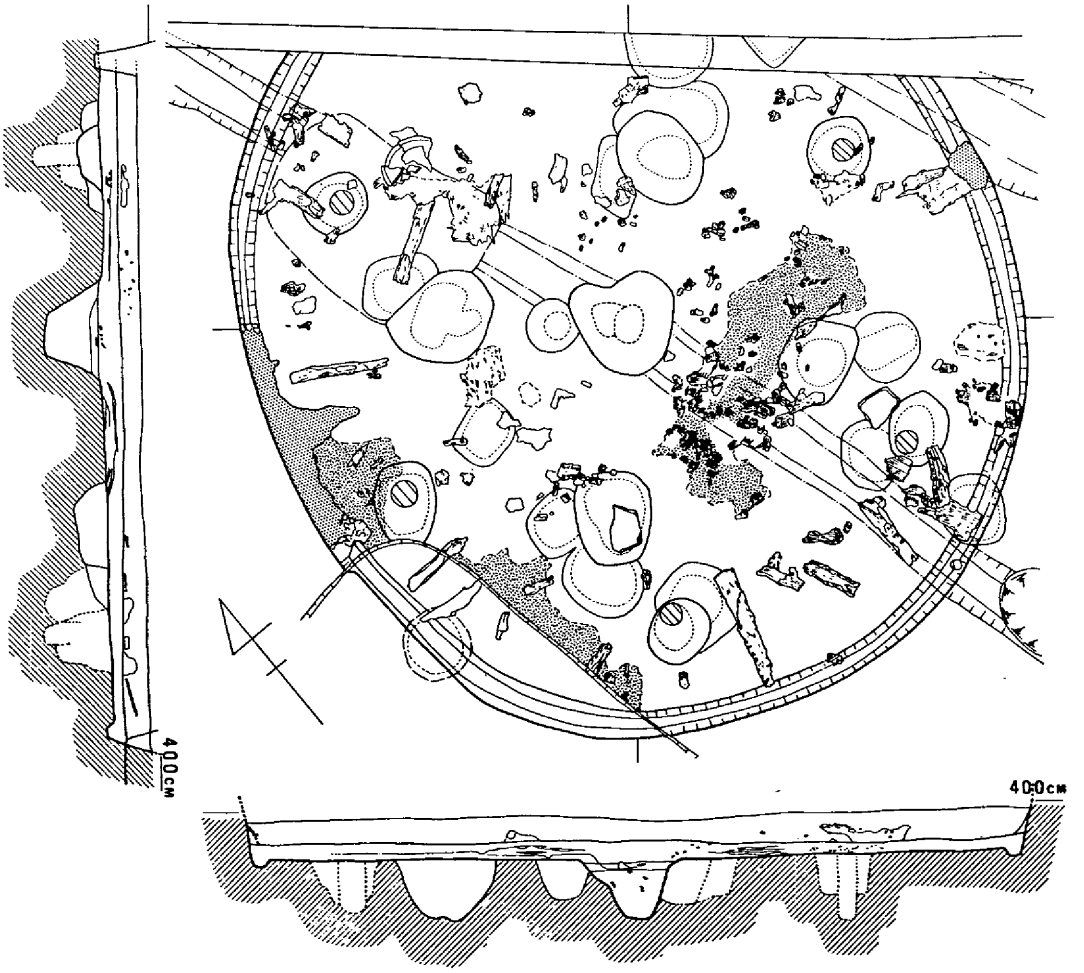
この竪穴住居址の平面形態は楕円形で，短径6m，長径6.7mを測る。中央に不整円形のピットがうがたれ，周辺に幅20cm未満，平均15cm程度の壁体溝がめぐる。柱孔ないしその掘り方は18個所以上も確認でき，これらの切り合い関係や充塡土の相違から数次にわたる建て替えのなされたことをうかがわせる。縦横断面にも，黄褐色の貼り床層が数cmを単位として幾層も看取でき，中央ピットの南西部においては，木炭層をはさみ5層もの床面が確認できる。この住居址が放棄された原因は火災によることが明らかで，径12～13cmの炭化丸太材が放射線状に倒壊している点がまず注目される。これらは，主柱を含む軸組みの上にのせられていた梠材と考えられ，150～180cmの間隔を示している。また東・西および北側の一部では，壁体溝に接し，壁体溝をおおって，炭化した板材と焼土がおり重なるような状態で検出され，家屋周囲の下半部または下位の部分の構造が，板材と壁土からなるという予測材料をえることができた。そして梠を組み合せた叉首構造の小屋組みのうえには，茅が葺かれていたことを示唆するかのように，中央ピット周辺の3箇所で，それらしい細い炭化物の密集帯を検出している。こうした最終段階での上屋を支えた主柱は，P－1，P－2，P－3，P－4，P－5，および調査対象地外に入る未検出の他の一本を含む6本柱であったと思われる。検出できた5本の柱穴部は，掘り方と土におきかわった柱孔とが明瞭で，柱孔部の土は灰褐色粘質土で中に木炭粒を含むという特徴をもつ。これらの柱間の計測値はすべて等しく230cmである。6本の主柱の上部に組まれた桁材と梁材は完全に燃焼しつくしたものか，検出炭化材のうちこれと断定すべきものが見あたらない。

焼失した最終段階以前の主柱は，P－6，P－7，P－8，P－9の4本柱であったと思われる。埋め土は共通して粗砂を含む灰黒色土で，抜き取られたものか柱孔部は不明である。切り合い関係に注目すると，他の穴を切ってはいるが，他の穴によって切られることがない点，およびP－6の埋土の上面が最終住居址の床面でそこに密着して25cm×35cm大の扁平な石が据え置かれているなど，これ

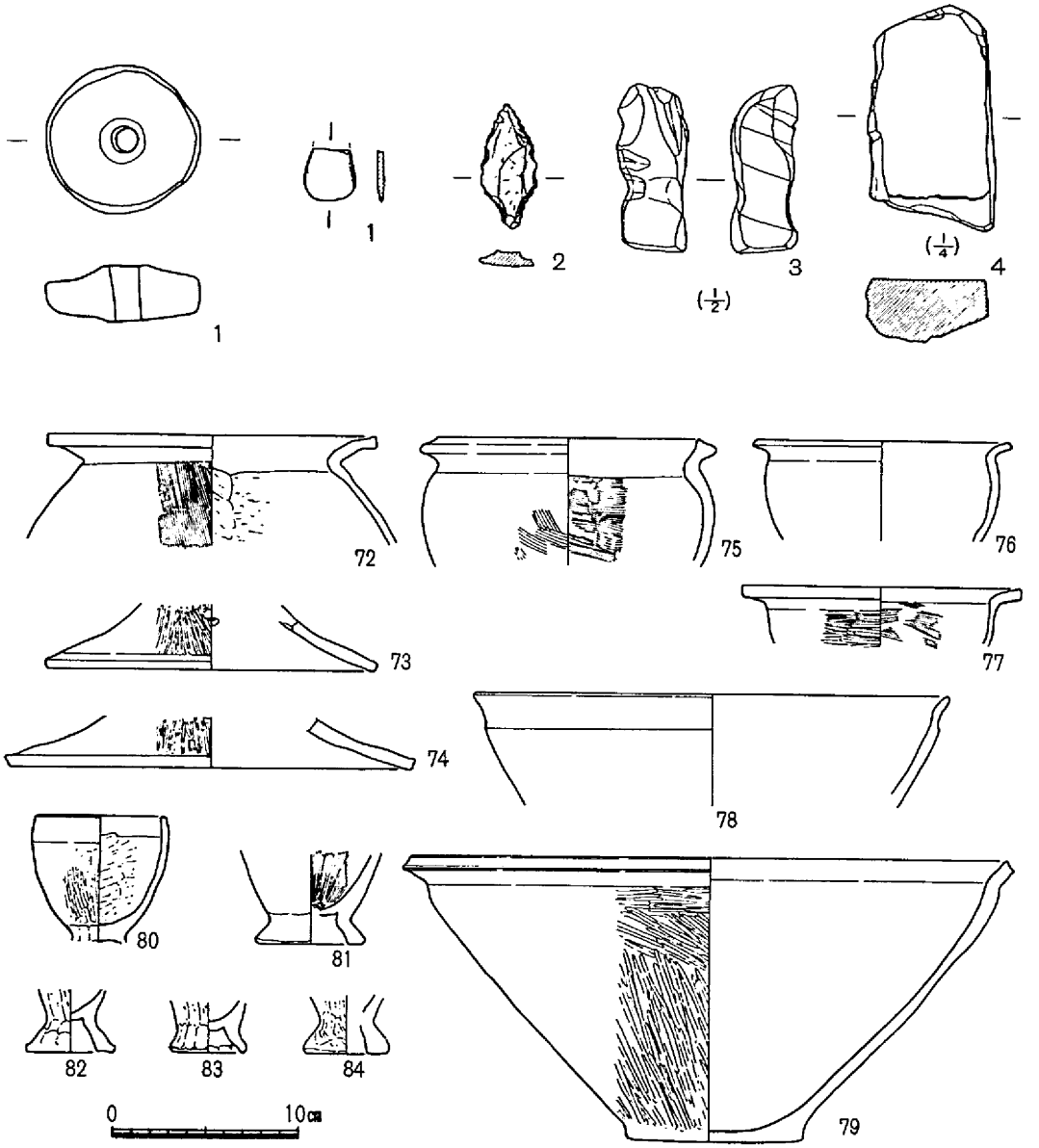
ら4穴が焼失前の住居址の主柱位置を示すものと考えられる。中央ピットの底部の切り合いを思わせるクセはこうした建て替えに即応するものであろう。さらに，これら4穴に対応してそれぞれ1ないし2穴が切られている事実が物語るとおり，切断をうけた穴相互の照応関係が鮮明でないにしろ，より遡る主柱の存在したこともまた明らかである。したがって，建て替えの回数は少くとも3回または3回以上あったと推定してさしつかえない。

出土した弥生式土器片は第128図に示すとおりで，図化できる合計13点のものはすべて弥生後期，前半の中におさまるが，鉢78は口縁部の外方への張りなどに古い要素をとどめ，高杯脚部片（**73・74**）の脚端部のおさめ方は百・後・Ⅱを示している。全体として百・後・Ⅰから百・後・Ⅱにかけて拡張された住居址と考えられる。

ひきつづき，共伴した若干の遺物を紹介しておこう。**1**は土製紡錘車である。色調は赤褐色を帯び，長径4.2㎝，短径4.0㎝，中央部の長さ1.5㎝，重さ24.7ｇで，中央の小孔は径7㎜を測る。甕ま



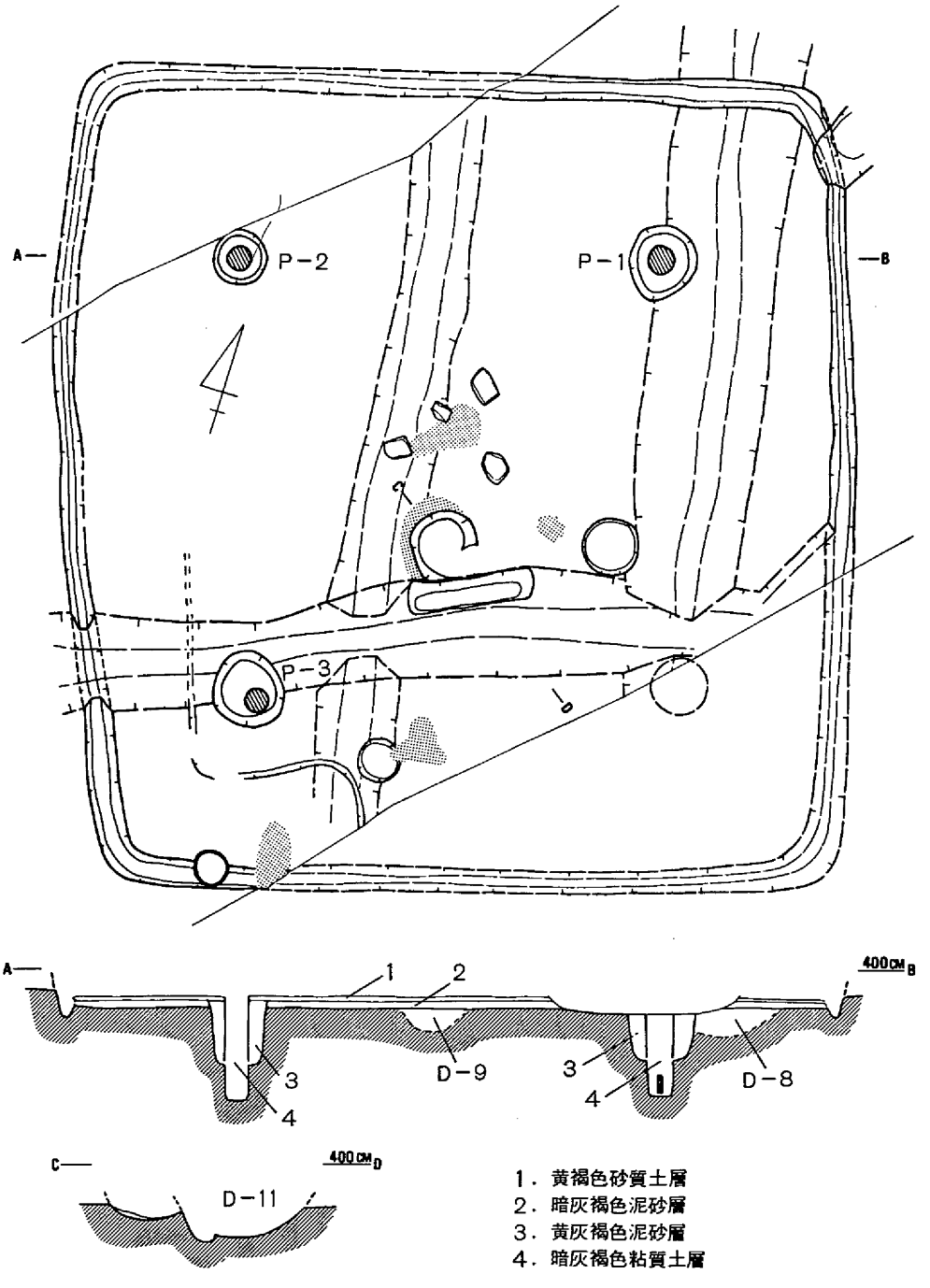
第127図　新田サイフォンH－8遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）



第128図　新田サイフォンH－8出土遺物

たは壺の胴部破片を２次転用したものではなく，最初から紡錘車を目的に使われたものである。石器１はのみ状石器刃部断片で，幅1.5cm，残存長1.5cm，厚さ1.8mm，重さ1.2gを測る。刃部は両側から鋭く研ぎ出され，側面も明瞭な稜をもつ。全体的によく研磨され，表裏面ともに擦痕がみられ裏面では横位に顕著である。２はサヌカイト製の有茎式石鏃で，六面体に突基を有し，重さ2.3gをはかる。主要剥離面が両側にみられ，裏面の左側縁に細調整痕を看取できる。３は暗灰色を呈した軽石で，6.8×2.9cm，厚さ1.5cmを測る浮子である。表面の凹凸がはげしく，中央横位に２条のひもずれの

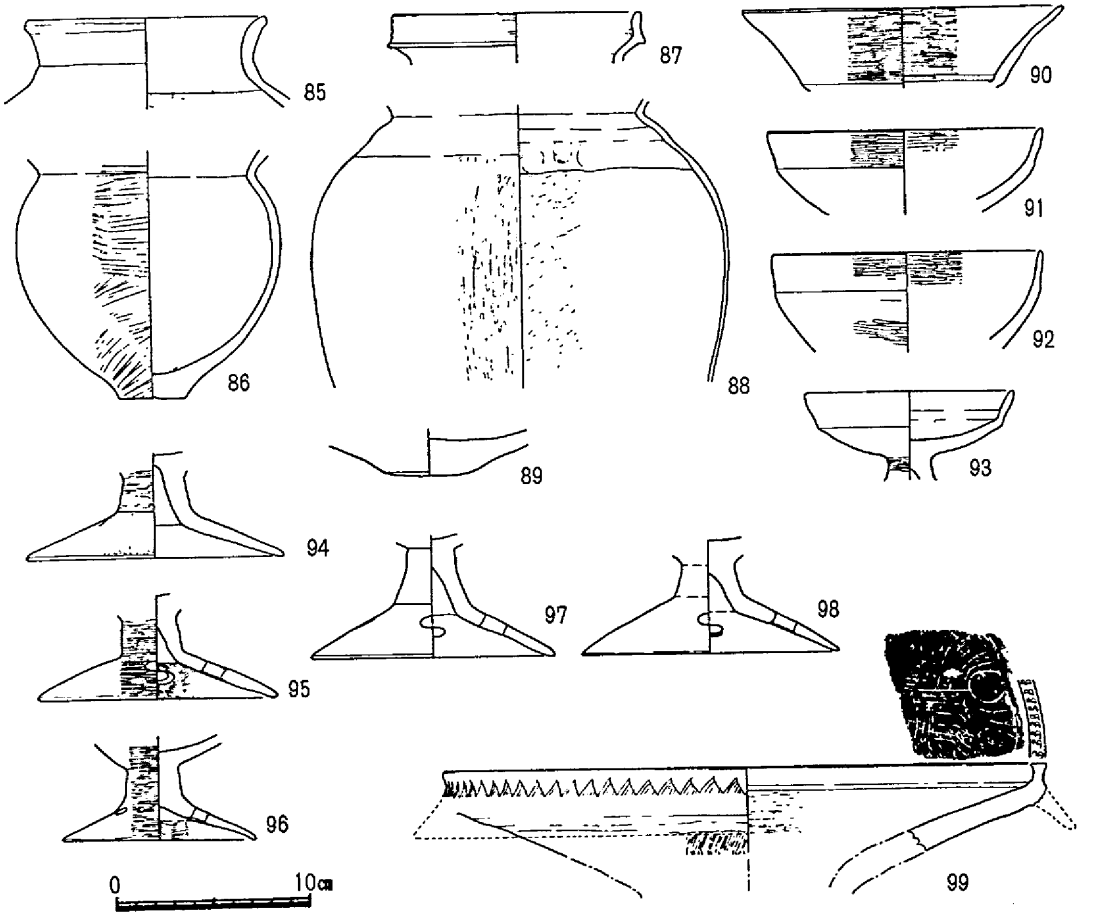
跡がみられる。類例が倉敷市二子，御堂奥遺跡（註23）から検出されている。**4**は12.5×6.7㎝，厚さ3.5㎝の砥石で，表面は平滑によく磨かれ，中央部の3.2×4.5㎝の範囲の磨耗が特に著しい。裏面は，剝離したものか本来そうであったのか自然面そのままで人工的な仕上げ痕跡はみられない。（葛原）



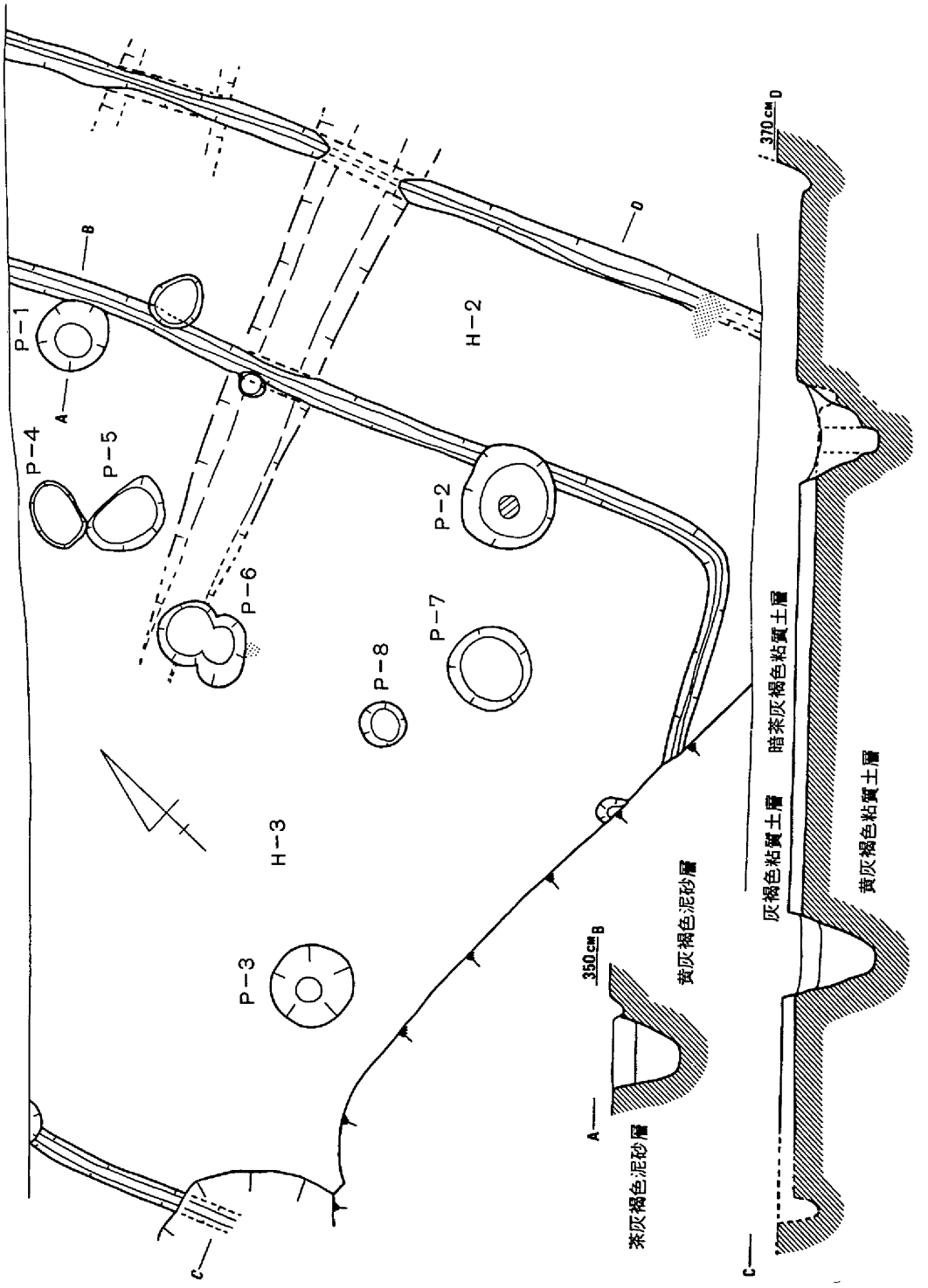
第129図　新田サイフォンH－1遺構平・断面図（$\frac{1}{80}$）

3) H—1

この住居址は，３区のほぼ中央に位置し，住居址南側の一部をD—11により切られている。この住居址の北西部と南西部は，調査区外で検出されていないが，平面プランは，一辺約９ｍの隅丸方形と推定される。現存壁高は17cmを測り，住居址内に幅30cm・深さ15cm程の壁体溝がめぐる。柱穴は，径65～80cm・深さ100cmを測るもの３個（P—１・P—２・P—３）を検出したが，南東部の調査区外にあと１個想定される。P—１・P—２の底には，柱材が残っており，P—３からは柱痕跡が認められた。柱間は，P—１とP—２が480cm，P—２とP—３が500cmを測る。またこれらの柱穴から壁体溝までの距離は約200cmである。住居址の中央には，焼土を伴った径75cm・深さ30cmの土壙が検出されたが，この土壙の南側はD—11により切られている。床面には，黄褐色砂質土の貼り床がみられる。また南西隅の壁体溝から内側に90cm程は，床面が約５cm高くなっているが北側をD—11に切られてその広がりは不鮮明である。床面中央等には，焼土や炭が認められ，また10cm程の角礫数個が床面の中央付近に散在して認められた。



第130図　新田サイフォンH－１出土遺物



第131図　新田サイフォンH－3・H－2遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）

遺物のうち**85**～**88**・**90**・**92**・**94**・**96**～**98**は床面から出土したもので，**86**のようにほぼ完形のものもある。**93**・**95**は貼床の中から，**89**はＰ－３から，**91**は北側壁体溝から出土したものである。また覆土から出土した**99**は，直弧文が箆描きされている。

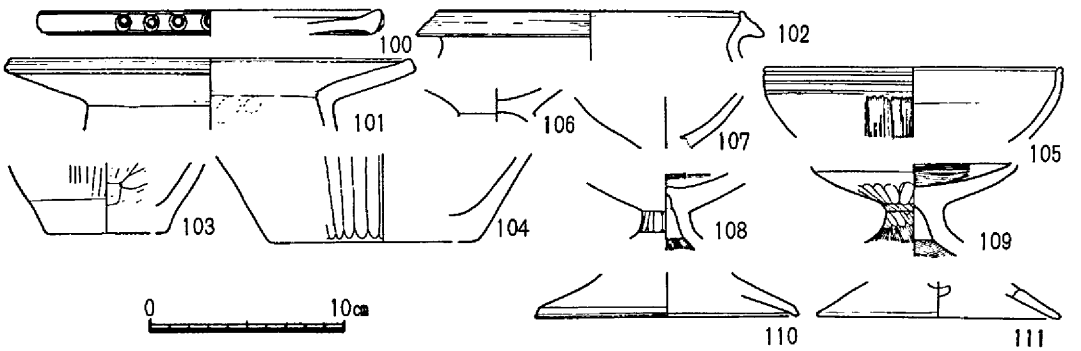
出土した土器から，百・古・Ⅰの時期と考えられる。

4) H—3

この住居址は，２区から３区にかけて検出されたもので，Ｈ－１から2.5*m*西に位置し，南西部は井戸－２および池状遺構に切られ，北側は調査区外に及んでいる。井戸－２の北に延びている溝は，そのレベル・規模からこの住居址の西側壁体溝と想定され，この住居址の平面プランは，東西で7.5*m*を測る隅丸方形と考えられる。現存壁高は約15*cm*を測り，幅30*cm*・深さ17*cm*程の壁体溝が巡る。床面は著しく削平を受けているが，北側で黄褐色砂質土に茶灰色土の混じった貼り床が認められた。柱穴はＰ－５・Ｐ－７の位置に想定されるが，検出された柱穴状遺構の床面からの深さは，Ｐ－４：10*cm*・Ｐ－５：12*cm*・Ｐ－６：18*cm*・Ｐ－７：20*cm*・Ｐ－８：23*cm*といずれも浅く，この住居址の柱穴とは断定し難い。

遺物の**103**・**110**は床面から，**100**～**102**・**105**は貼り床から，**104**・**106**～**109**・**111**は覆土中からそれぞれ出土したものであるが，いずれも口縁部や底部等の細片である。

以上，出土遺物や，この住居址が南西部を井戸－２（百・古・Ⅰ）に切られ，上部をＨ－２（百・古・Ⅱ）に切られていることから，この住居址は百・古・Ⅰの早い時期と考えられる。



第132図　新田サイフォンＨ－３出土遺物

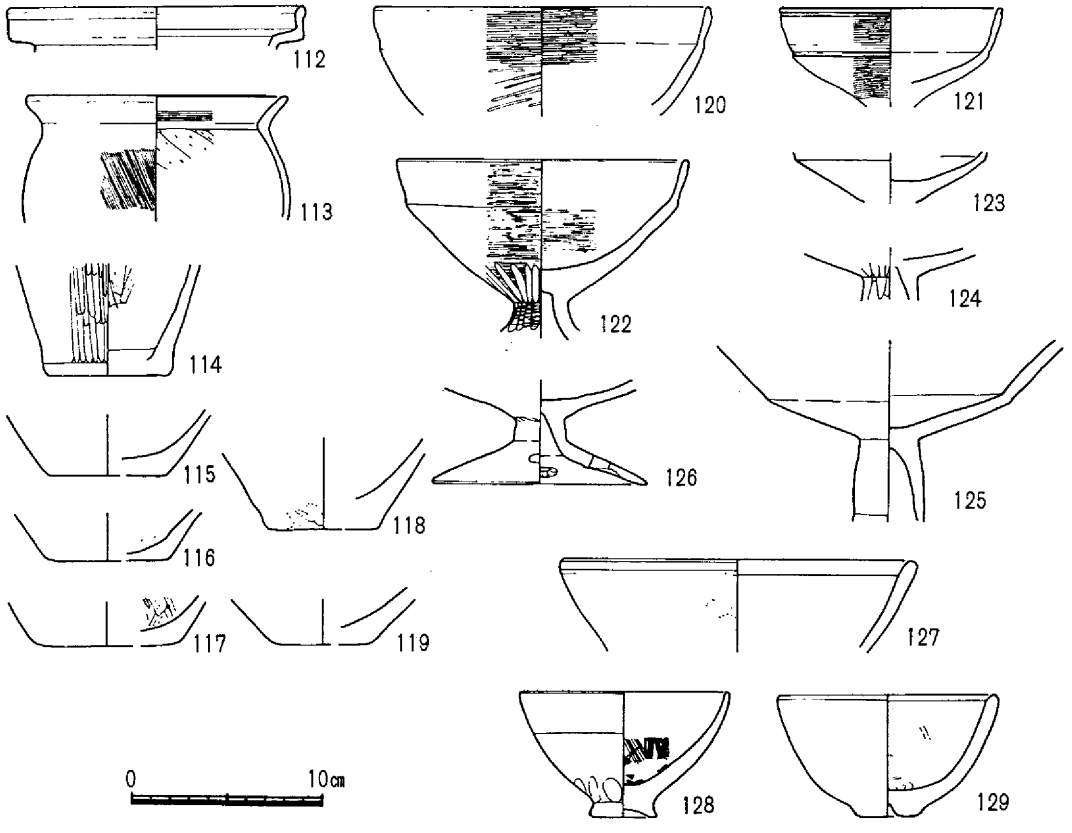
5) H—2

この住居址は，２区から３区にかけて検出され，東側の壁体溝（幅約25*cm*・深さ約10*cm*）は，Ｈ－１の西20～50*cm*のところにある。住居址の西部は，後世の削平を受けており，また南北は，調査対象区域外に及んでいる為，全体の規模・形態が判然としない。現存壁高は約25*cm*を測る。床面北側では黄褐色砂質土の貼り床が認められる。柱穴は，Ｐ－１（径70*cm*・深さ57*cm*）・Ｐ－２（径95*cm*・深さ70*cm*）・Ｐ－３（径75*cm*・深さ70*cm*）の３個が検出された。Ｐ－２には柱痕跡が認められる。柱間

は，P－1とP－2が420cm・P－2とP－3が460cmを測る。またP－1・P－2から壁体溝までは230cmを測る。

遺物のうち，**113・118・123・124・125**は床面から，**112・115・116・119・120**は覆土から，また**114**は壁体溝から，**117・122・129**はP－1から，**121・126**はP－2から，**127・128**はP－3から出土したもので，柱穴から出土したもの以外はいずれも細片である。

出土した遺物から，百・古・Ⅰの時期と考えられる。　（内藤）

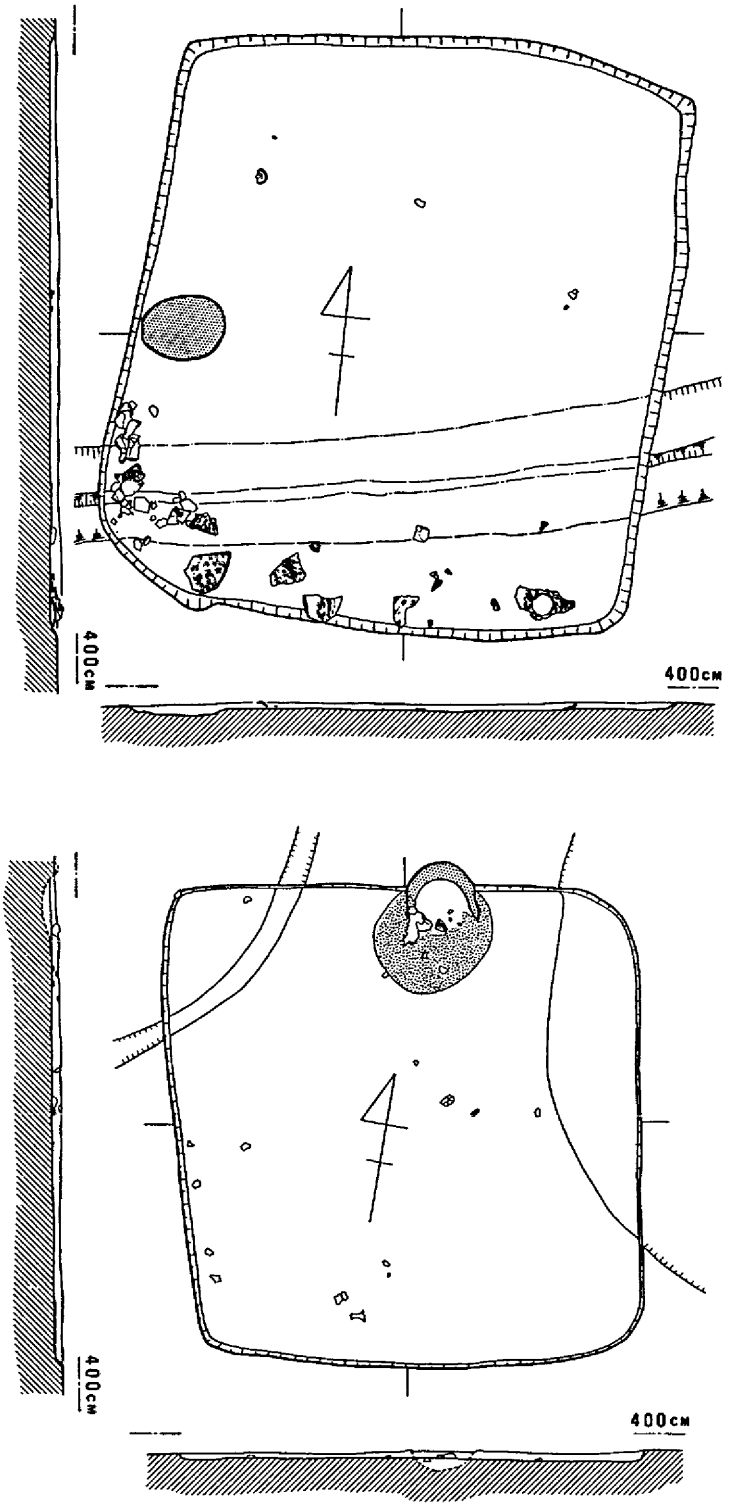


第133図　新田サイフォンH－2出土遺物

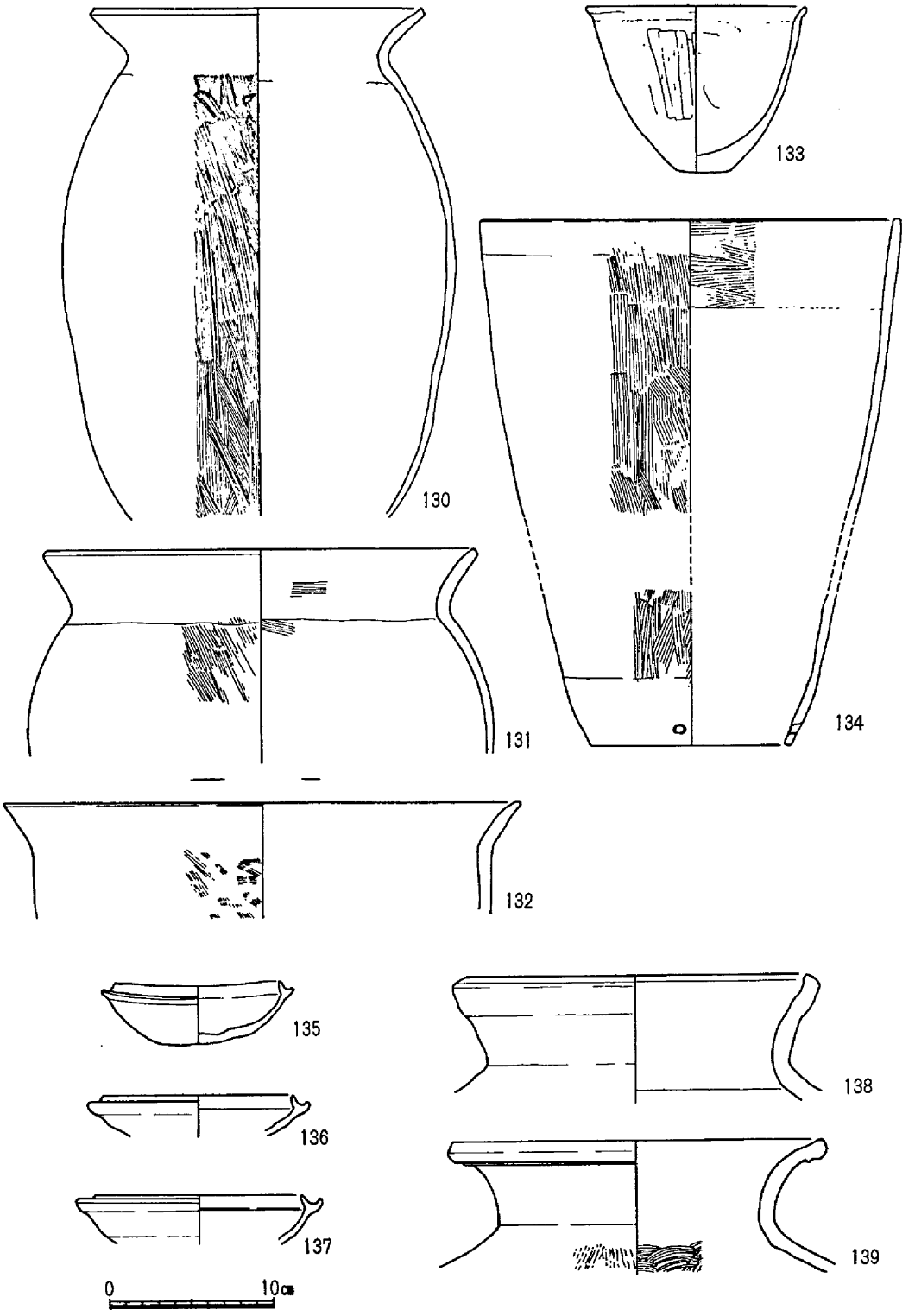
6）H—5

各辺，各隅とも多少いびつでありながら，隅丸方形の形態をとる竪穴住居址である。H－6と比較して，規模がやや大きい点を除くと，基盤層，埋土，残存度など大差なく，柱の掘り方および柱孔の認められない事実などよく類似している。住居址西辺のほぼ中央のやや西寄りに底部のわずかに窪んだ0.5×0.65mの焼土面がみられる。これは，作り付け竈の側壁を欠いた底面残存部と思われる。

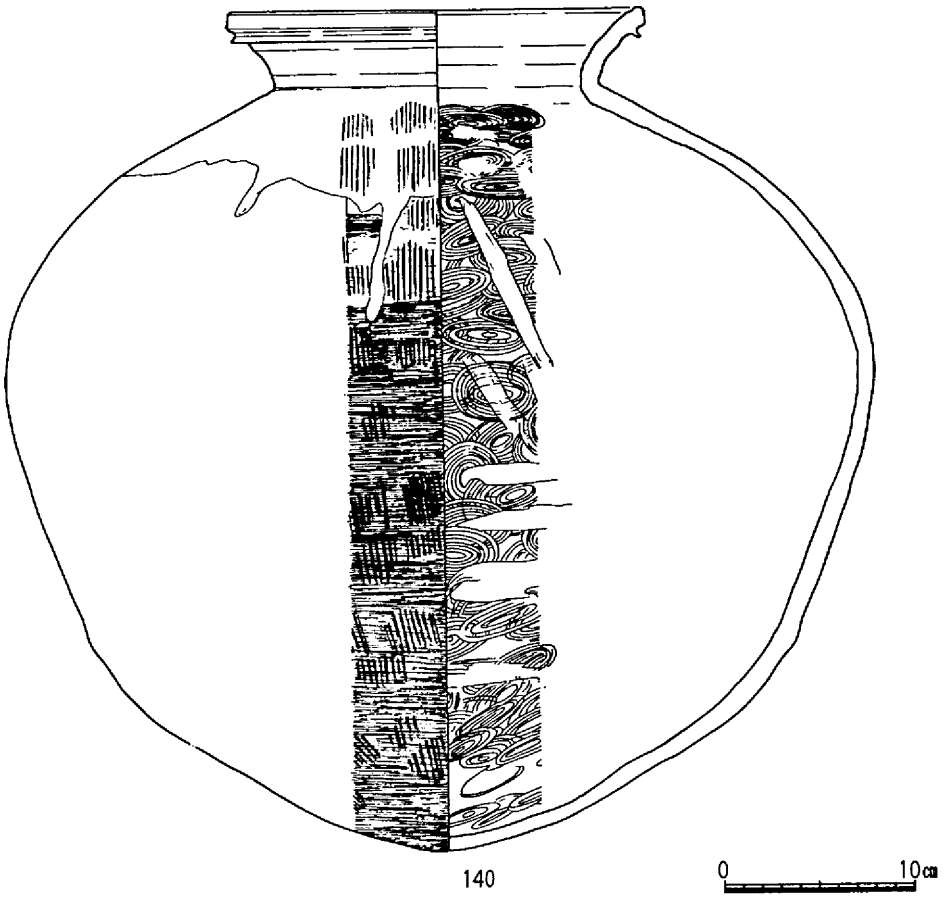
共伴の遺物は，床面に接して検出されたおびただしい数の須恵器片ならびに土師質土器片で，これ



第134図　新田サイフォンH－5(上)・H－6(下)遺構平・断面図 ($\frac{1}{60}$)



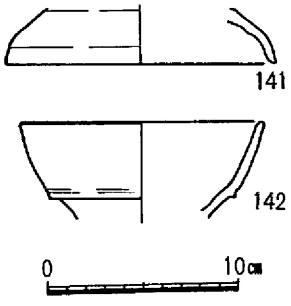
第135図　新田サイフォンH－5出土遺物（1）



第136図　新田サイフォンH－5出土遺物（2）

らの形態・製形などからする年代観は6世紀後半である。

7）H—6



第137図　新田サイフォン
H－6出土遺物

一辺350～380cmの隅丸方形の竪穴住居址である。茶褐色土を基盤層となし，内に暗茶灰色土が充填されていたので，住居址肩部を明瞭に検出できたが，床面からの壁体残存高はわずか5cmばかりである。主柱の位置は，通常みられる四隅四本または中央二本一対を，念頭におきつつ検出を進めたにもかかわらず，的確なそれを把握することができなかった。検出作業に見落しがなければ，柱底部が住居床面に密着していた予想を立てる以外にない。住居址北辺の中央やや東よりに作り付け竈が構築され，それは赤褐色焼土帯が外方へ脈を描いて突出し，内側にひらいて終る形状をとどめ，内径約40cm

を測る。そして焚口部を中心にして半径30～40cmの範囲に木炭粘を含む灰層がひろがっていた。

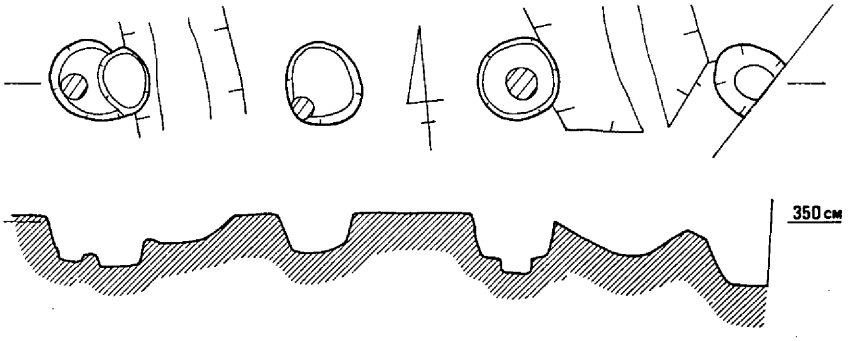
床面直上ないしいくぶん浮離して出土した遺物は，須恵器片6，土師器片12，鉄滓および小石若干で，共伴遺物の示す年代観は6世紀後半である。（葛原）

8）柱列

H－1の中央部を北西から南東へ，D－9とD－8を間にはさんで4個の柱穴が，ほぼ直線的に並んでいる。このうち西側の3個は，柱痕跡を残し，検出面から深さ約50cmを測る。また柱痕間の距離は各々180cmで，これらは柱列として考えることができる。東端の柱穴は，深さ65cmとやや深く，柱痕跡も認められず，性格が異なっている。

なお，この柱列には，対応するものがなく，遺構の形態は不明である。

これらの柱穴から出土した遺物はないが，柱穴がD－8（百・後・Ⅲ）を切り，H－1（百・古・Ⅰ）に切られていることから，百・後・Ⅲから百・古・Ⅰの間の時期と考えられる。（内藤）



第138図　新田サイフォン柱列遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）

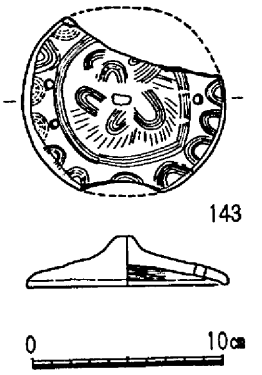
土　　壙

1）土壙—1

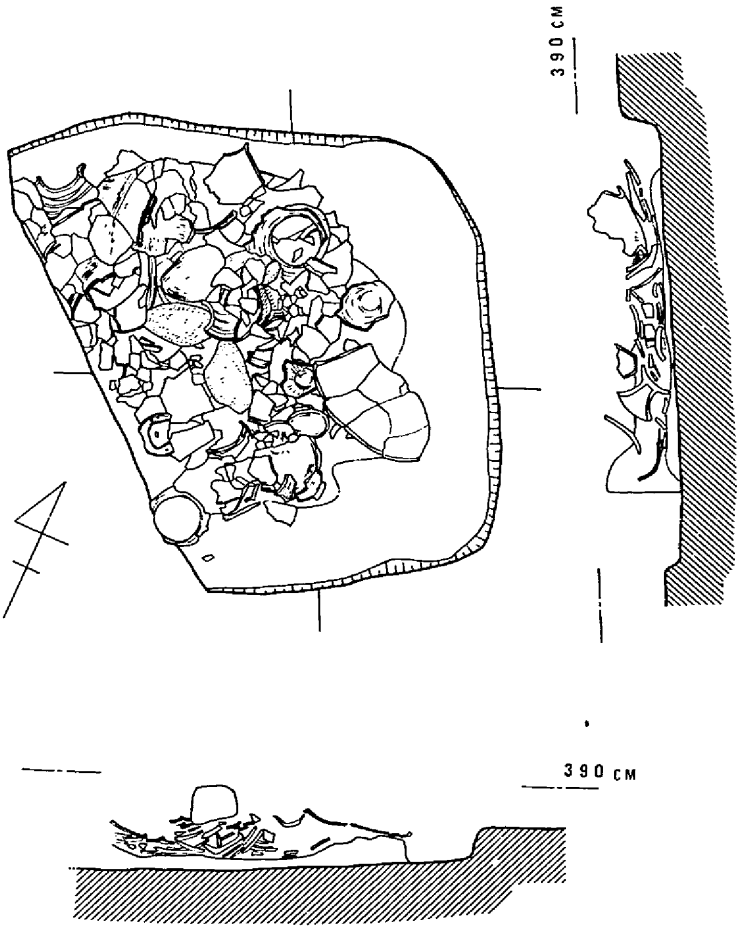
平面形態は，不整長方形で，短辺110cmに対し長辺は150～200cmの中におさまるものと思われる。工区の関係上，土壙長辺の約½程度を，しかも斜めに切って，検出したにすぎない。土壙の床面は，検出した範囲内においてはほぼ平担で，床面から肩までの残存高が10cmまたは10cm未満である。床面には，肩部直下の10cm～30cmのベルト状の範囲を除いて，中央部に，数mmの厚さで炭化物堆積層がみられ，その上に厚さ数cmの淡赤褐色の焼土あるいは焼土塊が堆積している。こうした層位関係とともに，床面および側壁には受燃した痕跡がみられない点を考慮すれば，これら炭化物や焼土塊は二次的に投棄されたものとみなしてよい。焼土の上部からは，焼土と密着しておびただしい弥生式土器片，人頭大の石2と拳大の石1，および人骨3片が検出された。弥生式土器片は部分的に細片を含むとは

いえ，全体として破損度が小さく準完形品に近いものが量的に多く，比較的磨耗をうけていないために充分器形復原が可能で，また整形技法などもよく観察できる。これらはすべて百・後・Ⅰに属する好良な一括土器で，器種は壺12・甕18・高杯7・鉢2・その他2などに分類できる。

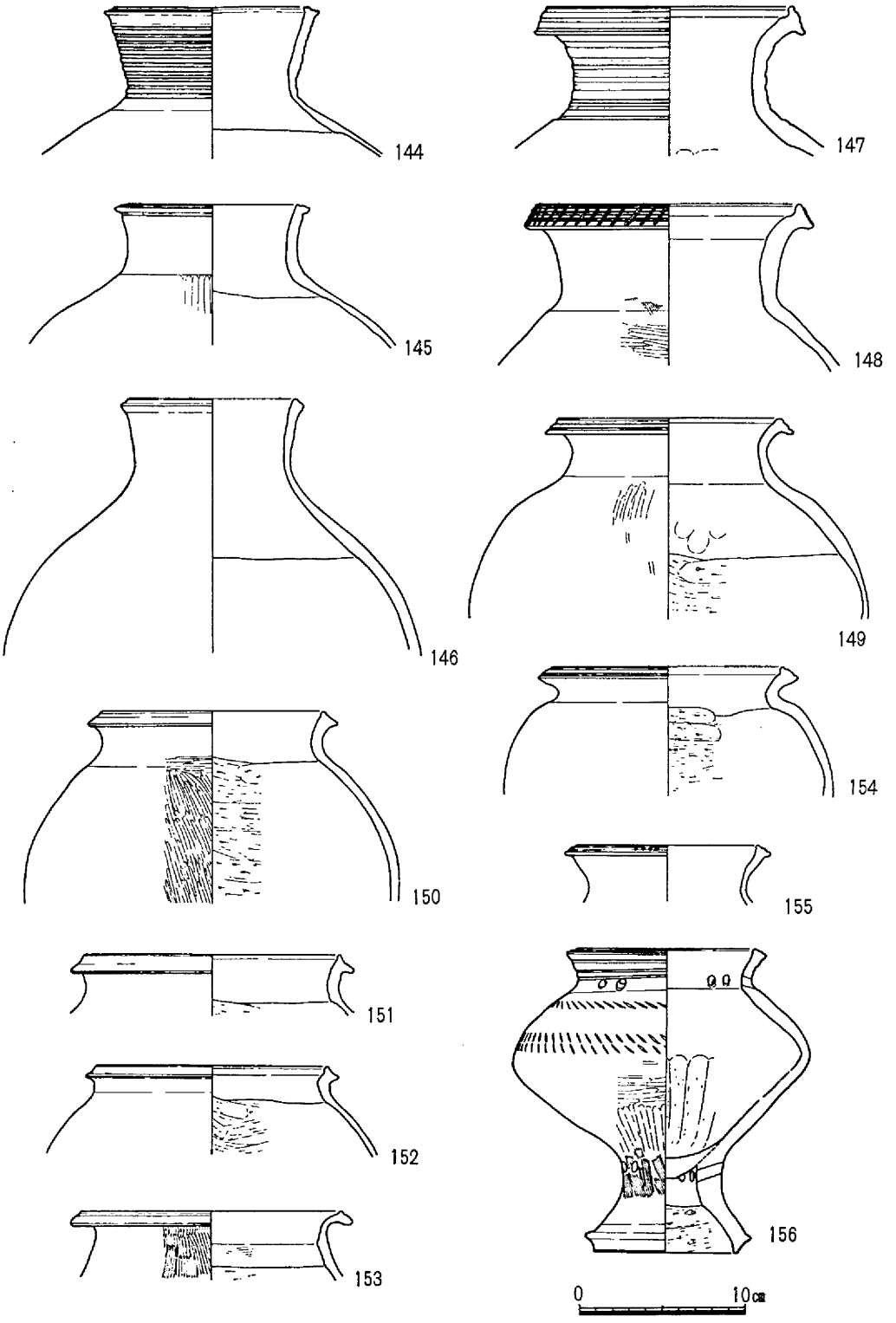
なお，柱穴を伴わない土壙が当時，どのような目的で使用されたのか，その類例はかならずしも多くない。強いてあげれば，この遺跡に近接した北方約2Kmの雄町遺跡（註24）や，旭川の左岸にある南方遺跡（註25）などから相当数検出され，「灰穴」とよばれた遺構がこれにもっとも近い。ただし，「灰穴」は文字どおり灰白色または灰黒色の厚い灰層が穴内に堆積しているので，性格が同一の穴とも断定しえない。（葛原）



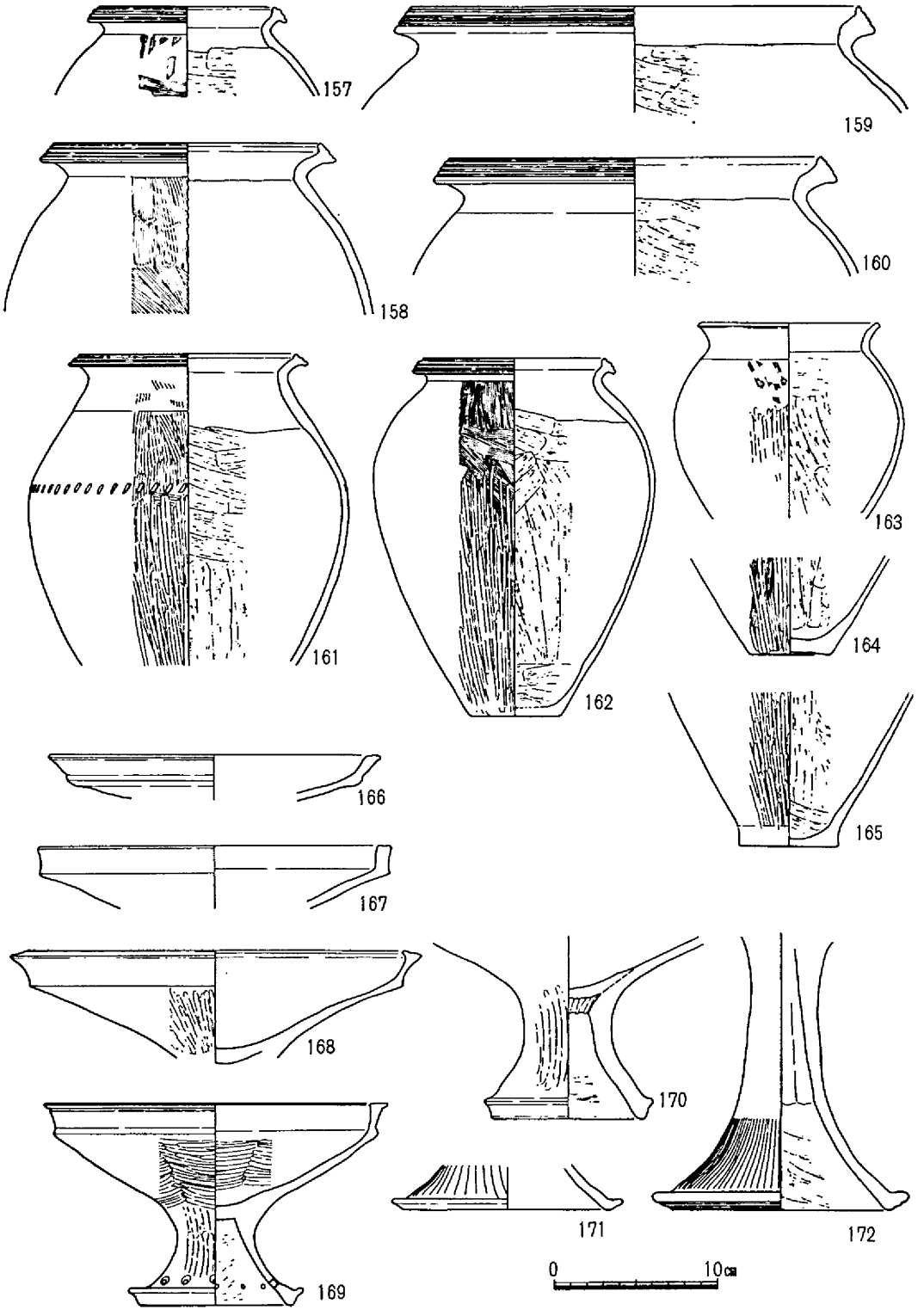
第139図　新田サイフォン土壙1出土遺物（1）



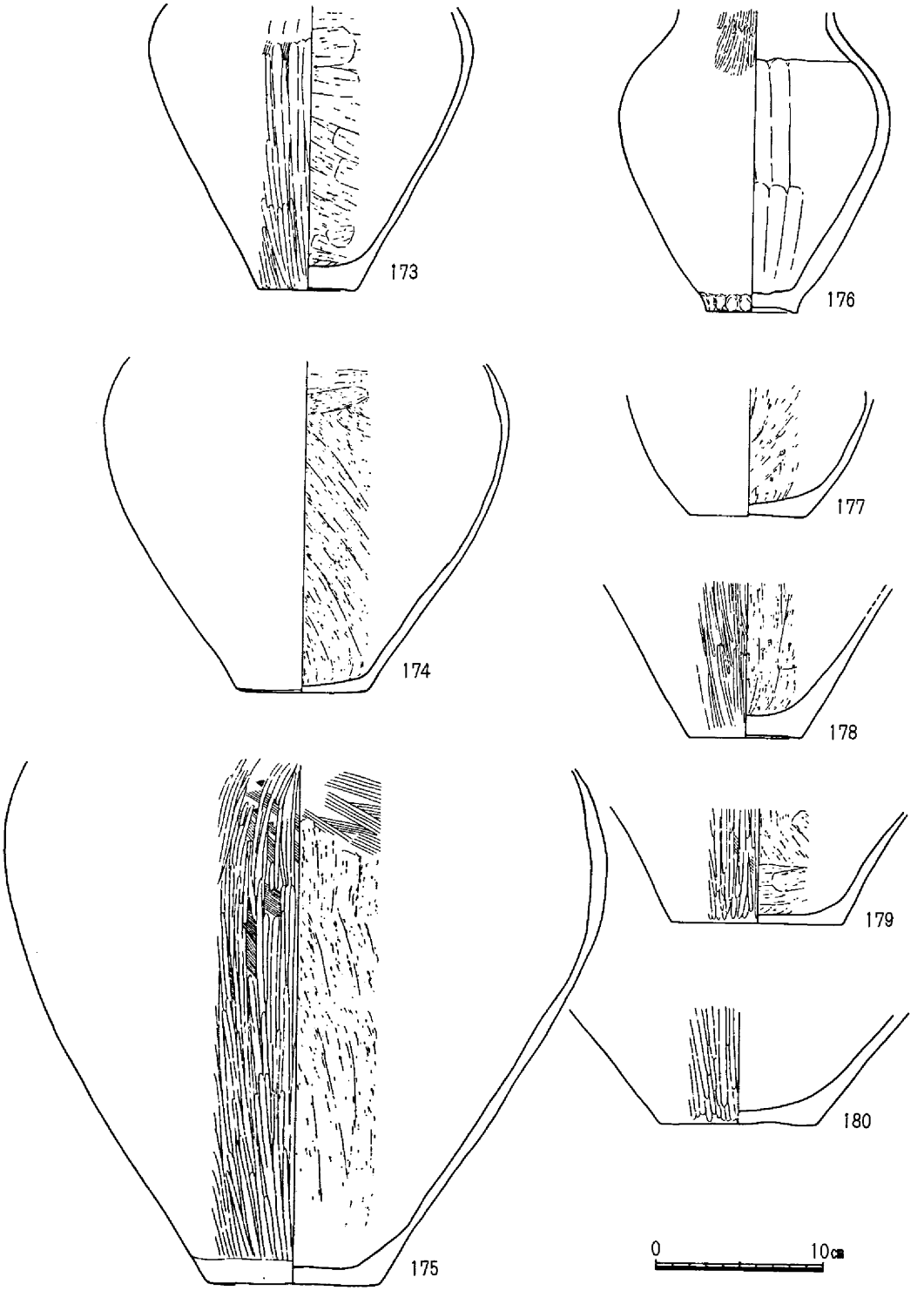
第140図　新田サイフォン土壙1遺構平・断面図（$\frac{1}{20}$）



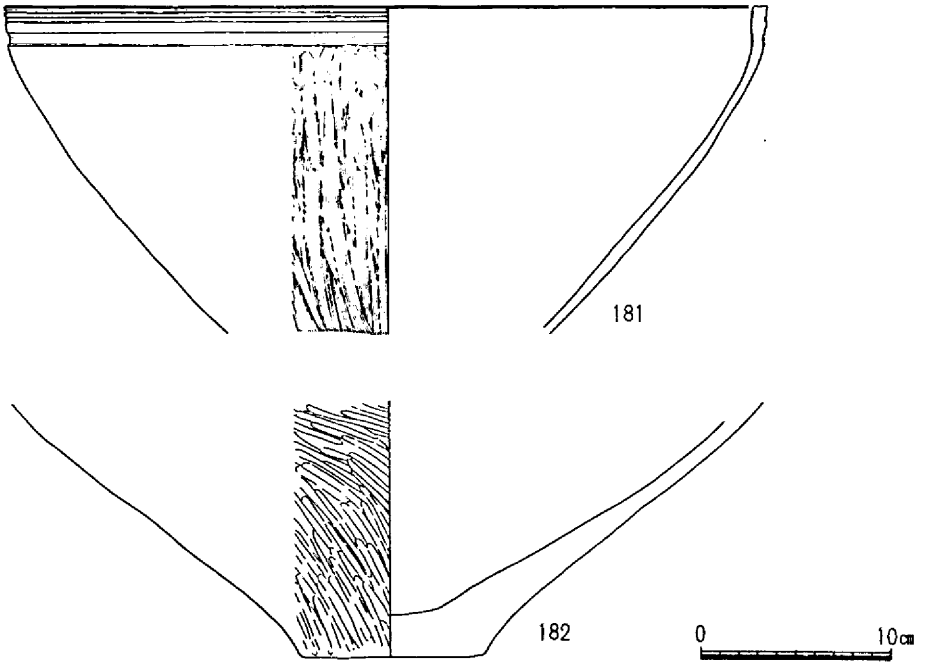
第141図　新田サイフォン土壙1出土遺物（2）



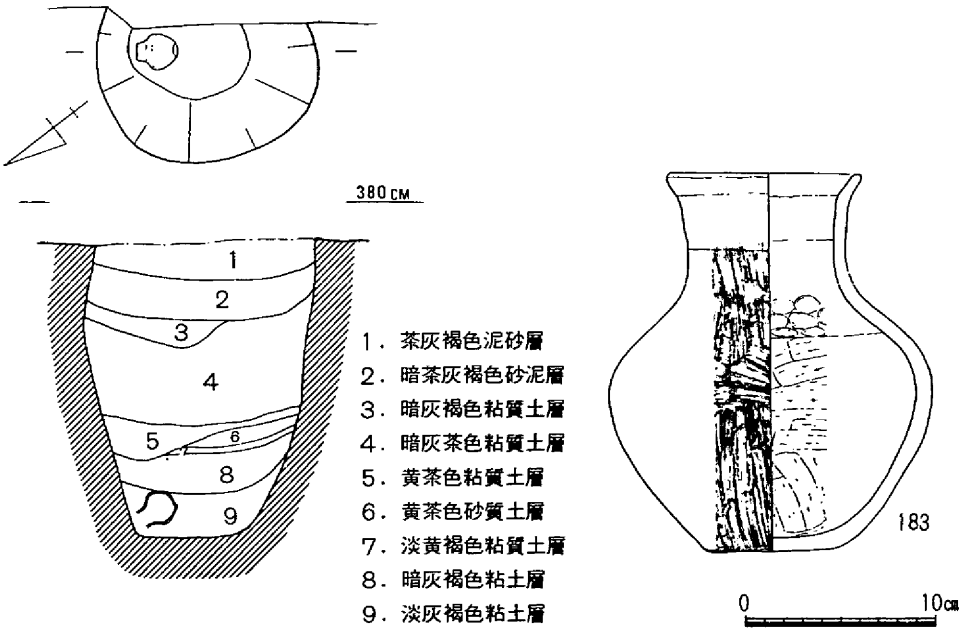
第142図　新田サイフォン土壙1出土遺物（3）



第143図　新田サイフォン土壙1出土遺物（4）



第144図　新田サイフォン土壙-1 出土遺物（5）



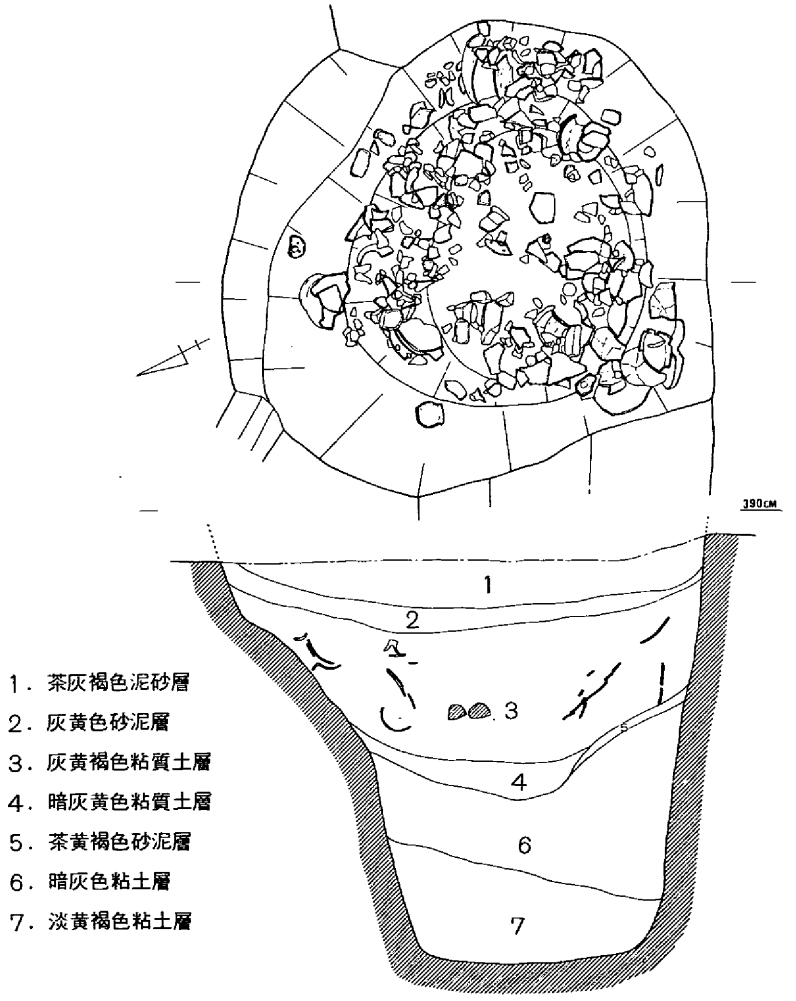
第145図　新田サイフォン井戸－1遺構平・断面図（$\frac{1}{40}$）及び出土遺物

2）井戸—1

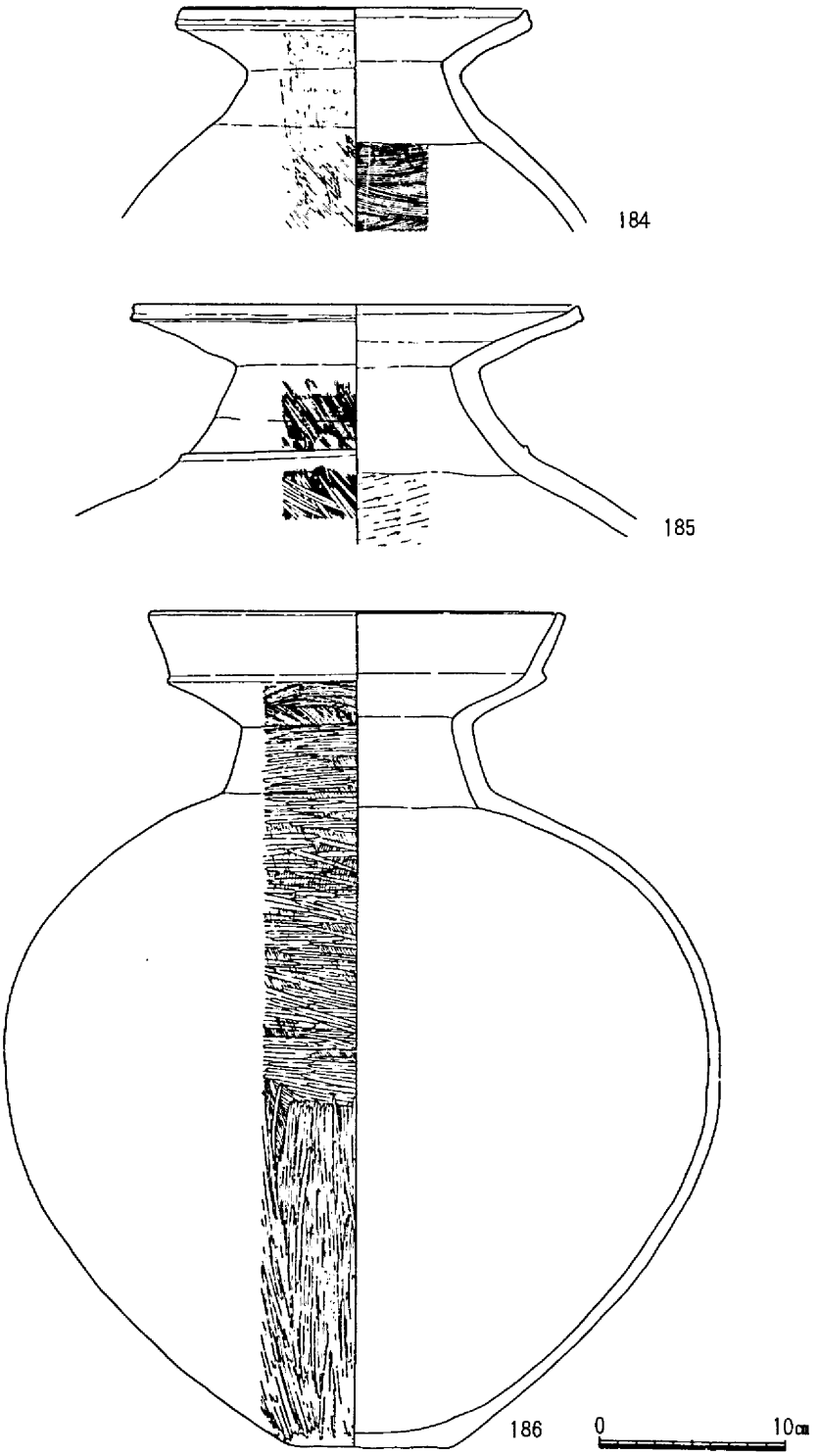
D—7の東側の東壁際に，全体の⅔ほど検出された。直径約105cmで円形を呈す。深さは約155cmを測る。堆積層は，第1～9層で，最下層には完形の直口壺183があった。第1～8層からは，ほとんど出土遺物はなかった。時期は，百・後・Iと考えられる。（中野）

3）井戸—2

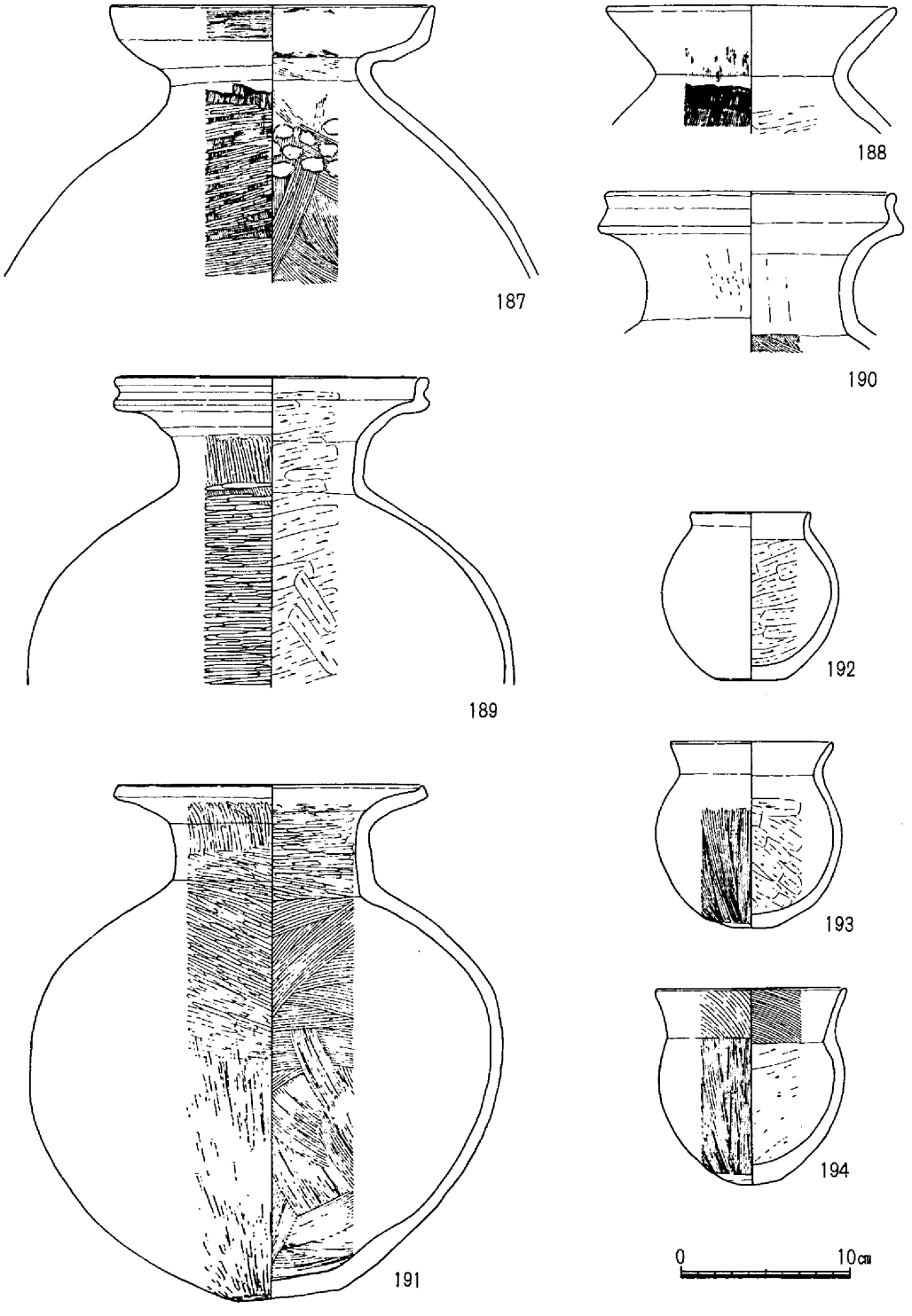
調査区中央にH—3，H—4を切って検出された。東側の一部は，池に削平されている。直径約195cmの円形を呈す。深さは，170cmを測る。北側は，上部が擂鉢状になり，さらに角度を変えて底部に至る。南側は，上部から底部に直線的に掘られている。堆積層は，大きく第1～第7層に分けられる。図示したほとんどの土器は，第3層から出土している。（中野）



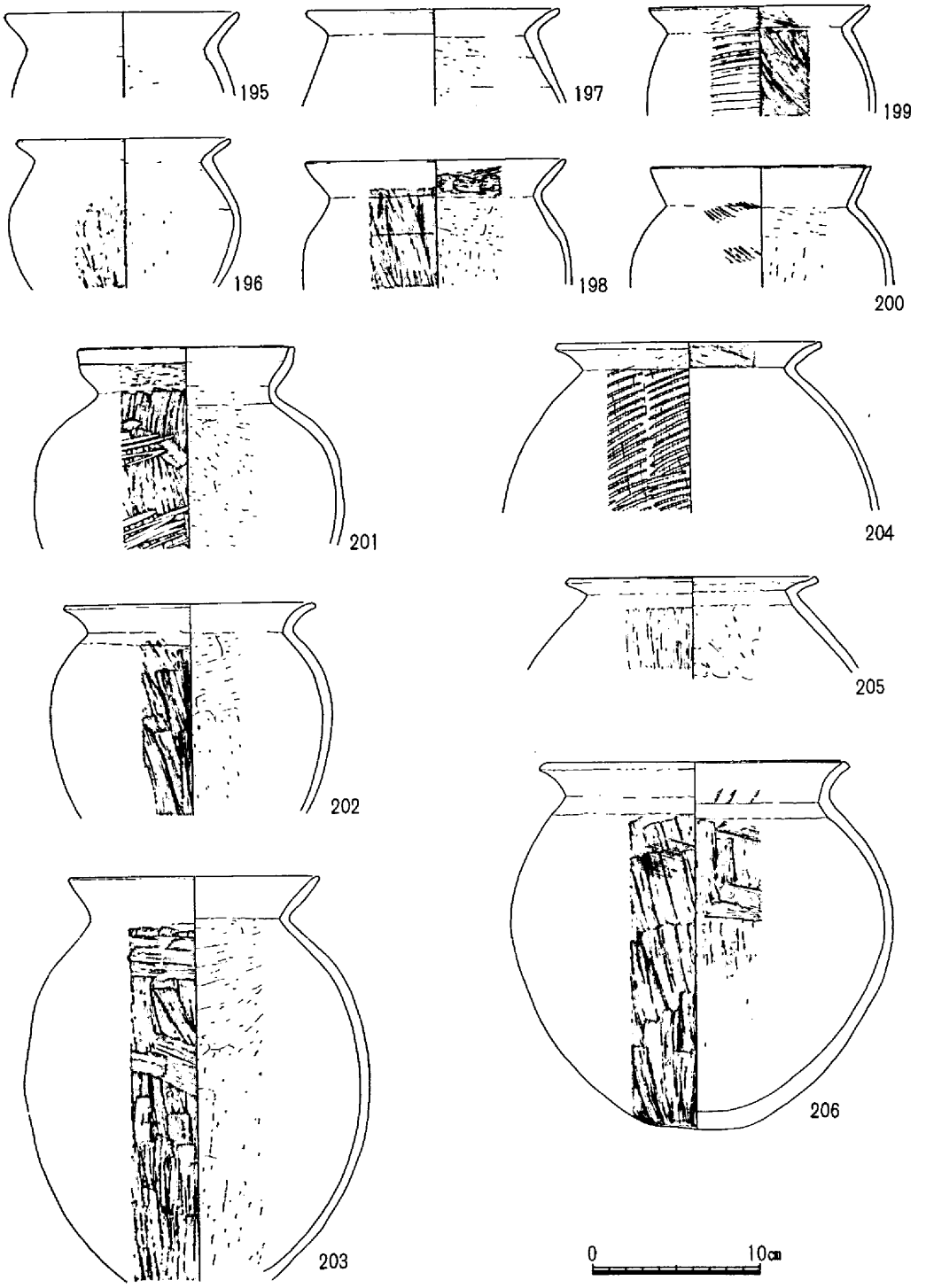
第146図　新田サイフォン井戸—2遺構平・断面図（$\frac{1}{40}$）



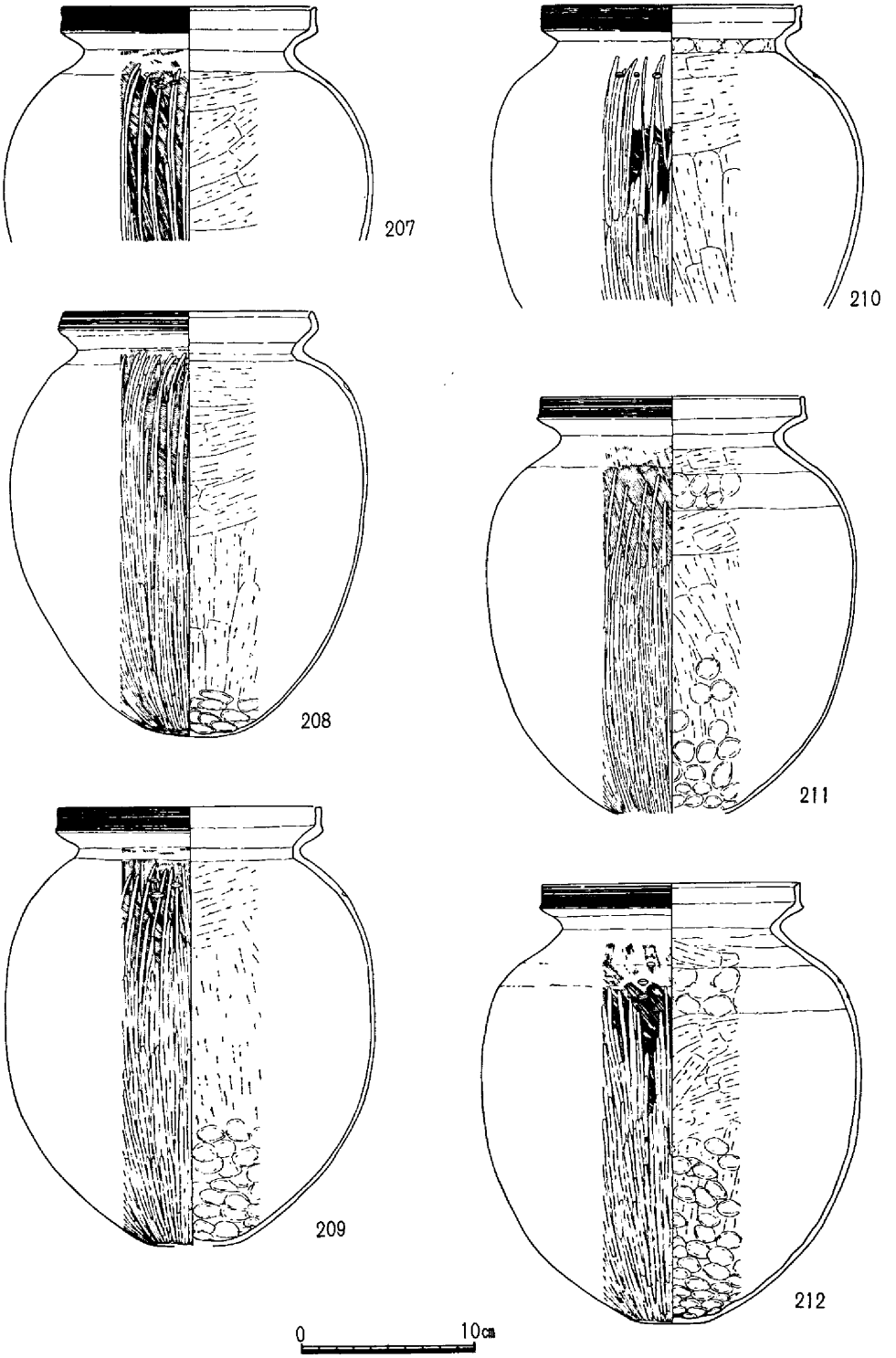
第147図　新田サイフォン井戸－2出土遺物（1）



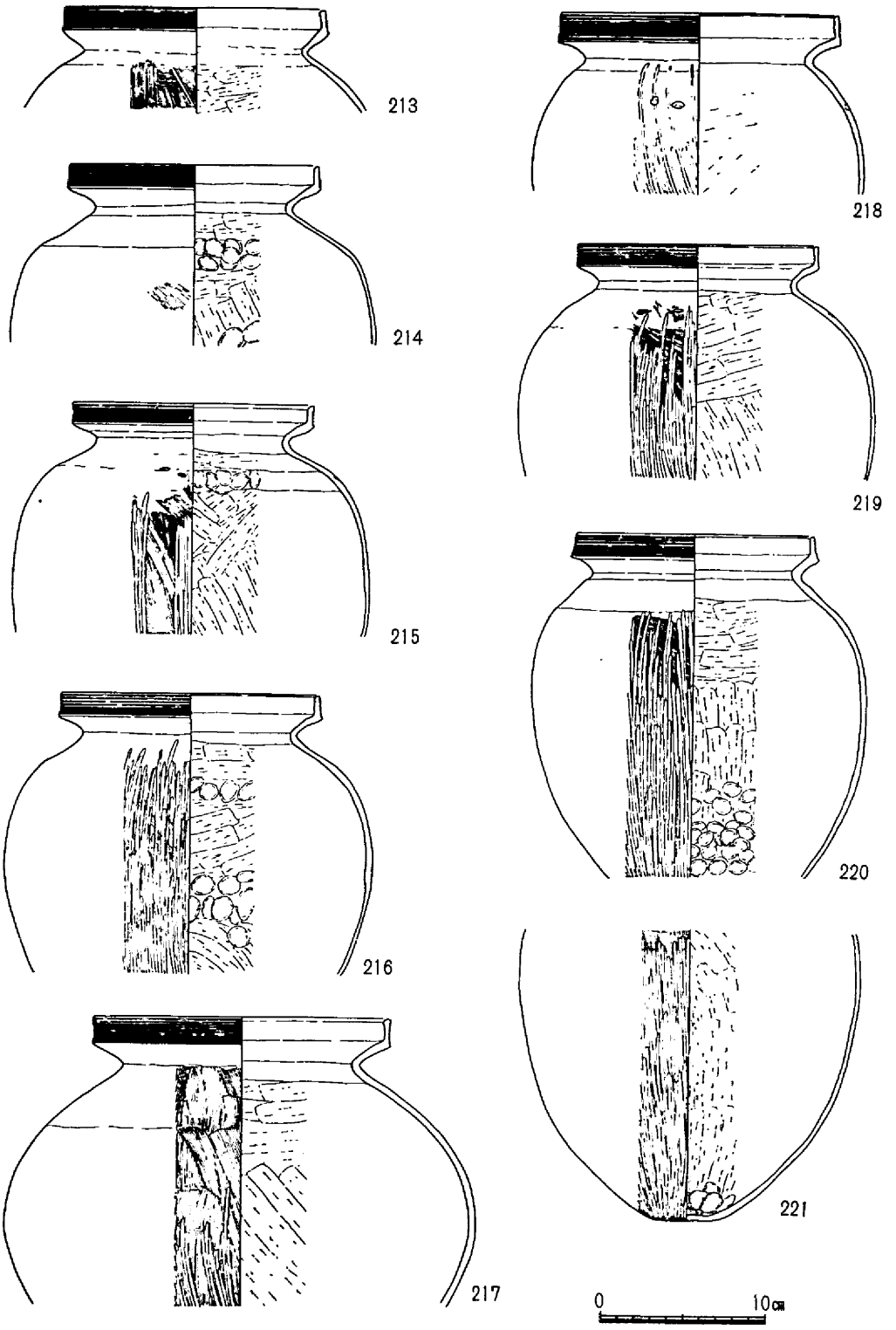
第148図　新田サイフォン井戸－2出土遺物（2）



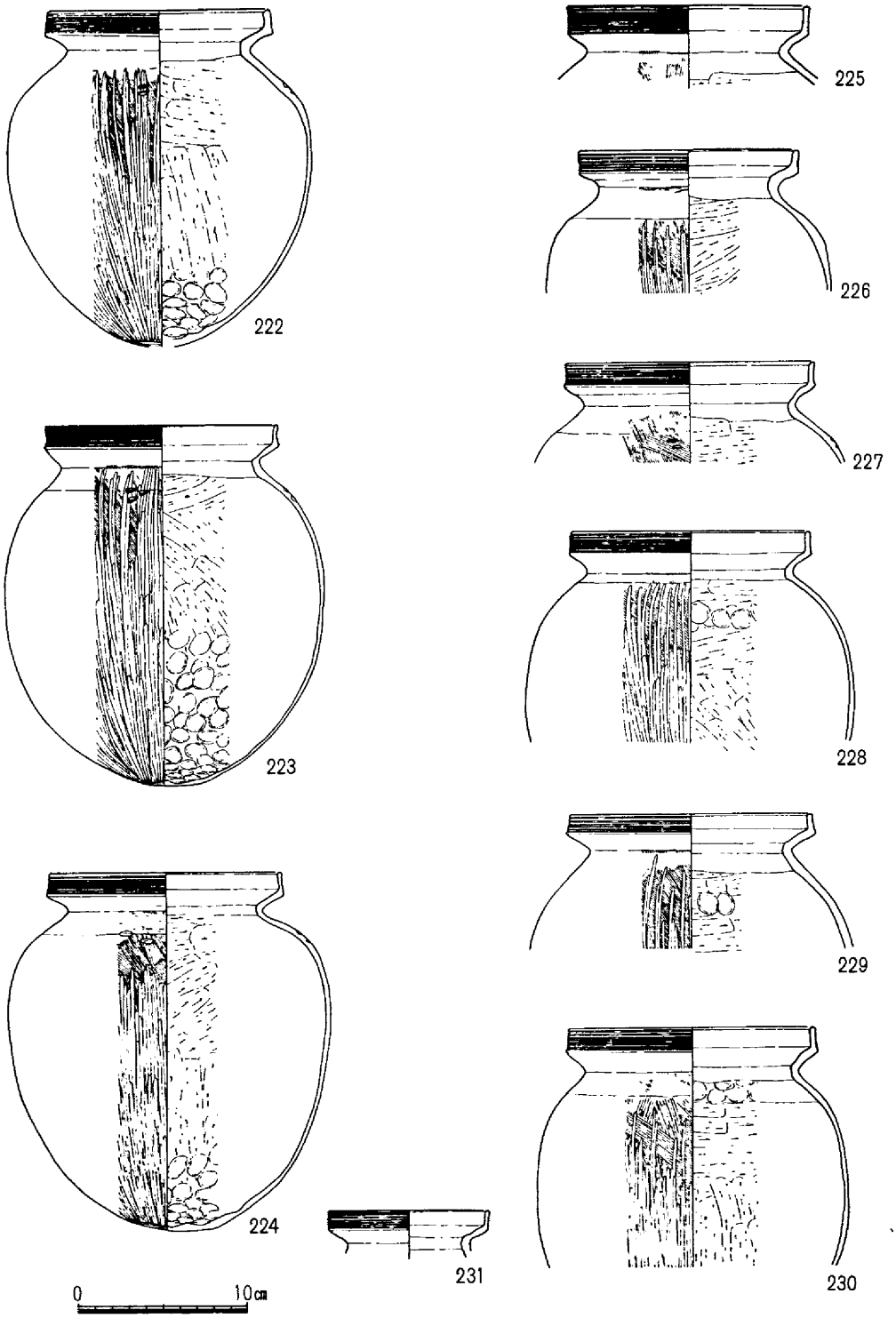
第149図　新田サイフォン井戸－2出土遺物（3）



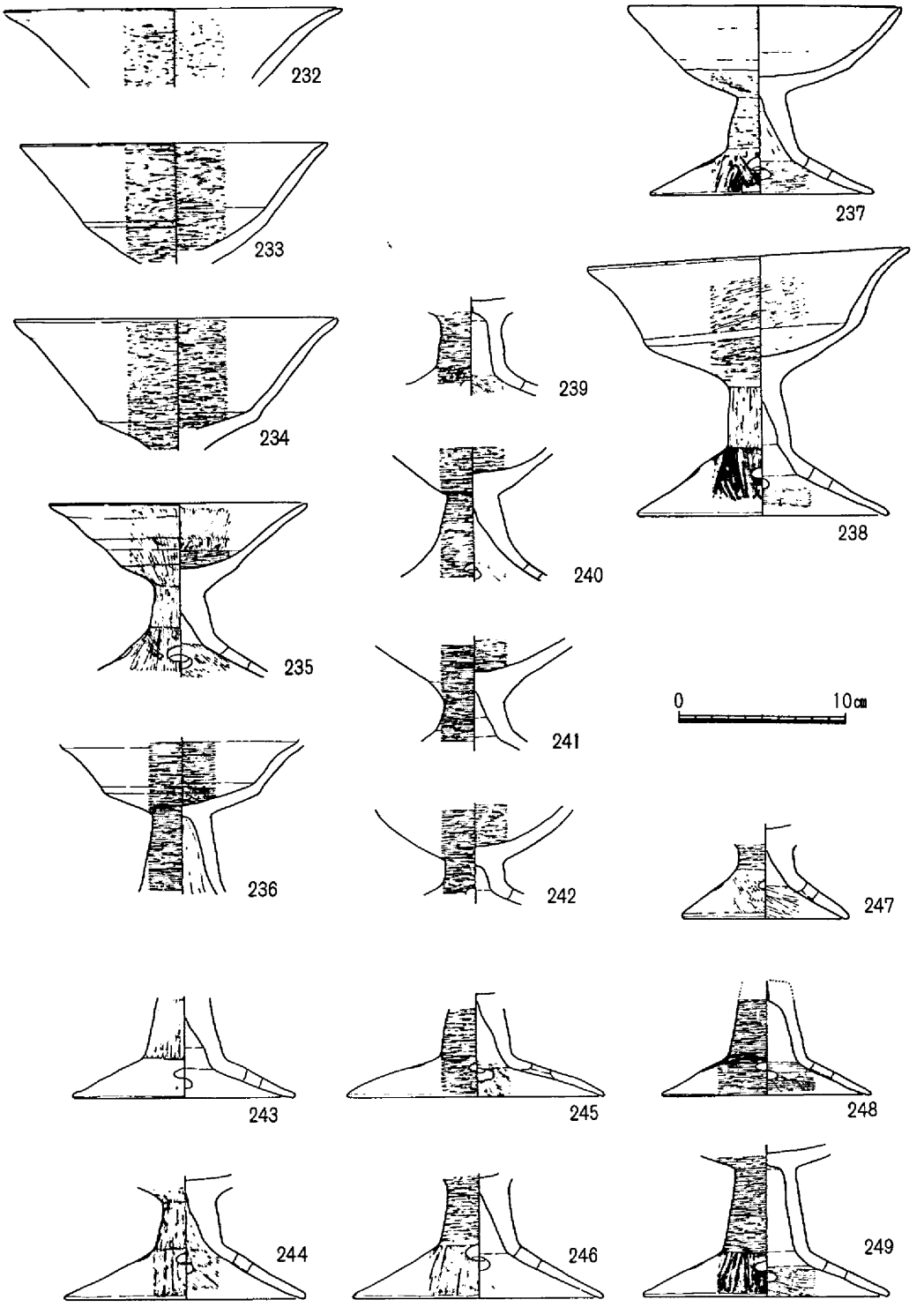
第150図　新田サイフォン井戸－2出土遺物（4）



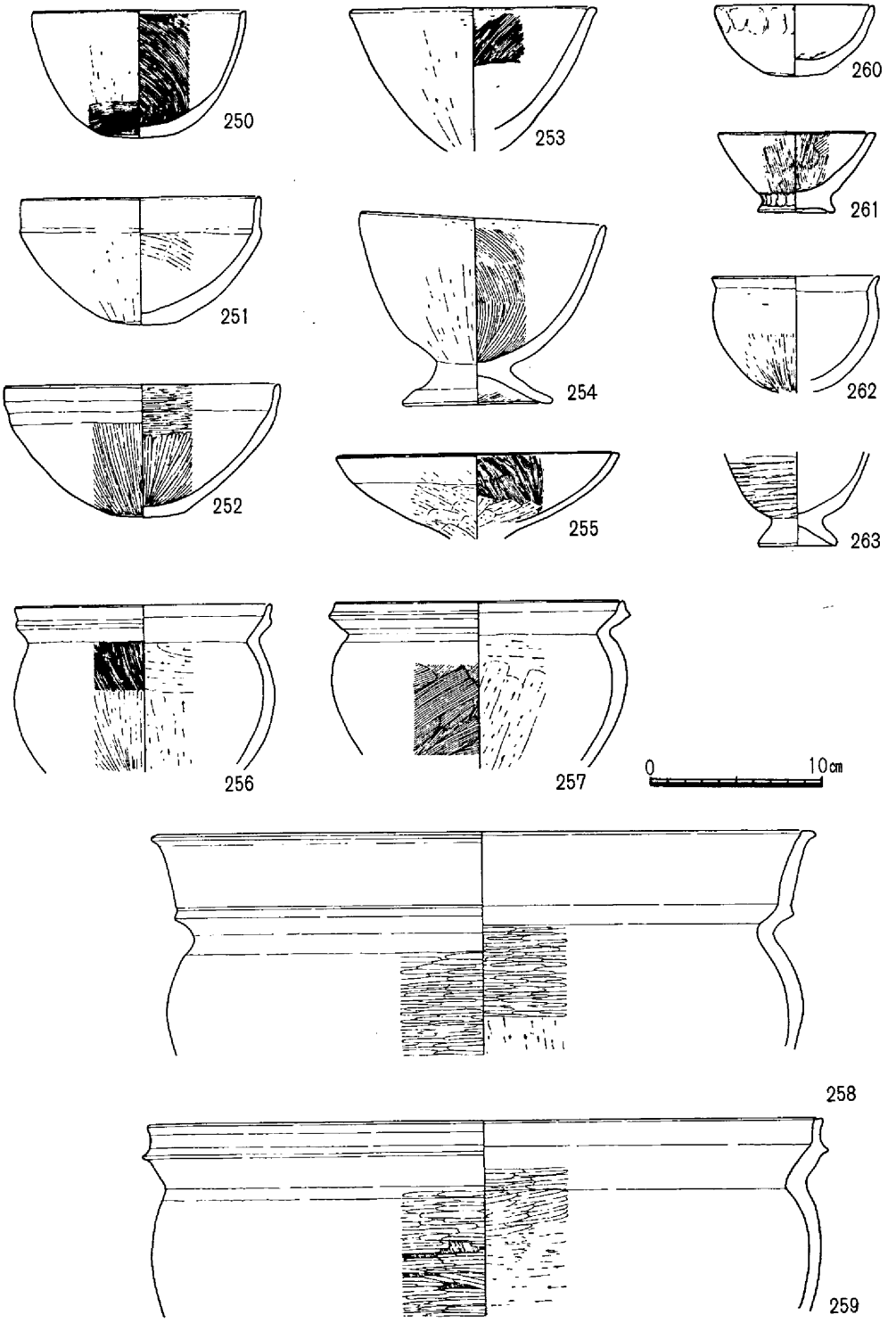
第151図　新田サイフォン井戸－2出土遺物（5）



第152図　新田サイフォン井戸ー2出土遺物（6）



第153図　新田サイフォン井戸－2出土遺物（7）

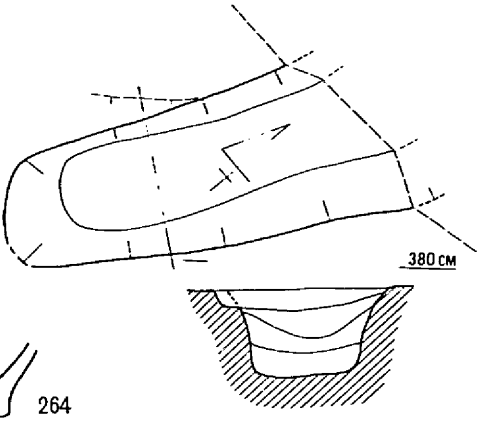


第154図　新田サイフォン井戸ー2出土遺物（8）

4) 土壙—2

3区の北部に位置し，幅73cmで長さは2mを越える長方形を呈する土壙で，北側をD—4に，上部はD—6に切られている。土壙内には，下層に暗灰褐色粘質土，中層に淡灰褐色砂質土，上層に暗茶灰色砂泥が堆積し，深さは検出面から50cmを測る。出土している遺物は少ないが，この土壙がH—1（百・古・Ⅰ）を切り，D—4・D—6に切られていることから，百・古・Ⅰ以降の早い時期と推定される。

（内藤）

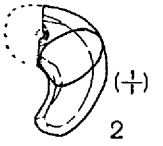


第155図 新田サイフォン
土壙2遺構図（$\frac{1}{40}$）及び出土遺物

5) 土壙—3

4区の東端から検出した。径約60cm，深さ約30cmの柱穴状土壙である。この柱穴状土壙は，のちに検討の結果住居址の一角を構成する可能性が考えられたが判定しえなかったものである。土壙内には，暗灰色粘質土（黄色土ブロックを含む）層が堆積しており，その中から図示した勾玉が出土した。勾玉は，頭部の一部が欠損し，表面も風化してやや白味がかった淡茶色を呈している。長さは推定約1.8cmで断面は6×9mmの楕円形を呈する。円孔は，推定約2mm前後である。重量は，約1.6gを測る。分析の結果（註26），勾玉は鉛ガラスの可能性が強い。

（中野）



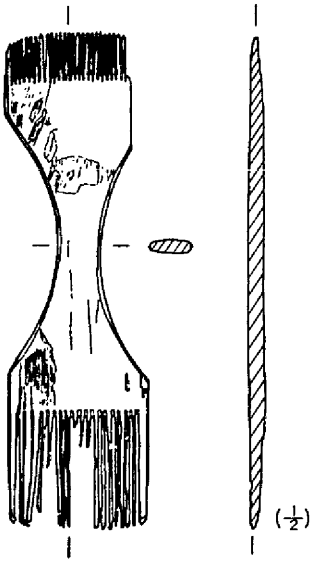
第156図 新田サイフォン土壙3出土遺物

6) 池状遺構

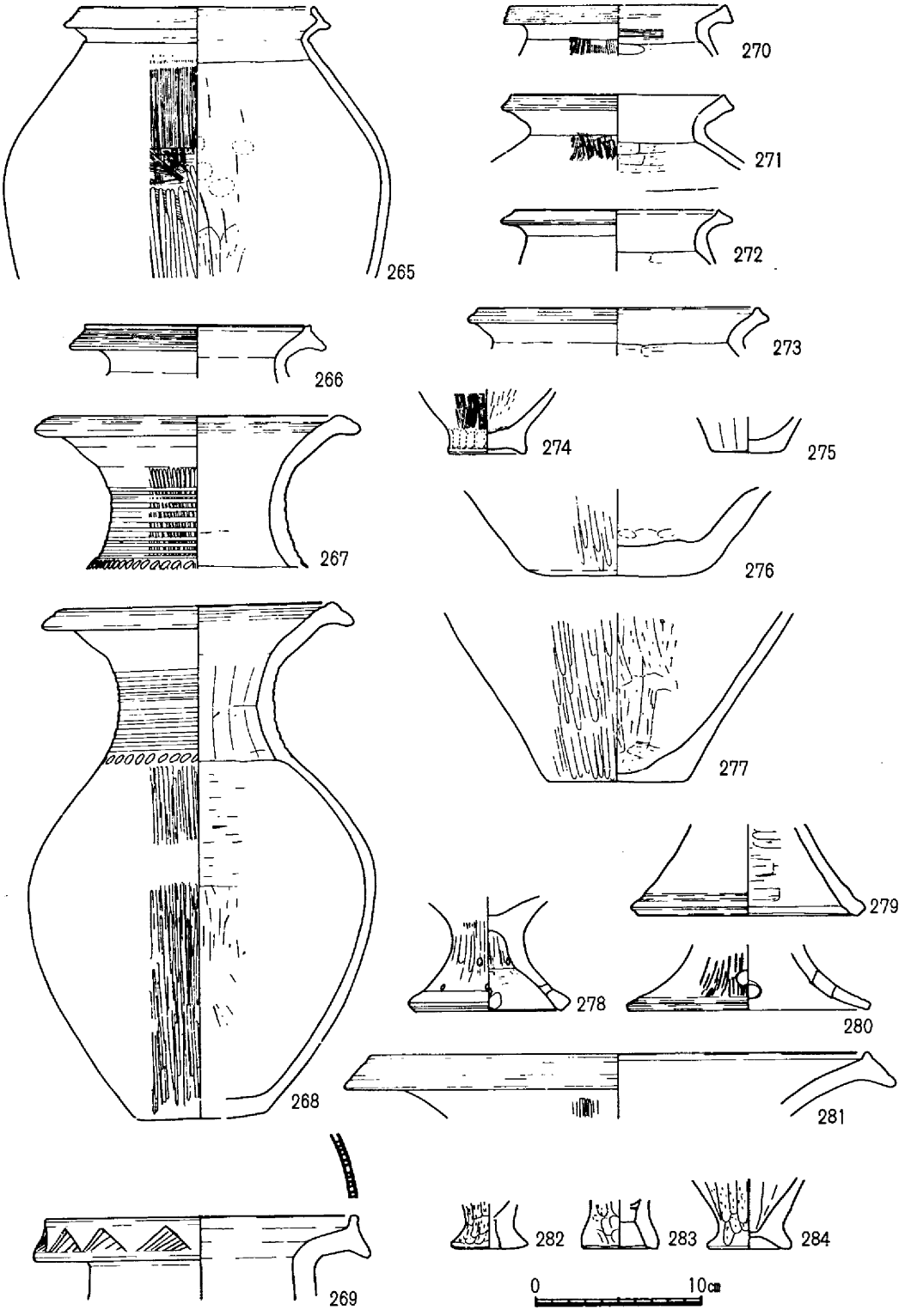
2区のほぼ中央に位置し，調査区の東壁近くに角をもち，西壁に向かって「ハ」の字状に広がる平面プランを呈する。西壁では16m40cmを測る。深さは約100cmを測る。遺物はほとんどみられなかったが，東壁近くの底から木製の櫛が出土した。（157図）

櫛は長さ13.0cm・幅は両端3.75cm・中央1.15cm・厚さ0.4cmを測る両端は薄くなり長さ・間隔の異なる歯がそれぞれついている。

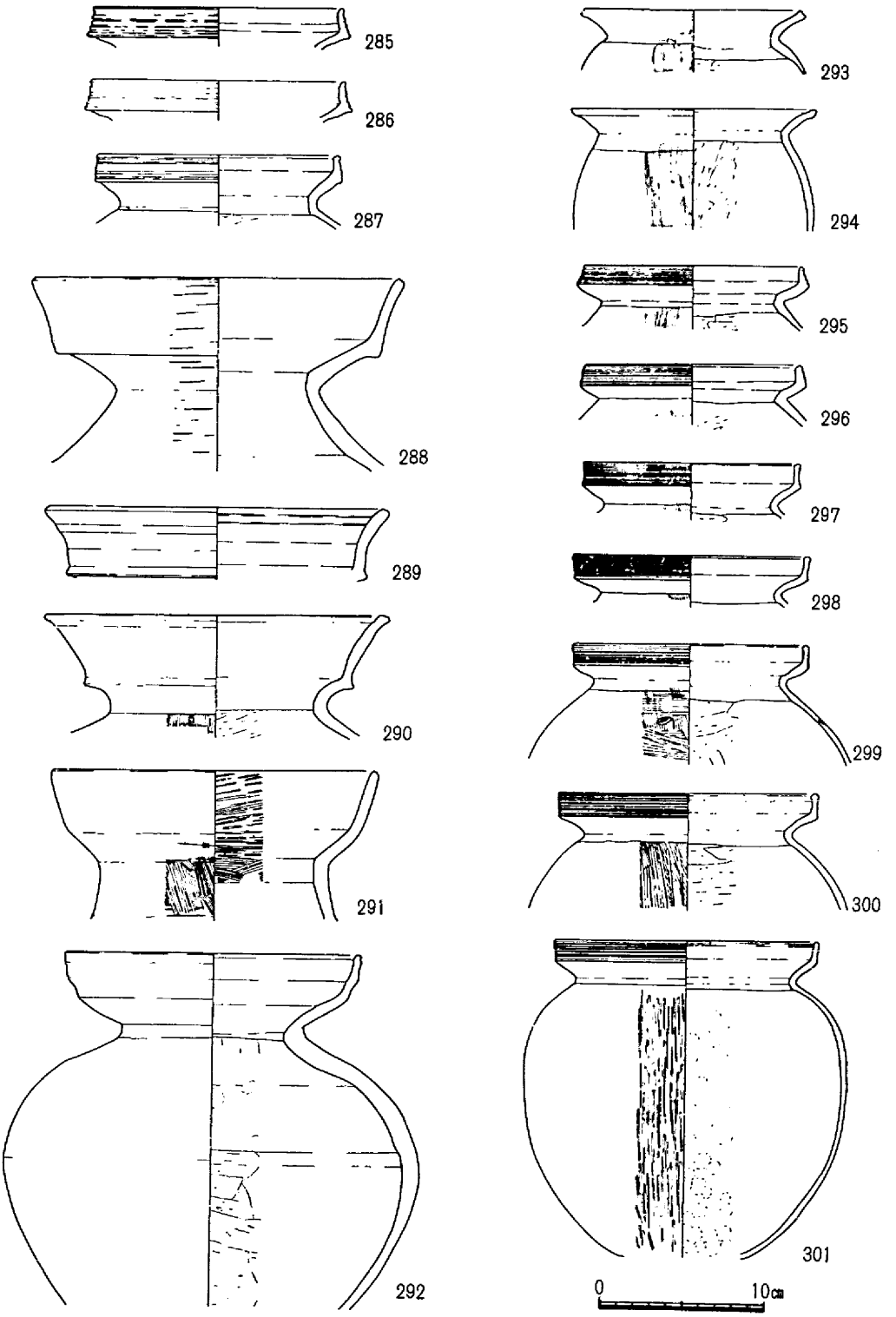
（内藤）



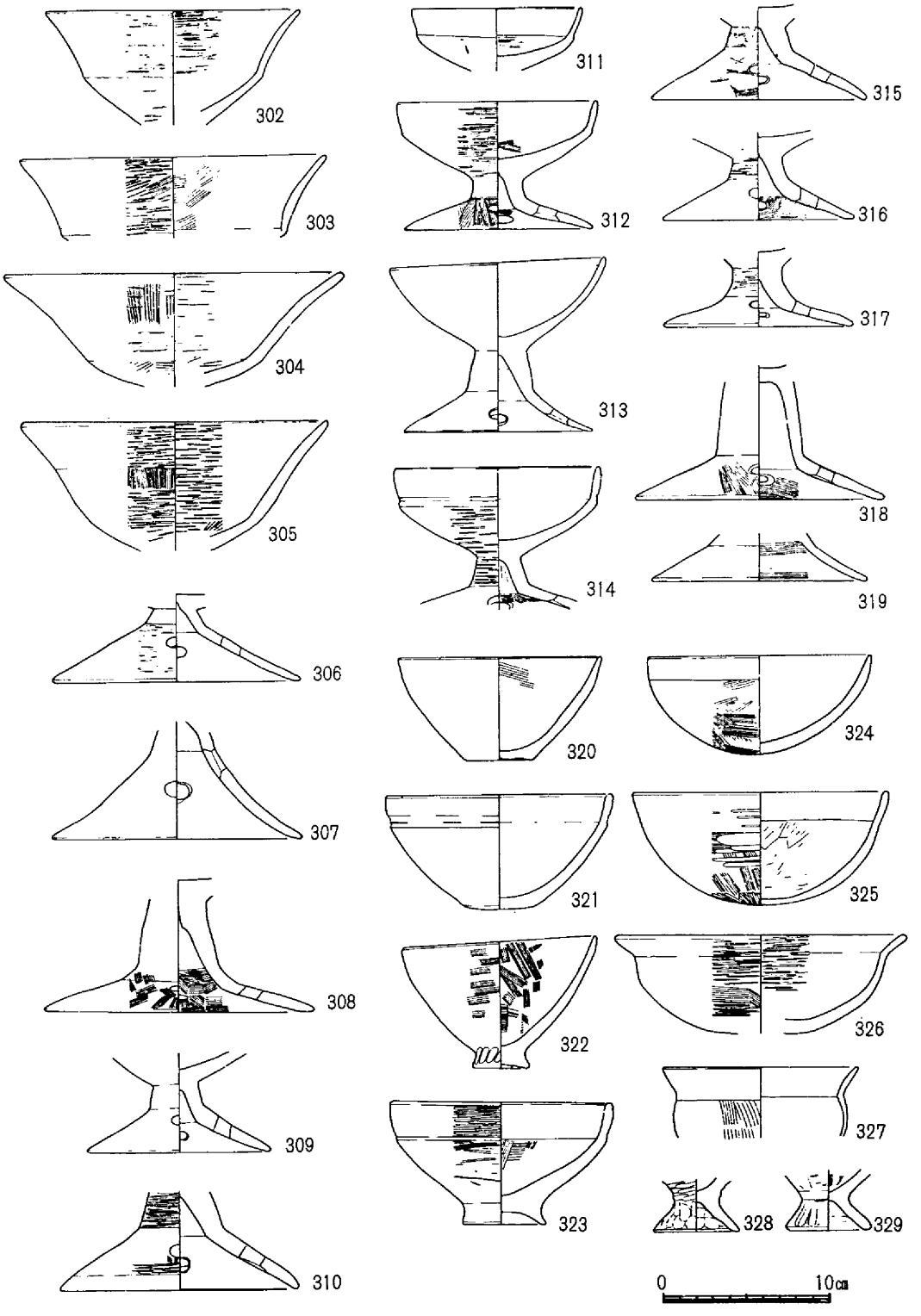
第157図 新田サイフォン池状遺構出土遺物



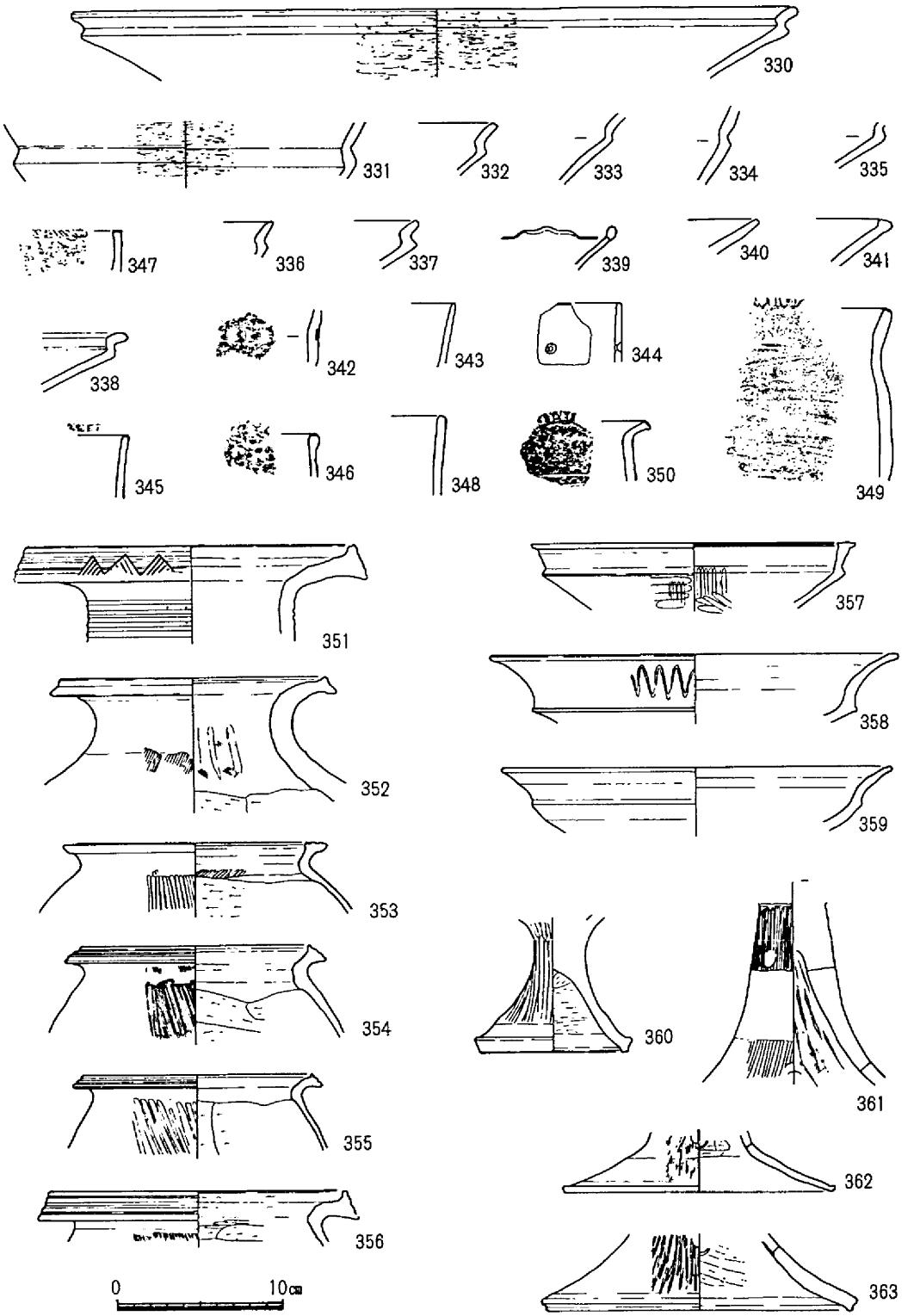
第158図　新田サイフォン微高地西斜面推積遺物（1）



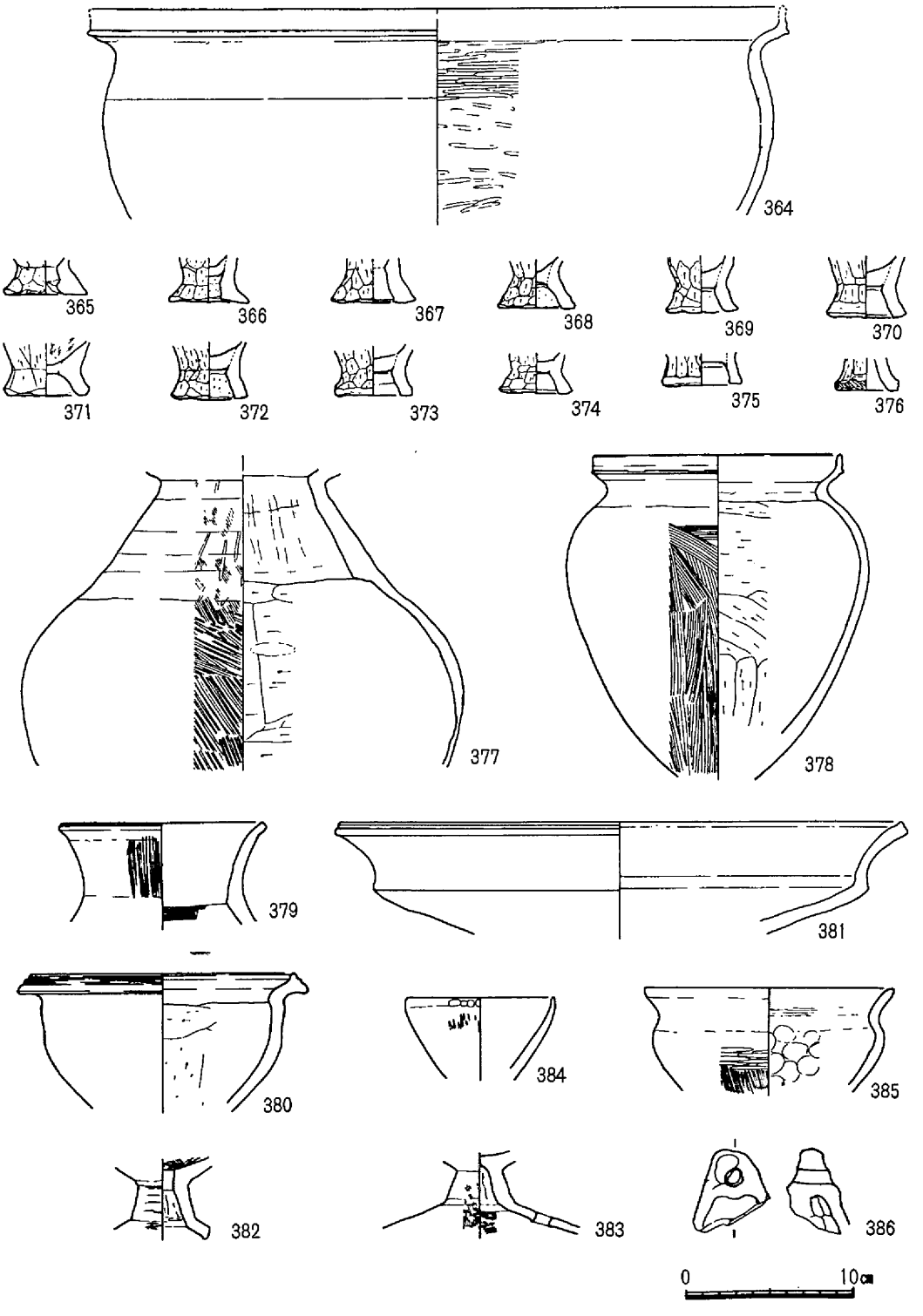
第159図　新田サイフォン微高地西斜面推積遺物（2）



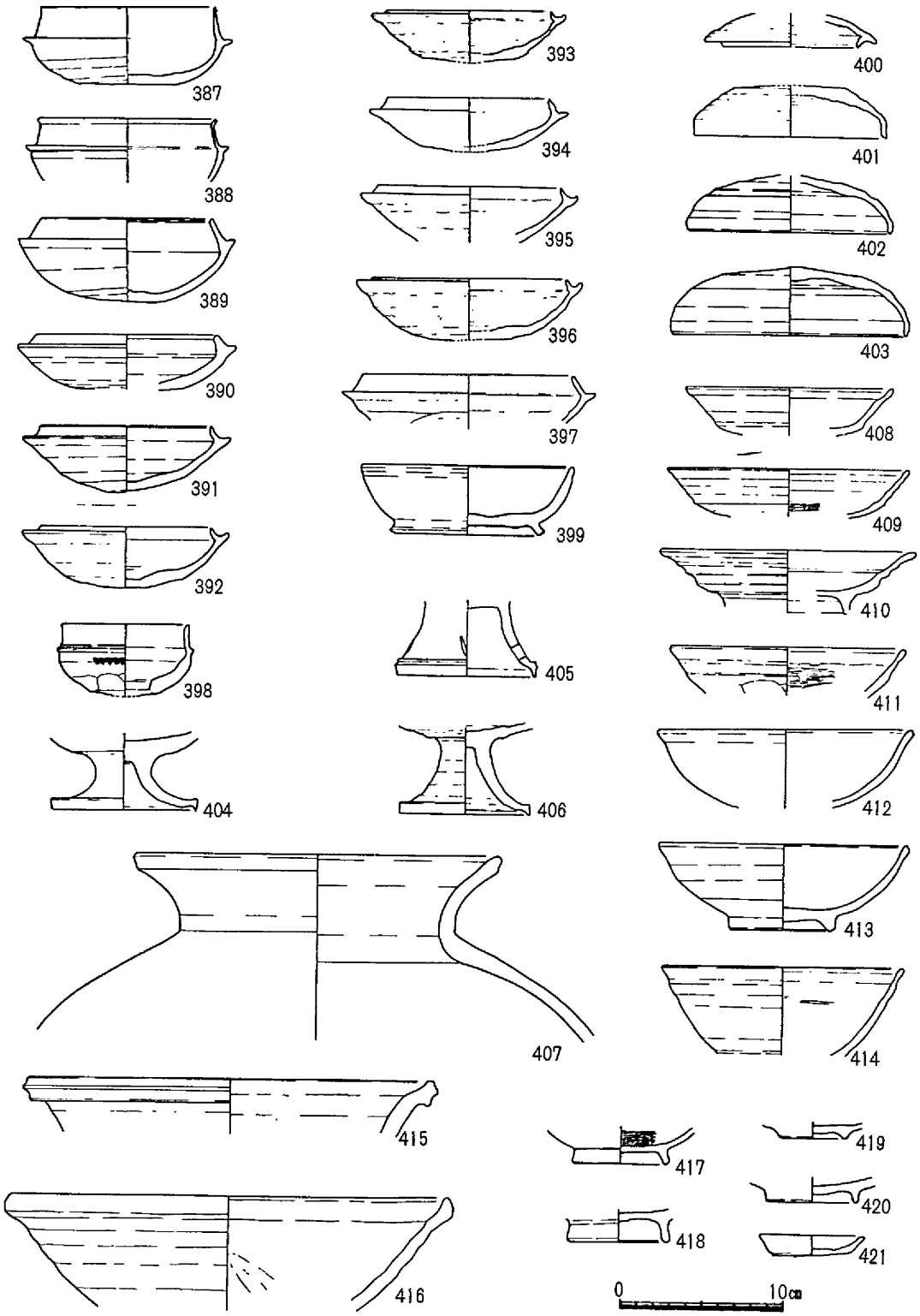
第160図　新田サイフォン微高地西斜面推積遺物（3）



第161図　新田サイフォン包含層出土遺物（1）



第162図　新田サイフォン包含層出土遺物（2）



第163図　新田サイフォン包含層出土遺物（3）

微高地西斜面堆積遺物

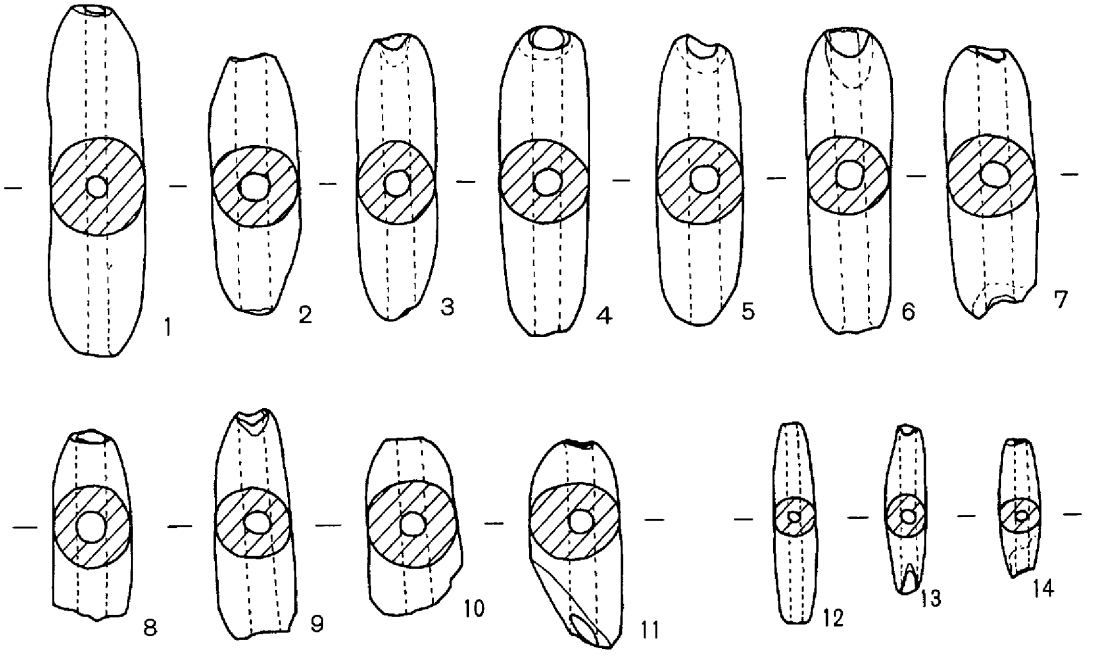
新田サイフォン調査区においては，２区の微高地端部に斜面堆積した土層内から，ほとんど完形のものも含み，多くの土器が出土した。これら斜面に堆積した土器は概ね，比較的下層から出土した弥生時代後期前半の時期（**265～284**）と，上層から出土した百･古･Ⅰの時期（**285～329**）とに分けられる。なお，隣接した新田樋門調査区の微高地端部においても，上層では百･古･Ⅰの時期の土器がみられたが，下層では百･後･Ⅲの時期の土器が斜面に堆積していた。

包含層出土遺物

２・３区の遺構面上面は，後世の削平を著しく受け包含層が薄く，須恵器（**387～414**）・瓦器（**419～420**）の他は細片で図示することが出来なかったが，弥生式土器・土師式土器等が少量出土しているだけである。４区は包含層が厚く，縄文時代晩期・弥生時代前期・後期・土師器・須恵器等の土器片が，比較的多量に出土している。

土錘

全部で14個が，いずれも２区の微高地下がりから出土している。これらの土錘は形体から，ずんぐりとした大型の１～３㎜の砂粒を含む粘土でつくられたもの（**1～11**）と，細くて長い砂粒をほとんど含まない粘土でつくられた小型のもの**12～14**との２種に大別できる。



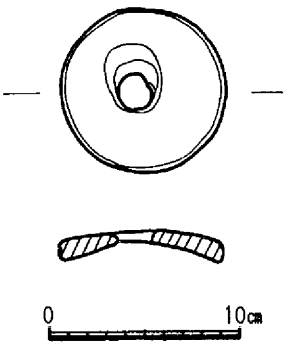
第164図　新田サイフォン包含層出土遺物（4）

表7　新田サイフォン出土土錘一覧表

番号	出土地点	形状	色調	胎土	現存(%)	長径(cm)	短径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考
1	2区	大型	茶褐色	0.5mm砂含	100	2.50	1.10	0.55	73.90	
2			灰黄白色	1mm砂含	100	2.30	1.05	0.80	34.10	
3			灰白色	1～3mm砂含	100	2.10	1.05	0.70	37.00	
4			暗黄白色	1～2mm砂含	100	2.35	1.10	0.75	46.50	
5			灰白色	1～3mm砂含	95	2.25	1.30	0.75	37.65	
6			淡茶褐色	〃	95	2.15	1.10	0.70	40.60	
7			淡茶灰色	〃	95	2.35	1.05	0.75	41.50	
8			黄白色	1～2mm砂含	70	2.05	1.15	0.75	20.70	
9			灰白色	1～3mm砂含	70	2.00	1.00	0.65	21.50	
10			暗黄白色	〃	50	2.40	1.25	0.65	28.80	
11			淡黄白色	0.5mm砂含	50	2.40	0.90	0.65	26.20	
12		小型	黒灰色	細かい粘土	100	1.05	0.55	0.30	5.30	
13			暗紫褐色	〃	90	1.05	0.65	0.35	3.70	
14			茶褐色	〃	70	1.10	0.60	0.30	3.10	

紡錘車

3区の遺構面上層から出土したもので，土器片を転用してつくられている。直径4.35cm・厚さ0.5cmの円盤の中央に，径0.9cmの穴を両側から穿っている。胎土は0.5～1mm程の砂粒を含む粘土で，黄白色を呈している。

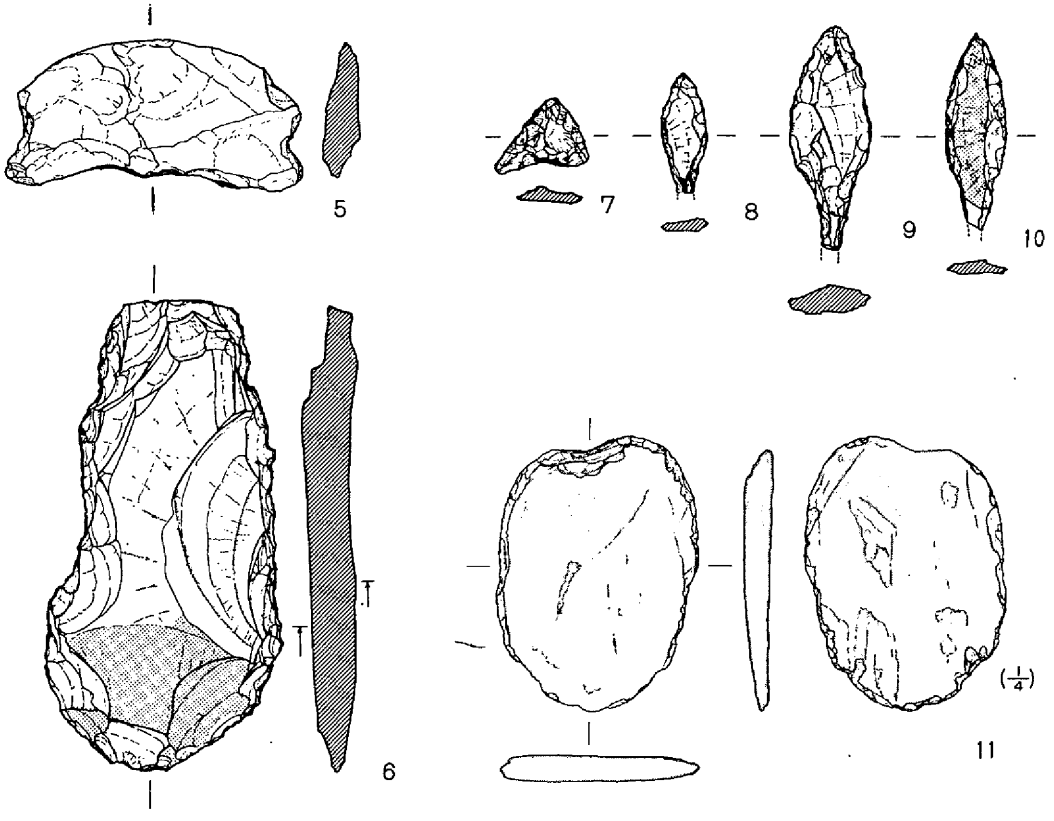


第165図　新田サイフォン包含層出土遺物（5）

石製品

4区から7個の石器・石製品が出土している。**5**はH－5の上面から出土した打製の石包丁で，偏平な河原石の自然面を利用して荒く打ち欠いた剝片を用い，刃部は表面の一部に調整がはいるだけである。なお石材は砂岩と考えられる。**6**は黄褐色の基盤層上で検出されたサヌカイト製の打製石斧で，表裏とも縁辺・刃部に細かい調整を施している。刃部の周辺には使用による磨滅がみられる。**7**は包含層から出土したサヌカイト製の凹基式石鏃で，左右対称になっていない。表面は全面加工され，縁部・基部に丁寧な調整がみられるが，裏面の基部は調整されていない。**8**はサヌカイト製の凸基式石鏃で，裏面の一方の縁辺には細かい調整が，他方には荒い調整がなされている。**9**は包含層から出土したサヌカイト製の凸基式石鏃で，基部が欠損している。基部は長く丁寧に作り出している。厚手の剝片を素材にし，表面はほとんど全面を加工しているが，先端は鈍い。**10**は包含層から出土したサヌカイト製の石鏃で，基部が僅か

に欠損している。縁辺に施された調整は摩耗した中央部の剝離面を切っており，石包丁等他の石製品からの転用品と考えられる。**11**は表裏とも全面が著しく磨耗している石製品で，石鍬等の可能性がある。　（内藤）



第166図　新田サイフォン包含層出土遺物（6）

表8　新田サイフォン出土石器一覧表

番号	名称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	出土地点	備考
5	打製石包丁	8.00	4.00	1.00		砂岩？	4区	
6	打製石斧	12.30	6.40	1.35	127.6	サヌカイト	〃	
7	石族	1.95	2.45	0.40	1.2	〃	〃	
8	〃	3.15	1.25	0.35	1.5	〃	〃	
9	〃	5.85	2.20	0.70	10.1	〃	〃	
10	〃	5.20	1.65	0.35	3.7	〃	〃	石包丁の転用か？
11	石鍬？	14.00	10.50	1.50		緑色片岩？	〃	

表9 新田サイフォン出土土器観察表

溝 状 遺 構

1) D—5

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	鉢形土器	○体部は逆「ハ」の字状に広がり，口縁端部は面をもつ。 ○底部は突出し，僅かに上底を呈す。	○内外面は比較的な篦磨きが施されている。 ○底部は押圧及びナデ調整	○外面は暗茶色，内面は淡黄褐色を呈す。 ○3㎜前後の砂粒を含む。

2) D—17

2	壺形土器	○わずかに斜め外上方に立ち上がる長い頸部が口縁部近くで外反し，上面に平坦部をつくる。体部は，肩から胴にかけて少し張り，中央で最大径を測る。胴部下半はゆっくりすぼまり台状の底部がつく。	○口縁端部はナデ調整され，上端平坦面に凹線が残る。頸部は縦方向の篦磨きの上から10条の沈線が巡る。胴部は外面に縦或いは斜めに篦磨き，内面篦削り，つまみ上げた底部外面に指頭圧痕が残っている。	○0.5㎜程の砂粒を含み，淡黄白色を呈す。一部に，丹塗りの為に赤褐色をしている。
3〜4	甕形土器	○「く」の字状に外反して斜め外方に延びた端部が，斜め上下に延びる。肩から胴部にかけてゆっくり張り，胴中央で最大径を測る。	○口縁部はナデ調整され，上下に延ばした端面に，凹線がつく。肩から胴にかけて外面刷毛調整，胴下半は篦磨きされている。内面は篦削り，体部上半に指頭圧痕がみられる。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，乳白色。
5	甕形土器	○「く」の字状に外反した端部は斜め上方に真直ぐ延び，胴中央で最大径を測る。下半は底部に向ってすぼまる。	○口縁部はナデ調整，肩部から下の外面は篦磨きがナデ調整の上からなされ，内面は右上方に向って篦削りされている。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，乳白色。外面の一部に煤の付着がみられる。
6〜9	甕形土器	○平底の底部から斜め外方に胴部が広がる。	○胴部内面は上・斜め上方に向って篦削り，外面は刷毛調整，底部は6がナデ，7は刷毛，8・9は篦削り。	○数㎜の小石粒を含む胎土で，黄灰色を呈す7の内面は黒色。
10	高杯形土器	○斜め上方に直線的に延びた体部が口縁部で少し上方に折れ曲がる。	○口縁部はナデ調整され，外面に退化凹線が巡る。体部外面は刷毛調整後横方向に篦磨き。	○1㎜前後の砂粒を含み，乳褐色。
11	高杯形土器	○口縁端部が折れ曲って外反している。	○ナデ調整，外反した上坦面に退化凹線が巡る。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，黄褐色。

3）D—16

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
12	甕形土器	○外反した端部が肥厚し少し上方に延びる。体部は肩から胴にかけてゆるやかにふくらむ。	○口縁端部はナデ調整，体部外面は箆磨き，内面は刷毛調整。	○0.5㎜前後の砂粒を含み，茶褐色。
13	甕形土器	○外反した口縁端部が少し肥厚して斜め上下に拡張している。	○口縁部はナデ調整，拡張した端部外面に4条の凹線が巡る。	○0.1㎜程の砂粒を含み，淡赤褐色。
14〜18	甕形土器	○14〜16は底部から少し反り気味に，17・18は少し内湾気味に斜め上方に広がる。	○外面は縦方向の箆磨き，内面は上方に向って箆削りされ，底部はナデ調整。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，15は精製粘土，14は赤褐色，17・18は黄褐色。
19	甕形土器	○少し内湾気味に，斜め外方に立ちあがる。	○端部はナデ調整，内面箆削り，外面ナデ調整。	○精製粘土で，赤褐色。
20〜21	鉢形土器	○外反した台部が，20は真直ぐ，21は反り気味に延びる。	○20は底部近くがナデ調整，外反部より上方では箆磨き，21は外面縦方向の箆磨き。	○1㎜程の砂粒を含み，淡赤灰色。

6）D—4

22	鉢形土器	○口縁部は外反し，端部はわずかに上方に拡張する。 ○底部は安定している。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○頸部から底部にかけては，縦方向の刷毛目で調整。 ○内面は縦・横方向の箆削り。	○淡赤褐色。 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。

10）D—11

23	杯蓋（須恵器）	○ゆっくり内湾して，口縁端部がほとんど真直ぐ下に延び薄くなる。	○右回転のロクロが用いられている。	○1㎜前後の砂粒を含み，淡灰色。

11）D—15

24	甕形土器	○にぶく「く」の字状に外反した口縁が斜め外方に延び，肥厚しないで端部をつくる。胴部はほとんど張らず中心より少し下で最大径を測り卵型を呈している。	○口縁部はヨコナデ後内面は刷毛調整され，胴部は外面刷毛調整，内面ナデ調整され，内面下半部に指頭圧痕がみられる。	○1㎜前後の砂粒を含み，褐色。 ○口縁部と内面底部は淡灰色。胴部外面に，煤が付着する。
25	高杯（須恵器）	○杯部についた脚部がすぐ外反気味に広がる。	○右方向の回転による成型。	○堅緻な胎土で，淡灰青色。

12）D—13

26	椀形土器	○体部がゆるやかに内湾する。	○外面にわずかにナデ調整がみられる。	○0.5㎜以内の砂粒を含み，黄白色。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
27	椀形土器	○台部から椀部が内湾気味に外方に広がる。	○底部はナデ調整されている。	○1㎜程の小石粒を含み，白色。

13) D—2

28～41	椀形土器	○内湾して斜め外方に立ち上がる椀の口縁端部が，そのままのもの（32・33・35）と，幾分外に開くもの（28～31・34・36）とがあり，高台も真直ぐに下りるもの（36・38・39とやや開くもの（32・33・35・37・40・41とがある。39は少し深い椀状を呈している。	○椀の内外面ともナデ調整されているが，32の内外面・37の外面は刷毛調整されている。	○概ね1㎜前後の砂粒を含み乳白色を呈すが，28～31・34・36は数㎜の砂粒を含み，30・38は淡灰茶色を呈し，28・34は外面暗黄褐色，内面黒色の，内黒土器である。
42	皿形土器	○平底の底部から口縁部が幾分斜め外方に立ち上がるだけの非常に浅い小皿。	○全体に刷毛調整され，底部は篦切りされている。	○0.5㎜程の砂粒を多少含み，乳白色。内外面の一部に煤の付着がみられる。
43	椀形土器	○平底の底部から内湾しながら斜め外方に立ち上がる。	○内外面ナデ調整され，底部は糸切りされる。	○細かい砂粒の粘土で，灰白色。
44～47	鍋形土器	○「く」の字状に折れ曲がる口縁端部が斜め外方に延びる。	○内面は口縁部から刷毛調整，外面は一部に刷毛調整がみられる。	○1㎜前後の砂粒を含み，淡褐色。外面に煤が付着。

住　民　址

1) H—7

48	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に外反し端部は外方につまみ出している。	○口縁部内外面は横ナデ，体部外面は刷毛調整。	○暗褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。
49	甕形土器	○口縁部はゆるく外反し，端部は丸くおさめる。 ○体部はナデ肩を呈す。	○口縁部内面及び外面肩部付近まで横ナデ。体部外面は刷毛調整，内面は篦削りしている。	○暗乳灰色を呈し，0.5㎜以下の砂粒を含む。
50～51	壺形土器	○径の広い底部片である。51は僅かに上底を呈する。	○51の外面は刷毛調整ののち篦磨き，内面は篦削りしている。	○暗褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
52～53	甕形土器	○やや上底を呈し，底部外面が逆反りするものである。	52の外面は刷毛調整。53の外面は篦磨き，内面はいずれも篦削りしている。底部はナデている。	○同上。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
54～55	高杯形土器	○口径が25㎝前後を測るもので，口縁部はゆるく外方に広がり，杯部は深い。	○内外面ともに篦磨きしており，54の口縁部外面下端には2条の凹線を巡す。	○淡茶灰色を呈し，1㎜以下の砂粒を多分に含む。
56～58	高杯形土器	○上に記す高杯形土器と同様であるが，口径はやや小さい。	○57の口縁部外面は暗文風の篦磨きが施されている。	○淡黄灰色～淡茶褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。
59	高杯形土器	○長い脚柱部をもつもので，脚端部はやや外側に屈曲して広がる。 円孔は3孔穿たれている。	○杯部外面は刷毛目が残り，脚部上端は押圧ナデ，以下刷毛調整ののち篦磨きしている。 ○杯部内面は篦磨き，脚柱部には絞り目が認められる。	○明茶褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を多分に含む。
60～61	高杯形土器	○脚部がゆるく「ハ」の字状に広がるもので，端部は丸くおさめる。60は5個，61は4個円孔を穿っている。	○60の外面は篦磨き，内面は上半を篦削り，下半をナデている。	○淡茶灰色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
62	高杯形土器	○脚部がゆるく「ハ」の字状に広がるもので，端部は僅かに凹みを呈す。円孔を4個穿つ。	○器表面磨滅のため詳細は不明であるが，円孔の上部には2条の凹線を巡す。	○同上。
63	高杯形土器	○長い脚柱部をもつもので，脚裾部はゆるく広がる。6個の円孔を2段に穿っている。	○外面は篦磨きを施したのち，篦状工具による4条の沈線を巡している。 ○内面には絞り目が認められた。	○乳茶灰色を呈し，0.5㎜以下の砂粒を含む。
64	高杯形土器	○上記とほぼ同様であるが，脚端部は拡張面をもつ。円孔は竹状工具による刺突が7段に巡らされ，うち上部4段は未貫のものが多い。上段から5，5，2，6，1，6，8個巡らされている	○外面は6本の櫛状工具による沈線を8線に巡す。 ○杯部と脚部の接合は円板充塡による。 ○脚端部拡張面は2条の退化凹線を凹す。 ○全体の調整はナデ。	○灰白色～暗褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
65～68	鉢形土器	○低い脚部をもつもので体部はラッパ状に広がる。	○65の外面は刷毛調整，内面は篦削りしている。 66～68は体部を全面篦磨きし，脚部は押圧。	○乳黄灰色を呈し，0.5㎜以下の砂粒を含む。
69～71	鉢形土器	○製塩土器の脚部片である。	○いずれも体部外面は篦削り，内面はナデ，脚部内外面は押圧及びナデ調整している。 ○体部と脚部の接合は円板充塡。	○暗褐色を呈し，2㎜前後の砂粒を多分に含む。

2) H—8

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
72	甕形土器	○口縁部はするどく外反し，端部はやや肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ，体部外面は細かな刷毛調整，内面は篦削りしている。	○淡茶灰色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。
73～74	高杯形土器	○長脚高杯の脚裾部片で，端部は面をもつ。4か所に円孔を穿つ。	○外面は篦磨き，内面はナデている。	○淡黄褐色を呈し，1㎜以下の砂粒を含む。
75	鉢形土器	○口縁部は斜め外方にのび，端部は肥厚する。 ○体部は肩が張らず，ゆるくカーブする。	○口縁部内外面は横ナデ，体部内外面は刷毛調整。	○淡黄褐色を呈し，砂粒はほとんど含まない精製粘土。
76～77	鉢形土器	○口縁部はゆるく外反し体部は張りをもたない。	○口縁部内外面は横ナデ，77の体部外面は刷毛調整ののち篦磨き，内面は刷毛目が残る。	○淡茶褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
78～79	鉢形土器	○逆「ハ」の字状にのびる深い体部をもつ大型のもので，78の口縁部はゆるく外反し，端部は丸くおさめている。79の端部はやや肥厚し凹みを呈す。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○79の体部外面は荒い篦磨き，底部はナデ。体部内面は磨滅のため不明であるが，篦磨きか。	○茶灰色を呈し，2㎜前後の砂粒を含む。
80～81	鉢形土器	○脚付きの小型のものでH—7出土の65～68同様である。	○80の口縁部の内外面は横ナデ，外面は篦磨き，内面は篦削りしている。81の内面は刷毛調整。 ○脚部はいずれも押圧及びナデ。	○淡黄褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
82～84	鉢形土器	○製塩土器の脚部片である。	○体部外面は篦削り，内面はナデ脚部は押圧及びナデ。 ○体部と脚部の接合は円板充填。	○暗茶褐色を呈し，3㎜前後の砂粒を含む。

3) H—1

85	壺形土器	○にぶく「く」の字状に外反する口縁部。	○剝離の為，口縁部の調整は不鮮明，内面肩部から下は篦削り。	0.5㎜以下の砂粒を含み，淡黄褐色。
86	甕形土器	○口縁端部を欠いているが「く」の字状に外反した口縁がやや肥厚する。胴部はあまり張らずに平底の底部に至る。	○口縁部の調整は不鮮明であるが，胴部は横および斜めに叩き目がある。内面はナデ調整。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，黄褐色。肩から胴の一部に黒斑がみられる。
87	甕形土器	○外反したあと端部が上方に長くのびる口縁部	○ナデ調整。立ちあがった端部外面に擬凹線をもつ。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，茶褐色。外面に煤が付着。
88	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁から肩部にかけて少し張りをみせ，最大径を測る。	○頸部はナデ調整。肩部内面の一部に指頭圧痕が残る。体部は外面篦磨き，内面篦削り。	○0.5～1㎜の砂粒をかなり含み淡茶褐色，

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
89	甕形土器	○ゆるやかに広がる底部片	○外面ナデ，内面篦削り。	○0.3～1㎜の砂粒を含み，淡茶褐色。
90	高杯形土器	○口縁部が斜め外方にほぼ真直ぐに延びる。	○口縁部内外面に横方向の非常に細かな篦磨き。	○0.5㎜以下の砂粒を含む精製粘土で，淡い赤褐色。
91～93	高杯形土器	○上方あるいはやや斜め外方に内湾して立ち上がる杯部 。	○91・92の内外面は篦磨き。93は剝離の為，杯部の調整は不明。脚柱部外面は篦磨き。	○0.1㎜程のきめ細かな水漉し粘土で赤褐色。
94～98	高杯形土器	○やや開き気味の短かい脚柱部から概ね真直ぐ外下方に裾部が広がる。その裾部に3個（96），および4個（95，97，98）の円孔を穿っている。	○脚柱部外面は横方向に丁寧な篦磨きがされ，94の裾部外面は縦方向の篦磨き，95の裾部は刷毛調整され，外面はその上から横方向の篦磨き，96は脚柱から裾部にかけ，外面は横方向の篦磨き，内面は刷毛調整。	○0.5㎜以下の細かい砂粒を含む粘土で，赤褐色。95・98は水漉し粘土。
99	高杯形土器	○非常に大形の高杯或いは器台とも考えられる口縁部片で，比較的真直ぐ斜め上方に開いた口縁端部が上下に長く延び，上方に延びた端部は肥厚している。	○上方に長く延びた口縁端部の外面には，上向きの鋸歯文が巡っている。また口縁部上面には，一つの円と直線が繋った文様を中心に，5本単位の直線と弧状線が囲む，いわゆる直弧文の篦描き文様がみられる。	○きめ細かな粘土でつくられ，淡黄白色。

4) H—3

100	壺形土器	○ほぼ真横に延びた口縁端部が肥厚し，幾分上下に拡張して面をなす。	○口縁部はナデ調整され，拡張した端面は篦磨きした上に円形浮文が貼り付けられ巡っている。	○1㎜前後の砂粒を含み，淡赤褐色。
101	甕形土器	○「く」の字状に折れ曲った口縁が真直ぐ斜め上方に延びている。	○口縁端部から体部にかけてナデ調整，体部内面に指頭圧痕がある。	○数㎜の小石粒を含み，淡黄褐色。
102	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁端部が肥厚して，斜め上下に拡張している。	○口縁の内外面はナデ調整，拡張した端部に擬凹線が巡っている。	○1㎜前後の砂粒を含み，淡黄褐色。
103～104	甕形土器	○平底からゆっくり斜め上方に胴部が広がる。	○内面篦削り，外面103は刷毛，104は篦磨きで底部近くはナデ調整。	○数㎜の小石粒を含み，黄褐色。
105	鉢形土器	○内湾して延びた口縁端部がほとんど真直ぐ上方に向う。	○体部は縦方向に篦磨きされ，口縁端部はナデ調整，外面に三条の凹線が巡る。	○0.5㎜程の砂粒を含み，淡茶褐色。
106～111	高杯形土器	○内湾する体部に，わずかに広がる短かい脚柱部をもち，裾部は真直ぐ「ハ」	○108・109の内面は刷毛，外面は篦磨きが脚柱部にかけてなされ，裾部は，内外面刷毛調整される。	○精製された水漉し粘土で，赤褐色。111は明黄色。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		の字に広がる。110の裾端部は下方びている。	107は剝離の為調整不明である。110・111の裾部はナデ調整。	

5) H—2

112	甕形土器	○折れ曲った口縁端部が真直ぐ上方に長く立ち上がってやや肥厚する。	○剝離の為不明であるがナデ調整されている。	○1㎜前後の砂粒を含み，灰黄色。
113	甕形土器	○「く」の字状に折れ曲がった口縁端部が外上方に延び，肩部は張らず胴部で最大径を測る。	○口縁部は刷毛，端部はナデ調整，胴部は外面刷毛，内面箆削り。	○1㎜程の砂粒を含み，外面は赤褐色，内面は黄褐色。
114	甕形土器	○あまり外側に広がらずに立ちあがり，平底になる。	○外面箆磨き，内面箆削りされ，底部はナデ調整。	○1㎜程の砂粒を含み，淡灰茶色。
115～119	甕形土器	○外方にゆるやかに立ち上がる底部，118はやや急な立ち上がりを見せる。	○内面は概ね箆削り，外面の底部およびその付近はナデ調整。	○数㎜の小石粒を含み，115・118は赤褐色，116・117・119は暗灰色～黒色。
120～123	高杯形土器	○上方に近い角度に内湾して立ち上がる椀状の杯部に，122は外反気味にゆるやかに広がる。短かい脚柱部をもつ。	○杯部は内外面に横方向を基本に細かい箆磨き，脚柱に近いところから脚柱部にかけては，その上からさらに縦方向の箆磨き。	○120は0.5㎜程の砂粒を含み，黄褐色。121・123は水漉し粘土，122は数㎜の砂粒を含み赤褐色。
124～125	高杯形土器	○杯部は横に直線的な広がりをみせる。口縁部はほぼ真直ぐ斜め外方に延び，脚柱部は筒型で少し開く。	○124外面は縦方向の箆磨き。125は剝離の為，調整不明。	○125は1㎜前後の砂粒を含み，全体に丹塗され，124は水漉し粘土で，赤褐色。
126	高杯形土器	○少し開き気味の短かい脚柱部からほぼ真直ぐ外下方に，4つの円孔を穿った裾部が広がる。	○器面が剝離していて不鮮明であるが，外面は細かい箆磨きがなされている。	○水漉し粘土で，赤褐色。
127	鉢形土器	○斜め外方に，端部が肥厚して延びる。	○剝離の為不鮮明であるが，外面に指頭圧痕が残る。	○1㎜程の砂粒を，含み黄褐色。
128～129	鉢形土器	○斜め外方に少し内湾して延び，128の端部は次第に薄くなる。底部は端をつまみあげて高台風にしている。	○128の内面は刷毛，外面はナデ調整。129は内面ナデ，外面細かい刷毛調整。	○0.6㎜程の砂粒を含み，128は淡灰茶色。129は暗赤褐色。

6) H—5

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
130	甕形土器	○胴長の体部から，「く」の字状に外反する口縁部をもつ。	○体部外面は刷毛調整を行う。	○1㎜以下の砂粒を多く含む。淡黄褐色。
131～132	甕形土器	○球形に近い体部から，外反する口縁部をもつ。	○体部外面は刷毛，131の内面は部分的に刷毛目が残る。	○明茶褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。
133	鉢形土器	○小さい平底をもち，ラッパ状に開く。口縁端部をわずかに外反させる。	○器面磨滅のため明確でないが，口縁部は横なで，体部外面は僅に器削り痕が認られた。	○乳黄白色を呈し，0.5㎜以下の砂粒を僅に含む。
134	甑形土器	○下部が狭く，口縁が広い筒形をなす。	○下端部に4孔を穿つ。外面は縦方向の，内面は横方向の刷毛調整を行う。	○欠損部付近に把手がつく。
135～137	杯身	○浅い杯部から，受け口ぎみの受部を持ち，内傾する短い立ち上がりをもつ。	○137の杯部外面は篦削りを行う。	○135はひずんでいる。
138～140	甕形土器	○138は内湾ぎみの，139は強く外反する口縁部の破片である。 ○140はほぼ⅔弱を残し，球形に近い体部から「く」の字状に外反する口縁部をもつ。口縁端部外側に断面三角形の凸線を持つ。	○139・140の体部外面は縦方向の平行叩き，内面は青海波文たたきを有す。140はその後外面には横方向の刷毛調整，内面は部分的に篦削りを行って器面を整えている。	○140の体部上部は濃緑色の自然釉がかかる。

7) H—6

141	杯蓋	○口縁部はやや外開きする。	○残存部は横ナデ。	○小破片である。
142	甕	○ラッパ状の口頸部で，口縁部はわずかに内湾する。端部は丸くおさめる。	○同上。	○同上

土　　壙

1) 土壙—1

143	蓋形土器	○直径14㎝，高さ2.6㎝を測り，つまみの部分は僅かに高くなっている。口縁部には2個1対の円孔が穿たれている。	○口縁部内外面は横ナデ，体部外面は刷毛及びナデ調整の後，4～5条を単位とする刷毛状工具による施文がなされているが，条線は非常に浅い。内面は細かな篦磨きを施している。	○赤褐色を呈し，1㎜前後の砂粒を含む。 ○口径がやや小さいものの156に付くものか？

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
144～146 155～156	壺形土器	○体部からゆるく外反して上方に立ち上がる口縁部をもち，口縁部端面に1～2条の凹線をもつ。144は立ち上がる部分に10本の凹線をもつ。 ○155，156は，そろばん玉状の体部をもち口頸部が短く，脚をもつ。	○145の外面は篦磨き。 ○146の体部は内面大半部は篦削りを行う。 ○156の体部と口頸部境・脚部に2孔一対の穴を穿つ。頸部から肩部にかけては3列の篦による列点文を巡す。体部外面大半は篦磨き，内面大半は篦削りを行う。脚部外面は刷毛，内面は篦削りを行う。	○156は円板充填。
151～154	壺形土器	○ゆるく外反する口縁部の端部を上下に拡張し端面には1～2条の凹線をもつ。151，152は短い頸部をもち，153は折れ曲るようになる。	○体部外面は篦磨き，内面は篦削りを行う。153の体部内面上部は刷毛調整を行う。	○淡黄灰色～赤茶褐色を呈す。 ○3㎜前後の砂粒を含む。
147～150	壺形土器	○筒状の頸部から，外反する口縁部をもち，その端部に凹線文をもつ。147は頸部に凹線文をもつが148はもたない。148の口縁端部凹線文上に棒状浮文を貼り付ける。	○148の体部外面は横方向の篦磨きを行う。 ○176は底部を指で一段押さえて1周する。 ○体部外面上半は刷毛調整後篦磨き，内面は篦削りを行う。	○173～180は体部以下のものであるが，178～180は甕形土器になる可能性もある。
157～160 161～162 (大型) 163	甕形土器	○卵形の体部から「く」の字状に外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張し数条の凹線を施す。 ○163は，口縁端部を拡張しない。	○体部外面は，刷毛調整後下半部のみ篦磨きを行うもの160と，刷毛調整のまま終るもの158がある。内面は，頸部下まで篦削りを行う。160の体部には篦による刺突文が巡る。	○淡茶褐色～赤褐色を呈すものが多く2～3㎜前後の砂粒を含むものが多い。
166～172	高杯形土器	○杯部は外に開き，口縁部はわずかに外に開くもの167と，ほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部を内側につまみ出すもの168，外側に出すもの169がある。 ○台脚部は「ハ」の字状に開き端部を斜め上方につまみあげる。短脚のものと長脚のものがある。	○杯部内外面とも丁寧な篦磨きを行うが，縦方向，横方向の両者が存在する。脚部は縦方向の篦磨きを行う。脚端部に円孔を穿つもの（169），先の細い篦状工具で縦方向に切り込みを廻すもの）171．172），何も施さず篦磨きのままのもの（170）がある。脚部内側は篦削りを行う。	○円板充填。 ○赤褐色を呈し，し1～2㎜前後の砂粒を含む。
181～182	鉢形土器	○大型の鉢で底部からふくらみをもたずに斜め上方に開き口縁部で上方にのびる3条の凹線を施す。	○体部外面は刷毛調整を行うもの（181），篦磨きを行うもの(182)がある。	○赤褐色を呈し，1～3㎜前後の砂粒を多分に含む。

2）井戸－1

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
183	壺形土器	○直口壺である。 ほぼ垂直に立ち上がる頸部から短かく外傾する口縁部をつくる。 胴部は，中央やや上で張りをもつ。 底部は，安定した平底である。	○口縁部から頸部にかけての内外面は，横ナデ。 ○外面は，刷毛目で調整している。 ○内面は，頸部から肩部にかけて押圧とナデで調整。 ○肩部下は，篦削り。	○外・茶黄褐色。内・暗灰色。 ○1～3㎜の砂粒を多く含む。 ○肩部とそれと対角線上の胴部下半に2ケ所黒斑がある。

3）井戸－2

184～185	壺形土器	○口縁部は，「ハ」の字状に開く頸部から，鋭く屈曲し斜め上方に伸びる。 口縁端部は，上方にやや拡張する。	○184は，口縁部，頸部を刷毛調整ののちナデ調整。肩部下は，刷毛調整を施したあと篦磨き。 内面は，頸部まで横ナデをおこなう。肩部下は，横方向の刷毛調整を施す。 ○185は，口縁部を横ナデ，頸部を細かい刷毛調整のあと部分的にナデ調整。肩部下は，刷毛調整のあと篦磨きを施す。内面は，横ナデ，篦削りを施す。 肩部には，断面三角形の凸帯をめぐらす。	○184・茶褐色 ○185・淡褐色 ○1～2㎜の砂粒を含む。 ○185の頸部外面に円の付着。
186	壺形土器	○口縁部は屈曲し斜め上方に伸び，稜線をもちさらに上方に拡張する。 ○頸部は184・185に比べ立ち上がる。体部は，丸味をもち，最大径はほぼ中程にある。底部は，安定した平底である。	○外面は，刷毛調整を施したのち，頸部下を縦，横の篦磨きを使い分けている。他は，不明。	○淡赤褐色 ○1.5㎜以下の砂粒を含む。
187	壺形土器	○口縁部は，短かい頸部から鋭く外反し，さらに上方に伸びる。肩部はなで肩で，胴部は中央で張ると思われる。	○全体に刷毛調整を施した後，口縁部，頸部内外面は横ナデをおこなう。外面は篦磨きで調整。内面には指頭圧痕が残る。	○淡赤褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
188	壺形土器	○「く」の字状に開く口縁部をもつ。	○外面は刷毛調整を施す。のち口縁部を横ナデで消している。	○茶褐色で，1㎜以下の砂粒含む。
189～190	壺形土器	○口縁部はゆるやかに外反し，さらに外湾しながら上方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。	○189は外面に刷毛調整を施したのち，頸部は縦方向の篦磨き，胴部は横方向の篦磨きを施す。内面は口縁部近くまで篦削りをおこなう。	○淡赤褐色 ○1.5㎜以下の砂粒を含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
191	壺形土器	○口縁部は直立する頸部から外反し，端部は上方に肥厚する。	○外面，及び内面の頸部まで篦磨きを施す。内面の頸部下は刷毛調整。	○淡赤褐色。 ○1㎜以下の砂粒を含む。
192～194	甕形土器	○いずれも小型の甕である。口縁部は上方に伸びるもの（192），ゆるやかに外反するもの（193，194）がある。	○192は外面を刷毛調整ののちナデ調整。193，194の外面は刷毛調整。194の口縁部内面も刷毛調整を施す。	○192・内・黒灰色。外・黒茶褐色。 193・茶灰色。 194・乳白色。 ○1㎜前後の砂粒を含む。 ○194には1ケ所に黒斑。
195～200	甕形土器	○「く」の字状の口縁をもつ小型の甕である。195～198は口縁端部を丸くおさめている。200の口縁端部は水平な端面をもつ。	○199～200は叩きを施している。196・198の外面は縦方向の刷毛調整。内面はほとんど篦削りであるが，198が口縁部を刷毛，199は内面全体を刷毛調整している。	○195・淡茶褐色。 196・灰白色。 ○1.5㎜前後の砂粒を含む。
201	甕形土器	○「く」の字状の口縁部がさらに上方に拡張する。	○外面は刷毛調整のあと，部分的に篦磨き調整。	○暗灰色で。 ○0.5～1㎜の砂粒を含む。
202	甕形土器	○「く」の字状に外湾しながら開く口縁部をもつ。胴部はあまり張らない。	○外面は刷毛調整，内面は篦削り，口縁部内外面は横ナデ。	○灰茶褐色。 ○1㎜以下の砂粒を含む。
203	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に開く。 ○胴部は細長く卵形を呈する。	○調整，202と同じである。	○内・淡赤灰色。外・赤褐色。 ○1.5㎜以下の砂粒を含む。
204	甕形土器	○口縁部は外湾しながら開く。胴部は中央で張る。	○外面は叩きののち，頸部下を刷毛調整。内面は口縁部が刷毛調整ののちナデ，頸部下はナデ調整。	○乳褐色。 ○1㎜以下の砂粒を多く含む。
205	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に鋭く屈曲する。口縁部内面には凹部をもつ。	○口縁部は横ナデ，外面は篦磨きを施す。内面は指頭におさえとナデで調整。	○茶褐色。 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。黒雲母が多い。堅緻。
206	甕形土器	○外湾する口縁部をもつ。胴部は球形に近く安定した底部をもつ。	○内外面とも刷毛調整。口縁部内面は刷毛調整ののち横ナデ。	○茶褐色で，1㎜前後の砂粒を含む。煤付着。
207～231	甕形土器	○口縁部は「く」の字状に屈曲し，さらに上方，やや内傾しながら立ち上がる。体部は倒卵型のものがほとんどである。底部はかすかに平底の面影を残す。また大型のもの	○口縁端面には，櫛状工具による平行沈線文が施されている。 ○外面は頸部から下を刷毛調整を施したのち，肩部近くまで篦磨きをおこなう。 ○内面は，頸部下を篦削りをおこなう。また，底部，及び肩部には指	○ほとんどのものは，暗褐色を呈する。 ○0.5～1㎜の砂粒を含む。 内外面には，煤付着。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		(207～212) と小型のもの (222～230) とに大別される。例外的に肩部が極端に張るもの (217) がある。また，口径10cm未満のもの (231) がある。	頭圧痕が認められる。 ○肩部外面には，2～3個の篦先で刺したと思われる刺突が多く認められる。	○231には，一部丹の付着が認められた。
232～249	高杯形土器	○杯部は全体に大きく，斜め上方に反りかえるものか，反りをもたずに斜め外方にのびるものがほとんどである。杯部の稜線は，まだ残している。 ○脚部は短脚で，裾部は屈曲して「ハ」の字状に開くのを基本的な特徴としている。	○外面は例外なく篦磨きを施し，口縁部，脚部を横ナデにより調整している。 ○脚裾部は，刷毛調整ののち篦磨きが認められる。(235・237・246・247) ○脚裾部内面は，刷毛調整ののち，ナデで調整している。(235・238・245など) ○特に237は，杯部内外面は，刷毛目ののちナデで調整。脚柱部は篦磨き。裾部は刷毛目だけで終えている。 ○円孔はいずれも裾部に4ケ所あけられている。	○赤黄褐色～褐色。 ○0.5mm以下の砂粒を含む。 ○水漉し粘土
250～252	鉢形土器	○口縁部は，内湾するもの (250) と稜線をもちやや細くなって上方に立ち上がるもの (251・252) がある。底部はやや丸味をもった平底である。	○250は，外面を篦削りした後，底部を刷毛，口縁部を横ナデ調整する。内面は刷毛目を施す。251は篦削りの後，雑な篦磨きを施す。内面は，荒い刷毛目のあとナデ調整。252は内外面とも篦磨きを (縦・横方向に) 使い分けている。	○250・内・淡茶褐色。外・褐色。 ○251・暗茶褐色。 ○252～69～252には1ケ所に黒斑あり。
253～254	鉢形土器	○短かい台付きの鉢である。体部はやや内湾しながら立ち上がる。全体に器壁は厚い。	○253，254とも外面は篦削りののちナデにより調整。内面は253が篦削りののち上部に刷毛目を施す。253は刷毛調整。	○黄褐色。 ○1mm以下の砂粒を含む。
255	鉢形土器	○杯部は浅くて大きい。 ○口縁端部は面をもつ。 ○脚部については不明。	○外面は，篦削りののち，口縁部近くを横ナデ調整。内面は，刷毛目のあと底部を篦削り。	○赤褐色。 ○1mm前後の砂粒を含む。
256～257	鉢形土器	○口縁部は「く」の字状に屈曲し，上方に拡張するもの (256) と上下に拡張するもの (257) がある。		○暗灰色 ○1.5mm以下の砂粒を含む。
258	鉢形土器	○いわゆる二重口縁の大型の鉢である。 ○口縁端部は横方向に肥厚	○口縁部・頸部内外面は，横ナデ，胴部は，丁寧な篦磨き，内面は篦削りを施したのち，上半だけ篦磨	○淡褐色 ○黒斑が1ケ所 (破片)

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		する。	きで調整。	
259	鉢形土器	○口縁部は「く」の字状に開き，さらに横・上方に拡張する。口縁端部には凹部をもつ。256の大型である。	○口縁部は，横ナデ。外面は，縦の刷毛目ののち篦磨き。内面は篦削りを施したのち，頸部付近は篦磨きをおこなう。	○淡黄褐色
260～263	鉢形土器	○小型の鉢である。		

4）土壙2

264	甕形土器	○平底の底部からやや斜め外方に胴部が立ち上がる。	底部からの立ち上がり部分は指ナデされ，内面は上方へ篦削りされる。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，淡褐色。

包　含　層

微高地西斜面

265	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁端部が内傾して上方に延びる。肩部は張らずに胴部上半で張りをみせ最大径を測る。これより内傾して底部に向う。	○口縁部はナデ調整され，端部外面に3条の凹線がみられる。頸部から胴部にかけて外面は縦方向に刷毛調整され，胴中央よりやや上は，横方向に刷毛調整が，中央から下部は縦方向に篦磨きされている。内面は中央部までナデ，これより下部は斜め上方に向けて篦削りされる。	○0.5㎜前後の砂粒を含み，灰茶褐色。外面胴部から下には煤の付着がみられる。
266	甕形土器	○外反した口縁端部が肥厚し，上部は上方に下部は斜め下方に拡張。	○口縁部はナデ調整され，拡張した端部外面に4条の凹線が巡る。	○1㎜以下の砂粒を含み，淡赤褐色。
267～268	壺形土器	○外湾気味の筒状の頸部から斜め外方に延びる口縁の端部がやや肥厚し，下方に拡張する。268は肩部から胴部にゆったり広がり，ほぼ中央で最大径を測る。底部に向っては内湾気味にすぼまる。底部は平底である。	○口縁部はナデ調整され，拡張した端部に凹線が巡る。頸部は縦方向に篦磨きされ，その上を9・10条の沈線が巡る。そのすぐ下に卵型の刺突が一列巡る。268の肩部から底部にかけて外面は縦方向の篦磨き，内面上半は横，下半は上方に向け篦削りされる。	○1㎜前後の砂粒を含み，267は黄褐色，268は黄灰色。
269	壺形土器	○外反した口縁が肥厚して端部が上下に拡張している。	○拡張した口縁端部上面には竹管文が巡り，多面にはナデ調整後鋸歯文が篦描きされている。	○1㎜程の砂粒を含み，淡黄褐色。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
270～273	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁の端部が幾分肥厚して，わずかに上下に拡張している。	○口縁部はナデ調整され，端部外面に270は3本の凹線，271・272・273はナデによる凹みが巡る。270の内面には刷毛目が残る。肩部から内面は横方向に篦削り，270・271の外面は刷毛調整される。	○1㎜以下の砂粒を含み，270・271は淡乳褐色272は暗乳灰色273は明茶褐色。
274	甕形土器	○底部の端がつままれて少し延びている。胴部は内湾気味に斜め上方に向う。	○胴部外面は縦方向の刷毛，内面は上方へ篦削りされている。つままれた底部はナデられ指頭圧痕がみられる。	○0.5㎜程の砂粒を含み，暗乳褐色。
275	甕形土器	○平底の底部から胴部が斜め外方に延びる。	○外面篦磨き，内面ナデ調整。	○0.5㎜程の砂粒を含み，外面黒色，内面淡赤褐色。
276～277	甕形土器	○平底の底部から胴部が斜め外方に延びる。	○底部はナデ，胴部外面は縦方向の篦磨き，277の内面は上方に篦削りされる。底部内面は指で押えられている。	○1㎜内外の砂粒を含み，276は乳白色，277は明茶褐色。
278	高杯形土器	○杯部から脚柱裾部にかけてゆるやかに外湾し，裾端部で幾分肥厚する。脚部の上段に3個，下段に4個の円孔が穿たれている。	○脚外面は縦方向に篦磨きされている。	○1㎜程の砂粒を含み，淡赤灰色。
279	高杯形土器	○幾分肥厚しながら真直ぐ斜め外下方に延びる。	○裾端部はナデ調整され，裾部内面は横方向に篦削りされる。	○1㎜程の砂粒を含み，暗灰色。
280	高杯形土器	○外湾気味に開き，裾部に4つの円孔を穿つ。	○裾部外面は縦方向に篦磨きされている。	○1㎜程の砂粒を含み，黄褐色。
281	器台形土器	○外湾気味に延び，端部が幾分肥厚して上方に拡張している。	○端部はナデ調整され，外面に縦方向の篦磨きがみられる。	○1㎜程の砂粒を含み，淡赤褐色。
282～284	鉢形土器	○製塩土器の台部片で，282は端部が幾分広がっている。	○282は外面上方に篦削り，内面ナデ，283はナデ調整される。284は外面も上方に篦削りされる。	○1㎜前後の砂粒を含み，282・283は赤紫色，284は淡赤褐色。
285～287	甕形土器	○外反した口縁の端部が，幾分内傾して上方に延びる。	○口縁はナデ調整され，延びた端部外面に，285・286は4本の凹線が巡る。287もナデによる凹みが3本みられ，肩部内面は横方向に篦削りされる。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，285・287は淡褐色，286は暗灰色。煤が付着。
288～290	甕形土器	○頸部から外反した口縁の途中から，上方にやや外湾気味に立ち上がり二重口縁をなす。肩部はゆるやかな広がりをみせる。	○口縁はナデ調整され，290の口縁部から肩部にかけては，外面は縦方向の刷毛，内面は横および斜めに篦削りされている。	○0.5㎜程の砂粒を含み，288は茶褐色289・290は黄褐色。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
291	甕形土器	○外反した口縁部が内湾して，ほぼ上方に延びている。	○口縁部は外面ナデ調整，内面は斜め横に篦磨きされ，頸部外面は縦方向，内面は斜め横方向に刷毛調整されている。	○0.5㎜程の砂粒を含み，赤褐色。
292	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁が内湾して，斜め外方に立ち上がる。肩部から幾分張り気味に胴部に至り，ここでやや横広の胴部を呈している。	○口縁部はデデ調整，肩部内面もナデ調整がみられる。胴部から下方は，横および斜め上方に篦削りされる。	○1㎜前後の砂粒を多く含み，淡黄色。
293～294	甕形土器	○外反した口縁が外湾気味に斜め外方に延び，294は端部が幾分上側に持ち上がっている。	○口縁部はナデ調整され，頸部から肩・胴部にかけて外面は刷毛調整，内面，は293が横方向，294が斜め上方に篦削りされる。	○293は0.5㎜程の砂粒を含み淡茶褐色，294は数㎜の砂粒を含み赤褐色
295～296	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁の端部が内傾気味に上方に延び，295は端部が薄くなる。	○口縁部はナデ調整され，延びた端部外面に6・7条の櫛描平行線が施され，肩部は外面に縦方向の刷毛が内面に横方向の篦削りにより調整されている。	○1㎜以下の砂粒を含み，295は黄灰色，296は明茶褐色を呈す。
297～300	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁の端部が，上方に真直ぐ延びる。肩部はゆっくり広がる。	○口縁部はナデ調整され，延びた端部外面に7～9条の櫛描平行沈線が施される。肩部内面は篦削りされ，外面は刷毛調整。300ではその上の篦磨きが肩部にまで及んでいる。299の肩部外面に一個刺突がみられる。	○1㎜以下の砂粒を含み，297・298は茶褐色，299は暗褐色，300は乳褐色を呈している。
301	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁の端部がやや外傾して上方に延びる。肩部で少し張りをみせ，胴部はほとんど広がりをみせない。	○口縁部は横ナデされ，上方に延びた端部外面に，8条の櫛描平行沈線が施され，肩部から下は，外面に縦方向の細かい篦磨きが，内面は篦削りされ指頭圧痕が多く残っている。	○1㎜前後の砂粒を含み，暗灰色を呈している。外面底部は煤の付着がみられる。
302～305	高杯形土器	○内湾気味の体部に，外湾する長い口縁部が付き，深めの杯部をなす。	○杯部の内外面に，概ね横方向に細かく篦磨きされている。	○精製された粘土で，赤褐色。
306	高杯形土器	○杯部からごく短かい，広がる脚柱を圣て，4つの円孔を穿つ裾部が，真直ぐ斜め下方に開く。	○裾部外面は横方向に篦磨きされる。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，黄褐色。
307	高杯形土器	○脚柱から裾部へ外湾しながら，屈曲せずゆるやかに広がる。裾部には上下交互に4つの円孔が穿たれている。	○剥離していて調整は不明である。	○0.5㎜程の砂粒を含み，黄褐色を呈す。所々，丹塗のあとが赤褐色を呈す。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
308	高杯形土器	○少し開き気味の筒状の脚柱に屈曲気味に折れ曲った裾部が真直ぐ斜め下方に広がる。裾部には4つの円孔が穿たれている。	○脚柱部はナデ調整され，裾部内外面には任意の方向で，刷毛調整されている。	○0.5㎜程の砂粒を含み，暗黄褐色。
309～310	高杯形土器	○広がり気味の短かい脚柱に，4つの円孔を穿った裾部が，外反して真直ぐ斜め下方に延びる。310の裾端部は下方に曲がり気味になっている。	○309は器面が剥離していて調整は不明である。310は脚柱部および裾部下半に横方向の細かい篦磨きがされ，裾端部はナデ調整されている。	○309は1㎜程の砂粒を含み，黄褐色。310は数㎜の砂粒を含み，淡赤褐色。
311～314	高杯形土器	○内湾する椀状の杯部で，口縁部がほぼ上方に延びている。この杯部に広がり気味の短かい脚柱がつく。斜め外下方に，312・314は内湾気味，313は外反気味の4つの円孔を穿った裾部が，脚柱から屈曲して広がる。	○312の杯部外面は横方向の細かい篦磨きが，裾部外面は縦方向に刷毛調整されている。314の杯体部外面は横方向に細かい篦磨きがされている。器面がほとんど剥離していて調整が不鮮明となっている。	○水漉の粘土で，赤褐色。
315～316	高杯形土器	○広がり気味の短かい脚柱から，4つの円孔を穿った裾部が，315は内湾気味に開く。	○脚柱部は横方向の細かい篦磨き，裾部は刷毛調整される。	○精製された粘土で，淡赤褐色。
317	高杯形土器	○脚柱から外湾して広がりながら，4つの円孔を穿った裾部が外方に開いている。	○脚柱部には篦磨きがみられるが，他の調整は不鮮明である。	○精製された粘土で，淡赤褐色。
318	高杯形土器	○筒状の脚柱から外反して4つの円孔を穿った裾部が真直ぐ外方に広がる。	○裾部内外面とも刷毛調整されている。	○水漉の粘土で，赤褐色，裾部外面の一部に黒斑。
319	高杯形土器	○外反して「ハ」の字状に開いている。	○内面は刷毛による調整。	○精製された粘土で赤褐色。
320	鉢形土器	○幾分内湾しながら延びた口縁端部が少し薄くなる。底部は平底。	○口縁部内面に刷毛調整がみられる。	○精製された粘土で，赤褐色。
321	鉢形土器	○内湾する体部をもち，底部は幾分丸味を帯びた平底である。	○口縁外面にナデ調整による凹線がみられる。	○0.5㎜以下の砂を含み，赤褐色。
322	鉢形土器	○内湾気味に斜め外方に延びた体部に，台が付いている。	○外面は横方向に刷毛調整，内面は任意の方向で刷毛調整，台部はナデ調整している。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，淡茶褐色。外面の一部に煤が付着。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
323	鉢形土器	○内湾する体部に，口縁部が内湾して上方に延びる，台付の土器。	○口縁部から外面にかけて横方向に篦磨きされている。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，淡赤褐色。
324～325	鉢形土器	○内湾する丸底の土器で，324は口縁端部がやや薄くなっている。	○324の外面は刷毛調整。325の口縁部はナデ調整され，体部は刷毛調整後外面は横方向に篦磨きされ，内面は上方に篦削りされる。	○水漉し粘土で赤褐色。 ○324の底部外面に黒斑有り。
326	鉢形土器	○内湾する体部に外反して，口縁部が斜め外方に延びる。	○口縁部付近の内外面に細かい横方向の篦磨きが，体部中央部外面は刷毛調整されて，底部外面は篦磨きされている。	○0.5㎜程の砂粒を含み，赤褐色。
327	鉢形土器	○内湾する体部に外反して，口縁部が斜め外方にやや薄くなりながら延びる。	○口縁部はナデ調整され，体部内面はナデ，外面は荒い刷毛調整が行なわれている。	○0.5㎜以下の砂粒を含み，外・淡黄白色内・淡乳白色。
328～329	鉢形土器	○製塩土器の底部で328の端部はやや薄くなる。	○体部は叩き調整で，台部はナデにより調整されている。体部内面は刷毛調整されている。	○数㎜の小石粒を多く含み，328は淡紫白色。329は赤褐色。

包含層

330～338	鉢形土器	○精製の浅鉢である。口縁部は，「く」の字状に屈曲し，端部は丸くおさめるもの（330・336・337・338）と端面をもつもの（332）がある。さらに上記にくらべやや深目のもの（331・334）がある。体部はやや反り気味である。	○内外面とも丁寧な篦磨きを施す。口縁部には，部分的にナデ。334は，内外面をナデ調整。	○暗茶灰色～茶褐色。 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。
339～341	鉢形土器	○精製の浅鉢である。大きく外方に開く口縁部をもつ。口縁端部は，丸くおさめるもの（340），肥厚するもの（341）がある。また，339の口縁部には，突起が付く。	○内外面とも，丁寧な細かい篦磨きを横方向に施す。	○黒灰色～茶灰褐色。 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。
342～346	鉢形土器	○口縁部は，直立ないしやや外傾する。口縁端部は丸くおさめる。344の体部には，二次的な孔があ	○内外面とも篦磨きを施す。部分的にナデ調整。345の口縁端部にはキザミ目をもつ。	○黄灰色。 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		り，補修孔と考えられる。		
347～349	鉢形土器	○口縁部は，やや外反するもの（349）と，直立気味に立ち上がるもの（347・348）がある。	○体部外面は，条痕が施されており，内面はナデで調整している。349の口縁端部にはキザミ目をもつ。	○暗茶灰色～茶褐色。 ○2㎜以下の砂粒を含む。
350	甕形土器	○口縁部は鋭く外方向に屈曲する。口縁端部は，やや上下に拡張する。	○口縁部は，ナデを施す。体部内外面は，ナデ調整。	○外・暗灰色。 内・茶灰色。 ○1.5㎜以下の砂粒を含む。
351	壺形土器	○直立した頸部からほとんど横向に急に外反した口縁が肥厚し，端部が上下に拡張している。	○口縁部はナデ，拡張した端面に4条の擬凹線が巡り，その上に3個単位の鋸歯文が篦描きされている。頸部には凹線が巡る。	○細かい砂粒を含み，灰黄褐色。
352	壺形土器	○やや分厚い頸部から湾曲して外反した口縁部が，薄くなりながら横に延び，端部が少し拡張している。	○口縁部はナデ，体部外面は櫛描き，内面は頸部に刷毛目がみられ，体部は横方向に篦削りされている。	○ほとんど砂粒を含まない胎土で，黄灰褐色。
353～356	甕形土器	○外反した口縁部が肥厚し，その端部が353は横に，354～356は斜め上下に拡張して端面をつくっている。	○口縁部はナデ，端面に擬凹線がつくが，353の内面は篦磨きされている。体部内面は横方向の篦削り，外面は354は刷毛目，355は板目，356は櫛目がみられる。	○353は1～2㎜354～356は3～4㎜の砂粒を含み，黄褐色～黄灰色。
357	高杯形土器	○斜め外上方に延びた体部から，急に折れ曲って口縁部がほぼ上方に肥厚して延び，端部が横に拡張している。	○口縁部はナデ，拡張した上端面に沈線がみられる。	○1～2㎜の砂粒を含み，黄灰色。内面に黒斑がみられる。
358～359	高杯形土器	○体部から内曲した口縁部が外反しながら斜め外上方に延びる。	○全体にナデ調整され，358の口縁外面には暗文の波状文がみられる。	○358は細かい砂粒で，黄灰褐色。 ○359は赤褐色。
360	高杯形土器	○体部からゆるやかに外反した脚部が，斜め外下方に広がり，裾端部が斜め上下に拡張している。	○裾端部はナデ，脚部内面は横方向の篦削り，外面は縦方向に篦磨きされている。	○1～2㎜の砂粒を含み，淡灰褐色。
361	高杯形土器	○外反してわずかに広がる脚部で，上段3個，下段4個の円孔を穿つ。	○外面は櫛目，内面裾部には刷毛目がみられる。	○1～2㎜の砂粒を含み，灰黄褐色。
362～363	高杯形土器	○裾部が「ハ」の字形にほぼ真直ぐに広がる脚部で4つの円孔を穿つ。	○外面は362は縦方向の刷毛，363は篦磨きされ，内面は篦削り端部はナデ調整。	○1～3㎜程の砂粒を含み，灰褐色。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
364	鉢形土器	○外反した口縁部が少し肥厚して端部が上方に長く延びる，体部は張らずに少し丸味をもつ。	○口縁部はナデ，体部は内面に横方向の篦磨き調整されている。	○2～3㎜の砂粒を含み，外・赤褐色，内黄・灰褐色で，黒斑あり。
365～376	鉢形土器	○小型台付鉢の底部片で端部が365～367は広がり，371は丸味をもつ。	○外面篦削り。	○数㎜の砂粒を多く含み，黄灰色～赤灰色。
377	壺形土器	○外反した口縁部から頸部が，広がりながら少し丸味のある胴部に続く。	○頸部は細かい刷毛目の上から，縦方向の篦磨き内面ナデ，胴部外面板目内面篦削り。	○細かい砂粒を含む胎土で，明灰褐色。
378	甕形土器	○「く」の字状に外反した口縁端部が，上方に長く延びる。体部は肩部で最大径を測り，底部に向ってすぼまる。	○口縁部はナデ。体部は，外面上部は横および斜め，下部は縦方向の刷毛調整。内面上部は横，中部は斜め上方，下部は上方に向って篦削りされている。	○細かい砂粒を含み，外面赤褐色，内面灰褐色。外面肩から下は付煤着。
379	壺形土器	○外反した口縁部が反り気味に，斜め外上方に延びる。	○口縁部はナデ調整後，外面は縦方向の刷毛目がみられる。端面には1条の沈線が巡っている。	○細かい砂粒を含み，外面灰褐色内面黄灰色。
380	鉢形土器	○外反した口縁部が少し肥厚して，端部が斜め上下に拡張している。体部は張らないで底部に向ってすぼまる。	○口縁部はナデ調整。拡張した端面に2条の擬凹線が巡る。体部は外面ナデ，内面上部は横，下部は上方に篦削り。	○数㎜の砂粒を多く含み，外面暗灰色，内面灰褐色。
381	高杯形土器	○斜め外上方に延びる体部から，口縁部が上方に折れ曲がり，端部が肥厚気味に外反して延びる。	○器面剝離の為調整不明。	○数㎜の砂粒を多く含み，外面赤褐色，内面灰黄褐色。
382～383	高杯形土器	○少し広がる短かい脚柱部から外反して裾部が斜め外方に広がる。	○382は外面篦磨き，383は外面刷毛目の上からナデ，内面裾部は刷毛調整。	○精製された粘土で，赤褐色。
384	鉢形土器	○体部が真直ぐ斜め外上方に延び，口縁部が内湾して上方に向う。	器面が剝離して調整が不鮮明であるが，口縁外部に指頭圧痕がみられる。	○1～2㎜の砂粒を含み，黄褐色。
385	鉢形土器	○肩部で最大径を測る。体部に「く」の字状に外反した口縁部がつく。	○口縁部はナデ，体部中央は横方向に篦磨きされ，下部は縦方向の刷毛，内面に指頭圧痕がある。	
386	壺形土器	○たこ壺の一部		○淡赤褐色。
387～388	杯身	○口縁部は垂直に近く高く立ち上がり，受部は外延する。底部はほとんど真直ぐになっている。	○387の底部は篦切りされ，ろくろ回転は左である。	○1㎜以下の砂粒を含む胎土で387青灰色，388灰白色。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
389	杯身	○少し内傾して高く立ち上がる口縁部に，受部がほとんど外延しないで，少しふくらんで，底部をもつ体部がつく。	○左のろくろ回転で，底部は篦切りされている。	○1㎜程の砂粒を含み，灰色。
390～396	杯身	○口縁部は内傾して立ち上がるが底い。392・393・395・396の受部は少し上方につまみあげられている。底部は少しふくらみをみせる。	○ろくろの回転は右で，底部は篦おこしされている。	○1㎜以下の砂粒を含み，灰白色。
397	杯身	○口縁部が内傾して高く立ち上がる。受部は外延している。	○ろくろ回転は右。	○2～3㎜の砂粒を含み，灰青色。
398	椀形土器	○口縁部が垂直近く高く立ち上がり，受部はほとんど延びない。底部は丸味をもち，少し厚い。	○体部から口縁部はナデ調整で，受部下に4条の波状文がみられる。底部は篦削りされる。	○堅緻な胎土で，灰色。
399	椀形土器	○口縁部は内湾して斜め外上方に真直ぐ延びる。底部に高台がつく。	○ろくろ回転に右。	○胎土に小石粒を含み淡灰色を呈す。
400	杯蓋	○口縁部が内傾した蓋で，口縁部は受部状を呈している。		○0.5㎜以下の細かい砂粒を含み，淡灰色。
401～403	杯蓋	○401はほぼ真直ぐ，402・403は少し内傾して下方に延びる。	○右のろくろ回転で，上面はヘラ削りされている。	○0.5～1㎜の砂粒を含み，灰色。
404～406	高杯形土器	○外反しながら広がる脚部で，端部が下方に少し延び外側に面をもつ。	○405は鋭い篦状工具による円孔が4つ裾部にある。	○1㎜以下の細かい砂粒を含み，灰白色。
407	壺形土器	○「く」の字状に外反した口縁部が，反りながら斜め外上方に延びる。		○胎土は堅緻で，淡灰色。
408～414 417～418 420	椀形土器	○口縁部が斜め外上方に真直ぐ（408・410）或は内湾気味に延びる。高台付の椀。	○全体にナデ調整され，411・414・417・418・419は内面を篦磨きした内黒の土器である。	○細かい砂粒を含む胎土で，概ね灰褐色。412，413は白色。
415	壺形土器	○斜め外上方に延びた口縁端部が上下に拡張。	○口縁部はナデ調整。	○比較的堅緻な胎土で暗灰色。
416	鉢形土器	○口縁部が斜め外上方に延び，端部が少し上方に拡張している。	○全体をナデ調整。	○細かい砂粒を多く含み，黄白色。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
419	椀形土器	○高台付椀形土器の底部。いわゆる瓦器。	○調整はナデ内面には暗文の模様が少しみられる。	○0.5㎜以下の砂を含み，暗灰色。
421	皿形土器	○横に延びた皿部から口縁がわずかに立つ。	○全体にナデ調整，底部は糸切りされている。	○砂粒を含み，灰褐色。煤付着。

註

註22　「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会1972

註23　「御堂奥遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書　第2集』岡山県教育委員会1974

註24　註22に同じ。

註25　『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会1976

註26　註19に同じ。

第3節　新田樋門調査区

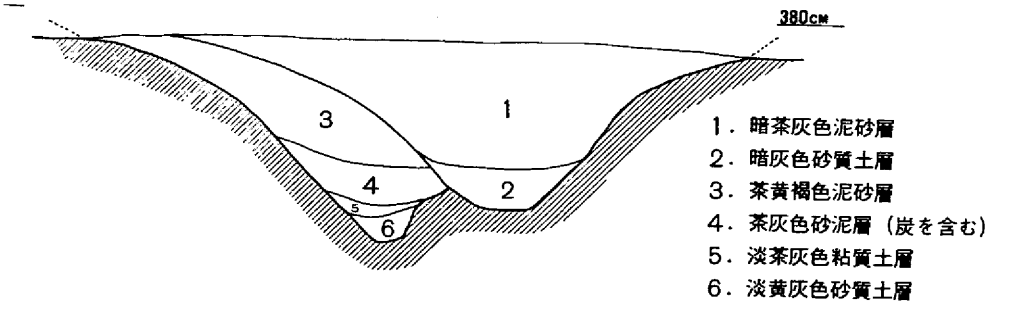
本調査区は，新田サイフォン調査区の南側に位置する。新田サイフォン調査に隣接するため，発掘当初から相当数の遺構の存在が想定された地点である。微高地上の遺構は，後世の溝・池などに削平をうけていたため，残存状態はよくなかったが，新田サイフォン調査区にまして遺構の存在数は多かった。検出した遺構は，弥生時代～平安，鎌倉時代の溝が14本，住居址が弥生時代のもの6軒，古墳時代のもの1軒，さらに井戸は，弥生時代のもの2基，古墳時代のもの1基を検出した。また柱穴状土壙も多数確認した。調査区西端部でほぼ南北方向に落ちる微高地の下りを確認した。微高地下りの上部には，弥生～古墳時代にかけての土器が多量に出土した。

溝　状　遺　構

1)　D—5，5′

調査区のほぼ中央を，南北方向に延びる。新田サイフォン調査区D—5，左岸用水調査区D—5と続く同一の溝である。D—5は，幅約200～250cm，深さ約80cmを測る。D—5′は，幅約230cm，深さ約70cmである。D—5が埋没したのち，D—5′が掘られており，ほとんどが重なり合っていることから，一本の溝であると理解した。D—5，5′は，何回かの掘りおこしが行われたと思われる。

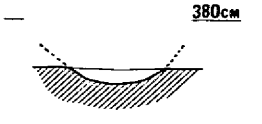
出土土器は，2，6層から縄文時代晩期，弥生時代前期の土器が少量検出されただけである。溝の時期は，これらの土器からは決定しがたく，新田サイフォン調査区H—8の切り合い関係から，弥生時代後期前半以前としておく。



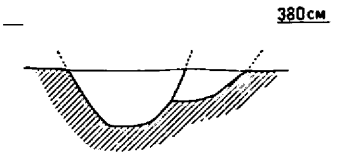
第167図　新田樋門D－5・5′断面図（$\frac{1}{30}$）

2)　D—14

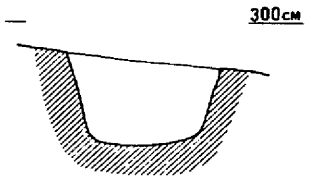
堤防下のD—9の東側に検出された。底部が残存している状態で，約5.5m検出できたにとどまった。幅40～45cm，深さ約5cmでほぼ東西方向である。井戸—2，D—12，13に切られている。出土遺物はなかった。



第168図　新田樋門D－14断面図（$\frac{1}{30}$）



第169図　新田樋門D－12(右),13(左)
断面図（$\frac{1}{30}$）

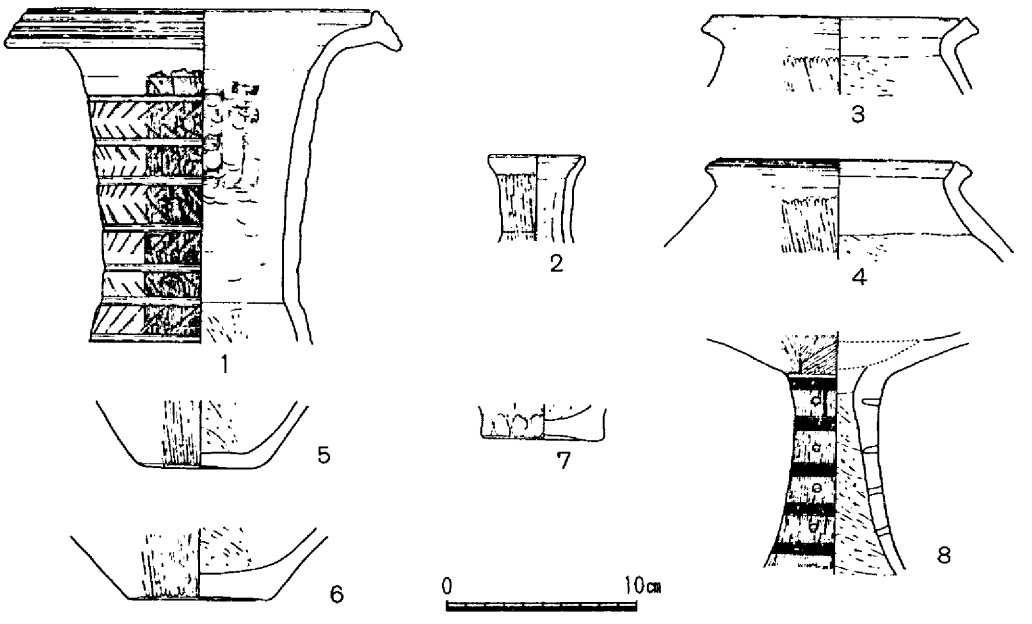


3)　D—12

堤防下のD—13の北側を蛇行して南北方向に流れる。幅50～100cm，深さ約10cmを測る。D—13に切られている。出土遺物はない。

4)　D—13

調査区北側の堤防下に位置する。幅40～45cm，深さ20～25cmで南北に流走する。切り合い関係は，D－4，9，11に切られ，D—12，14を切っている。遺物は，少量出土したが時期は決定しがたい。



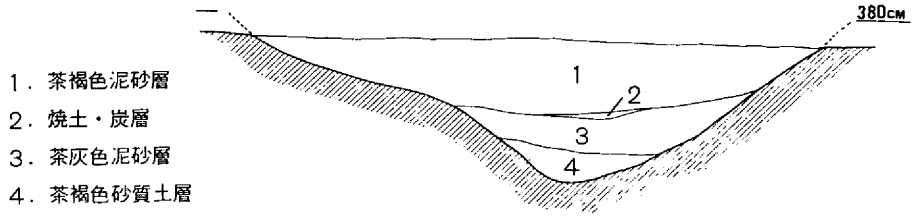
第170図　新田樋門D－8断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

5)　L—8

調査区南端の微高地斜面に検出した。微高地に沿って南北方向に延びる。新田サイフォン調査区D—17から続くものである。幅約60cm，深さ35～40cmを測る。溝内からは，百・後・Ⅰの土器が出土している。

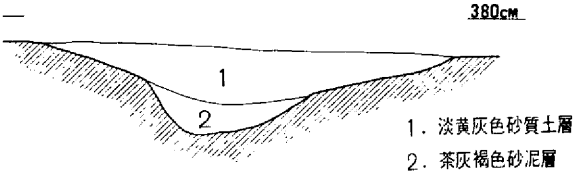
6)　D－6

調査区中央のD－5とD－7の間に検出された溝である。幅230～250cm，深さ約60cmを測る。D－7とほぼ平行して南北方向に流走する。溝の断面からみて，何回かの川ざらえが行われたものと考えられる。上層から，弥生時代後期の土器片が少量出土している。



第171図　新田樋門D－6断面図（$\frac{1}{30}$）

7)　D－7



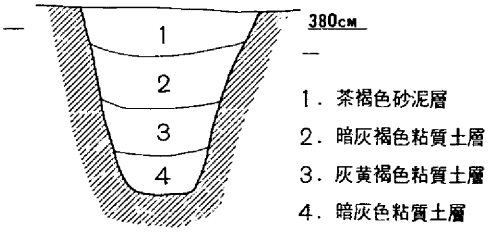
第172図　新田樋門D－7断面図（$\frac{1}{30}$）

調査区のほぼ中央のD－6の西側に検出した。H－2に一部切られている。幅100～160cm，深さ30～35cmを測る。溝底部は，海抜3.3～3.35cmである。溝は，2段掘りになっており，川ざらえが行われたものと考えられる。堆積層は，上下2層に分かれ上層の淡黄灰色砂質土層から少量の土器が出土している。土器は，弥生時代後期のものであろうか。

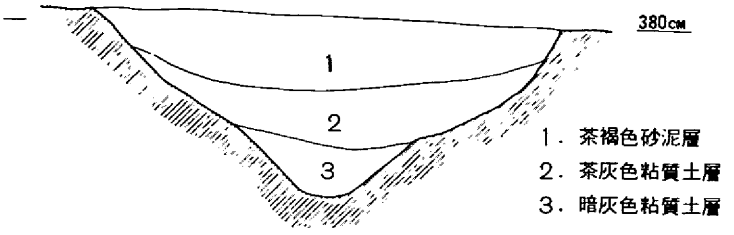
以上記してきた溝は，ほとんどが南北方向に流走する。このことは，微高地下りと平行している。以下記す溝は，逆にほとんどが東西方向に流れ，微高地下りと直交する形をとる。南北方向の溝は，一様に弥生時代後期前半期より古い時代のものと考えられ，東西方向に延びる溝との時代差が流走の方向に認められる。

8)　D－10，11

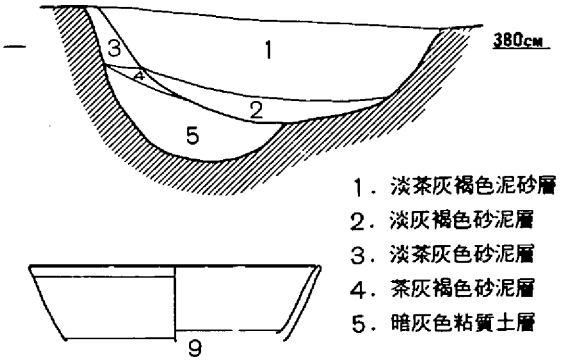
調査区北端の堤防下で検出した。D－10，11は，重なり合って東西方向に流走する。D－10は，幅約40cm，深さ約15cmで新田サイフォン調査区D－3に続く溝と考えられるが，途中までしか検出できなかった。D－11は，D－10の下部にあり，新田サイフォン調査区D－4に続くと考えられる。幅60～70cm，深さ約70cmを測る。断面は，「U」字形を呈する。溝内からは，少量であるが百・前・Ⅳの土器が出土している。



第173図　新田樋門D－10 断面図（$\frac{1}{30}$）

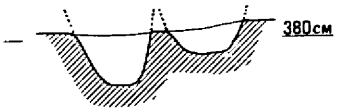


第174図　新田樋門D－9断面図（$\frac{1}{30}$）



第175図　新田樋門D－4
断面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物

第176図　新田樋門D－3
断面図（$\frac{1}{30}$）



第177図　新田樋門D－1（右），2（左）
断面図（$\frac{1}{30}$）

9）D－9

堤防下のD－12，13と直交して検出された溝である。幅100～110cm，深さ約30cmで，東西方向に延びる。新田サイフォン調査区D－11に続く。D－12，13を切っている。溝内からは，少量の土器が出土したが，時期を決定できるものではなかった。

10）D－4

D－5，6，12，13の上部に直交して検出された。幅約120cm，深さ55～60cmを測り，ほぼ東西方向に流走する。溝底部は，海抜3.35mを示す。新田サイフォン調査区D－15に続くものと考えられる。断面からみると，何回かの掘りなおしが行われたと考えられる。

11）D－3

現代溝・池などに切られているため調査区中央に検出したにとどまった。溝は，幅50～60cm，深さ15～20cmを測り，北東～南西方向に流走する。溝底部は，海抜3.60m前後である。切り合い関係からD－2より古い。溝内からは，少量の須恵器，土師器片が出土しているが，時期を決定するものはない。

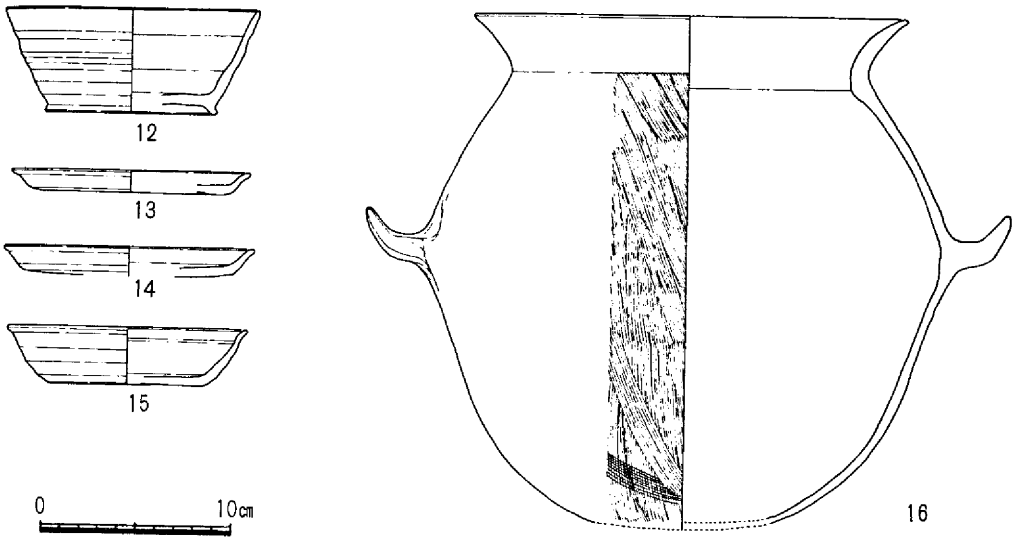
12）D－2

調査区中央に位置する。調査区北側では，D－1と平行して東西方向に流走するが，途中で南西方向に大きく曲がる。幅50～60cm，深さ15cmを測る。溝の底部は，海抜3.75m前後を示す。須恵器，土師器が少量出土している。

13）D－1

調査区中央にD－2と隣接して検出された。溝は，幅70～90cm，深さ約20cmを測り，東西方向に流走する。溝の底部

は，海抜3.65m前後である。溝内からは，平安時代の須恵器，土師器片が少量出土している。

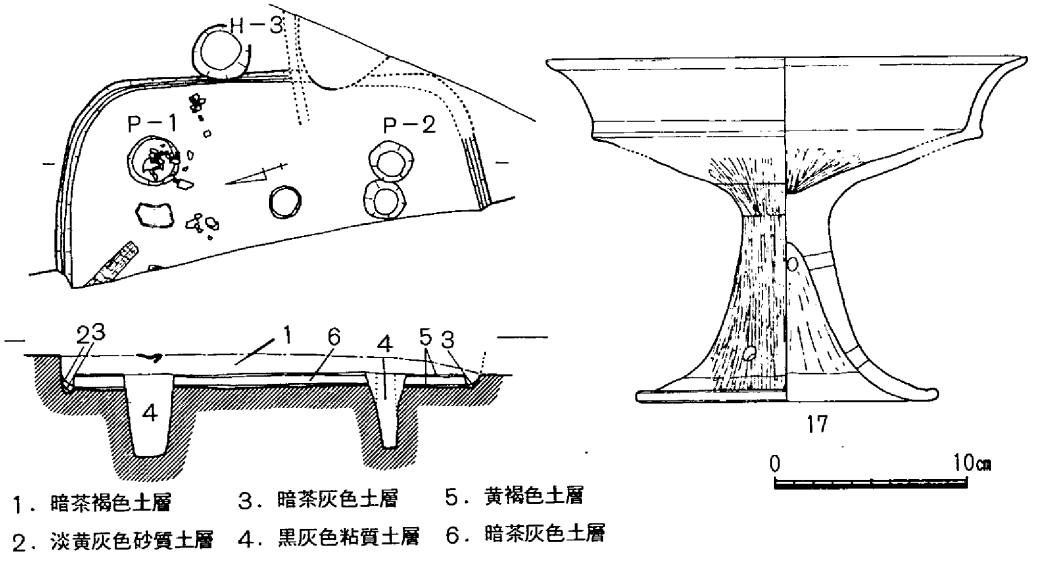


第178図　新田樋門D－1出土遺物

住　　居　　址

1)　H－2

調査区の東端に位置する。西側は，現代溝のため消失しており，東半分が残存していた。南東隅が一部検出出来なかったが，一辺約350cm前後の隅丸方形の 竪穴住居址と考えられる。壁体溝を有して



第179図　新田樋門H－2・3遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物

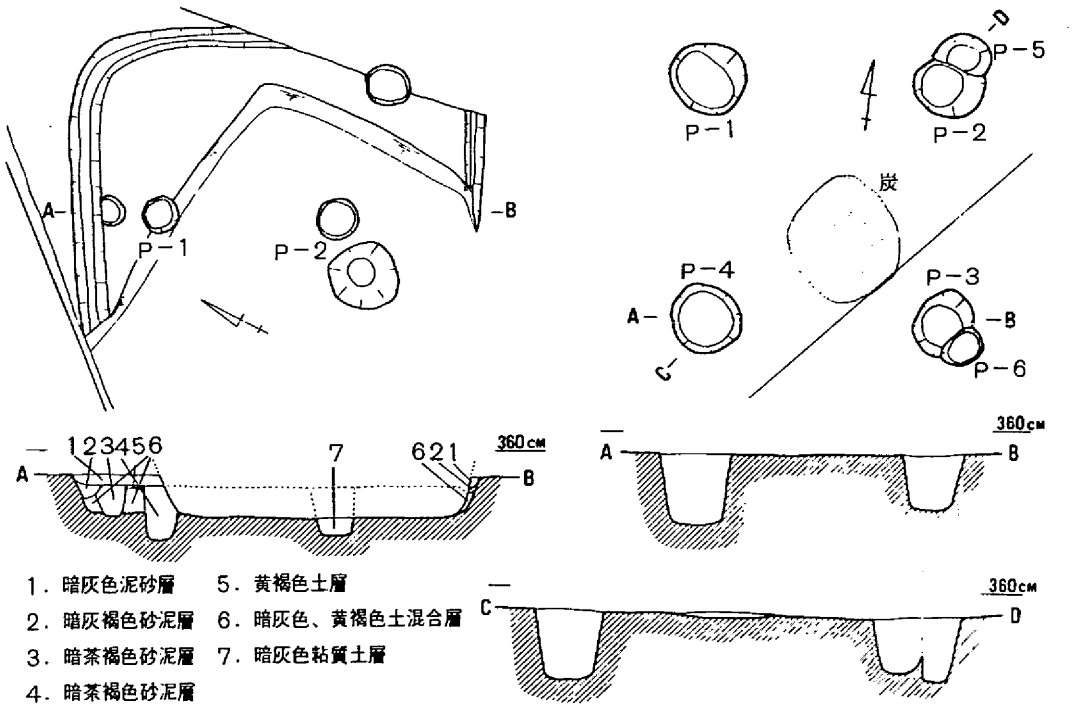
おり，幅10～15cm，深さ約15cmを測る。柱穴は，P－1，P－2の2本しか確認できなかったが，本柱と推定される。P－1，P－2の柱間は，約190cmである。柱穴は，床面から深さ60～65cmと浅い。住居址内は，最下層に第4の黄褐色泥砂層を厚さ2～3cm敷き，貼り床にしている。さらに第5層が堆積し，その上にもう一度黄褐色泥砂層を敷いて貼り床をしている。従って，2枚の貼り床面を持つ。下部の貼り床面上には，炭化材や焼土が多く認められた。上部の貼り床面には，P－1の西側に，工作台と思われる扁平な石を検出した。出土遺物から，百・後・Ⅱの時期と考えられる。

2) H－3

H－2の南東隅の上部に位置する。東壁断面及び，壁体溝の一部でしか確認できなかった。隅丸方形の竪穴住居址と推察される。断面でみると，床面の堆積はH－2と類似しており，貼り床が認められた。出土遺物はない。

3) H－4

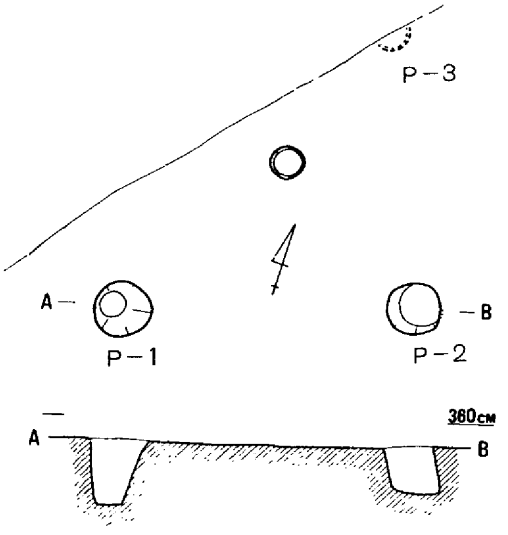
調査区の中央西端に検出した。ほとんどは，後世の削平をうけていたが，一辺約320cmの隅丸方形の竪穴住居址である。壁体溝は，幅20～25cm，深さ約10cmを測る。柱穴は，P－1，P－2の2本柱で，柱間は約140cmである。住居址内は，第6層の上に第3層の黄褐色泥砂層を約2～3cmを敷きつめ，貼り床にしている。遺物は，少量の土器が出土している。H－2に近い時期と考えられる。



第180図　新田樋門H－4(右)，5(右) 遺構平・断面図 ($\frac{1}{60}$)

4）H－5

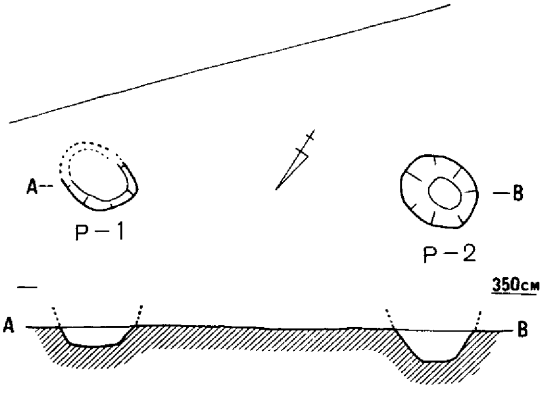
調査区の中央にH－6と近接して検出された。上部は，現代溝，池などにより消失しており，柱穴しか残存していなかった。柱穴はP－1，2，3，4の4本で住居址が構成されたものと思われる。柱間は，各々約200cmを測る。P－5，6は，P－2，3の建て替え柱，及び添柱と考えられる。また，柱穴の中央やや南寄りに90×100cmの炭の広がりが認められた。遺物は，柱穴から弥生時代後期の少量の土器片が出土しているのみである。



第181図　新田樋門P－6遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）

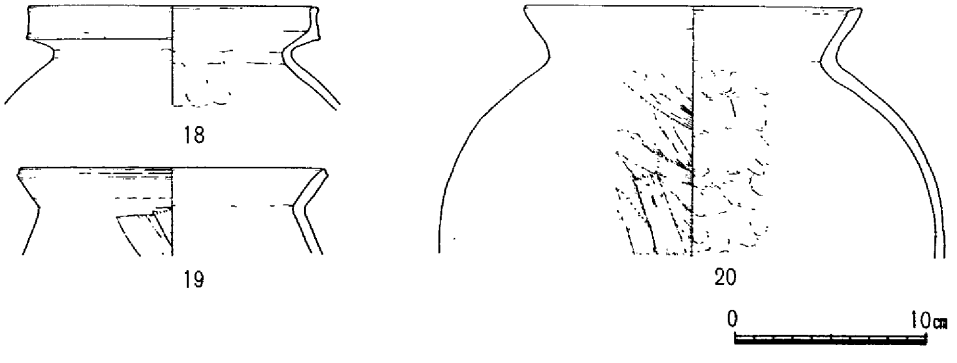
5）H－6

H－5の西側に位置し，H－5と同様に後世の池で上部が消失しており，柱穴だけが残存していた。柱穴は，P－1，2，3の3本を検出した。柱間は，P－1～P－2が約240cm，P－2～P－3が約220cmを測る。P－1，2は，柱がやや内側に傾き気味である。遺物は，柱穴から少量の土器が出土したが，時期決定できるものはなかった。



6）H－7

調査区南側の，微高地斜面近くに位置する。

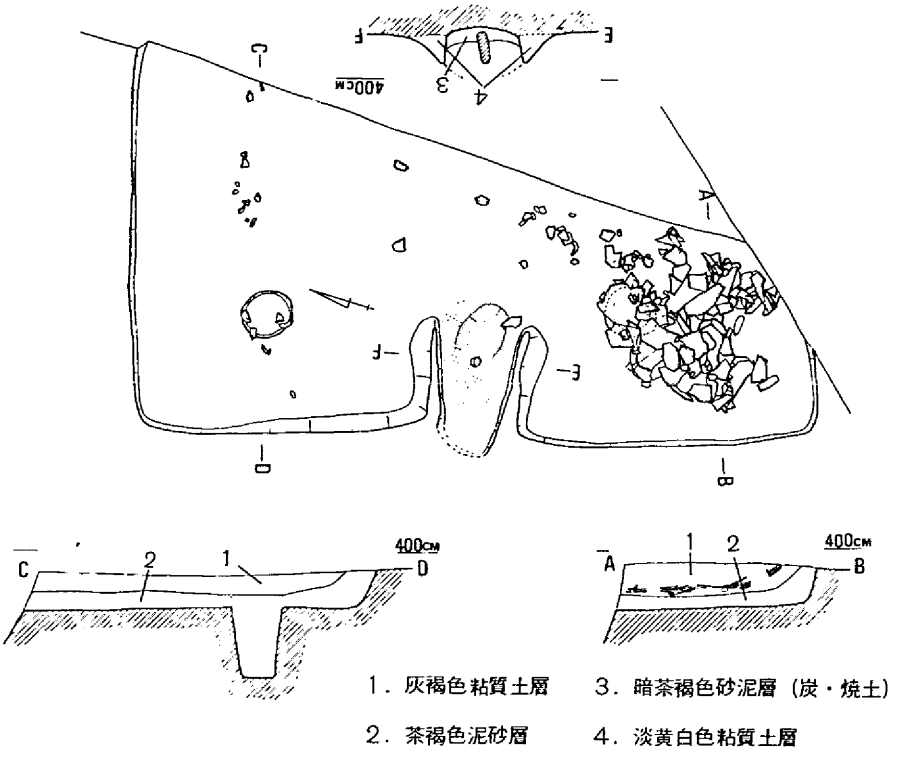


第182図　新田樋門H－7遺構図（$\frac{1}{60}$）及び出土遺物

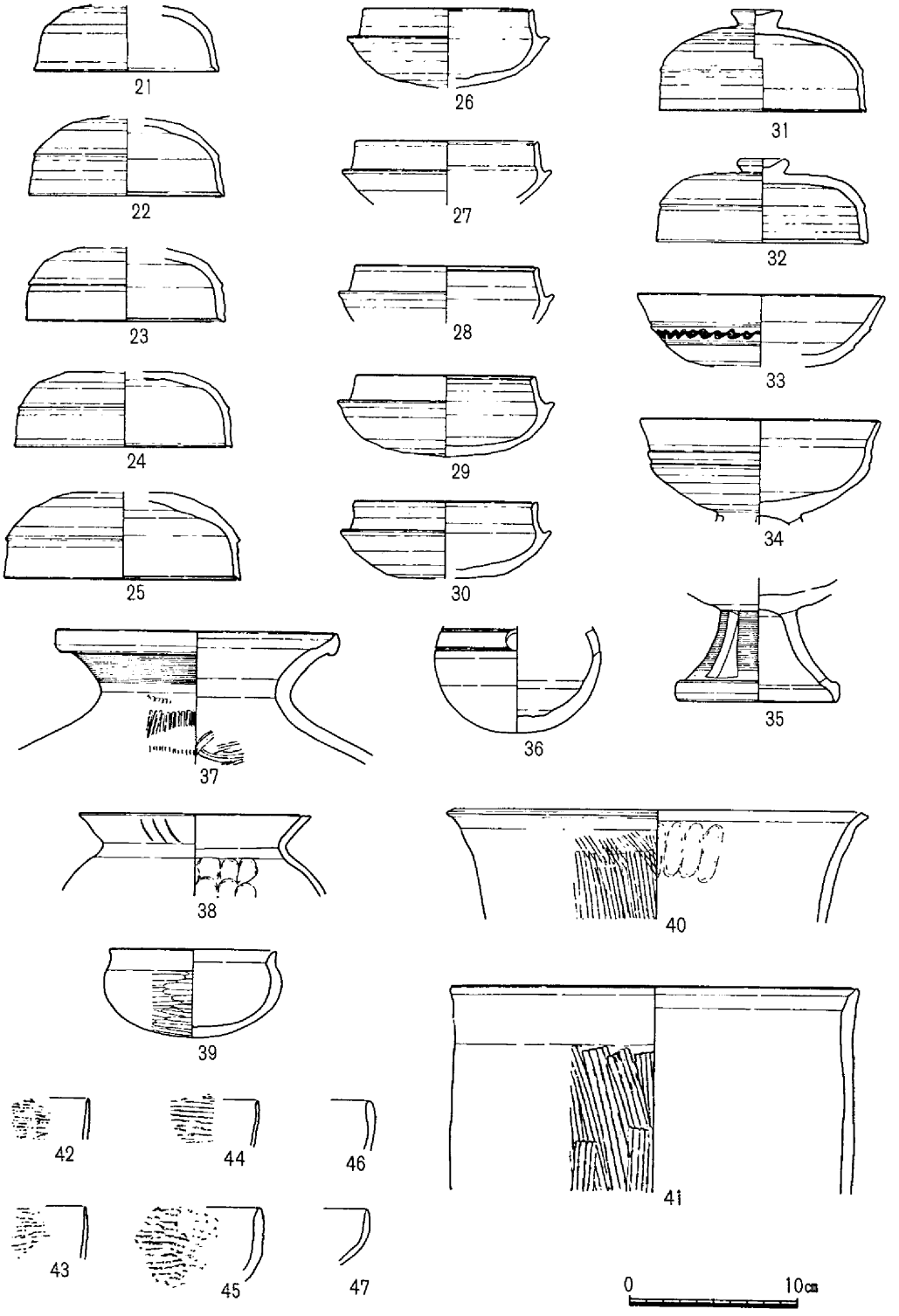
この住居址もまた，H－5，6と同様に，後世の池のため，柱穴しか残存していなかった。柱穴は，P－1，2の2本を検出した。柱間は，約270cmを測る。P－2からは，図示した土器が出土した。これらの土器から，百・後・Ⅳと考えられる。

7) H－1

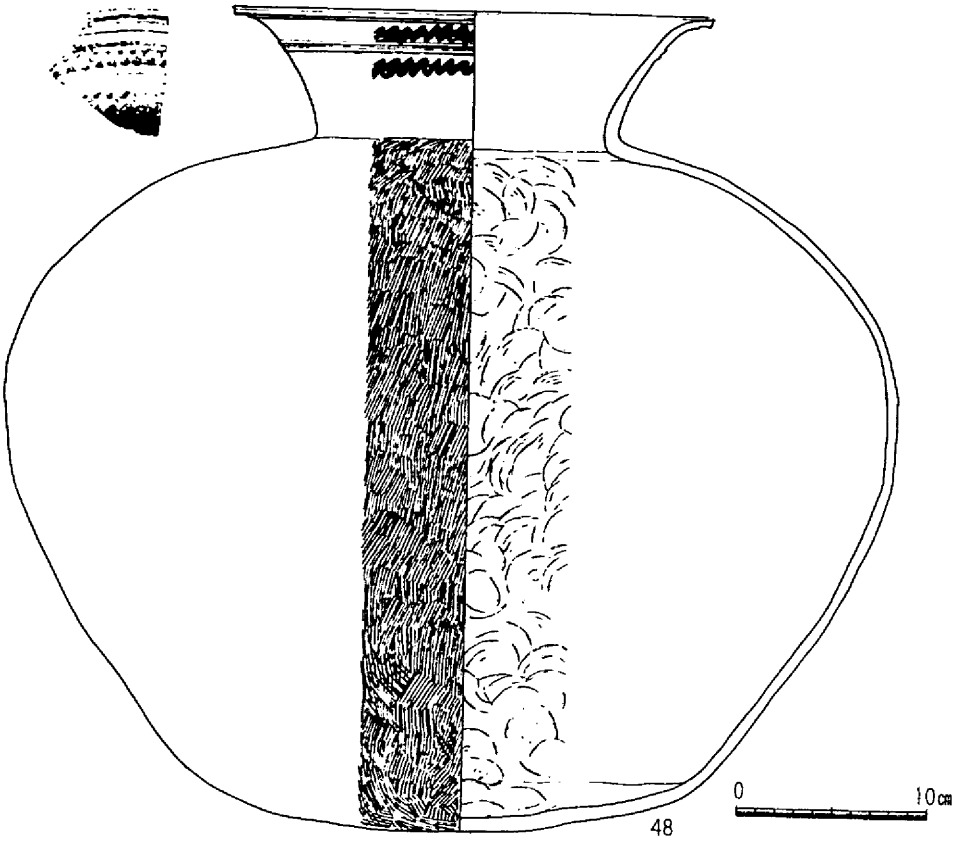
調査区の中央東端に位置する。東側は，現代溝により消失しており，住居址は半分残存していただけである。一辺540cmを測るが，他辺は不明である。正方形，ないし長方形の竪穴式住居址である。壁体溝は，検出できなかった。柱穴は，2本確認したが4本柱になると推定される。柱間は，約300cmを測る。住居址西辺の中央には，造り付けの竈を検出した。竈は，住居址内に粘土で馬蹄形に造られており，一部は住居址外に延びている。竈は，下部のみが残存しており，内側壁は，垂直に立ち上がり，赤色に焼け壁面を形成している。竈の中央部には，長さ約22cm，直径約7cmの石の支柱が立って残存していた。竈の前庭部には，浅い凹みがあり，炭，焼土が堆積していた。住居址内からは，図示した須恵器，土師器が多数出土した。特に，住居址南西隅に大甕がつぶれた状態で検出された。また，竈周辺には，甑，製塩土器が集中していた。出土した土器は，ほとんどが5世紀末を示すものであるが，甕，甑がやや新しい様相を持つ。



第183図　新田樋門H－1遺構平・断面図（$\frac{1}{60}$）

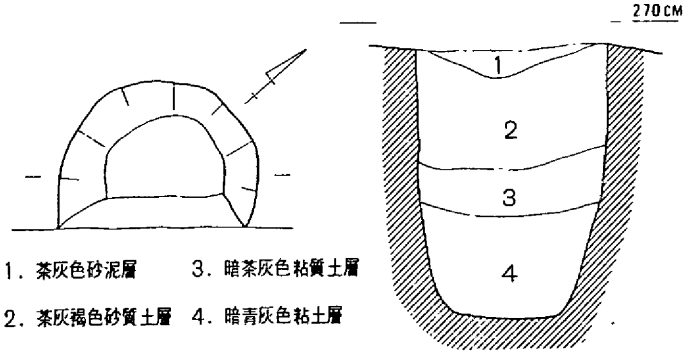


第184図　新田樋門H－1出土遺物（1）



第185図　新田樋門H－1出土遺物（2）

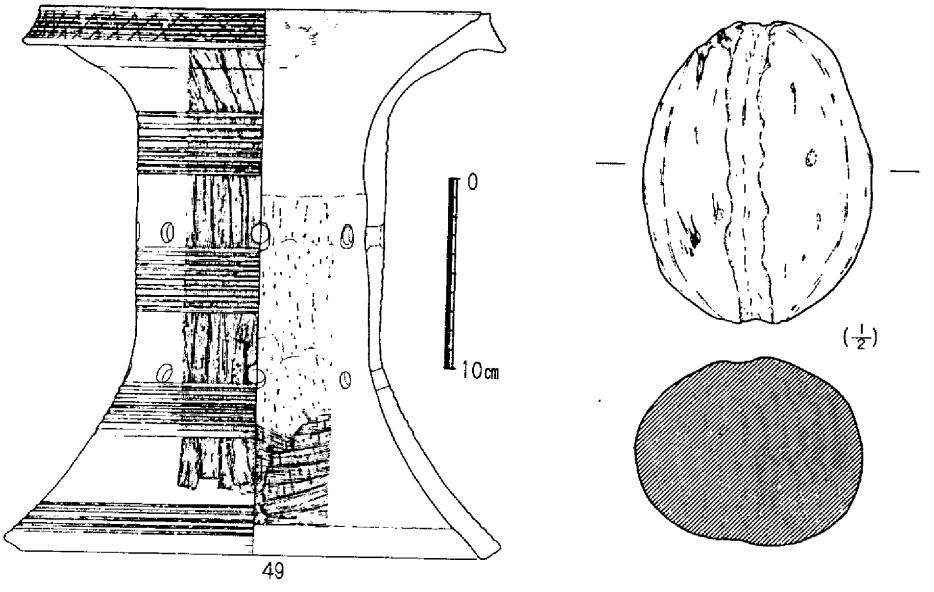
土　　壙



第186図　新田樋門井戸－1遺構平・断面図（$\frac{1}{40}$）

1）井戸－1

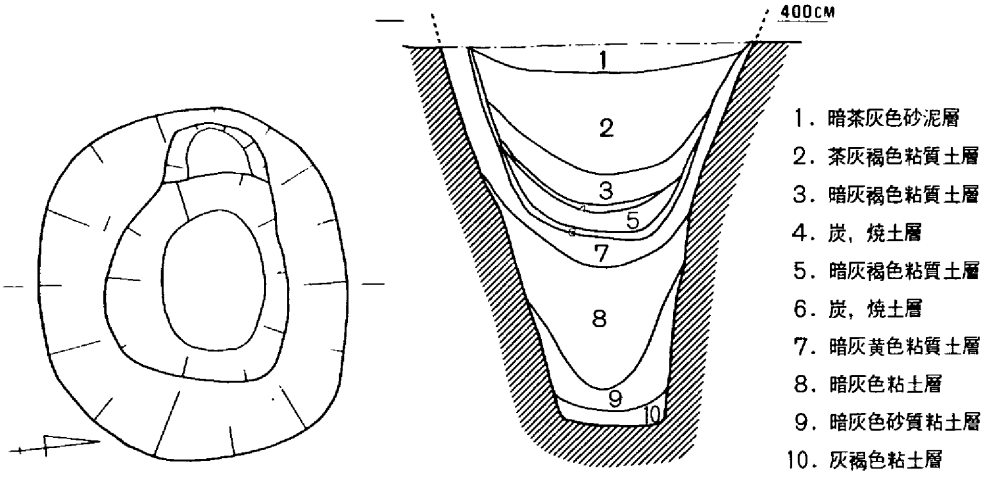
調査区南端の微高地斜面近くに位置する。東側の一部が壁にかかっているため，2/3ほど検出したにとどまった。直径約105cmの円形を呈し，深さ約140cmを測る。第4層から，壺，甕，器台，及び石錘などが出土した。出土した遺物は，百・後・Ⅱと考えられる。



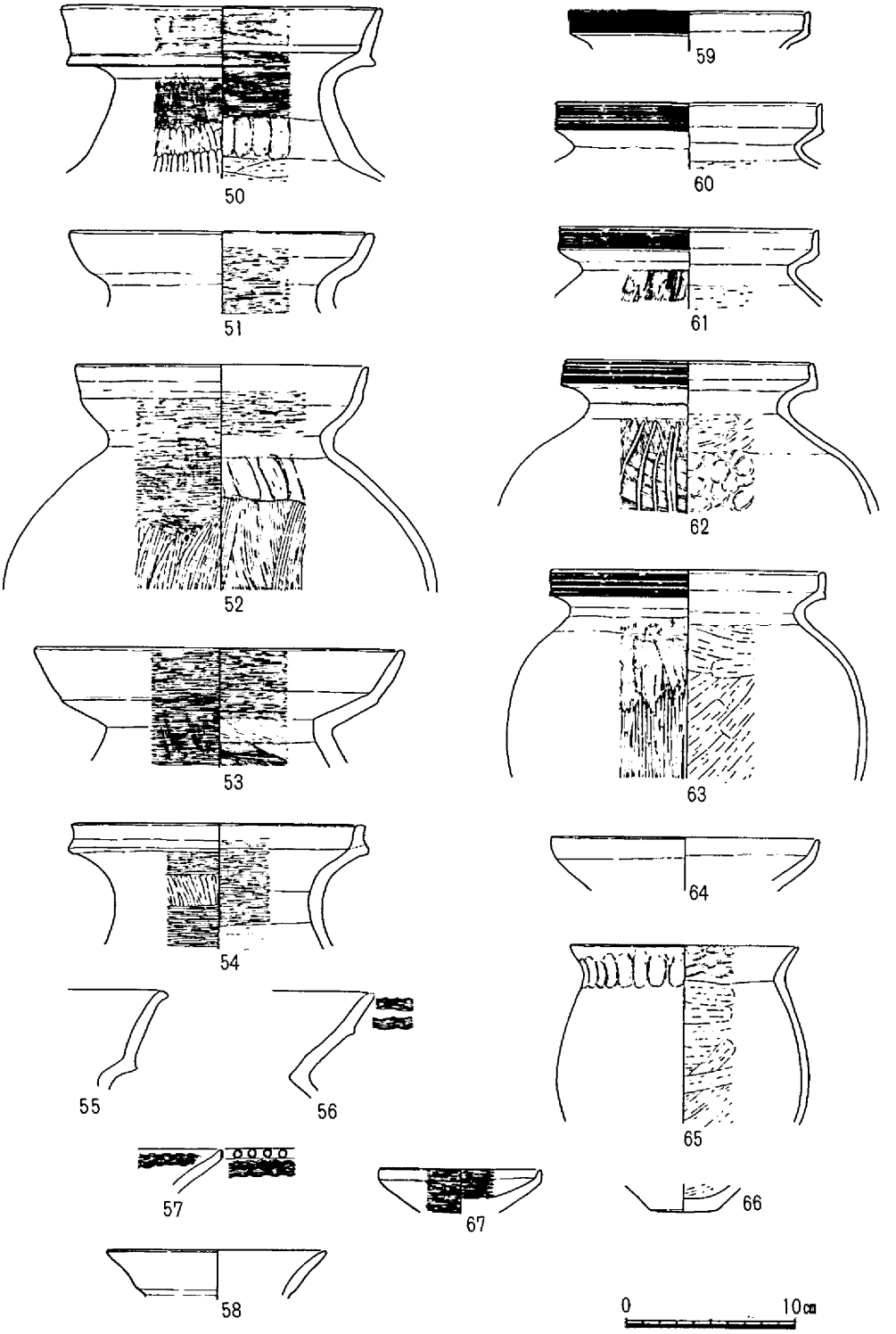
第187図　新田樋門井戸－1出土遺物

2）井戸－2

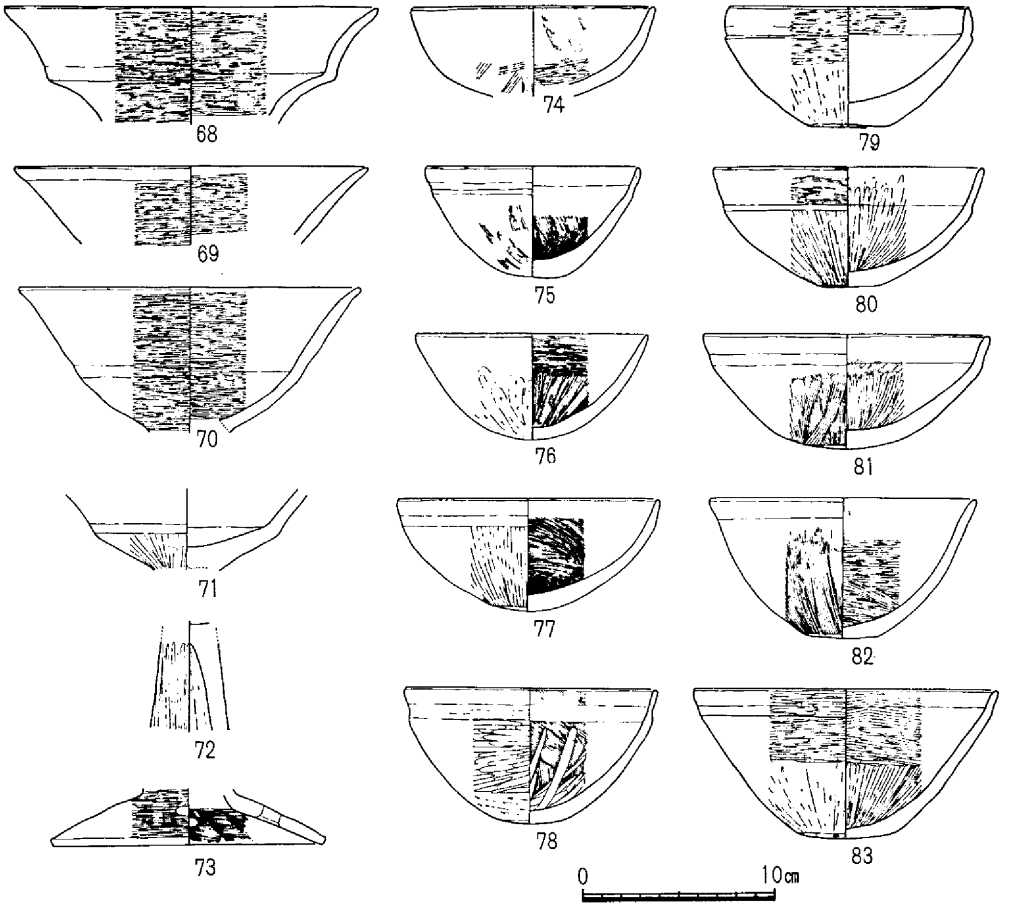
堤防下のD－14の東側に位置する。直径160～185cmのほぼ円形を呈す。深さは，約200cmを測り，D－12，14の一部を切って存在する。上部70cmまでは，擂鉢状に落ち込み，以下底部まではやや角度を変えて斜めに落ち込む。土壙の西側中程に一部凹んだ箇所がみられる。堆積層中の第4，6層には，炭，焼土が多く認められた。また，第8層の下面には，炭化したワラ状のものがスライス状に堆積している部分がみられた。遺物は，土器のほとんどが第2，3層から出土した。また，第8層から桃の種子が出土している。さらに花粉分析の結果も提出されている（註27）。時期は百・後・Ⅰである。



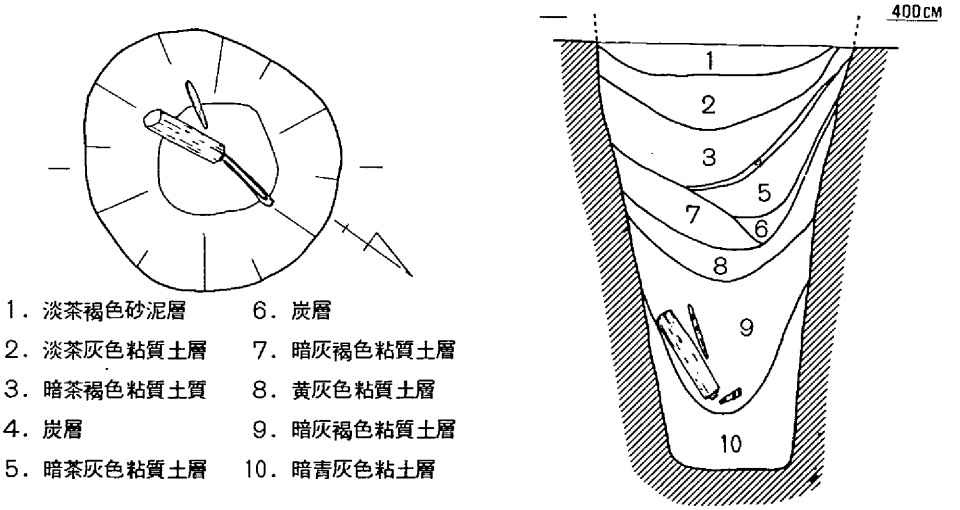
第188図　新田樋門井戸－2遺構平・断面図（1/40）



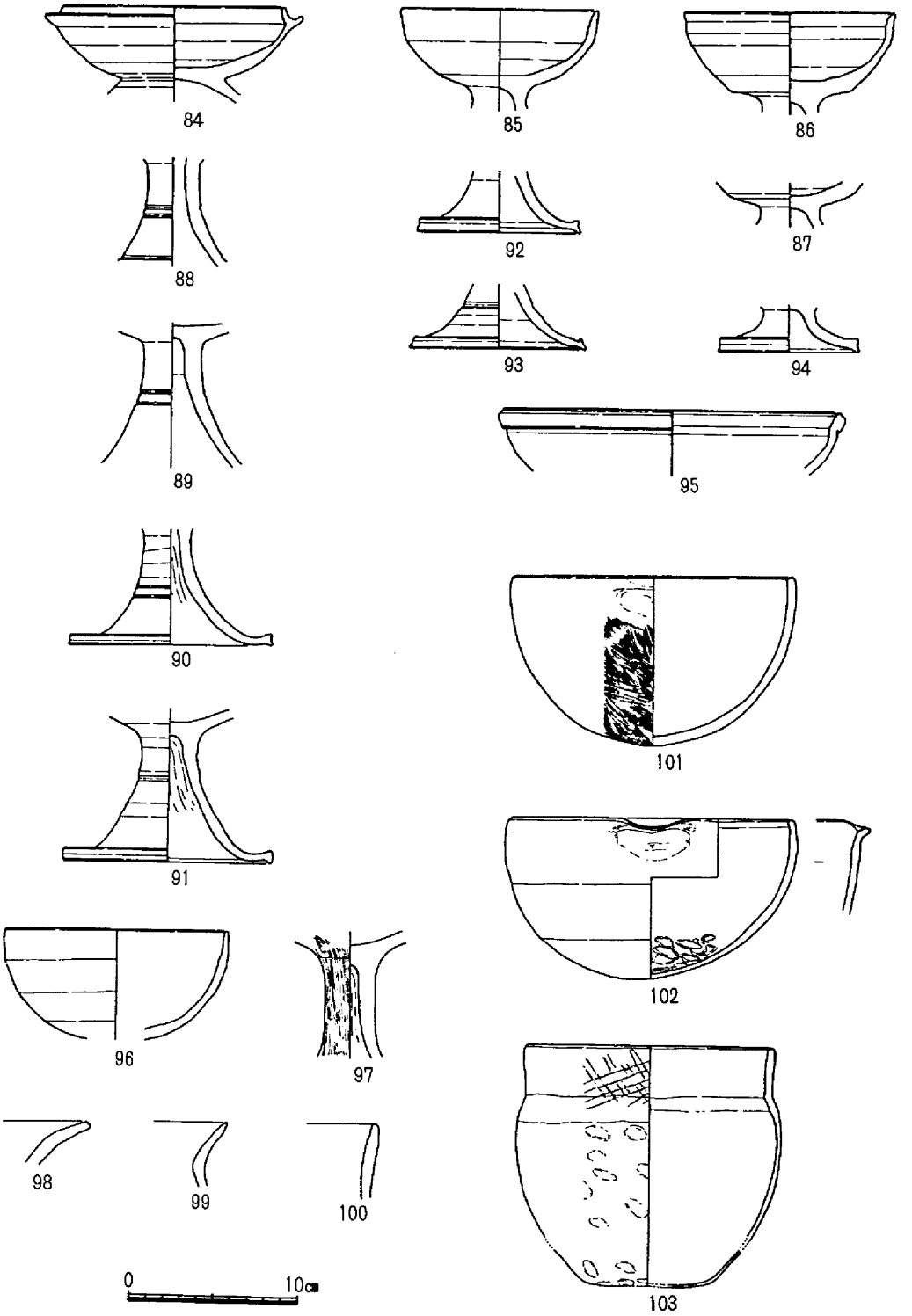
第189図　新田樋門井戸－2出土遺物（1）



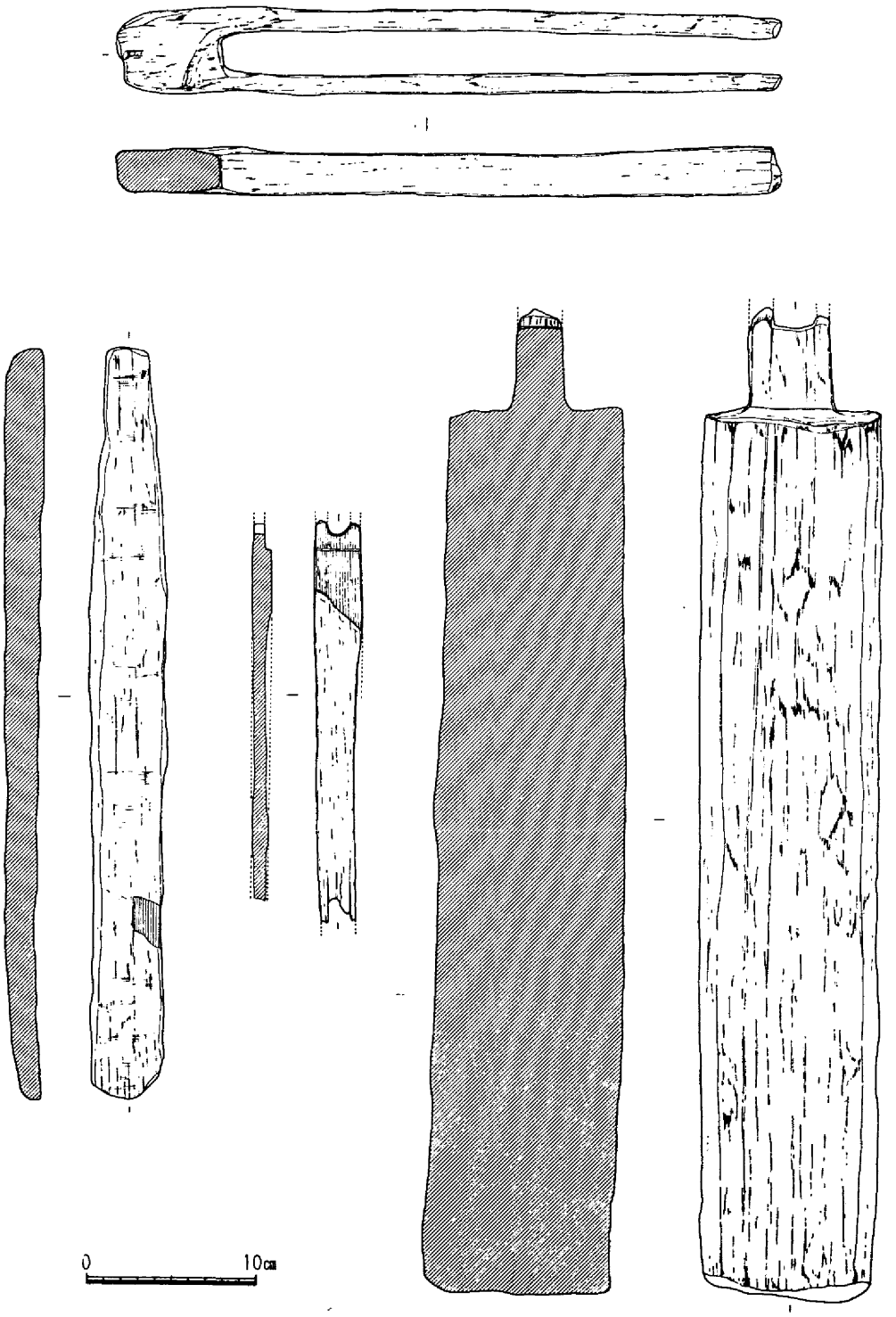
第190図　新田樋門井戸－2出土遺物（2）



第191図　新田樋門井戸－3遺構平・断面図（$\frac{1}{40}$）



第192図　新田樋門井戸－３出土遺物（1）



第193図　新田樋門井戸－3出土遺物（2）

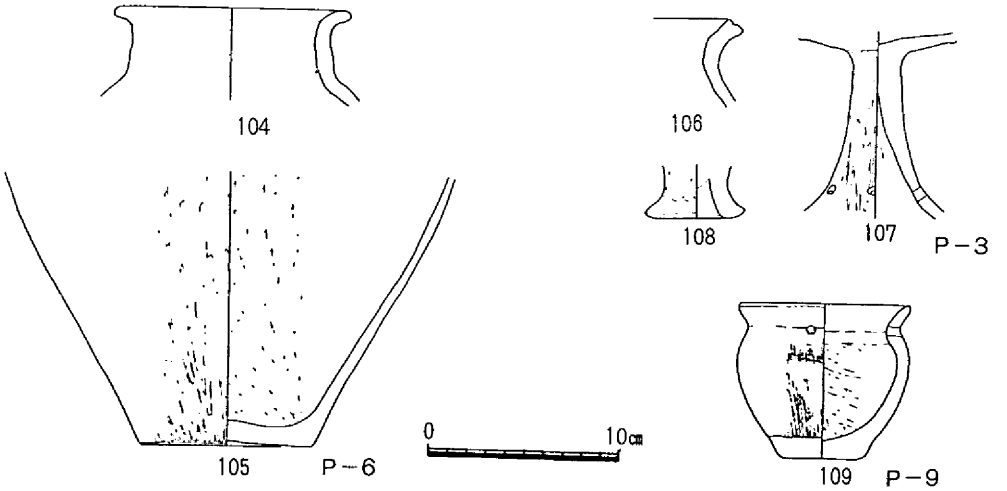
3) 井戸－3

堤防下の井戸－2の比例に位置する。直径130～145cmのほぼ円形を呈し，深さ約225cmを測る。遺物は，各層から須恵器，土師器などが出土した。図示した木器は，第9層から検出した。木器**1**は，いわゆる「ピンセット」形を呈する。用途は不明である。樹種は，木器のイヌマキに類似する。木器**2**は，長さ約44.5cmの篦状を呈する。基部は，やや細く製形され握部を作っている。先端はやや尖り気味で，下部は磨滅している。樹種は，イヌマキ。木器3は，用材の一部と考えられる。樹種はヒノキ。木器4は，建築用材の一部である。樹種は，アカガシ。また，鉄分を含む鉱滓が出土している。(註28)

4) 柱穴状土壙

当調査区においても多数の柱穴状土壙が検出された。調査区は，後世の溝・池などに削平を受けていたため，柱穴状土壙の相互の関連性を求めるには困難であった。しかしながら，柱穴状土壙の中には，柱痕跡が明瞭に残存するものも多数あり，住居址，建物などの構造物を構成していた可能性が十分考えられる。

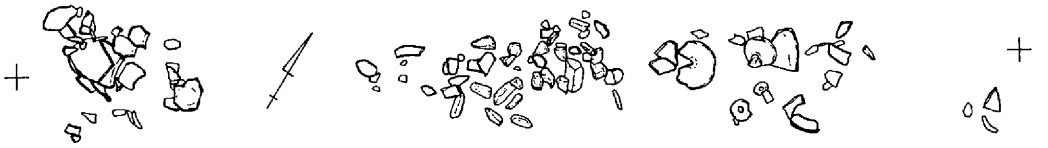
出土遺物は，図示した堤防下部のP－3・6・9以外のものは，土器の細片が検出されたにすぎなかった。時期は，弥生時代～平安，鎌倉時代のものが含まれていたが，全体的に弥生後期に属するものが多数を占めた

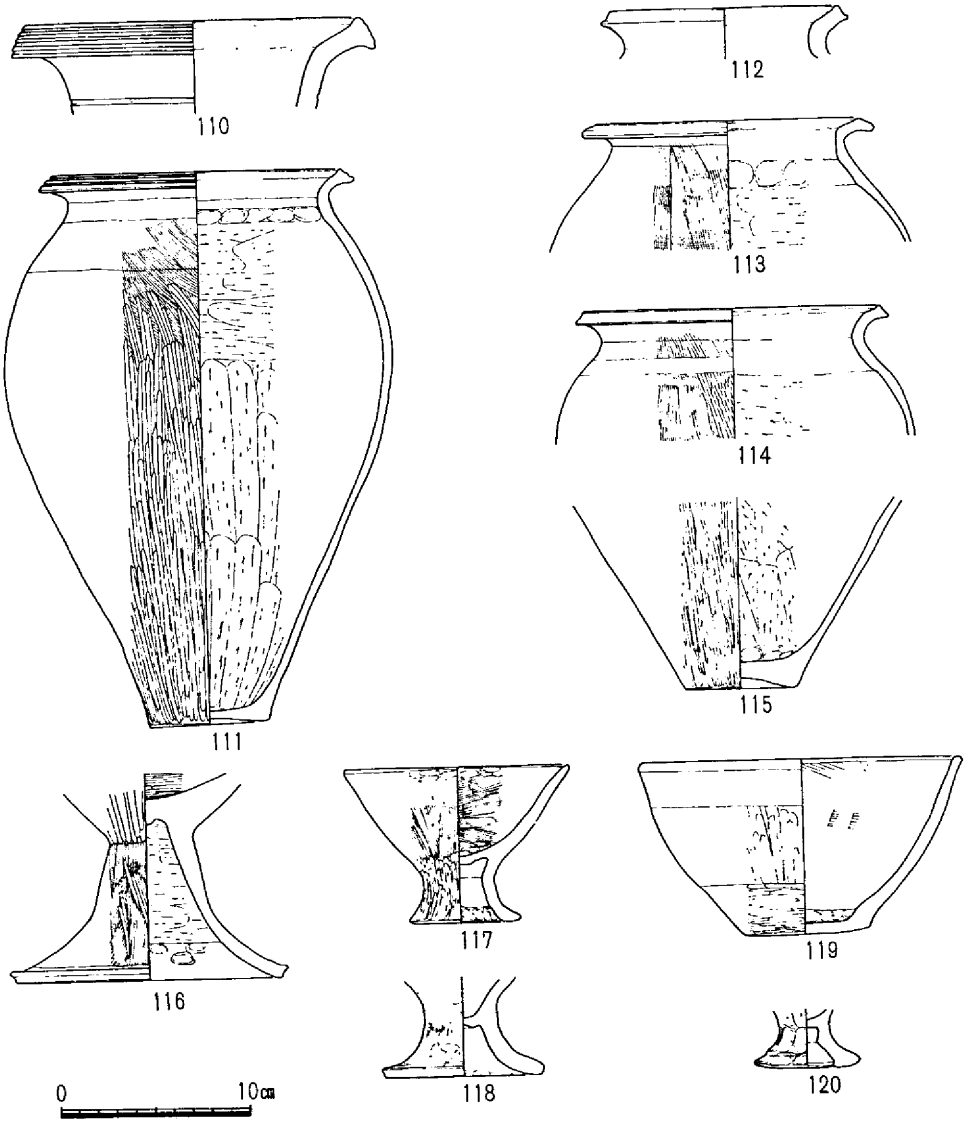


第194図　新田樋門P－6・3・9出土遺物

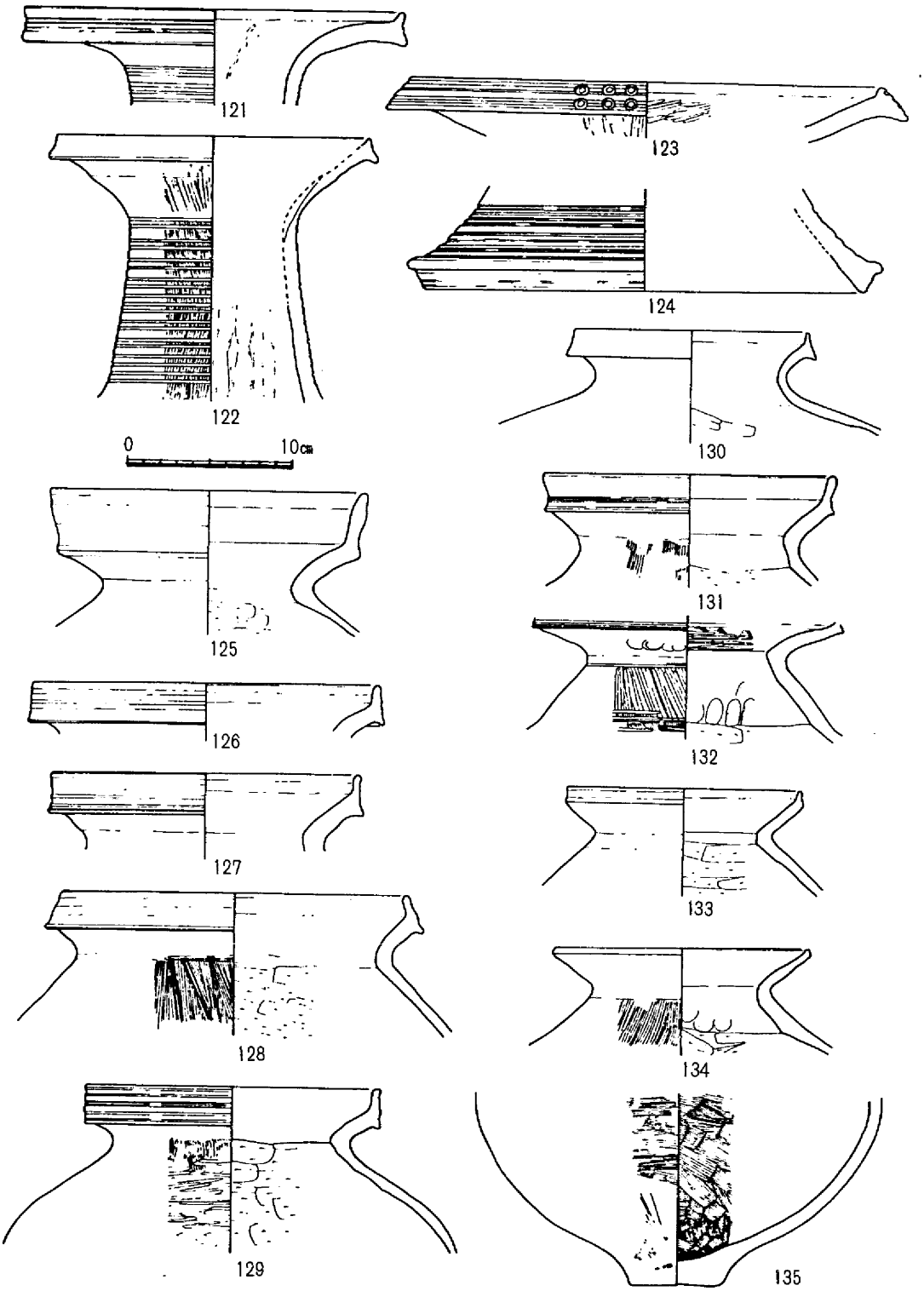
5) 土器溜り

堤防下の井戸－3の東側に位置するものであり，土器，角礫が列状になって検出された。掘り方は検出できなかったが，溝状のものになる可能性が考えられる。出土した土器は，百・後・Ⅰ～Ⅱにかけてのものである。

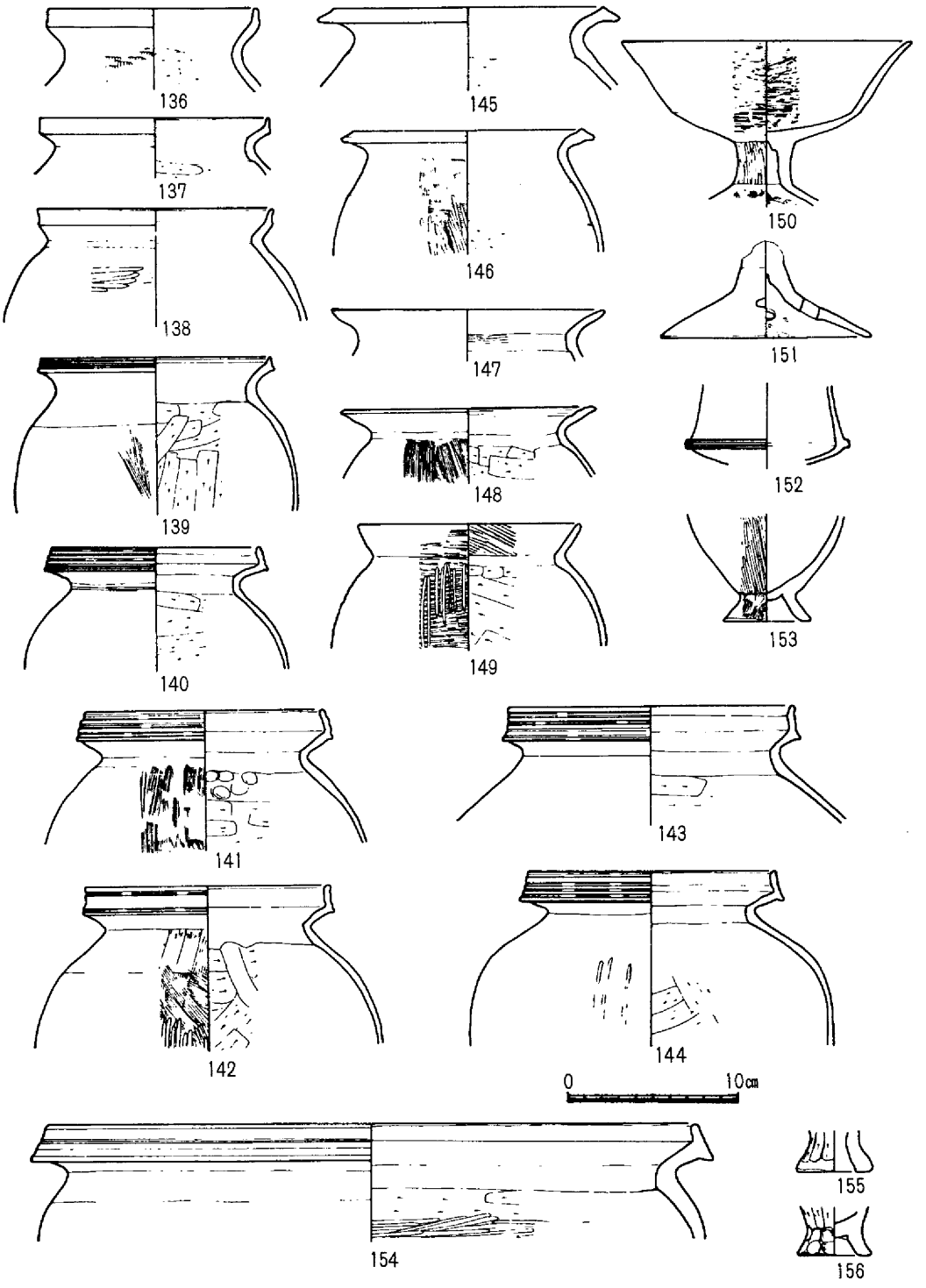




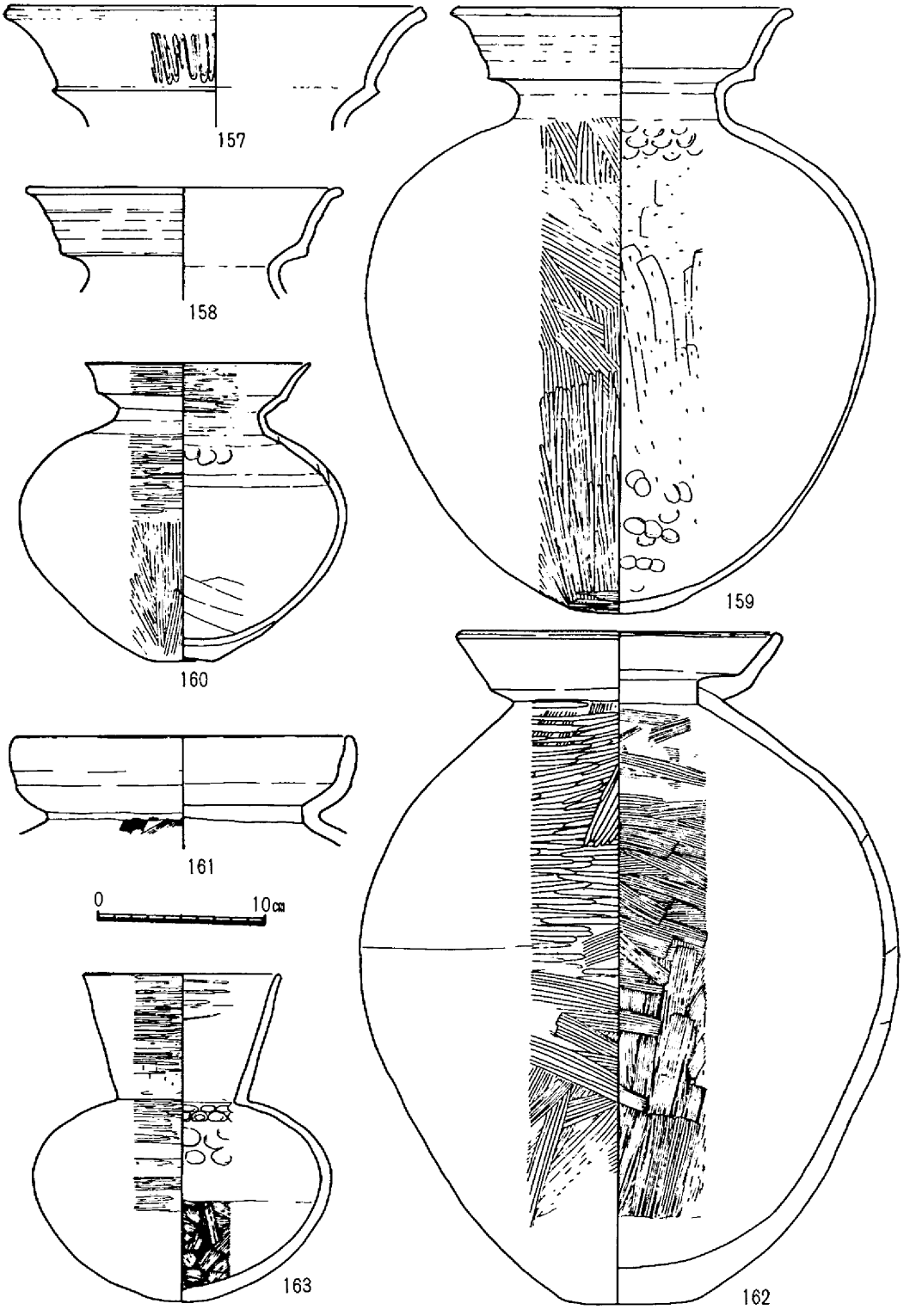
第195図　新田樋門土器溜り平面図（$\frac{1}{30}$）及び出土遺物



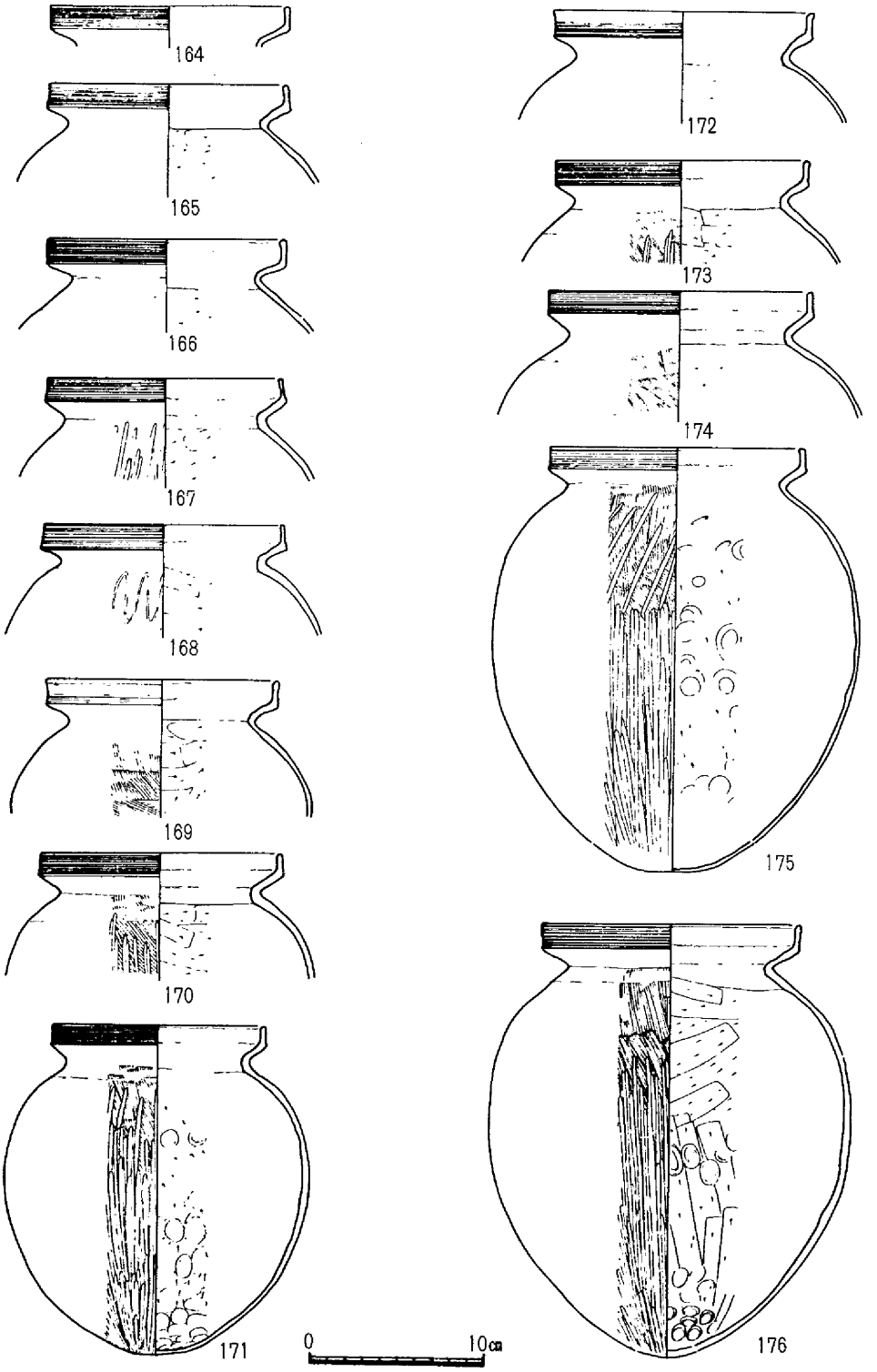
第196図　新田樋門微高地西斜面土器溜り下層出土遺物（1）



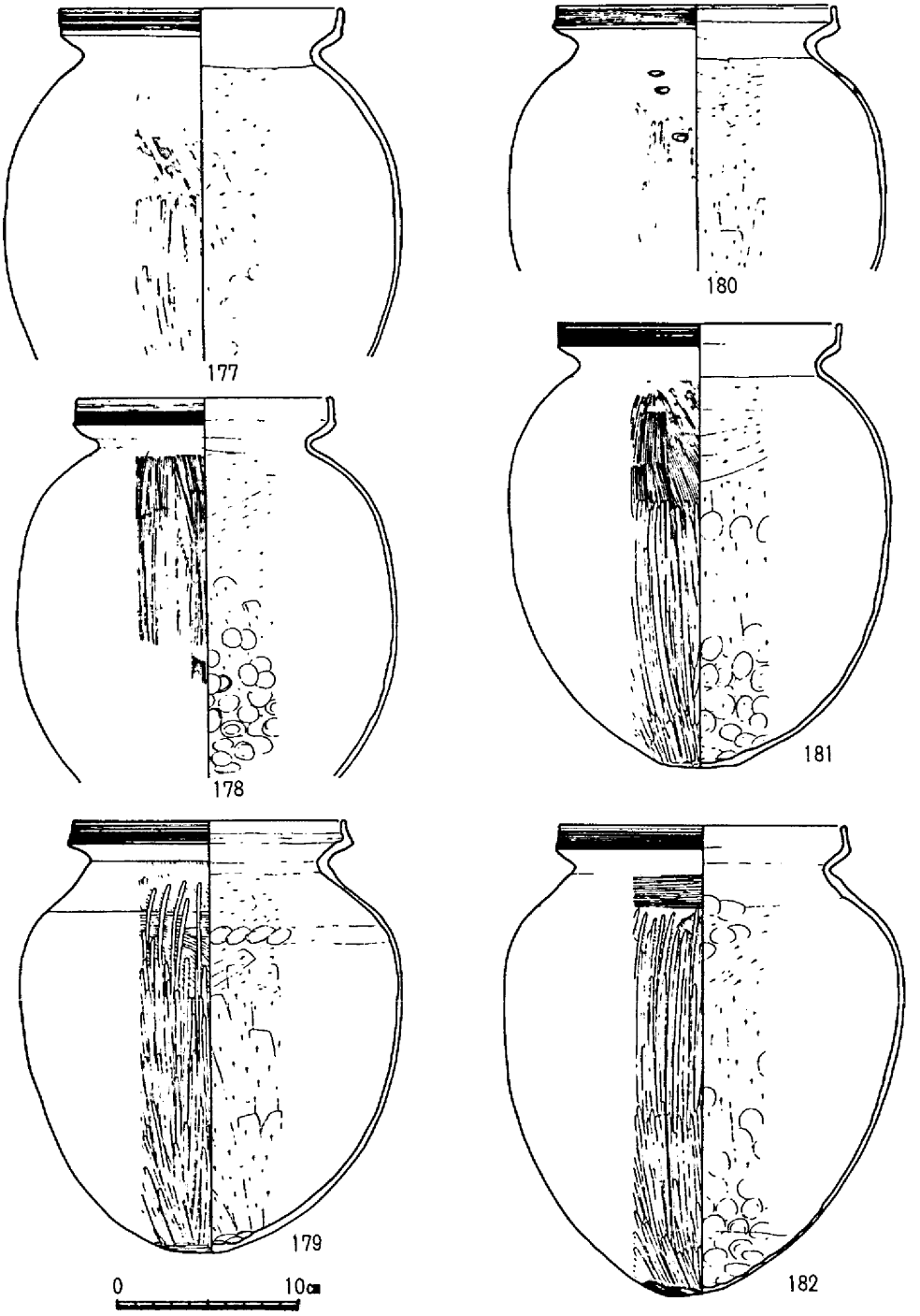
第197図　新田樋門微高地西斜面土器溜り下層出土遺物（2）



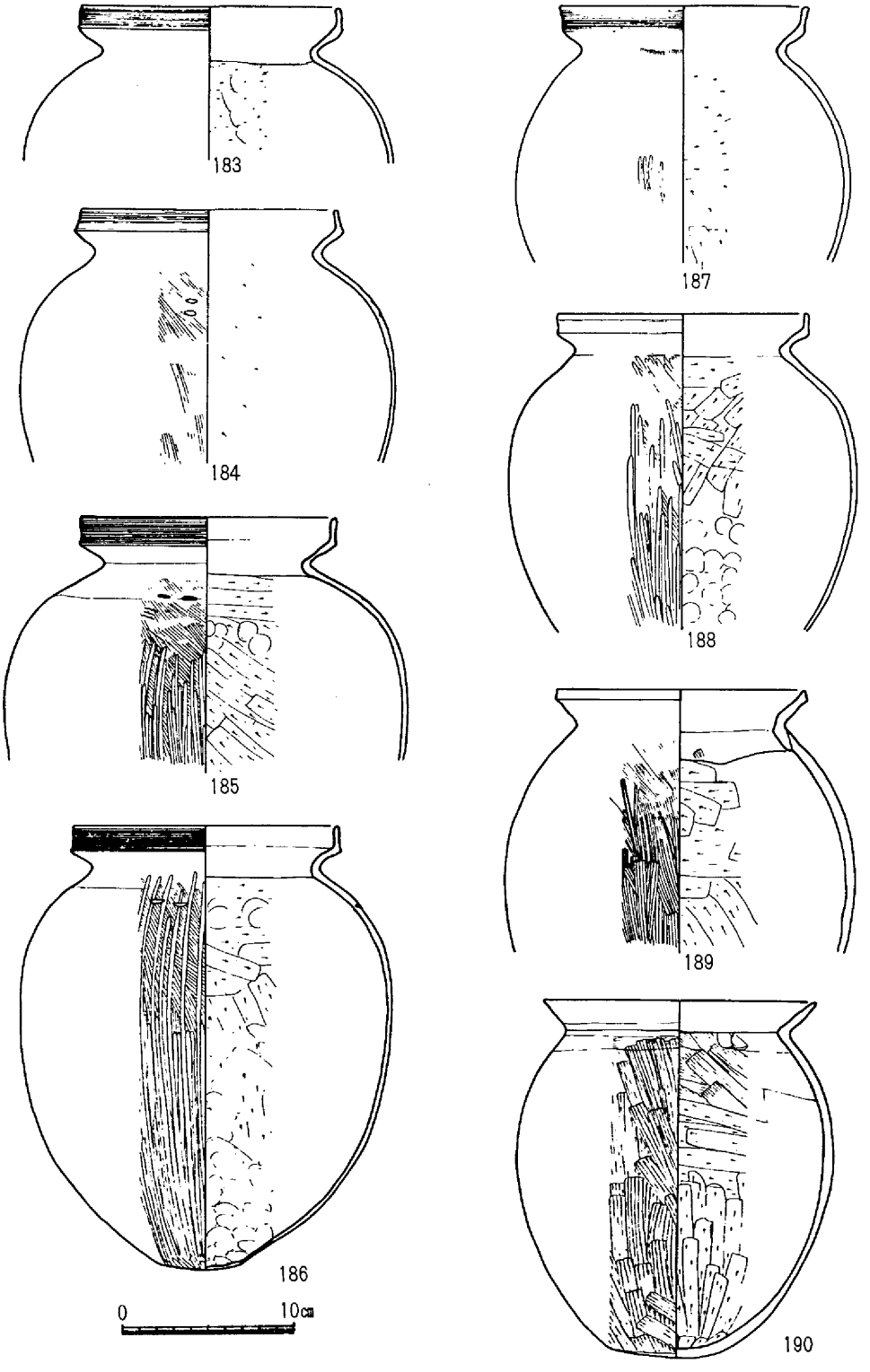
第198図　新田樋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物（1）



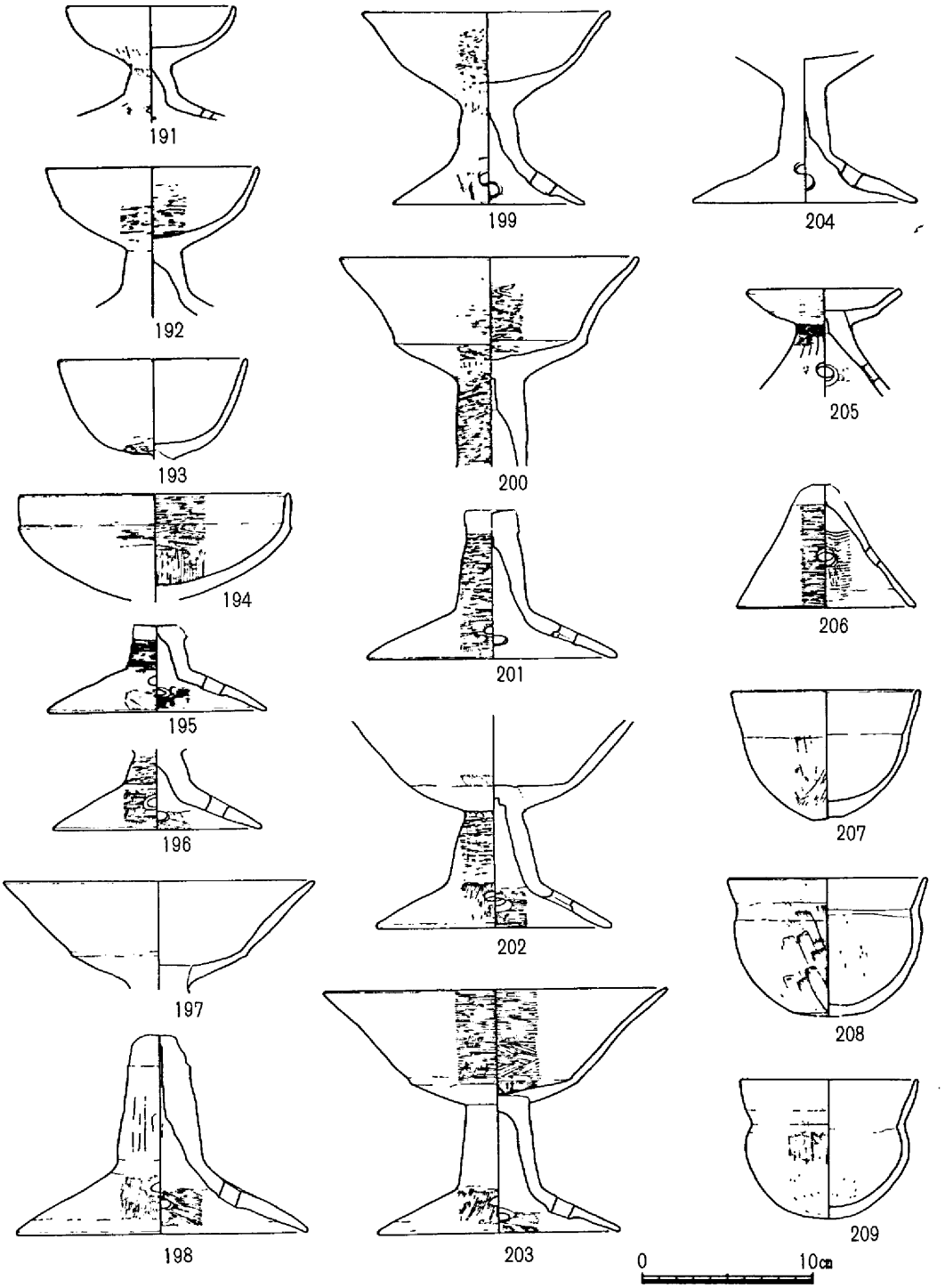
第199図　新田樋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物（2）



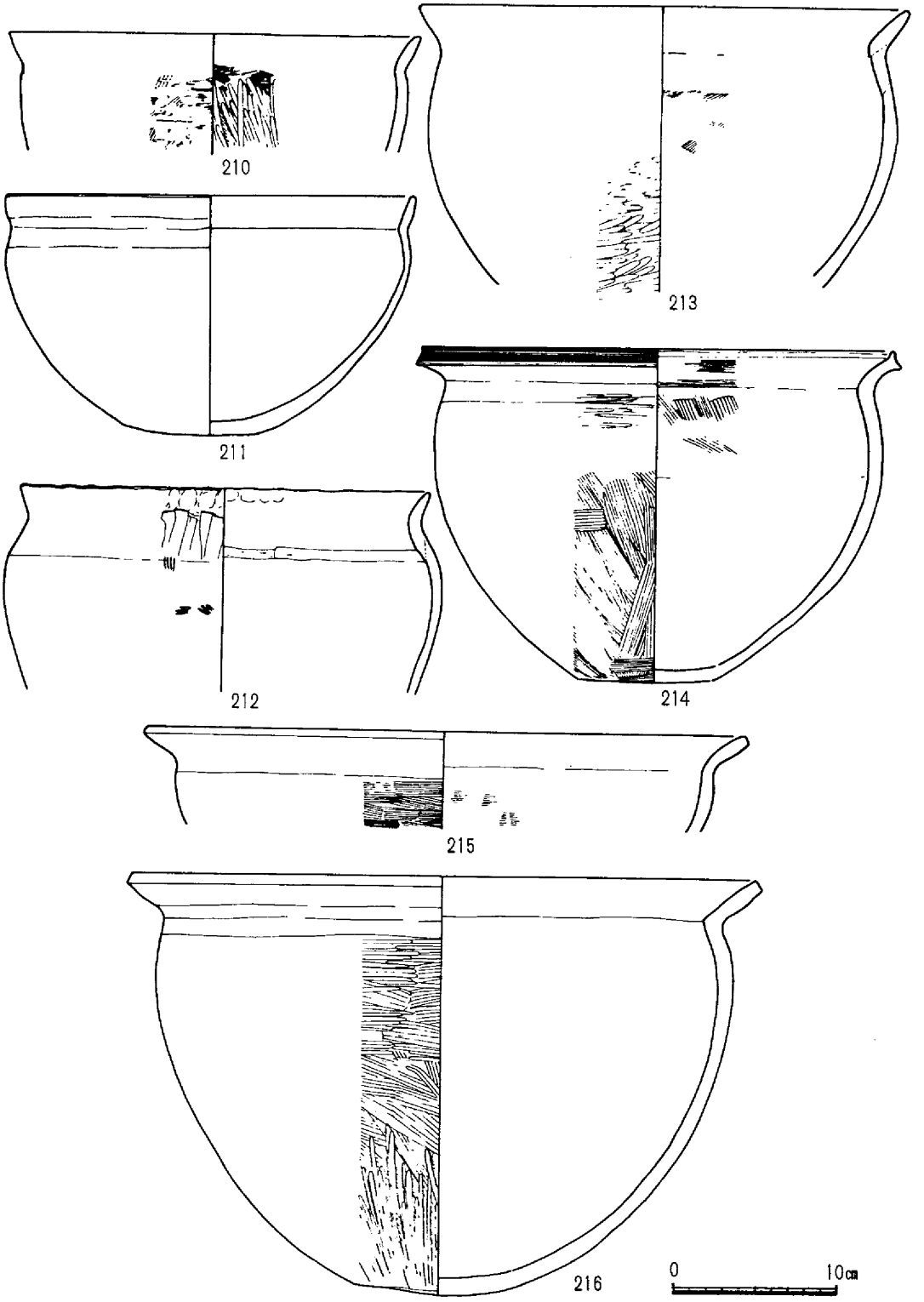
第200図　新田樋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物（3）



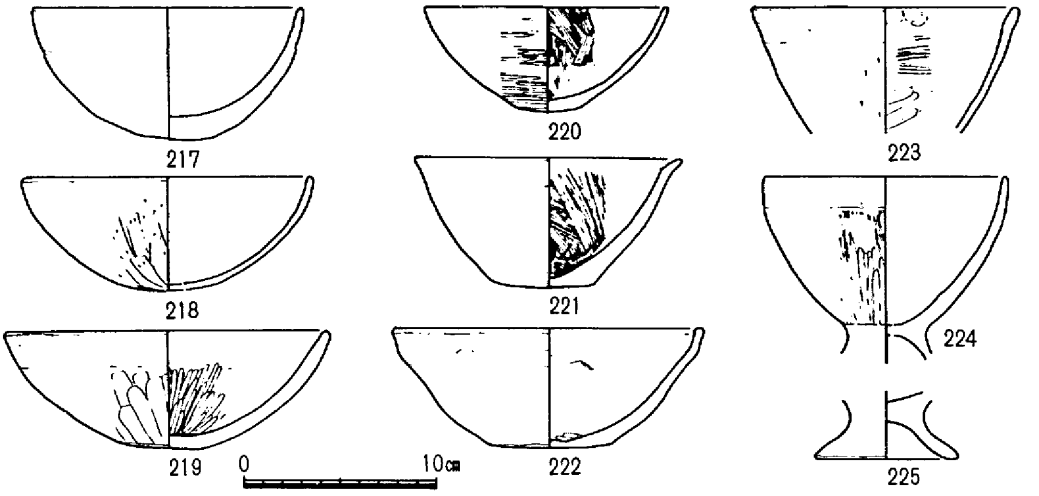
第201図　新田樋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物（4）



第202図　新田樋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物（5）



第203図　新田樋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物（6）



第204図　新田樋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物（7）

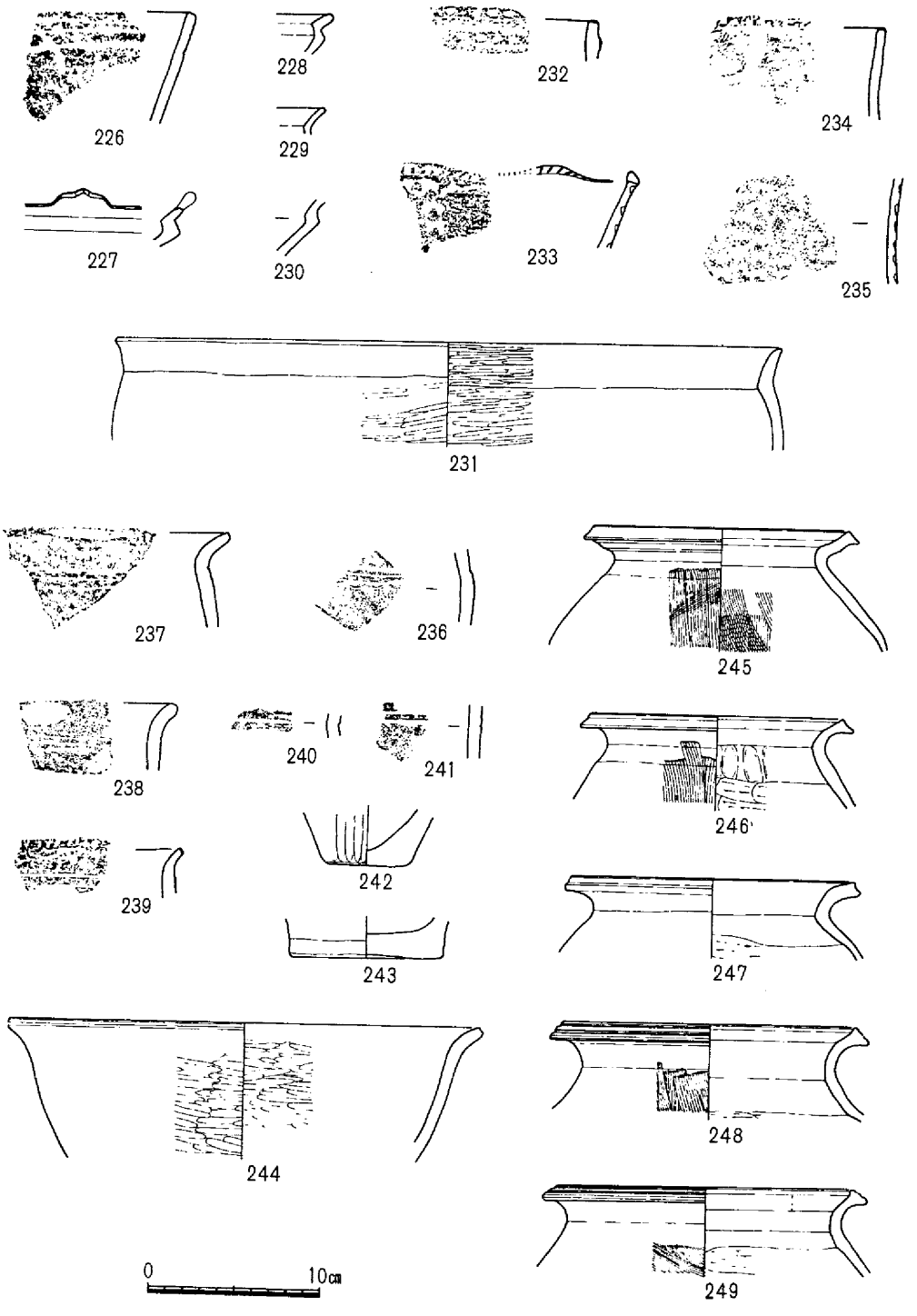
微高地西斜面土器溜りの概要

微高地西肩部にあたる部分は，上部が近世へ近代の池状遺構によって削り取られていたが，この土層からは第**117**図に示すハッチングの範囲内に多量の一括遺物の包含層が見られた。これは，微高地のさがりの部分にあたり，東端で海抜約3.2*m*，西端で約2.8*m*を示し，あまり急激には下っていない。これら上層からの出土遺物は完形品も多く，器種としては第**198**～**204**図に示すごとく壺形土器（**157**～**163**），甕形土器（**164**～**190**），高杯形土器（**191**～**204**），小型器台形土器（**205**，**206**），種々の形土器（**207**～**225**）などを含んでいる。この層は褐色砂質土層からなり部分的に暗青灰色にグライ化している。この下層の暗褐色～暗青灰色砂質土層を30*cm*程掘り下げてから出土した遺物が下層の遺物で，第**196**～**197**図に示すごとく壺形土器（**121**，**122**・**125**～**135**），器台形土器（**123**，**124**），甕形土器（**136**～**149**），高杯形土器（**150**，**151**），小形台付鉢形土器（**152**，**153**・**155**，**156**（製塩土器）），鉢形土器（**154**）などが出土している。黄褐色の地山面は西端部で急激に下っているようで確認することができなかった。

そしてこれら上層の一括遺物は，百間川古墳時代のⅠ期にあたり，上東遺跡の編年において，下田所式とされた新しい様相をよく留めている一括遺物である。また下層の遺物は一部，弥生時代後期中葉の混入遺物（**121**～**124**・**145**，**146**）も見られるが，ほとんどの遺物は，百間川弥生時代Ⅳ期の特徴を示すもので，弥生時代最終末に位置付けているものである。雄町遺跡では，雄町12類，上東遺跡では才の町Ⅱ式とされているものとの併行関係が考えられる遺物である。（伊藤）

包含層出土遺物

当調査区の包含層からは，縄文時代晩期～鎌倉時代の遺物が出土している。量的には，縄文時代晩期，弥生時代後期（百・後・Ⅱ），古墳時代初頭（百・古・Ⅰ）の土器が多く認められた。特に縄文時代



第205図　新田樋門包含層出土遺物

晩期の土器は，微高地上の弥生時代の基盤層である黄褐色泥砂層中（深さ20cm前後）から検出でき，当微高地の形成過程について注目できる。（中野）

註

註27　岡山理科大学三好教夫教授から「木本類ではマツ属，ヤナギ属，アカガシ属が，草本類ではイネ科，ナデシコ科，シソ科などが優勢に出現している」との結果をいただいた。

註28　出土した鉱滓のうち比重の違うものを３種類抽出し，岡山県工業技術センターで定量分析を行った。

	Hgloss	Sio_2	Al_2o_3	Fe	Feo	Fe_2o_3	Tro_2	Cao	Mgo	K_2o	Nao_2
1	0.68%	63.14	18.63	none	4.10	2.03	0.77	3.03	2.01	3.16	2.20
2	0.12%	66.47	12.14	1.45	5.84	5.62	0.64	3.02	0.90	2.14	0.97
3	8.15%	21.67	5.40	8.16	6.65	46.54	0.27	1.57	0.57	0.55	0.54

表10 新田樋門出土土器観察表

溝状遺構

5) D—8

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺形土器	○長頸壺である。口縁部は，開き気味に立ち上がる頸部から急に大きく外反する。さらに端部は，斜め方向に拡張する。頸部は，ややまのびした形で細身である。	○口縁部端面には，4条の退化凹線を施す。 ○頸部は縦方向の刷毛調整を施し，さらに等間隔に凹線を入れている。凹線と凹線の間には，櫛状工具で羽状に施文している。 ○口縁部内外面は，横ナデ。 ○頸部内面は，横方向の刷毛調整ののち，指圧とナデで仕上げている。ツメ痕を残す。また，頸部下半は，篦削りののちナデ。	○淡茶褐色 ○1～2㎜の砂粒を多く含む。
2	壺形土器	○小型の長頸壺である。内湾気味に外反する口縁部をもつ。頸部は垂直に立ち上がる。	○口縁部は，横ナデ，頸部は，縦方向の篦磨きを施す。 ○内面は，ナデ。	○白褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
3～4	甕形土器	○「く」の字状に屈曲する短い口縁部をもつ。口縁端部は，肥厚気味である。 ○全体に器壁は厚い。	○口縁部は，横ナデで仕上げている。4は，端面に2条の退化凹線を施す。 ○外面は，縦方向の篦磨き。 ○内面は，頸部までナデにより調整している。頸部下は篦削り。	○3黄褐色 ○4茶褐色 ○2.5㎜以下の砂粒を含む（3） ○1㎜以下の砂粒を含む。
5～7	底部	○やや上げ底の底部である。	○外面および底部は篦磨き。 ○内面は篦削り。	○淡茶褐色 ○3㎜以下の砂粒を含む。
8	高杯形土器	○長い脚部をもつ。 ○脚部と杯部の接合は，円板充鎮法による。	○外面は，杯部・脚部とも篦磨きを施す。 ○脚部には，6本の櫛描を等間隔に施文し，その間に，円孔を1列に3か所うがつ。円孔は，内側に貫通するものとしないものがある。	○淡黄褐色 ○1.5㎜以下の砂粒を含む。 ○杯部外面にスス付着。

10) D—4

9	杯身	○高台付の杯である。 ○外傾する体部から，口縁部でやや外反する。	○体部と底部の境から篦削り。他は，横ナデ。	○灰白色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。
10～11	甕形土器	○10は，外反する口縁部を，11は，「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。端部は，肥厚気味である。11は，器壁が厚い	○10，11とも刷毛目を施したのち口縁内外を横ナデで消している。	○黄褐色～茶褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。

13) D—1

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
12	杯身	○高台付の杯である。 ○口縁部は外反して細くなり，端部は丸くおさめる。底部と体部との境は，屈曲して明瞭である高台はふんばり気味で，端部を丸くおさめる。	○底の篦削りを除く他の内外面は，横ナデ。	○灰色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。
13～14	皿形土器	○器高は1.2～1.5㎝と低く浅い。 ○口縁部は外反し端部を丸くおさめる。	○底部は，篦削りののち横ナデ。 ○他は横ナデで仕上げている。	○淡褐色 0.5㎜以下の砂粒を含む。
15	杯形土器	○内湾する体部をもち，口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。	○底部は，篦削り，他は，横ナデ。	○淡褐色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。精良。 ○全体に丹塗り。
16	甕形土器	○外反する口縁部をもち，口縁部になるほど細くなる。 ○胴部はほぼ球形を呈する。胴径は，口縁径より大きい。 ○胴部ほぼ中央には，1対のやや三角形に近い肥手をはりつけている。	○頸部から下は，縦方向の刷毛目を施す。 ○口縁部は，横ナデ。 ○内面は，不明である。	○淡褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。

住居址

1) H—2

17	高杯形土器	○杯部は，体部が直線的に広がり，さらに外反する口縁部をもつ。 ○脚部は，脚柱部がやや太めでゆるやかに裾部に広がる。やや短めである。	○脚柱部内側を除き，全体を篦磨きで調整されている。さらに各端部は横ナデ仕上げている。 ○脚裾部端には1条の篦描き沈線を施す。 ○円孔は，上下に3ケ所づつ，上下に交互に配置。	○淡褐色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。 ○精製粘土使用。

6) H—7

18	甕形土器	○口縁部は，「く」の字状に外反し，さらに垂直に立ち上がる。端部は，丸くおさめている。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○頸部内面には，指頭による調整がみとめられる。	○淡灰褐色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。 ○外面にスス付着

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
19	甕形土器	口縁部は，「く」の字状に外に屈曲する。端部は，やや肥厚する。	○口縁部は，横ナデ。 ○頸部下は，刷毛調整。 ○内面は，ナデにより仕上げ。	○淡褐色 ○1.5㎜の砂粒を含む。
20	甕形土器	○口縁部は，「く」の字状に外反し，端部は内側下がりに面をもつ。内側にやや肥厚する。胴部の張りは大きい。	○口縁部内外面，頸部は横ナデ。 ○頸部から胴部は，刷毛目を施す。 ○内面は，指頭によるおさえとナデで調整している。	○淡赤褐色 ○2㎜以下の砂粒を含む。

7) H—1

21～25	杯蓋	○口径は，やや小さめのもの（11.2)cmから25(14.2cm）まである。 ○口縁部は，わずかに外に開き，稜線部の径よりも口径の方が大きい。 ○天井部は，比較的に平らなもの（24）とやや丸味をもつもの(22)がある。	○天井部の篦削りを除く内外面は，いずれも横ナデ調整をおこなう。	○淡灰色～暗灰色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
26～30	杯身	○口縁端部は，やや肥厚気味のものが多いが，丸くおさめるもの（30）もみとめられる。 ○立ち上がりは，やや内方へ傾斜する。 ○受部は，横，外上方にのびる。 ○体，底部は丸味をもつ。	○篦削りの方向は，時計回り，逆時計回りのが各2個体，他1個体は不明。	○淡灰色～暗灰色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
31～32	高杯(蓋)	○有蓋高杯の蓋である。 ○天井部中央につまみがつき中央が凹む。 ○体部から口縁部はやや外へ開き気味である。 ○口縁部は，やや肥厚気味である。	○天井部の½前後篦削りをおこなう。篦削りの方向は，時計回り。 ○口縁部は，横ナデにより調整する。 ○内面底部には，仕上げナデがみとめられる。	○灰白色～灰褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
33～35	高杯	○33，34は，無蓋高杯。 ○杯部は浅い（33）と深い（34）がある。 ○口縁部は，外反し端部を丸くおさめる。 ○口縁部と底部をわける稜はやや鋭さに欠ける。 ○脚部は短く，裾部が広がる。端部は段をもち，内湾気味に細くなる。	○杯部は，底部が篦削りで，他の内外面は横ナデ。 ○脚部外面は，カキ目調整がおこなわれている。 ○杯部の稜線で区分された文様帯には櫛描き波状文が施されている（33）。 ○脚部には，長方形の透しが3方にある。	○暗緑灰色（33） ○灰褐色（34，35） ○0.5㎜以下の砂粒を含む。 ○31，32の対となる有蓋高杯がみとめられなかったが，35が可能性有り。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
36	甕	○小さく球形を呈する。	○底部は篦削り，体部は横ナデを施す。 ○体部には2本の凹線が施されその間に円孔をもつ。	○灰色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
37	甕形土器	○中型の甕である。 ○口縁部は，外反し端部で上下に肥厚する。	○口縁部は，横ナデ。 ○頸部はカキ目で調整している。 ○胴部は，平行叩きののち部分的にナデ消している。 ○内面は，頸部まで横ナデ，頸部下は，同心円叩きを施す。	○暗灰色 ○2㎜以下の砂粒を含む。
38	甕形土器	○口縁部は，「く」の字状に外反する。 ○口縁端部は，面をもち1条の沈線がめぐる。	○口縁部内外面は，横ナデ。 ○内面の頸部下は，押圧により調整している。 ○口縁部外面には，篦描きの逆「川」の字の窯印しがある。	○外・暗赤褐色。 内・黒褐色。 ○二次焼成痕あり。
39	鉢形土器	○口縁は短く外反する。 ○丸味をもった底部から内湾する体部をもつ。	○口縁部内外面は，横ナデ。 ○外面は，横方向の篦磨きを施す。	○淡赤褐色。 ○0.5～1㎜の砂粒を多く含む。
40～41	甑形土器	○口縁部は，外反するもの（40）とほぼ垂直に立ち上がるもの（41）がある。 ○40は，口縁部端面に，浅い凹部をもつ。 ○41は丸くおさめている。	○外面は，縦方向に荒い刷毛目をつけて調整し，口縁部近くでは，巾2～4㎜にわたって横ナデするため，刷毛目が消されている。 ○口縁部は，横ナデを施す。	○淡赤灰色。 ○0.5～1㎜の砂粒を多く含む。 金雲母を含む。
42～47	椀形土器 （師　楽）	○口縁部は，内湾気味である。	○叩きのつくもの（42～45）とつかないもの（46，47）がある。 ○42～45の叩きは，荒く横方向につけている。内面は，押圧とナデ調整。 26，27は，内外面とも，押圧とナデ調整。	○淡茶灰色～淡暗灰褐色。 ○2㎜以下の砂粒を含む。
48	甕形土器	○大型の甕である。 ○口縁部は，朝顔形に外反し，端部は上下に肥厚する。 ○口縁端部ちかく，断面三角形の凸帯をめぐらし，さらにその下2条の凸帯をめぐらし文様帯をつくっている。 ○胴部の張りは大きく，底部はやや不安定。	○口縁部内外は，横ナデ。 ○胴部外面は，平行叩きを縦方向に全体に施している。 ○内面は，同心円叩きののち，ナデ消ししている。 ○口縁部の凸帯をはさんで，櫛描きの波状文を施す。	○濃緑色～灰色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。

土　　壙

1）井戸－1

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
49	器台形土器	○円筒状の胴部から頸部にかけて外反し口縁部をつくる。端部上は，下に拡張する。 ○脚部は，「ハ」の字状に広がる。端部は，端面をつくる。	○口縁部端面には，退化凹線がめぐり，そののち篦描きで斜格子の施文をしている。 ○外面は縦方向の刷毛調整したのち，胴部から脚裾部に5～7条の凹線を4ケ所，さらに胴部に円孔を上下に8ケ所あけている。 ○内面は，口縁部～体部上半に篦磨きののち横ナデ，ナデで調整。 ○胴部下は，篦削りを施している。裾部内面は，篦削りののち横方向の刷毛調整している。脚部端は，横ナデ。	○内・淡茶褐色。 ○外・淡乳褐色。 ○0.5～1.5㎜の砂粒を含む。

2）井戸－2

50	壺形土器	○口縁部は，「ハ」の字状に開く頸部から外反し，さらに斜下方と外上方に拡張する。	○口縁部，頸部内面は，荒い刷毛目ののちナデ調整。 ○頸部外面は，刷毛調整。頸部下半は刷毛調整の後，篦磨き。	○赤褐色で1㎜前後の砂粒を含む。金雲母・黒色粒がめだつ。 ○全体に丹塗り。
51～52	壺形土器	○口縁部は，短い頸部から，外反しさらに外上方にのび，端部を丸くおさめる。	○外面は，頸部下を刷毛調整ののち，口縁部近くまで篦磨き。 ○内面は，頸部まで篦磨きを施したのち，口縁部を横ナデ。肩部を押圧とナデ，肩部下を荒い刷毛調整。	○内・茶褐色。 外・淡赤褐色。
53	壺形土器	○口縁部は，「ハ」の字状に開く頸部から鋭く屈曲し，さらに外上方にのびる。	○口縁部内外面は，横方向の篦磨きを施す。頸部外面は，刷毛目ののち篦磨き調整。内面は，刷毛目ののちナデ調整。	○赤褐色。 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。
54	壺形土器	○口縁部は，「ハ」の字状の頸部から，ゆるやかに外反し，上下に拡張する。	○内外面とも篦磨きを使い分けている。口縁部は横ナデ。 ○内面の頸部下半は，篦磨きののちナデ調整。	○赤褐色。 ○1㎜以下の砂粒を含む。
55	壺形土器	○いわゆる二重口縁の壺である。口縁端部は，外側横に拡張気味。	○内外面とも篦磨きを施す。	○茶灰色。 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
56	壺形土器	○口縁部は，「く」の字状に屈曲し，さらに斜上方にのびる。	○口縁部に，断面三角形の凸帯をはりつけ，その上部に，2帯の雑な櫛描きの波状文を施文する。凸帯下と，内面は，刷毛調整ののち篦磨き。	○暗茶灰色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
57	壺形土器	○斜上方にのびる口縁部をもち端部は，やや上方に拡張する。	○口縁部端面には，円形浮文を連続してはりつける。その下に雑は，櫛描き波状文を施す。また口縁部内面にも波状文を施文	○褐色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。精良。
58	壺形土器	○破片のため全体は，不明であるが小型の壺になると思われる。	○口縁部内外面は，横ナデ調整。	○赤褐色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。
59～63	甕形土器	○「く」の字状に外反するもの（60・61）と，外湾気味に外反する（62・63口縁部は，さらに上方に拡張する。体部は肩に張りをもつ。	○口縁部端面には，櫛描きによる平行沈線文を施す。 ○体部外面は，刷毛目を施したのち，肩部下を篦磨きをおこなう。 ○内面は，肩部下を篦削りを施す。指頭圧痕の残るものもある（63）	○内・淡褐色 ○外・暗褐色 ○1.5㎜以下の砂粒を含む。 ○ほとんどのものに煤付着。
64～66	甕形土器	○64の口縁部は逆「ハ」の字状に開き，さらに外上方にのびる。 ○65は，「く」の字状の口縁部をもつ。胴部はあまり張らない。	○64は不明。 ○65は，口縁部，頸部を押圧とナデで調整，口縁部内面は，刷毛調整ののちナデ，頸部下半は篦削り。	○64・赤褐色 ○65・66・暗茶灰色 ○1.5㎜以下の砂粒を含む。
67	高杯形土器（器台形土器）	○小型器台である。わずかな杯部から上方に短く立ち上がる口縁部をもつ。	○内外面とも細かい篦磨きを施す。	○褐色 ○0.5㎜以下の砂粒を含む。水漉し粘土。
68～73	高杯形土器	○杯部は，小さな体部から，稜線をもち外反する口縁部をつくる。全体として杯部は大きい。脚部は，比較的短く裾部で屈曲して広がる。 ○68は，壺の可能性もある。	○杯部は，横方向の細かい篦磨きをするもの（68～70）と，縦方向の比較的幅の広い篦磨きをするもの（71）がある。脚柱部は篦磨き。裾部は，刷毛調整ののち篦磨き。 ○内面は，裾部に細かい刷毛調整する。（73）	○68・72淡茶褐色 ○69～71・73赤褐色 ○68～70・730.5㎜以下の砂粒を含む。 ○水漉し粘土。 ○70・720.5～2㎜の砂粒を含む。
74～83	鉢形土器	○やや不安定な平底から内湾気味に立ち上がり，稜線をもちながら上方ないし斜上方にのび口縁部をつくる。	○外面は，刷毛調整ののちナデたもの（74，75，81，82），篦削りののち上半を篦磨きするもの（78，79，83）がある。さらに篦削りだけのもの（77，80）などがある。	○淡茶灰色～淡赤褐色 ○0.5～1㎜以下の砂粒を含む。 ○76，78，1か所に黒斑。

3）井戸－3

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
84～94	高杯	○84は有蓋高杯で短い脚をもつ。 ○85～86は無蓋高杯で88～93のやや長脚がつく。	○杯部の底部，脚柱部内面を除き全て横ナデで調整。 ○84～86の杯部内面の底部には仕上げナデが認められる。	○灰色～灰白色 ○0.5～1㎜の砂粒を含む。
95	器台形土器	○体部からやや外反し，折り曲げて口縁部をつくる。杯部は，浅めで小型である。	○全て横ナデ調整。	○暗灰色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
98～99	甕形土器	○口縁部は外上方に外傾し，端部に凹線がめぐるもの（98）と，ゆるやかに外反するもの（99）がある。	○口縁部外面は，横ナデをおこなう。99は，頸部下を縦方向の刷毛調整。 ○口縁部内面は，横方向の刷毛目。	○淡茶褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
97	高杯形土器	○脚柱部のみで全体は不明。	○外面は荒い刷毛調整ののちナデ調整。内面はしぼり目があり，ナデ調整。	○淡黄褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
96・101～103	鉢形土器	○18～19は，半円形を呈す。口縁部は，片口を一か所にもつ。 ○103は，製塩土器である口縁部は，直口である。やや大きめの底部をもつ。 ○口縁部を除き，全体に器壁は薄い。	○96は，外面を指圧によるおさえとナデ，内面をナデにより調整。口縁部は，横ナデ。 ○101は，外面を細い刷毛，内面をナデで調整。口縁部は，横ナデ。 ○102は，口縁部を横ナデ，体部をナデにより調整。底部は，手持ちの篦削りののちナデか。内面は，全体にナデにより仕上げている。底部には，指頭におさえ痕が残る。 ○103は，口縁部から頸部にかけて荒いタタキののちナデ調整。頸部下と内面は，指頭によるおさえののちナデ調整。	○96・淡黄褐色 ○101・内・灰褐色 外・赤褐色 ○102・内・赤褐色 外・淡褐色 ○103・内・暗茶色 外・暗茶褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。 ○102・黒斑が1か所。 ○101・内外面にスス仕着 ○103・二次的な焼成あり。
100	甑形土器	○口縁部は，やや外傾する。	○内外面ともに刷毛目ののちナデ調整。	○淡褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。

4）柱穴状土壙

104	壺形土器	○口縁部はほぼ垂直に立ち上がる頸部から，屈曲気味に外反する。 端部は丸くおさめている。器壁は厚い。	○口縁部と頸部は横ナデ。 ○頸部内面は指頭による押えとナデで調整。 ○頸部下は篦削り。	○淡褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。
105	甕形土器	○やや上げ底の底部からゆるやかに外反しながら立	○外面は縦方向の篦磨き。 ○内面は篦削りで調整。	○淡茶灰色 ○1.5㎜以下の砂粒

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		ち上がり，胴部下半近くで内湾してくる。		を含む。
106	甕形土器	○ゆるやかに外反する口縁部をもつ。 ○器壁は厚い。	○口縁部端面には1条の退化凹線がめぐる。 ○内外面は横ナデ調整。	○淡茶褐色。 ○3㎜以下の砂粒を含む。
107	高杯形土器	○長脚の高杯である。 ○脚柱部は細く裾部に広がる。 ○杯部は脚柱部からほぼ横方向に屈曲しながら取りつく。	○杯部，脚柱部は篦磨きで調整。 ○脚裾部に円孔あり。破片のため全体は不明であるが，2個対になって3ケ所に存在すると思われる。	○淡褐色。 ○1㎜以下の砂粒を含む。
108	鉢形土器	○製塩土器である。 ○器壁の厚い，踏張る脚部をもつ。	○体部は篦削り，脚部はナデと押圧で調整している。	○淡茶褐色。 ○1.5㎜以下の砂粒を含む。
109	鉢形土器	○短かく外反する口縁部をもつ。 ○胴部の張りは口縁径と同じである。 ○安定した底部をもつ。器壁は厚い。	○外面は刷毛調整後，篦磨き。 ○口縁部，頸部は横ナデ。 ○内面は篦削り。 ○底部には指頭圧痕が残る。頸部に円孔有り。（破片のため1か所しか判明せず。）	○褐色。 ○1㎜以下の砂粒を含む。

5）土器溜り

110	壺形土器	○長頸壺である。 口縁部は，やや外傾する。頸部からゆるやかに外反する口縁端部は，上下に拡張している。	○口縁端面には，退化凹線が施されている。 ○口縁，頸部は，横ナデで仕上げている。	○赤褐色 ○1㎜前後の砂粒を含む。
102～115	甕形土器	○口縁部は，外反し，端部を斜め方向に拡張させている。 ○胴部は，最大径か上部にあり，胴長である。 ○底部は，上げ底である。	○2は，口縁端面に2条の退化凹線をもつ。 外面は，肩部から下に刷毛調整ののち篦磨調整している。部分的に肩部まで横ナデを施し，刷毛目を消すものである。（111～114） ○口縁部は，横ナデ，頸部内面は押圧とナデ調整している。 ○肩部下は，篦削り。	○淡茶黄褐色 ○1㎜以下の砂粒を含む。 ○いずれも外面にススの付着。
116～120	鉢形土器	○116～118は，台付の鉢である。116はやや大型で，長めの脚部をもつ。脚部は，裾広がりで端をやや肥厚さす。 ○119は，安定した底部から，内湾気味に立ち上がり，端部を丸くおさめて	○116は，外面を刷毛調整ののち篦磨きを施す。杯部内面は篦磨き。 ○脚部の裾は，横ナデと押圧で調整している。 ○117は，杯部外面に刷毛調整し，口縁端部を押圧で調整している。脚部は，外面を篦削り，内面をナデで調整。	○黄褐色～灰褐色 ○120・暗灰色 ○2㎜以下の砂粒を含む。 ○117に1ケ所，119に2ケ所黒斑が残る。

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		いる。 120は，製塩土器である	119は，外面を，縦，横の篦磨きを仕い分けている。内面は，刷毛調整ののち篦磨きか。口縁部は横ナデ。	

包　含　層

微高地西斜面土器溜り

121～122	壺形土器	○筒状に長くのびる頸部は口縁部に近ずくにつれややすぼり強く外反する口縁部につづく。口縁端部はわずかに上下に拡張する。	○外面は篦磨き，刷毛調整後10数本の沈線を廻らす。 ○121は口縁拡張部に2本の退化凹線が廻る。	○121淡褐色 122淡乳茶灰色
123～124	器台形土器	○外に外反する口縁部と「ハ」の字状にしっかりした脚部である。	○口縁端部は凹線上に竹管文を2段6個施す。 ○脚部は凹線文が廻る。	○123草茶褐色 124外～淡黄白色 内～茶褐色 123・124は同一個体ではない。
125～131	壺形土器	○いわゆる二重口縁を呈し，口縁は垂直に近くたちあがる。	○内面は頸部まで篦削りを行う。	○125淡褐色で砂粒を多く含む。 ○131淡褐色
126～130～132～133	壺形土器	○「く」の字状に外反した口縁部から端部を上方に長く，下方に短く拡張するもの，上部にわずかに拡張するもの（132～133がある。130は肩が大きく張る。	○体部外面は刷毛～篦磨き，内面は頸部まで篦削りを行う。口縁端部に退化した凹線を持つものとなでで終ってしまうものがある。	○126～127乳白色，128淡営黄色，129淡褐色（小石粒を多く含む）130淡褐色，白茶褐色133淡褐色。
134	壺形土器	○「く」の字状に折れ曲る口縁を持ち端部は軽く肥厚する。	○外面は細い刷毛調整，内面は荒い篦削りを行う。	○134淡赤褐色
135	壺形土器	○体部下半部のみで球形を呈し，底部が1㎝程突出し平底になる	○内外面とも細い丁寧な刷毛で仕上げている。	○135内面黄色，外面淡乳褐色
136～144	甕形土器	○「く」の字状に外反する口縁部から端部をわずかに上方に拡張し丸くおさめるものと1㎝以上上方に拡張するものがある。	○体部外面は上半部を刷毛，下半部を篦磨きを行っているものが多い。内面は頸部下まで篦削りを行う。1㎝以上口縁端部を上部に拡張するものは新条の退化した凹線を廻らす。	○136淡赤褐色 137～138乳営色 139～140淡灰褐色 141～142淡赤褐色 143白色 144淡桃色

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
145～146	甕形土器	○「く」の字状に外反する口縁部をわずかに下方に拡張する。	○体部外面は上半部を刷毛，下半部を篦磨きを行っているものが多い。内面は頸部下まで篦削りを行う。	○145淡褐色 146淡灰褐色
147～149	甕形土器	○「く」の字状に外反する口縁部をそのまま丸くおさめる。	○149は体部外面全体と口縁部内面にたたきをもち外面はその後篦磨きを行う。内面は頸部下を篦削り。	○147灰黒色 148淡白乳褐色 149淡赤褐色
150～151	高杯形土器	○短い脚柱部をもち，ほとんど水平に近い杯部から大きく開く口縁部をもつ。脚裾部は「ハ」の字状にしっかりとふんばる。	○内外面とも丁寧な篦磨きを行い。脚裾部に4孔をうがつ。	○水漉し粘土 淡乳褐色
152	高杯形土器	○コップ状に長く伸びる口縁部をもち，脚が付くものと思われる。	○口縁立ちあがりと境に凸帯を貼り付ける。二条の沈線が廻る。内面は刷毛，外面は篦磨きを行っているようである。	○水漉し粘土で淡赤褐色を呈す。
153	台付鉢形土器	○ラッパ状に拡がる口縁に脚部をもつ。	○体部は篦磨き，脚部は指圧の後刷毛で調整を行う。	
154	鉢形土器	○「く」の字状に外反する口縁部から端部を上下に拡張する。	○内面頸部以下篦削りを行い，その下部は部分的に篦磨きを行う。	○淡褐色。
155～156	製塩土器	○脚部のみである。底径5㎝前後のものが多い。	○外面は篦削りを行う。	○淡赤褐色
157～160	壺形土器	○いわゆる二重口縁を呈し，口縁部は強く外反する。体部は肩がわずかに張り底部に近ずくにつれて少しすぼまる。底部は丸底を呈す。160は小型で体部は球形を呈し，わずかに平底をもつ。	○体部外面上半部は刷毛，下半部は篦磨きを行う（160は逆）。 ○内面は頸部下大半部にわずかに指頭圧痕が残る。上半部は横方向下半部は縦方向の篦削りを行う。	○157内乳茶褐色 外淡茶灰色 158内乳灰白色 外茶褐色 159内黒褐色～淡茶褐色 外赤褐色～淡灰褐色 160内乳白色 外淡乳褐色
161～162	壺形土器	○卵型の体部をなし，口縁部は鋭く外反しさらに上方に拡張させている。	○体部外面は刷毛調整を行った後上半部のみ篦磨きを行う。内面は全面を刷毛調整を行う。	○161淡褐色（小片 ○162は赤褐色～内赤褐色を呈し全体に部厚い感じである。
163	壺形土器（直口壺）	○いわゆる直口壺で体部は玉ねぎ形をなし，口縁部はやや開きながら8㎝程立ち止る。	○口縁部体部外面は丁寧な篦磨き内面は，口縁部を篦磨き，体部内面上半部は指頭圧痕を残し下半部は丁寧な刷毛で仕上げる。	○水漉し粘土 ○淡乳褐色

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
164～188	甕形土器	○くの字状に外反する口縁部から上方に長く拡張する端部をもつ。体部は卵形～球形に近い。球形に近いものは少し小型で口径12cm前後，器高20cmであるが，卵形のものは，口径15cm前後，器高25cm内外でなで肩のものと少し肩の張るものがある。	○口縁端面は櫛状工具による沈線を巡すものが圧倒的に多いが数点ないものもみられる。体部外面は刷毛調整後下半部のみに篦磨きを行う。底部近くを中心に指頭圧痕が見られる。	○淡赤褐色の明るい感じのものから，灰褐色ぎみのものがある。又，二次的は火を受けているものが多い。
189～190	甕形土器	○卵形に近い体部からくの字状に外反する口縁部を持つ。端部はわずかに上方に拡張するものと（189）そのままのもの（190）がある。		
191～196	高杯形土器	○椀状の杯部に，短い脚柱部をもち，脚裾部はハの字状に開き4孔を有する。	○杯部内外面，脚柱部外面には丁寧な篦磨きを施し，脚裾部外面は刷毛調整後篦磨きを行う。内面は細い刷毛調整を行う。	○水漉し粘土
197～204	高杯形土器	○水平に近い杯部から外に開く口縁部をもつ。長い脚柱部からハの字状に開き4孔を有する。	○同上	○同上
205～206	小型器台形土器	○円錐形の脚部をもち，小さな杯部からわずかに上方に開く口縁部をもつ。	○杯部内外面，脚部外面には丁寧な篦磨きを行う。脚部内面は刷毛調整を行う。	○水漉し粘土 ○淡褐色
207～209	坩形土器	○体部は半球形を成し口縁部はわずかに開く。底部は丸底に近いものからわずかではあるが平底に残るものもある。	○体部外面は刷毛調整で終るものと，その後に篦磨きを行うものがある。内面は篦削りを行っている。	○208淡褐色 ○209淡乳褐色
210～216	鉢形土器	○口径25cm，器高15cm前後の小型品と，口径30cm，器高20cm程の中型品，口径40cm，器高26cm前後の大型品がある。半球形を成す体部から口縁部を持ち，くの字状に折れる。端部は丸くおさめるものとわずかに上下に拡張し櫛状工具による沈線を巡すものがみられる（214） ○口径13～16cm，器高6cm前後の浅い椀状の鉢であ	○体部内外面共，刷毛調整，あるいは篦磨きを行っている，部分的に篦削りを行っているものもある。 ○杯部外面は篦削り，篦磨き，内面は刷毛，篦削り，篦磨きなど。	○214 灰褐色 216 赤褐色

番号	器種	形態の特徴	手法の特徴	備考
		る。台がつくものもみられる。		
217～225	鉢形土器	○口径12～16cm前後，高さ6～7cmの小型の鉢で224～225のように台が付くものである。	○外面は篦削り，篦磨き，刷毛等で，内面は篦磨き，篦削り，刷毛で調整を行なうものなど器形によって多様である。	

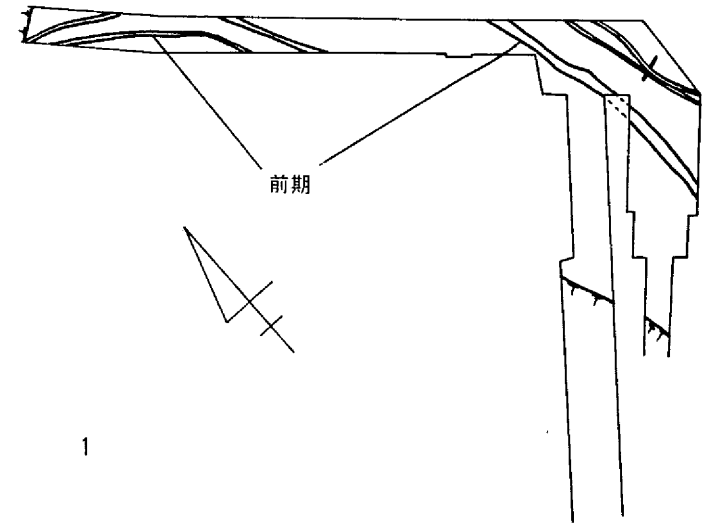
包含層

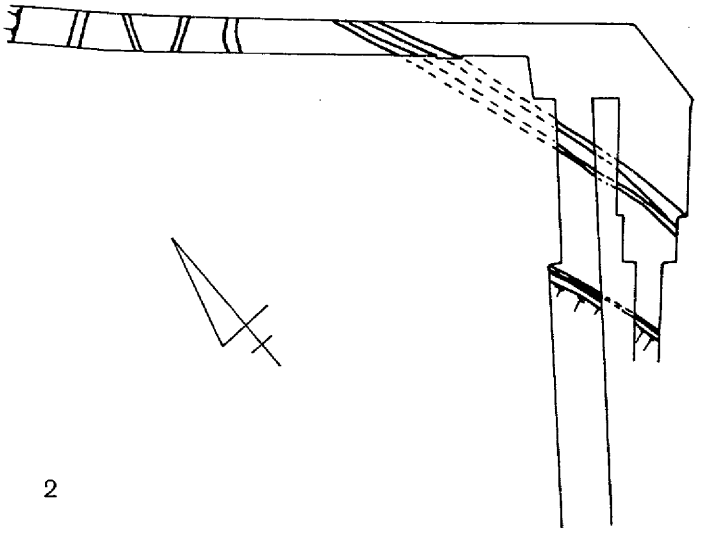
226～230	鉢形土器	○精製の浅鉢土器である。口縁部は，直線的に外傾してのびるもの（226，短かく「く」の字状に屈曲するもの（227・228）薄手で外反するもの（229）がある。227には，口縁部に突起がつく。	○226～230は，内外とも丁寧に研磨されている。口縁部には，部分的にナデを施す。	○黒灰色 ○1mm以下の砂粒を含む。
231	鉢形土器	○大型の精製の鉢である。 ○やや外反する口縁部をもつ。	○内外とも研磨を施した後，口縁部外面をナデている。	○淡黄褐色 ○1mm以下の砂粒を含む。
236	壺形土器	○体部片である。器壁は厚い。	○削り出し突帯をもち，その下に篦描きの沈線を2条巡らし，さらに，細い篦描きの孤文を連続して施文する。	○淡黄褐色。 ○1.5mm以下の砂粒を含む。
237～241	甕形土器	○口縁部は，「く」の字状に屈曲するもの（237）ゆるやかに外反するもの（238～239）がある。 ○底部，安定した平底である。	○内外とも，篦磨き，ナデにより調整，口縁端面に篦状工具によりきざみ目をもつものがある。（237～239），口縁部と体部の境には篦描きによる沈線が2～3条巡る。	○淡黄褐色～灰褐色。 ○1～2mm前後の砂粒を含む。
244	鉢形土器	○ゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁部には凹部がある。 ○器壁が厚い。	○内外とも，丁寧な篦磨きを施したのち，口縁部をナデ調整している。	○淡黄褐色。 ○1mm前後の砂粒を含む。
245	甕形土器	○「く」の字状に屈曲する口縁部に，端部はさらに上下に肥厚さす。	○口縁部内外は，横ナデ。体部内外面は刷毛で調整。	○黄灰褐色 ○1～2mmの砂粒を含む。
246～249	甕形土器	○口縁部は大きく外反し，端部を上下に肥厚さす。	○口縁部面に2条の退化凹線を施すもの（247～248）と凹部をもつもの（246～247）がある。口縁部内外面は横ナデを施す。体部外面は刷毛で調整しているもの（246～248～249）がある。体部内面はナデ，篦削りで調整している。	○黄茶褐色～灰黄色 ○1～1.5mmの砂粒を含む。

第4章　ま　と　め

遺　　構

前章で明らかにしたように今報告の調査面積は2530㎡であった。しかし結果的には1微高地に対して三方からトレンチを入れた状態になった。検出した遺構は溝状遺構31，住居址34，井戸8，土壙24等であるが，大半のものは重複しており，時期決定に非常な困難を招いたものもあった。その後当遺跡は調査が進み集落址のみならず，当時の生活基盤である水田遺構の検出など新事実が続々と明らかにされているが，ここでは溝状遺構以下，各々の遺構について今調査範囲全体を通しての補足説明を行い今後の調査の参考としたい。



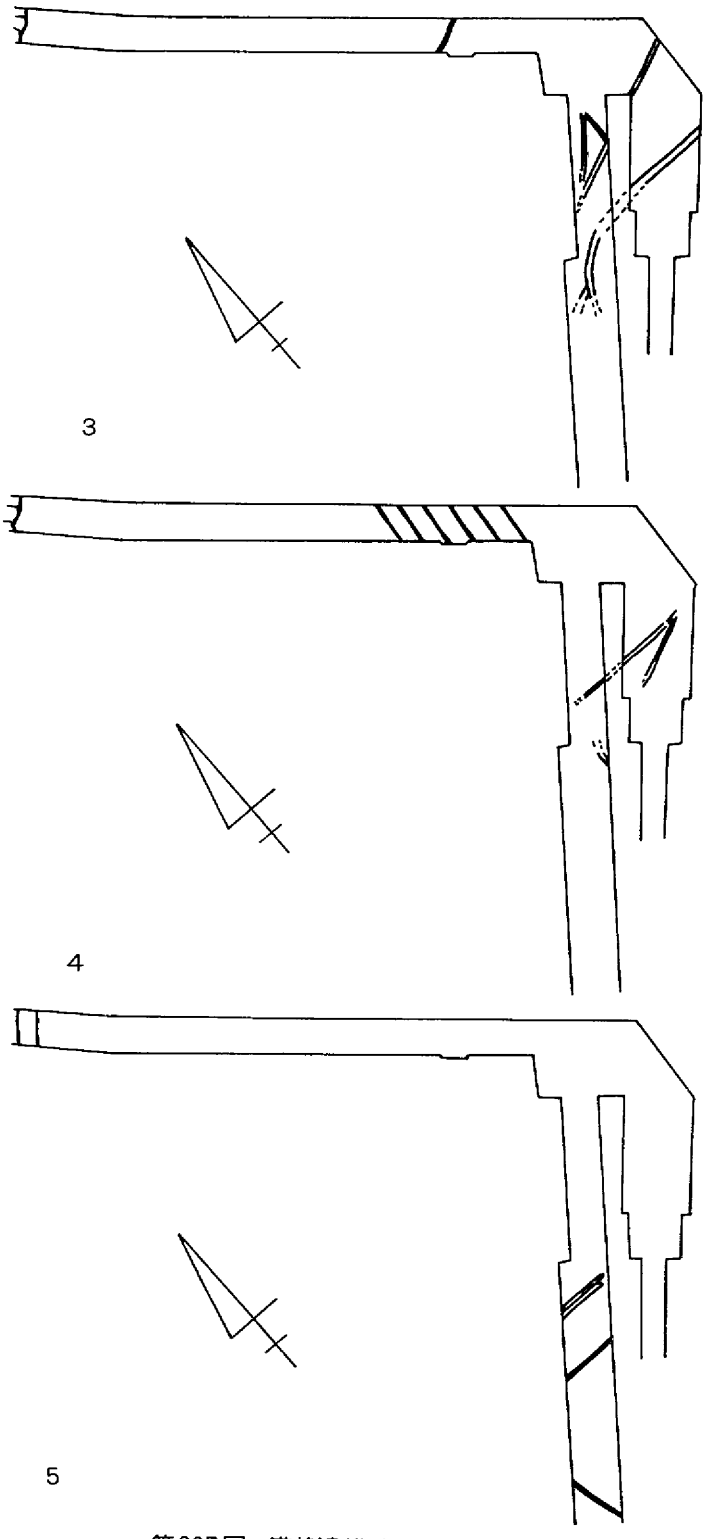


第206図　溝状遺構時期別配置図（その1）

溝状遺構について

今回調査した左岸用水・新田サイフォン・新田樋門からは，各々13条・20条・14条の溝状遺構が検出された。しかしこれらの溝の中には，その検出された状況からみて同一の溝と考えられるものがいくつかある。

第206図—1の溝6条は，いずれも弥生時代後期よりも前に存在していたと思われるもので，その中の2条は弥生時代前期の溝と推定される。



第207図　溝状遺構時期別配置図（その2）

これらの溝のうち，底部の一部が残存している性格不明の溝を除く他は，いずれも微高地上を，微高地に沿って流走しているもので，水制施設をもつと考えられる溝がある。

第206図―2の溝7条は，弥生時代後期に存在していたと推定されるもので，微高地上および微高地の端部を，微高地に沿って流走している。この時期の溝はいずれもかなり大きな規模が考えられる。またこれらの溝は，川ざらえや掘り直しがされ，溝断面が比較的ゆるやかな「U」字形を呈するものと，「V」字形や，深い「U」字形を呈するものとの，異なる2種類の性格の溝が推定される。

第207図―3の6条の溝は古墳時代に推定されるもので，概ね微高地に対し直交して検出されている。これらの溝は，弥生時代後期の溝に比べると幾分小さくなる傾向がみられる。

第207図―4は古墳時代後半から鎌倉時代初頭頃までに推定される溝状遺構で，これらの時期になると，微高地に直交しているものの他に，明らかに法則制をもつものがみられるが，これらは規模的に小さく条里の溝と考えられる

ものは検出されていない。またこれら2種類の溝を時代別に分けることはできない。

第207図—5は中世以降と考えられる溝5条であるが，このうち窪みとも考えられる一例を除きいずれも，南北および東西に直線的に流走する溝で，条里に制約されているとも考えることができる。以上みてきたように，今回の調査において検出された溝状遺構は，弥生時代前期2条，弥生時代後期までのもの11条，古墳時代7条，平安時代～鎌倉時代初頭4条，中世以降5条の合計29条である。これら検出された溝の各々の時期・使用目的の限定は困難であるものの，各時期ごとに大別してみると，微高地に並走・直交するもの，条里方向に沿っているもの等，流走路の変遷が認められる。（内藤）

住居址について

今回の調査では，左岸用水，新田サイフォン，新田樋門の各調査区から検出された住居址は弥生時代～古墳時代のもので総数34軒を数える。検出された住居址は，調査区の関係で全体を検出できたものは少く，一部分を確認したのが多数を占めたため各々の住居址の特徴を十分掌握できなかった。

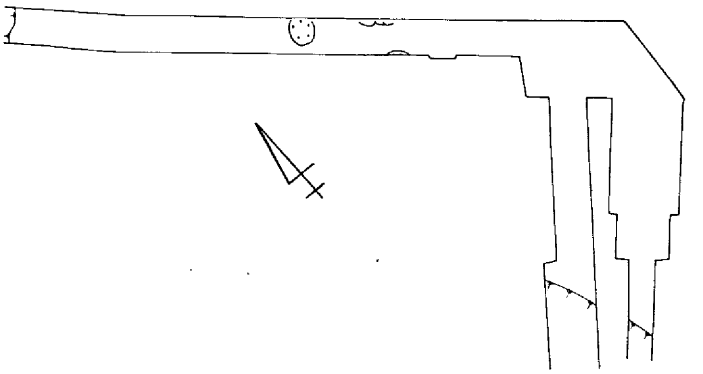
前章では，各調査区ごとに住居址の説明をおこなったが，各調査区は同じ微高地上に存在することからここでもう一度簡単に整理しておきたい。

以下，時期的に分け住居址の説明を行う。

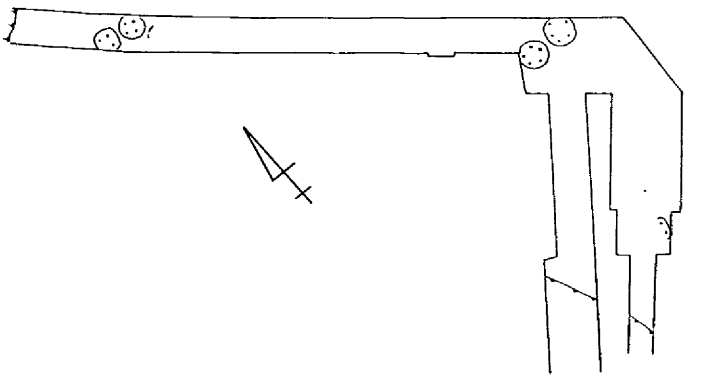
1） 百間川後期Ⅰ期

今回の調査で検出された最も古い住居址である。左岸用水調査区で5軒検出されている。検出された住居址は，基本的には円形，ないし楕円形を呈すると考えられる。柱穴は，左岸用水3—H—4で5本柱に復元できる。

住居址内からの出土遺物としては，土器の他に左岸用水3—H—4から，ガラス小玉，砥石が出土している。



第208図 百後Ⅰ期住居址配置図

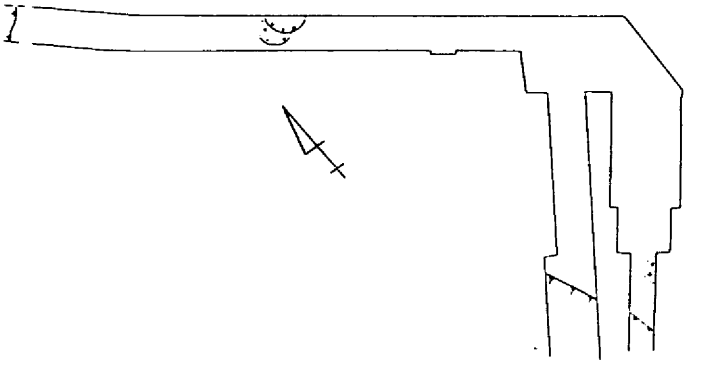


第209図 百後Ⅱ期住居址配置図

2） 百間川後期Ⅱ期

この時期の住居址は，左岸用

水５－Ｈ－１，５－Ｈ－２，新田サイフォンＨ－７，Ｈ－８，新田樋門Ｈ－２などが検出されている。平面プランは，百・後・Ⅰと同様に円形ないし楕円形を基調としているが，左岸用水５－Ｈ－１のように胴張りの隅丸方形気味のものも検出されている。また，新田樋門Ｈ－２は一辺約350cmの隅丸方形を呈するもので，平面プラン，規模にその特徴をもつ。柱は，基本的には４本柱で住居址を構成する。新田サイフォンＨ－７，Ｈ－８は，建て替えが数回行なわれており，５，６本柱でも構成された時期をもつ。遺物としては，左岸用水５－Ｈ－１からガラス製の管玉，新田サイフォンから刀子，のみ状石器，石鏃，土製紡錘車などが出土している。



第210図　百後Ⅲ，Ⅳ期住居址配置図

3）百間川後期Ⅲ期

この時期のものは，左岸用水３－Ｈ－２の１軒のみである。平面プランは，推定径約800cmの円形を呈しており，４回の建て直しが行なわれていた。柱は，４本と推定されており，極端に外側に位置している。

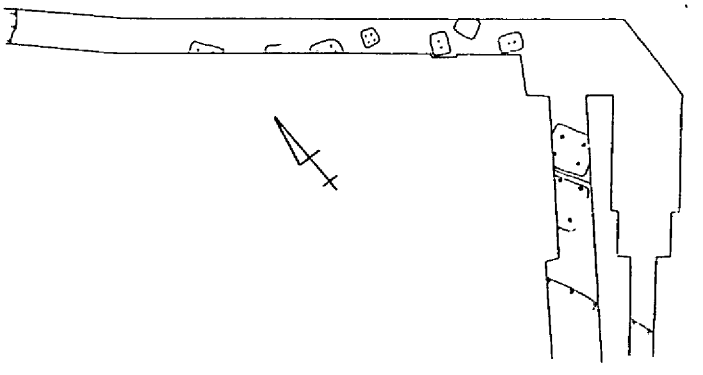
遺物は，鉇２点，鉄鏃，銅鏃各１点，砥石などが検出されている。

4）百間川後期Ⅳ期

Ⅲ期と同様に，この時期のものは左岸用水４－Ｈ－１の１軒だけであった。平面プランは，左岸用水５－Ｈ－１（百・後・Ⅱ）と類似した胴張りの隅丸方形を呈している。柱は，４本柱である。

遺物は，鉄鏃，砥石などが出土している。

5）百間川古墳時代　Ⅰ期



第211図　百古Ⅰ，Ⅱ期住居址配置図

本調査で最も多く検出された住居址である。検出された住居址は，８軒以上である。平面プランは，基本的には，隅丸の方形，長方形を呈しているが，方形に近いものも認められる。新田サイフォンＨ－１，Ｈ－２，Ｈ－３は，一辺900cm前後の大規模なもので，岡山県内を見てみてもその例はあまり認められない。一方，左岸用水１－Ｈ－１，１－Ｈ－５，２－Ｈ－１，３－Ｈ－１などの住居址は，一様に長辺450cm前後，短辺350cm前後の隅丸長

方形を呈し小規模なものである。柱は，特徴的に2本柱の左岸用水1－H－1，2－H－1が目だつ。また，火所は2本柱，4本柱とも柱の内側に存在する。

遺物は，左岸用水2－H－1から鉈などが出土している。

6） 百間川古墳時代 Ⅱ期

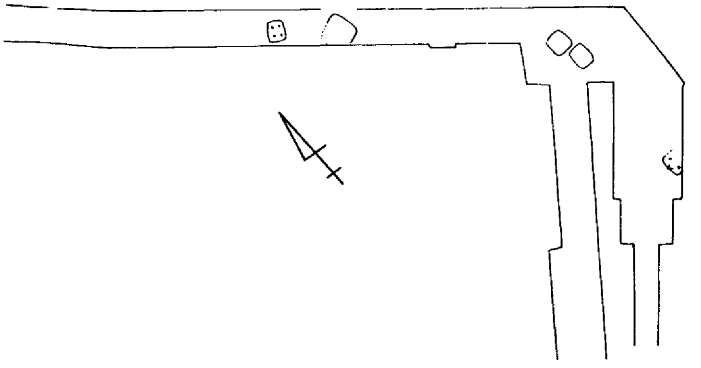
この時期のものは，左岸用水2－H－6の1軒だけであった。平面プランは，方形に近く，4本柱である。規模は，一辺約370cmと比較的小さい住居址である。

遺物は，銅鏃が1点出土している。

7） 5世紀代

この時期のものは，いわゆる古式須恵器を伴なう住居址である。新田樋門H－1，左岸用水3－H－1，3－H－3及び，プランの確認できなかったと思われる『竈遺構』を加えると4軒を数える。規模は，400～600cmのもので方形ないし長方形を呈する。柱は，4本柱で構成されている。また，これらの住居址には，造り付けの竈が存在する。いままで岡山県内では，5世紀代まで溯る造り付けの竈は確認されていなかった。

遺物としては，須恵器，土師器が出土しているが，特に須恵器の量が多かった。杯を中心に高杯，甕など器種がそろっていた。また須恵器に比べ土師器の量は少なく，器種も，甕，高杯，小型鉢，甑などと限定されている。さらに特徴的なのは，各住居址から小型の製塩土器が出土している点である。量的にも多く，住居址内の造り付け竈による自給的な生産を想起させる。



第212図 5世紀末・6世紀末～7世紀初住居址配置図

8） 6世紀末～7世紀

今回の調査で検出された最も新しい時期の住居址である。この時期のものは，新田サイフォンH－5，H－6の2軒である。規模は約370cm×470cmの不整長方形を呈する。柱穴は，検出されていない。また，H－6には，造り付けの竈が存在する。

遺物としては，須恵器，土師器が出土している。 （中野）

土壙について

今回の調査報告書中には土壙が合計24個報告されている。各調査区の内訳は左岸用水調査区で21

個，新田サイフォン調査区で３個，新田樋門調査区で０個であって，ほとんどが左岸用水で検出されている。また土壙中で井戸であると断定しているものは８個あり，その内訳は左岸用水調査区３個，新田サイフォン調査区２個，新田樋門調査区３個で，ほぼ各調査区均等に遺存している。なお土壙中に柱穴状土壙は除外している。以下土壙一覧表と井戸状遺構一覧表を見ながら考察して行きたい。

土壙は大きさ・形態・出土遺物・時期ともに種々様々である。そこで平面形と断面形を大きく４つに分類してみた。平面形は円形・楕円形・長楕円形・長方形に，断面形は階段形・皿形・逆台形・椀形にそれぞれ分けた。この４分類をそれぞれ数えると，円形６個，楕円形５個，長楕円形11個，長方形２個となり，長楕円形の土壙が最も多い。断面形では階段形４個，皿形14個，逆台形３個，椀形３個となって皿形の土壙が最も多い。また時期別に分けると百・前・Ⅱが８個，百・後・Ⅰが６個，百・後・Ⅱが３個，百・後・Ⅲが１個，百・後・Ⅳが２個，百・古・Ⅱが１個，６世紀後半が１個，時期不明のものが２個となっている。これをもっと大きく集約すると弥生前期８個，弥生後期12個，古墳時代２個，不明２個となって二つの時期に集中していることが判る。

以上のことから次のことが言える。すなわち，弥生前期の土壙は平面形が長方形ないし長楕円形を呈し，断面形が階段形を呈しているものが４個ある。この形態を示す土壙を百間川の舟形土壙と呼んでみたい。なお舟形土壙と呼ばれているものが岡山県内では津島遺跡（註29）で８個，舟山遺跡（註30）で３個，南方遺跡（註31）で１個の合計12例報告されている。津島遺跡の舟形土壙Ⅰは長さ４ｍ・幅90㎝・深さ50㎝を測り，弥生前期前半の建物と関連する可能性が大きく，墓壙の可能性もあると報告されている。船山遺跡の舟形土壙３は長さ５ｍ・幅70㎝・深さ50㎝を測り，用途は不明で弥生前期後半～弥生中期初頭に比定されている。南方遺跡のものは長さ４ｍ以上・幅1.4ｍ・深さ不明で，性格不明，弥生中期中葉～中期後葉に比定している。以上３遺跡の舟形土壙で共通している点は，舟形の平面形すなわち長楕円形を示し，長さは４㎝を超え，性格・用途を断定できないでいることである。百間川の舟形土壙は，これらの比較すると，時期的には津島と舟山にほぼ合致するが，規模は３－Ｐ－50が４ｍに近いが４－Ｐ－30は３ｍ，４－Ｐ－20は2.6ｍ，５－Ｐ－１は1.7ｍと少し規模が小さい。用途・性格は４－Ｐ－30と４－Ｐ－20が墓壙の可能性が高いと考えている。

次に弥生中期の土壙が全く存在しないということが判る。近隣の雄町・南方・兼基等の同様な沖積地遺跡には多数の遺構が検出されているにもかかわらずこの調査区内には土壙に限らず弥生中期の遺構が存在しない。

弥生後期になると遺構も急激に増加してくるが，土壙も例外ではない。時期的には百・後・Ⅰ～Ⅳと継続して出現し，形態的には４つの平面形が全部現われてくる。

古墳時代になると土壙の数は減ってくるがこれは後の条里制水田の耕作で削平を受けた結果と考えている。この時代の遺物の量が多いことと井戸など深い遺構がこの時代のものであることからそれが言える。（浅倉）

表11 土 壙 一 覧

（単位cm）

番号	区名	名 称	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出土遺物	時期
1	左岸	5－P－1	170×125×40	長方形	階段形	壺・甕・鉢・石庖丁・石鏃	百・前・Ⅱ
2	〃	4－P－30	300× 95×78	長楕円形	〃	蓋・壺・甕・石鏃	〃
3	〃	5－P－2	?× 75×32	〃	〃	甕	〃
4	〃	5－P－3	?× 50×10	〃	皿形	甕	〃
5	〃	4－P－20	260× 50×65	〃	階段形	壺・甕	〃
6	〃	3－P－50	390×120×56	〃	皿形	壺・甕・鉢	〃
7	〃	6－P－1	150×110×55	楕円形	階段形	甕・石鏃	〃
8	〃	2－P－20	350×?×20	?	皿形	蓋・壺・甕・石器	〃
9	〃	3－P－20	140×130×20	円形	〃	甕・高杯・鉢	百・後・Ⅰ
10	〃	1－P－15	175×165×45		逆台形		〃
11	新田	土壙 3	120×?×15		皿形	蓋・壺・甕・高杯・鉢・人骨	〃
12	左岸	壷棺 Ⅰ	90× 75×52		椀形	壺・鉢	〃
13	〃	〃 Ⅱ	76× 74×38		〃	壺・鉢	〃
14	〃	〃 Ⅲ	57× 53×35	〃	〃	壺・鉢	〃
15	〃	4－P－25	245×?×30	?	皿形	壺・高杯・器台・鉢	百・後・Ⅰ～Ⅱ
16	〃	5－P－19	120× 40×25	長楕円形	〃	壺・甕	百・後・Ⅱ
17	〃	5－P－7	180× 70×35	長方形	〃	高杯・鉢	〃
18	〃	5－P－10	160× 80×35	長楕円形	〃	壺・甕・高杯	百・後・Ⅵ
19	〃	4－P－1	87× 70×15	楕円形	〃	甕・高杯・鉢	百・後・Ⅲ～Ⅵ
20	〃	2－P－13	80× 65×40	〃	逆台形	壺・甕・高杯・鉢	百・後・Ⅲ
21	〃	2－P－1	165× 50×15	長楕円形	皿形	甕・高杯・鉢	百・古・Ⅱ
22	〃	3－P－1	120×120×10	円形	〃	蓋・杯・壺・甕・高杯	6世紀後半
23	新田	土壙 1	240× 80×55	長楕円形	〃	なし	不明
24	〃	土壙 2	145× 35×50	〃	〃	なし	〃

（註）新田は新田サイフォンの略。

表12 井戸状遺構一覧表

（単位cm）

番号	区名	名 称	長さ×幅×深さ	平面形	断面形	出土遺物	時期
1	左岸	6－井戸－Ⅰ	180×170×230	不整円形	逆台形	壺・甕・高杯・鉢・椀・石器	百・後・Ⅱ
2	〃	3－井戸－Ⅱ	180×?×265	円形?	〃	壺・甕・高杯・鉢	百・古・Ⅰ
3	〃	2－井戸－Ⅲ	150×?×215	円形?	〃	壺・甕・高杯・鉢	〃
4	新田	井戸－1	120×?×150	円形?	〃	壺	〃
5	〃	井戸－2	250×250×220	不整円形	〃	壺・甕・高杯・鉢	〃
6	排水	井戸－1	120×?×140	円形?	〃	器台	百・後・Ⅱ
7	〃	井戸－2	185×165×200	不整円形	〃	壺・甕・高杯・鉢・器台	百・古・Ⅰ
8	〃	井戸－3	145×130×225	〃	〃	甕・高杯・鉢・甑・木器	6世紀後半

（註）排水は新田樋門の略。

遺　　物

遺物はコンテナ（54×34×15cm）にして約500箱出土しており，その内訳は縄文時代2，弥生時代約200，古墳時代約300，奈良・平安・中世以降5である。一方百間川低水路内は第1章でも記した様に，その後数多くの遺構が検出され，現在も調査継続中である。このため，この項においては出土遺物中量的にも器種的にも圧倒的に多く出土した百・古・Ⅰの土器について，まず各遺構ごとに取り上げて今少し説明を加え，今後の広義の百間川遺跡内における編年作業の一助としたい。

新田サイフォン井戸―2

壺形土器は口縁が急に外反するものと口縁端部が上方に拡張をもつものがあり，頸部はいずれも短く「ハ」の字状を呈すもの，筒状を呈すものなどがある。体部は中央より僅かに上方に最大径をもち底部は平底である。整形手法は体部外面を刷毛調整及び篦磨きしており，胴部内面を篦削りのものと刷毛調整のものがある。後者の**187**・**191**などは，内面に篦削り技法をもたない調整手法であり吉備地方特有の土器ではないことが看取される。

甕形土器は口縁拡張部に櫛描平行沈線文をもつものが圧倒的に多い。口縁拡張部は直立あるいはやや内傾するものが多く，端部内面に稜線が入るものが多い。体部は肩がやや張るものが多く，底部は僅かに平底を残す。整形手法は，体部外面は刷毛調整の後，底部から上方に向って篦磨きしており，内面は指頭による成形の後，篦削りをしている。このタイプの土器は全体的に口径14cm前後，器高21cm前後のものと，口径15cm前後，器高25cm前後の比較的大型のものとが存在する。他に口縁部が「く」の字状に外反するものがあるが，**199**や**204**などのように体部外面に叩き目を残す畿内系の土器や**205**のように茶褐色を呈し，胎土中に雲母粒が目立つ土器（註32）も僅かながら出土している。

高杯形土器は杯部が深く，口縁部はやや外反して，斜め上方に立ち上がる。脚部は短脚のものと，やや長くなりかけているものがあるが，脚裾部の器高は後出するものに比べ高い。胎土は水漉し粘土及び僅かに砂粒が混るものの二様がある。

鉢形土器は小型のものと大型のものがある。小型のものは丸底のものと僅かに平底を残すものが混在するが，いずれも器壁は厚く，体部は深い。大型のものは二重口縁を呈している**258**と，その前段階のものと思われる**259**がある。他に同時期遺構として新田樋門井戸―2があるが，この中からは口縁端部が上方に僅かにつまみ出された小型高杯（器台）型土器が出土している。

左岸用水D―3

壺形土器は口縁部が二重口縁を呈するものが多くみられ，底部は**186**・**193**の平底を残すものと，**185**・**190**など丸底に近いが僅かに平底をもつものがある。他に僅かに平底を残す直口壺**196**がある。なお，**185**・**186**は形態・調整方法・胎土など微細な点において，西部瀬戸内や畿内の影響を受けていると思われるものである。

甕形土器はこの溝においても上記井戸と同様に，口縁部が「く」の字状を呈すものと櫛描平行沈線文をもつものがある。前者は体部外面を刷毛調整のものと叩き目痕を残すものとがある，しかしながら両方とも底部は僅かに平底を残すものである。なお，**204**は口縁端部が僅かに上方につまみ出されており，体部外面には細かな叩き目痕および擦痕が認められ，胎土は暗茶褐色を呈し，雲母粒が目立つことなどから河内地方の土器である。後者は上記井戸のものとほとんで相違はないが，体部がやや丸みをもつ大型のものが目立つ。高杯形土器は前出のものと比較して体部がやや浅く，口径に対し器高のやや低くなるものが多い。**230**のように杯底部がほぼ水平になるものがある。

高杯（器台）形土器**237**は斜め外方に立ち上がる口縁をもつもので，新田樋門井戸－2のものが口縁端部を僅かにつまみ出しているだけに対し，口縁部の発達が著しい。

坩形土器**239**～**241**は体部が丸底を呈すものの，口縁部は未発達である。

他に当溝と同時期遺構として左岸用水3－井戸－Ⅱがある。

新田樋門微高地西斜面土器溜り上層出土遺物

壺形土器は二重口縁を呈すものが多く，前記D－3に比べ口縁部はより開く傾向がある。直口壺**163**は丸底を呈す。内外面の篦磨きの方向は前記の196が縦方向であるのに対し，横方向に調整している。

甕形土器は体部の丸みをもつものが多く，底部においても丸底が目立つ。また新田サイフォン井戸－2にみられたような口縁端部のシャープさはなくなっている。

高杯形土器は長脚のものが多く，**203**は亀川上層期（註33）直前の様相を示しているものである。

坩形土器は**209**のように口縁部がやや発達し始めるものがある。

小型の鉢形土器は器高が低く，丸底を呈し，器壁がほぼ同一の厚みをもつ**218**がみられる。大型の鉢形土器はこの地点では二重口縁を呈すものの出土が見られなかったが，**216**のようにほぼ丸底を呈すものがあり，大きく二様のものが存在することが明らかになった。

以上，2遺構1包含層出土の一括遺物から百・古・Ⅰの諸特徴を説明してきたが，次に今一度器種別に特徴を記し，各遺構が百・古・Ⅰの中でしめる位置を整理しておきたい。

壺形土器においては口縁拡張部が未発達のものや，直線的に立ち上がるものが多く，また底部が平底を呈すものか，口縁拡張部の発達が著しく外反気味に立ち上がる二重口縁を呈し，底部は丸底になる傾向がある。甕形土器においては手法・形態の変化はほとんで認められないものの，櫛描平行沈線文をもつ土器においては，口縁端部はやや短かくシャープさがなくなる一方，体部の球形化が進行する傾向がある。高杯形土器においては短脚から短脚の脚柱部にやや高い脚裾部のつくもの，脚柱部が発達してくるものと変化するようである。小型鉢形土器においては逆「ハ」の字状に広がる体部と直立する口縁部で底部は平底を呈すものから，器壁の厚さがほぼ一定の浅い皿状を呈すものへの変化がたどれる。坩形土器は口縁部が未発達なものからやや発達し始めるものまで認められたが，後出する百・古・Ⅱ（亀川上層期）（註34）のように口縁部が体部を凌駕するものは出現していない。なおこの器種の祖型としては新田サイフォン井戸－2の**192**～**194**のような小型の甕形土器が変化してくるも

のと考えている（註35）。

このように百・古・Ⅰにおける変遷をたどってみたが，これら編年基準としたものは井戸・溝・斜面堆積など三様の異なる遺構からの出土遺物であり，また，遺物各々の耐久性をも考えあわせると重複する部分も多く存在すると思われる。しかしながら，新田サイフォン井戸―2出土遺物は全体に古い様相を，新田樋門微高地西斜面堆積出土遺物は新しい様相を，左岸用水D―3出土遺物は上記間の過渡的な様相を呈しているように思われる。今後の資料の増加を待って再検討を試みたい（註36）。

（江見）

註

註29　『岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会1970

註30　「舟山遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会1972

註31　『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会1971

註32　松下勝氏は「播磨・長越遺跡」兵庫県教育委員会1978において，この種の土器は「これまで播磨系の甕といわれてきた。……しかし……讃岐系であろうと考えたい。」とされた。筆者は現在のところこの種の土器の系譜をたどれる地域を確認しておらず，大きく中部瀬戸内沿岸における土器と考えている。

註33　「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第2集』岡山県教育委員会1974
「上東・川入」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会1977

註34　現在亀川上層期は，細分出来るほど資料が出土していないが，筆者は『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会1977に記載した川入遺跡法万寺調査区P―2出土遺物などが亀川上層期の中でも古相を示しているものと考えている。

註35　高橋護「弥生土器―山陽3―」『考古学ジャーナル1980』において氏は小形の鉢形を呈す器形から導びかれる，とされている。

註36　本稿を作成するにあたり，伊藤晃・柳瀬昭彦両氏からは多大なる教示及び援助を受けた。ここに記して感謝の意を表します。

1－2　左岸用水調査区全景（北西から）

1－1　左岸用水調査区全景（南東から）

図版2

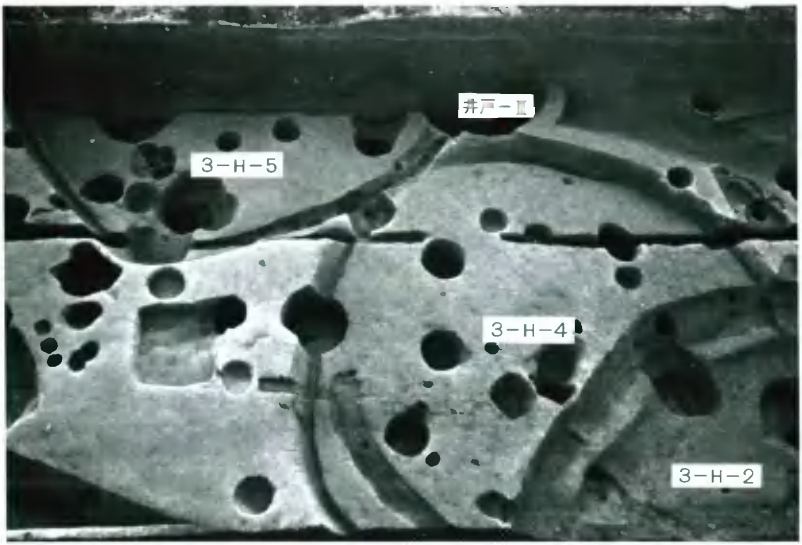
2－1　左岸用水調査区　D－7・9，2－H－6　検出状況（南西から）

2－2　左岸用水調査区　D－4　遺物出土状況及び検出状況（北東から）

３－１　左岸用水調査区　Ｄ－８　検出状況（北東から）

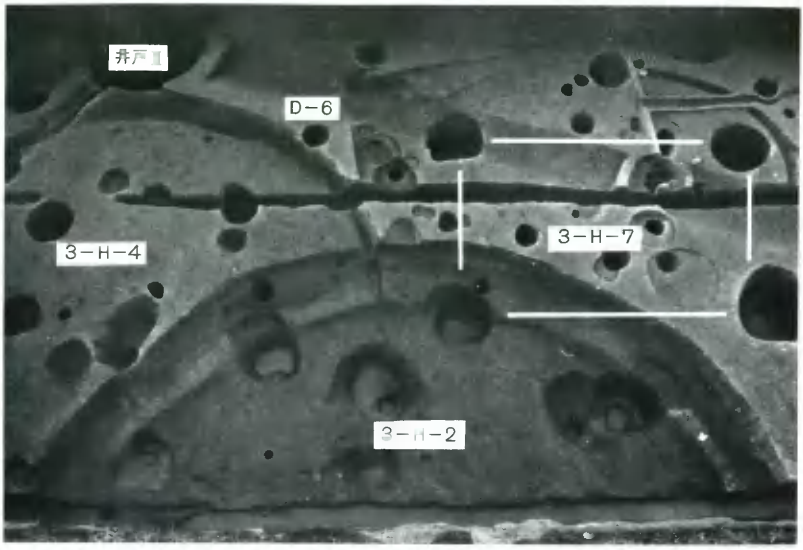
３－２　左岸用水調査区　Ｄ－３　遺物出土状況（北東から）

図版4



4－1　左岸用水調査区　3－H－4・5，井戸－Ⅱ　検出状況（北東から）

4－2　左岸用水調査区　5－H－2　検出状況（北東から）



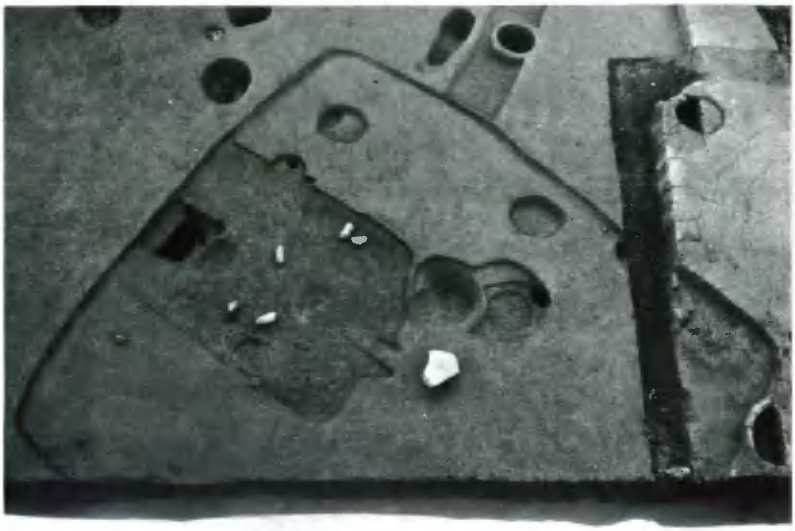
５－１　左岸用水調査区　３－Ｈ－２　検出状況（北東から）

５－２　左岸用水調査区　３－Ｈ－２　Ｐ－１　遺物出土状況（南から）

図版6

6－1　左岸用水調査区　4－H－1　検出状況（北東から）

6－2　左岸用水調査区　2－H－1　検出状況（北東から）



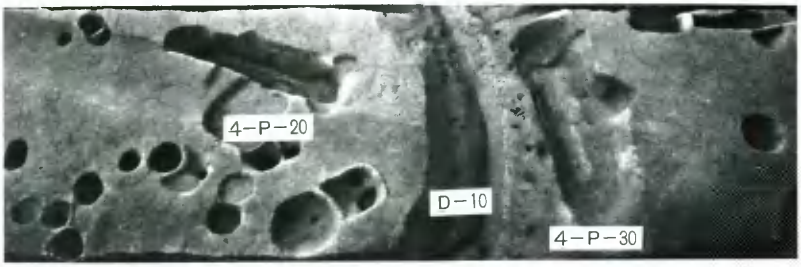
7－1　左岸用水調査区　1－H－1　検出状況（北東から）

7－2　左岸用水調査区　3－H－1　遺物出土状況（北西から）

図版8

8－1　左岸用水調査区　3－H－3　竈検出状況（東から）

8－2　左岸用水調査区　竈遺構検出状況（北から）



9−1　左岸用水調査区　4−P−20・30　検出状況（北東から）

9−2　左岸用水調査区　4−P−20　検出状況（北東から）

9−3　左岸用水調査区　5−P−1　検出状況（南西から）

図版10

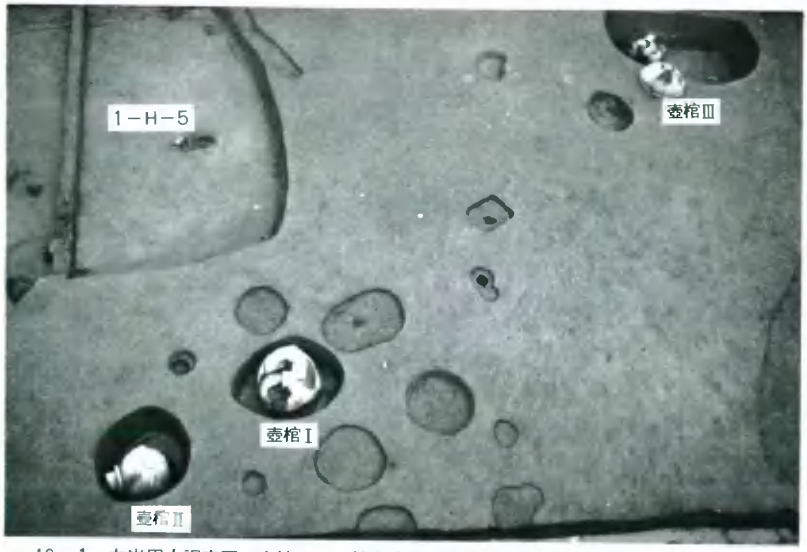
10－1　左岸用水調査区　3－P－20　検出状況（南西から）

10－2　左岸用水調査区　5－P－19　検出状況（南東から）

11－1　左岸用水調査区　6－井戸－Ⅰ　検出状況（南東から）

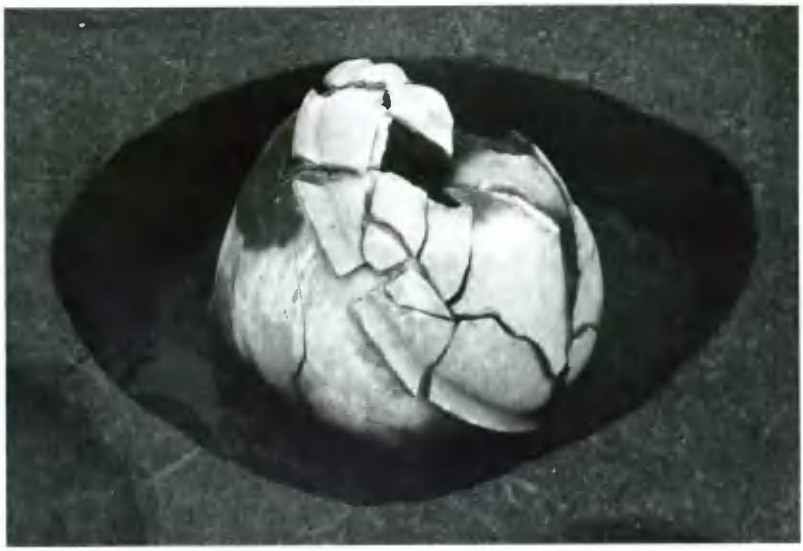
11－2　左岸用水調査区　2－井戸－Ⅲ　検出状況（南西から）

図版12



12－1　左岸用水調査区　壺棺Ⅰ～Ⅲ検出状況（北東から）

12－2　左岸用水調査区　壺棺Ⅰ(右)・Ⅱ(左)検出状況（北東から）

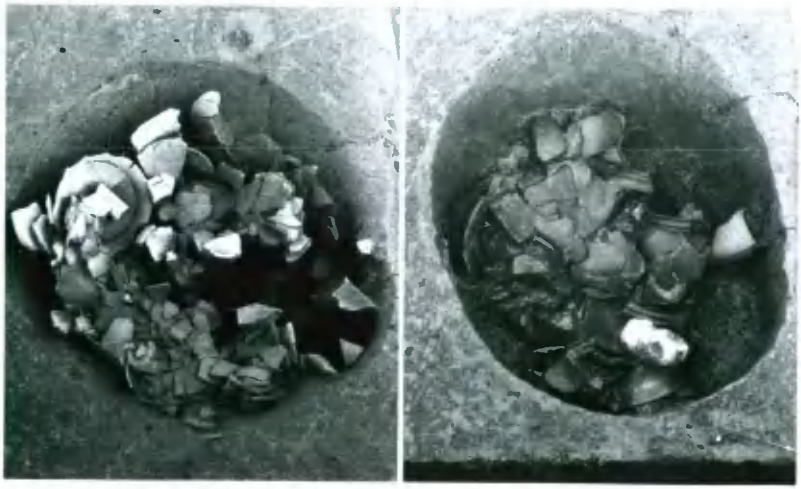


13－1　左岸用水調査区　壺棺Ⅰ検出状況（南から）

13－2　左岸用水調査区　壺棺Ⅱ検出状況（南から）

図版14

14－1　左岸用水調査区　4－P－1　検出状況（北西から）



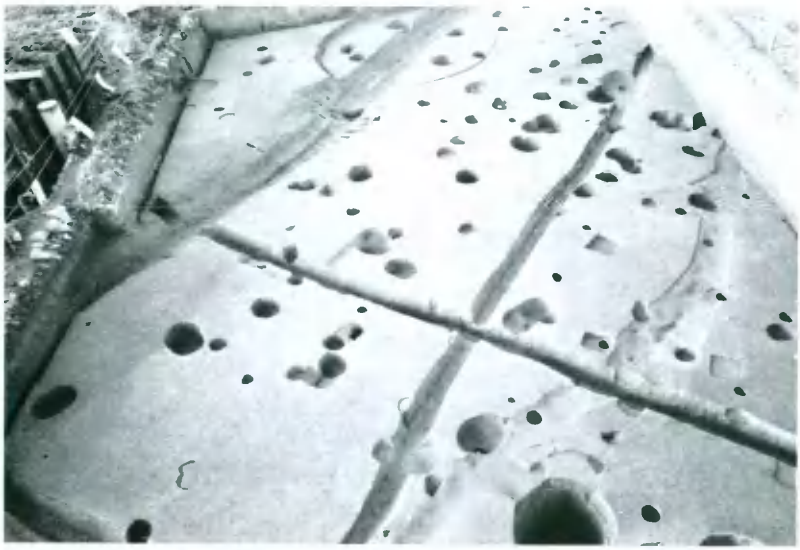
14－2　左岸用水調査区　2－P－13　検出状況左（上層），右（下層）（南から）

15－1　左岸用水調査区　2－P－1　検出状況（南西から）

15－2　左岸用水調査区　3－P－1　検出状況（北西から）

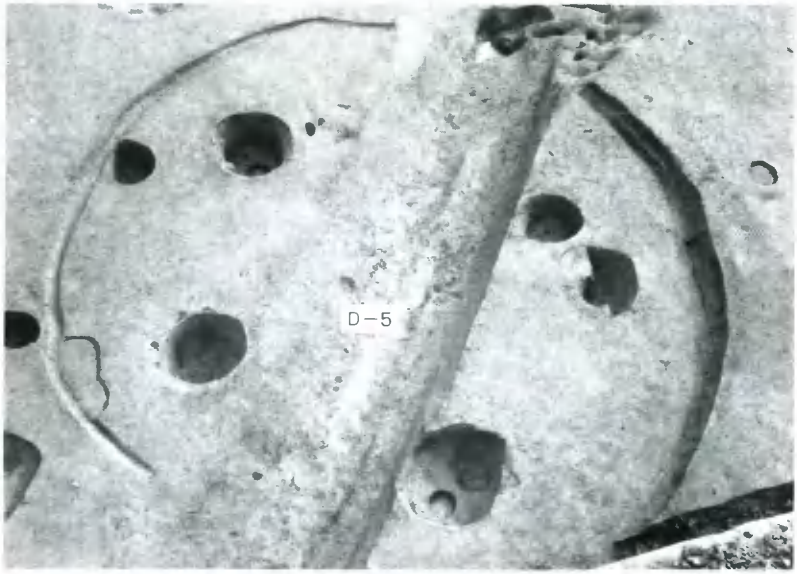
図版16

16－1　新田サイフォン調査区　2・3区遺構検出状況（北東から）



16－2　新田サイフォン調査区　4区遺構検出状況（南東から）

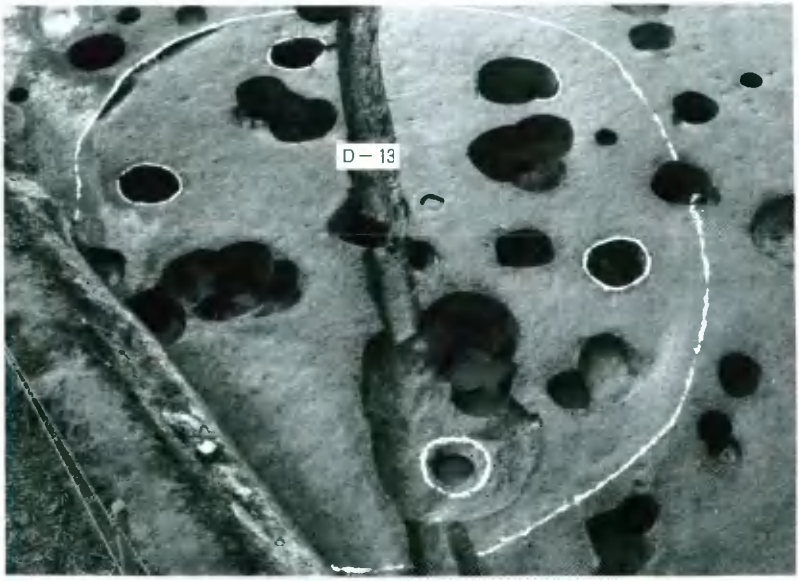
（北東から）



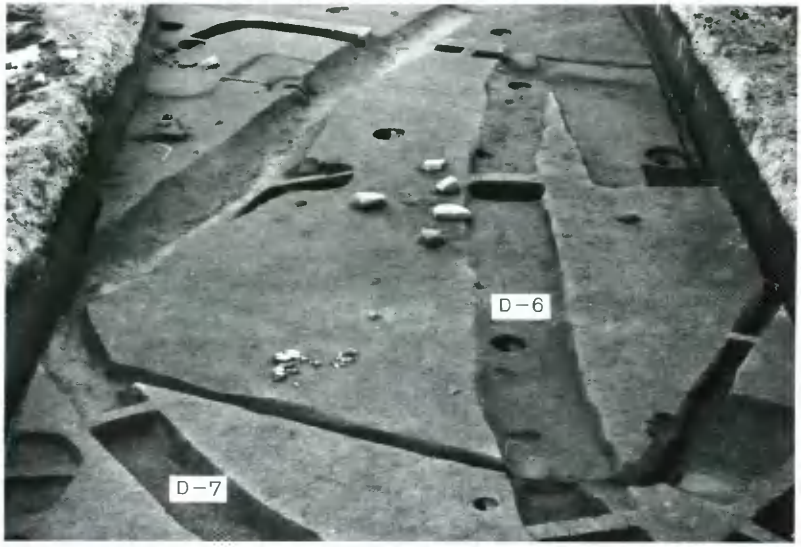
新田サイフォン調査区　Ｈ－７　検出状況（北東から）

図版18

（北東から）



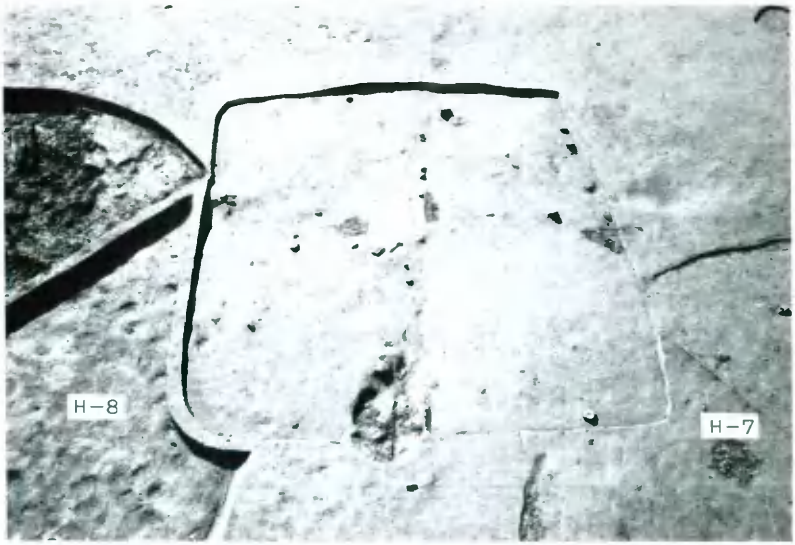
新田サイフォン調査区　H－8　検出状況（北から）



19－1　新田サイフォン調査区　H－1　検出状況（北東から）

19－2　新田サイフォン調査区　H－5　検出状況（東から）

図版20



20－1　新田サイフォン調査区　H－6　検出状況（北から）

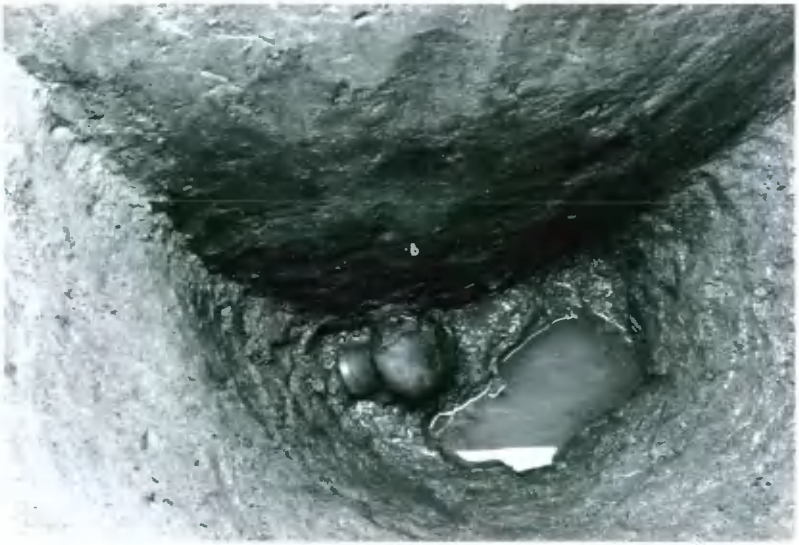
20－2　新田サイフォン調査区　土壙－1　検出状況（北東から）

21－1　新田サイフォン調査区　井戸－1　遺物出土状況（南から）

21－2　新田サイフォン調査区　井戸－1　検出状況（南から）

図版22

22－1　新田サイフォン調査区　井戸－2　検出状況（北から）

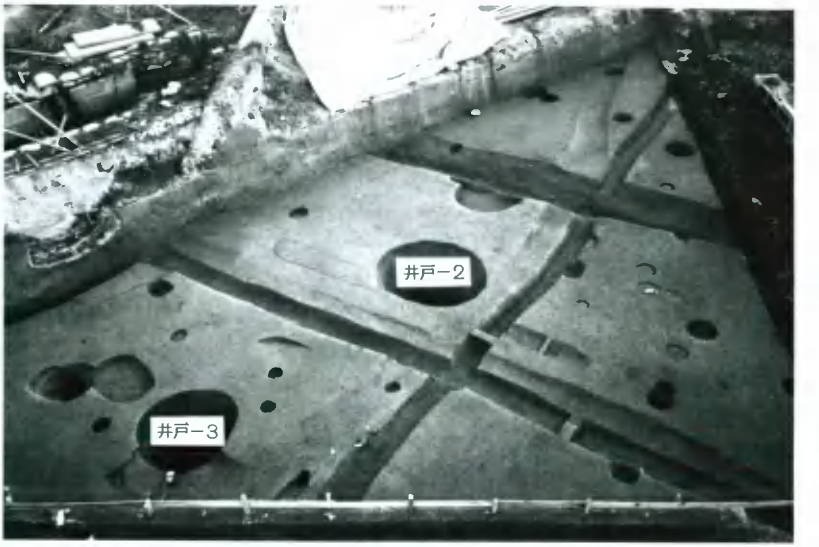


22－2　新田サイフォン調査区　井戸－2　遺物出土状況（北から）

23－1　新田樋門調査区　発掘前状況（北東から）

23－2　新田樋門調査区　遺構検出状況（北東から）

図版24



24－1　新田樋門調査区　堤防下遺構検出状況（北西から）

24－2　新田樋門調査区　D－5，5′検出状況（南から）

25－1　新田樋門調査区　H－2・3　遺物出土状況（西から）

25－2　新田樋門調査区　H－2・3　検出状況（西から）

図版26

26－1　新田樋門調査区　H－4　検出状況（東から）

26－2　新田樋門調査区　H－5・6　検出状況（東から）

27－1　新田樋門調査区　H－1　遺物出土状況（西から）

27－2　新田樋門調査区　H－1　検出状況（西から）

図版28

28－1　新田樋門調査区　H－1　大甕出土状況（東から）

28－2　新田樋門調査区　H－1　竈検出状況（東から）

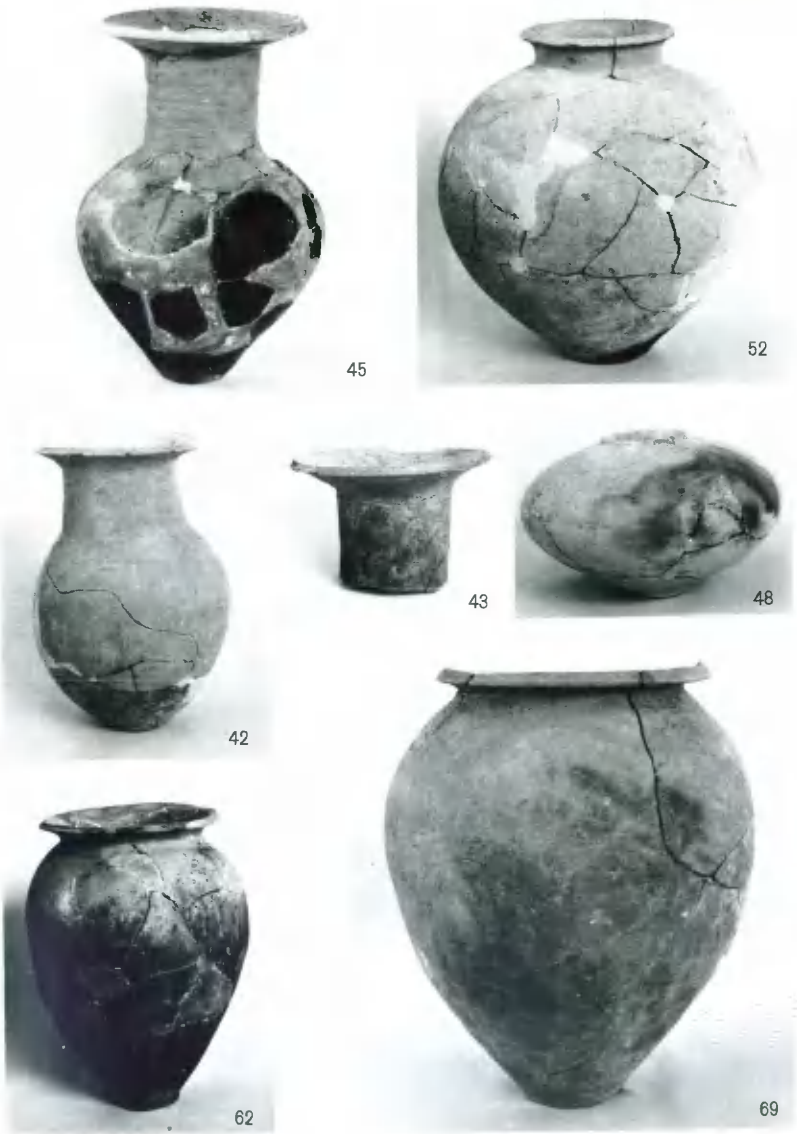
29－1　新田樋門調査区　井戸－2　検出状況（東から）

29－2　新田樋門調査区　井戸－3　木器出土状況（東から）

図版30

新田樋門調査区　微高地西斜面土器溜り遺物出土状況（南西から）

新田樋門調査区　微高地西斜面土器溜り遺物出土状況（北西から）



左岸用水調査区　D－4　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版32

61

64

67

68

70

107

97

99

左岸用水調査区　D－4　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

左岸用水調査区　D－4・D－10・D－8　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版34

左岸用水調査区　D－3　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

192

189

195

190

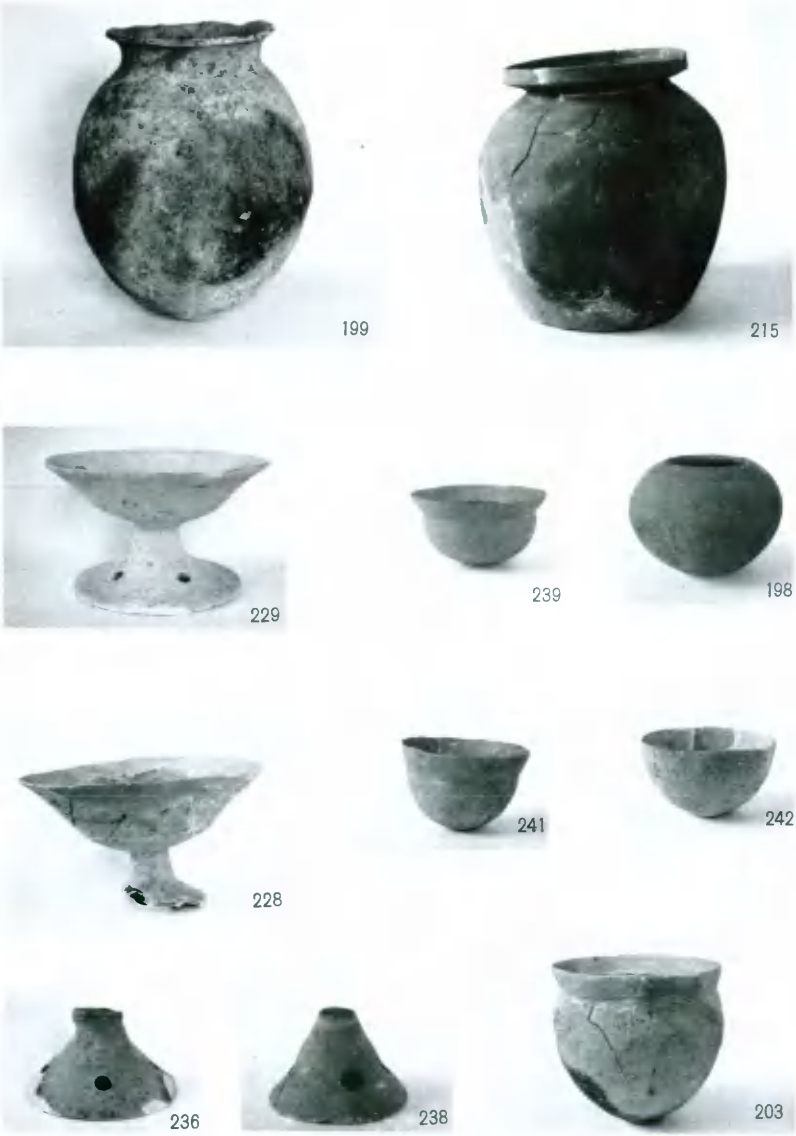
202

204

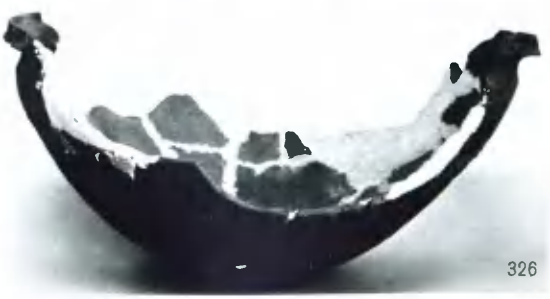
214

左岸用水調査区　D－3　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版36



左岸用水調査区　D－3　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）



左岸用水調査区　D－3　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版38

左岸用水調査区　住居址出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

左岸用水調査区　住居址・井戸・土壙出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版40

4－P－20
537

4－P－30
496

4－P－30
511

4－P－30
497

4－P－30
507

5－P－1
495

5－P－1
488

5－P－30
559

左岸用水調査区　土壙出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

623

631

594

599

643

642

616

644

640

608

639

653～674

左岸用水調査区　6－井戸－Ⅰ　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版42

588

589

左岸用水調査区　壺棺Ⅰ　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

左岸用水調査区　壷棺Ⅱ　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

592

593

左岸用水調査区　壺棺Ⅲ　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

1－P－15
583

5－P－5
788

5－P－19
681

4－P－25
675

5－P－19
679

2－P－13
721

2－P－13
705

2－P－13
723

2－P－13
718

2－P－13
719

左岸用水調査区　土壙出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版46

1．左岸用水調査区　出土砥石

2．左岸用水調査区　出土鉄器・銀環・古銭（約$\frac{1}{2}$）及び管玉・小玉（約2倍）

左岸用水調査区　出土石器（約$\frac{1}{2}$）

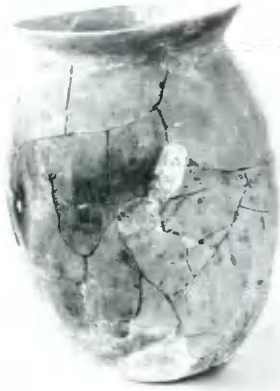
図版48

左岸用水調査区　出土遺物，分銅形土製品（上段右），緑釉土器（中段），土錘（下段）（約$\frac{1}{2}$）

左岸用水調査区　包含層出土遺物縄文式土器(上段)，渡来系土器(下段)(約$\frac{1}{2}$)

図版50

新田サイフォン調査区　溝・住居址出土遺物（約$\frac{1}{5}$）


130

133

135

140

新田サイフォン調査区　H－5　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版52

143

169

144

172

158

156

162

183

新田サイフォン調査区　土壙－1及び井戸－1出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

184

190

185

189

187

186

191

新田サイフォン調査区　井戸－2出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版54

212

223

203

224

222

206

238

235

237

250

260

192

新田サイフォン調査区　井戸－２出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

268

265

422

288

313

323

322

326

325

324

387

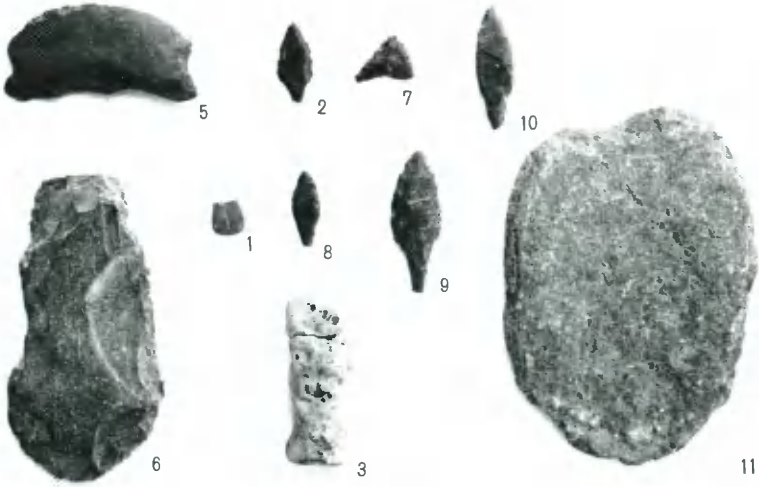
413

新田サイフォン調査区　包含層出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版56

1．新田サイフォン調査区　包含層出土縄文式土器（約$\frac{1}{2}$）

2．新田サイフォン調査区　包含層出土土錘（約$\frac{1}{2}$）



57－1　新田サイフォン調査区　出土石器

57－2　新田サイフォン調査区　出土紡錘車及び刀子（約$\frac{1}{2}$）

57－3　新田サイフォン調査区　出土勾玉（約2倍）

図版58

新田樋門調査区　D－1・H－1　出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

50

54

80

76

102

103

84

91

90

111

119

117

新田樋門調査区　井戸－1・2及び土器溜り出土遺物（約$\frac{1}{5}$）

図版60

新田樋門調査区　井戸－3　出土遺物（約$\frac{1}{4}$）

160

203

163

199

162

新田樋門調査区　微高地西斜面土器溜り出土遺物

図版62

171

190

179

181

186

182

新田樋門調査区　微高地西斜面土器溜り出土遺物

180

205

209

214

208

63

216

新田樋門調査区　微高地西斜面土器溜り出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　39

旭川放水路(百間川)改修
工事に伴う発掘調査　I

昭和55年11月30日 印 刷
昭和55年11月30日 発 行

編集　岡 山 県 教 育 委 員 会
印刷　岡 山 県 出 納 局 用 度 課